
ときの流れの中で・・・

alice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ときの流れの中で・・・

【Nコード】

N6608V

【作者名】

alice

【あらすじ】

小谷 哲、彼は本来女の子として生を受けたはずが、母親の妊娠中のホルモンバランスの影響で身体のある部分が肥大して出産されたため、男の子として名前をつけられて育てられた。そして中2のとき突然訪れた女性の生理。自分がじつは女の子であったとわかってからの哲の人生は・・・。

プロローグ

わたしの名前は笹村凜ささむらうりん現在28歳。今はサラリーマンの旦那さんと2歳になる娘との3人暮らし。最近は段々とヤンチャになってきた娘の育児に日々明け暮れています。

そしてわたしの旧姓は小谷凜といます。ただしわたしにはもうひとつの名前があります。いえ、「ある」のではなく「あった」と書いたほうがいいでしょう。その「もうひとつの名前」は私が今まで生きてきた時の流れの中で置いてきたものでした。

じつはわたしは最初に男性としてこの世に生を受けたということになっていたのですが今は女性です。それは最近よく話題となっている性転換というものではなく、本来女性であったはずのわたしの身体は出生当時一部の異常から男性として認識されたというものでした。そのため、わたしには男の子としての名前がつけられました。それがもうひとつの名前、小谷哲こたにてつという名前でした。そしてわたしがその後成長していく過程でじつはわたしが男性ではなく女性であったということがわかったとき、そしてその後。このお話はそういうわたしの身体と心の変化を綴ったものです。

プロローグ（後書き）

わたしにとってはじめて書く小説です。きっと滅茶苦茶な内容になってしまふと思いますけど、がんばってみたいと思います。

第一話 身体の変化と心の戸惑い

ホルモンには男性ホルモンと女性ホルモンがあつて、男女の性別を問わず人の身体にはそのどちらもが分泌されているそうです。

そしてそのバランスで男性的特長または女性的特徴をもつて生まれてくる。これが外見的男女の区別になるんですが、極稀に妊娠中のホルモンのバランスが異常であつたりすることでこの通りにならないことがあるそうです。その場合は女兒であるのに外陰部が男性化し、男児のそれとよく似た形で出産されることがあるのです。

わたしがそのケースで、わたしは生まれたとき男児として出産されました。わたしの両親は初めて生まれたわが子が男の子であつたことをとても喜び、そしてわたしに「哲^{てつ}」という名前をつけました。

小学生時代までのわたしは比較的活発な方で、そうした隠された異常にまつたく気付かず他の男の子たちと何も変わらず、野球、サッカーに明け暮れ、そしてそうした遊び友達も男の子がほとんどでした。

勉強はどちらかといえば苦手。男友達との付き合いのほうが好きから女の子というものをほとんど意識することはなかったけど、それでも小学校高学年になると周りでそういう意識が出てくると人並みに「誰がかわいいよな」とか「好きなタイプの子は…。」なんてことも言ったり。

ただ小学生も5年生を過ぎる頃から男の子は少しずつだけ顔つきや骨格が引き締まってくる感じがするんですけど、わたしはその年代になつても幼児体型っぽいのか、そういう傾向がまったくできてきませんでした。

それでもまだこの年頃は人によって差があったからクラスの中でもわたしと似た感じの男の子は他にもいたし、だからそう気にすることもなかったんです。

「哲くんってかわいいよね」

わたしはクラスの女子によくそういうことを言われていました。でも、その当時のわたしはそういうことを言われると「男として」けっこうズキンときたものです。

中学は他の友達と同じように地元の公立中学校に進学しました。

中学生くらいになると、男女の身体的違いはかなりはっきりしてきます。男子は身長が急に伸び始め精悍な顔つきに、女子は柔らかな体つきになり顔の輪郭もつるんとした丸みを帯びてくるのです。

しかしその頃になってもわたしの肉体的変化は男子の傾向を持たず、それどころか中学2年生の半ば頃になるとあることがわたしの体に起こったのです。

.....

それは中2の夏休みに入って少しした頃のことでした。

夜、自分のベッドの中で寝ていると

「イ、イタイ……。お腹が……。イタイヨオ……。」

最初チクチクするような感じから始まって、それはだんだんズキズキするような痛みに変わってきました。泣き叫ぶような痛みではないけど、それは おなかの上のほうから何か下ってくるような不快な痛みでした。

わたしは自分のおなかを手で押えながら隣の部屋で寝ていた両親の元に行きました。

そして布団の中で寝息を立てて眠る母親の肩を揺すり

「ねえ、お母さん…ねえ…。」

と小声で話しかけると

「ん…なに？ 哲…どうしたの？」

母親は薄目を開けてわたしのほうに顔を向けました。

「あのさ…イタイの…」

「いたいって？どこが？」

「お腹がなんかいたくって？」

「えええ…。お腹が痛いつて、どう痛いの？」

「なんか…すごく痛いとかじゃないんだけど、おなかの奥のほうでズキズキ締まるみたい…さっきから痛くって」

「ああ。変なものを食べさせたわけじゃないし…。まさか盲腸とか？」

「わかんないけど…イタイヨォ…」

母親はすぐ横で寝ていた父親の身体を揺すって起こした。

「お父さん、哲がおなかが痛いって」

「う…ん…どうした？痛いってどういふふうに痛いんだ？」

わたしは母親に話したことを同じように父親に話した。

「うーん…。どうしたもんかなあ…。どっちにしてもこんな夜中だし。どうしても収まらないなら救急車を呼ぶことも考えなくちやなあ。」

父親はそう言いながら部屋の電気をつけた。

暗闇にいきなりパツと明るい光が広がり、わたしは一瞬自分の目を片手で覆った。

そのとき母親が不思議な声を出す。

「あら…？ どうしたの？パジャマのズボンの股のどこ？」

その声に釣られ自分のパジャマの股間を見る。

すると不思議なことにわたしの股間にはじわっと赤い血が染み出ていた。

「おいおい、まさかおなかから出血って。オマエ、怪我でもしてるのか？それともなんか悪い病息じゃないのか」

父親もさすがに驚いて大声に変わった。

「母さん、これはまずいよ。救急車を呼ぼう。なんかあった後じゃ遅いぞ」

「そうね。じゃあお父さん電話して頂戴。あたしは悟わんを起してくるから」

母親はそう言っつて薄いカーディガンを羽織り、小学5年生になる弟の悟の部屋に向かった。

おなかの痛みはときどきすつと楽になったり、しかし少しするとまたズキズキ痛み出したり寒暖を置いて来るようだった。

しばらくすると一戸建ての家の前に赤いサイレンをつけた救急車がやってきた。車から出てきた救急隊員はわたしの家の中にあがり、廊下まで出てきたわたしの様子を見ていくつかの質問をする。

「この痛みはいつから？」

「おなかのどのあたりが痛いのかな？」

「痛みはどんな感じの痛み？」

そして隊員の人は母親にわたしの年齢を聞き、そのまま近くの救急

病院に搬送する旨を告げた。

「わたしが付き添いで行くから、お父さんは残って悟のことをお願い。わかったら連絡しますから」

「ああ、わかった」

そしてわたしは自分のおなかを手で押えながら自力で歩き救急車に乗り込んだんです。

第二話 自分が自分を疑う

わたしを乗せた救急車は隊員の人が携帯電話で何回かの連絡を取りながら家から30分ほど走った場所にある大正医大附属病院へと向かった。

救急車が病院の救急患者用入口に到着するとボタンと後部のハッチが上を開き、担任の人に支えられてわたしと母親が車を降りた。

そこに看護婦さんがボタンタッチ。

わたしは今度は看護婦さんに支えられて奥の診察室に入る。看護婦さんはわたしのおなかを軽く押しながら確認する。

「ここかな？痛いところ」

「うん。もうちょっと下のほう」

「じゃあ、ここ？ でも…ここじゃあ…うん…」

「うん。でもそこが痛いんです」

「そう…。ここだと盲腸じゃないわねえ。」

そして診察室のドアがキイッと開き医者が現れる。

その看護婦さんは簡単に経過を説明。

「先生、こういう状況で、今本人に確認したらここが痛いっていうらしいんです」

先生は30代くらいの若い、優しい感じの目をした人だった。少し長めの髪を横に流して、わたしのパジャマを上にあげておなかを摩る。

先生の温かい手の温もりがおなかの痛みを少しだけ和らげてくれている気がした。

「じゃあ、下も見るから、脱ぐよ。」

先生はそう言って今度はわたしのパジャマのズボンを下にずらす。

「はい、ちよつと腰を浮かせて。どこから血が出ているのかな」

わたしは腰のあたりを軽く立てる感じで浮かせた。

すると先生はわたしの局部あたりの位置に顔を寄せる。

いくら男同士とはいえこれはさすがに恥ずかしい。

「あ…れ？」

先生はとつぜんとぼけたような声をあげた。

「もう少し腰を上げられる？」

「はい」

すると先生はしばらく考えこんだように下を向いた。

「あの…すぐく悪いんですか？」

わたしのその声に先生はふつと顔をあげて言った。

「いや、大丈夫！何も心配は要らないよ。でも…。」

「でも？」

「うん。もう少し精密に検査させてほしいんだ。今おなかの調子はどう？まだ痛い？」

「まだ痛いけど、でもさつきより少し楽になった気がします。」

「そつだらうな。ふむ…。」

先生は後ろに控えていた看護婦さんの方を振り返り、鎮痛剤を出すこと、それとCTスキャンの準備をするよう指示をした。

「あ、それとこんな時間で申し訳ないけど、加藤先生も呼んでもらえますか」

「わかりました。」

指示を受けた看護婦さんは早速部屋を出て準備に向かった。

それからわたしは着ていたパジャマを脱ぎ看護婦さんの用意してくれた白い患者衣に着替える。

そして出してもらった鎮痛剤を2錠吞んだが、そのあと看護婦さんから不思議なものを手渡された。

それは生理用のナプキンとショーツだった。

「あの、傷口があるんだったらガーゼとか当てたほうがいいんじゃないや

ないんですか？」

わたしは不思議そうに聞いた。

それに渡されたシューズを手で開いてびっくりした。

それは母親がいつも穿く女性用のシューズそのものだった。

「ごめんね。今患者さん専用のそういうものが用意できなくて。でもナプキンを固定させるには男の子用のシューズじゃどうしてもズレちゃうの。だから今だけ、我慢してそれを穿いて」

なんか変な気分だ。

いくら応急でもこんなものを男の自分が穿くなんて…。

まるでオカマさんにもなったような。

だれか知ってる人には絶対に見られたくない。

仕方なく用意されたシューズを穿くと、女性用のそれは男性用のものよりもなにか身体にぴたっとフィットするようで、生地もずっと柔らかい。

それから約2時間かけていくつかの精密検査をする。

検査が終わった頃にはもう時間は夜中の3時を過ぎていた。

そしてその後わたしの横たわっている診察室の中に母親が呼ばれた。わたしも身体を起す。

最初の先生のほかに加藤先生という40代くらいの少し年配のもう

一人の先生も加わって、最初にわたしを診てくれた坂井先生が何枚かのレントゲン写真を机の前の白いライトのつくボードに貼り付けた。

「えっと、お母さん。まず哲君のおなかの痛みと出血についてですが、悪い病気ということではないのでご安心ください」

「はい、ああ、よかったあ。」

母親はそれまでこわばらせていた顔を楽にしたようだった。

「それですね…えっと、まずこれをご覧ください」

母親は少し身体を乗り出す感じでその写真を見る。

「これはCTを使って撮影した哲君の胸から下の写真です。それでこの部分です」

坂井先生が指で該当部分を指し示し、母親は目を凝らすようにそのを見た。

「はい。ここは？」

「ここなんです…え…とですね、落ち着いて聞いていただきたいのですが、じつは…子宮…なんです。」

一瞬母親の体が固まり、そして

「はあ??」ととぼけたような声をあげた。

そりゃそうだ。息子は当然男の子。

その男の子の体に子宮？

坂井先生はすこし言葉を選ぶように考え、そしてさらに続ける。

「つまり…です。哲君は生物学的に本来女性であるということがわかったのです。」

はああ???

わたしも母親もその場で完全に固まってしまった。

「さきほどの出血は、つまり哲君に生理がきたということなんです」

「う…そ…。」

呆然とした顔で母親が発した言葉はこれだけだった。

そして坂井先生と加藤先生は順番に過去の例を説明しながら、妊娠時のホルモンバランスの状況について説明をはじめた。

「つまり外陰部は男性のものに極めて似ていますが、そのすぐ下に小さな膣口が開いており、そこから出血があったわけです。彼…というか彼女の体は当然女性であって、外陰部については手術によって本来の女性のものにすることが可能です。生理がきましたから体つきや乳房など今後身体は急激に女性的変化を遂げていくでしょう。子宮もありますから将来的に出産は当然可能となります」

(へ…ボク…女…だったの?)

(ハハハハ…。)

もう笑うしかない。

でもとても今は笑えない気分だ。

第三話 人間としての自然

坂井先生は話を続けた。

「お母さん、それと哲君も。この性別については、もちろん今のまま男でい続けることも選択肢としてはあります。」

ボク（以降しばらくは一人称をボクで表現します）は顔を上げて尋ねた。

「男のままですられるってことですか？」

「うん、そうだ。ただし正確に言えばちょっと違う。男のままで見られるのは外見だけということだ。キミは生物学的に本来女性だ。これは何をどうやっても変えることはできない。つまりこの選択はキミの体を外見だけ強制的に男性の特徴の状態にしておくということ。たとえばキミも聞いたことがあるかもしれないけど、性同一性障害という病気を知ってるかな？」

「聞いたことはあります。男だけど女になりたい人とか、その逆とかですよね？」

「まあ、ぶちやけて言ってしまうとそういう感じだけど、その場合性転換手術というものを行うことがある。肉体を希望する性の特徴に近づけるといふことだ。」

「最近TVとかでもそういうタレントがけっこういますよね。女とぜんぜん見分けつかないっていうか、もしかするとふつ々の女の人より美人だったりするし。」

「あるね。しかしここで大切なのは、それはあくまで希望する異性の特徴に近づけるということにすぎないのであって、その人が本当に異性になれるわけではないってことだ。」

「そりゃ、そうですね。」

「うん。それは多分未来の医学をもってしても絶対に無理だろう。しかし外見だけなら近づけることはできる。たとえばキミの場合本来女であるキミに男性ホルモンを投与したり、子宮など女性としての機能を除去することで今後女性の特徴が進むのをストップするみたいだね」

すると傍で聞いていた加藤先生が坂井先生の説明にこう付け加えた。

「つまりだ、キミを男性の肉体に近づけることはできるが、本当に男性になるわけではない。そしてこの点が大切、それをした場合キミは女性としての機能を失うということだ。だからこういうことはまだキミの年齢ではピンと来ないかもしれないけど、それをしても当然本当の男性ではないので射精することはできないから子供を作ることができない。そして女性の機能を失うことになるからキミ自身が妊娠することもできなくなる。端的に言うと完全な形での男でも女でもなく、どっちつかずになってしまふということだ」

(子供を産ませることも産むこともできなくなる…。)

(男でも女でもなくなるのか?)

「これはあくまで僕個人の意見というか考えだから、それを押し付けることはしない。でも僕はこう思うんだ。」

性同一性障害というのは果たして本当に障害なのか？僕はどれほどちらかといえは性癖の延長線上にあるものである気がする。そのひとつの例として女性になりたい男性のほうが男性になりたい女性よりもはるかに数が多いことがある。

また人間は科学によって発展してきたけど、絶対に超えられない、超えてはいけないことというのがあるんじゃないかってね。神様というものが本当にいるのかどうかはわからないけど、与えられた性を全うするのは人間としての義務じゃないだろうか。そしてその中で男として女としての喜びを見つけられるよう努力をする。それは自然の摂理であってこれを無理に超えようとすれば支払う代償も大きなものになる。」

横から坂井先生も意見を言う。

「僕も同じ意見だな。哲くん、キミは本来女性として生を受けた。今まで男として生活してきたことを今後真逆にするということはかなりの努力も苦労も必要だと思う。でも今まで男であったことを忘れる必要はない。それも女性としての人生の中で生かすことができるんじゃないかな。」

先生たちの言うことはわかる。でも僕はこれから先の不安を考えると、そういう先生たちの意見を今すぐそのまま素直に受け入れることはすぐにはできそうにない。

坂井先生は不安そうな目で見るそう、僕の気持を察したのか

「もちろん今この場で決めることじゃない。お父さんやお母さんとよく相談して。でも。決めるのはキミ自身だ。なぜならそれはこれから先何かの事故に遭ったり大きな病気にならなければキミのほうはお父さんやお母さんよりも長く生きる。キミはいつかひとり生きていかなければならないときが来る。だから最後はキミが自分で自分の責任で決めるんだ。」

すると、それまで近くでボーっとして聞いていたうちの母親がふつと顔をあげて言った。

「そう、哲が自分で決めなくちゃ。もちろんお母さんもお父さんも良く考えて意見するわ。でもあなたが覚悟を決めないとどっちを選んでも良い結果にならないの。それは一番怖いことでしょ?」

僕はまだよく理解できていない。

「…うん。」

今はそう曖昧に返事することしかできない。

坂井先生はカルテを書きながら母親に言った。

「それですね、お母さん、とりあえず入院の準備をおねがいします。ちよつど学校は夏休み期間だから良かった。必要なものは看護師から説明させます。どちらを選ぶにしても明日から2〜3日さらに精密な検査をしていきます。ただし哲君はすでに生理が始まりましたから、ホルモンバランスの状態を考えれば、選択の決定は長く

ても1週間以内ということになります。」

「わかりました。とりあえず家に戻って父親にこのことを報告して
……。 哲、お母さんは明日のこともあるからとりあえず帰るわ。で
もお父さんとお母さんで何かを決めるようなことはしないから。明
日午前中に改めて病院に来るからね」

「うん…わかった。」

- - -
- - -
- - -

ボクはそのまま大部屋にベッドを用意されて入院することになった。
別にどこが悪いわけでもないボクは車椅子にもベッドにも乗せられ
ることもそのまま自分で歩いて部屋に向かった。

時間はもう夜明け近くの朝4時を回っていたので、案内してくれた
看護婦さんは

「あなたの入る部屋は4人部屋なんだけど、他に2人患者さんが入
ってるの。どっちも男性で、ひとりは40代のおじさん、もうひと
りは大学生さんだから。これからのあなたのことを考えると男部屋
じゃないほうがいいのかもしれないけど、今はとりあえず男の子と
して扱うしかないから、我慢してね。それで今日はもう遅いから、

朝になったら私から改めて紹介するわね。」

「あ、はい。もちろんだいじょうぶです。これから考えるから…。」

「そうね。私も相談に乗れることがあったら何でも言っただけ。もし、もしもよ？あなたが女性を選ぶとしたら、同じ女性として色々教えてあげられることがあると思うから。」

「はい。ありがとう。」

ボクはその看護婦さんと忍び足で部屋の中に入り、ボクは看護婦さんが整えてくれたベッドに潜り込んだ。

ボクはもう何がなんだかわからず、ベッドの中で今まで会ったことを思い出そうとしたが、こんな短い時間にあまりに色々なことがありすぎて、頭の中がぐるぐるとかき回されるようだった…。

そして10分もしないうちにボクはすうっと溶けるような眠りに落ちていった。

第四話 ボクが決めたこと

朝8時

この病院では8時半から検診があつてそれが終わると朝ごはんが出される。

この日は検診前に昨夜面倒を見てくれた看護婦さんが早めに部屋に来てボクを部屋の2人に紹介してくれた。紹介の前にメモを渡されて、それによると、ボクは血液の病気で入院したということにしたからということだった。

部屋の2人は、ひとりには42歳の会社に勤めるおじさんで松原さんという名前。

少し白髪の混じった頭だけどすつきりした感じで男同士の目で見ても結構カッコいい感じの人だった。話し方もとても優しい感じで自分にもボクと同じくらいの中学生の息子がいるらしい。松原さんは胃の病気で入院しているそうだ。

もうひとりには18歳で青葉学院大学の1年生の芦田さん。

この人も松原さんと同じように優しい感じの人で、少し大人しそうだけど、とても感じがよい人だ。芦田さんは盲腸での入院らしい。

検診でボクにとっては初めて会う戸川祥子先生という女の先生がボクの担当についてくれることになった。他の2人とも別の男の先生

が担当だったので、2人は少し不思議そうな感じをしてたが、

「おいおい、祥子先生が担当でついてくれるなんて！羨ましすぎるぞおー！（笑）」

とボクをからかって笑った。

検診後順番に食事を持ってきてくれるおばさんが部屋に入ってきて人によってそれぞれ違うメニューの食事を配ってくれる。

ボクは今まで入院というものをしたことがなかったから病院食っていうものを食べたことはないけど、母方の祖母が入院したときに何回かお見舞いに行つて、祖母が病院食のまずさにまいったと言っていたのを何回か聞いたことがあった。

案の定松原さんと芦田さんの朝ごはんは、トロトロのお粥に味気なさそうなおかずだった。それに比べてボクの体は、本当は至って健康体なんで普通のご飯にお味噌汁、あとノリとか目玉焼きにサラダといった毎朝食べるご飯と同じもの。

「あ~~~~！いいなあ！俺なんかもう1週間もこれだぜえ！」

芦田さんは恨めしそうにボクのご飯を見て言った。

松原さんも

「いやあ、いざ入院してから日ごろ気にせずに食べていたご飯の美味しさが思い出されるなあ（笑）」

と言ってクスクスと笑っていた。

ご飯を食べた後しばらくは病院の廊下に置いてあるマンガの本を読んだりしながら時間を過す。

そして10時近くに母親が今度は父親を連れて病室にやってきた。

同室の2人に軽く挨拶をして、母親はベッドの横にあるロッカーに歯ブラシだのタオルだの下着だのといった必要品を詰めている。父親はボクの気持を気にしているのか、何を話しかけたらいいのかわからない様子だった。弟の悟は朝早くに車で20分くらい行ったところにある父方の祖父^{つまりボクのおじいちゃんおばあちゃん}の家に1週間ばかり預けることにしたということだった。

ようど夏休みだしということでも悟も大して気にせず喜んで行ったらしい。

10時半ごろに若木さんという昨夜の看護婦さんが検査の報告ということでボクらを先生の診断室に呼びにきてくれた。部屋に入るとさつき朝の検診をしてくれた女医の戸川先生がいて、まず昨夜での検査内容を改めて父親にも報告する。

「お父さん、お母さんから哲君のことはもうお聞きになられたと思いますか…。」

父親は多少戸惑っている様子で

「はい。大雑把なことは家内から聞きました。哲は…その…本来女性であったということですが。」

「そうです。昨夜救急の夜勤担当だった坂井と加藤のほうから概要的な診断結果をご報告させていただいたんですが、じつは昨夜哲君の細胞から染色体レベルでの検査も実施しまして、その結果がさきほどでまして。」

「染色体…と申しますと？」

「つまり、人間の性というものは、まあこれは人間に限らないのですが、X染色体とY染色体というものがあって、この組み合わせの違いによって性が決定されて、その後出産までの母体の中でホルモンの射出を受けてどちらかの性の外見に変化していきます」

「なるほど。私も中学か高校だったかの授業でそうしたことは習ったような記憶があります。」

「そうですね。それです。それで、染色体がXYの場合男性になり、XXの場合女性になるのですが、クラインフェルター症候群という一部の例外はあるんですが、そうしたものを除けば母体の中でこのとおりに成長し出産となるわけです。それで哲君の染色体についてですが…。」

「どうなのでしょう？」

「いわゆるクラインフェルターというものではなく、完全なXXつまり女性の染色体でした。これはあくまで推測になりますが、妊娠から出産までの間に母体において何らかのホルモンの異常射出があったって、これによって哲君の生殖部が外形的に男性に似た形になって

しまったんじゃないかと思うのです。」

「なるほど。それでは、つまり哲は肉体的には完全な女性であるところ？」

「そういうことです。昨夜も簡単な概要だけはお話させていただきましたが、哲君の場合狭いのですがちゃんと膣口はあり開いています。今回はそこから生理の出血があったわけです。たまたましかしたら今回以前に初潮はすでに来ていて、狭い膣口の中で溜まってしまっていた可能性もあります。なので、体内の検査をして膣内洗浄を行う必要があるかもしれません」

「今後の身体の変化についてはどうなっていくのでしょうか？」

「すでに生理が始まっていますから、今後は体全体が丸みをつけてきて、お尻とか乳房とか女性的な変化が目立ってくると思います。また現在は少年っぽさというか中性的顔つきですが、これからはやはり女性的な顔つきにと変わっていくでしょうね。」

「もし男のままであることを選択した場合、その変化を止めるといふことになるわけですか？」

「そうです。じつは男女を問わず体内には男性ホルモンと女性ホルモンが両方あり、そのバランスで男性らしくなったり女性らしくなったりするわけですが、男性の肉体に近づけるためには女性ホルモンの射出を抑制し、逆に男性ホルモンを投与しなければなりません。このホルモン投与は死ぬまで継続して行わねばなりません。また女性の体を無理やり男性らしくするわけですから、ホルモン投与による副作用として肝機能障害やウイルスの感性危険性の上昇、さらには精神的障害といった危険性も考慮しておく必要があります。」

「では逆に本来の性である女性を選ぶ場合は？」

「これについては、じつは男性を選ぶよりずっと簡単なのです。

哲君の男性器に似た部分は本来は女性のクリトリスが肥大化しそこに尿道が通ってしまったものだと考えられます。女性器として膣は狭いけどちゃんありますので、肥大化したクリトリスを小さくし、尿道を膣上部に移す。それと膣口をもう少し広げてやる手術ということになります。その後ホルモンの調整のため半年程度は女性ホルモンを投与することが必要になりますが、ホルモンバランスが安定すればその後の継続的治療は特に必要なくなります。当然将来の男性との性交渉その結果の妊娠・出産も他の女性と同じようにできることになります。」

「う~~~~ん……………」

父親は目を閉じたまま腕を組んで考え始めた。

「なあ、…哲、お父さんは正直言つとお母さんから今回の事を聞かされたとき、すごく戸惑いの気持があつたんだ。

今まで息子として育ててきたけど、今度は娘として育てることになるかもしれないんだ。でも本当は娘であるはずのお前をこれからも息子として育てていくの方が不自然な気もする。それと男を選んだ場合お前が一生ホルモン剤やや副作用やらと付き合っただけなくちゃならないこともある。」

どっちを選んでもお父さんは出来うる限りのことをするつもりでいるけど、お父さんの個人的意見として言えば「本来の性」でいる人生を選ぶほうがお前にとって自然なんじゃないかなろうか？」

「ね、哲。お母さん、哲にこんな苦労と持たせちゃって本当に謝らなくちゃいけないよね。でもね、昨日先生からこの話を聞いたとき結構シヨックだったけど、わりとすぐに受け入れられるような気がしたの。これは女の強さっていうか、割り切りなのかもしれないけど。あなたが娘であつてもあなたはあなただから、いいんじゃないかって。女同士だから色々なことも教えてあげられるし、いきなりじゃなくて少しずつでも本当のあなたになれるんじゃないかって」

「ボクに…女の子になれるんだろうか…？」

ふと漏らしたボク言葉に祥子先生は

「哲君、あなたは女の子になるんじゃないのよ。女の子に戻るの。だからなるための努力じゃなくて戻るための努力をするの。それは無理にするんじゃないって受け入れていくこと。」

「…うん。」

「まだ多少の時間があるからよく考えて？」

その父親の言葉にボクは

ボクは決めた！

「ううん、決めました！自分が本当は女ならやっぱり女として人生を送ったほうがいいと思うから。」

「いいのか？」

父親は念を押す。

「いいか悪いかっていうんじゃない、そうするのが自然なら、先生が言ったみたいにそれを受け入れて生きていこうかなって思うんだ。」

僕ははっきりした言葉で言い切った。

祥子先生は

「私は哲君の考えに賛成です。それが自然なことなのだって思いますわ。」

「わかった。じゃあ、そういう方向でお願いします。お父さんは今からお前のことを娘として扱うことにするからな」

母親も

「大丈夫よ。男にも楽しいこと辛いことがあるように、女にも楽しいことも辛いこともあるの。でもお母さんは自分が女に生まれたことを良かったって思ってるから。哲も女性であることの誇りを持つようになるれば後悔しないと思う。」

すると祥子先生まで

「あ、私もお母さんのその後意見に賛成ですわ！」

と少しおどけて言った。

「でも、そうになると哲君っていう名前のわけにはいかないわねえ。」

優とか恵とかもつと中性的な名前にしておけばよかったんだけど）
笑）女性としての名前に変える必要があるわね」

「あ、お母さん、それについては事情が事情ですから、裁判所で性別と名前の変更の申し立てをすれば特に問題なく受け入れられるはずです。なるべく早くに新しい名前をつけるようにしてあげてください。」

これから色々なことが変わっていく。

でもボク自身が何も変わるわけではない。

ボクは本当のボクを受け入れていただけなんだから……。

(会議室にて)

祥子先生の上司の二宮先生という40代くらいの男の先生がテーブルのみんなにコーヒーが配り終わったのを確認すると会議の始まりが二宮先生から告げられた。

二「さて、それでは哲君の性別変更について皆さんのご意見を伺いたいと思います。」

この会議の趣旨は主に哲君の手術後の環境変化についてどうするかということです。すなわち端的に言えば住居と学校の問題が最も大きい。これが決まれば後はこれに合わせていけば良いでしょう。

それとまず本題に入る前に弁護士の田代先生から裁判所への性別と氏名の変更申し立てについてご説明いただきたいと思います。」

弁「えー、弁護士の田代でございます。このたびの哲君の件につきましては、彼、あ、いや彼女ですね、彼女が本来的には女性として性を受けていたこと、それが母体内での何らかの関係で生殖器について男性に類似した状態になって出産されてしまった。このために男子と誤認されてしまいその後すべての手続が行われてきたわけで、この場合法律的には「錯誤」ということになります。」

したがって、最近いくつかの事例で見られるような性同一性障害者による性別変更ということではなく、錯誤によって誤まって手続された性を本来の性に訂正するということになるわけでして、この件についてはすでに該当裁判所の担当者にも確認を行い、その場で性別訂正の判決が下りることとなるはずです。」

二「では、そちらのほうは田代先生に引き続きの手続をお願いしま

す。それで訂正後の名前ですが、これについてはご両親にご説明を
お願いします。」

父「はい、では私から説明させていただきます。哲の今後の名前に
ついては、当初哲とも話し合った結果、名前は本来生まれたときに
親からつけてもらうはずのものであったので、私たち（両親）につ
けてほしいという哲からの願いもありました。

え、私どもも哲の出産前に娘が生まれた場合の名前をいくつか考
えておりまして、実はこのたび家の中を探したところそのときの名
前の候補を書きとめたノートが見つかりまして（笑）」

二「それは、それは！なんとも良い思い出ですなあ！」

父「はい（笑） 何しろあの時は初めての子供の授かりでしたので、
私どもの祖父母を混ぜて試行錯誤がありました。

哲の名前は、私のほうの家系では名前をつけるとき一字でつけるこ
とが習慣というか、そのようになっておりました。そのため哲の弟
についても「悟」という一字でつけたわけであります。

哲の場合は「真実に真正面から向かい合って自分の信念に従って深
く探求し、考えられる人間になってほしい」という願いからつけた
ものです。」

祥「いい名前ですものね。ご両親の思いがとてもよく感じられます
わ。」

父「ハハハ、ありがとうございます。それで女の子の名前ですが、
まさか「哲子」とでもするわけにはいかないと思ひまして…。」

弁「ハハハ、それじゃ「黒柳哲子さん」ですからな（笑）」

父「そうなんです（笑） それでこれと同じ思いを込めた女の子の名前として当時「凜」というものを考えておりました。

女性としての柔らかさと優しさを持ちながらも常に凜とした姿勢で人生と向き合える女性でいてほしいというものです。」

祥「凜さん……。 いいじゃないですか！とてもいい響きだし、それに出産の時のご両親の思いがちゃんと継続されていますよね。」

弁「私もとても良い名前だと思います。」

哲君はこの名前のごことはすでにご両親から聞いていたのかな？

ボク「いえ、今初めて聞きました。」

うちの両親から「名前のごことは今日初めて言うから」「って言われて内緒にされていたんです。」

二「ということとは、今この場が哲君、いや凜ちゃんにとって新しい人生の始まりというわけだ。」

なるほど！

（凜…小谷 凜…これが新しいボクの名前か。）

二「それでは、今お父様が仰られた思いに従って、ここに集まった皆で彼女に「小谷 凜」さんという名前を付けたいと思います。

いいね、凜ちゃん？」

ボク「あ、はい。なんか照れるけど…。」

二「ははは（笑）、だけどこれからはそれがキミの名前なんだから、早くなれるようにしないとな。」

それでは、以降は凜ちゃんという名前で会議を進めていきましょう。
よろしいですか？」

皆「賛成！」

二「さて、それでは名前の件が決まったところで本題となるところですが、住居と学校の二つの問題のうち学校の問題、これが決まれば住居の問題はそれに従うことになりますので、これについて皆さんのご意見をお聞かせください。」

弁「え、法律家としてこれについていくつかの事例に関係したことがありました。そうした事例からいくつかの予想される問題を挙げますと、まずはじめに、学校を転校するかそれとも今のままの学校に通い続けるのかということです。

私は凜ちゃんのように本来女性であったケースのような事例についての経験はありませんが、たとえば性同一性障害で性別変更を行った場合学校を変えて新しい環境で再出発するというのが一般的ではありません。その場合当然過去の環境は教師とかごく一部のものを除く周囲には一切内緒にしてしまう。

しかしこの場合過去を捏造したとしても生活していく中で多くの綻びが出てくるでしょうから、それが周囲特に友人にわかってしまったときには強烈な違和感を抱かれてしまう危険性が多い。つまり特に女子について拒絶反応を持たれてしまうことが予想されます。

まして凜ちゃんは性同一性障害のケースのように異性に変更されたのではなく本来女性として生を受けたのだけど、単に錯誤によって男児として育ってきたにわけですから、安直にこの方法を取れば逆に問題を複雑化させてしまうことも考えられます。

一方後者つまり今の学校に通い続けるとした場合、この場合は何も隠す必要はない。問題となってくるのは周囲の仲間たちの反応ということになるでしょう。この場合特に凜ちゃんがこれからその仲間に入ることになる女子の受け入れができるかです。それは単に手続き的受け入れではなく感情的な部分も含めてです。

これについては男性である私よりも女性であるお母様や戸川（祥子）先生からご意見をいただいたほうが良いと思います。」

このとき母親と祥子先生がお互い目で確認をしながら

祥「それでは、女性としての意見としてまず私から申し上げさせていただきます。」

今、田代先生が仰られた学校についての2つの方法論に関しまして、前者つまり転校という手段をとった場合ですが、確かに田代先生の仰られるように「ばれてしまった場合」の反動は大きなものと予想されます。

さらに言えば、そうなった場合は多分再転校ということを考えざるをえなくなるでしょう。そうすると、その結果凜ちゃんが常に自分の人生の中で秘密を抱き逃げ回っているような環境を作ってしまう危険性があります。これでは「凜ちゃん」という名前を付けたご両親の思いとも反することになってしまいうんじやないでしょうか。」

母「私も先生のご意見に賛成です。」

私どもが住居をどこかに移すとか、実は父方の親戚の中に子供がない家がありまして、以前哲か悟を養子にという話もあったので、そういうことも含めて色々考えたりもしましたが、そうすることに よって過去を隠してしまえば、結果的にこの娘はいつもビクビクして人生を送ることになってしまいうんじやないかって思ったんです。」

祥「私もお母様と同意見ですね。」

周囲とくに女子の凜ちゃんに対する受入れについては、女子はどちらかといえば男子よりこうした変化に対し柔軟だと思います。凜ちゃんは、男から女になったのではなく本当は女の子だったという事実をしっかりと理解させられれば心配するよりスムーズに受入れはされるんじゃないかと思えますね。」

問題はむしろ女子より男子ではないでしょうか？」

二「ふうむ…なるほど。確かに学校の問題についてはお母様や祥子先生のご意見は納得できるものがありますね。」

まあ、確かに男子のほうがいざとなったら女子より頑なであるというのは、男である我々からして耳が痛いことですが、認める部分を感じます（笑）」

弁「今のお母様と祥子先生のご意見を伺って開眼した思いがありません。

確かに今まで自分たちと同じ男であったはずの哲君がある日実は女の子だったとわかって女になってしまった。周囲の男子生徒たちにとっては仲間が抜けていくみたいで、そういう感情を覚えるかもしれませんね。

凜ちゃんに聞くけど、学校で特に仲の良い友達っていうのは何人くらいいるのかな？ あとそういう友人を含めた男子生徒間の関係とか聞かせてくれない？クラブ活動とかも」

ボク「えつと・・・特に仲のいいのは3人かな。

小学校のときからずっと仲が良かった安田ってヤツと、あと中1のときから同じクラスだった工藤。それと男じゃないけど幼稚園からずっと一緒だった安藤さんとか。」

母「久美子ちゃんね。あの娘はとってもいい娘よね。」

ボク「うん、そう。」

それでよくわかんないけど、多分学校ではあんまり目立つとかそういうタイプじゃない気がします。

あとクラブはサッカー部です。」

弁「なるほど。その安藤さんという女の子は他の女子と凜ちゃんと架け橋になってくれるかもしれませんね。」

ひとつの方法としてその安藤さんには個別にこのことを話しておく必要があるかもしれないな。」

二「そうですね。それとサッカー部については…。」

弁「まあね。今後女子部員としてその活動に加われるかはちょっと疑問のところかなあ…。これは弁護士としてではなく一人の男としての感情で考えれば、サッカーという戦闘的なスポーツで中学生の男子の中に女子が一人だけいるというのは中々厳しいものがある気がする。」

祥「ただ、それについては凜ちゃんがこれからもサッカーを続けたということなら、どこか女子サッカーのチームを探すということでも考えられますしね。」

二「そうですね。それで凜ちゃんとしての考えはどうなんだろう？」

転校して新しい環境の中で生活するか、それとも最初に多少の苦勞をしてでも今の環境の中で自分の人生を切り開いていくか。

キミの考えを聞かせてくれないかな？」

ボク「ボクは…、ボクは…逃げたくない。」

父「頑張れるか？…と今聞くのは酷かもしれんが、私は凜の今の気持ちを大切にしたい。」

母「お父さんもお母さんも一緒に頑張るから大丈夫よ。私も凜の気持ちを優先したいと思います。」

二「では、これで決まりですね。今までの学校に通い続ける方向で、あとはご両親には今後学校への報告と、それとご近所へも何らかの形で言っておいたほうがいいでしょう。」

これから凜ちゃんは当然女子の制服で毎日学校に通うことになる、また日々の生活でも当然女性の服を着る生活になります。

さらに女性としての生活用具の購入など、事前にご近所の方々に説明しておく必要があると思います。」

父「まあ、確かにそうですね。」

今まで男の子であると思っていたこの子がいきなりスカートを穿くようになっちゃ周りの人たちはそりゃびっくりするでしょう。」

二「それではこれで概要は決まりました。」

お願いした項目についてそれぞれが責任を持って実行する。まずはご両親から学校の方への連絡をお願いします。その際は学校責任者と担任の先生への説明にうちの戸川医師を同行し、医学的説明をさせることをお勧めします。」

戸川先生、お願いできますか？」

祥「はい、承知いたしました。ではご両親のほうから学校に連絡を取って都合の良い日を私に教えてくださいませんか？ 私もなるべくその中で都合をあわせさせていただきますので。」

父「わかりました。何分よろしく願います。」

こうしてボクの人生の新たなスタートが始まった。

第六話 哲から凜に・・・

父親はその日のうちにボクの担任の山岸先生に電話をして状況を話したということだった。

夜中にいきなりの腹痛、救急車で大学病院に運ばれて検査の結果それが女性の生理であったこと、そしてボクの性別が実は違っていたことがわかったこと。

山岸先生は女性の英語の先生だった。

父親から聞いた話では、先生は思ったよりも冷静にその事実を受け止めてくれたらしい。その上でボクがそのまま今の学校に通い続けることについて、まずは2日後に教員の出勤日があり、そのときを利用して校長、教頭それと学年主任の先生を含めて改めて詳しい話を聞きたい。そして生徒間の動揺を避けるための方法として、PTAを通じてこのことについての連絡をしたらどうかという内容の提案だった。

父親は先生の提案はとても妥当であるので、その旨を了承し病院の祥子先生にも伝えた。

ここからは後で父親から聞いた話だ。

2日後の昼過ぎ。

ボクの両親と祥子先生、学校からはボクの担任の山岸先生、校長先生、教頭先生、そして学年主任の先生とPTA会長の窪田さん、地区の教育長の人が集まって説明が行われた。

はじめにボクの父親からことの経緯が説明され、その後に祥子先生から医学的説明が行われた。

一通りの説明を聞いた校長先生は手元のお茶を一口飲んで話を始めた。

校長「まず趣旨は十分理解しました。つまり出生時の性別が違っていてそれがこのたび判明したということでもよろしいでしょうか？」

父「はい、そういうことです。それで本人を含めて病院の先生や弁護士の先生のご意見を色々踏まえた上で、このまま今まで通り現在の学校に通わせていただければと思ひまして。」

教育長「なるほど。まあ、確かに今回の件については、本人の哲君……いや、名前を凜さんに変更されるんですね、その凜さんにとつて避けることのできないことであつて、あくまで本人の希望が優先されることは当然だと思ひます。」

ただ懸念されるのは先ほど病院の先生が仰つた生徒の受入れの問題です。今まで男子として生活してきた仲間が実は女子だった。それを素直に受け入れられるかという問題。

それと、これはあまり表には出していないことなのですが、ニューズなどでご存知かと思いますが、最近は一性障害というものが社会で随分と表面化してきていますが、実はこの地区の某学校でもそういう要素を内在している生徒がいるという報告を受けておりま

す。

この学校でそういう事実があるかどうかはわかりかねますが、もしそういう生徒がいる場合凜さんがそういう生徒にとって嫉妬の対象になってしまわないかということも否定できないでしょう。」

校長「今のところ本校ではそういう報告は受けておりませんが。」

教育長「まあ今のところはね。ただああいったオカマ、…いや、失礼「性同一性障害者」ですね、そういったものは内在的なケースが多く、実際それを口に出す人というのはその中でもかなり少数らしいですからね。だからそういう点でもかなりデリケートな問題ではあると思います。」

担任「教育長のご意見は理解します。ただ今回のことについて小谷さんは何の責任もなく、彼女こそこれからの人生の中で多くの困難を受けるのです。」

戸川先生の仰るように、転校して一度目は逃げられてもそのことで彼女が一生の負い目を持ってしまおうようなことになれば、それこそ私たちは彼女に対し侘びようがなくなります。教師として私は決意を決めた彼女の意思を尊重し、この学校から彼女を巣立たせてあげたいです。」

この山岸先生の言葉に学校側の誰もが頷いた。

教育長「私だっけかっつては現場で子供たちと接してきた身です。山岸先生のこの言葉に納得せねば、私は教師の誇りを自分で捨てることになってしまっつ。」

PTA会長「わかりました。PTAのほうは私に任せていただけませんか？

実は父兄、とくに母親にはそれぞれにグループみたいなものがありまして、その誰を納得させれば全体の流れができるかというものがありません。事前に根回しをして、まずは緊急のPTA総会を開きましょう。

彼女は本来女性として生を受けたのですから、当然女性としての人生を生きる権利があります。その権利を守ってやれないのなら我々は親として失格です。」

最後に校長先生がくすつと立ち上がって

「では、皆さんのご意見をいただきました上で、私はこの中学校の校長として小谷 凜さんを今まで通り我々の手で育て、そしてこの学校から巣立たせてあげるということで決定を下したいと思います。」

なお、この決定は今後いかなる圧力を受けたとしても絶対に覆ることはありません。この学校の校長としての誇りにかけて実行します。」

こうしてボクは女子として、今までの中学校に通い続けることになった。

そして今でもボクはこの中学校を卒業できたことが一生の誇りになっている。

- - -
- - -
- - -

手術の日を迎える前日

ボクの病室に担任の山岸先生がお見舞いに来てくれた。

「小谷さん」

「あ、先生！」

「元気そうで良かったわあ！」

「あの…。」

「うん、だいじょうぶ。事情は聞いたから。」

皆で話し合ってたね、小谷さんにとってこの学校を母校にできるように頑張ろうってね、決めたの。PTAで他の生徒の親たちも皆賛成してくれたわ。だからあなたは安心して。

あなたはちゃんと女性として生を受けたんだから、うちの学校の女生徒として堂々と通って頂戴ね。」

「はい、ありがとうございます。」

「あ、それとね。あなたと仲がいい久美子ちゃん。彼女だけにはこのことをもう話してあるの。」

彼女ね、昔からあなたと一緒に遊んできてどこかそういう感じがしてたつて言つてたわ。同性同士の通じ合いみたいなものなのかな。これからも仲良くしてほしいつて。ただし今度は女同士としてね。」

「久美ちゃんかあ…。」

昔、久美ちゃんとはつきり遊んでいた時期があつたんです。幼稚園くらいのとき。そのときは他の男友達から夫婦とかからかわれたりしたこともあつて…。」

「ふふ…。女同士の友達つていうのも男同士と違っていいものよ。本当に心から親身に心配してくれて。」

友達は絶対になくさないように、それは人の財産だから。」

「はい。わかりました。」

「明日はいよいよ手術でしょ？ 何時から？」

「午後2時かららしいです。難しいものじゃないから、2時間くらいで終わるつて。」

「そう。じゃあ、心配要らないわね。」

でも、先生明日も手術が終わつた頃お見舞いに来るわ。だから頑張つてね。」

「はい。ありがとうございます。」

- - -
- - -
- - -

カチ…カチ…カチ…

静かな手術室の中で正確に秒を刻む時計の音だけがやけに大きく感じる。

その中でボクは、すう……っと落ちるような眠りに誘い込まれていく。

しばらく経つと眠っていることを自覚しているのに、ボクはなぜか意識の中でカチャカチャと手術の器具がボクの下半身のあたりで重なり合う音を感じた。

（ああ、なんか信じられない。ボクはいよいよ女になっちゃうんだ。）

- - -
- - -
- - -

そして、ボクはやがてその眠りから覚めるときが来る。

うつすら、まぶたの向こうに光を感じる。

（ん…あれ、もう終わったのかな…。）

2時間の手術と言われていたけど、それよりも随分短い時間だったような気もした。

「うん…ん…。」

「あなた、目を覚ましたみたい。」

ボクがゆっくりりまぶたを開けると、目の前には父親と母親そして山岸先生が久美ちゃんを連れて来ていた。

体は感覚をあまり感じない。

「もう少しゆっくりしてもいいんだからね。目が覚めても麻酔が残ってるから体を動かさずらいつて先生が言ってたから。」

母親がボクの頬を撫でながら優しくそう語りかける。

「うっん…だいじょうぶ。　ねえ、もう…終わったの？」

母親はボクのおでこに暖かい手をのせて

「うん、ぜんぶ終りよ。手術は何の問題もなく終わったのよ。」

「…じゃあ？」

「うん、そうよ。」

ボクは自分の手を今まで「男としてあったところ」に持っていてこうとするが、なぜか手の感覚はない。

「まだ無理よ。包帯も巻いてあるしね。今日の晩くらいには麻酔が完全に解けて感覚が戻ってくるらしいから。今は口を動かすだけにしなさい。」

「うん…。」

ボクは少し無理をして久美ちゃんのほうに首を動かす。

「あ、久美ちゃん、来てくれてたんだ。」

「うん、ちゃんと聞いたからね。」

あたしと凜は、これから先もずっとずっと友達だよ。

元気になったらいっぱい遊ぼうね!」

久美ちゃんはもうボクのことを凜って呼んでくれる。ボクは自然に湧いてくる涙を止めることができない。

「うん、久美ちゃん…。ううう…。」

そんなボクを見て久美ちゃんは

「あたしたちはずっと友達だよね。」

と繰り返した。

第七話 初登校のとき

それから2週間後。

ボクはいよいよ退院の日を迎えた。

ボクはその日の朝、母親が買ってきてくれた薄いピンクのワンピースに身を包んだ。フレアのスカートが時折ふわふわと揺れて、下半身がどこか頼りない感じがする。

「これからはスカートとかに少しずつでも慣れていかなきゃね。」

「うん。でもやっぱり、なんか恥ずかしいなあ。」

「ふふ、でも全然違和感ないわよ。まだあまり髪が伸びてないけど、少しボーイッシュな女の子西が見えないし。」

父親もほうっとした様子で僕を見て

「やっぱり女の子だったんだなあ……って今改めて実感したよ。これからは娘の父親があ。」

ってことは、いつかお前が嫁に行っちゃうときも覚悟しなきゃいけないのかなあ。」

とため息をつくように言う。

今日は悟も一緒に来てくれた。悟も小学校5年生。何でもわかる年齢になったけど、昨日まで兄と思っていたのに突然姉になってしまったことにまだ少し割り切れていない様子があったみたいだった。

それでもとても心が優しい子だから

「凜ちゃん、その荷物オレが持つよ」

と言ってくれたりする。

昔は哲兄って呼んでたから凜姉とでも呼ぶのかって思ってたけど、それはなんか照れがあるみたいだった。

そしていよいよ荷物を纏めて退院。祥子先生は父親が車を止めた病院の出口まで送りに来てくれた。

「ああ、なんだか自分の妹がいなくなっちゃうみたいですよごく寂しいわあ！」

ボクは少し頬を赤らめて

「祥子先生、ボク、これで良かったって先生にすごく感謝しています。本当にありがとうございます。」

「うん。あなたは何かがあっても負けない妹！あたしもいっぱい応援するから。ただしっ！ボク・・・じゃないでしょ？今からはもう「アタシ」だからねっ！（笑）」

「はい（笑）。」

「さい！いつでも相談に乗るわ。」

「はい。自信を持って、ですよ。」

「そうよ、自然に、自信を持って。あなたは本物の女性であって、何も負い目なんかないんだからね。」

「はい。」

家に帰り自分の部屋で少し休憩をとっていると母親が部屋のドアをノックした。

「ちよつといいかしら?。」

「うん。なあに?。」

「明日からのあなたの制服とか。」

「あ、うん。そうだよ。 どうしよう?。」

「どうしようっていったって今までの男子の制服で行くわけにはいかないわよ。」

祥子先生の話だと、これからバストとかヒップラインが今まで停滞してた分かわりと早く女性的に変化してくるだろうって言ってたけど、一応今のサイズに少し余分を見て調整してもらったの。」

うちの学校の女子の制服は、夏服が半袖のブラウスと紺のプリーツスカート。冬服は長袖のブラウスに紺のジャンパースカートとリボ

ンのついたボレロだ。

母親はとりあえず夏服としてスカートを3枚、ブラウスを10枚、それと女子用の靴を2足用意してくれた。

それとボクが入院している間に下着も見繕ってくれて、ボクの部屋のタンスの中は男の下着はすべて姿を消し、女の子のショーツ、キヤミソール、ソックスなどが詰められていた。

「あとは、すぐに胸が出てくるらしいけど、ブラジャーはとりあえず時期がきたら一緒に買いに行つて考えましよう。」

女の子の下着は男のものとは違って生地がとても柔らかい。それとピタツと締め付ける。

「ね、ちょっと着てみて？」

「え、いま？」

「うん、そう。サイズを見たいのよ。冬服のこともあるし。」

もう女同士だし恥かしながらもしょうがないでしょ？」

ボクは躊躇いながら今着ているワンピースを脱ぎ、母親の用意した制服を身に付ける。

ボクは学校でサッカー部に入っていたが元々刈上げとかスポーツマン風の髪にするのは嫌いだった。学校は一応校則で男子は髪の長さがある程度決まりもありたりしていたけどそれほど厳しくもなく、

それに幼馴染の久美ちゃんも

「哲ちゃんはそういうの絶対似合わないよ。なんか哲ちゃんがそういうのにしたらかえって変な感じ」

って言われたことも何度かあって、ボクはいつもは少し長めで自然な感じに分けていた。

それでも部活の先生からは

「小谷いゝゝ！オマエ、サッカーやっててそういう髪じゃ五月蠅いだろ！スパツと切って来い！」

なんて言われてたりもしたけど、僕はけっこう抵抗していた。

最後に床屋に行ったのは5月の終りで、それから7月後半で入ったのでそういう注意を受けることもなく、そしてそのまま8月にあの生理があつて入院。だから9月になった現在までちょうど3カ月半近く髪を伸ばしていたことになる。それで退院したときにはボクの髪は少し肩に着く位に長くなっていた。

それでも男の髪型と女のそれはカットとか全体的な形でかなり違いがあつて、女の子の髪型は短くても男の長いヘアスタイルとはシルエツトが異なっていた。

母親は最初昨日家で新聞紙を下に敷いてボクの髪を自分で切ろうとしたが、男のヘアスタイルから女のヘアスタイルに変更するのはやっぱり素人じゃ難しいと判断したのか、夕方少し離れた場所にある美容院にボクを連れて行きカットをお願いした。そのため今は多少短めのボブカットくらいになっている。

母親はボクの体を撫で回しながら

「あらあ！似合うじゃない！ブラウスはサイズいいわね。スカートは、うぐん…もう少し腰を詰めた方がいいみたい。朝までに直しておくわ。」

あ、ちょっと待ってて！」

と言って下の階に下りていった。

すぐに戻ってきて手に持っていたのはカメラ。

「はい、姿勢を正して！撮るわよお！」

パシヤッ！

「なあに？そんなの撮ってどうするの？」

「だって、ほらこういう記録をちゃんと残しておきたいし。ふふふっ、似合ってるわよっ！」

とボクのお尻をポンツと叩いた。

.....
.....
.....

次の日の朝6時。

いよいよ今日は登校日。

ボクはいつもの日より早めに起きた。始業は8時半だったが、今日は7時半に登校して事前に山岸先生たちのところへ顔を出すように言われていたからだ。

家を出るときはかなり躊躇いがあった。

家の中にいる間は家族だけ、でも外に出れば他人が自分を見る。

(途中で近所の人と会ったらどうしよう。。。)

(あの子たしか男の子のはずなのに女の子の制服着て…なんて思われて…。)

足も手も細かく震える。

「お母さん…。」

母親はそういう気持ちを察してくれたんだろう。
ボクの手を握って言った。

「心配なんて要らないの。あなたは本物の女性なんだから。」

私の娘なんだから。」

「…うん。」

押えきれない胸の鼓動
でもこれが最初の一步

玄関のドアを自分の手で開けて、そして家の外に歩き出す。

学校に行くまでの途中近所の人とは会わなかったけど、知らない人は何人もボクとすれ違った。でも誰もボクを気にするふうでもない。

「ほらね？ 道ですれ違った女の子一人ひとりを一々気にする分けないでしょ？」

「…うん。」

少し足取りの重さも消えてきた。

それでも、家から歩いて15分のところにある学校の正門が近づくとどーんと気持ちが沈んでくる。

もう夏休み期間は終わって10日経っていた。

時間は朝の7時20分。

この時間に登校してくる生徒はほとんどいなかったが、部活動で数人の生徒が正門のあたりを歩いていた。

「おい、オマエなんで女の制服着てるの？」

いつこんなことを言われるんじゃないか…。

ドキ…ドキ…ドキ…

その一人ひとりとすれ違うたびにボクの心臓は破裂しそうで目を閉

と言ってボクらを職員室の中に招き入れた。

「さあ、凜。覚悟を決めて！入っていくわよ！」

母親がボクの肩を突いて促す。

(え~~~~~いつつ!!!!)

ボクはギュツと目をつむり覚悟を決めて突撃っ！

「アラアアツツ！ かわいいじゃないっ！」

ボクを見た山岸先生の第一声。

そして周りにいた先生たちもボクを取り囲み

「よく似合ってるなあ！ うんうん、立派な女の子だ。」

「本当に素敵よお！小谷さん。」

と口々に言ってくれる。

(本当にそう思ってるんだろうか?)

心の不安はまだ消せない。

それからボクと母親は校長室に連れて行かれて、校長、教頭、学年主任の先生、そして担任の山岸先生とこれからの予定、病院に検査通院するときの早退について、それと当分の間の体育科目の見学などの話し合いをした。

一通りの話が終わったときに時間は午前8時半。

「じゃあ、いよいよ教室に行きましょう。小谷さん？いいわね？」

と山岸先生が腰を上げて言った。

(いよいよだあ~~~~~~~~~~~~っ！)

ついっ！

このときがっ！

トキトキ…トキトキ…

階段を2階にあがり20mほど歩いたところにある教室にたどり着く。

2年D組

教室の引き戸の前に立つと中のザワザワとした声が聞こえる。話してる声の主も大体想像される。

「じゃあ、入ろう？小谷さん、だいじょうぶよね？」

「は、は、は、はいい…」

声の奮えがどうにも止まらない。

ガラッ

先生はボクの肩に手を乗せて一緒に入って行ってくれた。

ああっ！きつとボクが入ると同時にすごいざわめきが起るんだろ
うな。

どーしよう…。なんて言えはいんだ…。

「哲ちゃんが女の制服着てきたああ〜〜〜！」

なんて言われるんだ。きつとっつ！！

しかし、このときのボクの予想は完全に外れていた。

ボクが入ると同時に教室のざわめきはピタツと止まった。

そして男子クラス委員の野口がいつもの調子で挨拶の合図をかける。

「きり〜〜っつ！！」

「気をつけ！礼！」

「おはようございます！！」

「着席っ！」

まるでいつもと同じ。

何も変わらない朝の挨拶。

山岸先生は教壇の前に立ち、そしてボクは先生の向かって右横に立
つ。

スカートから出たボクの足は腿のあたりで小刻みにガクガクと震えていた。

先生はくるつと黒板の方に向きを変え白いチョークを摘んで大きな字で書く。

『小谷 凜』

「皆さん、おはようございます。

え、もうすでに事前の連絡があったと思いますが、これが新しい小谷さんの名前です。

『りん』さんと読みます。

小谷さんは生まれたとき実は女兒であったのですが、お母さんの体内でのホルモンバランスの影響で局部が男児に似た形で生まれてきてしまい、そのために男児と間違って認識されていたわけです。それが夏休み中に、女性としての生理現象が起こって本当は女性であったことが判明したわけです。

これは皆さんの心の中だけに閉まって置いてください。実は今日こうやって小谷さんがこの学校に登校して来るまでには色々な問題と向き合ってきたんです。まずこれからの人生で小谷さんの本当の性である女性を選択するのか、それとも今までのまま男性として育てていくのか。

そしてそれを決めたあとには、今度は学校をどうするのかという問題がありました。転校して誰も知らない学校で新しくスタートをすることもその方法としてあったんだけど、それでも小谷さんはあえてこの学校に通い続けることを選択しました。

それは彼女が逃げることを選ばなかったからです。一度逃げたら一生逃げ続けなければならぬ。ならば自分は皆に受け入れてもらえるように努力することを選ぶ、と小谷さんは私に言いました。

そのときね、先生はとても嬉しく思いました。先生はそういうことこそ本当の教育だって思っているからです。数字の公式や英語の単語や漢字を覚えることだけが教育じゃないんです。

だから、先生は小谷さんを絶対にこの学校で卒業させてあげたいって思いました。」

クラスみんなは誰も言葉を発しない。

先生の話は黙って聞いている。

「小谷さんは生物学的に本当は女性です。みんなにはこのことを理解してほしいの。」

するとそのときスツと席を立ったのは女子クラス委員の井川 楓さんだった。

実はボクは今まで彼女と個人的に話をしたことはほとんどなかった。

成績だって、彼女はクラスの中でトップ組、ボクはせいぜい中の上がいいところ。話題の共有がない。

「小谷さん、席に座ろう?。」

その井川さんの言葉はそれまで震えて固まっていたボクの心を一気に溶かしてくれた気がした。

山岸先生も

「はい、じゃあ小谷さんも席について頂戴！」と促す。

ボクが以前の自分の席に着くと

他の女子が「先生、近いうち席替えしましょう?」

と言った。

うちの学校では男子と女子が交互に隣り合わせになるように席を決めている。そのときのボクの席は当然まだ男子として学校に通っていたときのままなので、ボクの席の隣は女子ということになる。つまり女子の隣も女子ということになってしまっているわけだ。

先生はニコツと微笑みそして言った。

「そうですね。新学期ですし数日中にも席替えをすることにしましょう。」

第八話 女性の自覚

その日の休み時間

隣の席の藤本美子（ふじもと よしこ）さんという女の子がクルツとボクのほうを向き話しかけてきた。

「ね、『凜』でいいよね？」

「うん、もちろん！」

ボクはスツと差し出された彼女の白くて柔らかい手を握り返す。

中2になって1学期の間ボクの席は彼女の隣だったけど、ボクと彼女はそう話をしたこともない。彼女は奥井さんや久保田さんといった女の子たちと特に仲が良いグループだった。成績はクラスの中でも井川さんと双壁で女子のトップ。髪は少し長めのボブカットで目鼻立ちのはっきりしたタイプの美人だ。彼女に憧れる男子はかなり多い。だからボクが彼女の隣の席になったときは数人の男子から羨まれたもんだった。

「あたしのごときは『ミコ』でいいからね。今まであんまり話したことなかったけど、これから女同士で仲良くできるよね。」

彼女のさりげない言葉がボクはすごく嬉しかった。

すると彼女と仲の良い奥井さんと久保田さんも席に寄ってくる。

「あたし（奥井）は『奈央』でいいよ。あとこっちは久保ちゃん。」

「あらあ！おひさしぶりね。もう退院したの？」

と声をかけてきた。

「は、は、は、はい…。」

今朝教室のときと同じように声が震える。

「いろいろあって大変だったわね。もう体はだいじょうぶ？」

このおばさんはボクが小さい頃から優しくしてくれた人だった。多分うちの母親からすでにお願いされているんだろう。

「はい。もうだいじょうぶです。あとは半年くらい検査のとき病院に行くくらいだから。」

「そう。よかったわあ。これらは女同士で色々話せるね。

また遊びにいらっしやいね。」

「はい、ありがとございます。じゃあ、しつれいします。」

皆がボクのことを思ってくれている。

自分が女であることに早く慣れるように頑張ろう！

家に帰ると母親は買い物に出かけたようで、ボクのお昼ご飯にと冷

やし中華と手紙が置いてあった。

ボクは自分の部屋で制服を脱いでハンガーにかけ、そして薄いブルームのカットソーとデニムのスカートに着替える。

正直まだスカートは慣れない。ズボンのような足全体を締める感じがなく、腰から下を包むような感覚。

左右の足の太もも同士が直に擦れあう感触は、ときどき自分がズボンをはき忘れたまま歩いている錯覚に陥ることもある。

小学生くらいときは男子が女子のスカートを捲ったりして喜んだりする。男子にとっては捲られて減るもんでもないだろうというくらいに思ってるんだろう。でも、あれは実際女子本人にとってはかなり恥ずかしい。ボク自身女性としてスカートを穿くようになって、自分でスカートを上に上げてみると、自分のパンツが他人しかも男性に見られるというのはすごく恥ずかしい気がした。

もちろん女の子だってズボンは穿く。

でも祥子先生からは、なるべく自分は女性であることを自覚できるような服装に常にするようにしたほうがいいという注意を受けていた。それは服装の違いからも性を意識するようにしてほしいのとからだった。

それとこれは病院でのカウンセリングで初めて知ったことだが、女性がスカートを穿くってというのは文化的な意味だけではなく、ちゃんとした機能的な意味があるらしい。つまりそれは、女性には男性にはない生理があつて、また女性の性器は男性のそれに比べてとても湿度が高く菌が繁殖しやすい。閉密なズボンだとそういうばい菌で病気にかかりやすくなってしまふ。だから女性は下からの通気性の良いスカートを穿くようになったのだそうだ。

ボクは母親の用意してくれた冷やし中華を食べ、TVのスイッチをつけた。

TVはちょうどお笑い芸人が場を盛り上げている。TVの中でお客たちが大笑いしてる。でもボクはそんな画面をただボーっとして眺めていた。

あの日からのことがまるで夢のよう。

(ボクはもしかして夢を見てるだけなんじゃないだろうか…。)

それでも自分の体を見れば自分はたしかに女性の服を着ている。

ふっと思いついて自分でスカートを捲り上げてみる。

小さなりボンのついた薄いピンク色のかわいらしい女の子のショート。しかしショートにはかつてあった小さいけど確かな膨らみはない。

心なしかここ数日でおなかや腰のあたりが丸くなってきたような気がする。

身長は小学生時代から元々高いほうではなかった。中学生になって他の男子が急にグングンと伸びだしたときも、ボクはあまり伸びなかった。今でもボクの身長は女子の中ですら真ん中くらい。

そういえば腕や指もかつての仲間だった他の男友達たちよりどう見ても細い。サッカーをやってもいつも力負けしてしまうことが多い。だからその分ボクはテクニックを磨こうと練習した。

最初から男と女の違いがあったんだ。
そう思えば他の男子たちとのいろいろな点での体力差も不思議では
なかったのだろう。

周りの男友達がちょうど今の年代で声変わりを始めている中で、ボ
クの声はそういう気配は全くなかった。

そりゃそうだ。女だから声変わりなんかするはずもない。そして、
ボクには声変わりの代わりに生理が始まった。

- - -
- - -
- - -

そういえば

病院で入院していたとき、祥子先生が院内の喫茶店に連れてってく
れたことがあった。そこで祥子先生はボクにこんな話をしてくれた。

「ね、凜ちゃんは男と女の違いってなんだと思う？」

「うーん…。やっぱり、女の人は赤ちゃんを産むってことじゃない
？」

「私もそう思う。でももう少し付け加えるなら、男は「産ませる性」
で女は「産む性」ってことじゃないかなって思うんだ。」

「うーん…。なんか難しいね。」

「あはは、ゴメン、ゴメン。なんていうのかな、女の人が赤ちゃん

を産むってというのは「産まさせられる」「んじゃなくて自分で産む意思をのって産むってこと。

つまりただ産んで降りっていうんじゃないくて、女性は産みそして育てる性だってことじゃないかなって思うの。だから女性の体っていうのはそのためにすごく合理的にできているのよ。

たとえば、女性が乳房を持っているのは、赤ちゃんに乳をあげるため。まあこれはわかっているとと思うけど。でもそれだけじゃないのよ。

女性の腕や太ももが男の人のそれに比べて柔らかいのは、赤ちゃんにおっぱいをあげるときに、その赤ちゃんを安定して優しく包むためなの。赤ちゃんがお母さんの腕の中で安心してお乳を吸えるようにね。だから赤ちゃんがお母さんのおっぱいを吸ってるときの姿って本当に幸せそうでしょ？」

「あ、うん。たしかにそういう感じするよね！わかる気がする。」

「でしょ？（笑）でも実はもっとあるのよ。」

男性の顔つきが傾向的に精悍な感じなのに対して女性の顔はなんで柔らかくて全体的に丸みがあるか？

これは赤ちゃんを抱くお母さんの優しさが赤ちゃんに伝わるように。

「へえー！ぜんぜん知らなかった。っていつか思いつかなかった。」

「まあ、そういうことは医学的な知識ではあるけど、でも女性は

そういうことを本能的に身につけていくわけよ。

そして男はそういう女性を外敵から守る。自分の命を女性に子供を産んでもらうことによって繋ぐこととするのね。だから男性の体は全体的に締まっているの。」

「ふうん。そういう話聞くとおもしろいね。」

「凜ちゃんだって将来そういうときが来れば赤ちゃんを産むのよ。」

「ボクがあ!?!」

「ほら!ボクじゃなくてあたしでしょ?」

「あ、ごめえん。」

「ふふふ…。」

.....

そんなことを思い出していると母親が買い物から戻ってきた。

「あら、帰ってたのね。用意しておいたご飯食べた?」

「うん。もう食べた。」

「今日は学校どうだった?」

「みんな普通にしてくれた。
何も変わらなかったみたい。」

でも、今まであんまり話したことない女の子と友達になって。」

「そう、よかったじゃない。」

女の子の友達は今からドンドン輪が広がっていくから。まあ男の子の時の友達は今から少し付き合い方が違っていかかもしれないけど。でも友達は今も男女も一緒だしね。男の子の友達も別の面であなただけを助けてくれるかもしれないわよ。」

「だいたいけど…。あいつらが助けてくれるかなあ？（苦笑）」

「そうそう。それでね、とりあえず思いついたものを揃えてるんだけど、今度生理になったときのナプキンね。それとサニタリーシート。使い方は後で教えてあげるから。生理痛のお薬はとりあえず病院でもらっているものを当分使いましょう。」

「次はいつくらいなんだっけ？」

「うーん…。一応28日くらいを周期にしておけばいいと思うけど、始まったばかりのときは多少不規則だったりしてもしょうがないしね。手帳か何かで生理日をチェックしておいたほうがいいわよ。そうすれば次の生理日はある程度わかってくるから。祥子先生もそういうの言ってたでしょ？」

「うん。そうだね。」

そしてしばらくして悟も帰ってきた。

「凜ちゃん、今日学校行ったんだ？」

「うん。行った、行った。」

「どうだった？ ちゃんと行けた？」

「わりとフツーだったヨ。少しびっくりしちゃった（笑）」

「じゃあ、よかったじゃん。」

悟は本当に優しい子。これからは姉として、もう少し優しくしてやろうかな（笑）

7時過ぎに父親も仕事から帰ってきて夕食。

父親は学校でのことをあまり深くは聞こうとしなかった。

ただこれは後で母親から聞いた話だけど、父親がその日本屋で買ったきたものは

「娘との付き合い方」

だったらしい！（爆笑）

第九話 2回目の生理

その日の夜

久美ちゃんから電話があつた。

「凜、今日学校行つたんでしょ？ どう？ だいじょうぶだった？」

久美ちゃんはもうボクのことを凜としか呼ばない。

- - - - -

ボクが久美ちゃんと知り合つたのは幼稚園のときだった。

ボクはその頃けっこう内向的でときどき幼稚園へ行くのを嫌がつてたりした。だから園内にもあまり遊べる友達も少なかった。それに対して久美ちゃんはわりと社交的で友達の数も多く、彼女の周りはいつも多く、友達が集まっていたんだ。

ある日幼稚園でひとり砂場で砂のお城を作っていたボクの横に久美ちゃんがチヨコンとしゃがんで、そしてこう言った。

「久美も一緒にこのお城に住んでいい？」

ボクはそんな優しい久美ちゃんにぼつんと一言だけ返した。

ボクは今日あったことを久美ちゃんに順番に報告した。

「今まであんまり、っていうかほとんど話したことなかった子なんだけどね、藤本さんって子と友達になれたんだ。あと藤本さんと仲がいい久保田さんと奥井さんとも。」

「へえー！よかったねえ！藤本さんってあのすごい頭よくって可愛い子でしょ？ あの子って凜と同じクラスだったんだね？」

「うん。そう。男子の間でやっぱりすごい人気あるよ。」

「あたしね、あの子と1年のとき同じクラスだったんだよ。本当にすごい子だし、よかったねえ！」

ボクはあえて久美ちゃんに何も聞かなかった。

久美ちゃんもあえてボクに話さなかったのだろう。

でもきつと久美ちゃんが藤本さんをお願いしてくれたんだって思ってる。

.....

それから1週間はまるで駆け足をしているように過ぎ去って行った。そうした中でのちょうど月曜日、ボクに2度目の生理がくる。

ボクは前に母親に言われたように、生徒手帳のカレンダーを使って生理日と予定日のチェックをつけていた。ちょうどそれは土曜日に

あたっていたので、ボクは金曜日の日からサニタリーショーツにナプキンを着けて一応の準備をしていた。しかし土曜日には来ず、日曜日にも変化なしだったところに月曜日の朝、ボクに2度目の生理が来た。

朝起きると股間に少し湿った感じがあった。

ショーツを下ろしてみると、やっぱりナプキンには血がついていた。

(うわあああ~~~~~……。)

まだ痛みはそれほどない。生理初日は量も少ない。これが2日目に入ってくると、下り物が自分の下腹部から浸って降りてくる感触がわかる。

初めての生理のときはこの感触で気分が ドヨ~~~~ン

だったから。

「多少の痛みがあってもあんまり薬に頼らないようにね。」

ボクは祥子先生からこう言われている。

その代わりに、どうしても辛いときの方法をいくつか教えてもらった。夏場暑い日もあまりクーラーを強くしないこと。女性の体は冷えを敏感に感じやすい。それと濡れタオルをビニール袋に包んで電子レンジで暖める。そしてベッドに横になってそれを下腹部に乗せてリラックス。後で聞いた話だけど、この方法は久美ちゃんもときどきやっていると言っていた。

それでもとにかく準備をして制服に着替えて下の階の食堂に行く。
まだ悟は来ていない。

(よかったあ！)

そしてキッチンで朝ごはんの準備をする母親に小さな声で

「あのね、今、2回目の…来たから…」

とだけ告げた。

母親はお味噌汁を入れたナベの火を止め

「あら。だいじょうぶ？自分でちゃんとできる？」

とやはり小声で聞いてくる。

「うん。一応ナプキンも予備に何枚か持ったし、ショーツも1枚替えのを持っただから。」

「そう？じゃあ、学校でどうしても困ったらちゃんと保健室に行くようにね」

「うん。わかったあ。」

ボクは朝ごはんを済ませて家を出た。

1度目の生理は準備どころか予想すらしないものだった。2度目の

生理はちゃんと準備したけど、それでもボクにとってはまだ大きな不安だった。

第十話 あっち側からこっち側

翌日の火曜日は生理2日目。

朝起きると昨日より量が多くなり、初潮のときよりは酷くはないが少し下腹部がチクチクするように痛む気がする。ボクは昨日の晩母親に相談して体育の見学届を書いてもらい、それを朝授業の前に職員室に行って女子体育の沢口先生に提出した。

「はい、わかったわ。じゃあ今日は体育館でバスケットをやる予定だから、コートの横で見えていて頂戴。」

あ、小谷さんは今回が2回目の生理だったわよね？ 今痛みはどう？

「少し痛むけど、でも気にしないようにしています。」

「そうね。無理に我慢するのは良くないけど、気にしすぎてナーバスになっちゃうと気分がめいるだけだから」

「はい、わかりました。じゃあ、すみませんが、今日の体育は見学をお願いします。」

.....

2 時間目の体育の時間

体育の授業は隣のC組と合同でやり、男子と女子でそれぞれ先生が別にいて分かれて実施する。

男子はD組の教室に集まって体操着に着替え、女子はC組の教室で着替える。

ボクは見学なので体操着に着替える必要はなかったが、D組の教室にいれば周りの男子は着替え始めてしまうので、まさかすでに女子のボクがそこにいるわけにはいかない。

ボクもミコたちと一緒にC組の教室に移動して空いている椅子に座って他の子たちが着替えるのを待った。

自分の裸もいい加減見飽きて、他の女子が着替えていてももう何も感じない。

フツと気がつくと、ボクの他にも女子クラス委員長の井川さんが着替えをせずやはり空いていた椅子に座って本を読んでいた。

今日は女子、男子ともそれぞれバスケットだった。着替えが終わった人から体育館に移動してボールの準備をする。ボクはミコたちと分かれ、体育館の隅にいくつか並んでいたパイプ椅子をコート横の邪魔にならない場所に持ってきて座った。

すると井川さんが同じようにパイプ椅子を抱えてボクの隣に来た。

「小谷さん、一緒にいい？」

「あ、うん。もちろんどうぞ。」

「小谷さんも生理で？」

「あ…うん。」

「気をつかないでもいいよお（笑） 女同士なんだし不安なところはお互い相談しようよ。」

「そうだね、うん。」

男女それぞれで準備体操が終わりボールパスの練習などが始まった。

ボクは左側のコートにいる男子たちにフツと目を移してそれを遠い目で見ていた。

「小谷さん？」

「え？」

「男子の方が気になっちゃう？」

「あ、うん。そういうんじゃないんだけど…。」

なんかさ…ちょっと不思議な気分なの。」

「不思議？」

「うん。なんか、そんな大したことじゃないんだけど、夏休みの前

にはボクは、あ、じゃなくってアタシは…。」

「ふふ…まだ慣れないね（笑） それで？」

「うん。アタシはあっち側（男子）からこっち側（女子）を見てたんだよね。」

でも、今は逆にこっちからあっちを見てるんだなって思うとなんかすごく不思議な気分で…。」

「あ、うん。なんとなくわかるよお。まあさ、小谷さんは本当はこっち側にいるべき人なんだからって言っても…あんまり説得力ないよね（笑） でも、アタシは小谷さんとかうやって話できるようになったってぜんぜん違和感感じないよ。」

「本当？だつたら嬉しいな。」

「ね、これからも機会があつたらいろんなこと話そう？」

「うん！こちらこそよろしく。」

「藤本さんたちと仲良くなったみたいでよかったね。」

「うん。ミコたちが話しかけてくれたときなんか安心できたの。」

あのね、手術が終わって初めて登校してきたとき、井川さんが「小谷さん、席に座ろう？」って言うてくれたときもすごく嬉しかったんだあ。みんなより少し遅れちゃったけど、これから女の子の友達もたくさん出来たらいいなって思った。」

「うん。そうだねえ。本当にほんの少し遅れただけだよ。」

これから、これから！」

ボクと井川さんはそんな話で盛り上がっていると、女子のバスケの試合がひと段落したようで、ミコと奈央、久保ちゃんがボクらのところにやって来た。

ミコはバスケで火照った顔で

「ね、あつちで男子が最後にクラス選抜で試合するんだって！見に行こうよ！？」

とボクと井川さんを誘った。

井川さんは立ち上がってボクの手を取った。

「わあ！行こう！さあ、小谷さん！」

「うん！」

他にも女子の多くが男子コートの方に集まって試合の始まりを待っていた。

「加藤くんっ！ ファイトッ！」

「高木くんっ！ がんばってっ！！」

C、D組で女子の評判が高い男子の名前が叫ばれる。

ボクもかつては仲間だったやつらの名前を叫んでやるか？（笑）

メンバーが決まると身長が高い安田とバスケット部にも入っている工藤がその中に入ったのがわかった。

ミコがボクのほつぺたを突いてこう言う。

「凜、仲良かった男子に声かけてやりなよ！」

「えっ！恥ずかしいよお！ あいつらだって迷惑かもしれないし……。」

「だいじょうぶだってえ！ きつと喜ぶよ。」

「ん~~~~~……。」

「さあ！試合始まっちゃうよ?。」

（よっし！ボクは覚悟を決めた！）

「安田あー！、工藤おーっ！がんばれえー！」

すると2人はクルツとボクのほうを振り返り

「オーーッッ!」

と氣勢をあげた。

ピイイーーーーーッッ!!

主審のホイッスルで試合が始まった。

男子同士が体をぶつけ合ってボールを奪い合う。

ダンッ!ダンッ!ダンッ!

ボールをバウンドさせる音が体育館の中で反響し響く。

「こっち!パスッ!」

「オウッ!」

「イケッ!そのままイケッ!」

バンッ!!!! ピイイーーーーッッ!!!!

「きゃあああーーーーーっっ!!!!」

ボールが自分のクラスのゴールに入ると一斉にそのクラスの女の子たちの黄色い声があがる。

(すごいっ！すごいっ！ぜんぜん迫力が違う！)

あっ！工藤がボールを取ったっ！

工藤はそのまま何回かのドリブルを繰り返してゴールに進み

ジャンプシュートツッ！

ボールはゴールのリングにワンバウンドした後

入ったっっ！

「きゃあああー！ー！ー！ツッ！！やったああー！ー！っっ！！！！」

無意識にあがったボクの声。

工藤はボクのほうを向いてちょっと大げさなガッツポーズを取った

(笑)

第十一話 受験生スタート！

4月、春だ。

ボクは中学3年生。

あれから髪の毛の長さも随分伸びて今では肩の少し下くらいでミコより長めになっている。

10月ごろからは胸の膨らみもはっきりわかるようになってきて、今ではブラジャーもつけるようになっていた。また腰周りや肩つきも体全体が丸みを帯びてきて、女性らしさがはっきりしてきたと病院でも言われた。

そしてボクはいよいよ高校受験を考えねばならない学年に来了。

うちの学校では2年生から3年生へはそのまま持ち上がるためクラス替えがない。だからミコや奈央、久保ちゃんそして井川さんといった2年生のときに仲良くなれた女子メンバーともそのまま同じクラスのままだ。これはボクにとっても嬉しかったことだった。

ボクは最近では特にミコと仲良くなって、土曜日の午後や日曜日祭日などには2人で図書館に行き一緒に勉強したり、そして勉強が終わると夕方まで街をぶらついたりということが多かった。

今日（祭日）もボクはミコと近所の図書館で勉強をした後、こうして2人でクレープ屋の横のベンチに座りチョコバナナクレープを食べている。ボクは元々甘い物好きだったので、こうやって彼女に付き合うことは全然苦にならないしボクも楽しい。

「ねえ、凜は高校はどこ受けるかとかって考えてるの？」

クレープを頬張るボクにミコが突然聞いてきた。

「うーん……。一応都立の白洋高校あたりに行けたらって思ってるんだけど、私立はまだ考えてないなあ……」。

できれば共学がいいなって思ってるけどね。

ミコはどうか行きたい高校ってあるの？」

「凜も共学のほうがいいんだ？　じつはアタシもなんだあ。」

ね、じゃあさあ、青葉学院高等部一緒に受けない？」

「えーっ！　青葉あ！　無理だよお、アタシには（笑）」

青葉学院高等部は渋谷にあるキリスト教系の青葉学院大学の共学付属校で希望すればほぼ全員が大学に内部進学できる学校だ。青葉学院大学は私立大学では早稲川大学や慶光大学に準じるランクの大学で、かなりレベルは高く人気がある。その付属校なので青葉学院高等部も必然的にかなりレベルが高くなるわけだ。

「でもさあ、あの高校ってぎりぎりの可能性でも偏差値70以上あるじゃん？　ミコは行けるかもしれないけど、アタシはかなり無理っぽい気がするヨ？」

するとミコはクレープを口から離して急に力説し始めた。

「えーっ！そんなことないよお！ 凜だってかなり成績いいじゃん。学年で30番以内には絶対入ってるよ。」

「うーん…。」

ボクも自分自身でそれほど悪い成績とは思ってないけど…。

たしか中2の終りあたりでやった模試では5教科偏差値64だった。私立校受験の英数国3教科の偏差値だと66。それに最近なぜかわからないけど、暗記力とか思考力みたいのがびっくりするくらい上がってきた気がするんだ。

ちよつと前に祥子先生にそのことを話したら、

「はっきりしたことはわからないけど、もしかしたらホルモンバランスの正常化の影響で脳内のニューロンの密度が濃くなったのかも」というようなことを言われた。

ちなみにミコに見せてもらった結果表では、ミコは5教科で70、3教科だと72、もうすごいんだよねえ…。

「これから一生懸命頑張れば凜も受かるかもしれないよ。ね、一緒に青葉受けようよお？」

「そつだねえ…。まあ、受かるかどうか別としても一生懸命勉強した分は他の高校の合格にもつながるしね。目標は高いほうが張

り合いあるし（笑）」

「じゃあ、決まりねっ！高校は一緒に青葉に行こう！」

「じゃ、お互いがんばろーっ！」

「オーっ！」

ボクとミコはお互いの右手を合わせて上に高く上げた。

（あれ？　そういえば青葉学院っていえば、たしか病院で最初同室だった芦田さんって青葉学院大学って言ってたよね……。）

（まあ、でも同じ学校でも高校と大学だからきつと会う機会もないよね。）

ボクは入院したばかりのときは大学生の芦田さんと松原さんというおじさんと一緒に部屋だった。その後病院や親との話し合いの中で本来の女性に戻ることを決めて手術が終わって以降はボクは女性部屋のほうに移された。

松原さんは僕の手術前に退院してたのだが、芦田さんにはボクは自分の入院の理由やこれからのことおをちゃんと話した。芦田さんはボクの話聞いて、ボクが自分自身で決めたことに賛成してくれたんだ。それから入院中、院内でときどき芦田さんと会ったりすると、芦田さんはボクにジューズを奢ってくれたりして休憩室で2人で色々な話をした。本当に優しい瞳で中学生の僕の話でもきちんと聞いてくれて一生懸命答えてくれる。

やっぱり、大人だなあ……って思ったんだよね。

そんなことをチラッと考えていたら

「それでさあ、凜は今週の土曜日なんだけど、なんか予定ある？」

「土曜日？ ううん、別に何もなし。」

「じゃあさ、学校終わって午後から青葉に見学に行ってみない？」

「うん、いいけど。でも、入れるのかな？」

「大丈夫でしょ。この学校を希望してる中学生で見学させてくださいって言えば、ダメって言うことはいわないと思うよ。」

「じゃあ、行ってみようか。ミコは場所わかる？」

「あ、じゃあアタシ、パソコンで場所とか色々調べてみるよ。」

.....

そしてその週の土曜日。

ボクらの学校では隔週で土曜日は登校日になっていて午前中だけ授業がある。授業が終わるとボクとミコは家に戻らず制服のまま歩いて近くの駅に向かった。制服のままのほうが中学生で学校見学に来たことがはっきりわかるだろうと思ったからだ。

ボクらの住む町は東京といっても住宅街で比較的ノンビリした雰囲気のところだった。渋谷には今まで何回か来たことはあったけど、相変わらずものすごい人並みで、ボクらは複雑な渋谷駅の中を方面を書いた看板を頼りにして歩き回った。

渋谷駅東口を出て「クロスタワー」という白い高層ビルを目印にして青葉通りを歩いていく。

するとそこを通り過ぎたあたりに向こうの方角からこちら側に男女の高校生がたくさん歩いてきた。

「あ、あれって青葉の高校生じゃない？」

ミコが指をさして言った。

「うん。多分そうだよね。」

ボクとミコは女生徒の制服に注目する。ブラウスやシャツに紺のカ―デイガン。肩に青葉学院の校章が誇らしげに刺繍してある。そしてそれぞれ違った色のカラフルなプリーツスカート。この学校の女子はプリーツスカートであればデザインや色はわりと自由らしい。見た感じではスカートはわりと短めの人が多いようだ。

この学校はオシャレでもかなり有名だそうで、都内の高校のイメージリーダーとまで言われるそうだ。そのせいか歩いて人たちは高校生なのにみんなオシャレに見えた。

「うわぁ！すごいねえ！なんかカッコいい……。」

ミコがため息を吐くように言った。

ボクも

「うん、びつくり。アタシたちなんて紺のジャンパースカートにボレロだもんねえ…。」

と自分たちとのあまりに違いに打ちひしがれる。

「まあアタシたちも1年後あなれると期待して、行こう！」

「OK！」

と再び歩き出す。

しばらくすると大きな正門前に辿り着く。

門柱の左右には「青葉学院」と「大学」とそれぞれ書いてある。

「ミコ、これってもしかして大学の正門なんじゃない？」

「みたいだねえ。じゃあ、高等部はどこから入るんだろう？」

ボクたちは正門から学校の中を覗き込んだ。

キャンパスの中は、正門からまっすぐ奥のほうに大きな並木道が続いている。

「ハア…。ステキだねえ…。」

「うん。アタシたちもしこの高校に受かったら大学でここに通え

るのかなあ？」

「多分そうじゃない？」

「行きたいねえ…。」

「うん…。」

青葉の高校生らしき数人が奥のほうから歩いてきたけど、ボクたちは中学生がここから入っていいものかわからず、2人でボーっとして眺めているだけだった。

そのときフツと見ると、どこかで見たようなこの大学生らしき男の人がこっちの方に歩いてくる。

（あれ？）

すれ違った瞬間ボクは

「あ、芦田さん？」

と少し大きな声をあげてしまった。

その人は

「えー!?」という感じでこちらを振り返った。

「あれ？もしかして凜ちゃん？」

「うん！おひさしぶりです。」

びっくりした。まさか会えるって思ってなかったし。

「だれ？」

ミコがボクの肩を小突いて聞く。

「あ、アタシが入院してたとき一緒に病院に入院してた人なの。」

芦田さんは

「うわぁー！びっくりしたぁ！髪も長くなっちゃって。すっかり女の子らしくなっちゃったんだね！あつと、あ…えつと…。」

「あ、大丈夫です。学校は前のとこにそのまま通っててみんなにもちゃんと理由を説明してあるんです。」

「そっか。ならよかった。」

芦田さんは相変わらず優しそうな笑顔を浮かべてそう言った。

「そっだ！ 芦田さんは青葉の大学生なんですよね？」

「うん。そっだよ。今年2年生。凜ちゃんたちは今日はここになんか用事があったの？」

「用事っていうか、じつはアタシたち今年高校受験なんです。それで青葉の高等部を受けたいなって思って。今日は学校が終わったあと友達と一緒に見学に来たんです。」

「そうなんだあ。あ、はじめまして。芦田っていいいます。」

芦田さんがミコの方を向いて挨拶する。

ミコもぺこりと

「はじめまして。凜と同じクラスで藤本といいます。」

ボクは芦田さんに尋ねた。

「それでね、ずっと大通りを歩いてきて、そしたら大きな正門の前に出て。そこから高校生も出てきたんだけど、高校ってどこにあるかわかります？」

「ああ、うちの学校は同じ敷地の中に幼稚園から大学まで一緒にあるんだよ。高等部の正門は本当は大学の正門まで来る前の角を右に曲がって塀伝いにしばらく歩いて行ったところにあるんだ。

でも敷地がつながってるから高等部の生徒も大学のほうから出てきたりするけどね。」

「そうなんだあ。だからあんなに高校生が大学の中を歩いてたんですねー。」

「うん。そういうこと。でもせっかくだからこっちから行ってみれば？ それで帰りは高等部の正門から出てくれば一粒で二度美味しいよ？」（笑）

「たしかにそうですね（笑）」

そのときボクの横にミコが突然

「あ、あの…。」

と芦田さんに。

芦田さんはミコの方を見て

「うん。何？」と聞く。

「アタシたち、こういう場所よくわかんなくて。もし青葉に受かったら、大学も青葉に來たいなって思ってた…。それで…」

「うん？」

「それでねっ！芦田さんが迷惑じゃなかったら、案内してくださいったら嬉しいなってっ！…思ってた…その…ダメ…ですか？」

「あはは、なんだ、そんなことが。オレでよかったらいいよ。今日は授業があつて、この後べつに何も用事ないし。」

「ホントですか！ わあい！ よかったねー！凜。」

ミコ…アンタ、ボクをダシにしちゃダメでしょ（笑）

「じゃあ、まずは大学のキャンパスから順番に歩いてみようか。」

「はい！」

ミコが嬉しそうに答える。

芦田さんは今度はボクたちを連れて来た並木道を戻りながら立ち並ぶ校舎を順番に説明してくれた。

「わぁーっ！すごい古そうな建物！」

「体育館、すごい大きい！うちの学校の体育館の何倍あるんだろ！？」

見るたびに驚きの声をあげるボクたち。

「さあ、ここが学生食堂。外の店で食べるよりずっと安く食べられるんだよ。」

入口あたりにメニューのディスプレイがある。

「スゴイ！凜、見て！こんなにいっぱい種類があるよ！」

「わぁーっ！ ホントだ！すごいねえ。これだったら3週間くらい毎日別のもの食べられそうじゃない？」

「そうだよねえ！あ、ソフトクリームとかデザートもあるんだね！」

「ホントだあ！」

一々驚きの声をあげてしまうボクら（笑）

芦田さんはそんなボクたちに

「じゃあ、今日の見学の記念にボクから凜ちゃんとミコちゃんにソフトクリームでも奢るよ。どれがいい？」

ボクもミコも大喜び

「わあい！ありがとうございます。」

ボクは日替わりのメロン味、ミコはチョコを注文して、それをキャンパスの広場にあるベンチに座って食べた。

芦田さんはボクたちに丁寧にキャンパスの中を案内してくれ、その後高等部の校舎まで連れてってくれた。

「じゃあ、また何かあったら連絡してな。2人ともこの学校に受かって来年の4月にキャンパスの中で会えるように。頑張れよっ！」

「はい。今日は本当にありがとう。」

また大学のキャンパスの方に歩いていった芦田さんをミコはしばらくその場で手を振って見送っていた。

帰りの電車の中

「ねえ、凜？」

「うん？なに？」

「あのさあ…。」

「うん？」

「大学生から見たら・・・中学生なんて問題外なのかなあ？」

「あ…、ミコ」

「来年アタシたち高1じゃん？ それで大学3年生だと5歳上かあ…。やっぱり子供って相手にしてくれないのかなあ…。」

（そっかあ…。ミコ…。）

ボクはミコのほづを見て言った。

「でもさあ、アタシたちが大学1年で18歳になったら23歳じゃん？ それくらいの年の差で恋人同士ってけっこういると思うよ。」

「そう思う？」

「うん。思う。芦田さんもさっきミコのことすごくいい子だって言ってたよ。」

「ホントに！？」

「うん。ホント。」

「また会えるかなあ…。」

「会えるよお。携帯の番号だって教えてくれたし。青葉に受かったらきつと会えると思うよ。」

「凜っ！青葉、絶対に一緒に受かるっねっ！」

ミロはボクの手を握り締めて言った。

第十二話 男友達たちの変化

家に帰って母親に青葉のキャンパスで芦田さんに会ったことを話した。母親もボクが病院に入院している間に何回か芦田さんに会ったことがある。

「そうなんだあ！すごい偶然だね。でも、お母さんも芦田さんはとってもいい感じの人だって思ったわよ。優しそうだし、それに年齢のわりに大人っぽい雰囲気があるよね。」

「そうそう！やっぱりそう思うでしょ？」

でもミコが芦田さんに一目ぼれしてしまったことはさすがに話さなかった。

「で、凜は青葉学院を受けたいの？ あそこは昔からかなり難しい学校よ。」

「うーん…。まあ、今のアタシの学力だとやっぱりかなり難しいっていうのはわかってる。でも、ミコと今日学校見に行ってるね、ステキだなあって思って。それで一生懸命頑張ってもし入れたらいいなあ…って思ったの。」

「そっかあ。うん、あの学校は確かにステキだね。だから憧れる人がすごく多いのよ。」

あ、ねえ？ だったらさ、凜が本当に一生懸命頑張るつもりがあるんなら、家庭教師付けてみたらどうかなあ？ お母さんがお父さんをお願いしてあげるから。」

「家庭教師かあ…。やっぱりマン・ツー・マンのほうで成績つてあがるのかなあ。」

「お母さんはそのほうがいいと思うよ。それとやっぱり進学塾にも行かないと全体の中の自分の位置がわからないから、それも合わせて必要だと思っけどね。」

うちの父親は都内でスーパーマーケットを5つとコンビニを10店経営している。ものすごくお金持ちというわけではないけど、比較的裕福な家庭だとは思っ。だから家庭教師とかはボクが望めばきつと用意してくれるだろう。

それから1週間ほどして家庭教師会から数人の履歴書を送ってきた。条件としていくつかあげたが、まず女性の先生であること、そして年齢はあまり近すぎないこと（ボクがお姉さん気分で甘えてしまわないように）、それと学生のアルバイトではなくプロの家庭教師であることだった。

その中からボクとうちの親が選んだのは、加山弓美さんという人だった。履歴書によると、加山さんは28歳。都内の女子進学校NO1の桜園女子高卒で東京大学教養学部出身。中学校の英語の教員資格を持っているそうだ。

写真を見るとやっぱり頭良さそうな感じがするけど、かなり美人。今まで家庭教師の経験は8年間で、国立大附属高校や桜園や慶光女

子、青葉学院、都立日比野などに合格させてきた実績がある。

その週の土曜日の夕方、加山先生が初めてボクの家を訪ねてきた。

写真で見るとよりさらに美人。でも言葉遣いがとても丁寧で綺麗。だからすごく感じの良い先生だった。

応接間で加山先生とボク、そして母親がこれからのことを話す。

「それでは、今回は（加山）先生に是非お願いしたいと思うのですが、いかがでしょうか？」

うちの母親が加山先生に決めた旨を伝えると、先生も

「ありがとうございます。こちらこそ是非よろしくお願いします。全力で凛さんの学力をあげるために頑張りますので、凛さんも頑張ってください。絶対に青葉に受かりましょうね。」

「よろしくお願いします。」

そして加山先生はコーヒ-を一口飲んで

「ところで、凛さんの模試の成績と解答用紙を拝見させていただきましたが、基礎はある程度しっかりしているように感じます。ただ多くの難関校でそうですが、青葉でも問題自体が手が出ないほど難問というのは一部で、全体のうち相当部分が基礎問題が中心で構成されているんです。」

ただし基礎問題といってもそれ単体で出るわけではなく、いくつかの基礎問題が複雑に絡み合っ出て出題される傾向があります。だから

相当しっかりした基礎力がないと合格レベルに持っていくことは厳しいわけです。

たとえば、国語なんかは一見すると点数に差がでにくいような科目で、小学生の延長線で感覚的に解いてしまっている人が多いのですが、本当は国語にも数学や英語と同じように一定の規則性や理由があるんです。そういったものをしっかり身につけると実際の入試のときはやはり合計点ですから相当のアドバンテージになるんです。

したがって、これからはまず10月までは基礎力を徹底的に身に付けさせて、それから3ヶ月で応用レベルまで強化したいと思っています。

「すごいね。そういうことまでわかってちゃうんだ。なんかすごく頼もしい…。」

話し合いの結果、加山先生には月・水の夕方5時から8時まで。

それと土曜日の午後3時から8時までで、英語・数学・国語の3教科をお願いすることにした。

翌週の月曜日の昼休み時間、ボクは学校で家庭教師のことをミコに話した。

「よかった。凜、本気になってくれて。凜ってすごく勘がいいし、しっかりやればきつとすごく成績伸びるはずだよ。絶対2人で青葉

に行こうね?」

「うん!アタシも頑張るよ。あのキャンパスでまたソフトクリーム奢ってもらおうよ。」

「そ、そうだね。う、うん。頑張ろうね!」

なぜかミコはどもり気味に答える。

きつとミコは芦田さんのいる青葉のキャンパスを今夢見ているんだろ。

「あ!忘れてた。アタシ今日日直だから次の授業の教材準備しなくちゃ! ちよつと職員室行ってくる。」

今日は男子日直の西野が休みなので女子日直のボクだけでプリントや教材を持ってこなければならぬ。

ボクは1階の職員室まで行って社会の先生から必要な教材一式を受け取った。

今日はたまたまプリントの枚数がかかり多く、その上わりと大きな地図を丸めたものまで持たされたためボクは両手がふさがって注意して歩かなければならなかった。

そんなとき、1階から2階へ階段を登ろうとすると踊り場のところでちょうど校庭でサッカーをして帰ってきた安田と工藤にばっかり会った。

「あれ、小谷さん。日直準備?」

「そんなたくさん一人で持ってきたの？　だったら手伝うから。ほら？」

ボクはどうも不思議だった。

昔はボクは「哲ちゃん」と呼び一緒に遊んできたやつらだ。ボクが女として生活するようになって、彼らもボクを女子の一人として見るようになった。それでも、他の女子がいないときは時々は昔のように「哲ちゃん」とボクを呼び、馬鹿話をしたりもしていた。

それが工藤と安田はとくに先週あたりから急にボクのことを「小谷さん」なんて呼ぶようになって、妙に優しくなったりして。

なんでだろう…。

ボクは思い切って彼らに聞いてみた。

「ねえ、なんかキミたちってなんか最近アタシにすごく優しいよね？　急に「小谷さん」なんてサン付けするしさ。なんかあったの？」

すると安田は妙に言葉がどもり視線が宙を漂う。

「あ、いや。別になんでもないんだけどさ、ただ…。」

「ただ？　なにヨ？」

ボクはさらにしつこく聞く。

「うーん…なんて言うのかな？」

小谷さんはやっぱり女の子なんだなって実感したら、オレたちが助けてやれるところがあつたら助けてやらなくちゃって思ってた。」

「? …よくわかんない。もうちょっと詳しく説明して?」

「だからさあ…。ほら、この前の第三小学校と一緒に合同発表会のときのこと。」

「え?なんかあつたっけ?」

「言いくいなあ…。…なあ?工藤」

「だからさあ、あるとき、ほら?小谷さんのスカートがさあ…。ほら?」

ああああっ!!思い出したっ!!

うわあああーっ!!

あっ!!忘れようにも忘れられない。でもボクは一生懸命忘れようと努力していた。もう少して忘れかかっていたのにいーっ!!

.....

「その日、うちの中学校とすぐ近くにある第三小学校がうちの中学の校舎と体育館を使って合同文化発表会を開催していた。」

ボクは実行委員のひとりで、お昼前に先生方や来賓の方たちの飲み物を手配する役目があった。それで同じ役割のグループだった安田と工藤、そしてそのグループの顧問だった清水先生（男性）と体育館会場の隅で立ったまま打合せをしていたんだ。

ボク「一応緑茶とウーロン茶のブリックパックを合計で5ケース用意しましたけど。」

先生「そうか。内訳はどうなってるんだい？」

ボク「先生方のお弁当は和食だから緑茶の方を3ケースにしました。ウーロン茶は2ケースです。」

安「どこで配ればいいんだろう？ それともお弁当の横に纏めて置いて好きなのを取ってもらおうとか？」

工「でもそれだとウーロン茶が余って緑茶が足りなくなるかもしれないぜ？」

先生「うーん、そうだなあ…。」

そんな話を4人でしていると、近くに小学3、4年生くらいのガキンチョが数人たむろして騒いでいた。

ボクらはそんなのには大して気にせず話を続けていると、そのガキンチョのうちの2人がトットツとボクらのところに駆け寄ってきて、そのうち一人がボクに向かって

「ねえ、お姉ちゃん？ あのさあ…。」

と話しかけてきた。

ボクは中学生らしくあらん限りの優しい笑顔を作って

「あ、ごめんね。お姉ちゃんたち今お話中だから、ちょっとだけ待っててもらっていいかなあ？」

と言って話を続けた。

するとっ！

その2人のガキンチョは急に声を揃えて

「イツセーノッ」

と言い

そして「セツ！」

の合図を言った瞬間、ボクの前の視界から清水先生、安田そして工藤の姿が消え、なんとすぐ目の前に紺の布が広がった。

ボクは一瞬ボーゼンとなった。

(えっ!?!なに?どーなったの!?)

なんとそれはボクの制服のスカートだったんだ。

コイツらは驚いたことに2人がかりでボクのスカートを上までバクッ!と捲り上げたんだっ!!

「キヤアアアアアーーーーーッッ！！！！」

耳を裂く様な叫び声をあげ、ボクは両手でスカートを必死に押えてその場にしゃがみこんだ。

周りにいた人たちが一斉にボクの方を振り返る。

するとスカート捲りのガキどもは一斉にその場を逃げ出しやがったっ！

「ほら、やっぱりオレの言ったとおりピンクだったろ？」

「クソーツ！大人しそうな顔だったから絶対白だって思ったんだけどなあ！」

「オレの一人勝ちだね！ケーーーーッケッケッケッ！！」

（くそおおおーーーーっ！ あのガキどもボクのパンツの色で賭けをしてやがったのかっ！）

体育館の床にしゃがみこんでスカートを押えているボク。

（み、み、みられたああ~~~~っ！！男にパンツ見られたああ~~~~っ！！）

そしてボクは今までボクの目の前で一緒に話していた3人（清水先生、安田、工藤）の顔を見上げる。

3人はまるで人形のように口をあけたままポケーッとした顔で立ち尽くしていた。

ボクは睨むように3人の顔を凝視する。

ジイイーーーーーッッ……。

すると

清水先生が

「オ、オ、オット！わ、忘れてたっ！先生、他に用事があったんだ。悪いな！じゃあ、お前らそういうことで後をよろしくお頼むからなっ！」

そう言っつて脱兎の如く早足でその場を去って行ってしまった。

ボクは残った安田と工藤の2人をさらに凝視する。

工藤は僕から目を逸らして宙を泳ぐような目で

「い、い、い、いや、安田、オ、オ、オレさあ、最近、ほら？受験勉強のやりすぎかなあ！視力がスゲー下がっちゃって！マジ！やっぱメガネかけないとダメかねえ！？」

すると安田も

「ああっ！オマエもかよっ！？オレもなんか1m前にあるのもボンヤリしちゃってさあっっ！！やっぱ慣れねー勉強なんてするもんじやねーよなっ！！！」

「ハハハ、ハハッ！まったくだぜっ！」

（嘘つけヨッ！）

（工藤！オマエ先週の健康診断で両目視力2・0だったろっ！？）

（安田！オマエ5m先からでも他の席の人の答案用紙の答え見えるぜっ！って豪語してただろっ！）

ボクは両手で顔を押えて

「モオツツ！ヤダアアーーーーッッッ！！」

と叫んだ。

うっすら涙が溢れてきた。

そこに他の場所で会場準備をしていたミコと井川さんがボクのとこに寄ってきてくれて

「どっしたの？凜、だいじょうぶ？」

と肩を抱いてくれた。

ボクはそのままミコと井川さんに連れられてトイレに行った。

.....

そのときのボクを見てしまった安田と工藤。

彼らはボクの女を確信し、そしてそのとき昔の男友達だったボクとの決別をしたのだそうだ。

第十三話 涉君パニック

いつも途中まで一緒に帰るミコたちがそれぞれ委員会の用事で遅くなるので、久しぶりに一人で帰ることになったある日の放課後。

ボクは正門のところでバツタリ幼馴染の久美ちゃんに会った。

「あ！久美ちゃん。」

「わあ！凜、久しぶりい！今日はミコたちは？」

「委員会の用事で遅くなるんだって。7月に3年生は受験で引退だから、今2年生に引継ぎをしているらしいよ。」

長めの髪をポニーテールに纏めた久美ちゃんと長めのボブカットを横に流したヘアスタイルのボク。

2人で並んで歩き始める。

「そうなんだあ。そっかあ、でもアタシたちもいよいよ中学卒業だよねえ。なんかさあ、この前中学に入学したみたいな感じあるけど（笑）」

「そうそう！アタシなんか小学校のときのことだってけっこう覚えてるんだヨ？（笑）」

「アハハ、アタシもだよ。小学校の頃はアタシらけっこうしょっちゅう一緒に遊んでたよね。」

「うん。5年生のときくらいまでは、一週間に3、4回は一緒に遊んだって記憶あるよ。」

「あ、そういえば、凧は覚えてる？ アタシと凧とあともつひとり。よく一緒に遊んだ子。」

「もつひとりって？えっと…。あ、もしかしてあの男の子？」

「そう。5年生の夏休み中に転校しちゃった、えっと…わたる渉君だった？」

「そうっ！ワタルッ！お父さんの転勤で大阪に転校しちゃったんだよね、たしか。」

「あの頃はクラスの男子の中で凧が2番目に背が小さくって、それでワタル君が一番小さかったんだよね。」

「そうだったよねえ。でも、アイツいつもすごい元気であ、あとすごい負けず嫌いでさ（笑）」

「そうそう！アハハ！いつかまた会ってみたいなあ。変わってないかなあ。」

久しぶりにゆっくり話せたボクと久美ちゃんの会話はすごい盛り上がった。

そしてちょうど商店街の途中

ボクらは向こうから歩いてくるひとりの背の高い男の子とすれ違った。

「あれ！？違ったらゴメンな。もしかして…久美ちゃんか？」

「え？」

久美ちゃんはその男の子の方を振り返る。

その人は身長は170？以上は絶対にあるそう。痩せていてサラッと流した髪型をしていた。

「久美ちゃんやろ？ 違ったか？」

「いえ、そうですけど…。」

「そうやろお！いやー、すごい偶然やなあ！」

ボクは久美ちゃんの脇を小突いて

「誰？久美ちゃんの知合い？」と聞く。

久美ちゃんは

「ううん。ぜんぜん知らない人。」とボクの耳に手を当てて小さな

声で囁く。

（もしかして、なんかのナンパとか…。カバンかどっかに久美ちやんの名前があつてそれを見て）

ボクと久美ちゃんは目を見合わせて怪訝そうな顔をした。

するとその人は

「やー、ボクのことわからんかな？ ホラ？小学5年生のとき転校した石川、石川涉や！」

その言葉にボクと久美ちゃんは声を揃えて

そしてその人を指差し

「アーーーーーッッ！！！」

その男の子はボクのほうを見て

「ん？ 久美ちゃんの友達かいな？ はじめまして、ボク、久美ちやんの小学校のときの友達で石川涉います。ヨロシクな。」

ボクはなんて答えたらいいかわからない。

「…ドゥモ」

「でも、ワタル君どうしたの？こんなところで。まさか親に勘当されて…とか？」

と久美ちゃんが聞く。

「そんなことあるかいつつ！（笑）」

いや、じつはな、おとーちゃんとの転勤でまた東京になってな。ボクもそれで戻ってきたネン。また前と同じ社宅に入るネンゾ。」

「えーっ！そうなんだあ。じゃあ、もしかして中学はアタシたちと同じところ？」

「そうなるな。この先の若松中やる？ さっきお母ちゃんと転校の手続に行って来てな。それでその後ボクだけ商店街の店でその中学の制服のボタンとか買ってきたところやネン。」

「そうなんだあ。でもワタル君すっかり関西人だねえ。なんかお笑いとか得意そう。」

「なにいつてんネンツ！ アホか！ ってか？ アハハ。」

「アハハハ！」

久美ちゃんとボクは声をあげて笑ってしまった。

「お、そういえば久美ちゃん？」

「なに？」

「哲は相変わらず元気か？　ホラ、覚えてないか？　小学校のときよく3人で遊んだやろ？」

小谷　哲！」

久美ちゃんは戸惑うように

「あ、ああ……。哲ちゃん？」

とだけ答える。

「うん。そうや、その哲や。　ボクなあ、転校するときアイツと約束したネン。絶対また会って一緒に釣りに行こうって。　アイツ元気か？」

「まあ……。そう……。ね。　元気ヨ。　うん。」

「なんやあ。そっけない返事やなあ。　もうあんまり付き合いがないんか？」

「いやあ……。そんなこともないけど……。」

ボクと久美ちゃんはお互いの目で無言のやり取り

オンナノコだけが持つてるウルトラエクセレンス（古っ！）

スーパーテレパシー

(凜、どうする?)

(どうせ後でわかつちゃうことだし、ボクはいいよ。今話そう。)

(うん、じゃあ…。)

この間わずか1秒。

ワタルはさらに懐かしそうに言う。

「いやー、アイツに会いたいなあ！会って今度こそ男同士で色んなこと語り合うネン。」

「そんなに哲ちゃんに会って話したい？」

「あつたりまえやがなっ！男同士でつもる話もあるねんぞあ！」

まあ、これを女の子の久美ちゃんに言ってもしょうがないがな(笑)

「

「だったら…話しなヨ？」

「お、哲と連絡とれるんか？わかった！今これから携帯で連絡してくれるんやろ？ありがたいなあ！」

「イエ…今、アナタの目の前に…。」

「ハア？ 今ボクの目の前って…久美ちゃんの友達のおネーちゃんしかおらんやんか。」

久美ちゃんはそれ以上無言

「……………」

そしてボクは小さな声で

「ヨッ。ワタル、ひさびさ。」

ワタルはキョトンとした顔で

「ハアアア??」

久美ちゃん

「ワタル君、驚かないでね？ あのね、この娘がじつは哲ちゃんなの。」

「ハイハイ????」

ワタルはボクに顔を近づけてシゲシゲと見る。

そして突然バツと離れ

「オオオオオッ！そういわれてみればどことなく哲の面影がつ！

ど、どーしたんネン？ 哲、オマエ、女の制服着て、その髪も、顔もっ！ 女そのものやんかああーっ！

哲、オマエ、オカマになっちゃったんか？ 最近よく聞く性同一性
なんか…とか？」

すると久美ちゃんは

「ちがーうっ！ 哲ちゃんをそんなへんなのと一緒にしないでっ！

じつは哲ちゃんは本当は生まれながらの女の子だったの！」

そう言っつて久美ちゃんは今までのことを一通りワタルに話した。

「なるほどなあ！ ってことは、つまり哲は本当は女の子で生まれ
てきたんだけど、ちょっとそのなんとかバランスで今まで男に間違
われていたってことかいな？」

「まあ、そういうことネ。 それで中2のときそれを正常化して本
来の女の子に戻ったってことなのヨ。

今は凜、小谷 凜って名前なの。」

「へえーっ！びっくりしたなあ！ 世の中ってそういうことってあ
るネンナ！？」

小谷 凜かあ。 うん。 わかった。 じゃあ、ボクも凜って呼ぶわ。」

「女同士だから凜って呼んでるのよ。 アンタは凜ちゃんってちゃん
を着けて呼びなさいっ！」

「...」

第十四話 幼馴染の意外！

次の日

朝のホームルーム。

山岸先生はボクらの教室にひとりの転校生を連れてきた。

「今日はこの教室に新しい仲間を迎えます。」

石川 涉^{わたる}君です。

はい、じゃあ石川君、挨拶してください。」

わあ、やっぱり！しかもボクのクラスとは…。

「えー、石川 涉^{わたる}います。大阪からやって来ましたが、元々はこっち出身で若松第一小に5年の途中までいました。だからここにも何人が知ってる人がいます。」

趣味はゲームとバスケットです。友達百人できるかなって気持でみんなと仲良くなりたいと思ってますんで、ドウゾよろしくお願いします。

見た目は身長170？以上、痩せ型でバスケットが得意、顔はそれぞれの趣味によるけど、一般的にはきつとカッコいいっていわれる部類

に入るんだろう。だから女子の間には当然期待が広がった。

「ね、なんか、けっこうカッコいくない？」

「なんかさ××になんとかく似てる？」

ヒソヒソ…ヒソヒソ…。

「えっと、じゃあとりあえず席を決めなくちゃね。藤本さんの隣の席が空いてるわね。じゃあ、石川君、とりあえずそこに座って頂戴。」

「はい。」

ミコの隣ということはボクの斜め後ろという位置。

ワタルは途中小学校時代に一緒だった安田に「おおっ、ひさしぶり！」と声をかける。

安田も嬉しそうに

「びつくりしたぜ。ワタルまた一緒に遊べるな。」と答えた。

そして次にボクの前を過ぎるとき

「なんや、凜ちゃんもこのクラスやったんやな。久美ちゃんはいないんか？」と聞いてきた。

「久美ちゃんはA組だよ。後で行って見たら？」

ボクの後ろの席のミコが僕の肩を突いて

「凜の知合い？」と聞いてきた。

「あ、うん。アタシと久美ちゃんの小学校ときの友達だったの。」

ボクは小さな声でミコに答えた。

するとワタルは目ざとくボクのその言葉を聞き逃さず

「冷たいなあ。友達だったって過去形にするなやあ。今も友達やで。」と笑ってミコの隣に座った。

ホームルームが終ると授業開始まで10分間の間がある。さっそくワタルの周りには人ばかり。

見ると安田とかの男のほかにも女子も何人が混ざってる。

（小学校時代ボクより小さくて『マメ蔵』って呼ばれてたのに、今はあんまに背伸びしちゃって…）

「ね、石川君って向こうの学校でサッカー部だったんだって。なんか地区大会とかまで出場したらしいよ。」

久保ちゃんが戻ってきてボクらに教えてくれた。

（へえ！それじゃ、モテるよね）

ミコは

「よろしく。藤本です。」と挨拶

するとワタルは

「おおっ、こらエライベツピンやな！　ワタルでええで。ヨロシク
「！」

と答えた。

ミコはその言葉にクスクスと笑う。

英語の先生が来て1時間目の授業が始まる。

「じゃあ、今日はこの前予告しておいた単元テストするからな。お
つと、今日転校して来た石川は、成績には反映させないから、でき
る範囲でやってみてくれ。」

「はい。わかりましたあ。」

ワタルはひょうひょうと返事をする。

ワタルは小学校時代は勉強なんて全然気にするようなヤツじゃなか
った。宿題を忘れることもしよつちゅう。どちらかといえば成績は
下から数えた方が早かったくらい。

テストは前の単元でやった文法を中心にしたもので、時間は40分。ボクは英語は元々割りと得意だったけど、家庭教師の加山先生の上手な教え方で、最近ぐっと成績が上がってきた。

テストが終わるとそれなりにできた気がした。

(ワタルは相変わらずだったのかな…。)

そう思いながら斜め後ろのワタルのほうをチラッと見ると、ヤツは気楽そうな顔で

「ん~~~~~!!」と背伸びをしていた。

先生は答案用紙を纏めて言った。

「よし、じゃあこれは今から採点して明日の英語の時間に返すからなあ。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

次の日の英語の時間

ボクはびっくりした。

「えー、100点は3人な。井川と藤本、それと石川。おい、石川オマエすごいな！転校早々たいしたもんだ。」

「マジかよ！石川すげーな！」

「勉強もできるんだあ！」

女子もさらに色めき立つ。

(うそお！あの勉強嫌いのワタルが！)

ボクは94点でクラスで5番目。

小学校時代はワタルに勉強で負けたことはなかったのに…。

背が高くてバスケットが得意。話もおもしろくて、さらに勉強もできる。

ワタル…キミってホントにあのときのワタルなの？

女子の間のワタル人気はさらに加速していった。

転校2日目にして、他のクラスの女子も何人かうちの教室を覗きに
来た。

「ほら、あの人じゃない？石川君って」

「え、マジ？カッコいいじゃん！」

そんな声が廊下から聞こえる。

「ふうん…大した人気だねえ？ワタル君？」

ボクは冷やかすようにワタルに言った。

ワタルはまたひょうひょうとした顔で答える。

「いや、勉強は相変わらず嫌いやで。」

ボクはこの言葉に多少ムツとする。

その日の放課後。

ボクが1階の下駄箱のところでもミコたちが掃除が終わって来るのを待っているところにワタルがやってきた。

「よお、凜ちゃんも今から帰り？誰か待っとんのか？」

「うん。ミコたちをね。」

「そっか。残念（笑）一緒に帰れると思ったのに。」

「ワタル君は、かなあ〜りモテてるご様子ですから、一緒に帰ったりしたら他の女子から怨まれそう（笑）」

「幼馴染やろ？ そんな切ないこと言うなやあ（笑）」

そう言いながらワタルが下駄箱から自分の靴を出そうとしたとき

「イッツッ！！」

端っこに出ていた釘に指を引っ掛けてしまった。

血がうつすらにじんでくる。

ワタルは自分の指を啜えながら、

「まあ、たいしたことないワイ。」と言った。

ボクはカバンの中からポーチを取り出した。

「お勉強とスポーツは得意になったみたいだけど、相変わらずキミはそそっかしいネ？ワタル君（笑）」

はい、指出して？そのままにしておくとかばい菌入っちゃっヨ？」

ポーチの中からバンドエイドを一枚取り出して促すとワタルは黙って傷ついた指をボクの前に出す。

ボクは傷の箇所それを貼り付けた。

「はい、これでOK。こつという傷は馬鹿にすると化膿しちゃうから、家に帰ったらちゃんと消毒するんだヨ？」

ワタルはなぜかボクからチラツと目を逸らして

「お、おお……。サンキユな。」とだけ答えた。

第十五話 夏休み前

次の日

教室に行くとワタル君はもうすでに来ていて椅子に座っていた。

「おはよお！早いね？」

「おお。凜ちゃん、おはよーさん！」

フツとワタルの指を見ると、昨日ボクが貼ってあげた薄いサクラの模様の入ったバンドエイドがそのまま貼ってある。

「あれ？ワタル君、昨日家でちゃんと消毒しなかったでしょ！？ダメじゃん。」

するとワタルはそのバンドエイドを指で摩りながら

「いや、ちゃんと消毒したでえ。凜ちゃんに後で怒られんようにな
(笑)」

「だって、そのバンドエイド、昨日アタシが貼ってあげたのじゃない？消毒した後新しいのに取り替えなかったの？」

「あ、うん。一回剥がして消毒した後、またコレ貼ったネン。」

「新しいのにすればいいのに？」

「まあ、いいやんか。せつかく凜ちゃんに貼ってもらうたやつやし

な。早く治りそうな気がするネン。」

「ふうん……。」

それから少しして、ワタルはボクに突然こんなことを聞いてきた。

「なあ、凜ちゃん、高校はどこ受けんネン？」

ボクは少し怪訝そうに

「なんで？」と聞く。

「いやー、ボクもな転校の繰り返しやる？　ところがもう中3の6月なのに、まだ自覚がぜんぜん湧かないネン。それで他の人の志望校聞けばちいとは焦ってそういう気分になれるかな思てな。」

（そっかあ、ワタルは関西行ったり、東京戻って来たりで大変だったんだよね。）

ボク自身まだ青葉学院以外の志望校を決めたわけではなかったけど、来週の模試で書こうと思っている学校を思いつくままにあげていった。

「うーん…、まず第一志望が青葉学院。これはもう決まりかな。」

「ほう！青葉かい！？凜ちゃん随分と洒落たところ受けるやないかっ

！ あとは？」「

「えっとね、都立は白洋か戸川・・・かなあ。」

「どっちやねん？ どっちかにせーや？」「

「まだわかんないの！戸川だとトップ校だから不安もでるでしょ？」「

「じゃあ、とりあえず白洋にしとき？ 決まりやな。」

「なんでキミが決めんの！？」

「まあえーから（笑） それで？私立は他は？」

「今考えているのは、明友高校と・・・あと実際女子かなあ。」

「ふむふむ・・・。明友と実際・・・ね。」

そう言いながらワタルはなぜかボクの言うことをメモしてる。

「何してんの？」

「いや、参考にな。東京には色々な学校があるからなあ。ホンマ参考になるわあ。じゃあ、とりあえず今度の模試ではその高校を志望校に書くネンナ？」

「まあ・・・多分。」

（なんだ、へんなヤツ・・・。）

「はい！」

ボクは教壇まで出て解答用紙と結果表がセットになったものを受け取る。

> 結果 <

英語	・ ・ ・ 94点	(偏差値 73)
数学	・ ・ ・ 85点	(偏差値 68)
国語	・ ・ ・ 88点	(偏差値 70)
社会	・ ・ ・ 90点	(偏差値 68)
理科	・ ・ ・ 85点	(偏差値 66)

合計点数 ・ ・ ・ 442点 / 500点中 (五科目平均 88点)

三科目偏差値 ・ ・ ・ 70 (校内順位 12番 / 288人中)

五科目偏差値 ・ ・ ・ 68 (校内順位 13番 / 288人中)

(やったあ！)

ボクは心の中で叫んだ。

2年の最後にやった模試より点数も偏差値もかなりあがっている。

志望校の合格率に目をやると

> 私立 <

第1志望 青葉学院高等部（共学）・・・70～75%（合格有望
圏）
第2志望 明友学園高校（共学）・・・80～90%以上（合格安
全圏）
第3志望 実際女子学園（女子）・・・90%以上（合格確実圏）
>公立<
都立白洋（共学）・・・90%以上（合格確実圏）

後ろの席のミコがボクの背中を突いて「どうだった？」と聞いてく
る。

「うん。けっこうあがってたみたい。よかったあ。」

ボクの結果用紙をミコに見せてあげると

「わあ、すごいあがったじゃん！そのまま頑張ったら青葉絶対いけ
るよー！」

と喜んでくれた。

「えへへ、少しだけ自信出てきたかも。」

ミコも自分の結果表をボクに見せてくれた。

三教科偏差値 73、五教科偏差値71。

（す、す、す...。）

青葉学院は80%以上、国際基督教学園高校は90%以上。順位は三教科学年で5位、五教科でも5位

(さすがミコ！)

するとミコの隣のワタルがボクたちの結果表を覗き込んできた。

「ほう、ほう！やるやんか！ミコちゃんすごいなあ！凜ちゃんも大したもんやあ！」

「こらあ！人のを覗いちゃダメでしょ！」

ミコがワタルを睨みつけて注意する。

ボクも言っっちゃった。

「そーダヨ！他人のを見たんだからキミのも見せなさい！」

と言っっちゃってワタルが持ってた結果表をもぎ取っちゃった。

「ミコ、一緒にみよ？」

「わあい！凜、ありがとお。どれどれ……」

ボクたちは一瞬手が止まった。

英語偏差値75、数学偏差値73、国語偏差値73。三教科平均は74で学年順位は三教科で3番！

うそっつ!!

ボクとミコは目を見合わせた。

「ワタル君、キミあれ（転校）からどーしちゃったのっ!？
とてもあのときのキミとは思えないよ!」

「あこのころのボクってどないやねんっ！（笑）」

ボクとミコは気を取り直して

「それで志望校はどこを書いたの?」

再びワタルの結果表に目をやる。

第1志望 青葉学院高等部（共学）：90%以上（合格確実圏）

ミコはワタルの顔を見て

「えっ!ワタル君も青葉受けるの?」

ワタルはなんか歯切れの悪そうな感じで

「え?ハハハ!ああ、まあな」とだけ答える。

「第二志望は?」

ミコはまたワタルの結果表に戻り

「明友学園？　へえ、ワタル君、これも凜と同じところ受けるんだ？」

（ハッ！ま、まさか…。）

「で、第二志望は…」

ボクとミコはその高校名を見てお互い目を見合わせて

「はあ～～～～…。」

と同時にため息をつく。

第三志望欄に書かれていたのは

実際女子学園（女子）…判定不能（女子のみの募集です）

ボクはワタルのほうを向き

「ワタル君？」と尋ねる。

するとワタルはへらへら笑いながら

「へいへい？」

「うーん。。」

それにしても女子高を志望校にして気付かないって、アイツってぜんぜん昔のままっ！

相変わらずそそっかしいよねっ！

第十六話 デイズニールランド 1

定期試験も終り来週からいよいよ夏休み。

今年は受験生だから思い切り遊べるわけではないから手放しに楽しみというわけではないけど。

夏休みに入る前の最後の週の日曜日、ボクたちはデイズニールランドで1日を過す計画を立てた。

メンバーは女子がボクとミコ、奈央と井川さん。久保ちゃんは外せない用事があつて来れなかった。それと男子がワタルと安田、工藤、牧野。ちょうど男女で4人ずつとなった。

朝9時に駅の改札前で集合の約束。

8時50分

ボクが集合場所に到着するとすでにワタル、安田とミコ、井川さんの4人がいた。

「おはよおーっ！」

「あ、凜！おはよお！」

ミコがボクに気付いて小さく手を振ってくれる。

「わあ！凜のその銀のラメのついてるシャツすごい可愛い！デニムのフレアスカートと良く合ってるよお！」

「えへへ・・・。これね、この前うちの母親と買い物に行ったときにたまたまショーウィンドウに出てたの見たの。ミコのワンピースもすごい可愛い！すごく似合ってるよ。」

「ホント？よかったあ。これもね、前に夏用に買ってもらったやつなの。」

ボクは何気にワタルのほうを見た。

ワタルはなぜかボクのほうを見て少しキョトンとした顔をしている。

「どーしたの？」

「いやな、凜ちゃん少し髪の毛切ったかいな？」

「あ、うん。よく気付いたねえ。昨日美容院行ったの。でも、長さを揃えるくらいヨ。」

「ボクな、女の子は髪の毛長いほうが好きやネン。」

「ふうん。そうなんだあ？・・・で？」

「だから凜ちゃんももっと伸ばしなはれ。」

「髪が長い娘が好きならキミがそっぴい娘を探しなさいっ！」

「そんな切ない（笑）。でも・・・。」

「でも、なにヨ？」

「そのシャツとスカートはボクのタイプや。」

「…バカ。」

ミコは、ボクたちのそんなやり取りをクスクスと笑って眺めている。

そうこうしているうちに工藤、牧野そして奈央ちゃんも来てこれで全員揃った。

「さあ、じゃあ行こか！」

ワタルが合図をかける。

9時45分

ボクたちはデイズニールランドの中央門前に着く。

まだ中学は夏休みに入っていないのに、それでもすごい人手だ。

ボクたちは前もって前売り券を買っておいたので、入場券を買う必要はない。そのまま門のところに並んだ。

「すごい人手やなあ。」

「ホント！だいじょうぶ？ みんな離れないようにしなくちゃね。」

「もしわからなくなったらオレ（安田）の携帯に連絡するようになる！」

10時、園内に設置されているいくつものスピーカーから入場のお知らせが流れた。

「開演のお時間になりました。みなさま、列を崩さず順番に入場されますようお願い申し上げます。」

それでも入場すれば人気のあるアトラクションにはすぐに長い列ができる。

中央門のチェーンが外されると、そこに並んでいた人たちが園内に一気に流れ込んでいった。

ワーーーーッ！ワーーーーッ！

人の急な流れに流されてボクはミコたちを見失ってしまった。

それだけでなく

「キャッ！」

いきなり後ろからすごい力で押されてボクは思わず転びそうになった。

そのとき

誰かがボクの腕をグイッと掴みあげた。

それはワタルだった。

「凜！だいじょうぶかつ！」

「ハ、ハイツ！」

ボクはワタルの言葉に思わずそう返事をした。

ワタルはボクの手を握り締めて

「よしっ！ええか？ボクの手を絶対に離すなや？」

そう言つてワタルは人の流れを進んでいく。

（え、なに？これ。

ワタルが今ボクの手を掴んで…。

え…なんで？)

もう何がなんだかわからない。小学生時代はボクより小さかったカレ。でも今はボクの身長は156cm、カレは172cm。

ボクはワタルの手に引かれて早足で歩きながらワタルの顔を見上げ

る。

(ワタル…。なんでキミはそんなに男の子の顔してるの?)

(なんか…。なんか胸がドキドキするよお…。)

カレに手を引かれて歩いてきた距離はほんの30mくらいのはずなのに、ボクにはその距離が何百mにも感じられた。

人の波をやつと乗り切ったとき、ボクたちの視線の向こうにミコと井川さんを見つけた。

「あ！凜〜！ここだよお！」

「ミコ！井川さん！よかったあ〜！」

ボクとワタルはまだ手を繋ぎながらミコたちのところに駆け寄った。

「よかったあ！ワタル君が付いてくれてたんだね？」

「うん。ホント偶然ワタル君が途中で見つけてくれて…。」

そのときフツと自分の手元を見る。

「あっっ！」

ボクはワタルと繋いだ手をパツと離れた。

(ああ、きつとミコと井川さんに見られちゃったんだろっなあ…。)

「でも、ホンマ良かったわぁ。」

（カレの顔をちゃんと見れないよぉ…。）

ボクは身長差16cmのワタルを見上げ

「ア、アリガト…。」とだけお礼を言うのがやっとだった。

第十七話 デイズニerland 2

ボクはデイズニerlandはすごくひさしぶり！

小学6年生のときに両親と当時小学3年生だった弟の悟と来たきりだった。

スモール・ワールド！ カリブの海賊！キャプテンEO！

（わあ！ 立ち並ぶアトラクションに目移りしちゃっ！）

意外なデイズニermaniaは井川さんだった。ボクたちは井川さんのアドバイスに従ってファストパスを上手に使いながら廻っていく。

道を歩きながら「隠れミッキー」を発見するたびにボクたちは

「わっ！これってそうじゃない!?!」

「あっ！ホントだ！こんなところあるんだネッ！」

とくに井川さんは隠れミッキーを発見するたびにそれを携帯で撮影している。

「えへへ、じつはアタシ、パソコンでアルバムにしているの（笑）」

（井川さん、かわいいっ！）

なんか優等生の井川さんの意外な一面を見てしまった気がする（笑）

途中ですごくいいラッキーなことが！

ミッキーやミニーたちとばったり会えた。

「わあっ！すごい！一緒に写真撮ろうよっ！」

「うんっ！」

ボクとミコ、井川さん、奈央の4人がミッキーとミニーを囲む。

ミッキーだけ、ミニーだけとならけっこうあるけど、ミッキー&ミニー同時に入ってくれることはものすごくレアなんだ。

「やったあーっ！すごいラッキーだよねえ！」

カメラマンは安田。じつは安田はカメラオタクでもあり、今日はかなり高性能のデジカメを持ってきていたのだ。

「よしっ！じゃあ、撮るぞーっ！」

「はあい」

パシャッ！

「ああ、ミッキーとミニーが行っちゃっ〜」。 「

名残惜しそうにミッキーとミニーを見送る井川さん。

「ねえ！今度はスプラッシュマウンテン行こうよっ！」

奈央が急に提案した。

「いいねえーっ！」

ディズニーオタクの井川さんがすかさず賛成！

ディズニーランドの多くのアトラクションのうちでも特に人気が高く列も長い。1時間以上待つのは当たり前。でもせっかく来たからにはこれは外せない。行ってみると案の定1時間待ちコースだった。それでもボクたちは長い待ち時間を楽しい会話で過すことができた。

話に夢中になっているうちに次第に列が進んでいく。

あと15分待ちくらいのところに来ただろうか。

ミコが

「スプラッシュは2人ずつペアになるのヨネ？ どういうペアになる？」

男子はすかさず

「まあ、やっぱり男女ペアは当然でしょ！」

女子も当然反対はしない（笑）

「じゃあ、どっというペアになるか決める？」

「アタシ、提案っ！」

「ハイ、ミコくん！」

「あのね、名前のアイウエオ順で男女がペアになるの。」

「アイウエオ順って苗字で？それとも名前で？」

「トーゼン名前ヨ！ね、これで決まり！」

（ん！ミコ仕組んだなッ！（笑））

苗字順だとボク（小谷）とワタル（石川）は当然離れてペアにならない。でも名前順だとボク（凜）とワタルは両方とも一番最後になるわけで。

多少というか、かなり強引なこじ付けで結局ミコの提案に決定。

その結果、

ボクとワタル。ミコと安田。井川さんと工藤。そして奈央と牧野がペアを組んだ。

「はい、じゃあこれも名前順で、アタシたちが前列に行くから、凜とワタル君は最後の列ね。」

ミコの仕組みはさらに手が込む。

いよいよボクたちの順番が来た。

座席に座ってベルトを締める。

ボクの隣にはワタル。

「凜ちゃん、怖くなったらボクにしがみ付くんやで？」

ワタルがニヤニヤしながら言った。

ボクは冷ややかな目で

「バアア~~~~カ！」

ガタンッ！

ボクたちが乗った丸太のボートは薄暗い部屋の中みたいな場所を最初静かに前進する。

次第に夕暮れの沼地の景色のそこかしこに小さなかわいい動物たち。

「わあ！あそこ見て！かわいいのがあるよっ！ウサギの家！」

ボクはワタルの服の片袖を指で摘みその方向を指す。

「ホンマやあ！なんかホンマにアメリカの南部行った気分になってきたでえ！（笑）」

「ホントだねえ。こういうところで朝起きて夕日が沈むまで過すってステキだろうなあ。」

「じゃあ、いつかボクが凜ちゃんのことを連れてったるか？」

「えっ…。」

ボクはその言葉にフツとワタルの顔を見つめた。

ワタルは少しテレた表情で

「いや、いつかや。そういう機会があったらってこと。期待しないで待つとき？」

「…ウン。じゃあいつか約束。」

ボクはそう言って右手の小指を差し出す。そしてワタルの差し出した小指と絡ませて指きり。

「あ、そろそろだよ！」

ボートは突然スピードを増し、そして暗闇の中から明るい光の世界がパツと開ける。

そしてボートはすごい落差の大滝に落下っ！！

「キヤアアアーーーーーッッ！」

ボートは終点まで着きみんな降りる。

出口に向かう途中、ミコはボクのほっぺたを指で突き

「凜、ゆっくり話せた？」

「え？誰と？」

トボケるボクにミコは

「凜はかわいいんだからっ！」

ボクは気恥かしさで下を俯いてしまっ。

「ねえ、そろそろお腹すかない？」

奈央の提案でボクたちはこれもやはりデイズニータク井川さんのお勧めで、「ブルーバイユー・レストラン」に向かう。ここではカリブの海賊の景色を眺めながら食事をする事ができる。

ボクの家はわりと裕福なほうだと思うけど、ふだんは必要以上にお小遣いを渡してくれない。中3のボクは毎月1万円。一日平均300円の計算だそう。あと洋服や参考書なんかは別にその都度お金をくれる。小6の悟なんかは毎月5千円。でも今日は臨時のお小遣いで1万円渡してくれた。

ここでボクはグラタンセット、デザートにクリームブリュレを注文。
男子が予め席を確保してくれてそこに座った。

「最後のスプラッシュマウンテンすごかったねえ！」

「滝に落ちるとき、アタシやっぱり目を閉じちゃったよお！」

「井川さん、あのとき両手を上に上げてたでしょ！？びっくりしちやった！」

「アハハ、ホントに？ アタシなんか降りた後足がまだ震えてたモン（笑）」

話に花を咲かせながらボクたちが食事をしていたそのとき

後ろのほうの席から突然声をかけられた。

「あれ！ワタルちがうか？」

ワタルがその方向をクルッと振り向くと

そこには立ち上がって声をかけた男の子の他にボクらと同じくらいの年齢の男女5人のグループがいた。

「オオオオツツ！木戸ちゃんけっ！？ オマエこんなとこで何しとんネン？」

「ワタルの知り合いか？」 安田がワタルに尋ねた。

「うん、ボクの転校前の学校の友達やネン。」

どないしたん？びっくりしたでえ！」

「いやあ、クラスのヤツらと今日朝の新幹線でな、坂口も田所もおんでえ。あと庄野 美香子もおんし。」

「あ、庄野もおるんか？」

そのとき向こうの席のほうから髪が長めで目鼻立ちがはっきりしたかなり可愛い感じの女の子がボクらの席に歩いてきた。

「ワタル君」

「おおっ、庄野やんけ。 元気しとったか？」

その娘はテーブルの向かい側に4人並んで座っていたボくら女子の方を一瞬だけ見て

「メールいっぱいする言うてくれたのに、東京の学校忙しいの？」

「あー！いや、木戸とか坂口とか色々順番にメールしとったん。」

庄野にもこれからメールするつもりやったで？」

「そう。じゃあ、待ってるからね。絶対に頂戴ね？」

あ、ごめんなさい。突然お邪魔しました。」

とボくら女子の方にも挨拶して自分のグループの席に戻っていった。

ボクらは「ドーム」という感じにペコリと頭を下げる。

ワタルの友達の木戸という男の子はその後2、3言ワタルと話をすると

「あ、じゃあボクらもう食事終わったんで行きます。お邪魔しちゃってすみませんでした。」

と席を立って、彼らは出口の方に向かっていった。

なんかよくわからないけど、ボクの心はなんとなく（ムッ!）としていた。

「凜ちゃん、ご飯食べたら今度は一緒にティーカップ乗らへん?」

相変わらずひょうひょうと言ってくるワタル。

ボクはワタルを冷やかな目で見て言っちゃった。

「あの娘と乗ったらあ!?!?」

第十八話 デイズニートランド ラスト

（「ボクな、女の子は髪の毛長いほうが好きやネン。」（第十七話参照））

（ふうん。そつか！そういうことネ。）

（ワタルめえーっ！ボクと関西の時の娘のことを重ねてやがったのかっ！）

そんなボクたちの会話を気にして、ミコがボクの耳元に手を当てて囁いた。

「凜、転校してくる前のワタル君を見たってしょうがないヨ？」

ボクはそんなミコの言葉に気持を装うことができない。

「え、アタシは…ワタル君なんか気にしてないヨ。」

「ウソ？ウソ？ 今、凜の心の中で少しずつワタル君の存在が大きくなり始めてるでしょ？」

「ん~~~~、わかんない…。」

「少なくともワタル君、今は凜の方をちゃんと向いてるヨ？」

「そうかなあ…。」

「絶対そうだヨ、うん。」

ミコには隠し事はできない気がする。

(そうなのかなあ…。)

(昔は男同士だと思ってて、友達だったボクとワタル。)

(ボクはそういう過去を忘れてしまったんだろうか…。)

ミコの助け舟にワタルはボクにもう一度

「 な？ 凜ちゃん、あとでティカップ一緒に乗ろうや？ 」

「 うん…。じゃあ、カップをあんまり早く回さないでネ？ 」

ボクはこんな言い訳にならないような返事をする。

「 ハハハ、任しときつー！ 」

そんなボクたちのボクたちの会話をミコはニコニコ笑ってみている。

.....

夕方5時半。

楽しい一日の終り。

親と来ていれば夜のパレードまで見ていけるんだけど、友達同士だけで中学生の女の子があまり遅くまではいられない。

以前はそれほど遅い時間にならないければ帰宅時間で何かを言われたことはほとんどなかったけど、女の子としての生活になってから母親も父親も意外とそういうことを気にするようになった。

「変な人に誘われたら必ず逃げること。もし手とかをつかまれそうになるようなことがあったら叫んでも近くの人に助けを求めようからね。」

最近はお親にこういうことまで言われるようになった。

勉強の合間の休憩時間に家庭教師の加山先生と話したときも、加山先生にこんなことを言われた。

「男の人のことを最初から疑ってかかる必要はないけど、凜ちゃんはお女の子なんだから、色々な危険は予めある程度考えて行動しなくちゃいけないワヨ。」

ボクたちは中央ゲートに行く途中のあたりのショップに入ってそれぞれで今日の記念のお土産を買うことにした。

「ミコ、これどう？」

ボクはミッキーとミニーのキャラが両端に付いたフォトスタンドをミコに見せる。

「あー！いいねえ！机に置いたらきつといいヨ。」

あ！凜、これどう？ どっちがいいかなあ？」

ミコはミニーの2種類のイラストの描いたTシャツをボクに見せて言った。

「かわいいっ！ ミコはきつと両方似合うと思う。でもどっちかっ
て言っと・・・うーん・・・こっち？」

「あ、やっぱり？じゃあ、凜のアドバイスを聞いてこっちにしよう。」

「このシャツ、胸にミニーのマーク入ってる！すごいかわいいっ！」

「あ、かわいいーっ！ 凜、絶対似合うよお！」

「ホント？じゃあ、これ買っちゃおうかな。」

男子はもう買い物済ませてボクらのことを待っていてくれる。

帰りの電車の中、ボクたちは一日の疲れでクタクタだった。電車の中は日曜日の夕方ということもあってわりとすいていて、女子はたまたま空いていた席一列に四人とも座ることができ、男子も飛び飛びで空いた席を見つけて2人が座ることができた。

ボクとミコはお互い肩を寄席って眠っていた。

しばらくして朦朧とした意識の中で誰かがボクの髪を優しく撫でている感じがした。フツと目を開けるとそれはワタルだったような気がした。そしてボクはまた眠りの中に引き込まれていく。

駅に着いたのは7時半だった。

夏近いとはいえもうあたりは暗くなっていた。

「楽しかったねえーっ！」

「じゃあ、また明日、学校でね。」

「うん。バイバイ。」

なんか夢のような一日だった。

途中までミコと帰り、一人になると朝ゲートに入ったときの混雑の中ボクを手を引いてくれたワタルのことを思い出した。

「凜！だいじょうぶかつ！」

なんてワタルに言われて

「ハ、ハイッ！」

なんて返事してしまったボク。

もう何がなんだかわからない。

ボクはあのときなぜかワタルが来てくれるような気がしてたんだ。

「~~~~~
.....」

第十九話 受験生には夏休みはない！

いよいよ夏休みに突入！

でも今年ボクは受験生。

しかも青葉学院なんて高望みをしていては遊びは来年の夏までお預けの様子。

一週間のスケジュールは、月・水・土曜日の夕方から夜まで家庭教師の加山先生にみっちりしごかれ、火・木・土の昼間に進学塾。

ボクは中2まで塾というものに行ったことはなかったが、全体の中の自分の位置を知るためには家庭教師だけでなくやはり塾に行くことが良いと考え、中3からミコが通う清進スクールに通い始めた。

この塾は中高受験の大手塾で、首都圏に20数校の教室があり、中3の生徒数は2500名くらいいる。

ボクとミコは家の最寄駅から2駅先のターミナル駅にある教室まで通っていた。

清進スクールでは毎月クラス替えテストがあつて、ボクらの通う教室では成績の良い順に各クラス40人ずつclass1からclass5クラスまで分けられる。

ボクは入塾時にclass2、その翌月から今まではなんとかclass1クラスにしがみ付いている。

ミコは当然ずっとclass1クラス。しかもその塾の中でも上位陣にいる。

夏休み前にやった公開模擬テストで、ボクは青葉の合格可能性はなんとか70〜75%だったけど、加山先生によると実際はこの位置

ニールランドでお土産に買ってきたもの。ボクとミコの色違いのおそろいで、ボクのは薄いブルーの下地にミニーのイラストが白で描かれている。

（なんか持ち物もぜんぶ女の子の色で染まっていつてる気がするなあ。）

（こうやって男だった頃のボクは消し去られていくんだろうか…。）
でも男として生活していた頃にはほとんど話をしたこともなかった
ミコたちとこんなに仲良くなれて、色々なことを話し合った。

昔は女の子というものが男より気楽みたいなイメージもあったけど、
実際女として生活するようになって男とは違ったたくさんの悩みを
持っていることもわかってきた。特に身体の悩みは、男より女の子
のほうがずっと多くあると思う。そのうち大きな部分を占めるのは
やはり生理で、ボクも最近では周期が安定してきたけど、体調の悪
いときは本当に辛い。

休み時間や放課後、男の子たちが何も気にせずサッカーとかをやっ
ているのを見たりすると、ときどき恨めしくもなったりする。

そういうときに、こういう身体のことを話し合える女の子の友達の
存在は本当にありがたい。

そんなことをフツと考えているうちにミコがやって来た。

「凜、おまたせーっ！」

「あー…ミコ。おはよおー！」

「おはよお。待った？」

「うん。アタシも少し前に着いたくらいだから。」

「あ、その筆箱、この前お揃いで買ったやつでしょ？」

「うん、そっだよお。今日から使おうと思って。」

「えへへ、じつはアタシも持ってきた！」

「あっ！ほんとだあ！ ふふ、なんか気が合うね。」

「ホントだよねえ。あ、じゃあ、行こう？」

「うん。」

最寄駅から電車で2駅。わりと大きなターミナル駅を出て歩いて5分ほどのところにボクらの通う教室がある。

夏期の通常授業が終わって、今日から4日間は夏期集中講座で朝9時から途中お昼休みを挟んで午後3時までみっちり5時間授業。

「おはよおー！」

教室の中に入ると何人かの顔見知りの女の子たちが挨拶してくれた。

「おはよお。凜、ミコ」

彼女は三ヶ嶋さん。

ボクらと同じ若松中で彼女はA組、幼馴染の久美ちゃんと同じクラスだ。

A組でもトップクラスで、学年でもミコや井川さんと張る秀才組。彼女は首都圏でも女子NO1の超難関慶光女子高校を第一志望にしていた。

「やつほう！三ヶ嶋ちゃん。早いねえ！」

ミコが彼女に声をかける。

「うち、お母さんがすごく起きるの早くってさあ。朝ご飯も早いからアタシも自然と早く家出ちゃうのヨ。」

しかしアンタらいつも仲いいよねえ！いつも一緒じゃない？」

「アハハ、だってホント仲いいモン！ね、凜。」

「うん。だよねえ（笑）」

「あ、ところでさあ…。」

三ヶ嶋さんが急に思い立ったように言う。

「知ってる？　うちの教室の生徒の女の子で、なんかデキちゃった人がいるって。」

「えええっ！ぜんぜん知らない。」

デキちゃったって・・・もしかして、赤ちゃんってこと？」

「そういうことヨ。男の方はわからないけど女の子のほうはアタシらと同じ若松中だっという噂ヨ。」

「ええええーっ！ ホントに!？」

「らしいヨ。でも今日から夏期講習だから必修じゃないしね。予定があつたりして夏期講習だけ取らない人もけっこういるじゃん？だから今日来てないから誰とはいえないけどね。」

「そっかあ。なんかビックリだよお。でも中3のこの時期でそういうのはやっぱり厳しいよねえ。追い込み時期だし。」

ボクらももう14歳になる。

男子ももうそういう気持ちが出てきても自然だし、女の子だってそれを受け入れられる身体になつてる。

つまり赤ちゃんを作れる身体であるということだ。

でもボクはなぜか怖さを感じた。

この年齢で一人の命を作り出してしまうこと。

そのことで自分のこれから先の人生が大きく変わってしまうかもしれないこと。

そしてこの事件はその後ボクたちの間でさらに大きな波紋を起して

11
20

第二十話 ええっ！ 駆け落ち！？

その日の夜。

ボクは自分の部屋で今日塾でやった講義の復習をしていた。

一区切りが付き、と机の上にペンを置き

「ふう…。」

とため息を吐く。

今日塾で二ヶ嶋さんに聞いた話が頭の中に浮かんでくる。

少し前に学校で男子と女子の生徒を分けて性教育の授業をした。そのとき講師として近くの産婦人科から女医の先生が来てこんな話をしていた。

「女性は赤ちゃんができるると心の変化がある。それまでは赤ちゃんをそれほど望んでいなくても、妊娠するとその赤ちゃんを必死に守ろうとする。自分のお腹の中にもうひとつの命が宿っていることを女性は身をもって知るからだ。出産までの約10ヶ月、お母さんと赤ちゃんはひとつの身体で共存する。」

そして出産するとき、女性は自分の身体だけでなく心の半分も分け与えるような気持でその赤ちゃんを産もうとする。だから、もしその赤ちゃんが不幸にもいなくなってしまうとき、女性は自分の身体だけでなく心の半分も失ってしまったように傷つく。

これは妊娠という宿命を持たない男性には絶対にわからないことです。逆に言えば、そういうことを前提として女性は存在するのです。中には人生の中で赤ちゃんを産まない、産めない女性もいます。しかし、それでもそういう人も含めて女性全体が命を繋ぐことを常に考える性であるということは事実です。

これから、貴女たちは異性である男子への感情を次第に高めていくでしょう。それはとても素晴らしいことですが、安易に性的行動に走ることにより、貴女方が自分の心の半分までも失うことになってしまわないように。それを心から願います。」

（ボクは、もし将来好きな男性ができて、その人の赤ちゃんをほし
いと思うようになるんだろうか。）

そんなことを考えたときにフツと思い浮かんできたのはワタルの顔
だった。

デイズニerlandでワタルに助けてもらったこと。

（なんであるとき、「ハ、ハイッ！」なんて言い方で返事しちゃっ
たんだろう…。）

ボクの手を取って人波の中を掻き分けて進むワタルを見たとき、ボ
クはすごく不思議な気持ちになったんだ。なんて言えばいいのかわ
からないけど、今ならワタルに何を言われても受け入れてしまいそ
うな、そういう気分だったのかもしれない。

（ボクは一瞬の、その場だけの雰囲気の流れに流されちゃったんだろうか

…。

(じゃあ、あれがもしワタルじゃなくて安田とか工藤だったら？
ボクは同じような気持になっていたんだらうか…。)

そのときボクの頭の中に過ぎったのは、あのときレストランで会ったワタルの転校前の学校で同級生だった女の子の顔だった。

(たしか、庄野…美香子さん、だっけ。)

髪の毛が肩下まであって、目のはっきりして鼻筋が綺麗で、女の中から見ても綺麗な娘だなって思った。

「ボクな、女の子は髪の毛長いほうが好きやネン。」

(あの娘のことなのかな…。)

こんなことを考えてもしようがないことはわかっている。だからワタルとはあくまで友達っていう気持ちを持つとっと思って思ってる。

正直、まだ特定の男の子のことを好きとかそういう気持ちはよくわからない。安田や工藤たちと一緒に話をしてても楽しいって思うことも多いし。でも、ワタルと一緒に話しているときは、なんか安田たちとは少し違う楽しさのような気もする。

もう夜の11時を過ぎた時間。

「ああ、もう寝よつと。」

ボクは混乱する頭の中の出来事を無理やり引き出しに押し込めるようにして考えるのをやめてベッドに潜り込んだ。

.....

次の日、ボクとミコが教室に行くと教室の中は少しざわついていた。

三ヶ嶋さんはボクらの顔を見るなり

「あ、凜、ミコ。昨日のあれさあ、なんか野口菜緒子さんらしいよ。それでさ、なんか2人で駆け落ちしちゃったって……。」

「えええっ！マジ！？駆け落ちって……。」

「うん。なんかね、今野口さんの親が教室に来て話してるんだって。」

「へえ！そんなことになっちゃってるんだあ！？なんかすごいね。でも、今日の授業どうするんだろ？」

「あ、少し遅れるけどちゃんやるらしいよ。さっき向井先生が来て言った。」

「ふうん。そっかあ……。」

予定の講義開始時間より15分くらい遅れて国語担当の樋口先生が来た。

「えっと、みんなには迷惑かけてしまって申し訳ない。みんなもすでに話を知ってしまったている者も多いようだが、授業については全て予定通りやるので動揺はしないでほしい。その分今日は20分延長して講義をさせてほしいと思っっているので理解してくれ。ただ授業の前に5分だけ時間をもらって少し話したい。」

これは塾の教師という立場を少し逸脱してしまうかもしれないが、今回のことで色々な憶測が飛ぶことと思う。それを安易に真に受けないでほしい。それは塾のためじゃない。君達のためだ。

そしてひとつだけみんなに言いたいのは、人を愛するという気持と同時に自分自身を大切にする気持を忘れないでほしい。自分を大切にできない者が人を大切にできるだろうか。人を愛するというのはとても大切なことだ。しかしそのことを理由にして自分を見失わないようにしてほしい。

先生もそう大した恋愛経験がわるわけじゃないけど、自分を見失わない人は本当に相手を大切にできる人にもなれると思う。みんなには自分を見失わないことで本当に人を愛せる人間になってほしい。

どうかわかってほしい。それでは授業を始めよう！」

この樋口先生は普段の授業の中でもただ漠然と問題を解かせるような授業はしない。

樋口先生は授業の中できどきこんなことを言う。

「テクニクだけでなく心で文章を読め。作者はこの文章をどんな気持で書いたのか。それをまず理解することが美しい解答につ

ながる。 本心に美しい解答は採点者の心を打つ。」

第二十一話 ウソツ！ワタル君を信用しなきゃ

夏期集中講座が終わって今日は久しぶりの学校。
つていつても夏休みの中間登校日だけ。

「おはよーっ！」

「あ！ひさしぶりい！」

朝8時30分。

教室に入るとみんなちよつと懐かしそうな顔してる。

海に行ったのか真つ黒な顔をした男子、ボクらのように今年の夏は勉強漬けなのかすごしげつそりした顔の女子もいる。

それでも久々に会えたクラスメイトとは話も弾む…ところなんだけど、もうかなりの人があの事件を知っているみたいだった。

ボクは自分の席にカバンを降ろしフツと斜め後ろの方を振り返る。

「あれ…。ワタル君、まだ来てないの？」

ボクは夏休みが始まって家庭教師と塾でアップアップだったからワタル君とは就業日からずっと会っていない。

ミコも不思議そうに横の席をチラッと見て言う。

「そうなのヨネ。いつもだったらもうとっくに来てていい時間なんだけどネ。」

すると安田が

「昨日さあ、ワタルなんか家に帰ってないらしいぜ。」

「えっ！なんで？」

「知らねーよあ。でも、ワタルの母ちゃんから夜10時くらいにウチに電話があつてさ。とりあえず明日までは待ってみるけど、もし連絡あつたらすぐに教えてくれって。」

(ワタル、一体どーしちゃったのっ!?)

…心配…すごく心配。

ワタルは今までそんなことってなかったのに。
どうしちゃったの…。

そのときクラスの女子清水さんと三田さんがボクらの席に寄ってきた。

「ねえ、B組の野口さんってミコと凜が通っている塾の生徒でしょ？」
「？」

「うん。アタシたちもびっくりしたの。ちょっと前にあつた集中講座でA組の娘から教えてもらつてさあ。今もまだ家に帰ってないのかなあ…。」

「でも相手がまだわかつてないんでしょ？ どの学校の人かもわからないし。」

「あ、…でさあ。そのことでね、こねってホントの話かどうか
わからないんだけどね…。」

清水さんが言いづらそうにボクの顔を見て言った。

「うん？ どうしたの？」

「…いいのかな？」

清水さんが一緒にいる三田さんの方を見て言った。

「もうここまで聞いちゃったんだもん。最後まで聞かないと落ち
着かないヨ。」

「う、うん…。じゃあさ、あくまで人に聞いた話だからね？ 誤
解しないでね？」

「うん。わかった。」

ボクとミコは2人に答える。

「あのさあ、野口さんの相手の人なんだけどね…。」

「知ってる人？」

「知ってるっていうか…。石川君じゃないかって…。」

「ワタル君!？」

「えーっ！それはいくらなんでもないでしょ！？」

ボクもミコも驚いて言葉が続かない。

「アタシたちも石川君はないでしょ？って言ったんだけどね……。」

「それって誰か見た人がいるとか？」

「あ……うん。」

「誰？」

「B組の男子がさ、昨日の夕方石川君と野口さんの2人を新宿で見
たって……。」

「新宿？」

(なんでそんなところに……。)

「うん。それでなんか野口さんのほうが早足で、石川君はそれに付
いて行ってるみたいなき感じだったって。」

「じゃあ昨日はどこに泊まったの？」

「やっぱり……。ねえ？ そういつ……ホテルなんじゃない？」

(うっそっ！…うっそっそっ！…)

ボクはうっすら涙が湧いてきた。

「凜…。」

ミコがボクの肩に手をかけてくれる。

「うん…。」

ミコが清水さんの方を向いて聞く。

「ねえ、その話ってどこまで知ってるの？」

清水さんは少し困ったような顔で

「わかんないよお…。アタシも朝B組のその男子に聞いたことだから。」

ミコは突然立ち上がる。

「凜！その男子に確かめに行こうよ！ 安田君アンタも一緒に来て！」

「えっ？オレも行くの？」

「そうヨツ！相手が男子だからアンタがいたほうが話が早いでしょ。ホラッ！」

「わかったって。ちょっと待ってるよ。」

「安田君は内田君って知ってるの？」

「うーん…。あんまり話したことはないけど、1年のとき運動会で

同じ実行委員だったくらいかな。」

「じゃあ、ちよづどいワ。」

「ちよづどいって何がちよづどいんだよ？」

ボクは涙を浮かべた顔で

「ミコオ…。でも…。」

「いいからっ！行こう！」

ミコはボクの手を引っ張って教室を出た。

3年B組の教室の前

ミコは教室の引き戸を少し開けて、すぐ傍の席にいる女の子に声をかける。

「せつちゃん？…せつちゃん？」

その娘はフツと顔を上げて、

「あ、ミコ。ひびびあ。どーしたの？」

「あのさあ、せつちゃんのクラスに内田君って人いるでしょ？」

「ああ、うん。いるよお。用なら呼ぶ？」

「うん。ごめん、お願い。」

「うん。ちょっと待ってて？」

ミコの友達の女の子は教室の奥の方で数人で話をしている男子のところに行き、そのうちの背が低い少し太目の男子に声をかけた。

しばらくしてその男子が教室の外に出てきてくれた。

まず安田が声をかける。

「おお、ひさしぶり。悪いな。」

内田君は少し驚いたように

「あれ、なんだ。安田だったのか？　なんかD組の女の子が呼んでるって聞いたけど。」

「あ、ごめんね。せっちゃんに内田君のこと呼ぶのを願いましたのつてアタシなの。D組の藤村です。」

少し太めの内田君は学年でも美人で有名なミコの顔を見て少し照れたような顔で答えた。

「あ、いや。ドーモ、内田です。それでなんか用？」

「うん。じつはね、うちのクラスの娘に聞いたんだけど、昨日内田

君がうちの石川君とB組の野口さんを新宿で見たって言ってたから……。」

「ああ、うん。見たよ。それで意外な組合せだなんて思ったんだけど、今日朝学校来たらあの話があったじゃん？」

「でも、それって確かに石川君だったの？」

「あ、それは間違いないよ。オレだけじゃなくて石川と部活で一緒の松村が見たし。なんか女の子のほうがスタスタ歩いてて、石川はそれを追いかけてるって感じだったな。」

ボクは心が一気に暗くなった。

「そつ……。」

ミコはさらに内田君に尋ねる。

「それでさあ、その後2人はどこに行ったとかわかる？」

「いいや、わかんね。ただ歩いて行った方向だと歌舞伎町のほうかもしれないかな。」

(……………)

安田も内田君に聞いてくれる。

「それって大体何時くらい？」

「うーん…。夕方の7時前だったと思うよ。薄暗くなってきた頃だったから。」

「わかった。内田、サンキュー。」

「安田、どうした？なんかあったか？」

「いや、ワタルはうちのクラスだしさ。ちょっと心配になったから。あ、でさあ、オマエのその話って他の誰に話した？」

「えつとな、オマエのクラスの清水に朝会って野口の話聞いて、「そつえば…」って話したくらいだよ。でも清水にも「ただ見ただけだから…」とか拡大解釈するなよ」って言ったし。まだ2人の関係が決まったわけじゃないしな。あんまり広げて言ったらな。」

「おおつ！ 内田、オマエ男だねえ！」

「わけわかんねーこと言ってるなよ（笑）」

よかった。

内田君が良く考える人で。

とにかくワタル君に会って確かめたい。

第二十二話 信じること

教室に戻ったが、ボクはどうしても落ち着かない。

(もしワタル君が本当に野口さんのことを好きになっちゃったんならそれはしょうがない。)

(でもこのままどこに行ったかもわからない、それがすごく心配。)

(もし、2人が早まったことをしようとしていたら。)

そんなことを考えていると。

「凜…、凜…。」

ミコが突然ボクを呼ぶ。

「ハッ！ゴメン。なに？」

ミコが教室の入り口の方を指差す。

するとさっきのB組の内田君が教室の入口のところでボクらを呼んでいる。

何かすごく焦っている様子だ。

「オイッ！安田、藤本さん、小谷さん、ちょっとっ！」

安田が教室の外に出て行く。

「アタシたちも行くろう?」

ミコがボクに声をかける。

「う、うん…。」

廊下に出たボクたち。

B組の内田君は息をハアハアと吐きながら呼吸を整えようとして言葉が途切れる。

「今、ハア、ハア、1階のトイレに行ったら…ハア…ハア…。」

「落ち着け!内田、どうした?」

安田が内田君の背中を摩りながら言う。

一息ついた内田君

「おい、びつくりするなよ? 今1階のトイレ行って職員室のほう見たら、石川と野口さんが入っていくのを見たんだ!」

「ええええ…!」

「ワタル、戻ってきたのか?」

(良かった。よりあえずワタル君は無事だったんだ。)

「2人でな、教室に入って行って、それで中で先生たちがそれを囲んでて…。」

「わかった！とりあえず、職員室に行ってみようヨ！」

ミコはボクの手を掴んで小走りに歩き出す。

そしてそれを安田と内田君が追いかけた。

ボクは足がガクガクと震えていた。

スカートが足に絡まってもつれる。

(怖い…。ワタルに会うのが怖い…。)

そして職員室の前。

耳を傾けると中から何か声が聞こえる。

それはワタルの怒声だった。

「なんでそんなことしたんやっ！」

「それは自分の責任やぞっ！」

信じられなかった。

2人が愛し合ってそういう関係になってしまったなら、それはしょ

うがないことだと思っ。

もうボクがどうこう言っべきことじゃないのかもしれない。

でも、ワタルは今その彼女を責めている。

(許せない！)

(赤ちゃんができたのは女の子だけの責任じゃないはずだ。)

(それを…。彼女だけに責任を押し付けて自分の責任を回避するだけを考えて、なんて男だっ！！)

ミコたちもワタルの声に信じられない顔をしている。

そのときボクは理性を失ってしまったのかもしれない。

ガラッ！

ボクは一気に職員室の引き戸を開けた。

ツカツカツカツカ…。

「こ、小谷さん？ あなた達、一体どうしたの？」

ボクらの担任の山岸先生がボクとボクの後からぞろぞろと入って来たミコや安田、内田君に驚いて声をあげた。

ボクはそれを無視して奥の方で先生の前に立つワタルと野口さんの

前に進む。

ワタルは意外な顔でボクを見た。

「あれ？ 凜ちゃん？ どないしたん？」

そしてその一言にボクはとうとうぶち切れた。

パアアアアーーーーーッッ！

ボクの右手のひらがワタルの左頬にジャストミート！！
乾いた音が職員室に響き渡った。

「な、なにするん…。」

「言い訳すんなあーーーーっつ！」

パアアアアーーーーーッッ！

今度はボクの左手のひらがワタルの右頬に的確にヒット！！

周りにいた山岸先生や教頭先生たちはその光景をボーゼンとした顔で見ている。

「ワタルッッ！！アンタ…アンタ…アンタ…自分の責任って一体なによっ！

これはアンタの責任でもあるんじゃないのっ！？ 2人が愛し合
つてした結果じゃないの!？」

ボクはもう涙が溢れていた。

横に来てくれたミコの方を向き自分の顔をミコの胸に埋めて泣き出
す。

「う…ううう…ううう…」

「凜…。泣かないで…。」

そしてミコはキツとした顔でワタルの方を向き直り

「ワタル君がそんな人だって思わなかった！アンタは女をなんだっ
て思ってるの!？」

安田も

「ワタル、オマエを男同士の友達としてかばってやりたい気持があ
るけど、今のオマエはともかばえない。」

ワタル君はそんなボクらをキョトンとした顔で見ている。

それがよけいボクの感情を逆なでする。

「ア、アンタは！そんな顔して、まだ反省してないのかぁぁー！

っっ!」

そして再度右手のひらでワタルの頬をひっぱたこうとしたとき

「小谷さんっ!! やめなさいっ!!」

山岸先生の声がボクを制した。

「あのね、あなたたち、なにか誤解していない?」

「誤解って…。ワタル君が野口さんの相手だっことはわかってます! 昨日もワタル君と野口さんが2人で新宿にいたって。ちゃんと見た人がいたひともいるんですよ!」

山岸先生は

「ふう…。」と小さなため息を吐いて言った。

「あのね、野口さんの相手は石川君じゃないの。他の学校の人よ。それで石川君は昨日新宿に参考書を探しに行ったら、偶然野口さんが一人で歩いていたのを見かけたのよ。でね、石川君は野口さんが同じ中学だって知ってて、どうも様子がおかしかったから声をかけたんだそうよ。それで野口さんが石川君に事情を話してくれてね。」

「でも、それだったら、なんで一晩も一緒にいたんですか?」

山岸先生と教頭先生は少し困ったような顔をした。

「まあ…いいでしょう。君たち、じゃあ、ちょっとこっこの部屋に来なさい。山岸先生もお願いします。」

「はい。」

会議室に入るとボクたちは適当なパイプ椅子に各自座った。

山岸先生がさっきの話の話を続きを始める。

「これは特別に！絶対に他の誰にも言わないようにね！約束しますか？」

「は、はい。」

「じつはね、野口さんの相手の人がね、一昨日からいなくなっちゃったの。まあ…、いわゆる…ラブホテル…ね、朝野口さんが起きたらいなくなってる。それで、野口さんが一人になっちゃって困って歩いていたところを石川君が見かけたのね。まあ、そういうわけなの。それで石川君は一生懸命説得したんだけど、野口さんは絶対に家には帰らないって言い張ってるね、石川君は彼女をそのままほっておくことはできなくて、それでその日はしょうがなく新宿のインターネツカフェで一晩過したそうよ。」

「ワ、ワタル…君。」

ボクは涙を流した後の真っ赤な目でワタルの方を見た。

「納得してくれたかや？」

「うん。ゴメンなさい…。ホントにゴメンなさい。アタシ…」

ワタルはボクの方を見て

「もうええよ（笑）」

と言いながらも自分の頬を押さえ

「イテテテ…。」と苦笑いをした。

「ゴ、ゴメンなさい！ワタル君痛い？」

ボクは右手でワタルの左頬を摩った。

「ハハハ、凜ちゃん怒ったら怖いなあーっ！」

「ゴメンなさい……。」

「それはそうと、藤本さんも安田も好き放題よー言ってくれたわ（笑）」

ミコも安田も平謝り

「ごめんねーっ！ホントごめん、ワタル君」

「ワタル、ス、スマン！」

第二十三話 夏の終りはプロローグ

野口さんの相手は清進スクールの別の教室の男子生徒らしかった。

以前から野口さんは高校受験のことで両親と意見が合わず悩んでいて、そういうとき清進スクール全教室の模擬テストでテスト会場に行ったときにその彼とたまたま知り合ったそうだった。色々悩み事を相談しあっているうちに、ある日ホテル街の前を通りかかりつい入ってしまったてそういう関係になり、それ以来何回かそういうことを繰り返していたそうだった。

野口さんは身長が160?くらいあってわりと大人っぽい顔をしているので、ホテルの従業員も特に疑いを持たなかったようだ。それでも彼女もその彼もまだ避妊の知識は乏しく、お互い訳も分からなのままそういうことを繰り返して、そしてある月生理が止まってしまうことに気付いた。

彼女は彼に頼んで薬局に妊娠検査薬を買ってきてもらい、自宅で自分で検査をしてみると陽性反応。そのまま悩んでいるうちに掃除をするために彼女の部屋に入ったお母さんがたまたまその検査品をみつけてしまった。お母さんは野口さんを問い質し大喧嘩になってしまい、そして野口さんはお年玉など銀行に貯めていた貯金をおろしその彼と家を出てしまい、数日間新宿や渋谷の街をふらついて夜はラブホテルに泊まっていたらしい。

ところが昨日の朝、彼女が目を覚ますとその彼がどこを探してもいなくて、持っていたポストンバッグもなくなっていたんだそうだった。

そして野口さんはとりあえずホテルを出て、途方にくれて新宿の街

を当てもなく歩いていたときたまたま参考書を探しに来たワタルが彼女を見かけた。

ワタルも普通だったら別のクラスの女の子に街で会ってもわざわざ声をかけることはしないのだけど、そのときの野口さんはどこか遠い目をしていかにも危なそうな感じだったので、ワタルはつい心配になって声をかけたそう。

ワタルは泣きながら事情を話す野口さんに家に帰ることを勧めたんだけど、野口さんは親が怖くてどうしても帰れなかつたらしい。それでワタルもそのまま彼女をほおっておくこともできず、夏休み期間の夜で学校に連絡をとることもせず、しよすがなく一晩インターネットカフェで一緒に過した。そして朝になって、今日は登校日なので先生も学校に来ることを予想して彼女を学校に連れて来たというこらしい。

ボクたちが教頭先生からそうした説明を受ける間、野口さんは学校近くの産婦人科に連れて行かれた。

彼女自身が元々性知識が乏しかったので、妊娠検査薬での判定も必ずしも絶対とは言い切れない。彼女は女子体育の中野先生と保健室の岩崎先生に連れられてその病院に向かった。

結果は彼女の妊娠は疑陽性で間違いだつたらしい。それでもとにかくそのままにするわけには行かないということで、うちの中学からその彼の中学に連絡をして本人の確認をしたそう。

驚いたことにその彼はすでに家に戻っていたらしかった。本当に信じられないけど、彼は彼女といううちに段々怖くなってきて、夜明

「あ、ミコはさつき途中で分かれたから。それよりワタル君こんなところでどうしたの？ キミの家は方向違う気がするけど。」

「ああ、いやな、あの騒動があつたやる？ ボクは元々参考書買いに新宿行つたんやけど、そのことすっかり忘れとつてな（笑） それでもう一度新宿行くのも面倒なんでこの本屋で取り寄せてもらおうか思つてな。」

「あ、そつかあ。そうだよねえ。とにかくワタル君が一番大変だったんだよねえ。」

「まあ、ボクはええよ（笑） 野口さんもとりあえずあれが間違いだったから安心したようやしな。」

「そうだよねえ。でもさあ、相手の男の人は酷くない！？ 彼女を置いて一人だけ自分だけ帰っちゃうなんてさあ！ とても考えられないヨツ！！」

するとワタルは意外なことを言った。

「なあ？ 凜ちゃん。ボクは自分が男だからこういうことを言うわけやないけどな、その男が一方的に悪いとは思つてへんで。」

「え？」

「女の子が無理やりそいつにそういうことをされたんやったら話は別やけど、お互いでわかつてしたのやつたら、責任は半分半分や。」

もちろん今回の妊娠みたく、結果的に女の子のほうに圧倒的にリスクができてしまうことはあるから、そいつが野口さんに黙って一人で帰ってしまったことはそいつが絶対に悪い。けどな、野口さ

ん自身も自分でしたことの責任は感じなあかんのやないか？ 一方的に被害者意識を持つことは彼女のためにもならんと思わんか？」

ボクはワタルを見つめた。

(ワタル…キミはそういうことをちゃんと考えられる人になったんだ…。)

(4年前には男同士で一緒に遊んでいたワタルだったのに。)

「…うん。わかる気が…する。」

「まあ、でも凜ちゃんは女の子やからな。必ずボクと同じ考えである必要はないで。色々な考え方があっていいって思うしな。」

(ワタル、キミがなんか…眩しいヨ…。)

「そういう女の子の思考っていうのか、考え方みたいのを、さっき凜ちゃんの強烈な平手打ちで気付いたわ(笑)」

「ゴ、ゴメン！ホントにゴメンね。」

「もうええよ(笑)」

「でもさ、えっと…なんかアタシがワタル君にできることってないかなあ？」

「できることって?」

「だって…。キミのことをちゃんと信じてあげられなかったことはホントに反省してるし、何かアタシでできることってないかなって思ったの。」

「お詫びなんてええよ(笑) そんなのしてもらってもボクのほうが困っちゃうわい。でも…。」

「でも? なに? なんか思いついたなら言って?」

いつもひょうひょうとしているワタルは、珍しく少し恥かしそうな顔をして

「いや、お詫びとかそういうんやなくてな…。」

「うん。」

「お互い今年の夏は受験勉強で塾やらなんやら今まで毎日ずっと勉強ばかりやったろ? もう夏休みも後半やしな。それで一日だけ気晴らしに今度は凜ちゃんと2人でプールでも行きたいなあって思たんや。」

「プールねえ…。プール! いいじゃない! 行こうヨ!」

「ホンマか?」

「うん! 行こう! いつにする?」

ワタルはすごく嬉しそうな顔をして

「じゃあな、今週の日曜日ってどうや？ 平日は凜ちゃん家庭教師やらあるやる？ 日曜日はたしか何もなかったよな？」

「うん、いいよお。じゃあ今週の日曜日ネ！」

「ヤッターアーーーーッ！！！」

「ふふふ…。」

（良かった。ワタルがこんなに喜んでくれて。それに初めてワタルと2人だけで遊ぶんだ。）

ボクは日曜日のプールの約束をした後ワタルと分かれて家に向かった。

しかし何か心に引っかかるっていつか…。何かを忘れているような気がして。

（うーーーーん…。なんだろう…。何か引っかかるんだよねえ。）

商店街の終りに近づいたとき、スポーツ用品店の前を通った。

（あ、そうだ。水着買わなくちゃ…。）

そしてそのときボクはハッと気がついた！

(そうだあぁー！っ！ あー！っ！ そうだったんだあぁー！
っ！っ！)

つまり、ボクは去年の夏休み中に突然生理が来て、自分が本当な女性であることを知ったわけで、その年の夏はずっと病院に入院していた。それで、手術があつて女性として生活するようになって、そうすると今年ボクは当然女の子の水着を着ることになるわけで。

学校が始まつて最初は女子の制服を着て行くことだけでもすごく恥かしかつた。それでもミコや井川さんみたいな女の子の友達ができるようになって、そういう娘たちがボクのことを支えてくれたんだ。

だから、もし海とかプールに行くことになったら、最初はミコとか女同士で行つて慣らして、そしてその次は家族で行けば弟の悟がいるからそれほど意識しないで行ける。それで最終ステップで男子とかも一緒に行くようになれば…みたいなことを考えていた。そして今回はそういうステップを全部通り越しちゃっていきなり男の子と2人で、しかもワタルと！ つまり初めて女の子として水着を着てそれを最初に見せる相手がワタル！

(ああ、どうしよお…。　すごく恥ずかしいよお…。)

(でも、あんなにワタルが喜んでいるんだし…。)

第二十四話 初デート？

その日の夜、ボクはミコに電話をしてワタルとのプールの約束のことを話した。

「ホントに！ えーっ！ そうなんだあ。」

「そーなのヨ」

「でもさあ…。」

「うん？」

「凜も嬉しかったでしょ？」

「え？…あ。んんん…。」

「ふふふ…。素直じゃないなあ（笑）」

「苛めないでヨオ！もうっ！」

「アハハ！」

「あ、それでさあ…。」

「なに？」

「水着のことなんだけどね…。」

「あ、アタシ買いに行くの付き合っただげよっか？」

「いいの？」

「うん、水着は自分ひとりで選ぶより他の人の意見を聞いたほうが本当に合うものを選ぶしね。」

「ミコ！感謝！」

「よろしいっ！アハハ…。」

木曜日、塾が終わった後。

ボクとミコはターミナル駅の駅ビルの中に入っている大きなスポーツ用品店に行ってみた。

店内には女性物の水着が所狭しと並んでいる。

「あ、これかわいいっ！ これも凧に似合いそうっ！」

ミコは目に付いたいくつかをサイズを確認して集めてくれた。

「やっぱりビキニはまだちょっと早いよね。 うーん…そうするとワンピースで色は…。」

「凧は薄い青かピンク系が似合いそう。 パステルカラーはちょっとキツイ感じがしちゃうよね。」

ミコはすごく楽しそうで、まるで自分がデートするみたいなの…。

そういえば、青葉学院大の芦田さんとはアレから何回か携帯に電話して話しているみたいで、ミコはそのたびに受験の相談とか色々な口実を考えてる（笑）

「じゃあ、凜。これとこれ試着してみて？」

ミコがたくさんかき集めた中から2人で相談して2着を選んでボクは試着室に入った。

「どう？凜 見てもだいじょうぶ？」

「あ、うん。いいよお。」

ミコが試着室のカーテンの中に首を入れて見てくれる。

「あっ！いいじゃん！ すっごい似合ってるヨ。 凜は大人っぽい
のよいかわいい感じのほうが絶対に似合うと思う。」

「ホント？」

「うん。でも凜ってけっこう胸大きいんだねえ！」

ボクは思わず両手で自分の胸を押える。

「アハハ！ うん、じゃあ、あと二つちも。」

「OK！」

「あ、いいや。さ！行こか？」

「あ、う、うん」

なんか……。今日のワタルはなんかぎこちない気がした。

電車に乗って30分の大きな総合プール。ここには普通のプールのほかにウォータースライダーや流れるプール、波のプールなど色々なタイプのプールがある。

ボクたちは男女の更衣室が分かれるところで

「じゃあ、着替えたらさつき決めた場所のところで待ってるからな。凜ちゃんを着替えに時間かかると思うから慌てないでゆっくり来ればええからな？」

「うん、わかったあ。じゃあね。」

女子更衣室の中はまだ時間が早いせいかわれほど人が多くなかった。ボクは空いているロッカーを探して、そこに貴重品と脱いだ服を入れていきタオルを巻いて、尊一緒に選んだ水着を身に付け、そして最後にパレオを腰に巻く。貴重品はその中に入れて、3千円だけ防水のポーチに入れて持った。

髪の毛は今肩下15cmくらい。ワタルが前に髪が長いほうがいいって言ってたので、あれから伸ばすようにしている。それをうなじのところでゴムを巻いてひとつにまとめその上からさらに花飾りの付いたヘアゴムを巻く。

少し時間がかかったけど、支度が終りボクはロッカーを閉めてワタルの待つ約束の場所に向かう。

「ごめんね。お待たせ…。」

ワタルがボクの方を振り向く。

「あ、あ…。えつと…。」

「へん…かな？」

「い、い、い、いや。ぜんぜんへんなんて…そんな。…いや、あの…。」

「だいじょうぶかな？」

「あ、えつとな…。すごく…似合ってる。すごくかわいい。」

「え…。ア、アリガト。」

「あんまり他の男には見せるときや？ 今日ボクとのデートやからなあ！」

「アハハ！」

ボクはフツとワタルの身体を見る。

肩幅の広くて、引き締まった厚い胸。腕と腿の筋肉。どれもワタルが男性であることを嫌でもボクに感じさせた。

それに対して自分の身体を見ると、小さな滑らかな肩、大きく出た胸、丸い腰とお尻。ポヨポヨの腕と太腿。わずか1年の間にボクたちの身体はここまで対称的になっていた。

「とりあえず、ここにビニールシートを敷いて場所を取ろうか。」

「うん。」

ボクたちは荷物をまとめておくと軽い準備体操をしてまず流れるプールに入った。

波に流されていきながらボクはワタルの腕に掴まってふざける。ワタルはボクの身体を持ち上げて水の中にザブンと落とした。

「きゃあああー」

「ほれえ！どやあ！」

「やったなあああーっつ！(笑)」

何かすごく不思議な気分だった。なんていうんだろう…。安心感？そういう感じ。そう、不思議な安心感。それで、何か今だったらどんなにたくさん人がいてもワタルを見つけられそうだな感じ。たくさんの人の中にもワタルだけ輝いてて、すぐにわかるみたい

な…。

「あーっ！楽しかったあ！」

お昼時になり、ボクたちはいったんプールを上がってシートを敷いた場所に戻った。

「凜ちゃん、何食べたい？ボク、売店行ってくるから食べたいもん言ってる？」

ボクは持ってきたバッグを取り出し

「あ、もし良かったら。アタシ、サンドイッチ作ってきたんだけど。」

「えっ！ホンマか！？ やっほおおーっ！っ！ 凜ちゃんの手作りやあーっ！っ！」

ワタルは本当に喜んでくれた。

「でも味は保証できないけど（笑）」

「そんなん美味いに決まってるがなっ！さ、食べよ！」

ボクは持ってきたバッグの中からサンドイッチを入れたランチボックスとりんごや梨などを入れたデザートボックスを取り出しカバーを開ける。そしてコップを用意して水筒の中の冷えた緑茶をそこに

注いでワタルに渡した。

「ハイ、どうぞ。」

「おおっ！美味そうやあーっ！じゃ、いただきますっ！」

レタスにハムにスライスしたキュウリにたまごのマヨネーズ合え、材料のバリエーションがそれほど多くない簡単なサンドイッチだけど、ワタルは本当に美味しそうに食べてくれる。

「メツチャ美味いやんっ！凜ちゃんも食べや？ 早よ食べんとボクが全部食ってしまうでえ（笑）」

「あ、大変！（笑）」

第二十五話　なんか意識しちゃう。

いろいろあつた夏休みもいよいよ終り、明日から学校が始まる。

ボクは明日の学校の準備を終えて、今日郵送で送られてきた夏休み中にやった模試の結果表をニヤニヤしながら見ていた。

英語	偏差値	74
国語	偏差値	71
数学	偏差値	72
社会	偏差値	72
理科	偏差値	70

三科目偏差値　73

五科目偏差値　72

三教科校内順位　4 / 288

五教科校内順位　5 / 288

>私立<

第1志望　青葉学院高等部（共学）・・・80～90%（合格安全圏）

第2志望　明友学園高校（共学）・・・90%以上（合格確実圏）

第3志望　実際女子学園（女子）・・・90%以上（合格確実圏）

>公立<

都立白洋（共学）・・・90%以上（合格確実圏）

「あ、凜おはよーっ！」

そしてワタル

「おはよーさん！」

ボクはフツとワタルと2人だけで行った夏休みのプールのときのことを思い出してしまっ。

「お、おは…よ…。」

あーっ！　なんか照れるよーっ！

ボクとワタルは別に付き合っているわけじゃない。ワタルに告白されたわけでもない。でもボクにとってワタルと一緒にいてすごく安心できる存在になっている気がする。

（ワタルはボクのことをどう思っているんだろうか？　女友達のひとり？）

席に着いてカバンの中の教科書を整理しながら横目でチラッとワタルの方を見る。

ワタルは何かの参考書を一心不乱に読んでいる。

（そういえば…。ワタルって小学校のときはボクとほとんど成績は変わらなかったんだよねえ。）

（ううん、むしろボクのほうがワタルより少し上だった気がする。）

ボクとワタルと久美ちゃんて夏休みの宿題の算数ドリルを一緒にや

つてたとき、ワタルが問題を解けなくて、一番成績の良かった久美ちゃんが一生懸命解き方を教えていたこともあった。

それが3年ぶりに会ったキミは、僕より小さかった身長は今ももうボクは見上げるくらい高くって、多分クラスで1、2番を争うくらいの秀才になってて。それに…、こんなに女の子の気持ちをわかってあげられるようなステキな男の子になってて…。

こんなこと言ったらきつと失礼なんだろうけど、ボクは今のワタルがどうしても昔ボクが知っていたワタルとつながらない気がしてしよつがない。

悪戯心でこんなことをフツと考えたりもする。

(まさか…、今のワタルはあのとときのワタルとは別人なんじゃ…。)

(ううん、そんなまさか(笑) まさか…ね。)

「凜ちゃん…。凜ちゃん…。」

そんなありえないことを考えていたボクはワタルの声にハツとした。

「あ、ゴ、ゴメン。なに？」

「ボーっとしてどないしたん?(笑) あんな、この前プールで撮った写真を現像して持ってきたんや。」

「わあ!見せて!」

ボクはワタルが差し出した写真を手に取った。

水着姿ですましたポーズをとって映っているボク。ボクが作ってきたサンドイッチにパクつくワタル。

何枚かある写真の中の一枚に目が止まった。

写真の中のワタルは優しい笑顔で、そしてボクの肩に軽く右手を置いて映っていた。

ボクは少し照れた笑顔で小さくピースサイン。

このツーショット写真は、たまたまその場にいた高校生のカップルに頼まれてツーショット写真を撮ってあげたとき、「キミたちも撮ってあげようか?」と言われて撮ったものだった。

ボクたちを撮ってくれたデジカメを渡してくれたとき、そのカップルがボクたちこう言っていた。

「なんかキミたちってすごくいい感じのカップルに見えてね。それでこのカップルに写真をお願いできたらいいなって、つい思ったんだ。」

「そうよお。女の子が彼氏と一緒にいてすごく楽しそうで、幸せそうな感じに見えたのよね。」

「え…。ア、アタシってそんな感じに見えました?」

ボクはすごく照れて言葉がどもった。

「うん、すごく見えたよお!」

そのカップルの女の子の方が優しく頷く。

でもワタルは意外とそのまま嬉しそうな顔をしてたっけ…。

この写真はそれから先ずつとずつと大切に持っていた。

.....

10月も半ばになろうとしていた土曜日。

今日は三者面談の日。

まだ志望校を確定するのは早い時期だけど、本人の希望とこれからの勉強方法とかを話し合う。

ボクは母親と学校へ行き、面談室のある教室の隣の教室が待機室になっていてそこで順番を待つ。

ちなみにボクの後には井川さん。

井川さんもお母さんと一緒に来ていた。

ボクの母親と井川さんのお母さんが世間話をしている間、ボクも井川さんと話し始める。

「小谷さん、青葉受けるんでしょ？ 頑張ってるもんねー！」

「えへへ…。でも受かればいいなって思って受けるから。井川さんは第一志望はドコ受けるの？」

「アタシは都立の戸川高校にしようと思ってるの。青葉も考えたんだけどね、大学でもしできたら医学部行けたらって思ってるの。青葉大は医学部がなかったから、都立高から国立大の医学部受けようって思ってる。」

「医学部？ わあ、すごいねえ！ でも、井川さんなら絶対その夢叶えられると思う。井川さんずっと頑張ってきたし。でも井川さんがお医者さんになったら病気になるたときも安心だよネ！」

「アハハ！ なれるといいけどねー！ でもずっと夢だったんだあ。あ、そういえばね、この前安田君ともそんな話したのヨ。そしてたらね、彼はカメラマンになりたいんだって。」

「えーっ！安田が？ へえーっ！そうなんだあ？ あ、でもこの前みんなでデイズニールランド行ったときもすごいカメラでアタシたちのことを撮ってくれたしね。そういえば、アタシ、安田のことを小学校のときから知っているけど、5年生の遠足のときカメラでみんなのことを撮影してたことあったよ。」

「そうなんだあ？ 小谷さんは小学校のとき石川君ともよく遊んでたんでしょ？」

「うん、そう。ワタル君は5年生の夏休みに大阪に転校しちゃったけど。それまではアタシと安田とワタル君それと今A組の久美ちゃんと同じクラスで。」

「久美ちゃんって安藤久美子さん？」

「あ、うん。井川さんは久美ちゃんを知ってるの？」

「うん。中1のとき、あたしも藤本さんや安藤さんと同じクラスだったから。そのとき藤本さんは安藤さんと仲良くって結構話してたけど、アタシは別のグループで2人とあんまり話す機会なかったの。でも、美化委員会で一緒だったときとき遅くなって途中で一緒に帰ったりして、そのとき安藤さんとわりと話してたなあ。」

「そうなんだあ。なんか不思議なつながりだねえ。」

「ホントヨネ（笑） そのときね、小谷さんや石川君のこと話に出てきたことあったのヨ。」

「えーっ！ びっくり！ 久美ちゃん どんなこと言ってたの？」

「ふふふ。へんなことじゃないよあ。今はもうほとんど遊ばなくなっちゃったけど、小学校のときまでは幼稚園からの幼馴染で「哲ちゃん」という男の子と「石川君」って子がいて、3人でよく遊んでいるたのって。でもその中で自分は女の子1人だから、何をしても遊ばうかっていうのを決めるとき2対1でいつも負けちゃうのって。（笑）」

「そうなんだあ（笑） でも今は逆転して1対2になっちゃったから、ワタル君辛いね。」

「アハハ、ホントだねえ！（笑）」

第二十六話 ミコの小さな恋

ボクが女性として生活するようになって一番初めにできた女友達はミコだった。

退院してから初めて学校に行ったあの日、ボクは初めて女性の制服で登校をした。

「哲ちゃんが女の制服着て学校に来たぞ！」

ボクは当然予想されるその言葉に怯え、そして山岸先生に連れられて教室に入ったとき足がガクガクと震えていた。しかし実際はボクの予想と反してとても「普通」であった。まるでひとりの女の子が転校してきたときのように。

そして井川さんの一言に心を救われて自分の席に着いたボクに最初に言葉をかけてくれたのがミコだったんだ。

「ね、『凜』でいいよね？」ミコは当然のようにこの言葉をボクにくれた。

そのときボクはずっと前からミコと友達だったような気持になれたんだ。

それからボクたちは本当に色々なことを話してきた。女の子の生活のこと、受験のこと、異性のこと、そしてときには生理の相談にものってくれた。ミコはボクから見るとちょっとお姉さんタイプで、そして意外と積極的な性格だった。わりと好きと嫌いがはっきりしている。でも彼女はそれを顔に出すことはしない。嫌いな人とも安

定したお付き合いができる。でも好きな人には自分からも色々なことを話しかけるタイプ。ただし積極的だけど自分からでしゃばるようなことはしない。周りを良く見ている、頭の良い娘だった。

じつはボクはミコのことを中2のクラス替えて同じクラスになって初めて知ったんだ。ただ中1のときもすごい可愛くて頭のいい女の子が他のクラスにいるという噂くらいは知っていた。中学生になって幼馴染の久美ちゃんと遊ぶ機会はほとんどなくなっただけ、学校の中で会えば挨拶して簡単な会話くらいはしていた。

ミコは1年のときは久美ちゃんと同じクラスでけっこう仲が良かったらしいから、もしかしたらボクはそのとき気付かなかっただけでミコとすれ違っていたのかもしれない。

中2でミコと同じクラスになったとき、ボクは初めてリアルミコを見た。

彼女のことを本当に可愛い子だと思った。ただ不思議とその時にもミコに対して恋愛感情みたいなものはなかったと思う。それは今になって考えれば同性本能だったのかもしれないけど、こういう娘は同性からも憧れられることもありえるんじゃないだろうか。

ミコの体型はどちらかといえば少し痩せてはいるけど女の子らしいスタイルで、そして少し茶色のかかった肩くらいのボブカットにくりっとした愛らしい目、ちょっと悪戯っぽい感じの口元、ふっくらした少し赤みのある頬の本当に愛らしい女の子だった。

ミコと同じクラスになったときさらにびっくりしたのは、彼女は本当に頭の良い女の子だった。

返される定期テストはどの教科もほとんど満点がそれに近い。でも勉強ばかりしているという雰囲気でもない。

その当時のボクのミコに対するイメージは「本当にこんな完璧な娘もいるんだなあ…。」というものだった。

だからミコは男子にもすぐくもてた。でも、今までミコに付き合った男子がいるという話は聞いたことがない。

そういえばミコにこういうことを言われたことがあった。

「アタシはあのおとき先生に言われて凜のことを助けるためにああ言っただんじやないヨ。凜と友達になりたいって思ったから声をかけたの。だって友達になりたいって思わない人に声をかけても不自然でしょ。」

だから凜はあのおときアタシに助けてもらったなんて思ったら大間違いなヨ。

アタシは凜と友達になりたいって思って、凜もアタシと友達になりたいって思ってくれたからあのおとき「うん、もちろん！」って返事したんだよね。」

ボクもきつとそうだったと思う。あのおときボクもミコと友達になりたかったんだ。そのときボクとミコの席が隣同士だったのはもしかしたら運命だったのかもしれない。

そんなミコが小さな恋をした。

相手はボクが入院していたときの同室だった青葉大2年生の芦田さん。

芦田さんはすごく優しい瞳をしていて、そして中学生のボクの話も本当に真剣に聞いてくれてアドバイスをもしてくれた。

そしてボクとミコが青葉高等部に見学に行ったとき、ミコと芦田さんは出会った。

大学の正門のところでボクは偶然見かけた芦田さんに声をかけた。芦田さんが青葉大だったことはボクも覚えていたけど、大学なんて広いしそれに自由に授業を取るって入院中に芦田さんにも聞いていたからまさか会えるとは思っていなかった。

あのととき芦田さんを見るミコの目は今でも覚えている。

あのとときのミコは本当に女の子の目をしていたんだ。

あれからミコは、色々と理由を考えては何回か芦田さんの携帯に電話をしているらしい。受験の相談、親に叱られたこと、友達との何気ない会話…。

芦田さんは5歳年下の中学3年生の女の子からの電話に本当に優しい声で答えてあげているそつだ。

「昨日ね、芦田さんとこんなことを話したのヨ。」

時折ミコがボクに聞かせてくれる芦田さんとの電話の内容はボクも楽しくなってくるものだった。

ある日の朝教室に行くと、ミコは戸を開けて教室に入って来たボクの姿を見つけるなり駆け寄って来て

「ねえ、凜。来週の日曜日って何か用事ある？」と聞いてきた。

「ううん、別に何もなかったと思うけど、何かあるの？」

「あ、うん。じつはさあ、その週に芦田さんの大学で学園祭があるんだって。それで「アタシも行ってみたいなあ…。」って言ったら、「じゃあ、日曜日でよかったら案内してあげようか？」って言うってくれてね。」

(ミコ、本当に嬉しそう。)

「うん。いいヨ！行くヨヨ！」

「ホントに！？わあい！」

ボクは考えた。

できればミコが芦田さんが2人きりになれる機会を作ってあげたい。そこでボクはミコに内緒である作戦を立てた。

すごい数の人が来ていた。

正門の前は人ばかりで渋谷駅の八千公みたい。

「うわぁ！すごい人数なんだねえ…。」

「うん、やっぱり中学の文化祭とか全然違うよね〜！」

「よっ、おはよおー！」

そこに時間キツチリで芦田さんが現れた。

ミコと芦田さんはあれから2回会って喫茶店で話をしたそうだ。

「あ、お、おはよおございます。」

ミコは少し照れたように挨拶。ボクもぺこりと頭を下げる。

「すごい人だろ？ キャンパスの場所が渋谷にあることもあって土日には高校生や中学生も見に来るんだってさ。」

「へえー！ でもホントすごい人ですね。あ！お店もいっぱい出てるーっ！」

「じゃあ、まずは…。」

芦田さんは前もって買っておいたパンフレットをボクたちに見せて行きたい場所を探させる。

「あ、凜。コレ見て？」 占いの館「だって！ おもしろそう！」

「ホントだ。じゃあ最初ここからスタートする？」

「どれどれ…。 1号館3階か。 よしっ！ じゃあ、行ってみよ
う！」

「はいっ！」

並木道の途中にある古めかしい校舎。 いったいいつの時代に建て
られたんだろう？

ボクたちはどっしりした石の階段を上がって3階に向かう。

教室の前には

『占いの館～あなたの未来をお見せします～』

と大きな看板が立てかけてある。

（へえ、コレが大学の教室なんだ。普段はここで授業するんだ…。）

その教室はボクが想像していた大学の教室よりずっと小さかった。
ボクちの学校の教室のちょうど2倍くらいの大きさで、普段はき
つとここにあるだろう机や椅子は全部取り払われていた。

「大学の教室って思ったより小さいんですね。」

ミコが意外そうに芦田さんに尋ねると

「ハハハ、大学には色々な教室があるからね。これは一番小さいクラスの教室じゃないかな。人数の多い大講義室とかだとひとつで千人くらい入れるところもあるんだよ。」

「エーッ！千人ですか！わあ、想像できない。」

「だろ？じゃあ、そういう教室も後で行ってみよう。」

「わあい！行きたい！」

その教室の窓には黒いカーテンが掛けられて薄暗い照明。そしてベニヤ板でいくつかの小部屋が作られている。

「怪しい雰囲気じゃない？（笑）」

なんかワクワクしてくる。

芦田さんは小部屋の様子を見回し

「なるほど、テーマごとに小部屋があるわけか。未来の職業の小部屋、テストの山賭け小部屋、恋愛の小部屋……。さて、どれにする？」

「恋愛の小部屋——っ！——っ！」

ボクとミコは声を揃えて言った。

「さすが女の子！よしっ！じゃあ入ってみよう。」

小部屋に中は薄暗いところに小さな赤い照明がひとつ。そして真っ黒な頭巾とマントを着て魔女のような大きな鼻をつけた女の人ひとり。

「よくいらつしゃいました。恋愛の小部屋によろしく〜〜〜。」

（なんかすごいコテコテの雰囲気（笑））

「さて、まずはどなたから診てしんぜようっ。」

「どっにするっ。」

ボクとミコはヒソヒソと相談。

そしてミコが

「はい、じゃあ、アタシから！」

「よろしい。では…。」

その魔女さんは机の上にカードを5枚並べてそれに別にカードを加えていったものを順番に開いていく。

「おおっ！ お嬢さん、アナタは今想ってる人がいますね？」

ミコは少し慌てたように答える。

「え、あ、えっと…。そう…ですね。」

ミコはチラッと芦田さんの方を見た。

芦田さんは相変わらず優しくそんな笑顔でその様子を見ている。

魔女さんは続けて言う。

「その人は中々ステキな男性のようだねえ。結ばれたらきつとアナタも幸せになれますよ。」

「ホントですか!？」

魔女さんはニッコリ微笑んで

「はい。確かです。」

「それではお次はそちらのお嬢さん。どれどれ…。」

(ドキドキ…。)

「おや、アナタも想い人がいますね?」

ボクはワタルの姿を思い浮かべてしまう。

魔女さんが二枚目のカードを開く。

「ん?」

「どうしたんですか?」

「あ、ううん。アナタも良いカードがでていきますよ。」

「ホント?」

「はい。頑張っている恋愛をしてくださいね。」

第二十七話 ミコの小さな恋 2

「オッ、もう12時近いのか。そろそろお昼にしようか？」

芦田さんがボクとミコに声をかける。

「はい。」

「そつえばお腹すいたねえ。」

「芦田さん、この前教えてくれた学食連れてって？」

「いいよ、今日はボクが奢るから。好きなもの選んでいいからな。」

「わあいー！」

.....

青葉学院大には2か所の大きな学食がある。

ひとつは地下学食で席が2千くらいあってもものすごく大きい。

もうひとつは17号館というすごく大きな校舎の1階にある学食で、こちらのほうは地下学食の半分くらいの席数だけど、窓からキャンパスの中庭あたりを見渡すことができる絶景のスポットとなっている。

ボクたちは今回は17号館の学食に連れて行ってもらった。

大きな窓、日差しがたくさん入り込んでとても明るい雰囲気。地下学食の半分の規模といっても、それでも千席近い席数はボクらから見れば考えられないような大きさだ。

メニューを見ると、そばやうどん、カレーライス、スパゲティといった軽食から定食やランチ物までいろいろあって目移りする。デザートだって、この前このキャンパスに来たときに芦田さんに奢ってもらったソフトクリームのほかあんみつとかミニパフェまである。

「やっぱり大学ってすごいよねえ！　ひとつひとつの規模とかがすごく大きいし。」

ミコは食堂の中を見渡しびっくりしたように言う。

「何か迷っちゃう。ミコ、なんにする？」

「うーん、凜は？」

「えっとね…。あつ、この『かにクリームコロッケ』にしようかな！」

「じゃあ、アタシは…あ、ハンバーグおいしそう！　これにしよう！」

芦田さんもメニューを見直し

「よし、じゃあオレは青葉物語にするかな。あと、デザートも頼

「んだら？」

「あ、ありがとうございます。じゃあ、またソフトクリームにしようかな。」

「アタシも！このソフトクリームすごい美味しかったよねえ！」

「OK！この学食のソフトは人気が高いらしいからね。じゃあ、ここで食券を買って、それでそれぞれの売り場に取りに行くんだ。オレに付いて来て？」

「はあい。」

定食コーナーや麺類コーナーなど種類ごとにコーナーがあって、そこで食券を渡してメインやご飯、お味噌汁などを順番に渡してくれる。

「こんなに値段が安いのに、いっぱい種類があって、大学ってすごいよねえ！」

「それにさあ、すごい人がいっぱい！」

辺りを見回すと本当にたくさんの人が楽しそうに話をしながら食事をしている。

「いつもこうなんですか？」

ミコが芦田さんに尋ねる。

「そうだねえ。大学っていうのはキャンパスの中に色々な学部の人たちがいて、色々な勉強をしてるんだ。だから友達も本当に色々なタイプのヤツがいてね、すごく楽しいよ。キミたちが受ける高等部は高大一貫教育っていうて、大学のうちの基礎段階の授業を高等部の生徒にも開放してるらしいから、大学のキャンパスで授業を受ける機会もあるんだってさ。」

「えーっ！ 高校生なのに大学の授業受けたりできるんですか！？」

「へえーっ！ なんかすごくびっくり！ そういえば高等部の制服来た人がけっこうこの学食の中にいますよネ？」

「うん。高等部にも高等部生専用の学食があるけど、やっぱりメニューはこっちのほうがずっと多いからね。けっこうこの学食にくる生徒がいるみたいだよ。」

「なんか高校生なのに大人っぽいよねえ…。 ハア…憧れる。」

「凜、絶対受かりたいよねえ！」

「うん、絶対受かりたい！」

.....

楽しいご飯が終りデザートも食べ終わって

「さあ、午後はどこから廻る？」

ボクは「はいっ！」と手を上げた。

ミコはボクを指差して

「はい、凜くん」

「えっとね、さっき並木道の突き当りの向こうになんかヨーロッパの神殿みたいな建物があったんですけど、あれって何ですか？」

芦田さんが少し考えて

「凜ちゃんが言ってるのは多分『真澤記念館』のことじゃないかな。かなり昔図書館として使っていたらしいけど、今は記念館になっていて国の文化財にもなっているらしいよ。」

「えーっ！すごい！あのね、それでその前で写真撮りたいなあって思っんですけど、どうでしょう？」

「あ、アタシも撮りたい！凜、一緒に並んで撮ろう？」

「うん、撮ろうね。」

「よし、じゃあ行ってみよう！」

学食の校舎を出て緑に囲まれた中央の広場を通って深い木立の奥にギリシア神殿のような何本もの柱のある古い建物が見えてくる。

「あれだろ？」

芦田さんがその方向に指をさした。

「あ、そうそう！あれです。」

そしてその建物の前でカメラを用意。

芦田さんがミコとボクの写真を撮ってくれる。

「いくよ。はい、チーズ！」

パシャッ！

「あ、じゃあ次はミコと芦田さん並んで？　アタシ撮ってあげるか
ら。」

「わあい　凜、サンキョ！」

「はい、撮りますよ〜！」

パシャッ！

そのとき数メートル離れたところから聞いたような声が

「あれ！ 凜ちゃん？ おおっ、藤本さんもおるやないか！ どないしたん？」

ボクらがクルッとそちらの方を向くと

…そこにはワタルの姿が。

「ワタル君、どーしたの！？ びっくり！」

ミコが驚いたように声をあげる。

「びっくりはこっちも同じやで。ボクは青葉の見学に来たんや。ボクもここの高等部受験するやしな。」

「あ、そっかあ。アタシたちは学園祭案内してもらってるヨ。あ、紹介するね。青葉学院大の2年生で芦田さん。芦田さんは凜が前に入院してたとき同じ病院に入院してて知り合ったんだって。それで前に青葉に見学に来たときアタシも凜に紹介されたの。」

「そうなんやあ。あ、はじめまして。凜ちゃんやミコちゃんのクラスメートで石川涉います。よろしゅう。」

「「じちら」ぞ、よろしく。」

「えー、でもワタル君も来てるなんてホントびっくりしたよお！」

フフフフフ…。

じつはこれはボクが仕組んだことなのです。

そしてボクは思い立ったように

「あ、ねえ！せっかくだしさあ、大勢で動くより2人ずつに分かれて行動しない？ アタシ、ワタル君と見ていくから、ミコは芦田さんと2人で。ね、いいでしょ？」

芦田さんは少し戸惑ったように

「え、あ、ボクはいいけど…。ミコちゃんはせっっかり凜ちゃんと来たのに、いいの？」

ミコは照れたそぶりを見せないように

「ア、アタシは…うん…。芦田さんさえよかったです。」

「じゃあ、決まりネ！ それで後はフリータイムにして。 芦田さん、この後は何か予定とかってあるんですか？」

「いや、特にないけど。」

「それじゃ、お互いゆっくり廻りましょう。」

「やったーっ！凜ちゃんとデートやあ！」

「デートじゃないぞっ！」

ボクはワタルの頭を軽く小突いた。

するとミコがボクの横にスッと来て耳打ち

「えへへ…。凜、感謝！」

ボクもミコに耳打ち

「頑張って！」

第二十八話 クリスマスのマーメイド

次の日の学校で

「ミコ、芦田さんと楽しかった?」

「ウン。びっくりしたよお。凜、仕組んだでしょ?(笑)」

「え?...ア、アハハ」

「でも、アリガト。あの後ね、一緒に色んなところ回って、それで帰りに大学のそばの喫茶店でお茶を奢ってもらっちゃったの。ウフフ...、なんかね、芦田さんがいつも行くお店なんだって。」

「へえー!よかったねえ! 芦田さんの色んなことわかってきて楽しいでしょ?」

「ウン! きつと向こうはアタシのことを妹みたいにしか思ってないんだろうけど、それでもいいんだあ。あ、そういえば。」

「なに?」

「そっちはどうだったの?ワタル君と。」

「あー、えっと...。アタシたちはフツーだよ。お店とか見て、教室回って。あ、でも...。」

「ウン?」

「ある教室で講演会をやつててね。それでワタル君が聞きたいって
いうから入つたの。」

「大学の講演会？ 難しくなかった？」

「ウン。アタシはぜんぜん何言つてるかわかんなかったんだけどね、
ワタル君がすごく真剣にその話を聞いてて。 チョット意外な一面
？」

「へえ。確かに意外だよな？ あの人のそういうのに興味あるんだ？」

「みたいヨ。 国際政治経済学の講演会みたいだったんだけど、将
来英語を生かせる仕事ができたらいいなって思つてるんだって。」

「わあ、すごいねえ！ でもたしかにワタル君って英語がとくに成
績いいもんね。 英語だけを見たら多分学年1番じゃない？」

「あ、そうかも。 ミコは将来何になりたいとかつて考えたことあ
る？」

「アタシはねえ、エへへ…まあできたらなんだけどね、小学校の先
生になれたらいいなあって…。 青葉大に教育学部あるしね。」

「そうなんだあ！ あ、でもミコだったらきつといい先生になるヨ。
勉強だけじゃなくて生徒と一緒になって色んなことできる先生にな
れる気がする。」

「アリガト。 まあ、希望だけどネ（笑） 凜はどうなの？」

「あー、アタシかあ…。 ウーン…。 今はぜんぜん考ええてないや（

教室でつい漏らしたボクのため息にミコが笑いながら言った。

「だってさあ、家でお風呂入ってるときも英単語のお魚さんがアタシの周りを泳いでいるのヨ！」

「アハハハハ！ それっていいネ！ でもアタシも同じようなモンだよ。夜ベッドで目を閉じると英熟語を背中に背負ったヤギさんが行列して歩いてるの（笑）」

「ホント？ アハハハハ！」

「あ、でもさあ、今週末のクリスマススイブくらいは何かやりたいなあ。凧はイブは何か予定あるの？」

「ううん。うちは毎年ご飯の後にケーキ食べるくらいだから。」

「じゃあさ、その日はちょうど日曜日だし、3時間だけみんなで集まってパーティーしない？」

「あ、いいねえ。久保ちゃんと奈央と…。」

すると横から井川さんがニコツと微笑んで

「アラッ、いい話してるじゃない？ アタシも混ぜて？」

「モチロン！アタシたちは井川さん一緒にいたほうが楽しいから。でもいいの？」

「フフフ…。やっぱり、ホラ？ 中3のクリスマスは一生に一度しかないし。アタシも思い出は作れるときにいっぱい作っておきたいんだあ。」

「そっか（笑） じゃあ女子はこの5人と…。」

「それじゃ男子もこの前デイズニールランドの時のメンバーに声をかけてみようよ。」

「そうだねえ！じゃ、決まりーっ！」

そしてボクはさっそくこのことをワタル君に相談

「エエやんかあー！ ボクも毎日勉強ばかり疲れたわあ。 クリスマスクらいパーツとやりたいわ。」

「じゃあ、ワタル君から安田とかにも話してくれる？」

「エエヨ。 ちょっと待ってな？」

そう言ってワタルは男子のメンバーを招集。

「オッケー！」

「いいヨ。」

そしてメンバー全員が集まって時間と場所の打ち合わせ

「そうだなあ。時間は3時から6時くらいでいいんじゃないか？」

「そうだね。6時だと完全に暗くなる前に帰れるしな。」

「じゃあ、場所は？」

「女子5人と男子4人で合計9人だから、どっかカラオケルームの広い部屋とか予約できないかな？」

「あ、さんせー！それだったら心配なしで騒げるしね。」

「じゃあ、駅前の『アリス』でいいじゃん？あそこなら夕方7時までは中学生でもOKだから。」

「そうだな。電話番号知ってる？もう予約入れちまおうぜ？」

- - - - -
当日

ボクは母親にイブパーティのことを事前に話してして少しばかりのオシャレを覚えてもらった。

ブラックをベースに薄いピンク花柄を散らしたシフォンのワンピースに茶色のコート。

白のポーチ、髪には小さな花のついたピンクのカチューシャ。

そしてピンク色のブーツも玄関に用意。

「あ、チヨット待って?」

「え?」

「とおりの準備を終わって立ち上がったボクに母親が声をかける。

「せっかくのクリスマスだからネ。」

そう言っつて、ボクを鏡台の前に座らせて目立たない程度の薄ピンク色の口紅を塗ってくれる。

「ホラ、もっと可愛くなったヨ。」

「エへへ…。」

鏡に映った自分の姿を見て少し照れてしまうボク。

「じゃあ、今日は7時前には家に戻れると思うから。」

「気をつけてね。楽しんでらっしゃい。」

「いってきまーす。」

外に出ると心配した雨は降ってないけど曇り空。空気がすごく冷たい。

「ハア~~~~」

吐く息がはつきりと真っ白い。

それでもボクはなぜか自然と早足になって約束の待ち合わせ場所に向かっていた。

待ち合わせの場所のアリスの前には、すでにミコと井川さんがいて話をしていた。

「やっほう!」

「あ、凜。わあ!オシャレしてきたでしょ?」

「エへへ…。ちょっとだけ。ミコと井川さんもステキだねえ!」

「ウフフ…。こんなときくらいやっぱり…。ねえ。」

「あ、男子は?」

「もう来てるヨ。それで今、中で部屋の手続してくれてる。」

そういうことを話しているうちに久保ちゃんと奈央も到着。

「じゃあ、行こっか?」

お店に入ると男子4人が店員さんと打合せをして待っていてくれた。

「おまたせ〜」

彼らはボクたち女子5人の姿を見ると

ワタルは大げさなそぶりだ

「おおおっ！ みんなすごい可愛いやん！」

ボクはワタルの頭をポカッと小突き

「コラッ。わざとらしいゾ（笑）」

「じゃあ、中入ろうぜ」

安田を先頭に男子連中、ミコ、井川さん、奈央、久保ちゃん、そして最後尾にボク。

ボクたちは12人用のパーティールームに案内される。

するとススツとワタルが後ろの方に寄ってきてボクに小さな声で耳打ちした。

「凜ちゃん、ホンマ綺麗やで。」

「…ホント？」

「うん、すごくステキやあ。」

ボクはそんなワタルの言葉に顔を赤くして下を向いてしまう。

会場は前の方に小さなステージ、そしてそれを囲むように大き目のガラステーブルとソファ。

テーブルの上には9人分の大きなクリスマスケーキとローストチキンやサラダ、簡単な軽食とチョコやおかし、フルーツなど。

そしてオレンジジュースにコーラ、アルコール抜きのシャンパン。

男子と女子は交互に隣り合わせて座る。

「あ、凜。こっちに座んなヨ。」

ミコがボクをワタルの隣に誘導してくれた。

そして井川さんの隣には安田が目ざとく陣取る。

秀才の井川さんとカメラオタクの安田。

最近のこの2人はなぜかけっこういい雰囲気に見える。

今日の司会役は安田。

ステージに立ってマイクを持つ。

「さて、それではもうすぐでいよいよ受験。その前に今日は中学生最後のクリスマスイブ！ みんなで思い切り盛大に祝っちゃいませよー！」

「オーオーツツ！」

「それじゃ、みんなシャンパンを注いで。」

「メリークリスマスー！ー！」

.....

それから3時間、ボクたちは飲んで歌ってそして最後に司会の安田がステージに立つ。

「えー、それでは今日の最後を締めくくって…チークタイム！！！」

「ええええーっ！ 恥ずかしいよお！」

女子は顔を赤らめてしまう。

「いいじゃん。きっと中学生最後の思い出だし。」

「ソウソウ！さあ！女子5人、男子4人とチョット人数は合いませんが、チャレンジするカップルはぜひ前に出て！」

するとびっくり！！

「安田君、踊ろう！」

井川さんが安田を誘って前が出る。

「へへへ、わりーな。」

「ちつくしょー！安田、オメーいいとこ持っていきやがってっ！」

「フッフ、司会の役得だな。」

甘く流れる音楽に合わせて、2人は軽く抱き合ってステップを踏む。

「じゃあ…工藤君。アタシでいいかな？」

奈央が工藤を誘う。

「やったあーっ！」

そして牧野と久保ちゃん。

「ホラ、凜？」

ミコがボクをワタルの近くに寄せる。

「えつと…。」

モジモジするボクにワタルは

「姫、ボクと踊ってくださいますか？」

ボクはワタルの差し出した右手に自分の右手をそつと乗せる。

ゆっくり流れる切ない音楽と静かに流れる甘い時間。

身長差16cmのワタルの肩にボクは軽く両腕を絡めてる。

ボクの顔はワタルの胸の辺り。

ワタルの鼓動が小さく聞こえる…。

ドキドキ、ドキドキ…。

ボクの胸の音、ワタルに聞こえてないかな…。

そして6時。

舞踏会の終りの鐘の音が鳴る。

「わぁ！真っ白！」

外に出るとさっきまでの曇り空は雪に変わっていた。

きつとあれからすぐに降り出したんだろう。
たった3時間の間にずいぶん積もっていた。

「ワタル君、凜のこと送ってあげて？」

ミコがそう言ってくれる。

「ええヨ。」

ボクとワタルは白い絨毯のような道路を2人で肩を並べて歩いていく。

途中、小さな公園の前を通る。

ボクはその公園の方を指差して

「あ、この公園！ ね、ちょっとだけ入ってみない？」

そう言っただけでボクはワタルの手を取って公園の中へ入っていく。

本当に小さな小さな公園。

滑り台とかそういう大したものはない。

小さなブランコが2つと小さな砂場とそして真っ赤なベンチが1つだけ。

ボクたちは2つ並んだ小さなブランコに腰を下ろす。

「ね、ワタル君は覚えてるかなあ？ 昔、この公園で小学生のときアタシとワタル君と久美ちゃんの3人でよく遊んだヨネ？」

「アア、覚えとるで。 あんときはボクらヤンチャな悪がき2人と可愛い女の子が1人。 一緒に遊んだ哲はボクにとって大切な親友やった。」

「アハハ…。 久美ちゃんがよく「アタシの好みもちよつとは聞いてヨツ！」ってよく怒ってさあ。 男の子2人だったからいっつも男の遊びばかりで（笑）」

「アハハ…。 そやったなあ。 でも…。」

「でも？」

するとワタルは自分のブランコから立ち上がりボクの前に静かに立った。

「もう、キミはステキな女の子や…。」

「え……。」

そして…

ワタルは

ボクのおでこに

小さな

キス…。

「……。」

「あ、あんまり遅くなっちゃうと凜ちゃんのお母さんに怒られてまっな。行こか？」

「……うん。」

ボクたちは家までの帰り道お互いの手をずっと離すことなく歩いて行った。

第二十九話 受験ラプソディ

そして入試時期

明日はいよいよ青葉学院高等部の入試日。

今日までに滑り止めで受験した実際女子学園と明友学園に合格していたので、とりあえず進学先は確保できている。それでも、やっぱりなんとしても青葉に入学したい。他の学校に合格するとその気持はよけい強くなっていった。青葉の入試が終わればあとは都立高校入試になるが、青葉に合格できればもう都立は受けるつもりはない。

入試前日、授業が終わると青葉を受験する人がひとつの教室に集められ、学年主任の先生が最後の訓示をする。ウチの学校から青葉を受験するのは、女子ではボクとミコと他のクラスで2人、男子はワタルと他のクラスでもう1人。

教室の席にバラバラに座り、最初に学年主任の網代先生、そして受験科目の英語、数学、国語の各先生が注意点をアドバイスしていく。

「いいか、青葉の数学は難問奇問的なものは少ないが問題数が多い。特に計算処理は的確に、ケアレスミスがないように落ち着いて解くんぞぞ。」

「青葉の英語は長文読解が特徴です。かなり長い長文で難易度も高いものが出されます。もし文中の単語でわからないものがあったら絶対に動揺しないこと。注釈にそれに関するものがない場合は全体や前後の文意から想像していく。わかりましたね？」

「えー、国語も英語同様長文読解が中心になってきます。この場合文中の指示語には特に注意して正確に捉えるように。」

「それでは、皆さんの検討を心から祈ってます！ 頑張ってきてください！」

ボクたちは最後に起立をしてお辞儀をする。

「ありがとうございました。」

ボクたちが教室を出ようとしたとき、担任の山岸先生に声をかけられる。

「えっと、まず藤本さん。あなたはずっと安定した高い成績を保ってきたから安心はしているけど、英文和訳で少し雑なところがあったりするから気をつけてね。キーになる単語は前後の文意からなるべく正確に訳すことヨ。」

次に小谷さん。ここ数ヶ月のあなたの頑張りは本当にすごいわ。ただ少し解答のスピードが遅い感じも見受けられるから。慌てて解いて間違えてもしょうがないけど、解けるところは全部ちゃんと記入するつもりでね。

それと石川君。あなたはすごく成績が高いけど、よくポカミスをするがあります。青葉は基礎問題が多いから合格点がそれだけ高いの。だからポカミスは絶対にしないように、よく問題を見て解くように。

それぞれ皆わかったわね？」

「はい」

「じゃあ、わたしがしてあげられるのはここまで。後はあなたたち自身がしっかり頑張ってきて！ 先生は学校でアナタ方のことをずっと応援してますからね。 はい、いつてらっしゃい！」

.....

そしてその日の夜

ボクは最後の持ち物チェック。

受験票、筆記用具、消しゴム、ハンカチ。 ティッシュ、まとめノート。

それと明日母親がお弁当と水筒を用意してくれることになっている。

6時ごろには家庭教師の加山先生から電話がかかってきて色々な注意をしてくれた。

さあ！ やるだけのことはぜんぶやったっ！ ガンバローツ！

.....

そしてとうとう受験当日

ボクは7時に起きる。

顔を洗って髪をとかし学校の制服を着て、朝ごはん。

「お母さん、凜の頑張りをずっと見てきたから、一生懸命頑張ってくればきっと良い結果が付いて来るワヨ。」

「うん。頑張ってくる！じゃあ、行ってくるネ！」

「はい、いつてらっしやい。」

受験は9時30分開始だけど15分前の9時15分には受験場に入る事になっている。

ボクとミコそしてワタル君の3人は8時15分に駅の改札で待ち合わせをした。

「おはよあー。」

8時7分、ボクが駅に着くとすでにミコが待っていてくれた。

ミコは待ち合わせをするときはいつも早めに行って待っていてくれる娘なんだ。

そっとうところがすごくしっかりして本当に感心する。

「ワタル君は？」

「まだみたい。でももう来るんじゃない？約束は15分だし。」

「まさか…寝坊とか？」

「アハハ、さすがにアノワタル君でも今日はないでしょ（笑）」
そういう冗談で入試の緊張が少しほぐれてきたとき
ワタルがやって来た。

「やあー！ おはよおさん。 早いなあ？」

「あ、よかった！もし寝坊だったら置いてっちゃおうかって話してたのヨ。」

「薄情やなあ（笑） まあとにかく出発しよか？」

「ウン。」

最寄の駅から電車に乗って約40分で渋谷駅に着く。
そこから宮益坂を登って10分ほど。

高等部の正門に辿り着く前からもう人の列ができている。

身長157cmのボクは列の最後尾から少し背伸びをする。

「わあー、すごい人だねえ…。 何人くらい受験するんだろう？」

ミコはそついつところも良く調べている。

「えっとね、インターネットの発表では男女合計で約1100人。」

例年の合格者数が200人くらいだから、倍率は単純に5・5倍くらい?」

「じゃあ5〜6人に一人つてことかあ。やっぱりすごいよねえ。なんか周りにいる人みんな頭良く見えてくるヨ。ワタル君、先のはう見える?」

このとき身長174cm、背の高いワタルはひょいっと見渡し

「あ、正門のところでなんかチェックやつとるみたいやで。前の方は動いてるみたいやからすぐに入れるよ。」

そして10分後ボクたちはようやく正門に辿り着く。

青葉学院高等部は男女共学だけど、入試は男女それぞれの人数で募集している。

だから受験会場の教室も男女別になっていた。

「じゃあ、ワタル君。アタシたちは南校舎だから。」

「オウ、ボクは北校舎やな。そんじゃ、試験が全部終わったら正門のところで待ち合わせやな?」

「ウン。じゃ頑張って!」

「2人もな、頑張れーっ!」

試験開始15分前

ボクとミコは受験番号が違つたため別々の教室。

周りを見ると本当にみんな頭が良さそう…。

10ヶ月間ボクは頑張ってきたけど、ここにいるみんなもそれぞれきつと頑張ってきたんだ。

でも、もう今は自分の力を信じるしかない！

教室のドアがガラツと開いて入試担当者の先生が入ってきて教壇に立つ。

「えー、それでは本年度の青葉学院高等部入学試験をこれより実施します。注意事項は……。」

「それでは1時間目は英語の試験です。これより試験問題と解答用紙を配布します。問題用紙は絶対に開かず、解答用紙の所定箇所に受験番号と氏名をすべて記入してください。」

「よろしいですか？ それでは解答時間は今から50分間です。それでは…はじめてください！」

先生の声と同時にバツと問題用紙を開く音がする。

（落ち着いて！ 正確に！ そしてスピード！）

ボクはすべてのことを置き去って問題に集中した。

1時間目の英語が終り、15分休憩した後2時間目は数学。
そして11時40分に数学の試験が終わって、そこから12時45
分までお昼休憩。

お昼ご飯は各自持参したお弁当を自分の席で食べることになってい
る。

周りの人は皆別の中学の人たちで顔見知りはいない。
みんなピリピリと緊張した顔。

ボクは母親の作ってくれたお弁当を開いた。
お弁当の上には母親の顔のイラスト入りで

「凜、がんばれっ！」とメモが添えられていた。

お母さん、すごくうれしかったヨ。
帰ったらちゃんとお礼を言おう。

花柄のおランチボックスの蓋を開けると、ふりかけをかけたご飯に、
おかずはミニハンバーグ、ひじき、ウインナー、卵焼き、コールス
ローサラダ、そして端の方にデザートにパイんとイチゴが添えられ
ていた。

水筒から冷えたお茶を注いでお弁当を食べる。

お弁当を食べ終わって試験開始まで後20分。

ボクは今のうちにと思いトイレに向かった。

女子のトイレは列ができて時間がかかる。

これは男子と女子の生活のすごく違う点で、生理のときは特にだけど、女の子として生活をするようになってボクはなるべく小まめにトイレに行くことを気をつけるようになっていた。

行ってみると案の定、列は女子トイレの入口をはみ出して廊下まで並んでいる。

() とりあえず列に並ぼう…。

するとボクの背中をチヨンチヨンと叩く人が

後ろを振り向くと

「あ、ミコー！」

「凜も今のうち？ 良かった、会えて。 どうだった？」

「うん、とにかく解答欄は一応全部埋められたヨ。 山岸先生にスビード注意されてたし。」

「よかった。 ねえ、数学さあ、角度でけっこう難しい問題でたよねえ？」

「あ、そうそう。 アタシもそう思った。 あそこの補助線がさあ…」

そんな話をしていると長い列もすぐに自分の順番が来る。

「じゃあ、最後の国語がんばろーネ！ 全部終わったら正門行く前

にこのトイレの前で待ち合わせしよよっ!!」

「オッケー！ じゃねーっ！」

「ハアアア~~~~~」

すべての科目の試験が終わった。

ボクとミコは女子トイレの前で待ち合わせをしてから、ワタル君の待つ正門に向かった。

そこではすでにワタル君がボクたちを待っていてくれた。

「終わったねーっ！」

「ああ、終わったああーっ！ これで私立は全部終りやあ！」

「あー、なんかスッキリした気分！」

「アタシもーっ！ アハハ。」

ミコが「ね、大学のキャンパスの中を少し歩いて行かない？」と誘う。

「あ、いいネー！ 行こう！」

冬で大学キャンパスの並木道は葉が全部ないけど、それでも本当に

ステキな光景。

大学は今休み時期みたいで、歩く人はまばらだった。その代わり卒業生なのだろうか、若い夫婦の感じの2人が乳母車を押しながらキャンパスの中を散歩していたりする。その姿にボクは未来の自分を重ね合わせたりする。

（ボクもいつかああやって赤ちゃんを産んで乳母車を押して『誰か』と一緒に歩いてたりするんだろうか……。）

そして横にいるワタルをチラッと見たりする。

（もしかして……ワタルと？）

（まさか…フッフ…。）

「高等部に入学できて将来ここに通えるといいなあ…。」

「そやなあ。ずっと皆で一緒におれるとええのになあ…。せめて大学まででも一緒におれたらええのになあ…。」

ボクはワタルのその言葉に不思議な感じがした。

「え？ワタル君、他の大学行っちゃうの？」

するとワタルは少し慌てたように

「え？ い、いや。大学は青葉いくで！ ボクはもう今、半分青葉生になっただような気分やからな！」

「アハハ、ワタル君、気が早いネ！」

ミコが笑いながらそう言った。

でも、ボクはなぜだかワタルのその言葉が心に引っかかったんだ。

（どついう意味なんだろう……。）って。

第三十話 運命の合格発表！えっ、ワタルが！

青葉の入試が終わって次の日

学校を終わって家に帰ると、6時くらいに家庭教師の加山先生が来てくれた。

問題用紙はそのまま持ち帰ることができた。

解答はボクが問題用紙の余白欄に書いておいたものと記憶に基づいて再現したものをもとに加山先生が採点をしていく。

「フム…フム…フム。それで、これもオツケーっと…。」

「どう…でしょう？」

ボクは一心不乱に問題とボクの解答を見比べてチェックする加山先生の顔を覗き込む。

「もう…ちょっと。ウン…ウン…ウン…よし！終わったわ。」

「採点終わったの？」

「うん、採点っていつでも配点がわからないからあくまで想定だけだね。えっと、それでね…。」

「はい。」

「英語は多分85%くらい取れてると思うわ。青葉の英語でここま
で取れたなんてびっくりヨ！ 数学は、こことここがちょ
っと違ったカナ。でも多分70〜75%くらいはいつてると思う。
あと国語が思ったより良くできてたわ。80%くらい取れてるわ
ね。そうすると、平均で75〜80%くらいかな。」

「それだとうなんでしょう？」

「例年の青葉女子の合格点は70%くらい。過去5年間で一番高
かったときでも73%だったから多分だいじょうぶじゃないかって
気がするかな。」

「ホント？」

「まあ、もちろん正確な配点で計算しているわけじゃないからね。
間違ったところの配点がたまたま高い場合は凧ちゃんこの点数
は下がることになるけどね。でも、まああんまり大きなブレはな
いんじゃないかな…とは思っけどネ。」

「ああ、受かりたいなあ…。」

「ホントね。アタシも凧ちゃんと一緒に10ヶ月やってきたから、
アナタが本当に頑張ったのすごくよくわかってるわ。アタシがも
し採点者だったらきつと凧ちゃんのこと合格にしたいくなるな。」

「アリガトウございます。とにかく発表まで1週間。」

「そうね。なんかドキドキワクワク…ね（笑）」

「フフフ……。」

ドキドキドキ……

(神様、神様、神様~~~~！)

(ここはミッションスクールだから今は神様にしかお祈りしません！)

(どうかお願い！)

(合格できたらきつといい子になりますからぁぁーっ！！)

そして

とうとう10時

正門が開かれた。

ボクたちは発表の掲示がしてある中庭に小走りに歩いていく。

(あ、あそこだ！ あと50m、 あと30m あああああ……。)

そして上から辿る必要もなく、その番号はボクの視界にいきなり入って来た。

「キヤア!!! あったあああ—————っっ!!!」

20296番!

(あった! やったああ—————っ! とつとつ青葉合格—————っ!)

「凜、あったの? あったんでしょ?」

「ウン! あった! ミコも?」

「ウン、アタシもあったヨ! やったね—————っ!!!」

「よかったね—————っ! 高校行ってもよろしくね。」

「「ちら」そ、ずっと仲良くしようね!」

「ウン! もちろん!」

これでやっとすべてが終わった。

ボクとミコの受験ラプソディは今このとき終わり。

(あ、そうだ。ワタルはどうだったんだろ?)

ボクはワタルに教えてもらった番号を一応確認。

それから10分くらい

ボクもミコもようやくドキドキがなくなって落ち着いて話せるようになった。

入学後の制服や文具のことなど、ボクたちはとりとめもない話にすら華が咲く。

すると

そこにワタルが遅れてやってきた。

「やあ、やあ、遅れてすまんかった。お、その嬉しそうな顔だと2人とも合格したようやな！」

ボクたちは少し照れながら揃って右手で小さなVサインを作る。

「さて、それではボクの番号は……。」

そう言いながらワタルは今までボクとミコが見ていた掲示板に目を走らせる。

「おおっ!?! おおおおおおっっ!?!」

そう叫びながらワタルはその場でガクツと腰を落としてしまった。

「…な、ない。ボクの番号が…ない。凜ちゃんもミコちゃんも受

かつたんにボクだけ落ちてしもうた。　ボクだけ落ちてしもたああ
あーーーーーっっ!!!」

「ワ、ワタル君……………」

ボクとミコはお互い顔を見合わせた。

「ワタル君……………」

アタシたち、アナタになんて言えばいいのか……………」

「ええよ。気にせんといて…。ハハハ…高校行っても時々は遊んで
くれよ…。ハハハ…」

「は？　だって、毎日会えるんじゃないの？」

ミコがそう言う。

「ハハハ…そやな。電車やったら駅で毎日会えるし…。トホホホ
……………」

ボクとミコは地面に座り込んだワタルの肩に手をかけてこう言った。

「あのね…」

アタシたちは…

アナタが…

あまりにバカ！！すぎて…

もう情けなくって…情けなくって…」

ワタルはチラッとボクらの方を見て

「キツツイ言葉やなあ…。今のボクには耐えられんわ。 帰ろ…。」

もうボクも呆れ果てて我慢の限界！！

「あーっ！もうっっ！ ワタル君？ まずは落ち着いて今キミが見た掲示板の最初に書いてある表題を見なさいっ！」

ワタルは力無さげに顔を上げて掲示板を再度見る。

「青葉学院高等部 ××年度女子…合格者…発表。 ん？ 女子？」

「ハアアアア…」。 もうキミのそっかしさにはアタシも呆れて物も言えないワ！ あのね？男女別々で受験したでしょ？キミは受験のとき入試の先生が言ってた注意をぜんっぜん！聞いてないんだネ！？ コツチは女子の発表ヨ！ 男子はあっちの掲示板！ 早く見てきなさい！」

「なあああ〜〜んや、ハハハ！ そんなことやろうと思ったわい。 そんじゃ、行つてくるわ！」

「ハイハイ（苦笑）」

ボクはさっきワタルの結果を見ておいた。

そしてあのそそっかし坊主の声はすぐに聞こえてきた。

「やったああー！ー！ー！ー！っ！ ボクも合格やあー！ー！ー！っ！」

第三十一話 ずっと一緒に…。

10ヶ月間、ずっと憧れていた青葉学院に3人で合格！

「あ、山岸先生に報告しておこうヨ。」

ミコはそう言うと自分の携帯電話を取り出した。

「モシモシ…。あ、山岸先生ですか？ 藤本です。 エへへ…あのね、ウチのクラス3人とも青葉に合格です！」

ボクはミコの話す携帯にそっと耳を近づけると、山岸先生の張りのある声が漏れて聞こえてくる。

「まあー！本当！？ じゃあ、小谷さんと石川君も合格だったのネ？」

「はい。 今、みんなで青葉にいてネ、もう3人でちゃんと合格書類ももらったんですヨ。」

「そう。 本当におめでとう。 本当に、本当に…アタシも嬉しいわ。」

「あ、今順番に凜とワタル君に代わりますネ。」

そう言って、ミコは山岸先生と話している携帯電話をまずボクに渡した。

「モシモシ、あ、小谷です。…はい…はい、ありがとうございます！はい、チョット待っててくださいネ」

そう言つて今度はワタル君に交代。

「石川です。そうなんや、先生、ボクも合格しましたわ！ いやっはっはーっ！ ありがとうございますう！」

3人が一通り話すとまたミコに代わり、ミコはもう一度お礼を言つて電話を切つた。

「山岸先生、すっごい喜んでたねー！」

「少し泣き声混じつたよ。」

「あ、それでな、とりあえず帰りに3人で学校に寄ってほしいっていつてたでえ。」

「そうだねえ。じゃあ、まず学校に行こうか？」

「うん！」

青葉学院のキャンパスを出て青葉通りを渋谷に向かう。

その途中、ボクたちは立ち並ぶお店のウィンドウにいちいち反応してしがみ付いたり、コーヒーショップでまずはコーヒーとハンバーガーで祝杯挙げたり、また大学キャンパスもあるので古本屋さんもたくさんある。

まっすぐ歩けばほんの10分程の道程なのに、その途中にはキラキラと色々な宝石が散りばめられたよう。

「アタシたち、4月からこの道を毎日通うんだネエ！」

「うん、ホントに夢みたい。 ああ…早く4月よ来い！（笑）」

「渋谷駅の周りにでっかいプラモショップもあったさかいにナ！
今度寄ってみたる。」

ボクたちの目はすでに青葉生になった自分の姿を思い浮かべて、ウツトリしてしまっていた（笑）

そして学校に到着

着いたのはちょうどお昼が終わった頃

ボクたちはそれぞれ私服で発表を見に行ったので、まずはその足で職員室に向かう。

ガラガラッ！

職員室のドアを半開きにして

「あゝ……。」

ドアの近くにいる2年担任の椎名先生に声をかける。

椎名先生はボクたち3人に気付くと

「アラッ！ まあ聞いたわよーっ！ 青葉3人とも合格したんですって？ あめでとー！」

「ありがとうございます。あの、山岸先生…いらっしやいますか？」

「ハイハイ、あなた達のこと待ってたわよ。 山岸先生ー！ー！ー！ー！？」

椎名先生が奥の方にその声をかけると

山岸先生と一緒に教頭先生もやって来た。

「お帰りなさい！」

まず山岸先生がボクたちにそう言ってくれた。
この言葉がすごく心に響いて嬉しかった。

「エへへ…。ただいま…です。」

近くにいる教頭先生も大喜びでボクたちを迎えてくれる。

「いやー、3人で合格とはすごいもんだ。本当に良くがんばったな！」

「はい、ありがとうございます。 先生方のおかげです。」

「まあ、とにかく中に入りなさい。お茶でも入れるわ。」

そう言われて、ボクたちは職員室の中にあるテーブルを囲んだソファに座った。

「それにしても大したもんだ。1クラスから3人青葉に合格っていうのは初めてじゃないんですか？ねえ、山岸先生。」

周囲にいた先生たちも寄ってきて言った。

「そうですね。3人ともみんな学年で最上位の成績だったけど、何があるのかわからないのが入試だから。3人の中で一番スパートをかけたのは小谷さんだったけど、小谷さんのことはわりと安心感があったんだけどね、私はじつは石川君のことがすごく心配だったのヨ。」

ホラ、アナタって成績はすごく良いけど、ときどき信じられないようなポカミスするでしょ？（笑）だから本番では絶対に注意してほしかったの。」

その先生の心配はズバリです！（笑）

しかし当の本人のワタルは

「先生、ボクみたいな冷静沈着な男がそないなことしまっかいナ（笑）。合格発表はもう当然受かってる思て余裕で見ましたワ。アッハッハ！」

そこにミコがすかさず突っ込む

「ハアアーーーーッ!? ワタル君、よく言っわヨ! (笑) ね、凜?」

「うん! だよネーっ! ね、先生。聞いて!」

「あら、なにかしら? 教えて?」

「アタシとミコが自分の合格発表確認して掲示板の前で話してたら、後から少し遅れてワタル君が来たの。」

「フンフン…。それで?」

近くの先生たちも身を乗り出して聞き耳を立てる。

「そしたらネ、ワタル君、女子の発表の掲示板見た瞬間、ガクンって座り込んだじゃって、「ボクの番号が…ない。凜ちゃんもミコちゃんも受かったんにボクだけ落ちてしまった。ボクだけ落ちてしまったああーーーーーっっ!!!」って泣き出しちゃって!」

「ワハハハハハーーーーッッ」

「アハハハハハーーーーッッ」

職員室の中は大爆笑！
笑いの渦になった。

「ひいひいーっ！だ、誰か、腹がよじれて死ぬーッ！（笑）」

「さすが石川っ！（笑）」

「やってくれるとは思っていたが、そこまでやるとはな！（笑）」

「オマエ、青葉より吉本芸人目指したほうがいいかも知れんぞっ！
（笑）」

先生たちはワタルに大笑い！

ワタルは真っ赤な顔をして

「凜ちゃん、それを言わんといてーな！！（笑）」と叫ぶが

先生たちの笑いはしばらく止まらなかった。

ボクたちは、その日は教室に寄りつとも思っただけど、まだ合格が決まっていない人もいたので職員室を出た後そのまま家に帰ることにした。

途中でミコと分かれ、ワタルはボクを家まで送ってくれろと言つて
2人で歩き始めた。

(クリスマスイブのときもこうやってワタルが送ってくれたんだよ
ね…。)

「なあ、凜ちゃん。この前の公園にちよつとだけ寄つていかんか？」

「ウン、いいヨ。」

ボクたちは、昔ボクとワタルと久美ちゃんの3人で遊んだ

そしてイブのときワタルがボクのおでこに小さなキスをくれたあの
小さな公園のブランコにまた腰を下ろした。

冬の夕暮れ時。

あたりは人通りも少ない。

「合格おめでとう」

いつもの優しい笑顔でワタルがボクにそう言う。

「アリガト。ワタル君も、おめでとう」

ボクも笑顔でワタルにそう返す。

「あんな……。」

「ウン。なに？」

「こつちに戻ってきて、そんで商店街で偶然凜ちゃんと久美ちゃんに会ったとき……。」

「ウン。」

「ボク、正直びっくりした。ショックやったなあ。昔3人でいつも遊んでいた「哲」が女になってしもつて。」

「……」

「久美ちゃんが言ったよな？ 哲ちゃんは女の子になったんじゃないかって、元々女の子だったんだって。」

「…ウン。」

「ただ、ボクはそのときは正直まだ割り切れなかった。こつちに戻ったら久美ちゃんがいて、そして哲がいて、また3人で遊べるなあって思ってたからな。」

「…ウン。ゴメン……。」

「でもなあ、転校した次の日、帰りに1階の下駄箱のところで会ったやろ？ 覚えてるか？」

「あ、ワタル君が指を釘に引っ掛けて怪我しちゃったとき？」

「うん、そうや。そのときなボクの指にバンドエイドを貼ってくれた女の子。ボクな、そのときその娘に恋してしまったんや。」

「え……………」

「ボクは、凜ちゃんが好きや。」

「だって…。だって…。アタシは昔…キミの男友達で…」

「いや、キミは昔からずっと女の子やったんや。」

「だって…アタシなんかで…」

「じゃあ聞くが、ボクなんかじゃ嫌か？」

涙が溢れてくる…。

恥ずかしい。

泣いちゃいけない。

そう思ってるのに…。

ボクはワタルの胸に顔を埋めた。

「嫌じゃない…嫌じゃないヨ。アタシも…アナタのことが好き…だヨ。」

ワタルは胸に埋めたボクの頭を優しく撫でて、そしてボクの顎を少し持ち上げる。

ボクは静かに目を閉じる。

そしてワタルの顔がボクの顔に近づいてくる。

重なり合う…ボクの唇と…ワタルの唇。

ワタルの吐く息が生温かい…。

そして唇が離れたとき、ボクはふたたびワタルの胸に顔を埋めた。カレの顔をまっすぐに見れなかったんだ。

トク…トク…トク…。

ワタルの鼓動がボクの心の中に静かに響いていく。その響きはとても心地よかった。

(この人と…ずっと一緒にいたい…。)

ボクはそのとき心からそう思っていた。

第三十二話 before graduation

卒業式まであと3日。

今日はミコの2人でボクたちが4月から通う青葉学院の制服のサイズ合わせに渋谷にやって来た。

青葉の制服の取扱いは渋谷周辺のいくつかのデパートにあったので、ボクとミコはそのうち西部デパートに予め予約をしておいた。

青葉学院高等部の女子制服は、上が紺のブレザーとブラウスカシャツで下はプリーツスカートが基本で、その他に肩に青葉の校章が入った薄手の紺のセーターがある。

ブレザーとセーターは標準服が決まっっていて、シャツかブラウスとプリーツスカートは一応標準仕様もあるけど、一定の範囲内で柄やタイプなどを自由に認められている。

この制服は昔昭和20年代初めに青葉学院の生徒が自分たちで決めたものだそうだ。そのときの先生たちは逆に制服なんか無いほうがいいのではとさえ言ったそうだけど、生徒たちは自分の学校に誇りを持つためにも制服はあったほうがいいと言って作り、その後少しずつ時代の変化で変わりながら今の制服になったらしい。そのため高等部の生徒はこの制服に強い誇りを持っていると入学案内に書いてあった。

西部デパートに入り、制服コーナーのある6階にエスカレータを上

がっていく。

「わぁー！ 色んな学校の制服があるんだねー！」

色とりどりの制服。

青葉みたいなブレザーもあつたり、セーラー服、うちの中学と似たボレロと組合わせたものもある。

ブラウスも赤や茶色のリボンがついたものとかもあるけど、あいにく青葉のブラウスはリボン付きじゃない。

「ねえ、凜。これ可愛くない？」

「あ、ホントだね。このリボンつきのすごく可愛いー！」

「夏服でキュロットの学校があるんだねー！」

「へえー！どれどれ？」

ボクたちは自分が通う予定の学校の制服はこっちに置いて目移り状態（笑）

すると大はしやぎのボクたちに店員さんが声をかけてくる。

「いらっしやいませ。今日は制服のご用命でございますか？」

「あ、はい。学校からもらった入学書類で予約はもうしてあって、今日はサイズ合わせに来たんです。」

「それはありがとうございます。 それではご入学予定の学校名とお名前を教えてくださいませんか？」

「あ、はい。 学校は青葉学院高等部で、名前は小谷と藤本です。」

「青葉にご入学ですか。 それはおめでとうございます。 えっと…小谷様と藤本様ですね。 あ、はい。 確かにご予約をおたいただいております。 それでは、こちらへどうぞ。」

ボクたちは奥のほうにある女子の試着コーナーに連れて行ってもらう。

「本日は上着のブレザーとセーターのご注文ですが、ブラウスやスカートはいかがなされますか？」

「あ、ブラウスは標準タイプのを3着くらい買いたいですけど、スカートは自分で選んで組み合わせようと思ってるんです。」

「承知しました。 青葉は制服がわりと自由ですから、そうされる方が多いですよ。 ただ今日はサイズ合わせでのイメージをつくるために、標準のスカートも一緒に着けて頂いてよろしいですか？」

「あ、はい。」

「ミコ、なんかスカート貸してくれるみたい。」

「わあ、写真撮っちゃおうよ。」

店員さんが最初にボク、そして次にミコのサイズをメジャーで測ってくれる。

身長、肩幅、着丈、胸周、それとあとでスカートを選びやすいようにウエストとヒップのサイズも。

「それでは仮のものをご用意しましたので、あちらの試着室で着替えていただいでよろしいですか？」

そう言われて、ボクたちは自分のサイズに近いブレザーとブラウスとスカートを渡されて試着室に入る。

紺のブレザーの襟のところには入学式でもらうことになっている青葉学院の校章はまだない。

そして真っ白のブラウス。

スカートは膝丈より少し上くらいの青のチェック柄のプリーツスカート。

「エへへ……。」

試着室に備え付けられている鏡の中の自分の姿を覗きこみ思わず照れ笑い。

数分後外から店員さんが声をかける。

「お着替えはもうよろしいですか？」

「あ、はい。だいじょうぶです。」

そう言うと試着室のブラインドがサツと開けられて店員さんがボクの身体を指で触って確認していく。

「ウエストはもうすこし絞ったほうがいいですね。あ、それと少しお胸がキツイ感じがしますが、だいじょうぶですか？」

さすが！

じつは最近ちょっとブラがきつい気がするんだヨネ。

店員さんの話では、アンダーとトップの差があるからAよりBカットのほうがいいと言われた。

「ね、せっかくだから今写真撮ろうヨ？」

隣の試着室にいるミコが携帯電話を取り出してカメラに切り替える。

「あ、じゃあアタシも撮ろう。」

ボクもバッグから自分の携帯を取り出した。

「はい、じゃあ撮りますよー！」

パシャッ！

店員さんにそれぞれの携帯で自分だけとボクとミコの2人ペアでの写真を撮ってもらった。

「はい。それでは仕上がりは3月20日になりますので、それから2日以内にご自宅にお届けにあがります。」

「じゃあ、よろしく願いします。」

さあ、これで上着は終わった。

あとはスカートとブラウス、シャツ選び。

ボクはそのための費用として母親から10万円を渡されていた。

「これで気に入ったのを好きなだけ買ってきていいから。」

でも10万円なんて大金は滅多に持ち歩いたことがない。

お年玉で貯まったときくらいだろうか。

お財布に入れてバッグにしまってもなんか落ち着かない。

「さあ、じゃあまずスカート買いに行こうヨ！」

「オツケー！ どこに行く？」

「えつとね、とりあえずセンター街の中から歩いていかない？ それでスペイン坂のほうに行ってみて。そっちにきつと色んなお店があつた気がするヨ。」

「いいねー！じゃあ今日はじっくり探しちゃおうー！」

そしてボクらはまずセンター街の入口から入っていく。

途中いくつかのお店の中を見ながら制服に合いそうなブリーツスカートを探す。

「ね、これどう?」

「あ、可愛いー!」

そんなことを言いながら歩いてみると、後ろからいきなり誰かにボクの肩を掴まれた。

「ねえ、女の子2人で来てるの?」

振り返ると高校生くらい感じの派手目の感じの服を着た男が2人ニヤニヤしてなんかいやらしい。

(ハア? 誰…この人たち)

「オレたちも2人で来てるんだ。」

「はあ……。」

(ナンパかあ……。めんどくさいなあ……。)

「どこから来たの?」

「いえ……。」

「今日は何しに?」

「あ、買い物…ですけど……。」

「じゃあ、オレたち買い物付き合っよ! 一緒に探そうぜ!」

「あ、いえ…あの、いいですよ。そんな…」

そのうちの一人がボクの肩に右手を乗せてきたけど、ボクは思わずその手をすり抜けた。

「ゴメン。アタシたち今日は女同士で買い物する予定だから！」

業を煮やしたミコが2人にはつきり言う。

「いいじゃん。気にするなって。オレたち付き合っからさ。どっかでお茶でもしない？」

（しつっこいなあ。）

「付き合ってもらわないでいいです！ お茶もしません！」

ミコが言うと2人の態度は急に豹変した。

「なんだヨ！態度ワリー女だなあ！」

「なにスカしてんだヨ。」

（なんでアンタらにそんなこと言われなきゃいけないんだあー！）

ボクもプチっとキレた。

「あのね、アタシたちは2人で買い物したいんです！ だから付き合ってもらわないでいいって言うてるの！」

そしてボクとミコは足を速めて歩き出す。

すると

「オイ、ちょっと待てよ？」

背の高いほうの男がミコの肩を鷲掴みにした。

「やめてっ！」

ミコが思わず声をあげる。

ボクはミコの肩を掴んでいるその男の手を振り払った。

ドンッ！

そのときボクはもう一人の男にいきなり飛ばされた。

「きゃあっ！」

ボクはその場で思わず転んでしまった。

「凜！ ちょっとアンタたちなにするんのヨ！！いい加減にして！！」

そのとき

たまたま近くを通りかかろうとしていた制服姿の高校生の男の人が、その2人の男たちの胸ぐらを掴み投げ飛ばした。

一瞬のことでボクらもびっくり。

その人はすごい力で2人をボクたちから引き離した。

「コラッ、なんだテメーは？」

その人は鋭い視線で2人に言った。

「オメーラ、しつつこいヨ。女の子たち、嫌がってんだろーが。」

2人は立ち上がってその人のことを取り囲む。

「なに一人でいい格好してんの？」

「やっちまつか？」

そしてそのうちの背の高いほうの男がその人の頬を殴ろうとしたときその人はそのパンチを片手のひらで受け止めて、反対にその男の腹に蹴りを入れた。

「ぐふううう…。」

その男は思わずその場にうずくまる。

「テ、テメー！」

するともう片方の男が近くに落ちていた鉄のパイプに目をつけ、それを拾って構えた。

そのとき

「オイ、トオル。どうした？」

フツと見るとその人の友達らしき人たちが数人寄ってきた。

「いや、なんかコイツらが女の子ナンパしてたんだけど、女の子がすげー迷惑してたみたいなんで…。」

「なんだ？ナンパかヨ。女の子が嫌がってるんだったらオマエらしつっこくしないでやめとけヨ。」

その2人は人数が増えたのに一瞬たじろぎながらも

「オマエら、オレたちがどこの高校だか知ってるの？ オレら国修館だぜ。オマエら、どこの高校ヨ？」

「オレらか？ 青葉学院高等部のモンだ。」

(え、青葉の人なんだ！？)

その2人は

「青葉ー！？ 青葉みてーなお坊ちゃんお嬢ちゃん学校がなに言ってるの？しめちまうぞ！」とあくまで粋がる。

すると最初に助けしてくれた背の高い人が

「オレは青葉学院高等部空手部の笹村 透ってモンだ。テメーの高校の空手部主将の高橋はオレの小学校からのダチだが、それでも

そついつ口を通すんだな？」

この言葉を聞いて2人の態度はいきなり豹変した。

「え！高橋さんの？マジっすか？」

「あ、いえ。もういいっす。すみません。」

そのまま脱兎の如く消え去った。

「あの、ありがとうございます。」

ボクとミコは彼らにお礼を言った。

その背の高い人は

「いや、いいヨ。センター街の中はけっこう危ないから、女の子
だけならなるべく人通りの多いところを選んで歩いたほうがいいぜ。」

（さすが青葉学院の男の人、優しいっていうか紳士なんだねー！）

「はい。あの…。」

「うん、なに？」

「青葉学院の人なんですか？アタシたちも4月から青葉の高等部
に入学するんです。」

「おおーっ！そうなんだあ！　じゃあ、オレらの後輩になるんだな。じゃ、また学校で会ったらよろしくな。」

「はい、こちらこそ。　先輩、本当にありがとうございました。」

「気にすんな。じゃな。」

そう言いつと彼らはさり気なく去っていった。

第三十三話 after graduation

中学の卒業式

振り返ればこの3年間はボクにとってきつと一生忘れられない時間になると思う。

男子として中学に入学し女子として同じ学校を卒業する。

一言で言ってしまうえばそういうことなんだろうけど、その過程で受けた経験、そしてたくさんの人から受けた優しさ。その一つ一つはボクにとって宝石のようにキラキラと輝いている。

中2の夏休み、突然僕の身体に訪れた女の子の生理。

男として何の疑いもなく育ってきたボクにいきなり突きつけられた「女という性」の事実。

それまではずっと女の子は可愛いものという漠然とした価値観を持ってきたけど、それは男という立場の自分から見ての「可愛い」という価値観であって、実際自分が女という立場になって何を可愛いと考えるのかはぜんぜんわからなかった。

その中で母親や祥子先生や幼馴染の久美ちゃん、そしてミコや井川さんたちとのふれあいの中で、女は女という性に生まれ女の身体だからそれを自然に受け入れていくんじゃないかって感じられるようになった。

女として生まれても男っぽく育てられれば性格的に男っぽくなっていく、だから女は女として育てられるから女の価値観を持つというのを聞いたことがあるけど、それはあまり正しくない気がする。

男性と同じように女性にも色々な人生の送り方があっていいと思うけど、女性が命をつなげられる性であることは女性であることの唯一の証明だって思う。

生理があるから自分が女であることを自覚し、そして可愛いつていう価値観も女性が子供を産む身体になる過程で自然に身に付けるものじゃないだろうか。

以前祥子先生が話してくれたことがあった。女性が男性よりも優しい顔つきなのは赤ちゃんがお母さんの優しい顔で安心できるように。女性が男性よりも柔らかい腿や腕なのは赤ちゃんを優しく安定して抱くため。そして女性が男性よりも優しい声なのはお母さんが赤ちゃんの心に優しく話しかけるため。女性の身体がそうであるのはすべて理由があるって言ってたことがあった。きつと可愛いつていう価値観も女性が子供を産みそして育てるために必要な感情じゃないかって思う。

今、教室の中はけっこう騒がしい。

でも今日だけは教室の中がいくらザワザワしてても山岸先生は注意しない。

教室のそこかしこで友達と語らっている一人ひとりの姿を優しい顔で静かに見つめてくれている。

きつとボクたちが今こうやって友達と話していることは僕たちの中学生活にとって最後の思い出になるんだって思ってくれてるんだって思う。

「ね、先生。一緒に写真撮ろうー！」

「ハイハイ。いいわヨ。」

ミコが声をかけて、ボクと久保ちゃん、奈央、井川さんが集まる。カメラマンはボクたちの専属カメラマンの安田プロ。

「じゃあ、先生が真ん中ネ。みんなポーズしてーっ！」

山岸先生と女子5人。

揃って片足をちょこっと上げて、そして両手の指を立ててを頬につける。

安田がカメラのピントを合わせて声をかける。

「いくぞー！ ハイ！ポーーーーーズ！」

パシヤッ！

そしてそんな束の間の楽しい時間もいよいよ終り、教室のスピーカーから放送が流れる。

「これから卒業式を行います。卒業生の皆さんは9時45分までに速やかに体育館に入場して下さい。」

「ハイ！じゃあ、皆さん。行きますよーっ！最後はピシッと行きましょーっ！」

ボクたちの胸には卒業のリボン。

女子はピンクで男子は青色のリボンを着けている。

うちの学校は区立中学にしてはわりと大きめの体育館を持っている。

そこに各クラスごとに男子と女子が一列ずつパイプ椅子に座る。

少し間を開けて後ろの方には父兄席。うちも母親と父親が両方とも来てくれている。

そして壇上に向かって右の壁に沿って先生方と来賓の人たち。

「続きまして、女子……」

「井川 楓」 「ハイ！」

そして

「小谷 凜」 「ハイ！」

ボクは席を立って壇上に静かに上がる。

校長先生はボクの顔をまつすぐ見て卒業証書を手渡し、そして

「小谷さん、キミにとってこの中学での3年間はきつと一生忘れられない宝物になったと思います。これからもずっと優しさと思いやりを大切にして、キミが素敵な女性に成長していつてくれることを心から願っています。」

「校長先生、本当にありがとうございます。」

そしてボクの中学3年間が終わる。

式が終り、そして最後は1〜3年の先生方が出口まで列を作ってボクたち卒業生を送り出してくれる。

そこを通り過ぎる女の子たちの何人かは涙を浮かべている。

女の子は涙もろいっていうけど、それは自分がそういう立場に立って初めてわかった。

女子ってというのはどちらかといえば男子より「ときの流れ」というのをゆっくりそしてしつかり受け止めようとする。そしてその中で自分の思い出を埋め込もうとする。たとえば男子はわりと何か大きな目標のためには他の色々なことを犠牲にすることをあまり厭わない。でも女子はわりと物事をコツコツするけど、何かのために他の何かを犠牲にするというのを好まない。だから女の子は一つ一つの思い出をとっても大切にするんだと思う。

式が終り各クラスとも自分の教室に戻る。

そして山岸先生が戻ってきて皆が席に着く。

「えー、皆さん。卒業本当におめでとうございます。それではまずはじめに皆さんの卒業アルバムを配布したいと思います。教壇に置きますから、順番に並んで一冊ずつ取っていたださい。」

ボクは取ってきた卒業アルバムをさっそく開く。

3年間の思い出が詰まった1冊。

じつはボクは10月くらいに山岸先生に呼ばれて「あること」を聞かれた。

それは卒業アルバムの中で、ボクが男子として生活していたときのものを載せるかどうかということだった。

卒業アルバムの中の写真は1年生の入学式の時からの写真を集大成して作る。もしボクが以前のボクが映っている写真を載せてほしくないということならボクの映っている部分だけを加工して外すこともできるというものだった。

アルバムの中で該当する写真は2枚あった。

一枚は1年生のときの遠足で安田や工藤とじゃれ合っている光景。そしてもう一枚は2年生のはじめにクラス別の音楽会があって、そのとき放課後数人が残って練習していたとき偶然撮ったものだった。ボクはそのとき映っていたメンバーをぜんぜん記憶になかったがその写真を見てびっくりした。ボクの横には偶然ミコが並んで微笑んでいた。

ボクは山岸先生にそのまま載せてほしいと頼んだ。

「これはアタシの大切な思い出ですから。」

山岸先生は優しく微笑んだ。

「そう。わかったわ。」

ページをめくっていく。

3年生のはじめに撮ったクラス写真。

このときはすでにワタルも転校してすっかり映っている。

そしてグループ写真ではボクとミコ、井川さん、久保ちゃん、奈央の5人が少し首を傾げて笑顔でピース。

部活動の集合写真では、サッカーウエア姿の3年男子12人の横に女子の制服を着たボクがひとり混ざってる。前はサッカー部に入ってたが女子として生活するようになってからは男子の中に女子がひとりだけ混ざって参加するのも危険だということとで実質活動には参加していなかった。その代わりときどき試合のときにベンチには入れてもらって応援していた。うちのサッカー部には女子マネージャー制度はないんだけど、こうやってみると女子マネにしか見えないから将来も言い訳がつきそうかな(笑)

プライベート写真のページをめくる。

(あれ…こんな写真いつ撮られたんだろ……。)

そこにはボクとワタルが肩を寄せ合って学校で飼っているウサギに餌をあげている姿が映っていた。

笑顔のボク、そしてその横で肩を寄せて微笑むワタル。

(なんかこうやって見ると少し恥ずかしい…(笑))

そして

ボクたちが一通りアルバムを見終わったのを見計らって、山岸先生が最後の挨拶。

「えー、これが私がアナタ方の担任として話す最後の挨拶です。

3年間本当にありがとう。

私はTVの金八先生のように上手な言葉はあまり言えないけど、でも私はアナタ方一人ひとりをずっとずっと覚えていきます。

えー、最後に私は皆さんにひとつだけ宿題を出しておきます。

私が皆さんに教えてきた一番大切なこと。

人を愛せる人間になってください。人を愛せる人間は、人からも愛されます。

そしてこの「愛する」ということの意味。この意味をこれからの長い人生の中で時間をかけてゆっくり解き明かしてってください。

提出期限は皆さんが大人になったとき。そのときのクラス会で、一人ずつ皆さんの解答を伺うことにします。ハイ、それではクラス委員、最後までピシッと締めましょう！」

「起立ー！」

「気をつけー！」

「礼！ ありがとうございましたー！」

第三十四話 春爛漫！入学式！1

「凜————っ！ 準備できたーっ!？」

「もうちょっと、あと少しだからーっ！」

今日はいよいよ青葉学院高等部の入学式。

ボクも高校生になったっ！

紺のブレザーに白のブラウス。

そして赤をベースにした紺チェックのプリーツスカート。

青葉学院高等部では女子のスカートはプリーツスカートの形ならば色やデザインには一定の自由がある。ボクはこの前ミコと渋谷で買い揃えた数枚の中から、前日の夜から悩みに悩んでこれを決めた。

じつはこのスカートの対抗馬は薄い青ベースで茶チェックのスカートだった。

「うーん……。」

何度も穿き直してみても鏡の前に立つ。

「上が紺だから下も同系のほうが……。でも、かえってコントラストを考えれば赤の方が……。」

「あーっ！ 悩むーっ！」

ああでもないこうでもない、母親からとうとう最後は弟の悟にまで意見を求めたけど、悟は

「あゝ、まあどっちでも中身はかわんないしな（笑）」

という始末。やっぱり男はわからんか（笑）

そして前日は10時までかかって選び抜いた一品がこれなのだった！

「お母さん、髪の毛、これでいいかなあ？」

あれからボクの髪もさらに伸ばして長くなった。中学の卒業式が終わって美容院でナチュラルな毛先に少しカールをかけたミディアムスタイルにカットしてもらった。

「うん、いいんじゃないかな。ただ盛り上がらないように少しムースをつけたほうがいいかもネ。チョット待ってて。」

母親は自分のドレッサーからムースを取ってきて泡を手に取りボクの髪の下半分に軽く染みこませる。

「あ、可愛いー！ いいんじゃない？」

「ホント？ エへへ…。」

「オーイ！まだかー！？」

1階から父親の待ちくたびれた声が……。

そして悟をカメラマンに3人で家の前で写真を撮る。

「あ、凜ちゃん。もうチョット左ー！ はい、いくよーっ！」

パシャッ！

「さあ、じゃあ行きましょうー！」

渋谷駅に着いてそこから宮益坂を登ると途中にはボクのような新入生らしき人たちがたくさん歩いている。

みんな希望に溢れた、幸せそうな顔。

（ここからボクの高校生活がスタートするんだ。）

渋谷駅から徒歩で約10分。正門の前はすでに黒山の人だかり状態。

「新入生の方は掲示板で自分のクラスを確認して教室に入ってくださいー！ ご父兄の方は9時45分までに入学式の会場となるPM講堂にお入りになってお待ちくださいー！」

マイクを持った学校関係者と思われる人がそう叫ぶ声が聞こえる。

そのとき

「わぁ！凜〜！」

その声に振り返るとミコがご両親と一緒に立っていた。

「ミコ！ わぁ、制服すっごい似合ってるよーっ！」

ミコは薄い青ベースのチェックのスカート。

ボクよりも少し背が高いミコはチョット大人っぽい。

「凜もすっごい可愛いじゃん！ あ、髪型変えたでしょ？ 可愛い

！」

「エへへ…。」

「いやー、すごい人ですなー。」

ウチの親とミコのご両親が話し始める。

「ワタル君はもう来たのかな？」

「アタシはまだ見てないけど、でももう来るんじゃない。凜、クラ
ス分けも確認した？」

「ううん。アタシたちも今ちょうど来たところなの。」

「じゃあ、一緒に確認しに行こうよ。」

「うん。お母さん、じゃあ、アタシたち行くからね。」

「ハイ。じゃあ私たちは会場の方に入ってるから。」

クラス分けの掲示板は中央間階のフロアに貼ってあった。

まるで合格発表のようなドキドキ感で自分の名前を確かめる。

103HR……女子……小谷 凜……藤本 美子

「きゃあー ミコ、同じクラスだよー！」

「ホントだ！凜、よかったねー！」

1年生は全部で10クラス。

その中でボクとミコが同じクラスになれたのはものすごいラッキーだ。

（ワタルは……あ、107HRだ。）

（残念……。ワタルだけ違うクラスかあ。）

「ワタル君、107HRだね。」

ミコが掲示板を確認してそう言った。

「うん、でも同じ学校の中だから。」

「フフフ…。凜、ちょっと寂しい？」

「え、え…。そ、そんなことないモンツ！」

「アハハ！照れてるーっ！」

「モオオオおーっ！ツ！（笑）」

するとそこにナント偶然ワタルが登場。

「ああああおーっ！っ！！　ボクだけ別のクラスやあーっ！っ！」

「あ、ワタル君。おはよおー。」

「ん！　チョット待てヨ。　これもまたなんかの見間違えだったりするかも…。」

「アハハ！合格発表じゃないんだから、それはないって！」

「クスクス…。」

「まあ、しゃーないか。　おお、2人とも制服決まっとなるなーっ！」

「…っ！」

ミコがそう言ってクルリと一回転してポーズ。

ボクは改めてワタルの制服姿を見る。

青葉の男子は紺ブレザーの上下にネクタイ。

何かすごく大人っぽいワタル…。

ミコが

「じゃ、教室行こう！」

「よし、行こか。」

そしてボクたちはそれぞれの教室に向かう。

すると歩いている途中でワタルがボクに耳打ち。

「凜ちゃん、髪の毛変えたやろ？ すっごい可愛いな。」

そんな言葉に思わず照れて下を向いてしまうボク。

ボクとミコが教室に入るとすでにほとんどの人が揃っていた。高等部には中等部から内部進学してきた人たちと高校受験で入学してきた人たちが混合でクラスを作る。各クラスとも男子と女子はほ

ぼ半々だけど、少し女子の方が多いらしい。

中等部から上がってきた人たちは顔見知り同士の人が多いようで、今のところクラスの中で話しているのはそういう人たちが中心だろう。

前の黒板を見ると

「とりあえず席は自由に座ってください」

と書いてある。

ボクとミコは前後で2席空いているところに腰をかけて荷物を横のフックに引っ掛けた。

「でもさあ、ホント同じクラスでよかったよねー。」

「ホントだよねえ。 中等部から来た人たち仲良さそうだし。」

「なんかアタシたち運命かもヨ。」

「あ、だったらいいなあ。アタシ、ミコとだったら運命でもいいワ。」

「アタシもー！」

「アハハ！」

ボクたちがそんな話をしているとき、ちょうど教室に入ってきて空いていたボクの横の席に腰をかけた女の子とフツと目があった。

「はじめまして」

その娘がボクに話しかけてくる。

ミコとはまた違った感じの目鼻立ちのはっきりした綺麗な人で長めの髪をサツと横に流したような大人っぽさを感じた。

「あ、はじめまして」

「なんか仲良さそうに話してたけど、2人は中等部から？」

「ううん。2人も同じ中学出身なの。」

「そうなんだあ。いいなあ。あ、アタシ佐倉 美由紀っていうの。ヨロシク。」

「あ、アタシは小谷 凜です。それで…。」

「アタシは藤本 美子です。でも中学のときまでずっとミコって呼ばれてたから。」

「ヨロシクね。あたしはみーって呼ばれてた。」

「じゃあ、ミコと凜とみーちゃんでもいいよネ？」

「ウン。よかったあ！さっそく友達ができて。じつはさあ、アタシけっこう不安だったんだあ。下からあがってきた人はみんな知合いみたいだけど、高校から入学して友達になれるかな…って。」

「あ、じつはアタシたちも今そんな話してたんだヨオ（笑）」

ボクが青葉学院高等部に入学して最初にできた新しい友達がこの佐倉 美由紀ちゃん。

そしてボクの新しい高校生活はいよいよスタートを切る。

第三十五話 春爛漫！入学式！2

ガラッ……

教室のドアが開き、入ってきたのはどうみても20代初めくらいの若い女の先生。

手には大きな手提げの紙袋が2つ。

まっすぐの長い黒髪。そしてオシャレに着こなした薄ピンクのスーツ。

青葉学院は先生までオシャレなんでしょうか？（笑）

「ハイ、皆さん席に着いてください。」

教室中のそこかしこで小さなグループを作って話していた生徒たちはぞろぞろと席に着く。

「エー、皆さん、青葉学院高等部にようこそ！ 私は今年度この103HRの担任をします佐藤 優実さとう ゆみです。」

そう言って佐藤先生はクルッと黒板を向き自分の名前を大きく書いた。

「これから皆さんは3年間この青葉学院高等部で過すことになります。青葉学院という学校は、何よりも生徒の自主性を重んじます。ただしそれは皆さんに自由と併存する責任というものをよく理解し

てほしいからです。皆さんは高校生になり中学生から少しだけ大人になりました。大人になっていくということは自分の責任をしっかりと果たせる人間になるということです。私たち教師は皆さんになるべく押し付けをしたくありません。皆さんが成長していくためのアドバイスをしていくつもりです。

じつは私も大学院を卒業して2年目です。だから私も皆さんと一緒に成長していきます。」

そして佐藤先生は紙袋から取り出したものを教壇の上に並べた。

「それではこれから校章と生徒手帳と各種案内のプリントをお渡しします。男子の手帳は青色の表紙で女子の手帳は赤色の表紙です。生徒手帳の一番最後には生徒証がありますので、各自自分のものが確認してください。校章はもらったらすぐに皆さんの制服の上着の胸上に着けてください。それでは順番に名前を呼んでいきますので呼ばれたら前に出てきてください。」

もらった生徒手帳を確認する。

小谷 凜 上記の者は本学院高等部の生徒であることを認める。

こうして生徒証を手にとると初めて自分が青葉に入学できたことを実感する。

そして次に小さな髪箱に入った校章を取り出してみる。

真鍮製の青葉学院の校章。

青葉学院はミッシヨンスクールで、盾の形をかたどった校章はキリスト教への信仰を表しているそうだ。

ボクは自分の胸上に校章を着けて改めて見直す。

少し曲がってないかな…。

コンパクトを開いて位置を確認。2度目でやっと満足する。

佐藤先生は一通り見回した後

「さあ！これで皆さんは名実ともに青葉学院高等部の生徒です。その校章の持つ意味に恥じないよう、自信を持ってこれから3年間の高校生活を充実させていってください。」

エー、それでは入学式の時間までまだ1時間ほど時間がありますので、この時間を利用して自己紹介をやりましょう。今日からそれぞれが皆さんの仲間です。名前をしっかりと覚えて、早く仲良くなっていって下さい。それでは向かって右側の最前列から順番に、自分の名前、出身中学、それと趣味、あとはもし中学までに何かニックネームがあったらそれも。一人1分くらいで。じゃあ、お願いします。」

まずは一番前にいた男子が「あ、オレっから？」と言って立ち上がった。

「エー、高辻たかつじ 文人ぶみひとです。区立雪谷中学出身です。趣味はエレキギター、だから部活は軽音部に決めています。あとニックネームは小中ですと『ブンちゃん』って呼ばれてました。だからそれでよかったらそう呼んでやってください。ヨロシク。」

自然とぱちぱちという拍手が起こる。

・
・
・

そして真ん中あたりに差し掛かり、ボクの右列にいる佐倉 美由紀みーちゃんの番。

みーちゃんはスツと立ち上がる。

「はじめまして。佐倉 美由紀みゆきです。区立城北中学出身です。えっと、趣味は中学校のときに公立中学には珍しいチアリーディング部に入ってます、それで青葉のチア部はチアの世界でもすごく有名なんで、ぜひ入部したいって思ってます。ニックネームは美由紀なのでずっと『みーちゃん』って呼ばれてました。どうぞよろしく願います。」

(へえー、みーちゃんってチアリーディングなんかやってたんだ…。)

ボクとミコの出身中学にはチア部なんてシャレた部活はモチロンなかった。チアリーディングっていうものは聞いたことがあっても、TVなんかでときどき見かける、ただスポーツの応援をするときにミニスカートでフワフワした丸いものを持って踊る女の子たちとい

うこと以外は実際なにをするのかボクにはよくわかっていない。

そしてさらに順番は進む。

ボクやミコのいる列の一番先頭の女の子が立ち上がる。

「清水 都みやこです。青葉学院中等部出身です。趣味はスキューバダイビング、夏休みは沖繩にずっといて泳いでます。ニックネームは特にないんですけど、『ミヤコ』って呼ばれることが多いです。よろしくお願いします。」

（今度はスキューバダイビングですかっ!!）

（ハア……。エレキギターにチアにスキューバって……。なんかみんなカッコいいんだねえ……。）

それにしてもこういうみんなの自己紹介を聞いているとホント自分が情けなくなっちゃう。

（趣味？……。まさかサッカーとはいえないよネエ……。それに今はもうぜんぜんやってないし。）

（女子サッカーは最近の流行かもしれないけど、ボクはあんなハングリーには見えないだろうし）

（女の子らしく料理とかケーキ作りとでも言っておこうか……。）

（でも、それでもしそんな機会があつてへんな期待されたりしたらなあ……。とりあえず今のボクにまともに作れるのはサンドイッチと卵焼きくらいなもんだし……。）

そうこう考えているうちにとうとう僕の順番が回ってくる。

「ハイ、じゃあ次ぎは？」

佐藤先生の言葉にボクはギクツとして、つい勢いよくガタンと立ち上がる。

「あ、えっと、小谷 凜です。 区立若松中学出身です。 趣味…趣味は…えっと…趣味は…」

(うわああ~~~~……。みんながボクに注目してるっ！)

「趣味は…そう！マンガを読むことっ！特にワンピースとかこち亀とか大好きです！」

ああ！ ボクはとっさになんて情けないことをっ！！

いくらこち亀120巻以上1巻から全部集めてるからって。

こち亀なんて、そんなマンガすら知らない人もけっこういるんだろ
うなあ。

せめて少女マンガくらいにしとけばよかった…。

それでもとにかくこの場を乗り切るために話を先に進めた。

「ニックネームは中学のときは『りん』ってそのまま呼ばれてました。 よろしくお願いします。」

ハアアア~~~~……。 さ・い・あ・く……。

やっと席に着くとドツと汗が出てきた。

そしてボクの後ろの席にいるミコが颯爽と立つ。

「藤本^{ふじもと} 美子^{よしこ}です。 中学は前の席にいる小谷さんと同じ若松中です。 ちなみに中2から中3までクラスも凜と一緒にでした。 趣味はゲーム！モンハン大得意です！ ゲーム好きな人、ぜひ私と対戦しましょう！ ニックネームは名前を音読みにして『ミコ』って呼ばれてました。 よろしくお願いします。」

ああ、ミコってやっぱりやさしいなあ…。
きつとボクにあわせてくれたんだヨネ。

おしゃれな人が多く集まると言われる青葉学院高等部でもやっぱりミコの可愛さは光ってるみたいで、挨拶が終わったあとも男子の何人かがミコのほうをチラチラと見ている。

そして自己紹介がクラスメイトたちの一通り終り最後に佐藤先生が自分のことを紹介。

「改めて、私は佐藤 優実です。 担当教科は英語リーディング。 出身中学は青葉学院中等部、そして出身大学も青葉学院大学。 中学から大学院までずっと青葉でとうとうお勤め先も青葉（笑） だから皆さんの先輩ってことになりますネ。 趣味はカラオケ。 大学ではカラオケ同好会に入っていました。 十八番は、やはり青葉出身のサザン！桑田さんの大ファンです！ どうぞよろしく！」

なんか楽しそうな先生…。

そのとき教室内のスピーカーに校内放送が入る。

「これより入学式を行います。 新入生の皆さんは担任の先生の指示にしたがってPM講堂に集合してください。」

こうしてボクの青葉での高校生活一日目が始まった。

第三十六話 新しい友達

高校生活がスタートした。

青葉学院高等部は中等部からの内部進学組と高校受験入学組がひとつのクラス内に混合しているため、最初はどうしても中等部からの人たちが集まりやすいけど、次第に混ざり合っていく。

ボクは女としての生活を送るようになってたつた1年9ヶ月。

男として生活していた期間のほうがずっと長いけど、少しずつ男女の本能的違いみたいなのがわかるようになってきた。

その違いは友達作りでもけっこう大きいんじゃないかと思う。

たとえば男子はぜんぜん見ず知らずの人たちが集まると、最初はかなり戸惑う。自分の身の置き場がどこにあるのかわからず、多少無理をしても相手との共通項を探そうとする。そして付き合いが深い代わりに友達の範囲はそれほど広くないように感じる。

それに対して、女の子同士の友達作りは例えるならアメーバのようなもの。女の子は気に入るとか共通項とかほとんど関係なく切っ掛けがあればとりあえずくっつく。しかしそれはある意味お互いが『お試し期間』のようなもので、（あ、違うな……。）と思えば離れてまた別の切っ掛けで違う女の子とくっつき、それを繰り返していく中で次第に気の合ったグループができていく。女の子にとって、その切っ掛けはすごく些細なことであってもいいのだ。

入学してちょうど5日目。

ボクは中学から親友のミコ以外に、入学した日にたまたま隣の席に座った佐倉 美由紀みーちゃんと仲良くなり、そしてミコが後ろの席の古瀬 奈々子ななちゃんから話しかけられて仲良くなって、さらに奈々ちゃんが入学式で隣の席に座った牧田 芹せりちゃんを連れてきて…というように5人ほどのグループができていった。

ちょうど今日の金曜日から来週の火曜日まではクラブ活動の勧誘期間。

ミコは中学時代水泳部に入っていて、高校でもそれを続けるつもりで今日は入部の申し込みに行くと言っていた。ボクは中2の1学期までサッカー部に入っていたけど、この高校には男子のサッカー部はあるけど女子サッカー部はない。サッカーを応援すること自体好きだったからせめてマネージャーでもとも考えていたけど、一応いくつかのクラブを見学してみるつもりでいた。

「やつほう！ 凜々！ どこ行くの？」

授業が終わってトイレに行こうと廊下を歩いていたボクに声をかけたきたのは、みーちゃんだった。

「あ、みーちゃん。 トイレに行こうと思って。」

「じゃあ、アタシも一緒に行こう。」

ボクらは一緒に教室のある3階の女子トイレに向かう。

「あ、ねえ…。」

トイレを済ませ手をハンカチで拭いていると、みーちゃんがふいに

「ウン。なに？」

「凜はもう部活決めたの？」

「ううん、まだ。みーちゃんはチア部に入るんだよね？」

「ウン。そのつもり。でさあ、もし良かったらアンタも一緒に見学に行ってみない？」

「え？アタシ？どこに？」

「チア部にヨ。」

「エー…！チア部に？アタシ？」

「そうそう。」

「でもさあ、アタシってそういうのぜんぜんやったことないんだヨオ。」

「誰だって最初は初心者だって。高校から始める人も多いらしいヨ。ところで凜って中学のとき部活って何やってたの？」

「え…。えつと、サッカー部の…マネージャー…かな。」

ボクの中学時代のことを知っているのはこの学校ではミコとワタルの2人だけだ。中学を卒業する前に担任の山岸先生からも「高校であえてそのことを自分から話す必要はないんじゃない。」と言われていた。

ボクはいわゆる性同一性障害のように、本当は男性である人が外見的に女性に変わったというのではなくて、元々女であっただけで男として育ってきたということ、それが女として生活するようになったのは自然なことなんだけど、ヘンに誤解されるのも面倒くさいと思った。

「じゃあ、サッカー部行くの？」

「ううん。高校ではそのつもりはないけどね。」

「じゃあ、いいジャン。入るか入らないかは別にしてみ学だけでも行ってみようヨ？」

「そうだねえ……。じゃあ、ウン！行ってみる！」

「ヨッシャツ！じゃあ今から行こう！」

「え、今から？」

「そつ！今からヨ！」

青葉学院高等部には titans というチアリーディングのチームがある。このチームは首都圏の高校チアチームの中でも大会などで毎年上位に入るかなり有名なチームだそうだ。

チア部の部室に行くと、ちょうど勧誘期間ということもあって部室がオープンになっていて、中ではもう数人の新入生らしい女の子たちが集まっていた。

「入部希望者？」

先輩らしい女の人がボクたちに声をかけてくれた。

「あ、はい。」

「ちょうど今から説明会やるところだったのヨ。じゃあ、2人もこっちに来て。」

「あ、あの…アタシは今までチアとかぜんぜん経験なくて、とりあえず見学に…って思っ…て。」

「アハハ。だいじょうぶ。アタシも高校で初めてやったクチだからほとんどそうじゃないかな。」

(う〜〜ん……いいのかなあ……)。

「だいじょうぶだって！ 凜、行こう？」

「ウ、ウン…。」

みーちゃんに背中を押されボクも部室に入っていくことに。

周りを見るとボクらを含めて10人ほどの女の子がいる。ボクラと同じクラスの娘はいないようだった。

「エー、それでは皆さん席に着いて下さい。」

教室を一回り狭くしたくらいの部室にパイプ椅子が並べられている。

「それでは、まず初めに。皆さん、青葉学院高等部チアリーディングチームtitansによろこそ 私は今年の副リーダーをやっています2年生の梨田 恵里子なした へりこといいます。まず…あっ！ちようど今顧問の先生がお出でになりましたので、ご挨拶をしていただきます。」

そして入口から入って来た女の先生が前の方に進んできた。

（あれっ！佐藤先生！）

ボクらのクラス担任の佐藤優実先生だ。

佐藤先生も並んだ椅子に座ったボクとみーちゃんを見つけると

「アッ！うちのクラスの小谷さんと佐倉さんヨネ？ うちのチーム入るの？」

「あ、とりあえず見学に。」

「そう。じゃあゆっくり見てってネ。 ぜひ入ってほしいワ！」

「はじめまして。 titans の顧問の佐藤優実です。 エー、じつは私も青葉の高等部出身で titans の出身でもあります。 titans は昔から練習はしっかりやりますけど、先輩も後輩もみんなすごく仲が良く楽しんでチアをやっています。 皆さんが高校生活3年間を何かに打ち込みたいのなら、このチームは皆さんを喜んで迎えたいと思います。」

そしてさっきの副リーダーの梨田さんが続いてチームの活動内容説明をしてくれる。

「まず主な活動内容としては年2回のチア大会を中心に練習を行っていきます。それと運動部の各部から応援依頼があったときはそれにも参加。練習は基本的に火・木・土の週3回ですが、大会前などはそれ以外の練習もあります。ただし定期試験前の1週間は練習は休みになります。それじゃ、ユニフォームについては成田さんから説明してもらいます。」

「皆さん、こんにちわ！」 梨田副リーダーの横にいる女の先輩が前が出る。

「こんにちわーっ！」 ボクたち新入生もそれに返礼。

「それでは、ユニフォームなどについては私から説明します。普段の練習については体育着でやってもらって結構です。ただしTシャツについては titans のネームの入ったものを用意しますのでそれを購入してください。そして大会や応援などではユニフォームが必要になってきますので、それも購入してもらいます。ユニフォームにはいくつかパターンがあってそれを今からご紹介します。 中野さん？」

みーちゃんのクリクリッとした大きな目がウルウルとボクに訴える。

(もっつ！この娘ってすっごい可愛いんだよネエ！)

(ああっ！なんかこの目には逆らえないーっ！)

そして

「ウン。じゃあ、やってみようかな。」

「わあい！よかったー！」

………というわけで、なんと！ボクは高校でチアなる
ものを始めることになったのです。

第三十七話 チア部の仲間たち

翌週の火曜日の朝

ミコは今日から毎週火・木曜日は水泳部の朝トレで1時間早く学校に行っている。

ボクは久しぶりにワタルと駅で待合わせをして登校した。

渋谷駅に着いて宮益坂を歩く途中

「……………というわけでね、同じクラスのみーちゃんに誘われてアタシもチア部に入ることになったの。」

ワタルは少し驚いた様子

「ホ……………！ 凜ちゃんがチア部に入るんかあ。じゃあ、今度練習見に行ったる。チア部っていつたらあれやる？ すごい短いスカートはいて足上げて踊ったりとかするんやる？」

「うわっ！ キミはなんかやらしいこと想像していない？ それに練習のときは大会前とかじゃないとユニフォームなんて着たりしないし。第一アタシなんかまだ1年生で入部したばかりだもん。」

「なーんや。ガツカリ。…………… あ、そうやっ！ いいこと思いついたで！」

「なにヨ?」

「だったら、凜ちゃん今度ボクにだけそのユニフォーム着て見せてくれへん?」

「コラッ! やらしー! ー! ー! ー!」

ボクはワタルの頭を軽くポカッと小突いた。

「ワハハハハ!」

「ところでワタル君は部活はどうするの?」

「ああ、色々考えたんやけどな、高校では部活はやめておこうか思てな。」

「え? なんで?」

「いや、じつは学外活動でボランティアとかやりたいってずっと思ってたんや。それで... な。」

「そうなんだあ。」

「うん。」 (.....もうあんまり時間もないしな。)

「え? なんか言った?」

「いや、何も言っへんで。何か聞こえたか？」

「あんまり………どうこのみたいの。よく聞こえなかつたけど。」

「知らんなあ。空耳ちゃうか？（笑）」

「あ、石川君。オハヨー！」

そのときちょうどボクラとすれ違った女の子2人がワタルに挨拶をしていく。

「オオツ！ オハヨーさん！」

「？ 誰？」

ボクはワタルの腕を小突いて尋ねる。

「ああ、同じクラスの娘たちやネン。」

ひょうひょうと答えるワタル。

「ふ~~~~ん。相変わらずおモテになりますワネ？」

「ヤキモチ焼いてくれるんか？」

「焼かないヨツ！」

膨れ顔でツーンと横を向いてしまったボク。

「そんな顔すんなや（笑）　ボクの大切な彼女は凜ちゃん一人やし。」

（……………そんな真顔で言わないでヨ。）

「……………バカ。」

そして学校に到着

「じゃな。あ、今日は凜ちゃん部活日やな？」

「ウン。そうなの。　ゴメンね。」

「ええヨ（笑）　そんなじゃチアユニフォームをボクだけに着て見せてくれる件は考えといてナ？」

「モオーーツ！（笑）　じゃね。」

まだ始業までには結構時間がある。

「おはよーっ！」

教室に入って席に着くと横に座っているみーちゃんに声をかけた。
ミコは水泳部の朝トレがまだ終わってないようできていない。

「あ、凜。おはよっ！　ねね、今日から部活だヨネ？」

「そうだねえ。　アタシなんかでホントだいじょうぶかなあ…って
まだ思ってるヨ（笑）」

「アハハ。だいじょうぶヨ。　なんか今日はユニフォームのサイズ
合わせもするみたいだヨ。」

「そうなの？」

ボクはさっきのワタルの願いを思い浮かべた。

（うーん…。一回くらい見せてやってもいいのかなあ…。）

「凜。そういえば、さっきさあ…………。」

「ウン。」

「107HRの男の子と歩いてたでしょ？」

「あ、ウン。　あの人もアタシやミコと同じ中学出身なの。」

「そうなんだあ。　ひとつの中学から青葉3人も来たって珍しいね。」

「アタシが一番危なかつただけどネ（笑）。ミコとあの人は前からすごい成績良かったから。」

「アハハ。」

「でも、みーちゃん。あの人が107HRだって良く知ってるネ？」

「ウン。だって彼って107HRでかなり女の子の人気高いらしいヨ。カッコイイしね。それと彼と結構仲がいい女の子から聞いたんだけど、すっごく優しくて女の子の気持を考えてくれる人なんだって。」

「へー、そうなんだ。」

みーちゃんには平静を装いながら、心の中はぐらぐら…。

（あの浮気者めええー！　チアユニフォーム、ワタルに着て見せてやんのやめたっ！）

放課後

今日はチア部の初練習日。

授業が終わるとボクとみーちゃんは体育館地下にあるチア部の部室に向かった。

部室にはすでに7名ほどの新入生の子たちが集まっていて、みんな

説明会のとくに会った顔ばかりだった。

「新入生は3時までにはプレイルームに集合だって。」

そのうちの一人がみんなにそう伝える。

ボクはとりあえず白のスウェットと体育のシャツに着替える。そして、ずいぶん長くなった髪の毛をゴムでポニーテールに纏めてゴムの上に黒ベースに白の水玉のシュシュを着けた。

「凜、行くっ?」

「ウン。」

みんなが着替え終わったところで、ボクらは部室を出てプレイルームへ向かった。

途中ペチャクチャと話したりもしたけど、3時きっかりに到着。

するとそこにはすでに数人の先輩がいて

「新入生、遅いヨ!」　といきなり一喝。

「ス、スイマセン。」

男の人には意外に思われるかもしれないけど、女同士は結構時間には厳しい。

それを繰り返せばそういつ目で見られてしまうことだってある。

「初日だからちゃんと注しておくネ!　新入部員は約束の時間の10分前までには必ず集合ヨ!　次ぎからは注意してネ!」

「ハイッ！」

「じゃあ、今日はまず各自の自己紹介から。その後に軽い運動をしていきます。」

まずはリーダーの篠田 祥子しのだ しょうこさんから挨拶。

次に説明会のときにいた副リーダーの梨田さんや各パートチーフの先輩たちへ。

そしていよいよボクら新入生の順番。

クラスの自己紹介では「趣味はこち亀とワンピースを集めることです！」なんてとんでもないことを言ってしまった。そのため（チア部での自己紹介はなんとしても汚名を挽回しないとっ！）と、昨日の夜から練りに練ってきた。

「じゃあ次の人！」

「ハイ。はじめまして、小谷 凜です。趣味はデザート作り。チアは高校で初めてやりますので少し不安ですけど、どうぞよろしくお願いします。」

デザート作り、ウソではない。ボクは果物の皮を剥くのはなぜか昔から得意だったし。りんごでも梨でも柿でもなんでもござれっ！なんだヨ。

「アッ！小谷さんの趣味ってワンピースとこち亀の単行本収集じゃなかったっけ？」

「エツ？」

クルツと後ろを振り向くとそこには我がクラス担任兼チア部顧問の佐藤 優実先生のお姿！

「アハハハハハ！」

周りの笑い声。

(あああああ~~~~~。もっつ！)

するとリーダーの篠田先輩

「いいじゃない！ じつはアタシもこち亀の両さん大好きなの。今度貸してね？」

「あ、ハ、ハイ。」

なんかボクって部活でもマスケットにされちゃいそつな……………。

「ハイ！じゃあ軽く運動。まずランニングからね。体育館から出てキャンパス3周！」

「あの…。」 新入生の女の子の一人が手を上げた。

「ハイ、なに？」

「キャンパス3周って高等部のですか？」

「何いつてるの！ こんな狭いとこたつた3周したって意味ないでしょ？ キャンパスっていったら大学も中等部も含めた青葉キャンパス全部ヨ！ ただ初等部は大通りの向こう側だからそこは抜かしといてあげるワ。」

「エエエエエー……ッッ！」

「けっこう広いよね……。一周歩くと20分以上かかるヨ？」

しかしそんなボクらにも容赦ない先輩の言葉

「さあ！ いくヨ……ッ！」

「ハア…ハア…ハア…。」

2周目でもう息が絶え絶え…。

そしてやっと3周が終り

ボクたち新入生は体育館の前の広場にしゃがみこむ。

（ハア…フウ…ハア…なんか中学のときのサッカー部より…キツイかも…ハア…。）

「ハイ！ じゃあ、一休みしたらそれぞれ2名でペアになって柔軟体操いくヨ……ッ！」

「ハアアア……イイ」

ボクはみーちゃんとペアになる。

「クウウウウウ……」

中学時代からチアをやっていたみーちゃんは容赦なくボクの背中を
押す。

「ホラッ！凜、ガンバツ！」

「ウ、ウン。」

柔軟体操が終わって今日の練習はやっと終了。

「今日は初日なんでここまでにしておきます。 実際はこれに実技
の練習がありますから覚悟しておいてください。 ハイ、じゃあ今
日はここまで。」

「ありがとうございますーっ！」

練習後の部室の中

部活が終われば先輩も後輩もみんな仲がいい。

これは男子と女子の大きな違いじゃないだろうか。

男は本性が見栄っ張りってどうか、そういうのが集団の中の上下関

係みたいなのに反映されているような気がする。

「ハアア~~~~~。けっこう疲れたねえ。」

「アハハ。アタシも。もう足がパンパンで。」

「ねえ、帰りに大学の学食寄っていかない？」

「あ、いいねえー！ あそこならデザートとかも色々あって安いしね。」

「新入生の娘たちも行くころよ？」

「ハイ、行きまーす！」

夕方6時の大学学食。

大学は授業がけっこう遅くまであるらしく、本を読んで復習をしたリレポートを書いている人もいる。

ボクらみたいな高等部生も何人か混ざっている。

青葉学院のキャンパスの周りには東京の中でも有名な大都会。食事やお茶をするお店はいくらでもある。

でも、悲しいことに高校生でいつもそういうお店には入れるほどのお金はもらっていない。スーパーやコンビニを経営してわりと裕福だと思いつちでも、親は高校生からそんな大金をあげるつもりはないと厳しく、色々交渉した結果やっと一日千円で月3万円（昼ごはんはお弁当）となった。

だから大抵のものが普通の半額くらいで買える大学の学食は、安い

だけでなくメニューも多いし、ボクら高校生にもすごく嬉しい。

チア部員の女の子20名くらいが集まれば結構壮観！

夕方でチヨット寂しい学食にも華が咲いたような賑やかさが出てくる。

そして7時になればもうドッキリ日が暮れる。

それでも色々なお店の、まるで宝石のようにキラキラと明かりがきらめく夜の宮益坂を、ボクたちは尽きることはないおしゃべりしながら渋谷駅へと下っていく。すごく不思議な気分。まるで自分が不思議の国にでもいるような溢れるような刺激。

街の中を吹き抜けていく風がボクの制服の肩を撫でていく。

なんかすごく気持ちいい。

ボクたちの高校生活の一日はこれからこうして終わっていくんだ。

第三十八話 新入生は忙しい

4月も後半になってくるといよいよ授業も本格的になってくる。

その中で一週間のうち火・木・土はチア部の活動があつて、1年生は本来の集合時間3時の10分前までにプレイルームに集合する。

女の子同士であつても時間は厳守。

遅ければ「遅いヨツ！」と先輩から容赦なく怒られる。

授業が終りボクはみーちゃんとダッシュで部室に向かう。

「凜、早く行こう！また怒られるヨ。」

「ウ、ウン。チョット待って。」

いつも慌てて用意し、みーちゃんに急かされる。

「さ、早く行こう！」

ボクたちはチアバッグを持って早足で教室を飛び出した。

ただ今日はいつもとはチョット違う。

何が違うかというと、そう！このチアバッグを持っていることだ。

1年生も今までの簡単な筋トレや走り込みだけの練習からそれぞれ演技でのポジションを決めて、その練習も少しずつ取り入れていく。(本当はもっと遅いです。物語上(笑))

そしてじつは先週の土曜日によいよチアのユニフォームができあがってきたんだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

2種類のパターンの違うカラフルなユニフォーム。

胸には「AOBAGAKUIN TITANS」のネームが書かれている。

上下のユニフォーム各1着ずつに色違いのアンダースコートが3枚。そしてやはり「AOBAGAKUIN cheerleading team TITANS」とネームを入れた白のチアバッグ。

「アラー！可愛いじゃない！」

母親はそれを1枚ずつ広げて見てボクに言った。

「ね、ちょっと着て見せてヨ？」

「え、今？」

「そう、今ヨ。せっかくだもん。写真に撮っておくヨ？」

「なんか恥ずかしいネ（笑）」

「これからたくさん使っただから恥かしがってちゃチアはできない
ワヨ（笑）」

ボクはまず髪の毛をポニーテールにしてからユニフォームを着けた。

「まあー！いいじゃない！とっても可愛い！お父さんにも見せて
あげる？」

「えー、男はいいヨ。さすがに恥ずかしいから（笑）」

「アハハ。気にしてもしょうがないのに。」

「もう少ししたらネ。慣れてきたら。」

「じゃあ、写真撮ろう！えっと…どんなポーズがいいかしら…。
そっだ！右手を腰にあててみて？」

「…？」

「ウン。いいじゃない。ハイ、じゃあ、撮るワヨ。」

パシヤツ!

「ハイ、もう一枚。」

パシヤツ!

「あ、お母さん。あと携帯でも撮っておいて?」

じつはこれが家に届いてすぐに、ボクはついワタルの携帯電話にメールをしてしまったんだ。

「チアユニ届いたヨー!」

すると3分も経たずにワタルから返信。

「オー、届いたかい。写真送って。待ってる。」

(写真をくれって!? エーッ!)

少し考えた後ボクは返信。

「じゃあ、後で送りマス。ホメコトバは今のうち考えておくように。」

「

そしてボクはワタルに携帯からその写真を送った。

5分ほどしてワタルから返信。

「すごく可愛い。これはボクの宝物にして誰にも見せへん。」

(ワタルのくれた言葉はなんかすごく嬉しい……。)

こんなに彼氏の反応に期待してしまうなんて……。

なんかボクはもうすっかりワタルの彼女になってしまったんだなあ
…って気がする。

.....

チアには大きく分けて、ダンスとスタンツ(組体操の動き)があるが、そのときにそれぞれのポジションがあって、スタンツを組むと

きの土台になるベース、ベースの上に乗るトップ、そしてベースとトップを支えてタイミングを指示するスポットの3つの役割がある。だいたいは全体的な調和を考えて、身長や体重、そして体の柔らかさなどの動きでそれぞれの役割を決めていくことになる。

ボクは今、身長が157cm、体重は48キロで、身長わりに体重はすこし軽めかもしれない。

新入生の女子部員の中では大体真ん中あたりの身長なんだけど、ベースとトップはチアの経験がそれなりにないと危険なところもあり、最初はスポットで感覚を掴んだほうがいいと言われた。

ボクより3センチくらい身長が高いみーちゃんはベースに。みーちゃんはずらっと背が高くそしてミコとはちょっと違った感じのはつきりした顔で少しハーフっぽい。雑誌に出てくるモデルみたいな感じで女のボクでも憧れるような可愛い娘だ。

彼女は、中学受験のときに青葉を受けたけど、そのときは残念ながら不合格だったそう。それでじつは他の私立大学の附属中学に受かったけど、どうしても青葉に入りたくて都心にある公立の進学中学に通ったそう。

今日は先輩からそれぞれの役割の説明を聞いて各チームに分ける。ただし実技は次回から。

「ハイ、じゃあ今日の練習はこれで終わります。」

「ありがとうございましたー！」

練習が終わったあとはいつも恒例の大学の学食でおしゃべりタイム。今日は2、3年生はそのまま帰ってしまったのでボクたち1年生だけが集まった。

そこでボクはみーちゃんから意外なことを聞いてきた。

「ねえ、凜はクラスの男子で誰がいいって思う？」

「え？ クラスの？ うー………。まだよくわかってないなあ。みーちゃんは誰がいるの？」

「まだ少ししか話したことないけど、松原君とか。この前ね、体育で女子がバスケットだったのヨ。」

「ウンウン。」

「それでネ、アタシがボールのいっぱい入ったカーゴを出していたとき、アタシ何にも言わないのに松原君が横からふつと来てそれを持ってくれたことがあってね。」

「へえー。優しいよネ。」

「やっぱりそう思うっ？」

「ウン。なんかさりげない優しさみたいな。意外とクールな感じするのにふつとしたところでそういう優しさがあると、なんか嬉しいヨネ?」

じつはボクもワタルのデイズニールランドでのさりげない優しさ、それと力強さっていうのかな、そういうものに男の子をすごく感じてしまったんだ。

「ソウソウ! もちろんアタシにだけじゃなくって他の女の子にも優しいのかもしれないけど。」

「あ、でもそれってわかんないヨ。みーちゃんだから持ってあげたのかもしれないしサ。」

「エー、そうかなあ?(笑)」

「でもさ、表面だけ優しそうな人より目立たないけどさりげない優しさって女の子にはすごく嬉しいんだよネ。」

「そうなんだよねー! ね、凜はさあ、誰か付き合ってる人いるの?」

「え?アタシ?.....アハハ。」

「当ててみよっか? フフフ...107HRの石川君...でしょ?」

「.....え」

「当たった(笑)」

「わかってたの？」

「ウン。あ、言っとくけど、ミコは何も言っていないよ。だってさあ、やっぱりこの前2人で一緒に歩いてたときの雰囲気違うもん。中学時代から？」

「えっとね、中学の最後の方。2月に入試が終わった後…かな。」

「そっかあ。彼は107HRの男子で一番人気だもんね。泣く娘が多いなあ（笑）」

「うーん……。アタシはさあ、ワタル君がそんなにモテてるっていうのがまいち信じられないヨ。」

「あの人はカッコいいっていうのもあるけど、やっぱり気持がすごく優しい人だと思う。女の子に対しても優しいけど、男同士でもすごく人気があるって聞くし。女の子だけに優しい人って何か目的あるんじゃないかって思ったりするけど、男同士でも信用がある人ってやっぱり頼もしいんじゃないかな。」

なんかワタルがそういう風に言われるとボクも嬉しい…。

「あ、でもさ…。」 みーちゃんが言葉を続ける。

「なに？」

「ウチのクラスの男子だってアンタが彼氏いて泣く人多いと思うヨ。」

「

「エッ、アタシが？ それはあんまり考えられないなあ…（笑）」

「あー、凜はけっこう自分の子とわかってないヨネ？ アンタってけっこう男子に人気高いらしいヨ。」

「アタシがあ！なんか信じられないヨ（笑）」

「うーん…アンタって守ってあげたい雰囲気っていつのかな。可愛いし。」

「可愛い！？ エー！」

「ハア…。 わかってないねえ。 まあ、そういうところがアンタの魅力でもあるんだけどネ（笑）」

なんかわからないもんだ…。
ボクって守ってあげたいって雰囲気だったのか？
うーん…。

第三十九話 先輩、ヨロシク！

「みーちゃん、準備オツケー？」

「なーんか、凜。最近すごく張り切ってるねえ。」

放課後の部活。

今まではみーちゃんに急かされていたボクも最近は少し立場が逆転（笑）

毎日が宝石のようにキラキラして楽しい。

「ヨシッ！凜、いいヨ。」

「じゃ、行こう！ ミコ、また明日ねー！」

「ウン。凜、みーちゃん。バイバイ。」

水泳部のミコ、そしてチア部のボクとみーちゃん。それぞれ新入生はホントに忙しい。

「ホラ、みーちゃん。遅れたらまた先輩に怒られちゃうヨー！」

「ハイハイ。わかったって（笑）」

半分駆け足の急ぎ足で廊下をダッシュ。

あと20分で着替えてプレイルームに行かなくちゃいけないんだ。

3階の教室から階段を降りて1階へ。そしてあの廊下を曲がれば体育館への近道！

スタスタスタスタ……。

そして段々足が速くなって

タッタッタッタ……。

そのとき！

ボクが曲がろうとした角から男の人が2人出てきた。

（あああーーーーっ！止まれないーーーーっ！）

ドーーーーン……！

とぶつかってしまつたことを想像して思わず目をつぶってしまったボク。

するとそのうちの一人が

「オツと……！」とボクの両肩を掴み、

そしてそれでも勢い余ったボクの身体をヒョイツと抱き上げた。

「キヤアツ！」

「アアアアアアア……………」。

「オイオイ、だいじょうぶか？」

そう言っつてその人はボクの身体をゆっくりと下に降ろす。

「あ、あの、す、すいませんでした！」

ボクは真っ赤になって思わず頭を下げた。

「いいヨ。でも、ここはみんなよくゴチンゴする場所です有名だからな。今度は気をつけなくちゃな？」

「ハ、ハイ。あの、ありがとうございました。」

ボクはそう言っつて顔を上げると

「あれーっ！もしかしてあのときの娘？」

ボクを抱き上げてくれた人がそう言った。

(え?.....)

「あーっっっ!! あのときの!!」

思い出した!合格発表が終わってミコと渋谷に制服を買いに来たときにナンパされて困ってたボクたちを助けてくれた空手部の人だ。

「そうかあ。そういえば今度青葉に入学するって言ってたもんな。」

「だれ? トオルの知り合いか?」もう一人の男の人が彼に聞いた。

「あ、前にちよっとな。」

「ハイ。あのときもありがとうございました。」

「ウン。いいヨ。これから部活?」

「あ、はい。」

「何に入ったの?」

「チア部です。」

「そっかあ。じゃあ、若木と一緒にだ?」

若木と言ってるのは多分2年の若木 佐和子さんだろう。

「あ、そうです。佐和子さんを知ってるんですか？」

「ウン。同じクラスだから。あ、オレ205HRの笹村 透って
いうんだ。」

「103HRの小谷 凜です。あと同じクラスで同じチア部の佐倉
美由紀ちゃん。」

みーちゃんもペコツと頭を下げる。

「ヨロシク。あ、部活急いでるんだろ？ じゃあ、また機会があ
つたらな！」

「あ、ハイ。ありがとうございます。」

そう言っつて笹村さんたちはボクたちと反対の方に歩いて行った。

部屋に着き大急ぎでジャージとTシャツに着替える。

着替えながらみーちゃんが聞いてきた。

「凜、さっきの人ってだれ？」

「あ、じつはね、アタシとミコが3月に渋谷に制服買いに行ったときナンパされて困ってたの。そのとき助けてくれた人だよ。」

「そうなんだあ。背高かったネー！」

「なんかね空手部みたい。」

「へえー！やっぱり強そうな感じするもんね。でもカッコいい人だよネ？」

「ウン。そうだねー。」

(ワタルとはちょっと違ったワイルドなタイプかな……………。)

(でも不思議とどこかワタルと似た雰囲気を持っている気もする。)

そんなことをふつと考えたら急にさつき笹村さんに抱きかかえられてたことを思い出した。

(……………!! 真っ赤……………。)

その日の練習が終わって渋谷駅でみーちゃんと分かれる。

みーちゃんはここから東急線、そしてボクはJRで新宿まで出る。

夕方7時の渋谷駅。

ちょうど会社帰りの混雑でホームにはたくさんの人が並んでいた。

ボクはホームの真ん中へんのあたりの列に並ぶ。

そのとき

「あれ、小谷さん？」

「あ、笹村先輩！」

声をかけられてふっと振り返ると笹村さんが一人で立っていた。

「笹村先輩も部活が終わって帰るところですか？」

「ウン。小谷さんもか？ チア部はずいぶん遅くまでやってるんだな。」

「うちの部は、終わってからいつも大学の学食で30分くらいみんなでお茶していくんです。」

「あ、オレも部活終わってときどき行くヨ。そっか、じゃあ小谷さんもいたんだな。」

「空手部でしたっけ？」

「ウン、そう。でも空手の試合じゃチア部の応援は期待できないな
ー！（笑）」

「アハハハハ！」

あときは結構クールな印象があったけど、笹村先輩は話し出すと意外と面白いことがわかった（笑）

ボクたちは山手線で新宿まで一緒に行き、その後はボクが中央線、笹村先輩は西武線に分かれた。

「じゃなー！」

「ハイ、しつれいします。」

本当に不思議な縁っていうか。

年上の男の先輩まで知合いになれてボクの高校生活はドンドン広がっていく感じがする。

第四十話 キャンプへGO！1

「凜、おねがいつ！」

いよいよ明日からGWという前日。

朝、教室で会ったミコはいきなりボクに手を合わせた。

「え？なに？ ミコ、どーしたのヨ？」

ミコは真剣な顔でボクの方を向いて事情を話し出した。

「じつはさあ、昨日芦田さんから電話があつたのネ。」

「フンフン。」

「それで、芦田さんの大学のサークルで10人でGW中にバンガロ―に一泊してバーベキューをやる予定だつたらしいんだけど、一緒に行くはずだつた女の人5人のうち2人が急に来れなくなつちやつたんだつて。女子のバンガローが5人用で3人だと貸してもらえないだつて。それで費用はもう払つてあつていらぬからアタシと凜で来ないかつて誘われたのヨ。」

「なるほどネエ。それでミコちゃんは困つちやつてるわけネ？」

「そーなのヨツ！ それにさあ、アタシの親は芦田さんのことぜん

ぜん知らないし、でも凜のお母さんは芦田さんを良く知ってます。く真面目でいい人だって言ってるじゃん？だから凜の知合いだから凜も一緒なのって行って行けるかなあって……………」

「フフフ…。ミコちゃん可愛いネエ（笑）」

「モウツ！からかわないでヨー！」

「アハハ！ ミコ赤くなってるー！」

「コラー！」

「ゴメン（笑） アタシはいいけど、それで何日なの？」

「えっとね、5月4日から5日なんだよね。」

「あ、その日……………」

「何か用事ある？」

「うーん……………。ちょっと待ってて。」

ボクは手帳を開いて確認。

（あ、やっぱり……………。）

じつは5月5日は普段チア部の活動であまり会えなくなったワタルと久しぶりにデートの約束をしていた。

(あ、そうだ！)

「あのさあ、そのキャンプって男の人がもうひとり増えちゃダメかなあ？」

「だれ？」

ミコが不思議そうな顔をして聞く。

「じつは…ワタル君。」

「あ、そういうことネ。 ちょっと待って？」

ミコはカバンから携帯を取り出して芦田さんに電話をかけた。(本当はこの学校、携帯を持ってきちゃいけないんです(笑))

しばらく話すとミコは嬉しそうな顔で携帯を切る。

「あのね、だいじょうぶだって。それで芦田さんも去年の学園祭のときワタルに会って知ってるでしょ？ だからもし来てくれるんだったら費用はみんなで割るからいらないうって。」

「ホント？ よかったあ。 じゃあ、ワタル君に聞いてみるヨ。」

「ウン。凜、期待してるヨ。」

HRの開始までまだ20分くらいある。

ボクはワタルのいる107HRまで行ってみた。

ボクは107HRはワタル以外誰も知らない。

ドアの隙間から中を覗くとワタルが男の友達と話をしていた。

(あ、いたいた！)

そこで教室の入口のところで、中に入ろうとする女の子に声をかける。

「あの、すみません。石川君を呼んでもらっていいですか？」

その娘は大して気にした様子もなく応じてくれた。

「あ、ちょっと待っててネ。石川くーーーーん！呼んでるよー
ー！」

するとワタルがこちらに来るのが見える。

「あ、なーんや。凜ちゃんか。どないしたん？」

ボクはミコからのお願いをそのまま話した。

「あのさ……ゴメンね。せっかく久しぶりに2人でデートって思ってたのに……。ダメかなあ？」

ボクはワタルが「残念やー!」くらい言うのかって思ってたけど、意外にもあっさり

「あー、ええヨ。楽しそうやん。でもボクまで混ぜてもらっちゃってえんかい?」

「アタシはワタル君が来てくれればすごく嬉しい。」

「やったら、みんなで行こうや。」

「ウン!」

自分の教室に帰ってミコに伝えるとミコも大喜び。

そしてボクたちはみんなでキャンプに行くことになった。

キャンプ当日の朝7時

青葉学院大学の正門前。

ボクとワタルとミコは駅で待合わせをして揃って集合場所に着いた。そこにはすでに芦田さんを含めた男の人5人と女の人3人が集まっていた。

「おはようございます。」

「お、おはよー！ やあ、凜ちゃんとワタル君も久しぶりだよね。あ、そうだ！まずはみんな高等部への合格おめでとう。」

「ありがとうございます。」

「芦田さん、ボクもお邪魔しちゃって良かったですか？」

「もちろん大歓迎だよ！ ワタル君がいたほうが楽しいしな。バングローは男女別々だからさ、夜には男同士でいろいろ語り合おうぜ！」

「ウヒヒヒ！ そらええでんなー。楽しみですわー！」

「ワタル君、キミは男同士で何話すつもりなのかなー？」

「そら、女にはとても言えない話を…おっと！」

「アハハハハ！」

そしてボクらは芦田さんに今日のメンバーを紹介してもらおう。

メンバーは芦田さんが大学で入っている旅行研究会の人たちで、男の人が松本さん、前田さん、上田さん、佐野さん。女の人が蓮池さん、田中さん、椎名さん。

芦田さんの運転するワゴン車にボクとワタルとミコを含めて6人、そして前田さんの運転するワゴン車に5人が乗って出発した。

目的地は神奈川県の七沢温泉キャンプ場。

東名高速に入ると少しずつ混んできた。
それでも1時間ほどかかって途中海老名サービスエリアで休憩を取る。

「さあ、ここでちょっと休憩を取ろう。この先はまっすぐ目的地に向かうから今のうちトイレとか行っておいたほうがいいよ。」

女子トイレは列が長い

ボクとミコは降りるとすぐに女子トイレへ向かった。

「わあ！ずいぶん並んでるんだネー！」

「まあ、今日はGWの中間だしね。あ、あれ…。」

ふと少し離れたところを見るともう一台の車に乗っていた前田さんと蓮池さんの姿を見た。

2人でベンチに座っている。

(あ、ボクたちより先に着いてたんだ。)

前田さんは何かを食べているみたい。

片手に小さなトレイを持って何かを口に頬張っている。

「やつほー！」とボクが2人に声をかけようとした

そのとき

ゴホゴホッ！

きつと頬張りすぎてむせたんだろう。

前田さんが食べていたものを吹き出してしまった。

すると横にいる蓮池さんは自分のバッグからすぐにハンカチを取り出して前田さんの口元を拭いてあげているのが見えた。

（ああ、そっかあ……。）

なんか見ていてすごく自然な雰囲気だった。

そういうときにティッシュをあげるとかはあるんだろうけど、自然に自分のハンカチを出して相手の口元を拭いてあげられるっていうのは、やっぱりちゃんとした気持がないとできないことだと思う。

なんかそういうのってステキだなんて思える。

第四十一話 キャンプにGO！2

途中渋滞にはまりながらボクたちは11時頃キャンプ場に着いた。

「わあー、やっと到着ーっ！」

ボクたちはキャンプ場の駐車場に止めたワゴン車から降りた。

「わあ、すごい！ 緑いっぱい！」

太陽の光さえ深い木立に遮られてキラキラした木漏れ日になってる。

「いっぱいっていうか、山だもん（笑）でも空気おいしー！」

ミコもあたりを見回して深呼吸。

「このすぐ近くに溪流があるみたいヨ。凜ちゃん、ミコちゃん。あとで行ってみようヨ。」

蓮池さんがボクらに地図を見せて言う。

「わあ、いいですねー！ いきたあーい！」

男の人たちはそれぞれ車に乗せた荷物を降ろして運び始めた。ワタルも芦田さんの指示を受けて荷物の仕分けをする。

「あ、アタシたちも手伝います。 どれ持てばいいですか？」

ミコが芦田さんに尋ねる。

「ああ、これはかなり重いからね。じゃあ、そっちの野菜類の入ってる袋を運んでもらっていいかな。」

「ハイ。」

ボクとミコはスーパーのビニール袋に入った野菜をそれぞれ1袋ずつ持った。

「ね、蓮池さん。お昼と晩御飯のメニューは決まってるんですか？」

「ウン。お昼はねカレーにするつもりヨ。それで晩御飯はお楽しみのバーベキューパーティ！」

「わあー！楽しみですな。」

そこから5分ほど歩くと丸太でできたバンガローが何軒も並んで建っているのが見えてきた。

「あ、ミコ。ホラ、あそこ！」

「ホントだ！バンガロー！」

「よし、じゃあ管理事務所に行って手続きしてくるからネ。チヨットここで待ってて。」

そういつと前田さんがキャンプ場の奥の方に歩いて行った。

「ね、ミコ。カレー作るの得意？」

「うーん……。お母さんの作るの見てるくらいかなあ。凜は？」

「同じー。水に野菜と肉を入れてカレー粉入れるのかなあ……。って感じ。」

すると蓮池さん

「よしっ！じゃあ今日はこの蓮池のおねーさんが青葉学院大学旅の会特製のスペシャルカレーの作り方教えちやるっ！」

自信たっぷりのご様子。

「先生、よろしくお願いします！」

ボクとミコは揃って頭を下げた。

「おい、いいぞー！ じゃあ、バンガローに各自の荷物を入れて。男はこっち。女の子はその隣の棟ね。」

「わあ……。なんか暗いねー。」

中に入ると10畳ほどの空間があって下は板張り。

そこにビニールのゴザが敷き詰めてある。

天井の真ん中にランプがひとつ吊るしてあって雰囲気最高！

「開けていいかい？」

外から芦田さんの声がした。

「ハイ、ドーズ。」

「ハイヨ。布団5枚借りてきたから。」

「あ、ありがとうございます。」

「じゃあ、準備ができたなら集合ね。みんなでお昼を作ろう。」

「ハイ！」

ボクたちは身支度を整えるとバンガローの前には小さな炊事場に集合した。

「えっと、それじゃ、男は薪で火を起してご飯盒でご飯を炊く。女の子はカレーとデザートでいいかな？」

「ウン。オツケー。」

女性チームのリーダーは蓮池さん。

「さつてと、じゃあ女性陣は材料のカットから始めようか。じゃあ、凜ちゃんは玉ねぎと人参、ミコちゃんはジャガイモとセロリ、あとりんごを2つ剥いてすりおろしてくるかな。菜緒子と藍はお肉をカットして炒めておいて。それでアタシは水を汲んできてお鍋にお湯を張るから。」

「ラジャーッ！」

カレー作りが始まった。

「まずはお肉を軽く炒めて」

「そこに野菜を加えてさらに炒める。」

「火が通ったら沸かしたお湯を入れて」

「そして弱火で丁寧にアクを掬い取っていくのヨ。」

「さあ、ここで隠し味！ ウスターソースにお醤油にケチャップ、そして極めつけはインスタントコーヒーです！」

「え、インスタントコーヒー！？」

「そうヨ。これを入れるとね、味にコクが出るの。お勉強になったでしょ？」

「ウン。びっくりです。」

「そのうち彼氏にも作ってあげて。」

「アハハ！」

ふと男性陣の方を見るとワタルも飯盒ご飯に悪戦苦闘中（笑）

「芦田さん、水加減はこんな感じでええんでつか？」

「そうだな。もう少し水を増やしたほうがいいな。」

「ハイ。わかりましたあ！」

「よし、もういいかな。そして最後は飯盒を逆さまにして蒸らすんだ。」

「へえー！おもしろいなあ！」

そしてしばらくして

「やったあー！カレーできたよー！」

そして炊き上がったご飯にカレーを盛り付けて、デザートに剥いたりんごとメロン、さくらんぼをデザート皿に並べてテーブルに出す。

缶ビールを並べて、ボクたち高校生3人は缶コーラ。

「じゃあ」

「かんぱーーーーーいつつ!!!」

「カアアアアーーーーーッッ!! ビールうまーーーーー
っ!」

「じゃあ、カレーもいただきまーす!」

一口食べたボクとミコは同時に

「おいしーーーーっ! すっごいおいしいです! えー、なん
だろ? 味がすごく深いっていうか。」

「フフフー。でしょー!? うちの旅の会伝統のカレーヨ。」

「スゴイ! 今度家でも作ってみよう!」

そして食事が終わると溪流で水遊び。

ボクとミコはキュロットにはき替えて水の中に入った。

キラキラと光る水面

「わあ! すごい冷たい!」

「でも水がすごい透き通ってきれいだよね。」

「あ、魚が泳いでる!」

さて今晚は夕飯が終わったあと肝試しをします！
楽しみにしていてくださいネ。

第四十二話 キャンプへGO！ラスト

溪流で水遊び。

男性陣はその間に管理事務所から釣竿を借りてきて釣りを始めた。この付近は地域の人がヤマメを放流していて、お金を払えば竿を貸して釣ができるようになっていているそうだ。

ボクはワタルの近くに座り観察。

「どう釣れそう？」

「ボクは釣師って呼ばれた男やで。」

「クスクス。ホントかなあ（笑）じゃあ、今晚のおかずは期待していいのかしら？」

「任せてんか！ヤマメの塩焼きの準備しといてなー！」

ミコは芦田さんのそばで仲良くお話中。

この2人少しずつだけとなんか段々いい雰囲気になってきている感じがする。

「おおっ！きたでー！ 凜ちゃん、網！網取ってんか！」

「ハ、ハイ！ これでいい？」

「よしっ！もうチョット！ もうチョット…よしっ！やったでー！」

「わぁ！ワタル君すごいっ！」

近くで釣っている前田さんもびっくり。

「おおーっ！ワタル君に先を越されたか。大したもんだ！」

すると今度は芦田さんの竿に魚が掛かった。

「芦田さん、がんばってー！」

ミコの必死の応援。

「よーし！釣り上げたぞー！」

「やったー！」

ミコは大喜びだ。

そしてそれから1時間半ほど。

男性5人でなんと13匹のヤマメを釣り上げた。

「すごいわぁ！夕食が豪華になっちゃった。」

さつそく青葉大旅の会の女性人、蓮池さん、田中さん、椎名さんの3人で釣り上げたヤマメを塩焼きにするための下準備。3人は包丁で内臓と血合いをとって串に刺す。

「わぁー！上手ですねー！」

ボクとミコはそれをそばで見てるだけ。

「フッフ。アタシも大学入るまで母親の料理をほとんど見てるだけだったけどネ。旅の会で色んなことを先輩から教わったのヨ。」

「へえ、楽しそうですね。」

「凜ちゃんとミコちゃんも高等部卒業したら青葉大でしょ？ぜひ旅の会に入ってヨ。」

「入りたいなあ。今から予約してもいいですか？」

「いいワヨ。準会員ってことだ(笑)」

「アハハ。」

「さあ、できた。じゃあ、今度は凜ちゃんとミコちゃんでそれぞれのヤマメに塩を振ってくれるかな？」

「はい。」

その間に男性陣は機材を設置して炭を起してバーベキューの準備。

「ホント！うまいなー！」

「ふー、満腹、満腹。」

「おいしかったー！」

「よしっ！ じゃあ食後はびっくり企画！」

ボクたちは食べ終わった食器を片付けながら尋ねる。

「なんですか？」

「肝試しだっ！」

「エー！肝試し？」

「そうだよ。ルールは簡単。ここから1キロほど歩いたところに古い社がある。そこにこの赤い札が4枚置いておく。オレ（前田さん）と蓮池のねーさんが企画係だ。男女2人でペアになってそれぞれのペアの書いてある札を1枚ずつ取ってきて戻ってくるだけ。いいかな？」

「ハイ。」

そして蓮池さんが赤札を並べてそこにペアの名前を書いていく。

「じゃあ、アタシが勝手にペアを決めさせてもらっわヨ。えっと、

まず初めに松本ちゃんと菜緒子（田中さん）、次が佐野君と藍ネ。3番目は高坊（芦田さん）とミコちゃん、そしてラストはワタル君と凜ちゃん。上田君は余っちゃったから途中で隠れて脅かし係ヨ。オツケー？」

「オツケー！」

「チエツ、オレは脅かし係かぁ（笑）」

「くさるな（笑） あとでご褒美にたっぷり男性陣にビールを差し入れてあげるから。」

「やつほーい！」

「アハハハハ！」

「ハイ、じゃあ、アタシと前ちゃんと上田君が今から出発して準備をします。20分経ったら初めてのペアからスタートしてネ。その後は第2ペアから順番にスタートだけど、前のペアとの間には必ず10分時間差を置くこと。あ、それと真つ暗で足元が見えにくいからね。必ず！ペアは手を繋いで歩いてください！いいわネ？コレはお約束ヨー！ じゃあ、いきます。」

そして20分経って最初のペアがスタート。

しばらくして2番目のペアもスタートした。

「凜々、アタシ肝試しって小学校以来だよ。怖くない？」

「フフフ。せっかく芦田さんとペアになれたんじゃん。いっぱい甘えちゃえば？」

「エへへ…。」

「さあ、ミコちゃん、オレたちもそろそろスタートしようっ。」

芦田さんがミコに声をかけた。

「あ、ハイ。お願いします。」

「じゃあ、手を出して？」

「ハ、ハ、ハイ。」

ミコはドキドキした様子で左手を出す。

「じゃあ、スタートしよう。お先に。ワタル君たちも気をつけて来るんだヨ。」

「ハイ。お気をつけて。」

ボクたちはミコと芦田さんの姿を見送る。

10分後

「さあ、ボクらもスタートしよか？ 凜ちゃん、気をつけて着いてくるんやぞ。」

「ハイ。」

「おおっ、やけに素直やな（笑）」

「そう……かな？ エへへ……。」

「さあ……。」

ワタルが手を差し出しボクがその手を握る。

「わぁーっ！」

「きゃぁぁーっ！」

しばらく歩いたところで前の方のペアの叫び声が聞こえてくる。

きつと上田さんたちが脅かしているんだろう。

「なんか、前のほづすごいね。」

「ホントやなー。どんな脅かし方してるんやろ？」

「白い布を被ってワアッて出てくる？ うーん…ありきたりだよネ？ じゃあ、いきなり立っててクルツて振り向いたら顔がないとか…。」

「ワハハ。凜ちゃん、意外と創造力ないなあ（笑）」

「モオオーーー!!」

そう言ったとき、ボクは自分の足元に何かコチャツとしたモノを踏みつけた。

「あれ？ゴメン。チョット待って？なんか踏んじやったみたい。」

ボクがそう言って立ち止まり足元を見たとき……

「おねえちゃん……痛いヨオ……。」

「……エ？」

するとボクの横の草むらから突然長く白い手が出てきて僕の足首を掴んだ。

「ひいっ!!」

そしてボクの顔はヒクヒクと引きつっていく。

次の瞬間!

「ぎ、ぎゃあああ——————————っっ!!!!」

「ぎゃあっ!!!!ぎゃあっ!!いやああ————————っ!!!!」

恐怖に頭の中はパニック状態。
そばににいるワタルの体にしがみついて叫ぶしかない。

「やった!やったーっ!」

そう言って顔を出したのは上田さん。

「やったぞ!　ワハハ!　ワタル君、役得だろ!？」

そう言って上田さんは走って逃げていってしまった。

「凜ちゃん、もう行ったでー!」

ワタルの胸に顔を埋めているボク。

「ウ、ウ、ウン…。」

まだ足が少し震えている。

「ワハハ！あれはチョット予想外やったな。凜ちゃんの恐怖ストライクゾーンど真ん中やったか？」

「う、う、うううう……。」

ボクはまだ少し残っている怖さと気恥ずかしさで涙がでてきた。

「オイオイ、だいじょうぶか？」

そう言っつてワタルが腰を落としてボクの顔を覗き込んだとき

「エイッ！」

ボクはワタルの肩に両手を伸ばし、

そして

目を閉じてワタルの唇に自分の唇を重ねる。

「り、凜ちゃん！む、むぐっ！」

ワタルは一瞬驚いたように

「ど、どないしたん？凜ちゃん？」

ボクはワタルの耳元で囁いた。

「ね、ワタル君。アタシのことギュって強く抱きしめてキスして？」

ワタルも目を閉じてボクの唇に絡みつく。

「はぁ……。」

唇を離れたボクはワタルの厚い胸に顔を埋めていた。

今は何も考えられない。

ただこうしていたい…。

それだけだった。

初めてボクがワタルに求めたキス。

どうしてなのかはわからないけど、ワタルに抱きしめてほしかった、キスしてほしかった。

ワタルもボクにその理由を聞こうとはしなかった。

全員がゴール地点に集合して肝試しは終了。

ミコがそばに寄ってきてボクに囁く。

「凜の声、聞こえたヨ。」

「えーどこまで?」

とっさにボクはそう聞いてしまった。

「どこまでって? きゃああーっ! って あれ怖かったよねー。
上田さんのときでしょ?」

(あ、そっか…。そっちな ホツ!)

「うん! そうそう! すっごく怖かったの! アハハハ!」

「どーしたの? へーんな凜(笑)」

「エへへ…。」

その日の夜。

バンガローの中ではガールズトーク大盛況。

きつとあっち(男のバンガロー)でも色んなことを話してるんだろ
う。

特にミコは芦田さんと一緒に過せた楽しい時間を忘れられないよう
だ。

でも、そんなミコがひとしきり話した後急に少し切ない顔になる。

「おやあゝ、ミコちゃん。どうしたの？」

蓮池さんがミコに尋ねた。

「えっと……。アタシは一日芦田さんと色んな話ができ、芦田さんの今まで知らなかったとことかわかってすっごく楽しくって嬉しかったの。でも……………」

「でも？」

「アタシは芦田さんより5歳も年下だし、それにアタシが芦田さんのことステキだなんて思ってるように、大学にも芦田さんのこといなくなって思ってる人がいるんじゃないかなって……。やっぱり彼女とがいるんでしょうね……」

蓮池さんはすごく考えるそぶりをして

「うーん……………まあ、このメンバーだったらいいかな。これは2人を信用して話すことだからね？」

と念を押した。

「ハ、ハイ。」

「えっとネ。まず高坊、あ、芦田君のことね、高坊には大学入ってから今まで付き合ってた人はいないヨ。」

「ホント？」

「ウン。ホント。もっと正確に言えば、大学の初めまではいたん

だけどね。菜緒子と藍は知ってるよね？」

「あ、ウン。」

ミコは真剣な顔で蓮池さんに尋ねた。

「今、その人とは？」

「うーん、じゃあ、話すね。高校生の女の子たちにはちょっとエグイ話も出てくるけど、それはしっかり聞いてね。」

高坊はね、じつはアタシと同じ中学・高校のクラスメイトだったの。たまたま同じ高校に行ってるね。中学時代はそれほど仲良く話したわけじゃないんだけど、高校入ってからと同じ中学出身だったっていうのもあってよく話すようになってね。」

「2人は付き合ったことがあったの？」

「ウン。ないヨ。周りはいつかアタシたちは付き合うことになるんじゃないかって思ってたみたいだったけど。今だから言うけど、アタシはそうなるのもいいかなって思ってた時期もあったの。でもそう言うふうにはならなかった。」

それでね、高坊は高2のときある女の子と付き合うようになったの。じつは彼女はアタシのクラブの友達でね、アタシは彼女に高坊のこゝと紹介して？って言われてね。そしたら意外にも付き合っちゃったのヨ。」

「ウン。」

「それで2人はその後もずっと付き合ってたね。 大学受験のとき、アタシと高坊とその彼女は3人で青葉学院大学を目指してたの。でも結果はアタシと高坊は受かってその彼女だけ落ちちゃったんだよね。」

でね、彼女は滑り止めに受けていた大学には合格してそっちに行っただの。 大学は分かれちゃったけど、大学の入学前まではやっぱり2人は仲がよくって、その後もずっと付き合っていていくんだって思ってたの。」

「大学が違っても付き合うのは関係ないもんね。」

「そうネ。でも、ちょうど入学して1ヶ月くらい経ったときにね、2人は急に別れちゃったの。そのとき高坊はすっごい落ち込んだりして。 大学もぜんぜん授業に出てこなかったの。」

アタシもどうしてかな？って思ったんだけど。

それでそれから少しして地元でたまたまその彼女と会ってたね。 まあ2人の問題だから、アタシが口を挟むことじゃないとは思ってたんだけど、高坊とは長い付き合いだったしね、彼女はアタシにとって高校時代の友達でもあったし、それで聞いちゃったの。

そしたらその彼女はその場で涙を流して泣き出しちゃってたね。 理由を聞いたら「アタシが全部悪いの」って言うのね。 それでしばらく待ったら彼女は少しずつ話し出してくれて。

彼女も大学は別になっても高坊と付き合っていくつもりだったらしいのね。 でも、その別の大学に入学して入ったサークルの歓迎コンパの席で初めて知り合ったある男の先輩とすごく気が合っちゃっ

て…。

その日のうちにそういう関係になっちゃったらしいの。」

「そういう関係って…。」

「ウン、そう。はっきり言えば、セックスね。」

「え、そう…なんだ？」

「ウン。アタシはそういう風な娘とは思えなかったんだけどね。

もちろん無理やりされたわけでもなく、酔って寝てる間にそういうことになったわけでもなく、お互い求め合ってたって彼女は言ってたわ。それで高坊に悪いって思ったら、その人とも付き合わなかったんだろうけど、その彼女は結局その男の人を選んじやったんだよね。理由は自分でもわからないって彼女は言ってたの。」

「でも、その彼女は酷くないですか？」

「そうよね。あなたたちは当然そう思うわよね。アタシだってそのときはそう思ったわ。でも、彼女は「今幸せなの」ってアタシにしゃあしゃあと言ったのヨ。」

その顔見て「ああ、この人はダメだ」って思うのは簡単だったんだけど、なんか妙に納得しちゃったのよね。しょうがないんだって。」

「しょうがないって？」

「ホントに愛し合ってるというのは理屈じゃないってこと。好きになる相手に理由は要らないっていうのかな。アタシは「じゃあ、

「ご自由にどうぞ！」って彼女と別れたわよ。それっきりその娘とは会ってないけどね。でもそのときはやっぱり高坊にとっすごくシヨックだったみたいでね。それで胃を悪くしちゃってしばらく入院したりして。」

「あ、アタシと知り合ったとき？」

「そうらしいね。凜ちゃんっていう女の子と入院中に友達になっただって言ってた（笑）」

でもね、しばらくしてあるとき凜ちゃんの友達でミコちゃんっていう女の子とも友達になっただって話を高坊から聞いてね。それからときどきミコちゃんの話が出てくるようになって、そのうち凜ちゃんのことよりミコちゃんのことのほうが多くなって（笑）高坊は「ホントに素直で可愛くて大切な妹なんだ」って言ってたけど、アタシはホントにそうかなあって思ってる。」

「……………え？」

「まあ5歳も離れていると、今は自分にヘンにバリアを作っちゃったりするのもかもしれない。特に男の人はね。でも、5歳なんて実際ぜんぜん大したことないよ。ホントに好きだったら関係ないっと思う。だから、ミコちゃんが高坊のことをこれからもっと好きになれそうなら高坊のこと信じて頑張ってみたらどうかな？」

「ウン。ハイッ！」

ミコは顔を真っ赤にして頷く。

「フフフ。じつはね、今回のキャンプのこともね、ミコちゃんと凜

ちゃんを誘う前にサークルの中で都合のつく女の子が何人かいたんだ。でも、アタシが「ミコちゃんと凜ちゃんとぜひ会ってみたいから誘って」ってね、高坊に命令しちゃったのヨ（笑）」

「エー、そうだったんですか？」

「きつといつか2人の気持ちが重なればそういつときがくるんだろうけど、チョット背中を押してあげないといけないときってあるでしょ？ ましてあの真面目な高坊だし。」

「アハハハ！」

「でも、こういうの何だけど、高坊は御薦めヨ。彼は本当の男の優しさっていうのを持っている人だと思う。」

「ハイッ！」

ミコは嬉しそうに返事をする。

2人の気持ちが重なったとき……………。

蓮池さんのこの言葉はボクの心の中にも深く刻まれた。

こうして夜はふけていく。

第四十三話 ライバル出現！

「あ、ワタル君！」

部活に行く途中ボクは廊下で偶然ワタルに会った。

「おお、凜ちゃん偶然やな。これから部活か？」

チアバッグを抱えているボクを見てワタルはそう言った。

「ウン。ワタル君はもう帰っちゃうの？」

「いや、チョットクラスの研究で調べものがあって大学の図書館に寄ってこう思てな。」

そういえばワタルは手に何冊かの本を抱えている。

「そうなんだ？　じゃあ、もし遅くまでかかるんなら一緒に帰れるのかな？」

ボクとワタルがそんな話をしていると

「石川君、お待たせ。」

突然現れたのはすらっとした感じの少し赤みかった髪の綺麗な女の子。

スカートは腰のところで巻き上げてかなり短くしている。

その娘はボクの方をチラッと見た。

「石川君、この人は？」

「ああ、103HRの小谷さんや。ボクと同じ中学のクラスメイト
やったん。」

「こんにちは。」

ボクはその娘に挨拶した。

すると

「ふうん……。」

（なに？この娘！人が挨拶してんのに「ふうん……。」はないんじゃない！？）

ボクもさすがにカチンと来て言ってやった。

「ワタル君、どなたかしら？」

ワタルはその場にただならぬ雰囲気を感じたのか少し引き気味で

「あ、ああ。えつとな、ボクのクラスの川上かわかみ 弥生やよひさんや。共同
研究で一緒のチームなんや。」

「へえ……。そう。」

「…どうも。」

その娘はボクにそう一言だけ言った。

わずか1秒ほどだったけど、ボクとその娘はお互いに相手を睨むように見る。

すると

「石川君、みんな待ってるヨ。もう行こう?」

その娘がワタルの手を取って引つ張って連れて行こうとした。

(チヨ、チヨツトツ! アンタなんでワタルの手を引つ張ってるのヨツ!)

ワタルは彼女に手を引つ張られながらボクに言った。

「あ…、えつとな。じゃあ、これからみんなで大学図書館行ってくるわ。何時に終わるかわからんから、悪いけど今日は一緒に帰れんと思う。」

「あっそっ!じゃあねっつ!」

彼女はそのままワタルと手を繋ぎながらスタスタと歩いていく。

遠ざかるうとするとき、「フンッ!」という感じに笑ったように見えた。

「らしいヨ。だから中等部出身の男の子はもうあんまり相手にしてないって。でも石川君は高等部から入ったからきつとそれ知らないんだネ。」

「なに、それ？」

「まあ、石川君も優しいからサ。はっきり言えないんだろうネ。」

「優しいっていうより優柔不断なのヨツ！」

「アハハハ！でもだいじょうぶだよ。石川君だってそんな娘の本性くらいわかってるだろうし。石川君の彼女は凜なんだから、気にしなければそのうち他の男の子に行っちゃうって。」

「ウン……………」

（ワタルを信じて、ボクが気にしなきゃいいんだよネ…。）

ところがこの娘はそんな甘い娘じゃなかったみたい。

次の日の昼休み

ボクはちょうどお弁当を食べ終えてミコとみーちゃんの3人で話をしていた。

「凜……！何か呼んでるよーっ！」

教室の入口のところからチャコがボクに声をかけた。

「あ、ありがとー。 誰だろ？」

廊下に出てみるとそこには”あの川上 弥生”が立っていた。

「…え？」

「ゴメンね。 呼んだのアタシなの。」

「それで…何でしょう？」

ボクは少し引きつった顔で彼女にそう尋ねた。

「あのさあ…。 アナタもしかして石川君と付き合ってるの？」

ズバリ直球できましたネ！

もうチョット何かひねりがほしいもんだワ！

ボクは顔をヒクヒクと引きつらせながらもそのお尋ねに直球で返してやった。

「付き合ってるわよ。 それが何か？」

川上さんはボクを睨みつける。

そこにミコとみーちゃんがボクを心配して様子を見に来てくれた。

「ねえ、川上さん。 石川君は凜と付き合ってるってわかったんだか

ら、もうこれでいいんじゃない?」

ミコが川上さんにそう言うと

「アナタたちには関係ないでしょ!」と彼女は声を荒げた。

するとたまたまそこを通りかかった川上さんと同じクラスの女の子
2人が

「あれ、弥生。どうしたの?」と彼女に話しかけてくる。

川上さんは

「なんかね、103HRの小谷さんが石川君は自分の彼氏だからあんまり親しく話さないでって言うの。」

ボクはびっくりした。

「エーッ! アタシそんなこと言ってないジャン!」

ミコモさすがに頭に来たようで

「そうだヨ!川上さん、アンタウソつかないで!」

「ほらね。こんなふうになんでアタシ責められちゃって…。」

その107HRの娘たちは

「チョット待ってヨ。石川君はうちのクラスの男子だヨ。クラスで共同研究してて、彼女だからあまり親しくしないでって言われる筋合いないんじゃない!?」

川上さんのクラスの女子2人はボクらに応戦してきた。

「違っただってば！ 凜はそんなこと言っていないのヨ！」

「言ってるジャン！ しかも3人で弥生一人を責めてたんでしょ！？」

「ひどーいっ！」

すると教室に入ろうとしたボクらのクラスの女子が何人か集まってくる。

「どっしたの？」

みーちゃんが事情を簡単に説明する。

うちのクラスで中等部出身のエリちゃんが川上さんの方を向いて言った。

「チョット弥生さあ、アンタ中等部の頃からのそういう悪い癖やめなヨ！ アタシずっとムカついてたんだよネ！」

即座に107HRの女子が言い返す。

「中等部のときのことなんて関係ないでしょ！ 弥生は今のこと言ってるんジャン！」

「アタシ、107HR行って他の女の子たち呼んでくるヨ！」
そう言って一人が走って教室に戻っていった。

しばらくすると彼女は10人くらいの女子を連れてきた。

（うそっ！大軍でくるわけーいっ！？）

するとウチのクラスの真菜はクルツと後ろを向いて教室のドアを開き
「ねえー！女の子集まってー！」と大声で呼びかける。

「なに？」 「どーしたの？」 中にいた女の子10数人が出てき
た。

「えー！なに、それ！」 「チョット！ひどくない!？」
事情を聞いたウチのクラスの女子はみんな怒り出す。

そして107HRの女子はさらに応援を呼びに戻る。

とうとう103HRと107HRでそれぞれ10数人ずつの女の子
たちが向き合って火花を散らし始めてしまった。

422

さて、その頃、当のワタルはどうしてたかというと

これは後で聞いた話だけど……………

「やったーっ！ これで5連チャンやっ！」

「おおおーっ！ ワタルスゲーな！」

「出すでー！もつと出すでー！っ！ワッハッハッハ！！」

なんと、午後から授業をサボって同じクラスの男子3人で渋谷のパチンコ屋の新装開店に行ってたらしい。

第四十四話 女友達

始業のチャイムが鳴っても廊下で対立する合計30数人の女の子たち。

ボクと川上 弥生の間で起こった争いは、いつの間にか103HRと107HRの女の子同士の間で対立へと発展していった。

そこにウチのクラス担任の佐藤先生が現れた。

「アンタたち、何してるの!? お昼休みは終わってるのヨ! 教室に入りなさい!」

ボクらは仕方がなくそれぞれの教室に分かれていく。

「107の娘たち、なんで弥生なんかに加勢してんのヨ!」

「すっごいムカツクよねー!」

みんな腹の虫が収まっていない。

しばらくは大きな対立が起こらずに過ぎていったが、それからその週の金曜日。

1年生では恒例のクラス対抗バレーボール大会があった。

場所は一度で多くの試合ができるように青葉学院大学の大体育館（青葉学院記念館）を借りていた。

男女で各クラス9人ずつで2チームを作りトーナメント形式で試合をする。

ボクは103 - Aチーム。

同じチームにはミコやエリちゃん、そして強力な戦力として女子バレー部の庄野さんがいる。

ボクたちのチームは手堅く勝ち残りながら、午後には準決勝に進んだ。

そしてその相手は同じように勝ち上がってきた107 - Bチーム。
このチームにはあの川上 弥生がいた。

ピイイイーーーーッ！

主審の笛の合図で試合が始まる。

サーブは相手チーム。

パンッ！という音でボールが弾かれて、こちらコートに飛んでくる。

（あ！ボールがボクのところに来た！）

昔はサッカーに夢中だったボクだけど、バレーもわりと得意だった。

すばやくレシーブの姿勢を取ってボールを受け、これをミコがトス、そしてバレー部の庄野さんが思いきり良く高いジャンプでアタック！

ボールはブロックの手を弾き見事に相手コートに入った！

そして今度はこっちがサーブ権。

パーンと弾いたボールは相手コートに
しかしそれはレシーブされて、トスを経て、強烈なアタック！

（あ！またボクのところにも！）

ボクは再度これをレシーブしたが、このときボールが乱れたためアタックされず、トスの状態で相手側に。

すると相手はこれを難なく受けて、確実なトスでアタック！

（え！ウソ！またボクにも！）

さすがに2回目は受け漏らしてしまい、ボールはボクの身体に当たって弾かれた。

相手チームは大喜びで飛び上がっている。

サーブ権が相手に移る。

相手チームはこちらの庄野さんと同じバレー部の娘だ。

バンッ！

強く弾かれたボールは大きな弧を描き飛んできた。

（エエッ！ またボク？）

さすがにバレー選手のボールは受け止められない。

「キヤア！」

強い勢いにボクは身体ごと弾かれてしまった。

相手チームの娘たちはこちらを見て「クスクス」と笑っているように見える。

「すみません！チヨットタイム！」

ウチのキャプテン庄野さんが主審に申し出た。

「みんなチヨット集まって！」

ボクたちはコートの外に出て輪を作る。

「凜、アンタ狙われてるヨ。」

「ウ、ウン。そうみたい。」

「ホント汚いヨネー！あつたまきたー！」

すると庄野さんは少し考えてこう言った。

「ヨシッ！ こつちも川上 弥生を狙っていいこう。」

「エッ、いいのかな？」

「それくらいやんなくっちゃ！目には目、歯には歯をヨッ！」

「オツケー！ いこうー！」

「ヨシッ！ じゃ、いくヨー！ ファイトッ！」

「オーッ！」

コートに戻ったボクたち。

サーブは再び107HRのバレー部の娘だ。

バンツ！

またキツイサーブが飛んできた。

ボクは今度は身体を張ってそれを受け止めてサーブ。

そして奈々ちゃんはそのボールをトスして

庄野さんが高くジャンプ

バンツ！

と力の限りアタック！

ボールは見事に川上 弥生を直撃。

彼女がバレー部1年生でエース格の庄野さんのボールを受けられるはずもなく

キャアツ！

と叫んで大きく身体を弾かれた。

サーブ権がこちらに移った。

庄野さんほどではないけど女子テニス部のチャコのサーブもかなり

強烈だった。

やはりボールは川上 弥生のところに向かい、彼女はこれをなんとかレシーブしたが、さっきのボクと同じようにボールが乱れて、ボールはそのままフワフワとこちら側コートへ。

そしてこれを庄野さんがダイレクトにアタック。

正確に川上 弥生を直撃した。

ここまでくればさすがに相手も判ってきたんだろう。

107HRの女の子たちはすごい目でこちら側を睨みつけている。

「早くボール返してよ。」

チャコが「フフン」と鼻で笑いながら、川上 弥生に言った。

すると

川上 弥生は自分の足元に転がったボールを掴むと

ボクの方をギロツ！と睨みつけ前の方にスタスタと歩いてきて

そしてまるで野球選手のように大きく振りかぶって

そのボールをまっすぐボクにぶつけてきた。

ちょうど前衛にいたボクは彼女との間に7mくらいしか距離がなく、投げつけられたボールに思い切り当たってしまった。

バンッ！

「キヤアッ！ 痛い……」

ミコがボクに駆け寄って来て川上 弥生を睨みつけた。

「凜、だいじょうぶ!? チョットアンタなんてことすんのヨ!」

すると弥生は

「アラ、だってボール返せって言うから返したんじゃない。ウフフ...。」

(うーっ! あったまきたーっ!)

ボクはそのボールを拾い上げて思い切り川上 弥生に投げつけてやった。

バンツ!

「キヤアツ!」

今度は彼女が声を上げた。

ボクと弥生はお互いを睨みつけながら向かい合った。

すると

107HRの後衛にいた娘がいきなりコートの外にあった予備のボールが山積みになったカゴを持ってきて、その中のボールをミコたちに投げつけてきた。

「なにすんのヨ!」

「ウツサイ! 弥生ばかり狙って、卑怯者!」

「卑怯者はどっちヨ! アンタたちが先に凜を狙ってきたんでしょっ!」

「だって！103HRの娘たちが卑怯なことばかりするんだモン！」

「卑怯はどっちヨ！先生、逆です！」

女の子たちはみんな興奮していた。

「どっちも静かにしなさい！とにかく、試合は中止して、103と107の女の子たちは全員教室に集まりなさい！」

そして両方のクラスの女子は全員103HRに集められ、103HRの男子はその間107HRの教室に移動した。

教室に入るとそれぞれのクラスの女子は真つ二つに分かれてそれぞれ席に座った。

教壇には103HR担任の佐藤先生と107HR副担任の安西先生、そして女子体育の大町先生。

女性だけで話し合いをするということで、107HRの山村先生はその場を外した。

「はぁ……………。一体どうということなのか。まずは説明を聞かせてほしいワネ。」

「先生、だつてさぁ……………」

「エーッ！ウソつかないでヨ！」

「ギャーギャー！」「ワァー！ワァー！」

「アァァァ！これじゃ分けわかんないじゃない。それぞれのクラスから代表2名ずつ。出てきて話してちょうだい。」

「アタシたちが話すから。凜は待ってて。」
そう言つてウチのクラスからはミコとみーちゃんが前に出た。
107HRからも弥生以外の最初に入って来た2人が出てきて話す。
しばらく話をして大町先生は

「まあ、だいたいのことはわかつたワ。それにしても、ああいう公式の場所でそういう感情的なことをするっていうのはどう考えても正しくないヨ！　あなたたちにも判つてるでしょ！？」

「だつて……………」

「だつてもあさつてもナイツ！」

そして3人の先生で隅の方に行つて何かを話し合う。

「え、いいんですか？」

「いいワヨ。」

「でも……………」

「いいから。おもしろそうじゃない（笑）」

「そうですね（笑）」

先生3人はくすくすと笑いながら教壇に戻つてきた。

そして大町先生は

「とにかく中止された試合はしっかりやってもらいます！　どうしても納得できていないんならその試合で決着をつけてちょうだい。

それで今回はルールを少し変えます。それぞれのクラスから交代選手を含めて10人選んでちょうだい。当事者の2人は入れておくこと。それとバレー部員は各1名ずつまでヨ。ハイ、じゃ

あ30分後にさっきの青葉学院記念館のコートに集合！」

ボクたちはさっそくメンバーを選んでいく。
そして

ボクの他は水泳部のミコとチア部のみーちゃん、バレー部の庄野さん、テニス部のチャコとクンちゃん、バスケット部のレイちゃん、ソフト部の牧村ちゃん、陸上部のエリちゃん、新体操部のジュリの10人。我がクラスの女子の最強メンバーだ。

30分後

すでに他の試合が終わってガラんとした大きな大学体育館の中央コートに集まったボクたち。

3人の先生が主審と副審をそれぞれやってくれる。

ボクたち2クラス約40人の女子が整列し、大町先生が前に出た。

「それじゃ、アナタ方の感情のすれ違いに最後の決着をつけてもらいます。メンバーはそれぞれ選んだわネ？」

「ハイッ！」

「では、まずそれぞれのクラスを5人ずつに分けてください。」

「5人ずつ？　なんでですか？」

「いいから早くっ！」

ボクたちは、ボクとみーちゃん、庄野さん、チャコ、エリちゃんの5人とそれ以外の5人で分かれた。

同じように107HRも5人ずつに分かれる。

「ハイ、じゃあ次に、半分の5人は相手側の5人と混ぜてください。
い。」

「??？」

「きびきび動くっ！」

「ハ、ハイッ！」

いつの間にか2つのクラスの混成チームが2チームできた。(ボクはAチームで川上 弥生はBチーム)

「ハイ、それではこれよりこの2チームで試合をします。」

「エー……ッ！なんで？」

「これじゃ敵と一緒にじゃん！」

とたんにブーブーと声上がる。

「アラッ！誰がクラスで決着をつけるって言ったかしら？ アタシは感情のすれ違いに決着をつけるって言ったはずヨ？」

「……………」

「3セットマッチで2セット取った方が勝ちヨ。ただし負けたほうにはペナルティとして宿題を課します。これはしっかり成績に反映させますので覚悟あれ(笑)」

「エエエー……ッ！」

「それじゃ、始めましょう。 3セットマッチ！サービスはAチームから。」

そして103&107HR混成チームの対抗試合が始まった。

それぞれにバレー部員1名を入れてそのほかを体育会系で固めた両チームの試合は一進一退で拮抗した。

第1試合は21VS16でAチームが取り、第2試合は18VS21でBチームが取った。
そして第3試合。

19VS20

「ハイッ！藤本さん！」

107HRの女の子がミコにトスを上げて

最後はミコが高くジャンプして強烈なアタックを決める。

ピイイイイーーーーー！！

「終了ーーーーっ！ セットカウントとは1VS2でBチームの勝ちっ！！！」

大町先生が宣言する。

「はああーーーーっ！」

お互いのチームは誰もが疲れてその場に座り込んだ。

「いい試合だったヨ。どっちもよく頑張った！」

大町先生がみんなを褒める。

「エへへ……。」「

「つかれたああーーーーっ！」

もうどっちがどうでもいって感じ（笑）

「さあ、私たちからの差し入れヨ。みんな1個ずつ取ってネ。」「
そう言っつて佐藤先生と安西先生が大きなビニール袋を持ってきた。

「アー、ジュースとプリンだあ！」

「おいしそうー！」

「ごちそうさまですー！」

「きゃあ すっごいおいしいーっ！」

もうどつちのクラスの娘たちもゴチャゴチャに混ざり合ってジュースを飲みプリンを頬張っている。

試合に勝ったBチームにいた107HRの女の子の一人が言った。

「ねえ、先生。宿題は勝ち負け関係なしで全員でいいんじゃない？」

「ウン。さんせー！」

他の女の子たちも同調する。

「そう？（笑） じゃあ、そうしましょう。宿題はレポート用紙一枚に今日のことを踏まえて自分の考えや意見を書いてくること。

テーマは「友達」ということにします。」

「友達？」

「そうヨ。友達。友達じゃなくって友達。期限は来週の月曜

日ヨ。 いいワネ？」

「ハアアーイーッ！」

はあ…。

汗だくだけど、なんかすっごい気分爽快！

ちなみにこのレポートは、提出日から数日後冊子にまとめられて103と107HRの女子全員に配られた。

第四十五話 夏合宿1

7月も終りに近く、夏休みに入った。

もうすぐボクが女として生活するようになって2年が経とうとしている。

(もうあれから2年か……。いろんなことがあったなあ。)

夏休みのある日、夜中の突然の腹痛と出血。

そして救急車で大学病院に運ばれたボク、それが女性の生理であり検査の結果自分の性別が本当は男ではなく女であることを知った。

今まで青だと思っていたものがある日を境にすべて赤に塗り替えられてしまったかのように…。

ボクはそれからは赤であることを自分に言い聞かせてきたんだ。

男と女、どちらかに自分を置かなければならない。TVでときどき聞くような『第三の性』なんていうのは絶対嫌だった。だからボクは自分が女性であることを受け入れた。

そしてボクの名前は哲から凜に変わった。ボクという一人称はアタシに変わった。

ズボンはスカートに変わり、パンツやシャツはショーツとブラとキヤミソールに変わった。

しかし何よりも変わったのは友達関係なんだろう。

男友達は同性から異性の友達に変わり、そして今までそれほど深い

話をしたことがなかった女の子たちはボクにとって大切な同性の友達になった。

もうひとつ、ボクが大きく変わったこと。

それは女として異性である男性の存在を意識するようになったということだった。

男と女では当たり前のことだけど身体が違う。

そしてそれとともに違うのは『優しさ』が違うと思った。

ワタルがボクに与えてくれる優しさはミコや井川さんたち女の子の友達が与えてくれるものとは明らかに違っていた。それは異性だからこそ与えてくれる優しさなのだと思う。

ところで明日からボクはチア部で夏合宿。7泊8日で場所は長野県の軽井沢。

じつはここには青葉学院の寮があって、夏休みなどの合宿で各部が交代で使っている。

ホテルのような豪華なものではなくあくまで学校の寮なので複数の部が重なって使う場合が多い。

チア部の合宿では、応援部と空手部がちょうど同じ日程だ。応援部については、チア部と密接な関係があるから合同練習も予定されているが、空手部は偶然一緒になった。

トントン。

部屋のドアをノックする音。

「いいかしら?」
母親の声をする。

「あ、うん。いいヨ。」

ドアが開き母親が中に入ってきてボクの横に座る。

「明日からの合宿の準備終わった?」

「大体ネ。あとは詰めるだけ。」

「アナタ、そろそろ生理始まるんでしょ? 替えのナプキンとシヨ
ーツは用意した?」

「あ、ウン。だいじょうぶ。」

「あとロキソニンも持ってったほうがいいヨ。ときどき痛むで
しょ?」

「そっか。そうだね。」

「明日は何時に家を出るの?」

「えっと…8時に大学の正門の前に集合だから早めに7時には出る
つもり。」

「そう。じゃあ朝ごはんの用意しておくワ。悟(弟)も明後日か
ら中学のサッカー部の合宿だから、その間は夫婦水入らずヨ(笑)」

「へえ。お父さんとどっか行くの?」

「フフフー、じつはネ、土曜日と日曜日に泊まりで日光に行つてこ
うかと思つてネ。」

「あ、そうなんだあ！いいじゃない。でも仲いいねー。」

「エヘヘー。だってさ、アナタだってもう高校生だし、そのうちあ
つという間に大学生になって、そしてさっさとお嫁に行つちゃうか
もしれないし。悟だって、男の子は中学生からはもう自分の世界
作るからね。だからこれからはお父さんといっぱい思い出を作らせ
てもらおうワ（笑）」

「アハハ！」

「さあ、明日早いんだから今日は早めに寝たほうがいいワヨ。」

「ハイイ。」

.....

「凜、おはよー！」

「あ、みーちゃん。オハヨ。早いネ。」

「だって、ホラ。新入生は10分前集合！でしょ？（笑）」

「ウン。アタシもそう思った！（笑）」

大学の正門前にに着くと、まだ上級生が数人だけど、新入生はもうほとんど集まっている。

「やつほー！ 凜、みーちゃん。」

「おはよー！ あれ、なんかバスの数多くない？」

「あ、応援部と空手部もここから出発するらしいヨ。」

そう言っている間に3つの部の人たちが続々と集まってくる。

「チョコ途中で買ってきたの。 凜、食べる？」

そう言ってみーちゃんがバッグのポケットからチョコを取り出した。

「わぁ。サンキュー。」

そう言っただけがみーちゃんにもらったチョコをひとつ口にはおりこんだとき

「あれ？ 小谷さん？」

後ろを振り向くと、そこには笹村先輩が立っていた。

「あー、笹村先輩！ あ、そっか。先輩は空手部だったんですよね？」

「ウン。そっか。そういえばチア部も同じ日程だつて聞いたな。今日から1週間ヨロシクな。」

「こちらこそヨロシクデス。 あ、チョコもらったんです。先輩

もどつですか？」

ボクがもらった3つのうち1つを差し出すと

「あ、サンキユ。じゃあ…。」

そう言つて笹村先輩はボクの差し出したチョコを手に取りパクツと口の中に入れた。

「お、ウマイ！」

「フフフ…。」

「さあ、それじゃ時間ですので、みなさんバスに乗り込んでください。」

観光会社の人の合図でみんながバスに乗っていく。

そしてバスはそのまま首都高に入って一路軽井沢へ！

「さあ、着いたワヨ！　じゃあ、バスを降りたら広場に集合ネ。」

整列すると寮での注意事項と部屋割りの発表。

部屋はそれぞれ20畳ずつの畳み部屋で1学年に1部屋ずつが割当てられた。

部屋の中に入ると大きな押入れが3つ。そこに10人分の布団が積み重ねられていた。

そして部屋の隅にはわりと大きなテーブルが1つと扇風機が1台。

部屋の中にあるのはそれですべてだった。

「何もないね。」

「まあ合宿所だからね。それより遅れるとまた先輩に怒られちゃうヨ。」

ボクたち1年女子はそれぞれバッグを部屋の隅において早速準備。お昼ごはんを食べた後はさっそく練習が始まる。チアユニフォームに着替えて髪をゴムで纏めてシュシュを巻く。

「凜、準備いい？ 早く食堂行こう。」

「うん。オツケー！」

食堂にはチア部のほか応援部、空手部の人たちも合計100くらいの人たちが集まっている。

当然だけど、ここはホテルでも旅館でもなく学校の寮なので食事の準備はすべてセルフサービス。

その準備はやはり1年生を中心にやるのはどの部でも同じようだ。

今日のお昼のメニューはカレーライスとコールスローサラダそれにデザートとしてスイカが一切れずつ。

まずは全員でテーブルを拭いて応援部と空手部の1年の男子がカレーの入ったお鍋やお皿、コップなどが揃ったセットを整える。そしてボクたちチア部の女子が10列くらいの各テーブルで、カレー皿にご飯をよそってカレーをかけて端っこに福神漬けを乗せる。コールスローサラダとスイカもひとりずつの小皿に分けてテーブルに並べ、スプーンとフォークを並べていく。それを今度は男子たちが各席に配置していくといった具合だ。

「凜、そっちオツケー？」

「ウン。全員の分終わったヨ。」

「麻衣子は？」

「こっちもオツケー！」

そして応援部1年リーダーの男子が今回の合宿の統括主任である空手部の穂積先生に報告して全員が席に着く。

穂積先生が合宿開始の簡単な挨拶をしてようやく

「いただきまーすっ！」

「お腹すきすぎー！」

「アー、ウメー！」

「チョットその水取ってえー！」

ワイワイガヤガヤ。

お昼ごはんが終わった後は早速練習開始。
付近を3キロの走りこみの後は柔軟体操。
そして音楽に合わせてのダンスとスタンツ3時間のメニュー。

軽井沢は避暑地とはいえ、もう汗ビッシヨリ。

「はあ…はあ…はあ…。」

「アー、キツイー！」

夏の夕方はまだ日が高いけど、時間はもう5時半。

「ハイ、じゃあ今日のメニューはこれで終わります。明日からは

2日間は応援部との共同練習が午後から1時間ずつ入ってくるからネ。じゃあ、今日はお風呂でよく暖まって筋肉をほぐすように。解散！」

「ありがとうございますー！」

「なんか足パンパンだヨー！」

「アー、アタシも。お風呂何時からだっけ？」

「エツとね、たしか6時からだったヨ。」

「はやくお風呂入りたーい！汗ビツシヨリだもん。」

ボクらがそんなことを話しながらちようど寮の入口を入ろうとしたとき、バツタリ笹村先輩に会った。

「よう、小谷さん。練習終り？」

「あ、ハイ。笹村先輩もお疲れ様でした。」

「あ…。」

「え？」

「いや、小谷さんって呼ぶのもなんか仰々しいなって思ってたさ。凛ちゃんって呼んじゃってもいいかな？」

「あん、ぜんぜんいいですヨ。」

「じゃあ、凛ちゃん。またな。」

「ハイ（笑）」

そのときみーちゃんが不思議そうな顔でボクに寄ってくる。

「なんか、凛、あの先輩と仲いいね？」

「え？そうかな？」

「なんかそんな感じだからさ。」

「だって、助けてもらっただし、いい人だなとは思っヨ。」

「まあ、悪い人じゃなさそうだよネ。でも凜は石川君もいるんだし、あんまりそういう雰囲気を作らないようにしたほうがいいんじゃないかなあ？」

「そっか…。そうだね。」

みーちゃんの言うこともわかる。

ただ別にボクは笹村さんにそういう感情をもつつもりはないし…。

なんかそういうのって難しいな…。

お風呂に入って夕食。

その夜、修学旅行とかならきつと夜はみんな遅くまでガールズトークに夢中になるんだろっけど、みんな練習でクタクタ。

ボクもすぐに深い眠りに落ちた。

その夜、ボクはへんな夢を見た。

ボクはどこかの家の庭で子供と遊んでいる。

「ママア。」

その子はボクをそう呼んでいる。

そのとき「凜、帰ったヨ。」

誰かがボクを呼ぶ声がする。

その人の姿はボーっとした感じでよくわからないけど、ボクはその人に向かってこう言った。

「あ、アナタ。おかえりなさい。ホラ、パパが帰ってきたヨ。」

「ん~~~~.....」

夢の中の人。

あなたはワタルなの？
きつとそうだよネ？

第四十六話 夏合宿2

その後の6日間はキツイ練習の中で笹村先輩と会う機会は食事のときに限られていた。

ボクもあえて自分から話しかけるつもりもなかった。

そして明日はいよいよ合宿終了という前日。

チア部、応援部、空手部の三部合同で夕方から慰労パーティをする予定だった。

そのためその日は午前中に練習を切り上げて、何人かが材料やお菓子、飲み物などの買出しに行くことになった。

ボクは午前中のうちにチア部顧問の佐藤先生から呼ばれ買出し係を頼まれた。

「じゃあ、チア部からは小谷さんとあと2年生の小原さんで行ってくれるかな。あと応援部と空手部からそれぞれ2名を出してもらえらることになってるから。」

「ハイ。」

1時半になって買い出し係の6人が寮の玄関に集合。その中には笹村さんがいた。

「おお、凜ちゃんも係だったのか。ヨロシクな。」

みーちゃんにああ言われたからといって笹村さんを敬遠する理由は

ボクにはない。

それにせっかくお世話になった人にそういう態度を取ることはボクにはできなかつた。

「こちらこそよろしくお願いします。」

6人はチア部のボクを入れたA班と小原さんを入れたB班に分かれ、A班は料理とケーキの材料、それにお菓子類を。そしてB班は飲み物類を買つことになった。

寮はわりと不便な場所にある。

近くにあるわりと大きなスーパーまでは歩いて30分くらいの距離がある。

そのため100人分の飲み物類を用意するB班は寮に一台あるワゴン車を使うことになり、ボクたちA班は自転車を使うことになった。

応援部の1年生の人が自転車を歩いて引っ張っていく。

そういえばこの合宿で思ったんだけど、応援団の先輩後輩の関係はやっぱり他の部とはかなり違う。

前に応援部の1年生の人に聞いたことがあったけど、OBは神様、3年生は貴族、2年生は平民、そして1年生は奴隷と例えられているそうだ。

誰が自転車で買った荷物を積んで運ぶかって決めるときもB班に入った応援部の2年生の遠藤さんがいきなり

「女の子や他部の方にそんなことをお願いするわけにはいきません！」と言い、そして横にいる応援部1年の平田君にいきなり叫ぶ。

「平田ーーーーっ！」

すると平田君は直立不動で

「オー……スツ！」と答える。

「オマエにー！名誉な任務を与える……！自転車を引きいてあらゆる荷物を運べ……っ！」

「オー……スツ！不肖この平田、名誉あるお役目喜んで引き受けさせていただきま……すっ！」

そしてその2年生の遠藤さんは今度はボクのほうを振り返り

「オー……スツ！小谷さん……っ！」

「ハ、ハイ……！」

ボクも直立不動で返事

「この平田を自分の家来だと思つて遠慮なく使つてください！」

「け、家来！？」

すると平田君も

「オー……スツ！よろしくおねがいしま……すっ！」

ボクはもう目は点……。

「ハ、ハア……。」

笹村さんは口を押えて笑っている。

(うわっ！何かスゴイ世界……。)
オシャレで有名な青葉学院にこういう世界があったのはかなり意外だった。

そういうわけでボクと応援部の平田君そして空手部の笹村さんのB班の3人はテクテクと30分の道程を歩いている。

スーパーに着いて、ボクがメニューに必要な材料を平田君と笹村さんに指示して、それを集めてきてもらう。野菜類は男子に任せてへんなものを選ばれるのも困るのでボクが自分で選んだ。

全部を買い終わると段ボール箱で5箱分にもなった。

「さあ、これをどうするかだな……………」

笹村さんは目の前に積み上げられたダンボールを見ながら考える。いくら自転車でも段ボール箱5箱はとも運べない。

ボクは

「とりあえずお店で大き目の袋を何枚かもらってそっちに入れられるだけ分けたらどうでしょう？一人で2袋持てるでしょ？そうしたらアタシと笹村先輩で4袋分になるから残りは自転車に積めると思うんですけど。」と提案した。

このボクの言ったことに笹村さんは意外そうな顔をして言った。

「あ、ああ。いいけど、凧ちゃん2袋も運べる？」

「だいじょうぶですよ。アタシだって一応チア部ですから体力にはそれなりに自信あるし。」

「よし、じゃあそうしよう。凧ちゃんは軽めの菓子類を入れた袋を持って。平田君もいいかな？」

平田君はボクらにも直立不動で

「オーースッ！お心遣い感謝しまーすっ！」

帰り道、何回か袋を持ち直しながらもなんとか寮に辿り着く。

「凜ちゃん、お疲れ。頑張ったな。」
笹村さんがボクにそう声をかけてくれた。

「ううん。笹村先輩こそ。重いのはみんな笹村さんに持ってもらっちゃったけど、だいじょうぶですか？」

すると笹村先輩は

「だいじょうぶ！オレも一応空手部だから。」
そう言ってアハハと笑った。

「フフフ…。」

ボクは、笹村先輩のことを（なんか結構楽しい人だな）って思った。

買ってきた材料でチア部女子たちが早速料理とケーキを作る。
お菓子類は応援部と空手部の男子たちが紙皿に分けてくれた。

「できたー！ー！ーっ！」

さあ、楽しいパーティーの始まり！

最初は男子女子でかたまっていた席も段々と混ざり合っていきそのうちバラバラになって話していった。

別に意味はなかったけど、何気なく笹村さんの方を見ると、周りには2年生のチアの先輩たちが何人かいたので、自分から話しかけることはなかった。

そんなときに

(ワタルは今頃何をしてるんだろっ……。)
なんてことを考えたりする。

「チヨット風に当たってくるネ。」

ボクはそう言っただけの庭に出た。

東京の空と違って軽井沢の夜はホントに真っ暗で、暗闇の中にキラキラと宝石を散りばめたみたいに星が輝いている。
ボクは庭の隅にあるベンチに座った。

(あ、そうだ。明日午前中の自由時間にワタルにお土産買ってあげよう。)

(どんなものが嬉しいんだろ?)

何か最近では、自分が男として生活していたときはすごく遠い昔のようにも思える。

男の子の好みとか気持ちとかもあんまりピンと来なくなっていた。

そのときボクの後ろの方でサクツと草を踏む音がした。
振り向くとそこには笹村さんが立っていた。

「あれ、誰かと思ったたら凜ちゃんかあ。」

「びっくりしたあ！笹村先輩。アタシも誰かって思っちゃった(笑)」

「アハハ。今日はお疲れだったな。」

「ウウン。先輩だって、お疲れ様でした。」

「あ、隣に座ってもいいかな？」

「ドウゾ、ドウゾ。フッフ…なんか遠慮してますか？」

「いや、そういうんじゃないけどさ。何か考えてた感じだったから。」

笹村先輩はそういいながらベンチの上に腰を降ろした。

「あ、そういうえばチヨット聞いたりしてもいいですか？」

ボクは思いついてように笹村先輩にそう言った。

「ウン。オレでわかることだったら。」

「あのね、男の人にお土産を買いたいんですけど、どういのが喜ぶのかなあ…って。」

「うーん…なんだろう。 そうだなあ、オレだったら…キーホルダとかストラップとか。」

「あー、やっぱり小さなもののほうがいいですよ。そっかあ…。」

「あ、…ウン。」

「そっか。凜ちゃんは彼氏いるんだ？」

「笹村さんは彼女さんにお土産は？」

(なんか少しいやらしい聞き方をしちゃったかも)

「いや、オレは彼女はいないヨ。」

「あ、そうなんだあ。」

「同じ学校の人？」

「え？」

「いや、その彼氏さん。」

「あ、はい。クラスは別ですけど。」

「そっかあ。うらやましいな。彼氏はそんな感じの人なの？」

ボクは少し考えて答える。

「うーん…、チヨット…ううんかなり（笑）そそつかしいところが
あるかなあ。ひょうひょうとしてて。マイペースで。」
「アハハ！なんか楽しそうなやつだね。俺も会ってみたいな。」
「あ、そのうちどっかで会えるかもしれませんヨ。同じ学校だし。」
「そうだな。でも羨ましいヤツだな。」
「え？羨ましいって？」
「いや、凜ちゃんを彼女にできたってことがさ。」
「うーん…。そう思ってくれてるといいんだけどなあ（笑）」

第四十七話 そのとき

夏休みも終りに近づいてきた頃。
ワタルから電話があった。

「もう夏休みも残り少ないし。凜ちゃんとゆっくりデートしたい
思てナ。」

「ウン。いいよ。アタシも久しぶりにワタル君にゆっくり会いたい
もん。」

ボクたちはその週の土曜日に駅前で待ち合わせをした。

来週の月曜日からはいよいよ学校が始まる。

そうなればまた放課後チア部の練習が始まってワタルと会いにくく
なる。

(こんなだったら部活やらないほうが良かったのかな……………)。

なんてことも思ったこともあるけど、最近はずアの楽しさも少しずつ
わかってきて、部活を通して他のクラスや先輩にも友達がたくさん
んできた。

当日

ボクは目いっぱいオシャレをして待ち合わせの場所に向かった。

薄いブルーのワンピースに白いサマーカーディガン。

サイドの髪は母親に編んでもらって後ろでまとめ、横に青のリボンの付いた麦わらのカンカン帽をかぶる。唇には薄いピンクのリップを引いた。

約束は10時だけど、ワタルに会いたい気持がはやるボクは早めに家を出たためかなり早くに待ち合わせ場所に着いてしまった。

時計を見ると9時40分。

(あ、まだこんな時間なんだ…。)

駅の前にある木陰のベンチに腰を下ろして持ってきた本を取り出した。

ミーン。ミーン。

辺りは、駅のロータリーを走る自動車の音や人の話し声やセミの聲が混ざり合って、ゆっくりとした時間の流れを感じる。

本の文字を追っているとフツと頭が軽くなったような気がする。見上げるとまぶしい日差しの中にワタルがボクのカンカン帽を静かに持ち上げて立っていた。

「ワタル…君」

「ヨッ！」

優しく微笑むカレ。

「凜ちゃん、今日オシヤレやなあ。」

「エへへ…。」

「すごく可愛いで。ステキや。」
「ア、アリガト…。」

ワタルは時々こういうキザっぽいことも言ったりするけど、今日はたえお世辞でもワタルに褒めてもらえることがとても嬉しかった。

「さあ、今日はどこへ行くこうか？渋谷とか新宿に出る？」

「えつとね、まずはワタル君とお話したいな。お互い夏休み中にあつたことをゆっくり話すの。」

「ええナ！ じゃあ、落ち着いて話せる喫茶店に行こうか？」

「ウンツ！」

別に遠くまでいなくてもいい。

その分ワタルとゆっくり話がしたかった。

同じ時間を共有したかった。

ワタルが連れてってくれた喫茶店は駅から少し離れた住宅街の中にポツンとあるお店だった。

よくあるようなビルの中に入ったお店ではなくて、個人の家を改装したようで、けっこう古そうだけど外の壁板はスカイブルーのペンキで塗られてとても清潔な感じ。そしてお店の前には小さな庭があつてそこには1本の大きな木があつた。

「ここはな、最近見つけたん。いつか凜ちゃんを連れてきたいなつて思つとつて。ときどき学校の帰りにここでゆっくりしたりするネン。」

ホラ、ここの店の壁板って今日の凜ちゃんワンピースの色と同じスカイブルーやる？ だからここに連れてきたんや。」

「嬉しい！ ワタル君、ちゃんとアタシのこと見てってくれるんだネ。」

「当たり前やないか。（笑）」

本当に嬉しい。人から見れば小さいことかもしれないけど、カレのために精一杯してきたオシャレをカレがわかってくれたのはボクにとってはすごく嬉しい。

「いらっしやい。」

50代くらいの口の上に髭を蓄えた優しそうなマスターが水を持ってきてくれた。

マスターはワタルを見て

「おや、キミは学校帰りにときどき来てくれる人だよね？」

「あ、はい。こんにちわ。」

マスターはボクの方を少し見て

「今日は彼女を連れてかな？」

ワタルは少し顔を赤くして

「あ、ハイ。彼女をこのお店にずっと連れてきたかったです。」

マスターは優しく微笑んだ。

「そう、ありがとう。」

ワタルはホットコーヒー、ボクはアイスココアを頼む。

コポツ…コポツ…。

時間は10時半。まだ早い時間でお客はボクたち2人だけ。サイフォンの音が聞こえ、お店の中はゆっくりした時間が流れている。

しばらくすると髭のマスターがボクたちのコーヒーとココアを運んできてくれた。

「ハイ、これはいつも来てくれるお礼だよ。」

マスターはボクとワタルにアップルパイを1切れずつ乗せたお皿を出してくれた。

「わぁ！　ありがとうございます」

その日は、ゆっくりワタルと話して、一緒にご飯を食べて、そして映画を見て、買い物をして。

思いつくままにワタルと時間を過していった。

そして夕方、ボクとワタルはあの公園で分かれた。

「夏は日が高いけど、もう7時近いからな。早う帰らんと凜ちゃんのお母さんが心配するから。」

ワタルはボクのおでこに小さなキスをしてそう言った。

た。

「ねえ、ミコ。今日ワタル君見た？」

するとミコは不思議そうな顔でボクの方を見て言った。

「え、誰を見たって？」

ボクはもう一度繰り返した。

「だからワタル君ヨ。ミコは見なかった？」

ミコは少し首を捻ってボクに尋ねる。

「ワタル君って誰ヨ？」

「え……………」

ボクはミコがふざけているんだと思った。

「石川 渉。アタシたちと同じ若松中学で同じクラスだった石川 渉ヨ！ ミコ、あんまりふざけないでヨ！」

するとミコは少し怒ったように

「だから石川 渉なんて知らないわヨ。それにだいたい若松中学から青葉学院受かったのってアタシと凜の2人だけだったじゃん。」

「ええええええ……………」

ミコの顔は真剣だった。

とてもふざけているようには見えない。

「あ、凜！」

ミコがかけた声を振り切って、ボクはカバンを掴んで教室を出た。

ボクが向かった先は107HR。
ワタルのいるはずのクラスだ。

「あ、凜。どうしたの？」

ちょうど107HRの川上 弥生さんが教室からできた。

あの事件から彼女とは結構仲良く話ができるようになっていた。
学校の帰りに途中まで一緒に帰ったこともあった。

「ね、悪いけど、石川君呼んでもらっていい？」

「え？誰？」

「だから石川 渉君ヨ！」

彼女は不思議そうな顔をしてこう答えた。

「そんな人ウチのクラスにいないけど……。」

「……………」

もう何がなんだかわからない。

（みんななんでふざけているの？）

でもみんなの顔は誰も真剣そのものだった。

ボクは走り出した。

走って学校を出た。

渋谷駅まで息が切れても走って。

そして電車に飛び乗った。

電車にいるときずっと考えた。

(みんなワタルを知らないって言ってた。
(知らないわけないのに!)

やっと家の最寄駅に着いたけど、これから何をどうしたらいいのか
わからない。

そのとき誰かがボクの肩を叩くのを感じて、ボクはビクツとして振
り向いた。

「どーしたの？凧。すごいびっくりした顔しちゃって。」

「く、久美ちゃん。」

「学校帰りに会えるなんて久しぶりだよネ。凧はチア部で忙しそ
うだからずっと会ってなかったよネ。」

「ウ、ウン。ゴメンね。でもホント久美ちゃんに会えたのって久し
ぶりだよネ。」

「そういえば、ワタル君も元気？」

「えっつ！!!！」

久美ちゃんはボクの驚いた様子を不思議そうに

「どうしたの？ワタル君と喧嘩でもしちゃったの？」

「久美ちゃんは…ワタル君を知ってるの？」

「ハア？凧、何言ってるのヨ。石川 渉君でしょ。アンタの彼氏の。
アタシにとっても幼馴染なんだし。」

ボクはそれまで抑えてきた涙がせきを切って溢れてきた。

ボクは久美ちゃんの胸にすがって泣いた。

「久美…ちゃん…うううう…久美ちゃん、うううう……。」

「ど、どうしたの？凜、ねえ、どうしたの？」
「じつは……」

ボクは学校でミコたちにワタルのことを聞いたときの反応を久美ちやんに話した。

「じゃあ、ミコはワタル君のことを知らないって真剣にそう言ったの？」

「ウン。ミコだけじゃなくなってワタル君と同じクラスの子もカレの存在自体クラスにはいないって……」

「そう……。一体どうということなんだろ……」

そのとき久美ちゃんは思いついたように

「そうだ！」と声をあげた。

「ねえ、凜。若松中学に行ってみよう。まだ山岸先生もいるはずだし。」

（そうか！中学に行けば先生もいるし卒業アルバムだってあるんだからワタルの存在を証明できる。）

ボクと久美ちゃんは大急ぎで卒業した若松中学に走った。

正門から入ってそのまま職員室に向かう。

「あの……こんにちわ。」

するとちょうどドアの近くに中3のときに担任だった山岸先生が立っていた。

「アラーツ、小谷さんと安藤さんじゃない！ ひさしぶりねー！
ーっ！ まあチョット見ない間にすっかり大人っぽくなっちゃって
…。まあ、入って。」

そう言われてボクらは職員室に入っていく。

「あの、先生…。」

「何かしら？今日はどうしたの？」

「じつは…。」

「お聞きしたいことがあって…。」

「聞きたいこと？なに？」

「石川 渉君なんですけど…。」

ボクたちの言葉に先生は不思議そうな顔をして言った。

「石川…渉君？どこのクラスだった人？」

(やっぱり……………)

「あの、アタシたちよときの卒業アルバムありますか？」

久美ちゃんが山岸先生にそう尋ねると

「ああ、あるワヨ。」

山岸先生は自分のデスクの中から1冊のアルバムを持ってきた。

ボクは震える手でページをめくっていく。

そしてボクたちのクラスのページ。

「い、いない…。」

そのアルバムには、ボクやミコや井川さん、男子は安田や工藤が映

っているのにワタルの姿はどこにもなかった。

「ウ、ウソ…。」

ボクは絶句した。

「凜…。」

久美ちゃんもボクのを握ったまま肩を震わせている。

第四十八話 消されたワタルの存在

ボクと久美ちゃんは中学を出てトボトボと歩いた。

「そんなバカなことが…。」

「他の人がみんなワタル君の存在を知らなくて、アタシと凜だけが知ってるって…どうということヨ。」

「ワカラナイ…アタシ、5日前にもワタル君と会ったんだヨ。なんで…。」

すると久美ちゃんは

「もしかして…まさかとは思うけど…。」

「え？なに？」

「凜、今度は小学校行ってみよう！」

「小学校？でも中学で知らないって…。」

「まさかとは思うけど、とにかく行くことヨ！」

「ウン、わかった。」

このときじつは意外な事実がわかった。

ボクたちは今度は3人が卒業した（はずの）第五小学校へと向かう。職員室に行くと小5〜6年生でボクたちの担任だった野口先生はまだこの学校に残っていた。

しかしボクは中2のときにあのことがあったわけだから、野口先生は男の子としてのボクしか知らないはずだ。

(女の子のボクは先生になんて言えばいいんだろう…。)

意外にも野口先生はボクの事情を知っていた。

中学の担任だった山岸先生はボクの将来の同窓会などのことを考えて、ボクの小学校時代の担任の先生には電話で事情を話してくれていたんだそうだ。

「小谷さんのことは、若松中学の山岸先生からちゃんと聞いてるワヨ。まあ、すっかり女らしくなっちゃってねえ。もうステキなお姉さんね。」

そこで久美ちゃんが話を切り出した。

「あの…先生は石川 渉君って知ってます？」

「石川 渉？誰かしら？」

ボクたちは今までのことからそういう返事を当然予想していた。

しかし野口先生の返事は違っていた。

「ああ、石川君ってたしか5年生の夏休みに大阪に転校していった石川 渉君でしょ？彼がどうかしたの？」

「先生、知ってるんですか？」

「当たり前じゃないの(笑) いくら転校していった子でも自分の教え子のことくらい全員覚えてるワヨ。」

「凜…。」

「ウ、ウン…。」

ボクらはさらに野口先生に尋ねた。

「先生はその後石川君が中学3年になってこっちにまた戻ってきたとかは知ってます？」

「あー、それはわからないわね。一度転校しちゃうともう前の小学校には書類は回ってこないから。石川君戻ってきたの？」

「あ、いいえ。アタシたちもわかんないんです。」

ボクと久美ちゃんは小学校を出た。

途中「あの公園」で2人でブランコに座って今までのことを考える。

「最後でワタル君に会ったとき…この公園で分かれたの。」

「凜、いくつかわかったことを整理するワヨ。」

「ウン。」

「まず、小学校で聞いたとおり、石川 渉という男の子は実際存在する。これはハッキリしたわ。」

「ウン、そうだね。」

「ところが、問題はここからヨ。彼は小5のとき大阪に転校して行ったけど、中3のとき東京に戻ってきてアタシたちの中学に転校してきた。ここでアタシと凜の記憶とその他の人の記憶が分かれていく。そしてその後凜やミコと一緒に入学したはずの青葉学院高等部で彼の存在は消されていた。」

「ウン。」

「ということは分岐点は中3の転校のときということがハッキリしたワネ。」

「アタシもそう思う。」

「凜。あのさ…こんなこと言って怒らないでね？」

「え？なに？」

「アタシさあ、じつはワタル君のことですつと前から思ってたことがあったの。」

「もしかして…。」

「え、凜も何か思ってたことあるの？」

「あ…ウン。」

「まさか…とは思うけど、凜から聞かせてくれない？」

ボクは少し考えて答えた。

「ワタル君が転校してきて初めて会ってから少ししてね…。」

「ウン…。」

「本当にこのワタル君は、あのときの、アタシや久美ちゃんの幼馴染だったワタル君なんだろうかって…何回か思ったことあった。」

久美ちゃんはボクの目を見てそして言った。

「一緒ヨ。アタシがずっと思っていたこと。凜とまったく同じなの。」

「久美ちゃん…。」

「ねえ、凜…行ってみない？」

「え、どこに？」

「大阪にヨ。そして大阪に転校していったアタシたちの幼馴染のワ

タル君があつたワタル君かどうかを確かめるの。」

「ウン。それしか方法はないよネ。」

「日帰りじゃ厳しいわね。できれば2〜3日落ち着いて色々調べないと…。来週の3連休どう？」

「ウン。いいヨ。」

「ただ問題は親ヨ。高校生の女の子2人だけで泊まりで大阪なんて許してくれるはずもないし。ウチは大阪に親戚はいないしね。凜の家は？」

「あ、あるヨ！近い親戚じゃないけど、アタシのおばあちゃんの妹の人が大阪にいる。」

その人は結局子供が生まれずに数年前に旦那様が亡くなってひとり暮らしをしていた。

大阪で何棟かのビルを持っていてかなりお金持ちで、ボクが女として生活を変えるとき「もし転校を考えるとたら養女になつてくれないか」って言われたこともあり、ボクは小さい頃からよく可愛がられていた。

.....

そして土曜日の朝8時

「じゃあ、駅に着いたらちゃんと大阪のおばあちゃんの家とウチに電話をするのヨ。それと大阪は東京とは習慣も違うんだから、ヘンな男の人に声かけられても無視しなきゃダメヨ。」

「ウン。だいじょうぶ。久美ちゃんだつて一緒なんだから。」

「ああ、でも女の子2人だけで大阪に行くって…。なんで急にそん

なこと思いついたの？」

「だって、ホラ。大阪のおばあちゃんだって年なんだから元気なうちに会っておきたいって思ったし。」

「まあ、とにかくくれぐれも気をつけてね。」

「ハアイ。じゃあ、いつてきます。」

勘ぐる母親を何とかかわして家を出たボク。

駅で久美ちゃんと待合わせをしていよいよ大阪に出発だ。

東京駅から新幹線で新大阪まで。

座席に着いたボクたちはまず大阪府の地図を広げた。

「いい？凜。今のうち行動計画を立てておこう。まずアタシたちの幼馴染のワタル君をワタルA、そして中3のときのワタル君をワタルBと仮に付けるとする。」

ワタルAが転校したのは野口先生（小学校）から聞いた話によると天王寺区っていうところにある勝山第三小学校、えっと……ここネ。だからこれがアタシたちに分かっているワタルAの最後の所在地ってことになるわネ。そうすると中学は、この小学校の学区域だと勝山中学か国分中学ってことが予想されるの。だからここら辺でワタルBの足取りを追っていけばいいと思うのヨ。

もちろん中学で私立に行ったらわからないけど、アタシたちの幼馴染だったワタルはハッキリ言ってそんな成績良くなかったでしょ？」

「まあ、そつだネ。当時はアタシの方が上だったくらいだし。」

「ところが中3のときのワタルBは学年でトップクラスになるくらい成績が良かったのよネ。それとアタシが初めてワタルBと会ったときに意外に思ったのは身長なの。」

「あ！それ、アタシも思った！」

「でしょ？ ワタルAは小5のときクラスで一番背が低かったでしょ？たしか女子で一番低かった真子ちゃんと同じくらいだったはずヨ。ということは145cmくらいだったはず。それが中学時代はいくら男子とはいえワタルBは170cmは余裕で超えていたでしょ？いくらなんでもたった3年間で30cm近く伸びるはずないんじゃないかしら。」

「そつなんだよネ。アタシもいつも見上げていたくらいだし。」

あ、それとね…。」

「ウン、なに？」

「髪の毛、アタシも小5のときのワタルAはもううつすらした記憶しかないんだけど、もっと髪質がゴワゴワしていたイメージがあるんだよネ。でも、中3のときのワタル君、あ、ワタルBね、カレはすぐくさらさらした感じってどうか。」

「あ、そうそう！そういえば凜も髪の毛サラサラしてるよネ。ワタルBは凜みたいいな髪の毛してたヨ。」

「まあ3年間の間に体質が変わったとかだったらわからないけど、ハッキリ言えないんだけど、ワタル君のAとBは何かどこかつなが

らないような気がして…。」

東京から新大阪まで約2時間半。

11時半ごろ新大阪駅に到着したボクたちは、まず中央区にあるおばあちゃんの家で電話をした。

「まあ、凜ちゃん。着いたかい。おばあちゃんお昼ごはん用意してずっと楽しみにしてたんやで。じゃあ、そこからタクシーに乗って、ウチの住所わかるな？タクシーのお金は着いたらおばあちゃんが払ったるさかいな。」

あとはボクと久美ちゃんの家それぞれ連絡して無事到着を知らせておいた。

おばあちゃんの家はかなり大きなお屋敷で地元でも有名なので、タクシーの運転手さんも住所を言っただけで分かってくれた。

大きな門のところまでインターホンを鳴らし、家の玄関に入ると「凜ちゃん、いらっしやい！2年ぶりやなー。まあべっぴんさんならはって。こっちがお友達の久美ちゃんかい？ ようこそいらっしやいな。」

「おばあちゃん、ひさしぶりー！元気だった？」

「はじめまして。安藤久美子と申します。お世話になります。」

「はいな、こちらこそ。楽しんでいっておくれや。まあ、とにかく中に入んなさい。」

広い廊下を通って奥の和室に行くと、テーブルの上にはもっこ馳走が並べられていた。

「おばあちゃんな、先週電話もらってから凜ちゃんたちが来るのずっと楽しみにしとったん。まずはお腹すいたやる。たあんとおあがり。」

「わあ、すごい美味しそう！　じゃあ、いただきまーっす！」

しかしこの家は本当に広い。

ボクは小さい頃に弟の両親と悟と何度か来たことがあった。

その頃はまだ男の子として生活していたボク。

悟と家の中を走り回っては大暴れ。

子供好きなおばあちゃんはそんなボクたちをいつも笑顔で見えていた。

それから2時間ほどご馳走を食べながらおばあちゃんに大阪のことを色々聞いた。

中央区のおばあちゃんちから天王寺区のワタルAの小学校までは電車で20分もかからない距離らしい。

ボクたちは部屋に荷物を置いて3時ごろから調査を開始することにしました。

「じゃあ、凜ちゃん、久美ちゃん。よく気をつけて回るんやで。6時ごろにはお夕飯の支度しておくさかいにな。」

「ウン。行つてきます。」

大阪環状線に乗って桃山駅で下車。

「大阪環状線って山手線みたい。」

桃山駅の近くには小中高校など学校がたくさんあるらしい。

ボクたちは駅を出て15分ほど歩き、途中人に道を尋ねながらワタルAが転校した勝山第三小学校に着いた。

第四十九話 タイプが違いすぎるAとB

「えっと…まず、どうやって情報を掴んでいくかよネ。」

「なんか、わらしべ長者みたいな気分。」

「アハハ、凜。面白い表現だネ。」

「あ、こういうのってどう？ 東京の小学校時代の同窓会の名簿を作るんでカレの住所か中学校を教えてほしいって。」

「なるほど！ じゃあ、まずはその手でいってみようか。」

ボクと久美ちゃんは受付けのところでもその旨を伝えて当時のワタルAの担任の先生を探してもらった。

しばらくすると30代くらいの女の先生が来てくれたが、その人によると当時の担任の先生はもう転校してこの学校にはいないらしい。ワタルAの住所は個人情報のため教えられないけど、カレが市立勝山中学に進学したことだけは教えてくれた。ただその先生は気になすることも言っていた。ワタルはこの小学校に転校して来てしばらくするとあまりたちの良くない友達ができて、当時の担任の先生はかなりワタルAに手を焼いていたらしかった。

ボクたちは勝山第五小学校を出て今度は勝山中学校に向かった。

歩きながら久美ちゃんが呟いた。

「でもさ、AとBでなんかぜんぜん違ってるよネ。　違い過ぎって
いうか…。」

「ウン。これだけ違うとなんかかえって不自然っていうか。不思議
な気がする。」

「不思議って?」

「だってさ、これだけ違うならワタルBはなんでワタルAを名乗っ
たのかなって…。ワタルBはワタルAの記憶をかなり正確に持って
たじゃない?　最初に会ったときだって、久美ちゃんのことわかっ
てたし、アタシのことだって「哲」って言ってたし。」

「そっか。そうだよネエ…。」

勝山中学は小学校から歩いて10分ほどの距離にあった。

ワタルAがこの中学を卒業したのはほんの半年前だから、小学校み
たく先生に聞かなくても1年後輩とかでカレのことを知ってい
る人がいるんじゃないかとも思う。

ボクたちは少し歩きつかれてグラウンドの隅あるベンチに腰をかけ
た。

グラウンドにはいくつかのクラブが練習をやっている。

大阪の中学は東京の中学よりもかなりグラウンドが広いように感じ
た。

「ああ、サッカー部も練習してる…。」

ボクも昔は中学のサッカー部に入ってこうして練習をしていた。

サッカーは小学校のときに始めて、当時はワタルと一緒に小学校のサッカー部にも入っていた。

(サッカー……。ああっ！そうだった！)

「ねえ、久美ちゃん。ワタルはたしか小学校でアタシと一緒にサッカーやってたんだヨ。」

「そういえばそうネ。アタシもよくあんたらのサッカー練習に付き合わされてたしネ。」

「ウン。だからさ、もし中学で部活に入ってたとしたらサッカーの可能性が高くない？もしそうだとすると、サッカー部の人に聞いてみれば……。」

「あー！そっかあ。凜、冴えてるネー！」

ちょうどそのときサッカー部の練習が一段落したようで、選手たちがグラウンドから出てグラウンドの隅で腰を降ろし始めた。

「久美ちゃん、今がチャンス。」

「ウン。行こう、凜。」

ボクたちは休んでいる選手のうちの一人に声をかけてみた。

「あの、すみません。チョットお聞きしたいんですけど……。」

「ハア。なんでしょうか？」

「もしご存知だったらなんですけど、この中学を去年卒業した人で石川 渉って知らないかしら？」

するとその男の子は少し表情を曇らせて言った。

「知ってるけど……。」

「え、知ってるの？それでカレはこの高校行ったかも知ってる？」

「たしか城東工業高校だったはずや。でも、あの人かなり荒れてま

したからなあ。なんかその高校で入学ソウソウ喧嘩して警察沙汰になったつて。だからまだ退学してなかったらその高校に通ってるんじゃないかな。」

ボクたちの聞いた相手はワタルAと同じサッカー部の1年後輩だった。

カレの話によると、ワタルAは中学入学当初からヤンキーの集団にいて、かなり有名だったらしい。

そのためサッカー部も来たり来なかったりで、授業もたまに出てきては寝ているだけ。

成績もほとんどオール1。卒業式も出席を許されなかったらしい。

城東工業高校というのは、この地域では有名なワルの集まる学校で、喧嘩なんてしょっちゅう。

カツアゲ、暴走族、拳句の果てには強姦事件まで聞くという。

「なんかすごいネ…。」

「ウン。でもこれでワタルAの正体がはつきりしたヨ。」

ワタルAとワタルBはまったくの別人。

じゃあ、なんでワタルBはわざわざワタルAのことをそこまで調べて名前を語ろうとしたのか。

「凜、ここからは中々難しいワヨ。とりあえず今日はもう5時すぎだし、これで帰ろう。おばあさんも心配するしネ。」

「そうだね。でも今日1日だけでも色々なことがわかった。」

「ウン。今晚はじっくり作戦を練って、明日本格的にやりましょう。」

「

第五十話 これがワタル！？

次の日

ボクと久美ちゃんは朝食を取り、10時におばあちゃんの家を出発した。

目指すは城東工業高校。

昨日行った桃谷駅の隣町夕陽が丘駅から歩いて15分ほどのところにあつた。

途中、歩いていた人に道を尋ねると

「え、お嬢ちゃんたち城東工業つて…。」
と口が重い。

それでも何とか聞き出してその方向に歩いていくと、目的地に近づくにつれて何か空気が淀んでるっていうか…。

住宅の塀にはわけのわからない落書きがいっぱい。

道のそこら中にはタバコの吸殻が落ちている。

そして城東工業の塀に差し掛かったところで、道にたむろしている数人の男子高校生が突然声をかけてきた。かなり気合の入った格好をしているお兄さんたちだ。

「よー、ねーちゃんたち。どこ行くん？」

「え、あ、いえ…。」

ボクは警戒して少し身を引く。

そこに久美ちゃんは

「あの！」

「な、なんや？」

「あの、この高校に石川 渉って人いるのを知りませんか？」

すると彼らは突然

「ええっ！！石川さんの知合いなん！？」

とびつくりしたように言った。

石川…さん？

「ねえ、久美ちゃん。ワタル君Aってアタシたちと同じ年なんだから、まだ1年生のはずだよネ？」

「ウン。そうだよネ。ということは高校で一番下の学年のはずなのに何でさん付けで呼ばれてるんだろ？」

「さあ？」

「あの、石川君を知ってるんですか？」

ボクは改めて彼らに尋ねた。

「いや、直のダチってわけやないけど…。あの人すごい有名やし。なあ？」

「お…おお」

「カレ、今日は学校に来てるんですか？」

「いや、今日は休みやしな。おらへんと思うけど。」

「家とか？」

「家はおらへんやろ。ほとんど家帰ってないって聞くし。」

「どこか思い当たり所とか知りませんか？」

「うーん…石川さんのグループが溜まっとなるとこやったら…」
「知ってるの？」

ボクたちは彼らに聞いた場所に行くことにした。

そこは隣の天王寺っていうわりと大きな駅の近くにある「ブラッド」という喫茶店らしい。

店はすぐにわかった。

ただ、そこは表通りから外れてて、やけに暗そうな場所にあって、そしてお客を迎えるにはチョット似合わない雰囲気…喫茶店というより、何かいかがわしいヘンな店のような…。

「どっしょよう？」

店の前に来てボクらは迷った。

女の子2人だけで入ってそのまま中でヘンなことをされたりしたら…。

「でも、ここまで来てもう帰れないヨ。凜、入ろう？」

久美ちゃんがボクの手を引っ張った。

「ウ、ウン。」

ボクも覚悟を決めた。

そのとき2人の男の人がボクらのテーブルに近づいてきた。
「ねーちゃん、こっちの人間やないやろ？どっから来たん？」

「え、あの…東京から」

すると薄暗い奥のテーブルから誰かが大きな声で聞いてきた。
「なん？東京からって？東京のどこや？」

久美ちゃんはそのとき完全に気が座っていた。

「東京の××区です。あの！石川 涉って人知りませんか？」
そう大きな声で聞いた。

「なんやて？石川って、オマエ誰やねん？」
その人はとうとうボクらの席に寄ってきた。

「久美ちゃ~~~~ん……………」
「だいじょうぶヨ。凜」

薄暗い中から現れたその人は、身長は165?くらいで低いけど、
するづい眼光。金髪のリーゼントにサイドメツシュをいれてサング
ラス。それに籠みたいな刺繍の入った紺のジャンパーに白いズボン。
まるでTVに出てくるヤクザさんそのものみたいな感じだ。

「アンタら誰や？」

久美ちゃんは少し声を震わせながらも

「ア、ア、アナタは誰なの？」と返した。

その人はボクたちを見下ろすように睨み付けて
「威勢がええのぉー。女だから許される思たら甘いでえ。」

そのとき久美ちゃんがプツンとキレた。

「アナタは誰なのって聞いているのヨ！」

その人はいきなりキレた久美ちゃんにチョット驚いた様子で

「なんやコイツ（笑）　ワイが石川　涉じゃ！　オマエ誰やネン！
？」

ええええー！

「ワ、ワタル君！？」

その人はキョトンとした顔になった。

「ワタル君って　誰やオマエ？」

「アタシ！第五小学校のときの安藤久美子。」

「ええええー！　久美ちゃんかあー！　？」

「いやー、びつくりしたワ。それにしてもどないしたん？　こんなところで久美ちゃんに会えるとは思わなかったがな。」
久しぶりに幼馴染に会ったワタルの顔はすっかり穏やかになっていた。

「アナタを探しに来たの。」

「ボクを探しに？　なんで？　それにそっちの娘は誰やネン？」

すると久美ちゃんは

「3人だけで話がしたいワ。」と言った。

「ええヨ。じゃあ、もちつとましな場所行こうか？　こんな雰囲気じゃ久美ちゃんたちも落ち着かんやろ？」

そう言っつてワタルはボクらを表通りのちゃんとした喫茶店に案内した。

「で、どないしたん？」

ワタルはタバコに火をつけて一息吸い込むとボクらに尋ねてきた。

「ヘンなことを聞いちゃってゴメンね。　アナタはアタシたちが知ってる第五小のクラスメイトだった石川　渉君だよネ？」

「そつや。なんやネン（笑）」

「じゃあ話すワ。 まずこっちの娘を見て？ 見覚えないかな？」
「見覚えないかなって…知らんなあ。 五小のとき一緒だったんかいな？」

「そうヨ。 アタシとアナタとよく遊んだ人ヨ。」

「エ？ボクとこの娘が？ そやってあの頃一緒によく遊んでたんは、久美ちゃんと哲やくらいやで。 久美ちゃん以外の女の子と遊んだ記憶はほとんどないけどなあ…。」

「そう……………哲ちゃんヨ。」

「ハ？ 哲はボクの記憶では男のはずやけど、この娘はどうみても女の子にしか見えんど。」

ボクはあのと時ワタルに言った言葉を繰り返した。

「ヨ…………ワタル。 ひさびさ。」

ワタルはボクの顔をじつと見た。

「ええええーっ！ ホンマか？ 哲かあ？ オマエどないしたん？」

「じつはね……………」

そして久美ちゃんは今までの事情をワタルに話した。

「いや…なんか信じられへんワ。 哲がホンマは女やったなんて。 それに……………」

「ウン。もう一人のワタル…。」

「チョット聞きたいんやけどな…。」

「なに?」

「もうひとりのボクが初めて2人の前に現れたんは、中3の初め言うたな?」

「そうネ。だけどアナタとぜんぜん雰囲気違うのヨ。背が高くって、甘いマスクで、髪の毛が少し茶色かったサラサラヘア。その上成績優秀で。高校では凜と同じ青葉学院高等部に入ったのヨ。ただしそそっかしいところは共通点だったかな。」

「く、久美…ちゃん。そんなボロクソ言わへんでもえーやるが(苦笑)」

「アハハハ!ゴメン。」

「それにしても、哲、あ、いや今は凜ちゃんか。青葉入ったんか。大したもんやんか。」

「あ、それはね、そのもう一人のワタル君がいてくれて…。」

「じつはね、凜はもう一人のワタル君と付き合ってたのヨ。」

「そ、そうなんか?ほお…。」

「それでワタルAは、さつきワタルBとアタシたちが初めて会ったときのこと聞いたけど…。」

「ワタルAとかってボクを記号で言うなや!(笑) まあ、それはええワ。そんでな、言いたかったんは、じつはちょうどその時期のチョット前くらいからな、ボクヘンな夢をよく見るようになったんや。」

「ヘンな夢?」

いよいよ謎の核心に迫ってきたボクら。
2人のワタルはボクたちの中でどうつながっていくのだろうか。

第五十一話 思い出

「じつはちょうどその時期のチヨット前くらいからな、ボクヘンな夢をよく見るようになったんや。」
ワタルAは真剣な顔で言った。

「ヘンな夢？」

「そうや。なんて言うんかな…。ボクの今までの人生を映画にして映していったみたいなんで、幼稚園くらいから順番に映されてな、その途中で久美ちゃんや哲だったときの凜ちゃんも出てくるわけや。それが1週間くらい続いたんや。」

「なんか…記憶の吸上げみたい。」
何気なくボクが呟いた。

「そうか！それヨ！」
久美ちゃんがいきなり大声で言った。

「なんや？びつくりしたあ。久美ちゃん、ボク気が弱いんやからそんなびつくりさせんといて。」

「モウ！これだけワルで有名な人が気が小さいとか言ってんじやないワヨツ！（笑）」

「ナハハ…。そういわれると返す言葉が見つからん（笑）」

「いい？ワタルAはワタルBに自分の中にある記憶を吸上げられたのよ。だからワタルBはワタルAに成りすませた。」

「そっかあ。でも、夢の中の記憶ってなんかSFみたいじゃない？宇宙人がスゴイ機械を使ってワタル君の夢を映像化したとかってこと？」

「そこがわからないんだけどネ。それとわからないのは、それをしてアタシたちのところに来た理由ヨ。」

「そっだよねエ。それで誰が得をするとかっていうことでもないんだし…。」

それからボクたち3人は一緒に昼ごはんを食べ、そして色々な話をした。

ボクら以外でワタルが昔よく遊んだ安田のこと。

ワタルが転校していった後のボクらの街の変化。

小学校の正門前にあってボクらがよく学校帰りに寄ったお菓子屋さん。

ワタルはどの話も懐かしそうに目を細めて聞いていた。

ワタルが何よりもびっくりしたのはボクの変化みただった。

ボクは子供の頃から他の男の子たちより顔がふっくらして、まつげが長く、骨格も細かったため中性的な雰囲気があった。

それでも、ワタルは男同士で毎日泥んこになるまで遊びまわった。

久美ちゃんと3人で当時小学校で禁じられていた遠出をして釣りに

行ったときは、ボクが5匹でワタルが2匹。そのときワタルはすごく悔しがって、転校して行く前に「いつか再挑戦してやるからな！」と言っていた。

そして久美ちゃんはそのようなボクたちにいつも笑顔で傍にいてくれたっけ。

そして中2の夏休みにボクの性別が本当は女だってわかって、ボクは急激に変わっていった。

中性的な顔つきは女性的な優しい面立ちになって、胸は膨らみ腰つきは丸みを帯びてお尻も膨らみ、手足はぼちゃぼちゃと柔らかくなっていた。

「ほえええ〜〜。しかしどっからどう見ても女にしか見えんなあ。姿はもちろんやけど、なんて言うんかな…雰囲気っていうか、考え方とかもすっかり女の子っていうかな。」
ワタルはボクを見ながらそう言った。

「そりゃそうヨ。哲ちゃんは元々女の子として生まれたんだから。久美ちゃんは久しぶりにボクを哲ちゃんと呼んでそう言った。」

「もう一人のボクもきつと哲の変化はビックリしたんやろうな。それともそれも『アイツ』は知っとなんかな？」

「どうだろうね。」

ボクたちはこのときワタルのこの何気ない言葉を受け流してしまっただ。

夕方になってワタルと分かれる。

「なんか、せつかく会えたのに残念だネ。」
久美ちゃんが少し寂しそうにそう言った。

「でも2人に会えてすごく楽しかったワ。そのうち休みになったら今度はボクがああ街に行くさかい。また会ってくれるか？」

「とーぜんでしょー!」
「来ないと怒るからネ!」

「ワハハ。女の子怒らせると怖いからな(笑) 必ず行くワ。 じやあ今日はアリガトな。」

「ウン。アタシたちのほうこそ。ワタル君に会えてすごく楽しかった。アリガト。きつと待ってるからネ。」

「ウン。じゃあなー!」

そのときのワタルはどこか『あのワタル』と似ていたような気がした。
いつも笑顔でボクを見守ってくれて、そして温かくって…。

(ワタル…キミはどこへ行ってしまったの?)

その日の夜。

おばあちゃんの家の一室で布団を並べて寝たボクと久美ちゃんは、今日一日のことをゆっくり思い出していた。

「あのさ……。」

久美ちゃんが天井を見ながら呟くように言った。

「うん？」

「さっき3人で話してたとき、凜が途中でトイレに行ったでしょ？」

「あ、うん。」

「そのときね、アタシ、ワタル君に「どうしてグレちゃったの？」って聞いたかった。」

「ワタルは……なんて言ったの。」

「アタシも知らなかったんだけどさ、カレの転校した理由ってお父さんの転勤じゃなくて両親の離婚だったんだって。それでワタル君はお母さんの実家のある大阪に行ったらしいよ。」

「そっかあ……。そうだったんだ。」

「ウン。ほら、ワタル君って妹さんがいたじゃない？アタシたちとも時々遊んでた。」

「悦子ちゃんだったっけ？」

「そう。アタシたち『エツちゃん』って呼んでたんだよね。あの娘はお父さんと一緒に埼玉の方に引っ越したらしいヨ。」

「そっかあ……。ワタルってエツちゃんのことすごく可愛がってたしネ……。」

「そっだねエ……。」

そして久美ちゃんは少し間を置いてこう続けた。

「アタシさあ、昔ね、ワタル君に好きだって言われたことがあったのヨ。」

「エ……………」

「あ、ワタルAの方にヨ（笑）」

「あ、ウン。」

「小学5年生の初めだったかな。でもアタシそのときはね、いつも一緒に遊んでいた子がそういう恋愛の対象とかって考えられなくてさ…。それで「アタシもワタル君のことは哲ちゃんと同じに好きだヨ」って返事したんだヨ。」

「そうなんだ…。」

「ウン。そういのってアタシは女だからピンと来なかったけど、きつと男の子にとっては悲しかったのかも…。」

「そうかも…しれないネ。」

それだけ話すと久美ちゃんはいつの間にかスースーと小さな寝息を立てて眠ってしまった。

第五十二話 アナタと過した時間

久美ちゃんとの大阪旅行から3ヶ月が過ぎ

相変わらずボクのワタルはその存在を消したまま。

もうすぐ12月も半ばに近づこうとしていた。

久美ちゃんとワタルAはその後小まめに連絡を取り合っているらしい。

ボクは日常の中で過ぎていく時間をただ受け入れていくだけだった。

そしてそんなある日

学校からの帰り道、宮益坂を下っているときボクの携帯電話が鳴った。

「ハイ。もしもし。」

「あ、凜。アタシヨ。」

「久美ちゃん。ひさしぶり〜。どうしたの？」

「あのさあ、今日帰りに駅のところまで会えないかな？」

「ウン。いいけど。何かあったの？」

「あ、ウン。まあ会ってから落ち着いて話すワ。」

あれからお互い定期テストがあったり学校の行事があったりですれ違い中々久美ちゃんに会う機会がなかったボクは嬉しかった。

「オツケー！じゃあ、4時に改札のところでもいい？」

(なんだろう…)。
電話を切ると思い当たることを探してみるけど何も思いつかない。
でも、久美ちゃんは何か嬉しそうな声だった。

「久美ちゃんお待たせー。」

「あ、凜。早かったネ。」

「ウン。駅でちょうど電車が来たところに乗れたから。」

「そっか。じゃあ、どっか喫茶店に入らない？」

「ウン。いいヨ。」

そしてボクらは駅前にあるお店に入った。

「じつはさあ、昨日ワタル君、あ、ワタルAね、」
「ウン。」

「ワタルAから電話があったのヨ。それでね、1月の半ばにカレ
こっちに戻ってくるようになったんだって。」

「戻ってくるって、遊びにくるんじゃないかってお引越してこと？」

「ウン。そうらしいのヨ。 どうしてかっていうとね、何かアタシ
たちが大阪行ったたじゃん？あれから少しして大阪に出張に行った
ワタル君のお父さんが偶然お母さんと道でばったり会ったんだって。
それでお互いのことを話してるうちに少し打ち解けてきて、それか
ら何回か会ってたらしいの。それでそのうちお父さんがお母さんに
またみんなと一緒に暮らせないかって話をして、お母さんはしばらく
考ええていたらしいんだけど、この前決めたんだって。」

「へえー！良かったよね。何かアタシたちまで嬉しくなっちゃう。」

「だよネー！ アイツさ、アタシと電話で話してるとき「せっかく
こっちで好き勝手やってるのに親の都合でまいるわー！」とか言っ
てただけど、もうすごく嬉しそうな声しちゃってさあ(笑)。」

「アハハ！昔から天邪鬼だったから（笑）」
「そうそう！強がり言っちゃってネ（笑）」

そう話す久美ちゃんはすごく嬉しそうだった。

「それでさあ、なんか1月16日にの日曜日に戻ってくるらしいんだけど、凜はその日なんか予定ある？」

「あ、ウウン、いいヨ。じゃあ引越しの手伝いに行っちゃおう？」
「ウン！行こうヨ！」

（どうせクリスマスだって何も予定ないしね……………。）

じつはボクは6月くらいからマフラーを編んでいた。

編み物は初めてだったけど、母親やミコやみーちゃんに聞きながら毎日頑張って編んでいた。

11月終わりくらいには出来る予定で作ってた。

でも、結局半分くらいでワタルはいなくなっちゃったナ…。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

今週末から冬休みが始まる最後の週。

チア部の練習も年内は今日が最後となる。

ボクたち1年生も最近では2月の都のチア大会を目指して体育館でスタンプを中心に練習を行っていた。

ボクのポジションはスポット。

チア未経験から始めて一生懸命練習した。

「ハイ！いくヨ！」

「凜！」

「イエス！」

「ワン！ツー！スリー！」

そしてトップが降りたとき

「アッ！」

バランスが崩れた。

ボクがとっさにトップのチハルの身体を押しようとしたとき

「キヤアッ！」

支えきれなかったボクは床に足を滑らせて転んでしまった。

「だ、だいじょうぶ！？」

横たわるボクの周りにみんなが集まってくる。

「だ、だいじょうぶです。」

すぐに立ち上がったボクだったけど、

「アッ、イタッ！」

「小谷さん、見せてみて？」

チア部顧問の佐藤先生が寄ってきて言った。

「ふうん…。骨に異常はないみたい。多分捻挫だと思っけど、とにかくすぐに保健室にいつてらっしゃい。」

「ハ、ハイ。」

「凜、歩ける？肩貸そうか？」

そう言ってみーちゃんが支えてくれたが、2、3歩歩いたところで「アッ！」と挫けてしまった。

そのとき

「オレ、おぶつていきます。」

その声をかけたのは同じ体育館でたまたま練習をしていた空手部の笹村先輩だった。

「そう…ね。女の子だけで抱えていってもし途中で落ちたりしたら大変だし。小谷さん？」

「え、え〜。でも…。」

「いいじゃん、凜。お世話になっちゃいなヨ。」

みーちゃんがボクの背中を押した。

「ホラ、早く。」

笹村さんは腰を落としてボクに背中を向けた。

「じゃあ……………」

ボクは笹村先輩の首に手を回して身体を預けた。

「よし。じゃあ行くぞ。」

(なんか恥ずかしいよあ…。)

ボクはおぶられている間は目をつむっていたけど、自分の顔が赤く火照ってくるのがわかった。

でも…。

なんか笹村先輩の背中って温かいな…。

なんか、こつこつという感覚ってすごく懐かしい気がする。

なんだったっけ…？

あ、そっだ…。

ワタル君にキスされた後カレの胸に顔を埋めたときだ。
温かかったな…。

そんなことを考えながら

ウトウト…ウトウトと…。

みんなで行ったデイズニールランド…

あなたは人ごみの中でアタシの手を引いてくれた。

クリスマスパーティーの後、アタシがアタシのおでこにくれた初めての
の小さなキス…

そして合格発表の後初めてアタシと交わした口づけ…

アタシ、みんな覚えてるんだヨ。

アナタの温かい声、アナタの優しい眼差し、そしてアナタの胸に顔を
うずめたときの鼓動…。

アタシは確かにアナタと同じ時間を過していたんだよね？

ワタル君…

ワタル君…

アナタはどこに行っちゃったの？

ずっと、ずっと一緒にいようねって言ってくれたじゃない。

嘘つき…ワタル君の嘘つき…。

……………

「ワタル…君…嘘つき…」

「あれ…？」

目を覚ますとボクは保健室のベッドで寝ていた。

寝たまま泣いていたらしく、頬には涙の跡が付いていた。

ボクは保健室の先生に気付かれないうちにそれを手で拭った。

「あら、起きた？」

そう言つて保健室の名取先生がボクのおでこに手を当てた。

「アナタ少し熱っぽいわヨ。多分風邪じゃないかな。それと足はただの捻挫だったワ。すぐに腫れは引きと思うけど、でも2、3日はあまり動かさないようにネ。シップ貼つておいたから。」

（そっか、だから顔が熱くってボーっとしてたんだ…。）

「あの、ここまで運んでくれた人は？」

「アナタを預けて帰ったわヨ。」

（ああ、お礼も言わなかったなんだ、ボクったら。）

その日は佐藤先生がウチに連絡をしてくれて、母親が学校まで車で迎えに来てくれることになった。

第五十三話 聖夜に降りてきた天使たち

「ねえ、凜。クリスマスって何か予定あるの？」
放課後の教室でみーちゃんがボクに尋ねてきた。

「ウウン。何にもなーいっ。」

するとみーちゃんは嬉々とした顔をしてボクの席の横に立って言った。

「じゃあ…さっ！」

「なにヨ？」

「あのね、夏合宿したときのメンバーでクリスマスパーティーをしり計画があるんだって。」

「夏合宿のメンバーってことは、応援部とか空手部の人も一緒に？」

「そうっ！ 幹事は空手部2年の須藤さん。24日のイブの夜にね。」

「何人くらい集まるの？」

「うーん…40人くらいじゃないかなあ。チアの女子は今のところ1年が凜を加えて6人で2年と3年が8人だっ。凜も来るでしょ？」

（まあワタルもいなくなっちゃって、一人だしネ。）

「ウウン。誘って。」

「よっしやっ！」

みーちゃんってすごく可愛いのにけっこう豪快なところあるんだよね
（笑）

それがよけいみーちゃんの魅力を引き立ててる気がする。

「渋谷のキャンディってホール知ってるでしょ？　そこに4時ネ。会費は女の子は3千円だよ。みんなオシヤレしてくるらしいから、気合入れていこー！」

「オツケー！」

当日は2時から準備を始めた。

薄いピンク色で腰に白のリボンを巻くカステラスカートのワンピース。

大阪のおばあちゃんが秋にウチに遊びにきたとき横浜で買ってもらったものだ。

そして昨日のうちからウエーブをかけた髪を丁寧にとかしファンデーション、チークを薄く入れて眉を整えビューラーでまつ毛をカール。

そして唇には前に母親に買ってもらったサーモンピンクの口紅を塗る。

ワンピースの上には白の薄いカーディガンを羽織り、外着で白のコートを用意した。

ドレッサーの前で何度もチェック。

誰に見せるわけでもないのに、これは悲しい女の性？（笑）

準備が終わったのは3時近く。
クヨクヨしてたつてしょうがないのだっ！
さあ、行こー！

待ち合わせた渋谷のモアイ像の前にはみーちゃんやマミたちチア部
1年生の友達がもう集まっていた。

「ゴメン。お待たせー！」

「わぁおっ！凜、頑張ってきたネーッ！」

「みんなだつてすごいステキじゃん。」

今夜の渋谷の街はすでにそこかしこで女の子たちのドラマが始まっ
ているのです。

「さあ、会場に行こう！」

「オーッ！」

会場のキャンディは普段はパーティホール。

この日はボクたちのパーティで4時から7時半まで貸切になってい
た。

会場の入口にはチア部の先輩と空手部や応援部の男の人数人が集ま
って話をしている。

「こんばんわー。」

「おおっ！きたな。」

みんなドレスアップしちゃって。」

「エへへー。」

受付で会費3千円を払って中に入ると、そこはけっこう広い空間でチカチカと照明が瞬いていた。

「わぁー！なんかすごいねー！」

「っていうかさ、男の人たちも正装してネクタイしてるよー。」

「2年のちひろさんのドレス、すごいかわいい！」

すると

「ヨオツ！凧ちゃん。」

そこには正装した笹村先輩が立っていた。

「わぁ……………」

「エッ！どうしたの？」

「ウウン。いつも制服と空手着の格好した先輩しか見たことなかったから。」

「オレ…やっぱりヘン…かな？」

「ウウン。とってもステキですよ！」

「ホッ！よかったあ」

「フフフ……………」

「でも……………」

「でも？」

「凧ちゃんこそすごくステキだよ。ホントびっくりしてる、今オレ。」

「エ……………」

こんなこと言われたのすごく久しぶりだな…。

そのとき奥の方で

「トオルーっ！」

友達が笹村先輩を呼んだ。

「おつ。オー！今行く。　オレ今日の幹事メンバーなんだ。じゃあ、また後でな。」

「ハイ。また後で。」

そしてBGMで流れていた音楽が少しずつ小さくなっていくと

「みなさん！こんばんわーっ！っ！」

空手部2年生須藤さんの司会でいよいよパーティの始まり。

「さあ今宵の聖なるイブの夜に集まった43人のレディース&ジェントルメン。今夜はアナタ方のためにあります。心ゆくまで思いっきり楽しんでいってくださいネー！」

「ハイ！それじゃ、みんなグラスを持って。　いいかなー!？」

「メリークリスマスー！！！」

パンッ！
パンッ！
パンッ！

クラッカーが弾かれて色とりどりのテープが辺りを飛び交った。

「さあ！それでは今宵のパーティを彩る青葉学院高等部チアリーデ

イング部の14人のマーメイドたちに順番に出てきてもらいましょう！」

「エッ、何も聞いてないヨ？」

「アタシも。」

「フフフー。これは女性の誰にも事前に教えておりません。でも「いっぱいオシャレしてきてネ！」って聞いたでしょ？ それはこのためだったのです！」

「一人ずつステージにあがってクルツと一回転。そしてひとこと挨拶していただきます。さあ！それでは3年生から行きましょーっ！」

そのとき笹村先輩のハスキーな声スピーカーから聞こえてきた。

「それではエントリナンバー1番。305HR 脇坂 恵さんです。」

（笹村先輩~~~~~！！！！（笑））

恵さんは黒のフォーマルドレスに白のファーを羽織ってステージに上がって腰に手を当ててクルツと一回転。

「チア部3年のメグです。高等部最後のクリスマス精一杯楽しんじゃいます。」
と挨拶した。

そしていよいよ1年生の順番

「続きましてエントリーナンバー10番!103HR 小谷 凜さんです。」

(ひえええ~~~~~!)

ボクはまるでロボットのようになぎこちなく手足を動かしながらステージへ。

すると壇上の端にいる笹村先輩が

「凜ちゃん、リラックス!マーメイドが泳ぐように!」
とボクに囁く。

(よおーっ!)

足を伸ばし、手を腰にあてて一回転
そして

「1年の小谷 凜です。今夜は皆さんもそして私も幸せになれますように」

「おおおおおーっ!」
パチパチパチ…と拍手が。

「凜、あの挨拶可愛かったヨー。」
みーちゃんが傍に寄ってきて囁いた。

ボクは顔真っ赤。

(かなり恥かしかつたよおおお (笑))

第五十四話 重なる気持

「さあ！それではしばしの間ダンスタイム！ 皆さん、ダンスホールに出て積極的に参加してください！」

そして軽快な音楽がホール中に響き渡り、男の子も女の子も中央に集まってリズムに体を乗せ始めた。

「凜、行こう！」

みーちゃんがボクの手を引いた。

「ウン！行こう。」

クラブ系には行ったことはないけど、ボクも周りに合わせて見よう見真似で体を動かす。

日頃チアでダンスをやっているせいか、それなりに形にはなっているみたい。

「よお！中々上手いじゃないか！」

気がつくやと笹村先輩が僕の前で踊っていた。

「真似っこなんです（笑） みんなの見ながら。」

「アハハ。いいんだヨ！楽しければ何でもオツケーだから。」

「ハイ！」

そしてボクはしばらくは笹村先輩と向かい合って踊る。

ホールの中はみんなの熱気で汗が出てきそうなくらいヒートアップ。

そして何回か曲が変わったところで急にスローバラードになった。

フツと周りを見ると、何人かの女の子が男の人の首に手を回してチークを踊っている。

笹村先輩の熱い眼差しがボクを見つめていた。
ボクは先輩の肩に手を伸ばしかけて……………。

（やっぱり…ダメ…。）

その手をそつと下に降ろした。

去年のクリスマス

みんなでやったパーティのときが頭の中にどうしても浮かんできちゃう。

あのときワタルと踊った初めてのチーク。

ワタルの胸に顔を埋めたときのカレの鼓動がまだ僕の耳の奥に残っている。

「あ…踊りすぎたのかな。チョット疲れちゃった。少し休みますネ。」

そう言ってボクはダンスホールの外に出た。

（なんか、先輩に気を悪くさせちゃったかな…。）

少し自己嫌悪な気持で、カウンターに作ってあるストロベリーソーダのグラスを1つ取って、空いている席に座った。

「あれ、凜。どーしたの？笹村さんと踊ってこないの？」
みーちゃんがボクの席の隣に座った。

「ウン。踊りすぎてチョット疲れちゃったから。」
ボクは取繕うかのようにみーちゃんに微笑んでそう言った。

（そっか…。みーちゃんももうワタルのいた記憶がないから。
もしかしてボクと先輩をくっつけようと思ってるのかな…。）

ワタルが存在していたという記憶がボクの周りの人たちにはない。
だからボクが誰と付き合ってたってホントは別に気にすることじゃないのかもしれない。
でも、今のボクの心は他の誰も受け入れることを無意識で拒否している。

そして3時間のパーティーは間もなく終りに近づく。

司会の須藤さんがマイクを取った。

「さあ、楽しいクリスマスパーティーも残りわずかとなりました。
ここでチョットばかり子供っぽいかわかと思われかもしれませんが、
ここは皆さん子供に戻りましょう！」

「エッ、なにをするの？」

「子供に戻って？」

「缶蹴りとか（笑）」

「イエイエ。ホラッ、みんなにも小中学校時代の甘い思い出があったでしょ？踊りながら男の子は好きな娘、女の子は好きな人が順番に自分の前に来るのをドキドキしながら待っていた。」

「アッ！わかったー！フォークダンスでしょ！？」

「ビンゴッ！最後はこれで締めましょう！ただし男女で人数が合わないから男8人が女の子のほうに混ぜてください。ホラッ！タカシと長井と鬼頭、オメーら女子の方に入れて！」

「エーッ！須藤先輩、切ないっすヨー！オレら、男としか踊れないじゃないっすかー。」

「まあまあ、オレも女子の方に混ぜっから。後でメシでも奢ってやつからヨ。」

「ホントっすかー？ああ、切ないなあーっ！」

須藤さんの漫才は大受け。
みんなゲラゲラと笑った。

「アハハハハ！」

ボクもお腹がよじれそう（笑）

「じゃあ、女の子は内側の輪、男は外側の輪を作ってください。ダンスがわからない人は適当でいいですから、とにかくリズムに乗って進むこと。」

ハイッ！いいですかー？じゃあ始めましょう！フォークダンスといったらこの曲しかないでしょう！オクラホマ・ミキサー！ミュージック、スタート！！」

タラタツタツタータラタララララ　　タララララララララ　ラ
ツタツタ

音楽が始まってボクたちは男女のペアで手をつなぎながら肩を揃えて進み止まってお辞儀、そしてペアを替えていく。

「こ、こうでいいんだっけ？」

「こうじゃない？」

「きゃあ　　なんか楽しーネ！」

そして何順めかを進んだとき、ボクの前に笹村先輩がきた。

先輩はボクの肩に右手を乗せて、左手をボクとつなぐ。

さっきのことは何もなかったかのように、先輩は笑顔でボクを見ていてくれた。

「あ、先輩！右足を前っ！」

「こ、こうか！？」

「ソウソウ！次は左足を前です！」

「エッ！」

「アハハハ！」

ボクの笑った顔を見て、先輩も照れたような顔をして笑った。

第五十五話 ワタル君は…。

新しい年が明けて今日はいよいよワタルAが大阪からこの街に帰ってくる日。

ボクと久美ちゃんは朝からそのお引越しを手伝うためにカレの家に向かった。

ワタルAの新しい家はウチから15分ほど歩いたマンションだった。途中久美ちゃんと待ち合わせてワタルにFAXしてもらった地図を見ながら探していく。

「あ、久美ちゃん。あれじゃない？」

「エルコート21…。あ、ホントだ！」

8階建ての7階がワタルAの新しい家らしい。

マンションに近づくとエントランスのところにはすでにワタル一家が到着していた。

お父さんはマンションの管理人に挨拶に行っているとのこと、ワタルAとお母さんそして妹の悦子ちゃんが立っていた。

「こんにちはわー！」

ボクと久美ちゃんが挨拶しながら近づいていく。

ボクたちとワタルAがよく遊んでいたのは、小学校4年生から5年生の半ばでカレが大阪に転校するまでの間で、その間にボクたちは何回かワタルの家に遊びに行ったこともあった。

ワタルのお婆さんの懐かしい顔、そしてあのときは小学校2年生だった悦子ちゃんも今ではもう中1。

「あらー！まあまあ！お久しぶり。ホントに懐かしいわあー！」
そう言つてワタルのおばさんはボクたちを歓迎してくれた。

「えつと、アナタが久美ちゃんよネ？ まあ綺麗になつちやつて。
それでアナタが凜ちゃん。ワタルから聞いてるわヨ。いろいろあ
つて大変だったわネ。でもホントに女の子らしくなつて、もうステ
キな女性だネ。」

「おばさん、お久しぶりです。」
ボクと久美ちゃんもそう言つて挨拶する。

「エツちゃんも久しぶりだよネ。可愛くなつちやつたネー！」

するとワタルが話しに入つてきて

「悦子もなあ、昔は兄ちゃん、兄ちゃんってじゃれついてきたんや
けど、すっかり女っぽくなつてしもてなー。」

「アハハハ！ワタル君、エツちゃんもいつまでも子供じゃないんだ
ヨ？ もう立派な女の子なんだから。ね、これからは女同士でいっ
ぱい遊ぼうねー！」

久美ちゃんがそう言つと

エツちゃんは嬉しそうに

「ウン！」と頷いた。

「やあ、こんにちは。今日はすみませんね。」
管理人に挨拶に行つていたワタルのお父さんも戻つてきた。

「それじゃ、とりあえず部屋の中に入りましょう？　トラックが着くまであと1時間かかるらしいから、それまでお茶にしましょう。」
ワタルのお母さんの提案に従ってボクらは家の中にお邪魔する。

家の中に入ると、12畳ほどのリビング兼ダイニングの他に和室が1つ、洋室が2つ。
リビングの広い窓からは街の景色が一望できる。

「わあー！　高いねー！」

ボクの家もも久美ちゃんの家も一戸建てだからこんな高い景色はあまり見たことがない。

「ホラッ、あっちが新宿の方だよネ？」

「あ、ホントだ。キレイだねー。」

ボクと久美ちゃんはマンションから見える眺めにはしゃいだ。

「じゃあ、チヨットお茶を入れてくるわネ。」

ワタルのおばさんがそう言っけてキッチンに立った。

「あ、アタシたちも手伝います。」

ボクと久美ちゃんがそう言っけてキッチンに向かった。

「アラ。じゃあ、紅茶を入れてもらっけていいかしら？　おばさん、ケーキ焼いてもってきたのヨ。みんなで食べましょう。」

「わあー。」

昔、ワタルの家に遊びに行くとおやつ時おばさんはよくボクたちにお手製のケーキを出してくれた。

甘くってふんわりしてとても美味しかったあのときの思い出が蘇ってくる。

「おいしいー！」

「そう。よかったワ。」

「ね、おばさん。今度ケーキの作り方教えて。」

「あら、いつでもいいわヨ。じゃあ、今度悦子も入れて女の子4人だけでお茶会しよっか？」

「わあ！いいですねー！」

するとワタルが横槍を入れてくる。

「おかーちゃん、アンタ女の子って年齢やないやろ？」

「あらっ、女性は一生女の子なのヨッ！あなたにはこの気持はわからないでしょーけどね。」

「わかるかいなっ！（笑）」

「アハハハ！」

そんな楽しい会話をしている間にあと10分でトラックが到着するという連絡が入った。

「じゃあ男性2人は引越し業者の人が運び入れた家具を配置していつてちょうだい。久美ちゃんと凜ちゃんと悦子は部屋のお掃除をお願いできるかしら？ お母さんは荷物をほどこいて食器棚に入れていくワ。」

おばさんがテキパキと指示を出す。

「はい。」

リビング&ダイニングはボクと久美ちゃんの2人で、和室をエツちゃんが担当。

掃除機をかけてから水拭き。壁や窓際も順番に水拭きしていく。

トラックが到着して掃除が終わった部屋から順番に荷物が運び入れられていく。

大阪に行って久しぶりに会ったときはやくざのような格好で吼えていたあのワタルは、今は頭に捻り鉢巻を巻いて一生懸命頑張っている。

それから約2時間。

「おわったぁーっ!!」

「すつきりしたわネー!!」

家の中は家具や荷物が運び込まれて配置され、暖かな生活の香を醸し始めた。

「皆さん、ホントにお疲れ様でした。さあ、じゃあお昼を取りましょう。」

おばさんが引越し蕎麦の出前をお願いしてボクと久美ちゃんもご馳走になった。

「さあ、じゃあこっちはもういいから。ワタルと久美ちゃんと凜ちゃんの3人はワタルの部屋でゆっくりお茶でもしててネ。悦子も自分の部屋で自由にしていいわヨ。後はお父さんと2人でやる

から。」

「おお、任せろ！みんなゆっくり話でもしてていいからな。」

「はい。じゃあ。」

「ワタル君、部屋に入らせてもらうわヨ？」

「ハイハイ。ドーズ。」

ワタルの部屋は6畳くらいの洋室。

そこにはすでに勉強机と本棚1つそして小さなガラステーブルとベツドが配置されていた。

おばさんが持たせてくれた缶ジュースとお菓子をガラステーブルの上に並べてボクたちはその周りに腰を下ろした。

ボクはジュースを一口含んでワタルに尋ねた。

「ねえ、ワタル君。学校はどこに転校するの？」

「ああ、都立の蔵石工業高校にしたん。」

「へえ、じゃあ久美ちゃんの高校と結構近いよネ？」

久美ちゃんは都立白洋高校に通っている。

「そうなのヨ。だから前みたいに学校サボったら首に縄つけて連れてこようかって思ってた（笑）」

「アハハハ！」

「縄でつか？せめて首輪くらいにしてほしいわ！（笑）」

「ダメヨ！アタシと約束したでしょ？これからはちゃんと勉強して、高校生活もしっかり頑張るって。」

「わかってるがな（笑） 不肖この石川ワタル、吐いた言葉に二言

「はあらへん！」

（フフフ…。なんかこの2人、すごく感じ良さそう…。）

「そういえば安田とか元気が？」

安田もボクラと同じ小学校だったので、ワタルともよく遊んでいた。

「ウン。安田はたしか多摩高校じゃなかったかな。アタシも卒業式から会ってないけど、中学時代はいつつもカメラ持って写真撮ってるの（笑）」

「アハハハ。あいつ小学校のときからずっとそうやネン。」

「エ、そうだったの？」

「おう。小学校のときよく友達の写真撮ってはそれを現像してくれとったん。」

「へえー！アタシはそれって知らなかったなあ。」

「久美ちゃんと凜ちゃんは、安田と同じクラスになったのって3年生のときだけやる。ボクは1年生から5年生で転校するまでずっとあいつと同じクラスやったからな。」

「あ、そっかあ。」

「そういや、安田がくれた写真も入ってるアルバムどっかにあったな。」

「エ！見たーいっ！」

「見せてえ！」

「ええヨ。ちょっと待ってな。エツト…どこのダンボールに入れたかいな…。」

そう言っつてワタルは積み上げられたダンボールの側面に書かれた内容品区分を見ながら思い当たったものを開け始めた。

そして2つ目にあけたダンボールから

「あつた！あつたでー！」

「わあ、見せて、見せて！」

ボクと久美ちゃんはワタルの近くに寄っていく。

少しくすんだアルバムの1枚目をめくると、それはワタルの小学校入学から時系列になって整理されていた。

「わあ、ワタル君にもこんな可愛かった時期があつたんだねエ！（笑）」

「今だつてまだ少し可愛いぞ（笑）」

「どこがー！（笑）」

そして順番に1枚ずつページをめくっていく。

「あ、これって…。」

「あ、3年のときボクが久美ちゃんと凜ちゃんと同じクラスになったときのやな。ほれ、ボクやる？そんで久美ちゃん、そして哲のときの凜ちゃんや。」

「へえー！なんかすごい懐かしい。」

「まあ、この頃から哲は女らしいっていうか、ボクらよりどっちかっていうと久美ちゃんに近い雰囲気があつたんやないかって気がしたがなあ。まさかホンマに女の子だったとはなあ…。」

そしてまた1ページめくる。

「ああ、ここのページのは4年生のやからな。2人はあんま知らないやつばっかちゃうかな。それより次のページにな…。」
そう言つてワタルがもう1ページめくろうとしたとき

「チヨ、チヨット待って！」

「なに？」

「今の、今のページに戻して！」

そう言っつてボクは1ページ前に戻した。

そこには病室のような場所でベッドに寝たまま半身を起して座った一人の男の子が映っていて、その周りをワタルや知らない男の子と女の子数人が取り囲んで映っていた。

「ああ、これが。4年のときのクラスメイトだな。みんなでお見舞いに行ったとのやな。これ撮ったのって安田やヨ。」

ボクはその写真の中に映っているベッドの男の子をじっと見た。

「凜、どうしたの？」

久美ちゃんがボクの顔を覗きこんで言った。

「やっぱり……………」

「やっぱりって？」

「久美ちゃん…。ホラ、この男の子の顔、よく見て？」

久美ちゃんがアルバムを覗き込む。

そして

「この子が？。……………ああっ！凜、こ、これって……………」

「そう…。ワタル君…ヨ。」

信じられなかった。

何でカレがこんなところに映っているんだろう。

その男の子は少し顔色の悪そうな感じではあったけど、笑顔でそしてあの頃のワタルの面影をしっかり映していた。

「ワタルって…あっちのワタルか？」

ワタルがアルバムを手にとってそう言った。

「そう。あっちのワタル君…。ねえ、ワタル君。この人は？」

「ああ、こいつは鮎川 渡ゆうてな。ボクの4年生のときのクラスメイトやヨ。ボクと同じワタルやけど、でもワタルの字がこいつは道路を渡るの渡やったはずや。」

すると久美ちゃんが思い出したように声をあげた。

「鮎川…。ああっつ！り、凜。思い出したヨ！」

「なに？」

「ホラ！鮎川君。覚えてない？アタシと凜が2年生のとき同じクラスになったことあったじゃん？あんまり目立たない子だったけど、家が近くてときどき3人で公園で遊んだこともあって。下の名前がワタルっていうのはぜんぜん知らなかったけど。」

(そ、そうか…。あのときの…。)

第五十六話 理由

（あの公園で…そうか、そうだったんだ。あの公園がボクたちをつなく場所だったんだ。）

（だからキミはあの公園でボクのところから去っていったんだ。）

「ねえ、ワタル君。この鮎川君は今どうしてるの？」

するとワタルは少し目を下に落すようにして答えた。

「ああ、…今はもうおらん。」

久美ちゃんが不思議そうに尋ねる。

「おらんって？カレもどこかに転校しちゃったの？」

「いや、鮎川はな、この写真とってしばらくした後亡くなったんヨ。」

「

「エエエエツツ！！！！」

「ボクも他のやつに聞いた話やけどな、アイツは元々身体が弱かったらしいんや。」

「じゃあ…アタシたちが中3のときから一緒だったワタル君は…幽霊？」

ボクがポツンと言った。

「そんな…。幽霊だったらみんなの記憶を操作して存在を消すなん

てことできないでしょ。」

「そやなあ。それにボクの記憶を使ってそんなことする意味がわからん。」

「そうネ。でもわかったことがあるワ。」

「エ、なに？」

「ずっと不思議だったのヨ。凧の他であつちのワタル君のことを覚えていたのはアタシだけでしょ？なんでアタシの記憶もみんなと一緒に消さないのかってネ。」

「そ、そうだよネ…。」

「ウン。そこにはきつと何かの意味があるのヨ。そしてカレがアタシたちの前に現れて凧と付き合ったのにもきつと何か理由があつたんだって思う」

（そうか、そういうことだったんだ。）

そしてその日、ワタルの家から帰って、途中で久美ちゃんと分かれたボクは、あの公園の前を通った。

（幽霊でもいいから、アナタに会いたい…。）

クリスマスパーティーの帰り道。

2人でこの公園のブランコに座って

アナタがオデコにくれた初めての小さなキス。

（アタシはもう一生アナタには会えないの？）

そう考えて下を俯くと自然に涙がこぼれてきた。

そのとき

キィ…キィ…。

フツと横を見ると、ボクの座っている隣のブランコが小さく揺れている。

そして

ぼやっとした影は次第にワタルの姿になっていった。

「ワ、ワタル君！」

「久しぶりやな。」

「ワタル君！！！」

「そんなに涙を溜めてどないしたん？ そんなんしてたらボク安心して行けへんで（笑）」

ボクは涙を手で拭って答えた。

「な、泣いてなんかないモンッ！」

「そつか。ならええけどな。」

「そ、それよりアタシを独りぼっちにしてどこいっちゃったのヨッ！？」

「ゴメンナ。でもボクも凧ちゃんとは一緒にはおられんのか。」
「アナタは…幽霊なの？」

「幽霊？ うーん…いや、チョットちゃうな。ボクは「心」や。」
「心？」

「そう。凧ちゃんが久美ちゃんとホンマのワタルに行き着いたのは知つとる。まあ、ボクもホンマのワタルやけどナ（笑）」

「教えて？ アナタは何のためにアタシたちの前に現れてそして突然いなくなったの？」

ワタルは少し考えたように遠くを見た。

「もうチョットしてから…って思っとなんやけどナ…。まあ、ええか。」

凧ちゃんももうわかっていていると思うけど、ボクは石川 渉やない。

鮎川 渡や。小2のときに哲ちゃんだったときの凧ちゃんと久美ちゃんにときどき遊んでもらたな。」

「やっぱりそうだったんだネ。でもなんで石川 渉の記憶を吸上げてカレに成りすましたの？」

「それはな…。こつという理由やった。」

ボクは小4のときに死んだんや。元々身体が弱くてな、まあそう永くは生きられんことは自分でもわかつた。死んだ後人は天国に行くんや。これは信じてても信じなくてもいいけどホントや。そしてある時期が来るとまた人として生まれ変わることを命じられる。しかし生まれ変わるときその人はすべての記憶をなくして新しく人生をスタートするんや。

ボクは「もうそろそろ生まれ変わりの順番が来るから準備をしろ」

って命じられて、そして鮎川 渡としての思いに最後の区切りをつけようと光の鏡を見たんや。そこにはその人の人生の中で一番思い出に残った様子が映る。そしてボクの思い出に一番強く残ったんは、キミと久美ちゃんやった。

そのときボクはキミがホントは女性であり、女性として新しく生活を始めたことを知ったわけや。

ところが、この鏡はある一定の未来まで見えるんやが、キミはその後の人生の中で男として生活していたときの思い出が抜けきらずに、身体は女であるのに男と女の心の間を揺れ動いてしまい、最後はとも悲しいことになってしまっんや。

そこでボクはボクを生まれ変わりを命じたある人に頼んだんや。」

「頼んだって？何を頼んだの？」

「ボクに少しだけ時間をくれってな。そしてその時間を使ってボクは凜ちゃんに自分が女であることを自覚させようとしたんや。」

「アタシがアナタのことを好きになって、女として生きていけるようにしたってこと？」

「まあ、単純に言えばそういうことやな。ただ実際はそう単純なことじゃなかったがな。」

「そうだヨツ！ そんな単純なことじゃないっ！ アタシはアナタを好きになって、でもアナタが急にいなくなっ。そんな単純なことじゃないっ！！」

「ゴメンな…。 たしかにそうやな。 でもボクには迷いはなかった。 そうしなければキミは…。 」

「え、え…ん、えええん、えー…えー…ん…えー…えー…ん…」

(涙が…止まらないよお。)

「キミは女の子や。 人間は身体が女やから心も女なんや。 そして女であるということは男の人を愛することによって命を次の時代につなげるんや。 」

「じゃあ、アナタはアタシにアナタ以外の男の人を好きになれって言うの!？」

「ボクはキミに他の男を好きになれとは言わへん。 キミがキミ自身で自然に愛する男の人と結ばれるんや。 それを理屈で邪魔しちやいかん。 」

「ワタル…君」

「それが誰かはボクはわからん。 でも凜ちゃん、キミがこの人の子供を産みたいと思える人を自分の心で見つけるんや。 」

「自分の心で？」

「そうや。 頭で考えるんやなしに、心で見つけないと…。 」

「ねえ、ワタル君？」

「ん？なんや？」

「もう…会えないのかな？」

「スマンな…。もう会えへん。ボクはそろそろ生まれ変わるときや。でもこっちの「とき」は凜ちゃんたちがいる時間とはかなり違うからな。それは5年後かもしれへんし、10年後かもしれん。」

「最後にひとつだけ教えて？」

「ウン。ええヨ。」

「アタシと一緒に過していたとき、ワタル君はアタシのことをホントに愛してた？」

「心から…愛してた。キミのホントの相手がボクだったら良かったの…って何度思ったかわからへん。そして今でも愛してるヨ。」

「アタシも…アタシもアナタのこと…愛しています。ワタル君、ワタル君、ワタル君…。」

そして

ボクのワタルの姿は消えた。
ワタルはボクに心を与えてくれたんだ。

そして、もう…ボクとは言わない。

アタシは、いつかどこかでアナタにまた会えるって信じてるヨ。
ね、アタシのワタル君。

第五十七話 新しいスタート

「2人に信じてもらえるとは思ってないけど……。」

その週の日曜日、わたしは久美ちゃんとワタルAを駅前の喫茶店に呼んであの公園でのワタルとの最後のお別れのことを話した。

久美ちゃんとワタルAはアタシが話し終わった後、しばらくは言葉がみつからない様子だった。少ししてワタルAはカップのコーヒーを一口飲んでこう言った。

「ボクは信じる。 鮎川とは少しの間だけど同じクラスやった。アイツとはあんまり話をしたことはなかったし遊んだこともなかった。でもヤツは本当に心の温かい人間やったと思う。アイツが病院に入院していて見舞いに行ったときな、アイツはボクたちを心配させんよういつも「もうすぐ退院してみんなと遊べるから」って言うとなつた。アイツは自分がもうそれほど永く生きられないってというのが判ってたと思うで。」

そして久美ちゃんも

「アタシも信じるヨ。 それとアタシは凜がワタル君が突然いなくなったことへの悲しさがすごく判る。でも凜がワタル君を好きになった気持はこれから先もずっと忘れずに心に大切にしておいたほうがいいと思う。」

「2人ともアリガト。 アタシもワタル君がアタシにしてくれたことはカレの優しさだって思ってるから。最後にカレに聞いたの。」

「2人で同じ時間を過してたとき、アナタはアタシのことを愛してた？」って。そしたら…今でも愛してるって…。うう…ううう…」

「…凜。この3人はずっと覚えていようヨ。カレが確かに存在して、そして小谷 凜っていう一人の女の子を愛したんだってこと…ネ？凜。」

「ウン。」

「そういえばワタル君学校はどう？」
わたしは話題を変えてワタルに尋ねた。

「ああ、同じ工業やけど、けっこう真面目なヤツが多い学校でな、勉強ついてるのが大変やネン。」

「凜、気がついた？」

久美ちゃんが意味ありげな質問をする。

「何が？」

「フフフ…。」

「ああ！そういえば。ワタル君タバコ吸ってないよネ？止めたの？」

「久美ちゃんに約束させられたんヨ。あと勉強とな（笑）」

「勉強って？何の約束したの？」

「フフン。あのねえ…。」

久美ちゃんは悪戯そうな眼をする。

「毎週アタシがカレに課題を出しているの。中1の教科書から戻って英語、数学、国語の3教科。とにかくこれから1年間で基礎をしっかりさせて、新しい高校の授業にちゃんと着いていくこと。それでもしできたら、大学を受けられたらって思ってるのヨ。」

「へー！じゃあ、久美ちゃんがワタル君専属の家庭教師だネ。」

「そういうこと！ただしアタシは厳しいわヨ（笑）飴と鞭でビシビシやるつもりだから。」

「アハハ！怖そう（笑）」

「怖そうじゃなくて、ホンマに怖いネン！」

「でも飴は何なの？」

久美ちゃんにそう質問すると少し間が悪そうに久美ちゃんはごまかす。

「あ、えー…。アハハハ。」

（よかったネ、ワタル。キミの小5のときからの想いが叶いそう
だヨ。）

そしてそれから数ヶ月

新しい春がまたやって来た。

わたしは高等部2年生に進級した。

2年のクラスではみーちゃんとは離れたけど、ミコとは相変わらず同じクラス。

青葉学院高等部は青葉学院大学の附属校であり、高等部卒業生のほとんどが青葉学院大学に進学する。

進学する学部は本人の希望と3年の定期試験そして年2回の内部進学テストの成績で決められるけど、それまでに自分なりに行きたい学部を考えておかなければならない。

「凜はどの学部を考えてるの？」

お昼ごはんを食べているときミコがアタシに聞いてきた。

「うーん…理工学部だけはないかなあ（笑）　ミコは教育学部でしょ？」

「ウン。アタシはそのつもりだよ。絶対に小学校の先生になるんだあ！」

「ミコはずっと努力してきたんだもん。きっと生徒に好かれる先生になれるって思うヨ。」

「エヘヘ…。アリガト。でも凜も先生向きじゃないかなって思うけど。」

「先生もステキだなって思うけど、じつはアタシ国際関係をもっと勉強したいなって思うの。」

「凜、そういうのって興味あったんだっけ？」

「今まではあんまりなかったんだけどね。でも…これから勉強したいなって。」

「そっかあ。じゃあ、国際政経学部かな？」

「できればネ。でももっと成績あげないと（笑）。」

わたしは新しいスタートをするってカレと約束した。でもカレのことは一生忘れたくない。だからワタルが残した想いを少しだけでも継いであげたかった。

第五十八話 ミコとアタシ

6月に入ったある日曜日

久しぶりにミコと2人で渋谷に買い物に出かけた。

アタシとミコは、チア部と水泳部で部活が違う。

高校に入学して1年のときラッキーにも同じクラスになれたけど、放課後のすれ違いで以前ほど一緒にどこかへ行ったりすることがなくなっていた。

2年生になってまたまたラッキーにも同じクラスになれて、そのときは2人で手を取り合って喜んだ。

そこで今日は久しぶりに2人でデート。

ミコはアタシが女性として生活をするようになって、幼馴染の久美ちゃんを除けば一番最初にできた女友達だった。それ以前にも男子としてミコと接した機会も少しはあったけど、学年でも有名な美人で、成績もトップクラスだったミコは異性としての意識よりただ眩しい存在だった。

しかし女同士として友達になったミコは、それまでのアタシのミコに対する先天的なイメージを真つ向から否定した（笑）

まずミコは自分自身にすごく厳しかった。

そして夢を叶えようと努力を惜しまない女性だった。

中学3年の初め頃にこういうことがあった。

ミコはフとしたことが切っ掛けで同じクラスの一人の女子と喧嘩し

たことがあった。

そのとき彼女はミコにこう言った。

「ミコは可愛いし勉強しなくても頭がいいしネ。なんでも揃っているからアタシみたいな普通の人のことなんてわかんないんだヨ！」

それを聞いたミコは真っ赤になってポロポロと涙をこぼした。

「アタシは自分で自分が本当に可愛いなんて思ってないし、不安なことはいっぱいあるんだヨ！勉強だって努力もしないのに成績がいい人なんて絶対にいないヨ。」

ミコはとても多感な娘だったから、きつとホントの可愛さっていうのが判っていたんだと思う。

またアタシは前にミコにこう聞いたことがあった。

「アタシのことって夏休みが終わる前に久美ちゃんに聞いていたの？」

するとミコはそんなこと関係ないんじゃない？という感じでこう言った。

「凜のことは久美子から聞いてたヨ。でも久美子には何も頼まれてないし、アタシもあの娘に頼まれたから凜と友達になっただけじゃないし。アタシと凜がお互いに友達になりたいって思ったからなれたんじゃないかな。」

その答えはアタシにとって一番嬉しかった。

なぜならアタシはミコとずっと対等な友達でいてほしかったからだ。

中3のときの山岸先生はそんなアタシとミコに卒業のときにひとつ

の言葉を贈ってくれた。

「2人がお互いに悪いところはちゃんと叱りあえるような関係になってほしいわ。そして相手から叱られたことを謙虚な気持で聞ける関係。相手はアナタのことが憎くて叱っているんじゃない、本当に友達として大切な人だから叱るんだってわかってほしいてことヨ。」

もしかしたら、いつかアタシがミコと意見が合わなくなって喧嘩することがあるかもしれない。

それはお互いが別の人間なんだから当然だって思う。

でもあのときにお互いで友達になりたいって気持があったなら、きっと仲直りできる友達になれるはず。

アタシはミコとはそんなずっとずっとお互いが友達で居続けたいて思える関係でいたかった。

お互いがおばさんになって、そしていつかお婆ちゃんになっても、一緒にいて心地よい友達で。

お昼時

「ミコ。何か食べたいものある?」

「あ、この前アタシの食べたいものにしてもらったから、今日は凜が食べたいもの言って?」

「じゃあ…あ、スペイン坂にね美味しいサンドイッチのお店があるの。そこ行ってみない?」

「いいネー!大賛成。よし、行こー!」

こんな具合にアタシとミコの間では物事が決まっていく。

「ホントだネ。美味しー！ ヨーグルトもフルーツたくさんだし。凜、いいお店知ってるネ。」

「エへへ…。良かった。」

「あ、ところでさあ、凜は井川さんと安田君が付き合ってるって知ってた？」

「え！ホント？アタシぜんぜん知らなかったよあー。でも中3のときみんなでやったクリスマスパーティーで最後のチークのとき井川さんから安田君のこと誘ってたしネ。ちよつといい感じかなって思ったりはしたんだけど。」

「あー、そういえばそうだったよネ。じつは、この前学校の帰りに偶然電車の中で2人に会ったのヨ。」

「あれ？井川さんと安田君って違う高校だったよネ？」

「ウン。井川さんは都立戸川で安田君は都立白洋だから。でも電車の線は同じだから、帰りはよく一緒に帰るらしいヨ。それで、

そのときは「久しぶりー！」みたいな感じで話したんだけどね、その日の夜に井川さんから電話があつて、色々聞かせてくれたのヨ。」

「そうなんだあ。で、何聞かせてもらったの（ワクワク 笑）」

「フフフー。あのね、まずどっちが告白したのかヨ。」

「エ、それはやっぱり安田君のほうじゃないの？」

「ウン。それが井川さんのほうなんだって。井川さんが自分で言ってたから。」

「そうなんだあ！エー、なんかびっくり。」

中3のときはミコと張る学年女子で1、2を争う秀才。

でもメガネを外したときはアナウンサーの小林麻耶に似た笑顔美人。そんな井川さんとカメラオタクの安田が？

ミコは続けて話してくれた。

「それでね、安田君のどこに惹かれたの？って聞いたのヨ。」

「ウンウン。何だって？」

「ホラ、安田君は前からずっとカメラ好きじゃない？」

「ウン。小学校のときからずっとだヨ。」

「エ、そうなんだ？　それでね、高校に入学してから学校の帰りによく一緒に帰ってて、それでカメラのことをいっぱい聞かせてもらったんだって。安田君はただカメラが好きだけじゃなくって、いつか自分のカメラで普通の人知らない世界中の色々なことを撮って、それで自分の書いた記事を載せて本を出したいんだって。」

「へエ…。アイツってそんなすごいこと考えてたんだ。」

「そうらしいヨ。だから高校卒業した後もカメラとかの専門学校じゃなくて世界中の文化とかを勉強できる大学に行きたいんだって。」

「わあ、すごいなあ。そんなことまで…。」

「それでね、井川さんはそういう安田君を応援してあげたいって気が強くなって、気がついたら好きになっていったって。」

「そっかあ…。でも井川さんのそういう気持わかる気がする。ア

イツってね、アタシが男友達だったときもそうだったけど、すぐくまっすぐに気持が優しいんだ。」

「あ、わかる気がする。井川さんと安田君ってかなりお似合いのカップルになりそうだよネ。」

（みんな、それぞれ愛する人が見つかっていいな。）

アタシはワタル君のことを忘れるつもりはないけど、ワタル君がアタシにくれた優しさを絶対に無駄にしないつもり。

だから、もしアタシのことをホントに心から愛してくれる人がいたらいいなっと思う。

「凜は彼氏とか作らないの？」

ミコはズバリと聞いてきた。

「うーん…（笑） 作るっていうか…アタシは…。」
言葉が見つからない。

「凧はさあ、昔から自分でどこか引いちやうみたいなどころがある
じゃん？ 大切なところもそれでいいのかなって思うんだよね。」

「なんかありがたいなあ。」

「ありがたいって？」

「こんな風に言ってくれるミコの存在がすごく嬉しい。」

「アハハハ！ アタシも凧じゃなかったらきつと言わないで置くと
思う。そのほうが波風立たないしね。でも凧だけはい心配しちや
うんだ。ゴメンね。」

「アタシはホントに嬉しいんだヨ。」

「じゃあ、凧のその言葉に乗って聞いちゃうけど、今好きな人は
いますか？」

「うーん……。好きな人啊…。」

「じゃなかったら、気になる人とか？」

（あれ……………？）

自分ではワタルを思い浮かべたつもりだったが。
でも、アタシの心の中に一瞬浮かんできたのはなぜか笹村先輩だっ
た。

ワタルはもういない人だから？
アタシってそんなに薄情だったの？

自分でもよくわからないけど。

「変な答えかもしれないけど、好きかどうかよくわからないの。」
ミコにこんな曖昧な返事しかできない。
何でも話せるって思ってるミコなのに、アタシはなぜか自分の気持ちを隠そうとしているんだろうか。

「そっか。でもそれが今の凜の正直な気持ちかもネ。でも一瞬心に浮かんだ人はいたんでしょ？」

「ウン…いた。」

「フフフ…。当ててやるうか？」

「エッ？（ドキッ…）」

そしてミコは少し悪戯っぽい目でアタシを見て言った。

「その人は凜より年上ですネ？」

「エ、あ…ウン」

（なんでわかるの？）

「その人は高等部の人でしょ？」

（あ〜〜、やっぱり知ってるんだ？）

（みーちゃんくらいしかアタシと笹村先輩の繋がりが知らないのに、みーちゃんめえー！）

「ミコ、もう知ってるんでしょ？」

「アハハ！ゴメン、ゴメン。 笹村さんて人でしょ？2人で去年入学前に渋谷に制服買いに来た時のナンパで助けてくれたひとだよネ？」

(やっぱり。。。)

「みーちゃんから聞いたの?」

「あ、ウウン。みーからは何も聞いてないよ。」

「じゃあ、何で?」

「じつはさあ、部活の帰りに駅でバッテリー会っちゃったんだ。アタシは全然顔覚えてなかったんだけど、笹村さんがアタシのこと凜と一緒にいた娘って覚えてて。」

「あ、そうなんだ? でもそれでなんで?」

「あ、ウウン。そのとき途中まで一緒に帰ったんだけどさ、凜のこと聞かれちゃってネ。」

「エ、なんて聞かれたの?」

「そんな深いこと聞かれたわけじゃないけどね。凜の彼氏ってどういう人なのかな? って聞かれた。」

(あ、そっか…。多分クリスマスパーティーのときのチークで躊躇ったから、アタシに好きな人とかいるって思ってるんだろうな。)

「それでなんて答えたの?」

「知らないって答えておいたヨ。その方がいいでしょ?」

さすがミコだっと思った。

アタシに逃げ道を作っておいてくれたんだ。

「あ、ウウン。」

「でも凜はどう思ってるの?」

「うーん…ホントにわかんないんだよね…。好きとかそういう気持ちかどうかもわかんないし。それにアタシそこまであの人のこと知らないしネ。」

「そっかあ。最近なんか、凜、遠い目をしてたっていうか、気がつ

くとポーっとしてるときあったからさ。もしかしてそっちのほっじやなかなって思ったのヨ。」

(ミコ、するどいなあ…)

「なんかあったらちゃんと言ってネ。相談にのるから。」

「ウン。アリガト。ミコにはちゃんと言っから。」

かといって、ワタルのこと何も覚えていないミコにそのこと話してもきつと信じてもらえないだろっなあ…。

でもミコのそっつい気持ちはホントに嬉しいな。

第五十八話 ミコとアタシ（後書き）

末尾の話の流れを変えました。

第五十九話 ワタルの願い

夏休みに入ったある日の夜。

ベッドで熟睡するアタシの夢の中に突然現れたのはワタルだった。

「凜ちゃん、凜ちゃん…。」

ハツとして目を覚ますと、机の椅子のあたりがボウツした光が揺らめいている。

「ん…なに？」

するとその光は次第にまとまっていつて実体化して人の形になった。

「ワ、ワタル君!？」

「凜ちゃん。」

「どうしたの？ キミ、生まれ変わったんじゃないの？」

「じつは大変なことが起きたんや。」

「大変なことって？ どうしたの？」

ワタルはアタシの椅子に腰を降ろすと

「ホウ…」とため息をついた。

「まさかとは思ってたけど…。」

「まさかって？」

「スマンがとにかく今からすぐに『あの公園』に来てくれんか？」

公園の外では今のボクの実体化は長いことたんのや？」

「い、今から？」

「そうや。久美ちゃんと石川ワタルも呼んでる。3人に話をしたいことがあるんや。」

いつもひょうひょうとしていたワタルがこれだけ真剣な顔で話している。

ただ事ではない、とアタシは思った。

「わかった。じゃあすぐに着替えるから。」
「ウン。スマンな。」

そう言ってアタシは着ていたパジャマの上着を上にもち上げようとすると
ワタルが

じいじいじいと見てる。

アタシはワタルのことを睨んで言ってやった。

「コラッ！ワタル君、女の子の着替えを見るんじゃない！アッチ向いててヨ！」

「ワハハ！スマン。つい見とれてしまったワ（笑）」
そう言ってワタルはクルツと後ろに向いた。

「まったく相変わらずだねえ、キミは（笑）」

アタシは白のカットソーとデニムのミニスカートを身に付けて、そとと階段を降りた。

時間は午前2時。親だつてぐっすり寝ている。

そとと玄関のドアを開けて外に出ると街灯の明かりだけがポツンポツンと点いてて誰も歩いていない。

久美ちゃんと3人で遊び、そしてアタシとワタルの思い出の公園。そこはウチから歩いて10分ほどの距離にある。

その小さな公園の中にあるのは赤いベンチが1つにブランコが2つと鉄棒と小さな砂場だけ。

公園の周りに沿って櫟の木が植えられている。

公園に着くとすこにはすでに久美ちゃんとワタルAの2人がベンチに座っていた。

久美ちゃんはアタシの姿を見るなり

「凜！やっぱり夢はホントだったの？　凜もワタル君に呼ばれたんでしょ？」

と尋ねてきた。

「ウン。2人も呼んでいるからすぐに来てほしいって。」

久美ちゃんはTシャツにジーンズに着替えて、しかしワタルAはパジャマ姿。

「正直ボクはまだ信じられん。そんなことがホンマに……。」
するとそのとき

薄い光に包まれたブランコがキィ…キィ…と小さく揺れ始めて、それは次第にワタルの姿に実体化していった。

「オマエ…鮎川か？」

ワタルAが驚きのあまりようやく言葉にできたのはそれだけだった。

「石川、久しぶりやな。久美ちゃんも、元気そうや。」

こういうときは女性のほうが気持ちが悪く座っているんだろうか。

久美ちゃんは落ち着いた顔でワタルに話しかけた。

「ワタル君、久しぶりネ。凜から話は聞いたワ。」

「スマンなあ、久美ちゃん。色々迷惑かけてしもつた。」

「アタシは迷惑なんて思っていないヨ。」

「そう言ってもらえるとありがたいワ。」

そしてようやく落ち着きを取り戻したワタルAがワタルに話しかける。

「鮎川、ボクはオマエの代わりにはなれへんが…。」

ワタルはワタルAの方を見て優しく微笑んで言った。

「わかつとる。キミは久美ちゃんのことをずっと想ってきたんやろ。久美ちゃんかて今の心の中にはキミの存在が段々大きくなってきてるみたいやで。」

「エツ、ホンマか?」

ワタルAはびっくりして久美ちゃんの方を見る。

久美ちゃんはワタルのその言葉に真っ赤になって慌てた様子。

「ワ、ワタル君!」

「ワハハ!スマン、スマン。でもときの流れは2人の心をつなげてくれたんやないかな。石川、これから先ずっと久美ちゃんのことを守ってやるんやで。」

「ところで鮎川、オレたちは夢でオマエに呼ばれてきたんや。その理由を教えてくれんか？」

「ウン。そのことや。じつはな、ボクが石川 渉として実体化していたときの心のエネルギーがこの世界に一部分離して残ってしまっただことがわかったんや。そのエネルギーは前のボクの姿を実体化してまたこの世界に現れとるらしい。」

そいつの心の中には凜ちゃん、キミへの想いがハッキリ残っていて、また周囲にいる人の記憶を操作してその存在を復活させ、キミに近づくことが目的だと思う。」

「じゃあ、ワタル君が戻ってくるってことなの？」
アタシはワタルにそう尋ねた。

「違うっっっ！」
ワタルはびっくりするような声で答えた。

「それはもうボクやない。凜ちゃんはボクと結ばれてはあかんのや！凜ちゃんにはちゃんと結ばれる相手がある。」

「ワタル君…。」

「ええか？そいつは凜ちゃんを好きにさせて凜ちゃんの心を奪おうとしてるんや。だから注意してほしい。久美ちゃんと石川をここに呼んだのは、そいつは2人にだけはもう記憶の操作はできなんからや。」

石川、久美ちゃん頼む！ 凜ちゃんの力になってやってくれ。」

「鮎川、安心せーや。オマエの代わりにはなれんけど、凜ちゃんはボクにとっても大切な友達や。」

「そうだよ。ワタル君、アタシたちは凜とアナタの友達だから。」

「2人ともアリガトな。 そいつもそう長い間エネルギーがもつはずもない。実体化していられるのは数ヶ月間くらいのはずや。ボクももう生まれ変わりのときが近くなって力が衰えてきてしまった。スマンが、凜ちゃんを…頼む。」

そう言っつてワタルはまた姿を消してしまった。

久美ちゃんはアタシの方を振り返ると

「凜、とにかく偽ワタルがいつ現れるかわからないけど、ワタル君に頼まれた以上なんとしてもアナタを守って見せるわ。」

「ボクもできることは何でもやる。ボクは鮎川の気持を忘れん。」

いつ現れるかわからない偽ワタル。

アタシは言葉にできない不安が心の中で持ち上がってきているのを感じていた。

第六十話 ときは戻らない

時間は午前3時近かった。

「とにかく今日は帰ろう。ボクはオールナイトは慣れっこやけど、女の子がこんな夜中に外にいちゃ危険やし、それにそのうち2人の親だつて起きてくるやろ。ボクが送ってくから。」

公園までの道程はアタシの家が一番近く、その先に久美ちゃんの家がある。

ワタルはアタシたちを順番に家まで送ってくれた。

「じゃあ、凜。明日から周りの様子に変化があったら、アタシとワタル君に必ず連絡するのヨ。いいわネ?」

久美ちゃんは帰りしなに何度も確認をしてアタシと分かれた。

親に気付かれないように部屋に戻りそして再びパジャマを着てベッドに入った。

横たわって天井を見上げてもまだワタルの姿が残像に残っている。

「ワタル君…。ニセモノでもいいから…なんて、考えちゃいけないんだよネ…。」

ツウ……………と頬にひとすじの涙がつたう。

そしてアタシはまた眠りに落ちていった。

それから数日間は何の変化もなかった。

何事もない日常の繰り返しで、夏休みも残り少なくなってきた頃にはアタシも少し溜まり気味の宿題に、ミコと区の図書館で奮闘していた。

「フウ……」

ペンを置いてアタシが小さくため息をつく。

「ミコオ、どこらへんまで終わった？」

「時事英論文はあと少し。あー、夏休みもあと残り1週間かあー！どっか行きたいねえ。」

「ホントだねー。そういえば中学のときのみんな元気かなあ……」

そのとき、アタシがポツンと言ったその言葉にミコがすばやく反応。「ねえ、久しぶりにみんなと会わない！？井川さんと久美子呼んで4人でどっか行こうよ？」

「あ、さんせー！女の子だけで女子会やろう！」

アタシたちは宿題が一段落したところで図書館を出て、ケータイ電話で井川さんと久美ちゃんに連絡を取った。

「わぁー！ひさしぶりー。　女子会？　ウン、いいヨ。」

2人とも大喜びで大賛成。

そして女子会の実施は3日後の12時集合に決まった。

場所は駅前のパーティールーム
アリス。

ここは1階にレストランも併設しているので、ランチなどのメニューも豊富で美味しい。

そして、ここはアタシたちが中3のときにやったクリスマスパーティーで使った場所。

アタシとワタルとの思い出の場所でもあった。

当日約束の時間の10分前にアリスの1階にあるレストラン。

すでに井川さんと久美ちゃんが席に着いてコーヒーを飲んでいた。そこにアタシとミコが到着。

「ひさしぶりいいーっ！」

「ホント、小谷さん卒業以来じゃない？」

アタシと井川さんとは本当に久しぶりで卒業から1年半ぶり。お互いが手を取り合って再会を喜ぶ。

「ね、でもさあ、考えてみるとこのメンバーってけっこう不思議な繋がりなんだよネ。」

ミコが思いついたように言った。

「あ、そうだよねえ！　まずさあ、凧とミコと楓ちゃん（井川さん）は中2〜3のクラスメイトでしょ。凧とミコは高校も一緒で。次にミコと楓ちゃんとアタシ（久美ちゃん）が中1のときのクラスメイトで。それでアタシと凧は幼稚園から小学校のときの幼馴染で。」

「アハハ！　なんかゴチャゴチャしてるけど、みんなそれぞれつながってるってことだよネ？」

「今まであんまり意識したことなかったけど、そういえばそうだよネ。このメンバーってそれぞれ誰かと必ずつながっていたんだ。」

「あ、そういえば井川さん。安田君は元気？」

「元気だヨー！　この前ね、高校の写真部の合宿で北海道行ってきたんだって。」

「へえー！　すごいネ。　そういえば久美ちゃんは安田君と同じ白洋高校だよネ？」

「ウン。ときどき学校でみるヨ。校内の展示とかにもよく出してるし。」

「ホント？　今度見に行っちゃおうかな？」

「あ、来なヨー！　楓ちゃん見に来たらきつと喜ぶヨ。」

女の子同士の話はドンドン広がり話は尽きない。

「そついえばさあ」

井川さんがフツと思い出したようにアタシに聞いてきた。

「ウン。何？」

「石川君、胃潰瘍で入院してたんだって？ この前三丁目の病院の前でバッタリ会ったヨ。最近やっと退院したって。」

「エツツッ！！！」

その言葉にアタシと久美ちゃんは驚きを隠せなかった。

「どうしたの？ 凜、アンタ自分の彼氏の退院知らないわけじゃないでしょ？」

「ミコまでが…。」

「あ、ウ、ウン。もちろん知ってたヨ。」

「そうか…とうとう…。」

「凜…。」

久美ちゃんがアタシの方に目をくばらせた。

「ニセワタル君、キミはもういない人なんだヨ。」

「アタシはアタシの愛した『ワタル君の心』を守るためにもキミに向かい合わなくちゃいけないんだ。」

第六十一話 インターセプト

夏休みが終りいよいよ今日からまた学校が始まる。

アタシはいつもより15分ほど早く家を出ることにした。

渋谷駅から宮益坂をあがったところに青葉学院大学の校舎が見えてくる。

その角を右に曲がって学校の塀沿いに200mほど歩けばアタシの通う青葉学院高等部がある。

「おはよー。」

「あ、久しぶりいー！」

「ねえ、宿題全部終わった？」

「夏休み中どこ行っただの？」

校舎の至る所に1ヶ月間の思い出を語り合う声が聞こえてくる。

教室に向かう廊下でミコに会った。

「やつほー！凜。」

「ミコ、おはよー！」

そして2人でペチャクチャと話しながら教室へ入っていく。

「あ、ミコ、凜。」

「わあ、チャコ真っ黒じゃん！」

「エヘヘー、2週間沖縄行ってたのヨ。」

ワイワイガヤガヤ…。
次第に集まってくるクラスメイトたち。

そのときアタシはある異変に気付いた。

(あれ……。おかしい。)

たしか窓際の列は机が9人分だったはず。
なのに、今はなぜか10個の机が並べられている。
窓際は男子の列。
今席に座っているのは、風間君、江藤君、赤岩君、島原君、そして
飯島君の5人。

ハツツツ!

江藤君と赤岩君の間!!

何で空いてるの!?

そうだ!!

夏休み前は江藤君のすぐ後ろは赤岩君だったはずだヨ!!

「ねえ、チャコ…。」

「なにヨ?」

「あのさあ…窓際の席の江藤君と赤岩君の間…誰が座ってたっけ?」

チャコはアタシの指差すほうを見て前から順番に数え

「ああ、石川君でしょ?凜、アンタ、自分の彼氏の席忘れちゃった

の？（笑）」

やっぱり……！！！！！！！！

そしてそのときは来た。

「オーースッ！」

「ヨオ、ワタル。久しぶりじゃん。」

「オマエ、夏休み、胃潰瘍で入院してたんだって？」

「そうじゃん。もうホンマ辛かったでー！」

この人が……ワタル。

優しいような眼差し。

温かい声。

そしてアタシが飛び込んだ胸。

カレはあのとときのワタルそのままだった。

「ヨオ、凜ちゃん。オハヨーさん。ミコちゃんとチャコちゃんもついでにオハヨーさん。」

「アタシとチャコはついでになのー？（笑）」

「ワハハ！いや、スマン、スマン！ついな。」

アタシはその場に立ち尽くしてカレを見つめた。
アタシの心はすごい揺れた。

「どうしたの？ 凜。」
「チャコがそういうアタシを見て不思議そうに尋ねた。」

「あ、ウウン。な、なんでもないヨ。　ワタル君、オハヨ。」

「ああ、オハヨーさん。」

ワタルはアタシにあの頃と同じ笑顔で微笑みながらそう言った。
そしてワタルは自分の席に着き、近くに居る男友達たちと話し始める。

ミコやチャコたちと話しているアタシはときどきチラチラとワタルの様子に目をやるけど、カレは『あの頃』とまったく何も変わっていないかった。

その日、アタシはワタルよりも早く学校を出て、地元の駅のところ
でカレを待ち伏せした。
まずカレがどうやって現れたのかを知りたかった。

少し離れたところで、誰かと待ち伏せしているような感じで改札の
様子を伺う。

そして30分ほどしたとき、ワタルは現れた。

カレはそのまま駅を出て元住んでいた社宅の方に歩いていく。
アタシは30mくらい距離を置いてカレの後を追った。

カレがちょうど『あの思い出の公園』の辺りに差し掛かったとき
ビューーーーー！

と強い風が吹いて、アタシは自分の髪の毛が顔を覆ってしまった。
そして顔をあげたとき

そこにワタルの姿はもうなかった。

アタシはワタルが居たはずの場所に駆け寄っていった。

（い、いなくなっちゃった…。）

第六十二話 思い出させないで！

その日の夜

アタシは久美ちゃんに電話をしてニセワタルが現れたこと、そして帰り道の公園で姿を消したことを話した。

一通りの話を聞いた久美ちゃんは
「なるほどネ。ということはミコも学校の友達も以前みたいにニセワタルを石川 渉として接しているわけネ？」

「ウン。そうなの。ミコも何の疑いも持ってないし。」

「そう…。でも、彼女だった凜から見て、ニセワタルとワタル君の違いはどこかにはあるはずヨ。少し時間をかけてでも注意してみて？」

「わかった。じゃあ、また何かあったら連絡するネ。」

そう言ってアタシは電話を切った。

ニセワタルとワタルとの違い。

たしかワタル君はニセワタルが自分の分身だって言ってたよネ。

それにニセワタルが実体化できるのは数ヶ月くらいだって言ってた。そのうち自然にいなくなるんだったら、アタシがニセワタルのことを好きにならないように注意して、時間が経つのを待っていればいいんじゃないかな。

でも、それだったらなんでワタルはあそこまで厳しい表情になったんだろう…。

(うーっ…。)

心の中に何かが引っかかっている。

帰りがダメなら行きで。

次の日の朝、アタシはいつもの登校時間よりも30分早く家を出てあの公園に行った。

ここに居れば必ずニセワタルがどこからか出てくるはずだって思ったからだ。

しかしカレはいくら待っても出てこなかった。

(このまま待つてたら学校に送れちゃう)

仕方がなく、アタシは公園を後にして学校に向かった。

多分カレは今日は学校に来ないのだろう。

そして教室に入ったとき

そこには窓際の席で男友達と談笑するニセワタルの姿があった。

(うそ…なんで?)

アタシは近くに居たマミに聞いてみた。

「ねえ、ワタル君来たのつてすごく早かった?」

「え、石川君? 凜が来た5分くらい前だったヨ。」

カレはもしかして場所を自由に選んで実体化できるのかもしれない。

そのときニセワタルがアタシに気付いて寄ってきた。

「ヨオ、凜ちゃん。オハヨー。」

アタシは引きつりそうになる顔を平常に装って挨拶した。

「あ、ワタル君。オハヨー。」

するとニセワタルはアタシの顔をじつと見つめていた。

「ど、どうしたの？ アタシ、なんか顔についてる？」

「いや、あんなー、じつは凜ちゃんにお願いがあるんや？」

（お願い？ いやいよ作戦に出てきたのかも…。 注意しなくちゃ
だわ！）

「なに…かしら？」

「ホラ、去年のクリスマスにボクにマフラー編んでくれてたやろ？
アレどないなっただんかなあ…思てな。もし、まだ途中まで編んで
んやったら、今年のクリスマスにはほしいなあって。」

マフラー！

何でこの人そのことを知ってるの？

そう。

去年のクリスマスにワタルにあげようって思ってたずっと編んでいた
マフラー。

ワタルがいなくなって今もアタシの部屋に編みかけですっと置いた
まま。

「あ、ああ、ウン。ゴメン。そうだったよネ。今年はあげられると
思っから。」

するとニセワタルは慢心の笑みで言った。

「ホンマか！ いやー、嬉しいなあ。もしかしてボク嫌われたんかなあて思ってたからチョット不安やったんや（笑）」

「そ、そ、そんな…。アタシがワタル君のこと嫌うはずないじゃん。アハハハ！」

アタシは家に帰るとそのまま自分の部屋に行き本棚の上にしたった茶色の箱を取り出した。

そこにはあの頃のアタシがワタルのために毎日少しずつ編んでいた編みかけのマフラーが入っている。

茶色に白のストライプを入れて、WATARUとイニシャルを編みこむつもりだった。

「ハア……………ア。わけわかんない…。」

ニセワタルはなんでマフラーを欲しがるのか。

（でも、この編みかけのマフラーはあげたくないなあ…。）

（これはワタルにあげるために一生懸命編んでいたものだから。）

市販品を買ってきてあげるとかは？

うーん、でも初めて編み物をするアタシが編んだマフラーを市販品で誤魔化したらきつとすぐにわかっちゃうよネ。

それとも編んでいるふりしてアイツが姿を消すまで誤魔化し続けるとか？

でも、周りの人から見ればアイツはずっといたわけだから、アタシって去年の夏からもう1年もマフラー1枚編んでることになっちゃ

うんだよネー。

じゃあ…、最初から編む？

うーん…………。

やっぱり最初から作ろう。

もしアイツから「どこまでできたの？見せて。」とか言われたら困るし。

それにワタルに作ったときみたいに丁寧にやる必要はないよネ。

適当に作ればそんなに時間もかからないと思う。

あのときのニセワタルの嬉しそうな顔を思い出すと少し心が痛む気もするけど…。

第六十三話 二人のワタルのご対面

ニセワタルが現れてから3週間が経とうとしている。カレはすっかりクラスの中に同化してしまっていた。

青葉学院高等部ではこの時期に文化祭が行われる。

なんとニセワタルは文化祭の実行委員に参加しバザー関係を仕切っている。

「ハイハイ！このコーナーはなんでも1個百円やでー！ 買ってっ
てー！」

青葉学院には珍しい大阪弁に釣られてたくさんの人がカレの周りに集まってくる。

「ワタル君張り切ってるね。」

ミコが笑いながらアタシに話しかけてきた。

「なんか、高校生やってるより生き生きしてる感じ？（笑）」
アタシはそんなニセワタルを見ると、カレが本物のワタルではないかという錯覚にすらなってくる。

これは後で考えるととても怖いことだって思った。

ニセワタルと一緒に日常を過ごすうちにカレをワタルとして受け入れてしまうそうで…。

でもアタシに何も害を加えていないカレに対し嫌った態度を取ることはできない。

アタシの編みかけのマフラーを欲しがるとカレの目を見ていると何かとても可哀想な気がしてくる。

「凜は12時からチアの演技でしょ？」

「ウン。おまつり広場でやるから見に来てね。」

「もちろん！ そういえば久美子も呼んでるんだよね？」

そう。

じつは今日の文化祭には久美ちゃんとワタルA（石川）も呼んでいた。

ニセワタルの姿を見せるためだ。

もちろん不用意にご対面をさせることはできない。

これはワタル（鮎川）からも厳しく言われていたことだけど、ニセワタルとワタルAを絶対に直接対面させないこと。ニセワタルの自称石川ワタルとしてのアイデンティティを崩してしまうとカレがどんな危険な行動に出るかわからないからだそうだ。だからもしそういう状況になってもワタルAは絶対に自分の素性を名乗らないことと言われていた。

時計を見るとそろそろ11時。

「もうそろそろ来る頃だと思っヨ。正門で待合わせしているからミコも一緒においでヨ。」

「あ、行く！」

正門に行ってみるとちょうど向こう側から久美ちゃんとワタルAが歩いてくるのが見えた。

「久美ちゃん！」

アタシがその声をかけて小さく手を振ると久美ちゃんとワタルAも笑顔で手を振ってくる。

アタシたちは予め相談して、今日の文化祭ではワタルAは久美ちゃんと同じ高校の田中 祐太という男友達ということにしておいた。

「やつほー、凜。あ、ミコ。久しぶりだねー！」

「久美子、ひさしーネ。アレ？こっちは久美子の友達？」

久美ちゃんは少し躊躇いがちにワタルAを紹介する。

「あ、同じ白洋高校の友達なの。凜は前に紹介したよネ。青葉学院大学受験したいそうだから、一緒に来たのヨ。」

「そうなんだあ。はじめまして、藤本 美子です。久美子とは中学時代の友達でミコって呼ばれてますんで、そう呼んでください。」

ワタルAも少し緊張して答える。

「あ、こちらこそ。あの…田中 祐太います。よろしゅう。」

「アレ？ 関西の人ですか？」

ミコの言葉に

ワタルAは少し焦った顔で

「そ、そうです。中学のとき大阪から越してきたんですネン。」

「へえー、じゃあ、ワタル君と一緒にじゃん。もしかして話が合うかもネ。」

「ア、アハハハ！ホントだねー！」

ミコのその言葉にアタシと久美ちゃんはただ苦笑いをするしかなかった。

「あ、凜。そろそろ11時半だよ。着替えなきゃいけないんじゃない？」

「ホントだ。じゃあ、行ってくるから。ミコ、久美ちゃんとワタル… あ！じゃなくて田中君のこと案内してってくれる？」

「ウン。いいけど。ワタル君？」

「アハハ、ワタル君はあっちヨ。じゃあ行ってくるネ。」

アタシは不思議そうな顔のミコを笑って誤魔化して更衣室に向かった。

そしてチアのユニフォームに着替えて、みんなとおまつり広場に集合。

ステージ前にはチア部の演技を見ようと続々と人が集まってくる。その人たちの顔を見るとその中にはニセワタルの姿もあった。

「凜ちゃん、ガンバレー！」

ニセワタルがアタシに声をかける。

アタシはニコツと笑ってカレに小さく手を振った。

「さて、それではお待ちかね！ 青葉学院高等部の誇るチアリーダーチーム、TITANSの登場です！ 大きな声援をお願いしまーす！」

司会の人の挨拶でチア部22人の女の子たちがステージに上がる。

まずは軽快なポップのリズムでダンス。
そしてスタンツの演技へと移っていく。

ワアアアーーーーー！

大きな声援の中、リーダーがマイクを片手に順番にメンバーの紹介。

「エー、続きまして2年生。我がTITANSの中でもマスコットの存在。小谷 凜ちゃん！」

ワアアアーーーーー！

アタシは少し照れながら一歩前に出て声援に手を上げて答えた。

「リン、リン、リンちゃんーーーーーん！」

ニセワタルが大声で叫んでいる。
は、恥ずかしい…（笑）

そして、そのニセワタルの姿を少し離れたところで久美ちゃんとワタルAが見ているのがわかった。

演技が終わると、アタシはユニフォームのままウィンドブレーカーを羽織って久美ちゃんたちのところに戻った。

「凜のチアユニ初めて見たヨ。可愛かったネー！」

「ホンマやなー。こんなに女らしくなってるなんてびっくりやわ。」

ワタルAのその言葉にミコは意外そうな顔をして尋ねた。

「エ？ 田中君は凜のこと昔から知ってたの？」

「エ？ い、い、いや。ホラ、前に久美ちゃんに凜ちゃんのことを初めて紹介してもらったとき、彼女ジーンズにTシャツでボーイッシュな格好やったさかいにな、ずいぶんイメージ違ったなあって。アハハハ。」

ワタルAはそれを必死に取繕った。

「ふうん…。」

ミコはどうも釈然としないような顔。

「アンタ、バカ…。」

久美ちゃんはワタルAのわき腹を小突いた。

「ナハハ…。」

するとそのとき

「凜ちゃん、頑張ってたなー！」

なんとニセワタルがアタシたちに寄って声をかけてきた。

「あ、えつと…。」

「やあ、久美ちゃんも来てたんか？」

「ワタル君、ひさしぶりネ。」
久美ちゃんは落ち着いて答えた。

「アレ？こつちは？」

ニセワタルは久美ちゃんの隣にいるワタルAの姿を見て久美ちゃんに尋ねてきた。

「アタシの同じ高校の友達で田中 祐太君ヨ。 今日、凜に誘われて一緒に見に来たの。」

するとニセワタルはワタルAの方に向かい

「はじめまして。石川 涉います。 久美ちゃんや凜ちゃんと同じ小学校だったんや。」

ワタルAも度胸を据えて答えた。

「はじめまして。田中 祐太です。久美ちゃんと同じ高校です。」

ニセワタルは意外そうな顔をした。

「アレ？ 関西の人でっか？ ボク、大阪ですネン。」

「そうなんやあ。ボクも大阪やで。」

「へえー！どこでっか。ボク、天王寺区や。」

「ああ、ボクは…中央区です。偶然ですなあ。」

「ねえ、みんなでご飯食べに行こつヨ。大学の学食開いてるから
そっち行かない？」
とミコが言った。

「ウン。そうだね。」

そしてボクとミコと久美ちゃん、その後ろをニセワタルとワタルA
が並んで歩き始める。

第六十四話 ニセワタルの存在

大学の学食に行くと、今日は土曜日ということもあって大学生の数は少なかったけど、その分高等部生はいつもより多くいるように感じた。

「わあー！ 大学の学食ってすごい大きいんだネ！」
久美ちゃんは初めての大学学食にチヨット興奮。

「今日は久美ちゃんと田中君にはアタシが奢るから。好きなのを選んで？」

アタシはそう言ってメニューの並ぶショーケースに二人を案内した。

「わあい。どれにしようかあ」

久美ちゃんは何種類ものメニューを前に迷っている。

そして田中 祐太君ことワタルAは

「やつほー！ラッキーやあ。じゃあ、ボク、このビーフステーキランチにしようかな。」

すると久美ちゃんがワタルAの脇を小突いて言った。

「こらこら、アンタは遠慮ってものを知りなさい（笑）」

「ワハハハ！ダメか（笑）」

「あ、いいのヨ。どれにしても学食なんだから大して高くないし。どれでも好きなもにして？」

あたしがそう言うと

「じゃあ、アタシはこの『青葉通り』っていうのにしようかな。すごく美味しそう。」

「ホウ。確かにうまそうやナ。じゃあ、ボクも同じのにしよう。」
食券を買ってそれぞれのメニューのコーナーに並んでトレーの上に食堂のおばさんが出してくれた料理を乗せていく。

アタシたち5人は空いている一角の席に座った。

「凜たちはいつもこんな学食でお昼食べているの？」

「ウン。アタシとミコはいつもはお弁当だから。一緒に教室で食べる。でも部活の帰りによくここに寄ってみんなでお茶しながら話したりするの。」

「へえー。いいなあ。アタシも大学で青葉入りたいけど、かなり偏差値高いから難しいかなあ。」

「久美ちゃんなら頑張れば受かるヨ。久美ちゃんが青葉に入ればアタシと久美ちゃんとミコでまた一緒に遊べるし。」

「そうだヨ。久美子、がんばんなー。」

アタシたちがそんな話をしていると

「よう、凜ちゃん。久しぶりー！」

フツと声の方を見ると、そこには笹村先輩が友達数人と立っていた。

「あ、こんにちわ。」

「アレ、今日はチアの友達じゃないんだ？」

「あ、はい。こっちの二人（久美ちゃん、ワタルA）が中学のときの友達とその友達。カレ（ニセワタル）は同じクラスの友達なんで

す。」

「そっか。はじめまして、空手部3年のの笹村です。」

ニセワタルは少し怪訝そうな顔をしてアタシに言った。

「空手部とチア部って何かつながりあったかいな？」

「あ、違うの。入学前にね、ミコと渋谷に制服買いに行ったときナンパされて困ってたところを笹村さんたちに助けてもらったことがあったの。その後入学してから廊下でバツタリ会って。」

アタシがそう説明すると

ニセワタルは

「ふうん…。そうなんや。」

と何か心に引っかかるような言い方。

するとミコが横から

「そうだヨ。別にワタル君が心配するような関係じゃないから。」

と言ってくれた。

「もしかして、カレが去年の合宿のとき話してたお土産あげた男子？」

笹村先輩がアタシに聞いてきた。

「あ、…ハイ。」

でもホントはカレではなく本物のワタル君にお土産をあげたはずだった。

「そっか…。」

笹村さんは少し考えたようにそう答える。

「あ、友達待たせてるから。じゃあ、またな。」
そう言っただけで向こうの席の方に行ってしまった。

「ねえ、凜。感じ良さそうな人だね。あの人、凜のこと気になっ
てるみたい？」

アタシの横に座っている久美ちゃんがニセワタルに聞こえないよう
に耳元で囁く。

「エ……。そ、そっかな？（赤）」

「そんな気がする。」

午後からは、ミコはクラス企画の実行委員でそっちに行き、ニセワ
タルはバザーの仕事に戻り、アタシは制服に着替えて久美ちゃんと
ワタルAを案内して校内を回った。

「へえー、やっぱり私立の文化祭って公立のよりずっと大規模だよ
ねえ。」

アタシたちは大学のイチヨウの並木道の途中にあるベンチに腰をか
けるとさっそくニセワタルについてそれぞれの印象を話し合った。

「ところでワタル君。キミの話した感じからカレ（ニセワタル）は
どんな風だった？」

「そうだな……。まず、ボクは鮎川ワタルとは小4以来やから、あんまり細
かい感想は言えんけど、なんて言うんやろ……。男同士で話した印象か
らすると、カレの話の内容はすごく自然に感じたな。凜ちゃんを大
切にしたいっていう気持ちは話の中で何度か出てきた。」

するとワタルAの言葉に久美ちゃんがちょっと考えるように言った。
「あのさあ、アタシはちょっと不思議なことがあるのヨ。 鮎川ワタル君はニセワタルの何をそんなに怖れているかってこと。 つまりニセワタルがワタル君の心が単純に分離してただ凜を慕っている気持から実体化したのなら、その力は数ヶ月程度しか続かないんだから、そのまま適当にほっておいてもいいんじゃないかなって思うのヨ。 でも、あのときの鮎川君の様子では、何かそれだけじゃない気がしたのよネ。」

アタシは久美ちゃんのその言葉にまったく同じ気持だった。マフラーだつてそんなに喜ぶなら編んであげてもいいんじゃないかって思ったし、今ほんの少しだけど、ワタル君の心がそれほどアタシを想ってくれていたなら、最後にカレの想いに応えてあげてもいいのかなってことすら思い始めていた。

ただ、あのときのワタル君はニセワタルを絶対に受け入れてはいけないという感じだった。

それがアタシもずっと心の中でひっかかっていた。

そのときワタルAが

「あのな…」

と思いついたような声をあげた。

「どうしたの？」

「いやな、多分どーでもいいことなんやろうけど…。」

「なに？」

「ニセワタルは自分が本物の鮎川ではないわかって現れたんかなって…思ったんや。話をしてすごく自然やったしな。」

「そうだねえ…。もしわかってなくて、自分が凜の未来を良いほうに変えようとしていた鮎川ワタル君の心のままでいるなら、なんか

かえって可哀想な気もするよね。」

「ウン…。」

「じつは、ボクもヤツと実際会ってなんか可哀想な気持ちになって
るんや。男同士だからよけいそういう気持ちが強いのかもしれんが。」

「

なんか3人の気持の流れはだんだんニセワタルに対して同情的にな
ってきた。

第六十五話 修学旅行1

秋も深まる11月

アタシたち2年生はいよいよ明日から修学旅行。
九州と長崎に4泊5日。

数日前からコツコツと荷物をまとめたり着ていく服を選んだり

「あ、そうだ。久美ちゃんとワタルAにもお土産を買ってきてあげよう。あとは誰かいたっけ？」

そのときアタシの心にフツと思い浮かんだのは笹村先輩の顔だった。ナンパで困つてるところを助けてもらったり、チアの練習中怪我してたときに保健室までおぶって行ってもらったり、本当にお世話をかけっぱなしで今まで何もお返ししていない。

(お土産くらいあげてもヘンじゃないよネ！)

そのとき

コンコンと部屋のドアをノックする音。

「凜、入っていい？」

母親の声がした。

「ウン。いいよお。」

カチャツとドアが開いて、入って来た母親が手に持っていたのはお守りだった。

「お母さん、ウチの学校、ミッションスクールなのに…」（笑）

「まあ、いいじゃない。ポケットにでも入れておけば。神様も2つ持っていればより安全だし。」

「アハハ。でもアリガト。」

「どう？ 持っていくもの全部準備できた？」

「ウン。あとは詰めるだけ。」

「アナタ、日程の最後の方でアレが来るかもしれないでしょ？ ナブキンとサニタリーシートも入れたの？あとお薬も一応持っていたほうがいいわヨ？」

「あ、ウン。それも一応準備しといた。」

「でも、なんか早いわねエ…。」

母親が急にしみじみと言う。

「なにが？」

「時が経つのは早いなあって。アナタもこの前まで中学生で、高校に入ったって思ったらもう修学旅行に行く時期でしょ？ そしたらさすがに大学生になっちゃって、それでそのうちお嫁に行っちゃうのかなあ…って。なんかまだ心の準備ができてないわヨ。」

「アハハハ。そんなのまだまだずーっと先の話だよー。」

「でも、女の子は成長が早いから。いつかアナタが孫の顔見せてくれるのかなあ…ってね（笑）」

「アタシが赤ちゃん産むのかなあ…。」

「お母さんは、産んで欲しいなあって思ってる。それはアナタが女だから。あ、でも結婚前はカンベンしてヨ（笑）」

「ヤダナア（笑）」

「アハハ。でもさあ……。」

「なに？」

「アナタ、今好きな人とか…いる？」

「エ……。」

「こんな話できるのも女同士なんだからだし。いるならいるで別にお母さんは何も言うつもりないヨ。」

「あ~~~~~……。どうなんだろう……。」

きっとワタル君があのままいてくれたら、ウンって言えたと思う。

ニセワタルは今のところ悪い人とは思えない。

でも、もうカレは恋愛の対象にはなれないと思う。

どうなんだろうとはぐらかしてしまったのは、きっとアタシはそのとき笹村先輩の顔を心のどこかで思い浮かべてしまったからだと思う。でも、それがそういう感情なのかは今の自分ではわからなかった。

「まあ、できたら色々相談できる関係でいたらいいなってお母さんは思ってるヨ。」

「ウン。」

そう言っていると、母親はアタシの部屋から出て行った。

そのとき

「凜ちゃん、電話だヨー！」

ドアの向こうから弟の悟の声がした。

「いい？凜ちゃん。」

「あ、ウン。誰から？」

「なんか青葉学院の笹村って男から。どうする？そっちまわす？」
「あ、オネガイ。」

アタシは電話を自分の部屋の子機に回してもらった。

「ハイ。わたしです。」

「あ、笹村です。夜遅くにゴメンな。」

電話の向こうから聞こえてくる笹村先輩の声を聞くのは初めてだった。

「ウウン。だいじょうぶですヨ。明日からの準備していたんです。」

「そっか。もう終わったの？」

「あ、もうほとんど終り。あとはバッグに詰めるだけだから休んでたんです（笑）」

「そっか。よかった（笑）。」

「いやさ、別に用事とかじゃないんだけど、なんか凜ちゃんの声聞きたくなってさ。」

「アン、アタシの声でよかったらいつでもドーゾ（笑）」

「アハハハ！」

「あ、そっか！」

「なに？」

「笹村先輩にお土産買ってきます。何がいいですか？」

「エ、買ってきてくれるの？」

「ハイ。ずっとお世話になってばかりだから。食べるものがないですか？」

「うーん…そっかなあ。じゃあ、もしできたらさ」

「ウン。なに？」

「フォトスタンドをひとつ買ってきてほしいな。」

「あ、ウン。いいですヨ。」

「それでき…。」

「ハイ。」

「旅行から帰って来たら、凜ちゃんと一緒に一枚写真撮りたいんだけど。」

「エ……………」

「あ、いや。記念にさ。ほら、石川君だっけ？ 凜ちゃんに彼氏いるのわかってるから。」

「あ、ああ…。」

「ん？なんかあったか？」

「あ、ウウン。わかりました。フォトスタンドですね。アタシが一番気に入ったのを笹村先輩に買ってきます。」

「ホント！いや、嬉しいなあ。あ、ゴメンな。」

「ウウン。楽しみにしてくださいネ。」

電話を切った後、アタシはしばらく考えた。

（ねえ、ワタル君…。）

（アタシはアナタ以外の人を好きになっちゃうのかな？）

（アナタとのことはすべて思い出になっちゃうのかな？）

第六十六話 修学旅行2

いよいよ今日から修学旅行。

ミコと駅で待合わせをして集合場所の東京駅に向かった。

「ねえ、凜。ワタル君は一緒じゃなくていいの？」

電車の中でミコがフツと言った。

「あ、ああ、ウン。一人で行くって言うてたから。」

するとミコは少し不思議そうな顔をする。

「そうなんだ？ でもさあ…。」

「でも？」

「なんかさ、最近の凜って、カレに対してけっこうさっぱりしてきたっていうか。前みたいない感じじゃなくなってきたよネ？」

「エ、そう…かな？」

「まあ凜とワタル君とのことだからアタシが口を挟む気はないけどネ。」

「……………」

「あ、もう駅に着くよ。」

「ウ、ウン…。」

集合場所にはもう多くの生徒たちが集まっていた。

「やつほー！凜、ミコ」
「オハヨー！」

ウチのクラスの男子が集まっている辺りを見てもワタルの姿は見えない。

アタシは男子のほうに近寄って行って、ワタルといつも仲が良い篤史君に声をかけた。

「ねえ、ワタル君まだ来てないの？」

「あ、ああ。なんか少し遅れるって連絡があったらしいぜ。」

「エ…。」

（どうしたんだろう…。）

（アタシには何も言っていなかったのに。）

そのとき引率主任の中島先生から指示があった。

「じゃあ、そろそろ出発します。それぞれ指定された車両に乗り込んでください。」

クラスごとに座席に着くと周りの人たちはさっそくおしゃべりを始めた。

「ねえ、自由行動でどこに行く？」

「大浦天主堂見たことある？」

そして新幹線は動き出した。

「ワタル君、遅れるんだって?」

隣の席にいるミコが話しかけてきた。

「ウン。そうみたい。」

「あのさあ、アタシの気のせいかもしれないけど…、なんかワタル君って少し変わったよネ?」

「エッ!」

「凜はそうは思わなかった?」

「ミコはいつからそう思ってたの?」

「うーん…。1年の夏休み終わったときからかなあ。」

アタシはここにひとつの矛盾があった。

アタシの彼氏だったワタルは1年生の夏休みにいなくなった。

そしてカレの代わりであるニセワタルがアタシの前に現れたのは2年生の夏休みが終わったとき。

この間の1年間にアタシと久美ちゃんとワタルAにはワタルの存在はないはずなのに、ミコやそのほかの人にとってはその間もワタルは存在し続けたことになる。

なんか世界が枝分かれしたみたい…。

「ね、ヘンなこと聞いちゃうけど、ミコはカレのどこが変わったって思ったの?」

「なんかさ、凜に対してヘンに気を使うようになったっていつのかなあ…。前はもっと自然な感じだった気がした。」

そう。

アタシもそれは感じていた。
ニセワタルはワタルの心が分裂した存在のはずなのに、アタシにへんに気を使ったりする。

マフラーのことだって、なんであそこまで下手に出た感じで言ったんだろうつて気になっていた。

「笹村さんの存在が気になるのかなあ？」
ミコが思いついたように言った。

そういえば文化祭のとき大学の学食で笹村先輩に会ったとき珍しく気にしてたな…。

ヤキモチ？

うつん、なんかそういう感じではなかった気がする。

でもニセワタルが現れて作られた世界には、どこか矛盾というか綻びが起き始めているんじゃないだろうか。

アタシは自分の心の中でワタルが話していたニセワタルが現れた目のどこか疑問を感じ始めていた。

長崎に着いたその日の夜。

ホテルでの晩ご飯を済ませてミコたちと大浴場に向かう途中。

「小谷さん、チョット…いいかな？」

別のクラスで空手部の関君に声をかけられた。

「じゃあ凜。アタシたち先に行ってるから。」

「あ、ウン。」

関君はアタシを連れてホテルの裏口の方に歩いて行った。

「あのさ…。」

「ウン。何？」

「小谷さんと石川が付き合ってるっていう話は聞いてるんだけどさ、最近はあるまり…っていうのも聞いてて…。」

「そう…かな？」

「いや、それならそれでもしょうがないって思ってるんだ。でも、このまま言わないでいるより言ってしまったほうがすっきりするかなって…。あのさ！キミのことがずっと好きだった。」

ワタル君以外の男の人に初めて告白された。

男として生活していたときに自分で女の子に告白したこともされたこともない。

そのアタシが今男の人に好きって言われている。

こんなときに何て答えればいいのかぜんぜんわからないけど…でも、きっと昔のアタシだったら今の関君と同じことをしていたんじゃないかって気がした。

だから今のアタシにはカレの気持にキチンと答えてあげることだっ
て思った。

「あの…。関君の気持、すごく嬉しいです。だから、もしできたらこれからも友達でいて欲しいって思ってるの。」

アタシのその言葉に関君はニコツと笑った。

「ウン。キミのことを好きになってよかった。もちろんオレもこ

れからも友達でいて欲しい。」

「ウン。こちらこそ。」

こういう日が自分に来るといふのは、正直言ってあまり想像できなかった。

女性として生を受けながら13歳まで男性として生活をしてきた。

このことは多分アタシの中でまだ消化し切れなくてずっと引っかかっているんだと思う。

いわゆる性同一性障害者とかそういうのではなく、アタシは生理もあって子供を産むこともできる。

ミコやみーちゃんや井川さんたちと何も変わらない完全な女性だけど、過去の記憶までも修正することはできない。

鮎川ワタル君はそういうアタシの心の葛藤を克服させるために石川ワタル君としてアタシの前に現れた。

そしてアタシがカレを愛していく中で自分の中にある女性の本能は強くなっていった。

それは13年間の失われたときを取り戻すかのよう。

でもカレはいなくなってしまった。

今のアタシはカレがいなくなった痛みをどう乗り越えていけばいいのかわからない。

それはときの流れが解決してくれるものなんだろうか…。

第六十七話 修学旅行3

次の日の朝

アタシは食堂に向かうニセワタルを見た。

カレの後を追いかけて食堂に入ろうとするとき服の裾を掴んで
「チョット! どうしたの? いつこっちに着いたの?」

するとニセワタルはアタシから目を逸らせて答えた。

「いや。なんでもあらへんヨ。 さつき着いたとこや。 すまんな。」

あまりにそつけない返事にアタシは驚いた。

でも、それ以上聞ける雰囲気じゃないことはアタシにもわかった。

ニセワタルは何かを考えたような表情で、周りにいる男友達とも会話をしようとしなない。

食堂では班ごとに座る席が決まっているため、アタシとニセワタルは少し離れた席に座った。

「びつくりした。 ワタル君、いたんだネ?」

隣に座ったミコがアタシにそう話しかけてきた。

「ウン。アタシも今見かけたの。でも…。」

「どうしたの?」

「なんかさ…、様子が変わってというか。」

「なんだろね? 凜、後でワタル君に気遣ってあげたほうがいいヨ?」

「あ…ウン。」

食事が終り身支度を整えると、今日の見学地太宰府天満宮に向けて出発。

それぞれクラスごとのバスに分乗した。

アタシは結城君にお願いして席を替わってもらいニセワタルの隣に座った。

「ね、どうしたのかな？　なんか今日のキミ元気ないヨ？」

ニセワタルはなぜかまたアタシと目を合わせようとはしない。

「そ、そんなことない。なんでもあらへんって言うたやる！　凜ちゃん、少し黙っというてや！」

アタシは初めて聞くニセワタルの苛立った声に一瞬ビクツとした。それはワタルにも言われたことがない表情と言葉だった。

「ゴ、ゴメンなさい…。」

「あ、いや。大きな声だしてしてもスマンな。　ちよつとな、考え事しとっただけや。」

「あ、ウン。わかってる。もう聞かないから、ゴメンね。」

ニセワタルは少しばつの悪そうな顔になってようやく笑顔に戻った。
「えっと…修学旅行の今までの話聞かせてくれるか？」

「あ、ウン。あのネ……」
アタシは気を取り直して、ニセワタルに今までの旅行の様子を聞かせてあげた。

「ホー……！！　ウン、ウン。そっかあ。楽しそうやなあ。」
カシはアタシの話を聞きながら、何か昔を懐かしむような表情で笑顔を浮かべていた。

「ええなあ……。ボクも一緒にいたかったわあ。」
本当に懐かしそうな……。

バスが目的地に到着しようとするときニセワタルはようやくアタシの目を見てこう言った。

「なあ、凜ちゃん。じつはお願いがあるんやけどな。」

「何？　アタシにできることなら。」

ニセワタルは躊躇ったような表情で言った。

「あんな、今日の夜、夕飯が終わったらボクに付き合っしてほしいネン。」

「夜？　どこに行くの？」

「チョットな……。凜ちゃんに話したいことがあるんや。」

（話したいこと？）

もしかして『とき』が来て、そろそろいなくなっちゃってことなのかな……。

もしそうなら、最後はアタシがちゃんと見送ってあげたい気がする。もちろんカレはニセワタルであって、アタシのワタルではないのだから、ワタルがいなくなったときのようなショックはないと思う。でも、それでも、ワタルと同じ姿をしたカレもまたいなくなってしまうことは、やっぱりどこか寂しい気がする。

「ウン。いいヨ。」

アタシはニコツと笑ってそう答えた。

「そっか。よかったあ。」

しかし、いつもだったらこういうときには満面の笑みを浮かべるのに、そのときのニセワタルはアタシの言葉に小さな笑みで一言そう言っただけだった。

そしてバスは目的地の駐車場に車を滑り込ませる。

太宰府天満宮は、福岡県の大宰府市にある菅原道真公を祭った神社で、九州で最も有名な神社だ。

東京でいえば明治神宮みたいなのだろうか。

キリスト教のミッションスクールである青葉学院の修学旅行が神社についていうのも面白いつて思ったけど、青葉学院はキリスト教主義でありながらそれぞれの宗教や文化の違いに対して謙虚に学ぼうとする姿勢のある自由な思想の学校だった。

だから青葉学院大学では文化としての神社の研究をしている先生もいるという話を聞いたことがある。

「ね、菅原道真は学問の神様だから一応お願いしておいて損はない
って思うのヨ。」

「あ、そうだねー！　どうか希望してる学部の推薦が受けられます
ように…。」

桜門をバックにしてミコやチャコたちと写真を撮る。

「いくヨー。ハイ、ポーズ！」

パシャッ！

「ね、凜。ワタル君とツーショットの写真撮ってあげる。」
ミコがそう言っただけでカメラを構えた。

「そっやな。凜ちゃん、ホラ、もっとこっち寄ってーな。」

「あ、ウ、ウン。」

「ほら、凜。ワタル君の腕を掴んでー！」
カメラマンのミコがリクエスト。

「エ！ホンマか！ワァーイ！　はよ、凜ちゃん。」

「ハイハイ（笑）」

そういえば、昔ワタルと中3のときプールで撮った写真もこんな感
じだったっけ。

あのときの写真はワタルの存在がなくなったあと、アタシの隣で映

っているのはミコの姿に入れ替わっていた。

「撮るヨー！」

パシヤッ！

ニセワタルは少し照れた表情で笑顔を浮かべてVサインで写真に納まった。

それにしても、この写真ってニセワタルがいなくなった後で見たらどうなっているんだろう…。
やっぱりニセワタルは誰かに入れ替わってアタシと撮ったことになるんだろうか？

第六十八話 修学旅行4

そして明日はいよいよ修学旅行最終日となるその日の夜

その日の夕食は大ホールでバイキング形式の夕食だった。

食事の前には、やはりミッションスクールらしく神様に祈りを捧げる。

「主よ、我々が今回の修学旅行を滞りなく終わらせることができ、そして生徒たちが多くの思い出をつくることができましたことをあなたに感謝します。そしてここに皆で集いその思い出を語りながら、食事を分け合い楽しい夕餉のときを持ってましたことを感謝します。アーメン。」

「アーメン」

そしていよいよ夕食会が始まった。

アタシはミコとお皿に料理を並べて歩いた。

「あ、凜。ステーキあるヨ！」

「ホントだあ。食べよう！」

「あ、生春巻き！アタシ、好きなんだあ。」

こんなに取って実際どれだけお腹に入るのかわからないけど、目に付いた美味しそうなものはささずチェックする（笑）

「ホラ、プチケーキが出てきたヨ！早く行かないとなくなっちゃう！」

プチケーキに群がるのはほとんど女の子ばかり。

というか、とても男の子は近寄れない雰囲気なのだ。

男の子でも甘党はいるはずだけど、これだけ女の子たちが集まっているとやっぱりその中に混ざるのは恥ずかしい気がするんだろ
う。

人気の高いケーキはアツという間になくなってしまいうから、並んで
順番になんて悠長なことをやってる娘はいない。まさに女の子たち
のケーキ争奪戦状態なのだ。

「凜、そのプチシュー、アタシの分も取っとしてえ！」

「オツケー！あ、ニコ。そのモンブラン2つキープおねがいっつ

！！」

「チャコ！アンタ、イチゴショート取りすぎじゃない！？」

「ワーワー！」

「キヤア！キヤア！」

それを周りで眺めている男子たち。

「ス、スゲエゼ……」

「ああ……。野獣みたいだな。」

「いや、野獣っていうか……まるで獲物を追うチータのようだぜ。本
能っつーか……。野生の気高さすら感じるヨ。」

「さつき、神様に食事を分け合っってお祈りしたんじゃないの
か…?」

「オレもケーキ食いたかったけど、あの中に入る勇氣はとて
も…ねえヨ。殺されちまいそうだ…。」

そこにひとりの男の先生が近づいてきて、アタシたちを指差してそ
の男子生徒たちに言う。

「いいか、お前ら。よく目に焼き付けておくんだゾ。将来お前らが
結婚に対し過度の幻想を抱きすぎないように。あの姿をしつかり覚
えておくんだ。これも教育なんだからな。」

「ハ、ハイ。先生。」

先生はアタシたちの方をまっすぐ見つめながら

「いいか。女はな、狩人なんだ。追い詰められたらもう逃げられや
しない。女の美しさは『兵器』だと考えろ！彼女たちはその最強
兵器をどう使うかで人生の成功を収めていくんだ。」

「せ、先生。オレ、忘れねーヨ。」

「ああ、忘れようたって忘れられねえ…。今オレたちの前で戦って
いる誇り高き本物の狩人の姿をな…。」

しかし女の子たちはそんな男たちの冷ややかな視線などまったくお
構いなし。

そしてようやく女の子たちがケーキコーナーからパラパラと離れて
行って、お皿の上に残っているのは人気のないわけのわからない果

物数切れだけだった。

その皿をポーゼンと眺めている男子たち。

「とうとう狩り尽くしたんだな…。」

「ああ、戦いが終わったみたいだ。」

「おい、ぺんぺん草も生えてねーゾ…。」

アタシたちはお皿の上に戦利品をこんもりと乗せてまた仲間の集まっているテーブルに戻っていく。

「わあ、凜のイチゴタルト美味しそうだねー！」

「みーちゃんのチョコエクレアと交換しない？」

「ミコ、チーズケーキと何か取り替えて？」

「しょーがないなあ。」

「あ、おいしー！」

「ホント！でもアンタそんなに取って食べられるの？」

「別腹、別腹（笑）」

「アレッ！新しくメロンとか出たみたいだよッ！」

「出遅れたら大変じゃん！」

「出動ー！ーっ！」

爆笑

そしてお腹も満たされた頃

フツと少し離れたほうを見るとニセワタルが同じクラスの男友達数人と談笑していた。

（ああ、そうだ。これ終わった後待ち合わせの約束してたんだよね。）

ニセワタルは料理にはあまり口をつけてないようだったが、ジュースの入ったコップを手にして楽しそうに語らっている様子だった。

（そういえば、カレもそろそろいなくなる時期が近づいているんだよね…。）

（カレにとっては、この修学旅行が最後の思い出なのかな…。）

そんなことを考えると、もう少しこのままカレがいてもいいような気もした。

そんなとき

ポシエットの中から

ピロピロ

突然携帯の着信音が鳴った。

(アレ、誰だろ?)

携帯を取り出ししてみると、それは久美ちゃんからだった。

「ハイ、モシモシ。」

「あ、凜? アタシだよ。」

「ウン。久美ちゃんですよ。どうしたの?」

「アンタ、今修学旅行中でしょ?」

「そうだヨ。今バイキングで晩御飯なんだあ。美味しいヨー。」

電話の向こうの久美ちゃんはかなり慌てた様子だった。

「今そこにニセワタルもいるの?」

「あ、ウン。一緒にはいないけど。チョット離れたところで他の男子と話してるヨ。」

そのとき、電話は電波状態が悪いようで雑音が混ざって久美ちゃんの声が上手く聞き取れなかった。

「あのさあ!...ザ.....」

「エッ?なに?」

「だからネ、アンタ　ザ.....」

向こうもアタシの声を聞き取れていない様子だった。

ようやく聞き取れたときは

第六十九話 修学旅行5（バイバイ、マイダーリン）

そして楽しい晚餐もいよいよ終りに近くづく。

「それでは皆さん、修学旅行もいよいよ明日で最終日です。皆さんがこの旅行を通じて学んだこと、思い出を大切に、残りの高校生活を充実させましょう！」

大ホールから次々に生徒たちが出てくる。

「ねえ、凜。この後すぐお風呂行く？ それかどっか外に行ってみる？」

並んで歩いているミコが聞いてきた。

「あ、ゴメン。チョット、ワタル君と出てこようかって思ってるの。」

「そっか。ウン。じゃあ、アタシらだけで行ってくる。」

「ゴメンね。」

そしてアタシはニセワタルと約束した通りホテルから少し離れたところにある博多橋に向かった。

（久美ちゃんとワタルAがこっちに着いたらきつとアタシの携帯に電話をくれるだろうだから、それで連絡が来たら会えるはずだし。）

橋に近づいたところすでに待っているニセワタルの姿が見えた。

「やっほー!!」

「おお、凜ちゃん。友達だいじょうぶだったか？」

「ウン。ミコたちはどっか行くって言ってたから。」

「そうか。悪いなあ。」

「話って言ってたけど、何なのかな？」

「あ、ウン。まあとりあえず歩こうや？」

「ウン、いいヨ。」

アタシとニセワタルは博多橋を渡って歩き始める。

こうしているとまるであの頃のワタルが戻ってきたかのように懐かしい気がする。

初めてのデート。

中3の夏休みに一緒にプールに行ったっけ。

女の子の水着を着て、初めて男の人に見せたのはワタルだった。

肩を並べて一緒に撮った写真。

カレの厚い胸がすぐ眩しかった。

それはいつか自分にも持てるだろうと思ってたものだったけど、じつはいくら待っても自分には絶対に持てないもので。

あの頃生理が安定してきて自分の身体に女性の特徴がどんどん目立ってきて。

そしてワタルと並んだとき女である自分と男であるワタルとの違いをハッキリ意識した。

しばらく歩いてアタシとニセワタルは木立の中にある公園に入って行った。

街の雑踏の音は深い木々に遮られて公園の中はとても静かだった。

「なあ、凜ちゃん…。」

「ウン、何？」

「こんなこと聞いてええかなあ…？」

「何を？」

「凜ちゃんは、ボクのこと好きか？」

「エ…。」

アタシはカレのその言葉に立ち止まった。

「好きだよ。」

ウソでもそう言えばカレは満足するのだろうか。

でも、そのウソはワタルを愛していたアタシ自身のプライドも傷つけてしまう気がする。

そしてアタシはそれから先の言葉が出てこない。

「ボクは…凜ちゃんのそういう正直な心が好きや。正直だからウ

ソが言えない…そうやる？」

「……………」

そしてカレは立ち止まってクルツと振り返った。

「ずっと知ってたんやろ？ ボクが凜ちゃんの知っている『あの頃のワタル』じゃないってこと。」

「…ウン。」

「知ってて、それでも前と同じようにボクと接しようとしてくれた。

「ウン。」

「なんでかな？ ボクのこと可哀想に思ったから？」

「最初は…そう思ったかもしれない。でも…。」

「でも？」

「アタシがアナタを最後まで見送ってあげなくちゃいけないって思ったから。」

「ふうん…。優しいな。いや、でもそれは凜ちゃんのワタルに対する愛情へのプライドなのかな？」

「多分、……そうだと思う。」

ニセワタルは電灯の明かりの下でアタシの前に立って言った。

「なら、そのプライド…最後まで貫き通してや。」

カレがそう言うところ……

そのときアタシは急に自分の意識がスウーッと遠のいていく感じがした。

そして、その後に現れたアタシの周りの光景は、あるとき、アタシがワタルと最後に別れたあの小さな公園の前。高1の夏、街の中にはセミの音が響いていた。

「今日はホンマに楽しかった。」

「アタシもだよ。」

ワタルは公園の前でアタシの手を握っていた。またすぐに会えるって思っても、気持はまだ離れたくなかった。

「ワタル君……？」

ワタルは僕の目をまっすぐ見つめて言った。

「凜ちゃん…愛してる。」

「アタシも…アタシも。アタシもアナタのこと愛しているヨ。大好き…。」

ワタルは厚い胸でアタシの身体を抱きしめた。

「ワタル君…ワタル君…。」

涙が抑えられない。

もうどうなってもいいって思ってる。

「凜ちゃんが…ほしい。」

「ウン…いいヨ。」

そしてアタシはワタルの腕に掴まって歩き始めた。

しばらく歩いて一軒のラブホテルに入る。

部屋のドアを開けると、そこには大きなベッドと小さなテーブルにソファ。

他には何も置いていない。

セックスをするための空間。

アタシはこれからワタルに抱かれるんだ…。
後悔はない。

アタシはバスルームに入り、そして服を脱ぎシャワーを浴びる。

そしてバスタオルを身体に巻いてカレの待つベッドに向かった。

「凜…。」

カレが上服を脱いで上半身を裸でアタシの身体を傍に寄せる。

身体に巻いていたバスタオルがするっと下に落ちて、アタシは裸体でカレの胸に顔を埋めた。

「ワタル…ワタル…。」

するとそのとき

部屋のドアがガチャガチャと音を立てて

ドンドンドンッ！ドンドンドンッ！

強く叩く音

そして

バンッ！！と大きな音を立ててドアがこじ開けられた。

「エッツ…！！！」

そこには久美ちゃんとワタルAが必死の形相で立っていた。

の分裂した心に取り付いた悪しき別の心ネ！」

「ハハハ！ ハハハハハハハハ！」

ニセワタルは久美ちゃん言葉を聞くと急に高笑いを始めた。

「いい？凜。この人はワタル君の心の分身なんかじゃない！ ワタル君の心の分身に取り付いて支配した別の人の心なのヨ！」

「エエエエエツッ！！！」

「ニセワタル君、アナタもワタル君と同じように生まれ変わりを待つ心のひとつだったのよネ？ でも、アナタは生前のこの世界でも悪いことをやってきた。だから中々生まれ変わることを許してもらえなかった。そして後から来たワタル君の方が先に生まれ変わりを命じられた。そこでアナタはワタル君の心を利用して実体化し、凜を妊娠させてその赤ちゃんの心に入り込もうとした。」

「ふっ、ワタルか。アイツまた自分の生まれ変わりの順番を譲って調べてたのか。まったくお人よしの馬鹿だな。」

「黙れ！そんなお人よしだから凜は好きになったのヨツ！」

ニセワタルはアタシの方を振り返って静かに言った。

「どう、凜よ。取引をしないか？」

「取引？」

「そうだ。オマエがオレの子を宿すなら、オレはもうしばらくワタルを演じてやってもいいぞ。オレのパワーはワタルより強い。ワタルの姿でいるオレとその子を一緒に育てないか？」

もう我慢できない。

アタシはニセワタルに冷たく言い放った。

「アタシはアタシのワタルを利用したアナタを絶対に許さない！演じられる人生なんて真っ平ゴメンヨ！愛してもいない男の子供を産むなんて絶対に嫌っ！アタシは今までワタルに守ってもらってた。今度はワタルのことをアタシが守るの。いつも守られてるだけが女だと思ったら大間違いヨ！」

そしてアタシはニセワタルめがけて体当たりをしていった。

しかし

「ぎゃあっ！」

アタシの身体はいとも簡単にニセワタルの手によって押えられ、そしてニセワタルは無理やりアタシの口に自分の口を近づけてきた。

そのとき

アタシはほとんど無意識に脱ぎ捨てた自分の制服の上着を引っ掴んで近づいてくるニセワタルの顔に押し付けた。

すると

「ぎゃあああー！ー！ー！っ！ー！」

ニセワタルは突然スゴイ声で叫び、その顔は服を押し付けた部分が黒く焼け爛れていた。

「な、なに？」

ハッとしてアタシは自分の手にもった制服を見ると、ニセワタルの顔に当たった部分に青葉学院の信仰の盾の校章バッジが留めてある。

「もしかして！」

アタシはそのバッジを両手で掴むと

「我らが主イエスキリストよ。どうか悪しき心から私たちをお守りください。」

そう心の中で願い、その制服をニセワタルの頭に被せた。

「ぎゃあああーーーーーっ！ 熱い！熱いーーーーっ！
！」

激しく叫びながらニセワタルは悶え始めた。

「戻りたくないーっ！オレは生まれ変わるんだああーっ！
っっ！！」

そしてニセワタルはその姿を消していった。

「終わったな……。」
ワタルAがそう呟く。

「ワタル君…ワタル君……。」
アタシはカレの名前を心の中で繰り返す。
そして溢れる涙を止めることができなかった。

久美ちゃんはしばらくアタシに好きなだけ泣かせてくれていた。
そしてゆっくり近寄ってきて
「さあ、凜。服着よう？」

アタシたちはそのままそのラブホテルを出ると途中にあった喫茶店に入った。

「久美ちゃん、ワタル君。ホントにありがとう。」

「ええヨ。でもギリギリで間に合ってよかった。これも鮎川が守ってくれたのかもしれない。オツチヨコチヨイのアイツも最後は必死の様子やった。」

アタシは涙で少し腫れた目で尋ねた。

「ねえ、でもどうしてこのことがわかったの？」

久美ちゃんは手に持ったコーヒークップを一口啜ると

「昨日の夜にね、ワタル君がアタシたちを呼んだのヨ。あの公園にね。そしてお願いされたの。これが最後になると思うから、どうか凧を守ってやって欲しいって。」

「アイツな、最後の力を使ってニセワタルの正体を突き止めたんや。ニセワタルっていうのは、ワタルの分離した心の一部に別の人の心を取り付いたものらしい。そいつはかなり昔死んだやつらしいんだけど、女に全然縁がなかったやつで、いつも好きになった女に利用されては騙されてたらしいんや。まあ、そういうことで女を怨んでいたんやろなあ。そして最後は通りがかりの全然関係ない女の子を殺して死刑になったらしいんや。」

「だから、ワタル君がいなくなった後でも凧がカレのことを想い続けていたのが羨ましかったのかな。凧の編んだマフラーをすごく欲しがってたのもそういうのを女性の愛情の表れだって思ってたんだろうね。」

「それをワタル君が…調べてくれたんだ？」

「そうだヨ。カレは本当に凜のことを愛していたんだヨ。」

「ウン…。」

フツと時計を見るとびっくり！

もう11時を回っていた。

「わあ！もうこんな時間なあ！」

「アラララ…。凜、アンタだいじょうぶなの？」

「アタシはなんとか潜り込むヨ。ミコに携帯で連絡取れば裏口とか開けてくれるだろうし。それより、久美ちゃんとワタル君、もう帰る電車ないんじゃない？ どうしよう…。」

「ああ、アタシたちのことは心配しないでもいいヨ。どこかのホテルに泊まって明日帰るから。」

「エーッ！だって、今の時間で空いてるとこなんてないんじゃない？」

「あー、エツト、ホラ…さっきのとこみたいなのなら…あるでしょ？」

「さっきみたいなのとこって…ラブホテル?? エ、だって…。エ？」

「エエ??」

「うーんとね、アタシたちもう…だから（笑）」

「ワハハハハ！」

久美ちゃんは横でテレまくっているワタルA

「あのさ…。カレ、高校卒業したら機械系の専門学校いくつもりなのヨ。アタシはできたら短大に行って。それでお互い卒業して20

歳になったら結婚できたらいいねって…。」

「エエエエー…ッッ!!!そう…なんだ?」

そっかあ。

久美ちゃんとワタル君…。

よかったネ…。

オメデトウ、久美ちゃん。

オメデトウ、ワタル君。

アタシは久美ちゃんたちと分かれてタクシーで宿泊しているホテルへと戻った。

時間はもう12時すぎ。

(うわああ~~~~~)。これはもう徹夜で廊下で正座かなあ…。(

とりあえずミコの携帯に電話してみる。

プルルルル…プルルルル…ガチャッ

「もしもし…。」

アタシは恐る恐る電話口に声を出す。

「凜…!アンタ今一体どこにいるのっ!?!」

「怒らないで~~~~~」(泣) あかね、今ホテルの前なの。」

「まったくモウッ!! とにかく裏の非常用出入口わかるでしょ? 今あつちを開けてあげるから。」

「ありがとう~~~~~。」

裏に回ってしばらくすると

カチャツ　と施錠の外れる音がして

キィィー　非常用玄関が開いてミコが顔を出した。

「ホラッ！早く入りなさいっ！」

「はあい。」

そしてアタシたちは薄明かりのついた廊下を足音を忍ばせて自分たちの部屋に入る。

部屋の中はもう真っ暗で、小さな非常灯だけがぼやっと点いていた。

アタシは部屋にいるみんなを起さないようにトイレに行つてすばやくパジャマに着替える。

「とにかくこつちにいらっしやい。」

ミコが自分の掛け布団を持ち上げてアタシを中に誘う。

「わあい。ミコと一緒に寝よっつと」

アタシとミコは掛け布団をかぶつてその中でヒソヒソと話をする。

「まったくアンタ、こんな時間までどこに行つてたのヨ？　夕食会が終わつたら一人でふらつと出かけちゃうし。」

（そっか……。ミコの記憶にはもうニセワタルの存在もなくなつちやつたんだ。）

「ゴメ〜ン。途中で迷子になつちやつて、携帯も電池もなくなつて。さっき途中のコンビニで電池買ったの」

「だったら公衆電話からでもかけられるでしょ!？」
「あ、そっか。ところで消灯のときの点呼だいじょうぶだった？」
「もうしょうがないから、アタシが「彼女、今生理になっちゃってトイレに行ってますから、時間かかると思います。」って言うておいたわヨ。小出先生（男）だったから、それ以上聞かれなかったヨ。」
「よかったあ。ミコ、ありがとお。」
「まったくしょーがない娘だネツ！」
「ねえ、ミコオ。一緒のお布団に寝たいな。」
「どーしたの？甘えんぼになっちゃった？」
「ウン。今晚だけ…。」
「フフフ。いいヨ。」

そしてアタシはミコの甘い匂いに包まれて眠りに落ちていった。

そして修学旅行から帰った日の夜、アタシは久美ちゃんに電話をかけた。

次の日はちょうど日曜日。

久美ちゃんはワタルAと3人であるの公園で会おうと言った。

「久美ちゃん〜ん！」
「やつほー!凜。」
「おお、お帰りやでー!」

「本当に2人ともありがとうとお。あなた達がいなかったらアタシ絶対ダメだったと思う。」

「オレたちじゃないヨ。鮎川ワタルや。」

そう言つてワタルAと久美ちゃんはアタシを2つ並んだ赤いブランコの前に連れて行つた。

そのブランコはワタルがアタシに初めて小さなキスをくれた場所。

「ホラ、ここ見いや？ アイツ最後の力でこれを書いたんやで。」

「これが最後にワタル君がアンタに残していつてくれた『心』ヨ。」

フツとそのブランコの座席の上を見た。

あるときアタシが座っていたほうの座席の上を見ると

「ボクの生涯をかけて愛した女性へ 生まれ変わってキミといつか会えるその日を夢に抱き……。」

小さな文字でそう掘り込まれていた。

溢れ出る涙。

「アタシも……いつかアナタにまた会えるときをずっと待ってるヨ。」

「バイバイ……マイダーリン。」

.....

じつはワタルはアタシに最後のプレゼントを置いていってくれた。

修学旅行から帰って少しした日曜日の昼頃。

久美ちゃんが突然ウチにやって来た。

いつもなら、事前に電話をするはずなのに、その日の久美ちゃんはとても慌てた様子で、そして声を震わせていた。

「久美ちゃん、どうしたの？ そんなに慌てて。」

「凜、まずアナタの中学校と小学校時代のアルバムを見せて。」

「エ？ あ、ウン。いいけど…。チョット待ってて？」

アタシは本棚の上の方にある2冊のアルバムを取り出して久美ちゃんに渡した。

久美ちゃんはそのアルバムを見ると

「やっぱり…。」と言って

「ホウ…」と小さなため息をつく。

「ど、どうしたの？」

久美ちゃんは自分の持ってきたカバンの中から、同じ2冊のアルバムを取り出してあたしの前に置いた。

「いい？まずは落ちつきなさい。」

「落ちついてないのは久美ちゃんのほうじゃないの？」

すると彼女は持ってしてきた自分のアルバムうち小学校時代のものを手にとってあるページを開いた。

「ここを見て？」

それはアタシの小6のときのクラスの集合写真。

「これがどうしたの？」

「自分を探してみて？」

アタシはこの頃はまだ男の子として生活していた自分の顔を探した。このページはアタシも自分で何度か見たことがあったので、すぐわかる。

向かって右側に並ぶ男子の一番前の列で、アタシの右隣は安田だった。

「あ、あれ…。」

おかしいな…。

安田の右隣には伊藤がいる。

左は飯山。

(エ、じゃあ、アタシはどこいったの?)

すると久美ちゃんは少し落ち着きを取り戻したように言った。

「アンタは…ココ。」

そう言って彼女が指を指したのは向かって左側に並んだ女子の列。それは久美ちゃんの右隣にいる子だった。

「エ、エエエエエー…ッ！ な、なんで!？」

そこに映っている子はどう見ても女の子の姿をしていた。肩まで伸びたセミロングの髪。

薄いピンクのブラウスと赤いスカートを身に付けた一人の女の子だった。

そしてその女の子の姿は今のアタシに明らかにつながっていることがわかる。

集合写真以外の他のページでアタシが写っているところを探すと、やっぱりその女の子だった。

アタシは今度は中学時代のアルバムを手にとって見てみる。

集合写真のときは、アタシはすでに女の子だったが1年のときに撮ったはずの2枚ほどは男の子の姿をしていたはずだったが、安田と写っていたのは別の男の子。

アタシの姿は1年生のとき同じクラスだった女の子数人の中に写っていた。

「チヨ、チヨット待つて？」

アタシは別のアルバムを開いてみる。

「ア、アアアアアア…。」

写っているのはどれもアルバムにいる女の子だった。

「多分、みんなの記憶が塗り替えられているんだと思う。だからアンタのお母さんもお父さんもそしてミコや楓ちゃんや安田君とか、アタシとワタル君を除いたアンタを取り巻く友達の全員が、アンタは女の子として生まれそして育てられたという記憶になってるんじゃないかな。」

「じゃあ…。」

「そうヨ。昨日の夜遅くに小学校のアルバム見て気付いたの。アンタが中2まで男の子として生活していたことを知っているのは、もうこの世にはアンタとアタシとワタル君の3人だけってことヨ。」

「だ、だれが？」

「鮎川ワタル君じゃないかな。これはカレがアンタに贈る最後のプレゼントだったんじゃないかなって、アタシは思う。」

（そ、そうか…。）

（そういうことだったんだ…。）

（ワタルはこれを最後の仕上げにしたかったんだ…。）

久美ちゃんはアタシの手を取って言った。

「いい？ 鮎川君が愛するあんたのために最後にしてくれたことヨ。それを受け入れることがアンタがカレを愛していたっていう証じゃないかな？」

「ウン…。」

アナタがアタシに最後に与えてくれたもの。

それはアタシの過去を修正すること。

それがアタシにとって逃げになってしまうのか

それとも新しい人生を切り開くためのものになるのか

今はわからない。

でも、アタシはアナタとの思い出をずっと大切にしたいからそれをあえて受け入れていきます。

アリガト…。

第七十話 告白

それからしばらく経った春休みのある日の夜。

笹村先輩から電話があった。

「ヨウ、ひさしぶり。」

「おひさしぶりです。あ、先輩、もうすぐ卒業式ですね。おめでとーございます。」

笹村先輩はアタシより1学年上で、数日後には高等部を卒業する。たしか青葉学院大学の国際政経学部にも内部進学が決まっていると言っていた。

「先輩、大学生になる気分はどうですか？」

「ハハハ。なんかまだピンと来ないけど、これが終わればもう学生生活も終わっちゃうんだなあって気持ちだね。凛ちゃんは早く大学生になりたい？」

「ウーン…。大学生になれば色々自由なことも多いし、そういうところでは楽しみだけど、高校生って微妙な時期だからもうチョットそういう時期を楽しんでいたくなっていうふうにも思うし。」

「そうだよなあ。オレももうチョット高校生を楽しみたかった（笑）」

「アハハ。でも大学も高等部も同じキャンパスの中だから。暇なときは遊びに来てください。」

「ウン。行くよ。あ、それでさ…。」

「ハイ？」

「じつは…。話があるんだ。」

「何かなあ？」

「オレさ、…キミのことが好きなんだ。」

「エ……………」

心臓がドキン！と音を立てて受話器を持つ手が一瞬固まった。

突然の告白だった。

前後の脈絡もない。

何の飾り言葉もないストレートな言葉。

でもそれが笹村先輩らしいのかもしれない。

「オレ、このことをキミに伝えないまま卒業してしまうことができなかったんだ。オレの勝手な感情のために今キミを動揺させてしまったかもしれないことは謝る。それでもオレの気持ちを知ってほしかった。」

「あ、あの…。」
言葉ができてこない。

いや、アタシはなにが言いたいんだろう…。

「もしできたら、オレと付き合っただけでいいって思ってるけど、今の電話ですぐ返事をくれっていうのは無理だって思う。だから来週の月曜日の卒業式が終わった後で、キミの気持ちを聞かせてもらえないだろうか？」

「ハ、ハイ。わかりました。」

笹村先輩からの電話を切った後しばらく考えて、アタシは久美ちゃんに電話をした。

本当なら笹村先輩をよく知っているはずのミコに相談すべきところなんだろうけど、アタシが相談したかったのは笹村先輩についてというよりもむしろアタシ自身の気持のことだったからだ。

しかし久美ちゃんの見解は思いのほか厳しいものだった。

「キツイい方するけどね、アタシは凜だからあえて言うヨ。凜はズルくないかな？　アンタはこれまで鮎川ワタル君を愛していたことで笹村さんの気持を受け入れてしまっ自分はどうかってことをアタシに聞きたいんでしょ？」

「そう…だね。ウン。久美ちゃんの言うとおりだと思う。」

「でもアンタが本当に鮎川ワタル君の気持を大切にしたいなら、自分に言い訳をつくらないことじゃないかな。　ようはアンタ自身が笹村さんの気持を受け入れる気があるかどうかだと思っヨ。鮎川ワタル君と笹村さんは別々の人なんだから絡ませて考えたら結局どっちの気持も考えていないことになるんじゃない？　もしアタシに背中を押されて笹村さんと付き合うことになってもそれじゃ意味ないでしょ？　凜は自分のことばっか考えているみたいだよ。」

本当に久美ちゃんの言う通りだった。

アタシの心の中は久美ちゃんに見透かされていた。

次の日

アタシはお昼ご飯を終わると外に散歩に出た。

どこかに行くって決めて出てきたわけじゃない。

ただ今までの色々なことを自分の心の中で整理したかった。

少し歩いて『あの公園』の前を通る。

あそこに行けばワタルの刻んだメッセージの赤ブランコがある。

アタシは無意識にそっちの方へ歩き始めようとしたが、思い返して公園を出た。

あの公園に行つて、「ワタル君どうしたらいいと思う?」「なんて聞いたらきつとワタルは悲しむって思ったからだ。

そのまましばらく歩くとフツと以前見た光景の場所に辿り着いた。

(あ、ここは…。)

そこはワタルが最後のデートでアタシを連れてってくれた青ペンキの壁の喫茶店だった。

(ここなら…いいよね。)

カラン

ドアをあけると小さな鈴が鳴った。

「いらつしゃいませ。」
そしてワタルと入ったときの髭のマスターがあのとときと同じように
声をかけてくれた。

マスターはアタシに水を出してくれると

「あれ…。エット、キミはこの店は初めてじゃないよね?」
と尋ねた。

「あ、ハイ。もう1年以上前に1度だけ。」

「そうだよな。でも一人じゃない気がしたな。　ウーン…思い出せ
ないな。」

(クスクス。ワタルは相変わらずそそっかしいんだナ。　記憶を消
しきれなかった人もいたんだ。)

「あ、そのときは学校の友達と一緒にでした。」

「そうか。そうだったっけな?…ハテ。　まあ、いいや(笑)　そ
れではご注文を?」

「あ、それじゃココアをお願いします。」

「あ、あのとときと同じだネ!それは覚えてるぞ!(笑)」
「フフフ…。」

マスターが持ってきてくれたココアをフーツと吹き冷ましながら口
の中に啜る。

ほろ苦い香りとともに甘いココアが口いっぱいに広がっていく。

アタシはカップを下ろして窓の外をボーっと眺めた。

お店の中には他にお客さんはいなかった。
マスターは少し暇そうにキュッキュツとコーヒーカップを磨いている。

(笹村先輩とアタシかあ…。)

正直、思いも寄らない告白だった。

笹村先輩はあまり多くを話すタイプじゃないみたい。

でも優しくって力強い、ストレートで男らしいタイプなのかな。

きっとアタシのことを包み込んでくれそうな。

そしてワタルはどっちかっていうと良く話すほう。

いつもひょうひょうとしてるけど意外にそっかしくって、

アタシが何かをしてあげなきゃって思ってしまう。

優しくって温かくって…、

でも笹村先輩みたく力強いイメージじゃないかな(笑)

(はあ…アタシって自分の好きなタイプよくわかんない。)

そこに髭のマスターが近づいてきてアタシに小さなお皿に乗ったクッキーを出してくれた。

「よかったら食べない？ ウチの奥さんが焼いたんだ。もちろんサ

ービスだよ(笑)」

「エ、あ、ありがとうございます。」

お皿の上にはチョコとシナモンの風味のクッキーが1つずつ乗っていた。

アタシはシナモンクッキーを手にとって口に入れた。

「わあ、おいしいー。」

「アハハ。よかった。いつもはお客さんが何か考えていそうなときにはあまり言葉をかけないようにはしてるんだけどね。今日はなんかちよつと気になつちやつてね。」

「ホントおいしいです。」

ココアをもう一口啜って今度はアタシからマスターに声をかけた。

「ね、マスター。ちよつと聞いたりしてもいいですか？」

「ウン、いいヨ。何かな？」

「例えばの話なんですけど…。前に好きになつた人とかかなりタイプの違う人を好きになるってあるんでしょうか？」

「ウン…そうだなあ。これはあくまでボク個人の経験だけどね…。」

「あ、ハイ。」

「タイプなんていうのは、あくまできつかけっていうか、表面的なことなんじゃないかなっていうふうに思うかな。その人の本当の心はその奥にあるっていうか。心の奥にある優しさを先に感じたら、タイプの違いっていうのはあまり関係ない気がするなあ。」

「タイプはきつかけかあ…。」

「好きになるきつかけは千差万別さ。ぜんぜんタイプじゃないはずなのに結婚してうまくやつてる夫婦なんていうのもザラにいるしね。でもさ、相手がどんなタイプであったとしても、自分がその人からどれだけ愛されるかじゃなくて、自分がその人をどれだけ愛せるかだよ。相手を愛せる人は人からも愛されるもんさ。」

相手を愛せる人は人からも愛されるもんさ。
マスターのその言葉にアタシは中学のときの担任の山岸先生の言葉を思い出した。

.....

人を愛せる人間になってください。人を愛せる人間は、人からも愛されます。

そしてこの「愛する」ということの意味。この意味をこれからの長い人生の中で時間をかけてゆっくり解き明かしていってください。

.....

「ごちそうさまでした。」

「少し晴れた表情になったネ。」

マスターはそう言ってアタシにウィンクした。

「フフフ……。」

「じゃあ、またよかつたら来てください。」

「ハイ。ありがとうございます。」

そっか。

なんかアタシは一番大切なことを忘れてた気がする。

相手に求めることより、大切なのはアタシが相手を愛してあげられるかなんだよネ。

この店の一杯のココアはアタシの身体だけじゃなく心も温かくしてくれました。

第七十一話 あなたと歩きたい…

今日は笹村先輩の卒業式

アタシたち2年生は送る側の最上級生として代表者が何人が出席するが、それ以外の生徒は登校はなかった。それでも部活などの先輩を見送るため、実際はかなりの数の下級生たちが学校に集まっていた。

今PM講堂では卒業式の真っ最中だろう。アタシやみーちゃんたち1、2年のチア部員は部室に全員が集まって先輩たちが出てくるのを待っている。

「エツト、まず最初に凜とみーちゃんが代表して花束をキャプテンと副キャプテンにあげる。1年生、お花の用意はできてるの?」

「ハイ。オツケーです。」

「顧問の優実先生には連絡してある?」

「ウン。さつき先生に確認とったからだいじょうぶ。」

「じゃあ、全部準備いいかなー?」

「ハアイ!」

そして3年生たちが卒業式を終わって講堂から出てくる。

早苗と芹ちゃんの2人がチアの先輩たちを迎えに行っている間にアタシたちはパーティーの準備。

中に入る。

司会役の2年生生理絵がすつと前に出てマイクを手に持った。

「エー、先輩方。本日はご卒業本当におめでとうございます。今日は私たちが最後に先輩を送り出すためのささやかな会を設けさせていただきました。3年間のチア部の思い出をどうか心ゆくまで語らうってってください。」

それではまず最初に前期キャプテンの安藤さんと副キャプテンの三好さんに2年生の小谷さんと佐倉さんからお祝いの花束を贈らせていただきます。」

アタシとみーちゃんは花束を抱えて前に進む。

アタシは安藤キャプテン、そしてみーちゃんは三好副キャプテンの前にそれぞれ立った。

代表してアタシが挨拶する。

「マミさん、朋子さんそして3年生の皆さん、3年間本当にお疲れ様でした。先輩方と過した楽しい日々をずっと大切に行きたいと思います。今日は本当にご卒業おめでとうございます。」

パチパチパチ - - - - -。

そして2人は少し涙を浮かべながら花束を受け取り、代表してキャプテンの安藤さんが挨拶した。

「凜、みーちゃん、そしてみんな。本当にありがとう。エー、少しだけ思い出を話したいって思います。今の2年生が入部してきたと

き、その中に凜とみーちゃんがいたんだけど、みーちゃんは中学時代経験者だったんですが、凜は初めてだったのよネ。身体も大きいほうじゃないからだいじょうぶかなって少し心配したりもしたけど、その分彼女は根性はNO1だったと思います。2年生の皆さん、来年はあなたたちが見送られる番だヨ！あと1年、みんな精一杯輝いてくださいっ！」

パチパチパチ - - - - -。

そして先輩たち一人ずつの挨拶の後はいよいよパーティ。

優実先生お得意、サザンの『YAYA』あの時代を忘れない』のイントロが流れる。

この歌は青葉大卒業生の桑田さんが青葉大での学生時代を想って作ったものらしい。

青葉学院大学時代カラオケ同好会で鳴らした優実先生の声はまさに女桑田と言える。

そしてそれは次第にみんなが肩を組み、声を揃えて一緒に歌いだした。

胸に残る愛しい人よ 飲み明かしていた懐かしいとき oh oh
秋が恋を切なくすれば 一人身のキャンパス 涙のチャペル
もうあの頃のことは夢の中へ 知らぬ間に遠く years go

by

なんかこの歌の歌詞がすごく心に染みてくる。

歌っているうちに何人かの1、2年生の娘たちが泣き始めた。

そして泣き声と歌い声が混ざったようになっていく。

こうやってまた大切な思い出がひとつずつ作られていくってすごくステキだよネ。

そして大いに盛り上がった今年のチア部送別会もいよいよ終幕。

アタシたち1、2年生は最後に2列で向かい合わせに並び花道を作って拍手で先輩たちを見送った。

645

フツと時計を見ると時間は2時30分。

今頃は笹村先輩も空手部で同じように送別会が終わる頃だろう。

それぞれの送別会が終わった後3時に学校から少し離れたLIMEという喫茶店で待ち合わせの約束をしている。

「凜、この後どーする？みんなでカラオケでも行こうかって話してるんだけど。」

「あ、ゴメン みーちゃん。ちょっと用事があつて。」

アタシは誘ってくれたみーちゃんに謝って先輩との約束の場所に向かった。

少し小走りに歩いて喫茶店の前着いたのは2時55分。
(よかった。遅れなかった。)

カランとドアを開けて中に入ると、笹村先輩が一番奥の方の席にすでに座って待っていてくれた。

「あ、ごめんなさい。待ちました?」

「いやー、オレもチョット前に来たばかりなんだ。チア部のほうの送別会どうだった?」

「フフフ。佐藤先生がサザンのYAYA歌ってね。そしたらみんなで涙の大合唱になっちゃって。」

「アハハ。あの人好きだもんなー。」

「空手部のほうはどうでした?」
「いやー、ウチはヤローばかりだから。最後は裸で踊りだすやつもいたし(笑)」

「アハハハ! 見たかったなあ。」

「そんな女の子の鑑賞に堪えられるもんじゃないって!(笑)」

「あ、エツト…。笹村先輩、ご卒業おめでとうございます。」
そしてアタシは手元の紙袋から小さな花束と手のひらくらいの包みを出して渡した。

「エ…オレに?」

「ハイ。卒業のお祝い、もらっていただけると嬉しいです。」

「あ、ありがとう。なんかびっくりした。開けてもいいかな?」

「あ、ハイ。」

笹村先輩は包みを丁寧に開けると

「オー！オルゴールだ。聞いてみてもいいかな？」
「ウン。」

箱の横にある小さなネジを巻くと流れてきたメロディーは岡村孝子の『夢をあきらめないで』

アタシは笹村先輩の目をまっすぐ見てそして言った。

「アタシも、これから先輩と一緒に歩いていっていいですか？」

笹村先輩はニコツと笑った。

「ウン。ずっと一緒に歩いていこうな。」

「ハイ。」

アタシはこのときワタル君がアタシにくれた本当のものが初めてわかったような気がした。

愛することの意味

アタシにはまだまだたくさん理解することが必要なのかもしれないけど、今のアタシにとっては好きな人と同じ道を一緒に歩いていくってことなのかなって…。

笹村先輩はコーヒーを一口飲んで

「よかったあ。じつはオレ、卒業式の最中もずっとこのことが頭から離れなくてさ、よく覚えてないんだ。」

「エー、せつかくの卒業式なものにもつたいなあい（笑）」

「アハハ。でもオレにとちゃこつちのことの方が大切だったんだヨ。」

先輩のその言葉にアタシは少し顔を赤くしてしまった。

「それはそうとき、凜ちゃん。これからは笹村先輩って言われるとオレ畏まっちゃうヨ（笑）」

「あ、そつかあ。なんて呼べばいいんだろ？」

「下の名前でもいいヨ。」

「じゃあ、トオルさん？ ウーン…まだ丁寧すぎなのかな。 トオル君って…呼んじゃっていい？」

「いいヨ。オレ、凜って呼んじゃってもいいかな？」

初めて男の人に下の名前で呼び捨てにされるのは何かヘンな気持ちがある。

でも不思議とぜんぜん嫌じゃない。

「ウン。それで…いいヨ。」

ワタル君にも凜ちゃんってちゃんをつけてずっと呼ばれていたアタシなんだけど、こうして少しずつ変わっていく自分を今感じ始めている気がする。

第七十二話 春風

トオル君と付き合い始めて二週間。

アタシは笹村先輩として接していた頃のカレとは違ったいくつかの点を見つけていた。

それは決して期待はずれというものではなく、興味深い意外なカレの一面を発見したようで、アタシは逆にそのたび嬉しい気持を感じられている。

ひとつはカレはわりとノンビリタイプであったこと。

デートのときも特にどこに行く決めて会うわけではない。

一緒にいてただ歩いているだけ、話をしているだけということも多い。

男の人はけっこう女性をエスコートしたがるタイプが多いけど、一日の計画をキツチリ立てて行動するのは忙しい感じがして、終わってみると何かノルマをこなしているようで何も残らない気がする。

一昨日のデートは行き当たりバッタリの都電の旅。

400円の日乗車券を買って早稲田から乗った。

途中目に付くところで降りてみてはお菓子を買って食べてみたり。

お昼はふらっと入った面影橋のお好み焼きのお店。

トオル君は、メニューの中から広島風お好み焼きを選んだ。

アタシはお好み焼きを片面焼きあがってひっくり返すのがとても苦

手だった。

具材の少な目の関東風お好み焼きですらいつも失敗してグチャグチャにってしまう。

まして、たっぷりのキャベツの千切り、焼きそば、そしてさらには目玉焼きまでも乗せてしまふ具沢山の広島風はアタシにはとても無理。

だからここは全面的にトオル君に頼ることにした。

「エエッ！キャベツってそんなに乗せちゃうの!？」

「そうさ。キャベツはてんこ盛りって決まってるんだ。」

「でもそんなに乗せて後でどうやって裏返すの？」

「それはな、こうするんだ！」

そう言つてトオル君はてんこ盛りのキャベツの千切りの上にさらに天カスそして豚肉を乗せて、その上にボウルに入つた残りの生地を振りかけ

そして

「1、2の3!!!」

タイミングを計つて2つの金ヘラを使ってクルツとひっくり返した。

「わぁーっ！スゴイッ！」

裏返つたお好み焼きはその厚さがゆづに4センチくらいはありそう。

「タイミングもあるけど、上に乗げたとき頂点のところでクルツと裏返すのがコツなんだ。でもまだ出来上がりじゃないぞ。」

トオル君はその厚いお好み焼きを金ヘラでギュっつと押さえつける。すると4センチほどもあつたそれは大量のキャベツが圧縮され3分

の1ほどの薄さになってしまった。

続いて鉄板の上に焼きそばを広げて味付けをしながら焼き始める。そして程よく焼きあがってきたお好み焼きの本体をその焼きそばの上に乗せて、さらにその隣で黄身を潰した卵を焼いて、その2つを合体させる。

仕上げにハケでお好みソースをたっぷり塗って、その上から青のりをパラパラ。

「さあ、完成ーっ！」

「わあい」

トオル君は金ヘラでその巨大なお好み焼きを巧みに六等分して、その一切れをアタシの小皿の上に乗せてくれた。

「スツゴイ美味しそう。じゃあ、いただきますー！」

熱々のお好み焼きを一口頬張ると、ソースの旨み、豚肉の肉汁とともにキャベツの甘さが口いっぱい広がった。

「ん~~~~~。オ・イ・シ・イ。」

「けっこういけるだろ？」

「もうスゴイ美味しいヨ~~~~！ トオル君、お好み焼きの天才！」

「アハハ。空手部のみなでさ、渋谷のお好み焼きの店によく行ったんだ。それで1年生の頃、先輩からひっくり返すコツとか全部習う。それをオレたちがまた後輩たちに教えてやる。伝統みたいなものだな。」

「へエー！ー！ じゃさ、今度そのお店にも連れてって？」
「ああ、いいヨ。凜は多分知らない場所にあるから、案内するヨ。」
「ウンッ！」

大きなお好み焼きを口一杯に頬張るカレの姿。

（フッフ。大きなこどもみたあい。）

こういうときの女性の心理ってすごくおもしろいって思う。
相手の男性が年上であっても（かわいい）って感じてしまう。

口の周りにソースと青のりが付いている。

アタシはバッグのサイドポケットからティッシュを取り出してその一枚を手に取り

「あ、トオル君。チョット顔を出して？」

そのティッシュでカレの口の周りを拭った。

少し照れたような彼の顔

その表情によけい可愛さを感じてしまう。

そしてお好み焼き屋を出ると、また都電に乗ってのんびり旅行の再開。

池袋のサンシャインをまっすぐ見られるコーナーに差し掛かったときは2人で

「わあー！」と見上げた。

しばらくして飛鳥山で思い立って下車して飛鳥山公園に向かった。

少し早咲きの桜が続く並木道をカレと歩く。
春の匂いを含んだ風がアタシの肩を優しく撫でていく。

付き合い始めてまだたった二週間。

カレも遠慮しているのか、一緒に歩いているときに偶然触れ合う手もお互い無意識に引っ込めてしまったりもする。

(ヨシッ！)

「ネ、トオル君。腕組んでもいいかなあ？」

トオル君はチョット驚いたような顔をして

「エ、あ、ああ。」

「わあい。」

アタシは彼の太い腕に自分の腕を絡ませた。

こうしたことだけでも一步一步カレの存在はアタシの心の中で大きくなっていく気がした。

途中で缶コーヒーを買って空いているベンチに座る。

このときアタシは初めて知ったことだけど、トオル君は歴史が大好きで大学進学するときも史学科に行こうかとかなり迷ったらしかった。カレのお父さんが貿易関係の会社を経営していて、トオル君は長男なので将来のことを考えて国際経済学科を選んだのだそうだ。

カレは経済関係の学部に行っても歴史の勉強はずっとしていきたいと熱心に語った。

「世界には色々な国があつて、色々な文化があるからさ。そういう別の世界の人たちと付き合つていくためにも色々な国の歴史や文化を知つておくのはすごく大切だなつて思ふんだ。」

初めて会つたときはわりとクールそうに見えたカレが自分の夢をこんなに熱く話してくれるのはアタシにはとても嬉しかった。

楽しかつた一日の終り。

カレは新宿から西武線、アタシは中央線に分かれる。今日も新しいカレをたくさん見つけることができた。

こつやつてこれから同じときを一緒に積み重ねて行くことができたらつて思つとアタシはすごく幸せな気持ちになれる。

でも一緒にいられる時間の終りはやつぱり辛い。

「じゃあ、凜、気をつけて帰るんだぞ。」

「ウン。トオル君も気をつけて帰つてネ。家に着いたらメール頂戴ネ?」

「オツケー。じゃあ。」

アタシは小さく手を振りながら歩き出す。

カレも同じように反対側に歩いていると思つてたら、フツと振り返るとカレはその場に止まつてアタシの姿を見送つてくれていた。

そしてアタシは少し離れたところからまたカレに手を振る。

第七十三話 アタシたち 青葉3人娘！

4月

いよいよアタシも高校3年生。

びっくりしたのは、高校最後のクラス替えでまたミコと同じクラスになれたこと。

これでアタシとミコは中2のときから5年間も同じクラスで過せることになった。

クラス分けの張り紙を見たときには2人で抱き合って喜んだ。

「凜！また同じクラスだヨー！」

「きゃあ やったあーっ！ 神様アリガトー！」

ここまで来るときつとアタシとミコは何かの縁なんだろう。もしかして運命の赤い糸？

「アタシたちってきつとおばあちゃんになってもずっと付き合ってるヨ。」

そんなことを言いながらアタシとミコは手を取り合って飛び上がった。

そしてさらにびっくりしたのはみーちゃんまで同じクラスになれたこと。

「凜！ ミコ！」

「みーちゃん！」

「みー！」

3人でまた1年生の頃に戻ったような気分になる。

大学に進学したトオル君とは、同じキャンパスの中とはいえ頻繁に会う機会はないけど、アタシたちのお付き合いは穏やかに続いていた。

そんなある日、みーちゃんが学校に持ってきた一冊の雑誌をアタシとミコに見せた。

「ね、ココ読んでみて？」

そう言ってみーちゃんが指を指したのは『キャンパス トライアン グル』仲良し3人組の女の子大募集!』というものだった。

「みー、これなに？」

ミコは雑誌を手に持ってみーちゃんに尋ねる。「

「なんかね、学校で仲のいい女の子3人組でデイズニートランドのCMに出演しませんか?っていうのの応募らしいヨ。」

「フンフン…。それで?」

「エットね、ひとつのCMの中に3人1組で2組のグループが出るんだって。それでそのCMが10パターンあるからしいから。」

「ということとは、2×10で20組ってことなんだ?」

「そういうこと。ね、高校生最後の学年だしさあ、アタシたちで応募してみようヨー!」

「エー、でもこういうのってきつとすごい数の応募があるヨ?」

「わかってるって。だからさ、ダメもとでいいじゃん。もし受ければ絶対記念になるしさ。」

みーちゃんはそのキラキラしたつぶらな瞳でアタシとミコを見つめる。

「ああ、アタシってみーのその目によわいんだわー！」
ミコが頭を抱えながら言う。

アタシもミコにまったく同感。

みーちゃんのそのつぶらな瞳で訴えられたら何か催眠術にかかったみたいに逆らう気がなくなってくるんだ。

「じゃあ、2人もオツケー？」

「ウン。いいヨ（笑）」

「やったあーっ！」

みーちゃんは嬉しそうな顔で両手をパンと音を立てた。

「じゃあ、応募はアタシがやっとかから。 オーディションの通知が来たら2人にも教えるからね。 あ、それと応募するのに3人で写った写真が1枚いるから、今週中に撮るわヨ！」

「エ、写真撮るの？どこで？」

「エツトね、この応募要領によると、学校の中で制服姿で撮った写真が必要なんだって。」

「でもさあ、誰が撮るのヨ？ 自動シャッターでやる？」

「あー、それだと微妙なアングルとかできないよねネエ。」

（微妙なアングルってアンタ…（笑））

「写真部の人に頼むとかは？」

「アタシ、知ってる人いないヨ。 凜は誰か知ってる？」

「ウウン。知らない。」

「それにさあ、撮ってもらって予選で落ちたら恥かしいじゃん。」

「そっかあ…。誰かいないかなあ？」

アタシは一瞬中学時代のカメラオタクの安田を思い出したが、それだと話が広がってしまう危険性もある。

そのとき、フツと思い出したのは、デートのときに時々高そうな一眼レフのカメラを持ってきてはアタシの写真を撮っているトオル君のことだった。

「ウウン…。トオル君に話してみようかな？」

アタシが独り言のようにぼつんと言つと、みーちゃんはその言葉を聞き逃さず反応した。

「笹村さん！それいいじゃん！ねえ、頼んでヨ？」

ミコまで同調して

「そっかあ。笹村さんなら頼めるネ！」

その日の夜

アタシはトオル君に電話をしてみーちゃんの持ってきたオーディイションの話をした。

「へえー。いいじゃないか。やってみるヨ。」

「でも、きつとたくさん応募あるだろうから、きつとオーディイシヨ

ンで落ちちゃっヨ?」

「それだけだつていい思い出になるじゃないか。もしCMに出れたら、オレがDVDに保存して編集してやるヨ。」

「ホント? じゃあ、やるだけやってみようかな? もしそのままデビューしちゃったらどうしよう?」(笑)

「ハハハ! そのときにはオレをマネージャーに雇つて?」

「アハハ! それいいかもネ。でも給料は安いヨ?」(笑)

「ヒ、ヒデエ...」(笑)

「あ、それでトオル君にお願いがあるんだあ。」

「なにかな?」

アタシはみーちゃんに言われた3人が写った写真のことを話した。

「なんだ。そんなことか。もちろんいいヨ。じゃあ、人の少ない土曜日にでも撮るか。」

トオル君は快く引き受けてくれた。

そしてその週の土曜日の11時にアタシたち3人組は集合。

上はブレザー、そしてスカートは考えて赤、青、黄色のそれぞれ違うチェックのプリーツスカートにした。

カメラマンのトオル君はなにやらいつもの一眼レフよりさらに高そうなカメラに三脚まで用意して現れた。

「笹村さん、今日はこんなお願いしちゃってすみません。」

ミコがトオル君にお礼を言う。

「いやー、ぜんぜん構わないヨ。それよりモデルさんたちの準備は万全? (笑)」

「もう昨日はたっぷり寝たからお肌の張りもいいし…って。アハハ (笑)」

アタシは途中で買ってきた1本の缶コーヒーをトオル君に渡した。

「トオル君。のんびり、一服してからでいいからネ。」

するとみーちゃんが

「凜、優しいー あのね、凜に笹村さんのことよく聞かされるんですヨ。」

「こらー! みーちゃんはまたへんなこと言っただからっ!」

トオル君は少し照れた様に笑った。

「よし、じゃあまず場所を決めよう。何箇所かで数枚撮ってみて、その中で一番写りがいいやつを選んだらどうだろう?」

「さんせー!」

トオル君の提案にアタシたち3人は声を揃えた。

「じゃあ、まず間沢記念館の前からってどう?」

「いいネ!」

アタシたちは大学正門からまっすぐ伸びるイチヨウの並木道の突き当たりにある古いギリシア神殿風の記念館の前に移動した。

そしてアタシ(赤)、みーちゃん(青)、ミコ(黄色)の順番で並び片手を開いて頬に寄せるお揃いのポーズで

パシヤツ！

さらにポーズを変えてもう1枚

パシヤツ！

そして銀杏の並木道の途中やチャペルの前、さらには高等部のPM講堂にも行った。

「さて、こんなもんかな？」

トオル君はカメラの表示を確認してアタシたちに確認する。

「そうですね。これって今画像を確認ってできますか？」
みーちゃんがトオル君に尋ねると

「ハハハ。そういわれると思ってね。画像を取り込むためのノートパソコンも持ってきてある。」

「さすがトオル君！」
男の人のこういうところってホントすごいなあって思う。

人の気持ちを予想して何かを準備するって女の子にはあまりないからだ。

アタシたちは大学のラウンジに移動すると、トオル君はパソコンを起動してカメラに繋げて画像を吸上げた。

「さあ、じゃあ、順番に表示させるぞ」
そう言ってドキュメントの中にあるさっき撮った画像を映し出す。

「わあー！すごい上手に撮れてるネー！」

想像していたよりもずっとキレイに撮れている写真を見てアタシたちは感動。

その中から最終的に選んだのは、チャペルの前で撮ったものだった。

そしてトオル君は選んだ1枚を含めたその日撮ったすべての写真を持ってきたCDに焼きなおしてアタシたちに渡してくれた。

「トオル君、ホントにありがとお。 あ、それでお礼に今日のお昼ご飯はアタシたちが奢るから、もう何でも好きなもの食べてネ。」

「オオツ！いいのかな？ やったーっ！」

トオル君はちよっとおどけるようにそう言って喜んでくれた。

（あっ…。）

そのときのトオル君の表情は一瞬ワタルに似ていたような気がして…。

アタシってば、こんなこと考えたりして、ゴメンね…トオル君。でも、今はアナタのことをホントに大好きだから。

第七十四話 アララ…予選通過!?

それから2週間後の月曜日

朝、いつものように教室でミコと話していると、興奮したみーちゃんがつい勢いでアタシたちのところに近づいてきた。

「ねえ!やったヨツ!やったっ!」

ハイテンションのみーちゃんにミコは呆れたように尋ねる。

「ハア? なにがやったのヨ? アンタ、またなんかやらかしたの?」

「違うわヨツ! 予選に通ったんだって!」

みーちゃんはアタシとミコの眼前に1枚の通知書をバツと広げた。

「どれどれ……。あなた方のグループはこのたびの女子高生CMオーディションにおいて、応募総数6258件の中から予選通過した350組の中選ばれましたので、ご報告申し上げます。」

「エー……! ホントに予選通っちゃったんだ!?」

「でも、アレって6千組以上も応募してたんだ? なんかスゴイね。」

アタシとミコはまるで他人事のように会話をしている。

「モーツ! アンタらもつと喜びなさいヨツ!! 6千分の350ヨツ! やったのヨ……!」

みーちゃんはさらにテンションを急加速させて叫びはじめる。

「まあ、スゴイとは思っけどさ、今度はその350組の中からたった20組でしょ？ 6%以下じゃん？」

「まったく、アンタらって冷めてるよネツ！ とにかくアタシたちはデビューの足がかりを手にしたのヨッ！」

「アハハ。デビューって…アンタ…。もし最終合格したってCMに7秒出るだけなんだし（笑）」

「最初は小さな一歩でも、それはアタシたちにとって大きな一歩となるのヨッ！」

「ハイハイ（笑） それで？ これからどうすることになるの？」
とにかくテンションMAX状態のみーちゃんの気を静めるため、ミコが話題を変えた。

みーちゃんは通知書を改めて読み直す。

「エツトね、来週の日曜日に新宿のアルタスタジオで本選を行いますのでお出てください。エツト…それでね…」

「へえー！新宿でやるんだあ？」

「ねえ、ミコ。この前スツゴイ美味しいクレープ屋さん見つけたんだけど、帰りに行ってみない？」

「あ、いいねえー！ アタシ、チョコバナナで生クリームたくさんがいいなあ。」

「アタシはね、イチゴでやっぱり生クリーム大盛りにしようかな。みーちゃんは？」

「エツト、アタシはねプリンアラモードに生クリームてんこ盛りで… ってちがぁぁぁー…うっっ！！ アンタらには気合ってもものがないのっ！？」

「アハハ！ゴメン、ゴメン。ちゃんと聞くから。」

の後を続けて？」

「まったくもう！」

みーちゃんは気を取り直して話を続けた。

「それでね、本選の審査内容は、3次まであつてね。」

「ウンウン。」

「1次は1組3分間の面接。これで350組が50組に絞られるんだって。」

「キツツイネー！ それで、もし万が一それに通っちゃったら？」

「万が一ですってっ!？」

みーちゃんがギロツと怖い目でアタシたちを睨む。

「アハハ。ゴメン。それで2次は？」

「エット……。2次は各組で一曲デュエットの歌を歌ってもらいますだつて。」

「エーッ！歌？ アタシ自信ないなあ……。」

「じゃあ、今日から特訓ヨツ！イイネツ！凜。」

「アアアア……。」

「それで、それにも合格すると3次が最終で水着審査だつて。」

「エエエエー……ッッ！ 水着審査あぁ……っっ！」

「水着審査はデビューへの登竜門なんだからしよーがないでしょっ！ とにかくあと6日間しかないんだからネツ！ 今日から部活のない月・水・金曜日はカラオケで特訓ヨツ！ さあっ、今日から頑張っていくヨオオ……ッッ！」

そう言ってみーちゃんは拳を握り締めて勢いよく上にあげた。

(ハアアアア~~~~~).....)

その日の放課後

アタシとミコはみーちゃんに強制連行されて渋谷のカラオケボックスに連れて行かれた。

「まず面接は雰囲気が大切ヨッ！とにかくその場だけでも無理しても装うの。ホラッ！ミコ、アンタ、いくら女同士だからってそんな足かっぱろげてんじゃない！パンツ丸見えだヨッ！凜はそんなズーズー音を立ててジューズ囁るんじゃないのっ！雰囲気ヨッ！雰囲気！女子高生の活発さの中にも女の子らしさみたいなのをアピールするのっ！！」

「ハア……。なんか難しいんだネエ……。」

「まず、選曲が大切ネ。3人デュエットの曲っていうと……。」

「『ハレ晴レユカイ』でもやる？アレってたしか3人じゃん。」

「ダメよっ！アニメ系はリスクが大きすぎるから。一歩間違えると、オタク系って思われちゃうかもしれないじゃん。」

「そう？じゃあ……ウーン……。AKBとか？」

「アレはもつと人数多くなくっちゃ迫力でないヨ。」

「みーちゃん、注文多すぎだよ……。」

アタシはそう言いながら、カラオケの選曲集をパラパラとめくった。

そしてあるページで手が止まる。

「ん~~~~、キャンディーズとかって？」

キャンデーズ

もう30年位前に解散した女の子3人組の伝説のデュエットグループ。

アタシたちが生まれるずっと前の、懐メロにも出てくる曲ばかりだけど、今でもTVとかで時々流れてくる甘くて切ないメロディーだった。

最近ではそのうちの一人が癌で亡くなったことで、昔の曲が流れているのを耳にした。

今っぽいメロディーじゃないけど、何か耳に心地よい、優しい曲だなって思った。

「キャンデーズ！ いいじゃない！ 思いもよらない選択！ これだったら他のグループが思いつきにくいから差がつけられるヨッ！……」
みーちゃんの鶴の一声でキャンデーズに決定。

「じゃあ、それにしよう。 エット、3人のパートを決めなくちゃネ。」

そう言いながらミコがみーちゃんの顔をフツと見ると、もう彼女はやる気満々（苦笑）

「いいヨ。 みー、アンタ、真ん中のメインボーカルやんなヨ（笑）」

するとみーちゃんは

「エッ、アタシ？メインボーカル？ しょーがないなあ。」
とかなり白々しい（笑）

「エット、それじゃアタシと凜で左右のボーカルってことだね。

凜、どっちがいい？」

「あー、アタシ、どっちでもいいヨ。」
「じゃあ、アンタってアタシより高音だから、向かって右側の人や
ってヨ。アタシは左側をやるから。」
「ウン。オッケー。」

そして曲はいろいろスツタモンダした結果、『年下の男の子』に決
まった。

真赤なりんごをほおばる
ネイビーブルーのTシャツ
あいつは あいつはかわいい
年下の男の子
淋しがりやで 生意気で
にくらしいけど 好きなの
LOVE 投げキッス
私の事好きかしら はつきりきかせて
ボタンのとれてるポケット
汚れてまるめたハンカチ
あいつは あいつはかわいい
年下の男の子

それからなんと2時間！
アタシとミコはみーちゃんに監禁されて、この歌を嫌になるほど繰
り返し歌わされた。

ようやく解放されたのは7時。

「あー、もうアタシ喉ガラガラ〜〜！」
「いい？ YouTubeでキャンディーズあるはずだから、帰っ

たらちゃんと自分のパート復習するのヨッ!？」

「ハイハイ(笑)」

それから1週間はまるで拷問のような日々が続ぎ、来る日も来る日もカラオケ通い。

そしていよいよ日曜日。

本選の日がやってきた。

第七十五話 一次の結果は？

そして日曜日

いよいよ本選当日。

集合時間は午前10時だったが、アタシたち3人は1時間前の9時にアルタ近くの喫茶店に集合した。

本選は特集番組として数日後にTV放映されるということで、2次審査と3次審査では中にあるスタジオを使用することになっている。

この日、アタシたちの応援に駆けつけたのは、トオル君、芦田さん、さらには久美ちゃんとワタルAコンビ、また落選したときにせめてもの記念に写真を撮ろうと高級機材を引き下げて安田と井川さんコンビまで揃った。

そしてこの応援団6人とアタシたち3人は、今喫茶店の一角に陣取って、最後の綿密な予行演習を行っている。

もちろん、リーダーはみーちゃん。

「いい？ まず1次をいかにして通るか。これさえ通れば2次のデュエットでアタシたちの可愛さに絶対注目するはずヨッ！」

「そうかなあ……。」

「そうなのヨッ……！」

みーちゃんは自分のバッグの中からこの日のために自作した想定問答集を取り出してページを開く。

「じゃあ、まず予想される質問は、なんといつても『今回のCM出演の応募は誰が言い出したんですか?』っていうところネ。エックト、まず凜、答えてみなさい。」

アタシは目の前に置かれたイチゴパフェにパクつきながら答えた。

「言い出したのみーちゃんじゃないの?」

するとみーちゃんはブンブンとクビを横に振って

「ちがああー……うっ!」

と叫ぶ。

「あれ?違うの?」

「それはたえそうであつても言っちゃいけないの! そんなこと言ったらアタシが出たがりの目立ちたがり女みたいに思われちゃうじゃん!」

「アハハハ! そのとおりじゃん!」

横からミコが茶化す。

みーちゃんがミコをギロツと睨むと

ミコは「やあん、怖……い。」

と首をすくめた。

「まあ、いいワ。」

みーちゃんは気を取り直して再びアタシの方を振り返り

「いい?凜。だからねっ! そういうときは、『クラスの友達が知らないうちにアタシたちの応募をしちゃったんデス。』って言うのが王道なのヨ。そういう奥ゆかしさみたいのがいいわけヨ!」

「ふうん。そうなんだ?」

アタシたちの漫才を聞きながら、トオル君と芦田さんは口を手で押えながら肩を震わせて笑ってる。

一方で、この日初めて会った安田とワタルAはかなり意気投合したらしく、アタシたちの会話をまるで無視してパソコンの話題で盛り上がっていた。

そして、時間は9時40分。

「さあ、そろそろ行くわヨッ！　ここからアタシたちのシンデレラストーリーが始まるのヨーツ！」
「みーちゃんが雄たけびを上げた。」

「オーoooooooooo！」

アルタの中に入ると、案内係の男の人が数人立っていた。

「本選出場の方々はこちらの控え室に入ってください。　応援の方は客席の方にご案内しまーす！」

アタシたちと応援団6人はそこで分かれて、アタシたち3人はパイプ椅子の並ぶ控え室に入っていく。

周りを見るとすごい人数の女の子たちが集まっているのがわかる。

「本選出場の350組のうち150組が関東エリアで、そのうち8

組が決まるらしいヨ。」

「じゃあ19倍じゃん！とても望みなさそうだねえ。」

アタシとミコのそんな会話にみーちゃんが反応する。

「今からそんな弱気でどーすんのヨツ！ 気合ヨ！気合ツ！」

しばらくして担当者らしき人が部屋に入ってきてマイクを持って話し始めた。

「エー、今回は『キャンパス トライアングル、仲良し女子高生グループを探せ』にご応募いただきありがとうございます。これより本選を開始いたします。第1次としまして、30組ずつに分かれて1組あたり3分間の面接を実施します。それでは係のものがこれから皆さんを各面接室にご案内します。」

アタシたちはエントリー番号328番で、第11面接ルームへ案内された。

そしてこのルームではエントリー番号301番から1組ずつ順番に部屋に入っていく。

その後彼女たちが部屋から出てくるたびに他の組の女の子たちが雰囲気を感じあつて情報交換をする。

「今までの娘たちに聞いた感じでは、およそ想定範囲での質問が多いみたいネ。」

みーちゃんがアタシとミコに囁く。

「みーちゃんの作った本の中からでるといいネー。」

「まあ、やるだけやって、後くされないように頑張ろう。」

「何言ってるんのヨッ！なんとしてもここを突破するのっ！」

「ハイハイ（笑）」

それからしばらくして、いよいよアタシたちの番が来た。

「それでは328番のグループ、入ってください。」

係の人に案内されて中に入っていくと、そこには横長の机の前に中年の男の人が2人と30代くらいの女の人が1人座っていて、その前にパイプ椅子が3つ並べられていた。

「こんにちわ。さあ、座ってください。」

そのうちの一人の男の人に促されてアタシたちは、左からみーちゃん、ミコ、アタシの順番でその椅子に座る。

「じゃあ、まず高校名と順番にお名前をお願いしますか？」

みーちゃん「ハイ。青葉学院高等部、佐倉 美由紀です。」

ミコ「同じく藤本 美子です。」

アタシ「同じく小谷 凜です。」

「エツト…。書類によると、佐倉さんと小谷さんは学校ではチアリーダーング部、藤本さんは水泳部に入ってるらしいですね？」

3人とも3年生ですから、いよいよ来年は卒業ですが、3年間クラブ活動をやってきてどうでしたか？ 一言ずつお願いします。」

みーちゃん「2年生のとき都大会で2位を取れたことがとても嬉しかったです。」

ミコ「色々なことに最後までやり切れる根性がついたって思います。」

アタシ「私は高校からチアを始めたんですけど、素晴らしい仲間と

たくさん出会えたことに感謝しています。」

その質問を下男の人はアタシの方を見てニコツと微笑んだ。

「なるほど。友達は一生の宝物ですから、その気持をこれからも大切にしていってくださいね。」

「それでは最後に皆さんそれぞれにひとつ質問をさせていただきます。今あなた方は高校3年生、まだまだ人生はずっと先まで伸びています。これからの人生の中であなた方がずっと学んでいきたいことってなんでしょうか？ ひとつだけ答えてください。」

まったく想定外の質問だった。

みーちゃんは笑顔を浮かべながらも少し引きつっている。

みーちゃん「エツト…あの…、英語とか、将来のために…。」

「なるほど。しっかり知識と教養を備えるんですね。頑張ってください。藤本さんは？」

ミコ「アタシは歴史をたくさん勉強したいです。小学校の先生になりたいので、将来生徒たちに色々な国の人たちの歴史を話してあげたいと思っています。」

「ホウ！小学校の先生ですか。それは楽しみですね。キミみたいな熱心な先生だったら生徒たちもきつとキミの話に興味を持ちますよ。それでは最後に小谷さんは？」

アタシ「アタシは人を愛することの意味を一生をかけて学んでいきたいって思っています。それは中3のときの担任の先生から卒業式

の日に私たちに与えられた最後の宿題なんです。」

「ホ…ウ。それは、興味深いですね。そうですか。アナタはとても良い先生に学んだようだ。その宿題はぜひともやり遂げてください。私も応援します。」

たった3分間の面接はこうしてあっという間に終わった。

「あ~~~~、最後の質問、アタシ失敗しちゃったかなあ…。」
ここにきてみーちゃんは急に弱気になってきた。

「だいじょうぶだって。みーの一生懸命さはしっかり伝わったと思うヨ。」

「そうだといんだけどなあ…。」

それから1時間後。

再び最初の大きな控え室に戻ったアタシたちにいよいよ1次の結果が発表される。

「それでは1次の結果を発表します。エントリー番号を呼ばれた方はこの場に残ってください。惜しくも呼ばれなかった方は、申し訳ありませんが退場をお願いします。それでは…。」

「あ~~~~、お願いっ！好き嫌い失くすからっ！これか

らはちゃんとピーマンもニンジンも残さないで食べるから。」
みーちゃんはそう呟きながら両手を握り締める。

「エントリー番号11番 都立北高校チーム。」
アタシたちのかなり前の方の席で「わぁーっ!」と歓声が上がった。

「続きましてエントリー番号21番 私立城南女子高校チーム。」
今度は後ろの方で大きな歓声。

「3組めはエントリー番号28番 都立松川商業高校チーム。」

そしてどんどん番号と名前が呼ばれていって47組目も発表される

「ああ、やっぱり厳しいかなあ。」

「しょうがないヨ。一生懸命頑張ったんだし。」

「ミコ、帰りクレープ屋さん寄ってこうね?」

「ウン。生クリームやつぷりネ(笑)」

「アタシも付き合っワ(笑)」

3人でそんなことを話していたとき

「それでは49組目です。 エントリー番号328番 青葉学院高等部チーム。」

「ホラ、青葉学院だってさ?」

「エ、青葉?」

「ウソッ!アタシたちじゃん!」

アタシたちは3人同時にバツと立ち上がった

「きゃあぁ~~~~~!!」

と叫び、手を取り合って喜んだ。

50組目は341番。

こうしてアタシたちはなんとか1次の枠に辛くも滑り込んでしまったのだった。

早速応援団にも報告をすると、みんなびっくり!

そしていよいよ2次からはスタジオでTV撮影となる。

第七十六話 結果発表

一次審査をなんとか通過したアタシたちを含めた50組は二次審査開始までの1時間でお昼ご飯を取ることになる。

そして応援団の6人を含めたアタシたち9人は、アルタ近くのスパゲティ屋さんに入った。

「凜、すごいじゃない！アンタたち本当にCM出れるかもしれないヨー！」

久美ちゃんがシーフードスパゲティを頬張りながら少し興奮気味に言った。

「ワー、どうしよう。ね、ミコ。最終合格したら賞品ってなんだった？」

「エットね、まず賞金が30万円、それとデイズニールランドの年間パスポートに近くの高級ホテルの2泊3日宿泊券が3人分だつて。」

「スゴイねー！アタシ、トオル君に何かプレゼント買ってあげようかなあ。」

「おおつ、楽しみにしてるぜー！」

「あとさ、みんなでお祝いのパーティーやるつヨー！」

「イイネーッ！」

二次審査を通過するのは50組のうちたった15組。

アタシたちはそんな現実もよく理解せずすでに夢気分状態になっている。

すると今までやたらアタシたちに気合を入れまくってきたみーちゃん、急に慎重な表情になった。

「ここまででは勢いで来れたけど、ここからが勝負ヨ。いい？凜、ミコ。二次のデュエット曲で選ばれるのはたった15組。きつと上手に歌うだけじゃ印象に残らないから、表現力とかも重要じゃないかって思うのヨ。アタシたちの可愛さをしっかりアピールするの。」

「そうだねー。でも、ウチの組には装っただけなら超一流のみーちゃんがいるし。」

「アタシは装っただけの女かーっ!」

「アハハハ。ゴメン。」

そこにいつも冷静沈着、中学時代は我がクラスの委員長だった井川さんが客観的な意見を言ってくれた。

「でも、今の佐倉さんのアドバイスはわかる気がする。少しくらい失敗をしても、小谷さんたちが明るく元氣一杯に歌ってる姿のほうがきつと見てる方にとって気持ちいいんじゃないかな。」

「そう！アタシが言いたかったのはそこヨツ！さすが井川さん、アナタとはこれからいい友達になれそうだワ！」

みーちゃんは白々しく井川さんに同調。

「アハハ…。そうネ」

井川さんはなんとも困った顔で答えた。

「まあ、とにかくさ、楓ちゃんが言うんだったら間違いないから、細かいことを気にするよりアタシたちらしく頑張ってみようヨ。」
ミコがそう言ってまとめる。

「アタシが言うとうソっぱいのかーっ!?!」

みーちゃんがすかさず突っ込みを入れてくる。

「いや、そんなこともないけど…（笑）」

そしていよいよ二次選抜開始の時間

ここからは特番としてTV放映が予定されているため、審査の様子が撮影されることになっている。

アタシたち3人はスタジオの控え室に集合。

応援団たちは客席に座った。

しばらくすると係の人が来て要領を説明する。

「それでは二次審査を開始します。 エントリー番号の若い組の順にステージにあがって予定した曲の1番だけを歌ってもらいます。採点は審査員5人が各10点ずつ持って評価をします。出場する50組のうち合計点数の高い順に15組が最終審査に進むこととなります。 それではエントリー番号11番の都立北高校チームはスタンバイしてください。」

呼ばれた北高校の女の子3人はアタシたちの席のすぐ近くに座っていた。

彼女たちはかなり緊張した顔で席を立ち上がって歩き出す。

アタシたちの席の前を通ろうとしたとき、そのうちの一人の娘の足がパイプ椅子の足に引っかかって倒れそうになった。

「ぎゃあっ…」

「あっ！」
彼女が倒れそうになるギリギリのところであタシが手を伸ばして支えた。

「ゴ、ゴメンなさい。」

「ウン。だいじょうぶですか？」

「ハ、ハイ。」

「頑張つてネ！」

「ありがとうー。」

そう言つて彼女たちはいよいよスタジオに向かった。

しばらくすると、みーちゃんが落ち着かない様子で足を組んだり外したりし始める。

「どうしたの？」

アタシはみーちゃんに囁く。

「ウン。スタジオってどんな感じなのかな…って気になっちゃって。」

「まあ、考えたつてしょうがないヨ。アタシたちの順番は最後から2番目か…。」
そう言つたミコも少し落ち着かない様子。

すると係の人が控え室の入口のところに出場者の歌う曲を一覧にしたものを貼り出した。

そこに待っている女の子たちが一斉に集まってくる。
アタシたちもその表を見に行った。

「あ、やっぱり、『ハレ晴レユカイ』あったヨ。」
「その曲、3組も歌うね。やっぱり避けてよかったワ。」
「AKBも曲は違うけど5組かぁ。みんな考えることは一緒なんだネエ…。」
「キャンデーズはさすがにアタシたちだけか。」
「同じ曲だと比較対象にされちゃうからよかったネー。」

歌う時間は一組当り約2分間。

しばらくすると、1番目の北高校の女の子たちが戻ってきた。

「さっきはありがとうお。」
椅子につまづきそうになった娘がアタシに話しかけてきた。

改めて見ると、パッチリした目にかわいらしい長めのソバージュヘア。
とてもオシヤレな、性格もよさそうな娘。

「ウン。アタシはいいヨ。歌の方はだいじょうぶだった？」

「もうすっごい緊張しちゃった(笑)」
ペロツと小さく舌を出しながらそう答えた姿がとても可愛い。

「スタジオってどんな感じだったの？」
「お客さんが200人くらい座っててね。それで審査員の人がステージの前のところに10人いたかな。チーム名と曲紹介があつてすぐにイントロが流れてきてね。もう足が震えてきちゃって…。」
「お互い受かるといいネー。」
「ウン。あなたたちもがんばってネー！」

そして、それから約1時間半が経ち
いよいよアタシたちの順番が来た。

「わあっ。」

ステージの上に立つとライトの光がすごく眩しい。

「それでは続きまして、青葉学院高等部チームです。曲はキャンデー
ーズの『年下の男の子』」

紹介が終わるとともにイントロが流れた。

アタシたちはすぐに振り付けに入る。

やったっ！ 上手く曲に乗れたっ！

真っ赤な林檎を頬張る ネイビーブルーのTシャツ

アイツは アイツは 可愛い 年下の男の子

みーちゃんに何度も注意された腰振りのタイミングも上手くいった。
アタシたちは何とか最後まで歌い切ることができた。

終わるとぱちぱちと拍手が起こる。

客席の方を見ると応援団のみんなが手を上げて声援してくれていた。

そして最後のチームが歌い終わり、それから1時間後、いよいよ二
時審査の発表。

「それでは合格チームの番号を発表します。 まずエントリー番号

「11番都立北高校チーム。」

「きゃあぁーっ!」

「やったぁーっ!」

あの娘たちやっぱり受かったんだ。

「エントリー番号48番フェリアス女学院高校チーム。」

それから12チームが順番に呼ばれていった。

「あゝゝゝ、やっぱりダメだったかなあ…。」

「あと1チームだね。」

みーちゃんは目を瞑って下を向いている。

そして

「最後の15組目はエントリー番号328番の青葉学院高等部チーム。」

（あっっ!）

「やったっ!やったヨッ!」

「ウソーーッ!」

「きゃあぁーっ!」

なんと信じられないことにアタシたちは最終審査に進んでしまった。

控え室に残った合格チーム15組。

「やったネー！ ホントに一緒に受かっちゃったネ。」

「ウン。よかったネー！」

「これからヨロシクね。」

「こちらこそー。」

3人ずつでお互い握手した。

なんかウソみたい。

アタシたちホントにTVCMに出ちゃったんだ。

第七十七話 デビュー？

そして本選の日から10日後
いよいよCM撮影本番の日が来た。

日曜日朝6時のデイズニerland。
開演10時までの4時間を使うわけだ。

1つのCMで2組ずつが出演し、1回のCM撮りで8組4パターン
分が一気に撮影される。

そしてこの前の本選で選ばれた関東エリアの8組が今日集合した。

ここで最初にくじ引きが行われ、1パターン2組ずつに分かれる。
アタシたちと同じ第2パターンの相手になったのは偶然にもあのと
きの都立北高校チームだった。

「わあ、ここまで一緒だとなんか運命を感じちゃうよネー！」

「ホントだネー。」

アタシはあのとときのソバージュの女の子と手を取り合って喜んだ。
彼女の名前は相沢美貴ちゃん。

アタシたちよりも1学年下の高校2年生だそうだ。

現場にはカメラや照明や音声を取るマイクなどが所狭しと並んでい
る。

「それじゃ第2パターンの説明をします。青葉学院と北高の方は集

まってください。」

「エー、まず前半の10秒について。画面の左手の方から青葉組が、そして右側から北高組がそれぞれ楽しそうに歩いてきます。2組が画面中央ですれ違ったとき右端の空間にドアがパツと現れてます。そしてそのドアが開いてタキシードを着たウサギが出てくる。アナタ方6人はそのウサギを見てびっくりしながらも追いかけていくと、2組6人の女の子たちはいつの間にか不思議の国に迷い込んでしまう。そして最後の5秒間でミッキーやミニー、ドナルドなどと一緒にダンスをする。こういう設定です。」

空間に現れるドアやウサギなどは後でCGで入れるらしい。

そこで今はとりあえず目印になるように、ボール紙にウサギの絵を描いて長い棒を付けたものが代わりに使われる。

その棒をADさんが持ってウサギの動きのように動かし、それをアタシたちが追っていくわけだ。

周りに50人くらいのエキストラさんたちが他のお客さんとして散らばる。

そしてそこにそれぞれ自分の学校の制服を着てミッキーの耳を頭に乘せたアタシたち2組が左右から楽しそうに話しながら歩いてくる。

「ハイ、カッター！ツツ！」

次はすれ違うシーン。

そこにADさんがウサギの絵の付いた棒を差し出す。

アタシたちはびっくりした顔をして、そしてその絵を追いかけていく。

絵の付いた棒は左右に動き、ときどきウサギが飛び跳ねる動きをしたりしながらアタシたちの手を逃れて走っていく。

「ハイ、カットー！ーッ！ーッ！」

そしてアタシたちは急に不思議の国に迷い込み、周りにはディスプレイの色々なキャラクターたちが動き回って、アタシたちはびっくりしながらも彼らを見て楽しそうな顔をする。

「ハイ、カットー！ーッ！ーッ！」

「それじゃ最後はダンスいきます。キャラクター全員集合！」

今まで横に控えていたミッキーたちが全員出てきて、アタシたち6人と一緒にダンスを踊る。

こうして撮影は終了した。

アタシたちの第2パターンが放映されるのは1カ月後の6月後半から2週間の予定。

そしてこの日は撮影終了後、8組24人の女の子たちが集まって近くのホテルで昼食会が行われた。

昼食会は立食のバイキング形式で行われ、サプライズゲストでミッキーとミニーたちも登場。

アタシたちは大喜びでカメラのシャッターを押す。

その途中、北高の相沢美貴ちゃんと会話をする。

「凜さんは青葉学院なんですよね？ いいなあ。」

「いいなあって？」

「だって、そのまま青葉大に内部推薦されるんでしょ？ アタシも青葉大受けたいなあって思ってるんです。」

「あ、そうなんだあ。じゃあ頑張って絶対受かって！ アタシ待ってるヨ。」

「ハイ、頑張ります。でも倍率かなり高いしなあ（笑） ね、凜さんって付き合ってる彼氏っているんですか？」

美貴ちゃんの唐突な質問にアタシはチョット戸惑う。

「あ、エイト…ウン。いるヨ。」

「あ、やっぱり。きっといるんじゃないかなって思ったの。」

「どうしてそう思ったの？」

「控え室に入ったとき、凜さんのこと見たとき（あ、ステキな人だな）って思ったから。可愛いっていうのもあったけど、雰囲気がすごく愛らしい感じがして。きっとこういう人にはステキな彼氏がいるんだろなって。」

「なんかそういうふうに言われるとすごく照れる（笑）」

「凜さんの彼氏ってどんな人なんですか？」

「ウン…。そうだねエ。温かくって、一緒にいてお互いが優しくなれる人…かなあ。」

「あ、そういうのっていいですよネ！お互い優しくなれる関係ってすごく憧れる。」

「美貴ちゃんは彼氏はいるの？」

「ウン。じつはアタシもいます。」

「だったらきつと美貴ちゃんたちも周りから見てステキなカップルだって思うヨ。だって、アタシも初めて美貴ちゃん見たときアナタと同じこと感じたモン。」

「エへへ…。」
彼女は少し照れながら笑った。

それから1カ月後。
いよいよアタシたちが出演したパターンのCMがTVで始まった。

CM出演が決まった時点で学校には正式に届けを出して了承をもらっていたが、周りの人たちの反応は想像よりずっと大きかった。

クラスの人たちは周りからの情報で知っていた人が多かった。
そのため「CM見たヨー！」くらいの感じがおおよそだったけど、他のクラスの人たちがときどきアタシたちを見にウチのクラスに来たり。

そしてCMが始まって1週間くらいすると、とうとう他の学校の男子が放課後の正門の前でアタシたちが出てくるのを待っていたりすることもあった。

最初はチョットアイドル気分だったアタシたちもそういうのを見て、大学の正門のほうから出入りしたりすることもあった。

そうした中でもうすぐ次のパターンのCMになるうとするとき、ある月曜日の朝、教室に入るとみーちゃんがあタシとミコに

「あのさあ、じつはCM撮影のときの事務所から連絡があったの。」
と言ってきた。

「なんかよくわからないけど、今週の水曜日の放課後に赤坂にある事務所に来てもらえないかって。」

「なんだろうね？」

アタシたちには呼び出される理由は全然ない。

CM出演のときに交わした契約では、TV出演はあの1回だけで賞品の授受とかもしれない。つまり終わりかけていた。

そして水曜日の放課後

心当たりのないままとにかく指定された赤坂の事務所に行った。

アタシたちは事務所の奥にある応接室に通されてコーヒーを出された。

そしてしばらくするとコンコンと音を叩く音がして入って来たのは本選の一次審査のときにアタシたちの面接ルームにいた男の人だった。

「今日は皆さん放課後に事務所まで呼び立てしてしまっただけです。ありませんでした。」

その男の人は40代くらいできちつとしたスーツを着てとても貫禄があるように見えた。

その人は高校生のアタシたちに対してちゃんと丁寧な言葉です。う挨拶する。

「今日お呼びしたのは、皆さんのお気持ちをお伺いしたいためなんです。」

「アタシたちの気持ちですか？」

ミコが少し不思議そうな顔で尋ねる。

「そうです。じつは先般のCM出演の応募は、本来のCM出演という趣旨の他に将来の芸能界で活躍できる才能を発掘する意味も含まれていまして。これは応募者の皆さんにはあえてお伝えしていませんでした。

そして最終審査に合格した20組の中で、特に何組かの人をスカウトしたいと考えているのです。」

「ス、スカウト！？アタシたちが？」

アタシたちは3人で顔を見合わせた。

「そうです。もちろん皆さんそれぞれ魅力がありました。その中で私が実際面接した中でアナタたち3人がとても印象に残ったのです。もしアナタ方がそういう道を考えてもいいというのであれば、当事務所が全面的にバックアップさせていただきますが、どうでしょうか？」

アタシたちは3人ともすぐに言葉が出てこなかった。

芸能界に入れば、今まで自分がいた世界では体験できない刺激があるかもしれない。

でも何かを求めるということは、裏返せば逆に他の何かを失うことのような気がした。

アタシは今アタシを取り巻くいろいろなものを失いたくはなかった。

「すみません。アタシは、そういう気持ちはないです。」

アタシはその男の人にそう答えた。

「ほう。いや、失礼かもしれませんが、芸能界は多くの若い方があこがれる世界です。しかしそういうチャンスに恵まれない人がほと

んどですが、正直もつたいない気がしますが。」

「仰ることはよくわかりますけど、アタシが努力して行きたいのは芸能界とは別の方向にあるって思うので。」

そう答えるとアタシの横にいたミコが

「アタシも彼女と同じです。あの面接のときお話したことですけど、アタシ小学校の先生になりたいって思ってるんです。」

「そうですね。アナタ方のお気持は固いようですね。残念です。」
すると

それまでじっと考え込んでいたみーちゃんは

「あの…アタシ、希望します。」

「みーちゃん？」

「みー？」

アタシとミコはみーちゃんのほづを振り返った。

「アナタは希望しますか？」

その男の人はみーちゃんにもう一度確認した。

「ハイ。」

みーちゃんは今度はまっすぐ正面を向いてハッキリ答えた。

そして彼女はアタシとミコの方を向いて

「アタシ、やってみたいの。いいかなあ？」

「それはもちろんみーちゃん自由だけど…。でもアタシたち3年生で大切な時期だよ？」

アタシとミコはみーちゃんにそう言うがみーちゃんは

「わかってる。でも、アタシやってみたいの。ずっと憧れだったけど、こんなチャンスきつとないって思ってた。でも今そういうチャンスがあつて、これを逃したらきつと後悔するって思つから。」

人生にはきつとたくさん分岐点があるのだと思つ。

どっちを選ぶかは自分の将来への希望だけじゃなくそのとき自分が置かれた状況とか色々な要因があるだろうけど、それはある意味どちらかを選択すればどちらかを捨てるというシビアな面を持つてるのだと思つ。

それからしばらくしてみーちゃんは学校を欠席したり早退したりする回数が急に多くなった。

携帯電話にかけてもつながらず、家に電話をすると夜かなり遅い時間帯になつてもまだ帰ってきていないようだった。

授業がそんな状態だったから、チア部にも当然まったく出てきていない。

「ねえ、ミコオ。どうしたんだらうネ？」

「ウーン…。この前偶然正門のところでみーと会つただけだね、今芸能関係の色々なところに挨拶したりプロデューサーと打合せしたりですごく忙しいって言つたヨ。でも、こんなに休んでばかりたら…。」

そう。

アタシもミコが言おうとしたことと同じ気持だった。

青葉学院高等部はたしかに卒業生のほとんど全員が青葉学院大学に内部推薦される学校だ。

でもそれは一応3年間（とくに3年2学期）までの成績と内部推薦テストの結果が前提であって、それによって進学する学部や学科も決定される。

何の努力もしないでただ時期が来れば大学の推薦が転がり込んでくるなんてことはありえない。

もうすぐ夏休みになるけど、その前に定期試験があって、夏休みが終わって2学期の成績が評価対象として見られる。

今まで青葉学院高等部には何人か芸能界でのお仕事を並行してやっていたひとがいたという話も聞くけど、そういう人たちは実際はかなりすごい努力もしていたそうだ。

アタシとミコは芸能界にドンドン傾倒していくみーちゃんが心配だった。

第七十八話 友情 1

そしてとうとうみーちゃんは1学期の期末テストのうち最終日の3教科を丸々欠席してしまった。

アタシとミコは本当に心配になってきた。

「まさか、あの娘本当に大学に進学しない気じゃ…。」

「それ以前にこのままの出席日数じゃ卒業だって危ないかもしれないヨオ。」

携帯電話にかけてみても中々つながらない。

アタシたちはみーちゃんが所属する予定のあの赤坂の芸能事務所に行ってみることにした。

受付でこの前アタシたちを事務所に呼んだ前田さんに会いたい旨を伝えて名前を言うと、アタシたちは応接室に通された。

しばらくすると30代前半くらいでかなりラフな服装をした感じの男の人がノックもせずいきなり部屋に入って来た。

「前田常務が今不在なので。ボクが佐倉 美由紀のマネージャーをやっている野崎という者だけど、キミたちは？」

慇懃無礼そうにその人は挨拶もなくアタシたちにそう言った。

「アタシたちは佐倉さんの高校の友人です。彼女が最近学校にあまり登校してこなくなりました。そして今日はとうとう期末テストを欠席してしまっただんです。心配でここに伺ってみたのですが、これはどういうことなんでしょうか？」

ミコはその人の方をまっすぐ向いてそう尋ねた。

するとその人は
足を組み、ポケットからタバコを1本取り出して火をつけた。

そして

「ホウ…。」煙を吐くとワントンポ置いてその人は言った。

「高校は…いいんだ。」

「いって…どういうことですか？」

アタシはその人の吐くタバコの煙を避けながらそう尋ねた。

「彼女は青葉学院からもっと仕事に融通の聞く学校に転校させるつもりだから。」

「エエエツツ！」

「それは彼女も承知していることなんですか？」

「もちろんだ。本人の口から聞かせようか？」

「今、彼女がいるんですか？」

「ああ、奥の部屋で打合せをやってるはずだから呼んでこよう。」

そう言つてその人はすつと立ち上がつて部屋を出た。

10分ほどして部屋のドアが開かれ、そしてさっきの男の人の後ろからみーちゃんが入つて来た。

「みーちゃん！」

アタシとミコは立ち上がつて彼女に呼びかける。

「凜、ミコ。ひさしぶり。」
そう言って彼女はアタシたちの前のソファに腰を下ろす。

「ねえ、みーちゃん。アナタ、他の高校に転校するって聞いたけど、ホントなの？」

アタシは単刀直入にみーちゃんにそう切り出した。

「え、あ、ああ…。…かもしれないって…。…ことかな。」

するとミコが少し怒ったように

「みー、アンタせっかく頑張って青葉に入学して、入学してアタシたちと初めて話したときあんなに喜んでたじゃない？ 将来は青葉大に進学するんだって言ってたじゃない？ どーしたのヨ!？」

みーちゃんはミコの言葉に少し俯くように答えた。

「だって…。…こんなチャンスもうきつとないんだヨ？ アタシ…。…」

「でも、芸能界ってそんなに甘いところじゃないって思うヨ。今はまだデビュー前だからいろんな夢を見るけど、次から次に新しい人がデビューして追いかけてくるんだヨ？ もし芸能界でみーちゃんの居場所がなくなっちゃったとき、どーするの？ もう最初にアナタが居た場所に戻ることはできないんだヨ？」

すると今までみーちゃんの横で黙っていたさっきの男の人がまたタバコの人をつけてこう言った。

「彼女は自分で決めたことだから。キミたちの考えを無理に押し付けるってというのはどうかなあ？」

ミコはまっすぐみーちゃんの方を向いて尋ねた。

「みー、ホントにアンタが自分自身で決めたことなのネ？」

みーちゃんはミコの言葉に少し目を逸らして答えた。

「そう…ヨ。」

そしてその男の人はタバコの火を灰皿で消して

「これでもういいでしょう？ 人生はそれぞれ別のものなんだから、キミたちにはキミたちの人生があつて、彼女にも彼女の人生がある。キミたちが友達ならこれからは芸能人としての彼女のことを応援してやっつて欲しいな。」

アタシとミコはお互い目を合わせた。

「わかりました。彼女が自分で考えて決めたことなら、アタシたちはもうそれ以上言えないですよネ。」

アタシたちはソファを立ち上がってドアの方に歩き出す。

「凜、ミコ…。」

みーちゃんが呟くようにアタシたちの名前を呼んだ。

「みーちゃん、入学式のとときアナタと初めて話して、すごくいい友達ができたって思ってた嬉しかった。」

「これからはファンとしてアンタのこと応援しているからネ。」

事務所のビルから外に出るともう夕暮れ時が近くなっていた。

「なんか寂しいネ…。」

「でも…あの娘が自分で決めたことだから…。」

「ウン。わかつてる…。」

そしてアタシたちは駅のほうに向かって歩き始める。

第七十九話 友情2

もうすぐ夏休みに入ろうとするある日

アタシとミコは放課後、3年生で再びアタシたちの担任になった佐藤優実先生に呼ばれた。

「じつはアナタたちを呼んだのは、佐倉さんのことなの？」

「みーちゃんのこと？」

「エエ。昨日ね、佐倉さんから転校願いが出されたのヨ。」

「エエエツツ！」

「アナタたちは佐倉さんとずっと仲が良かったでしょ？何か知らないかって思ってた。」

アタシたちは今までの経緯を優実先生に話した。

アタシたちがCM撮影に出ることは学校にも届けを出したから優実先生も知っているはずだけど、その後芸能事務所から呼ばれて3人がスカウトされたこと。そしてアタシとミコはそれを断ったけど、みーちゃんが芸能界に入ることを希望したことなど。

「そうかあ。だから堀本学園なのネ…。」

「みーちゃんの転校先は堀本なんですか？」

「そうヨ。」

堀本学園高校は芸能人が昔からたくさん通っている学校で、中には芸能コースというのがあってそういう関係の仕事をしている生徒については出席やテストなどでかなり融通を利かしているところだった。

「転校願いを持ってきたのは佐倉さん本人だったんだけどね、ハッキリ言つてご両親は転校にはかなり反対の意見を持つているようなのだ。ただ、彼女の意思が固いらしくつて……。でも、それも事務所のほうからかなりキツイ条件を言い含められているのかもしれないわネ。」

それから優実先生は少し考えて、アタシたちに

「ねえ、その佐倉さんが所属する事務所にアタシを連れてつてくれない？」

と言つた。

「いいですけど、どうするんですか？」

「彼女はまだ高校生ヨ。確かに最終的に決めるのは彼女自身だけど、大人は彼女の人生に十分にアドバイスする義務があるはずヨ。そういうことをちゃんとその事務所の人がしてくれているのか、聞きに行くの。アナタたちはあと10ヶ月もすれば大学生でしょ？ 大学生になれば時間にも多少の融通が利くだろうし、学業と並行してそういうお仕事だつてできるかもしれない。でも、高校生のこんな大切な時期に後戻りできないようなことを彼女に決めさせちゃうのはチヨット酷じゃないかなつて思う。そういうことをその事務所にもちゃんと考えて欲しいのヨ。」

優実先生はアタシとみーちゃんにとっては1年と3年のときの担任である以外にチア部の顧問でもあつた。いつもアタシたちのことを励まして応援して来てくれた優実先生はアタシたちにとってお姉さん的な存在でもあつた。

「わかりました。」
そしてアタシたち3人は、みーちゃんの所属するスターダストプロダクションへと向かった。

青葉学院の一番最寄駅の表参道から千代田線に乗って赤坂で降りる。そして歩いて7分程のところにその事務所はあった。

「あ、あそこです。」
アタシは向かいのビルを指差した。

するとちょうどアタシたちがそのビルに入ろうとするとき、ビルの前に大きな黒い高級車が止まった。
そして中から降りてきたのは、アタシたちを最初に呼んだ前田さんだった。

前田さんはアタシたちの姿を見ると

「アレッ！ 小谷さんと藤本さんでしたよね？ 今日はどうされたんですか？」

あの時と同じように高校生のアタシたちにも丁寧な言葉遣いで尋ねてきた。

「あの、じつは、みーちゃん…佐倉さんのことなんですけど…。」
「佐倉さんのこと？」

そこに優実先生が一步前に出て前田さんに挨拶する。

「はじめまして。私、青葉学院高等部でこの娘たちの担任をしております佐藤と申します。」

「あ、これは！3人の担任の先生でいらっしやいますか。私はスターダストプロダクションの前田と申します。」

「じつは、本日は佐倉さんのことで少しお話を聞かせていただこうかと思つて伺いました。」

「なるほど。まあ、ここで立ち話しもなんですから、事務所の方にお出でになりませんか？」

アタシたち3人は事務所の中に案内されて、またあの子の応接に通された。

「私は主に経営関係の仕事が中心なもので、実際の所属タレントのマネージメントは各担当に任せておりますが、何か問題がありましたのでしょうか？」

優実先生は出されたコーヒを一口啜り尋ねた。

「前田さん、アナタは佐倉さんの転校のことについてはご承知なのですか？」

前田さんはそのことを聞いてピタツと体がとまった。

「佐倉さんが転校？　なぜですか？」

「正直に申し上げますと、最近の佐倉さんはほとんど学校に来ておりません。期末テストも最終日は受けませんでした。このままではたとえ本校の併設大学への推薦はもちろんのこと卒業すら危ない可能性もあります。」

「エエエエエツッ!!」

「たしかに彼女の意思を尊重することは大切ですけど、彼女はまだ高校生です。大人がしっかり助言をして彼女を導いてあげる義務はあるんじゃないんでしょうか？」

「あの、申し訳ありません。お恥かしい話ですが、私、そのことを今初めて先生からお伺いしたわけでした…。少々お待ちいただけますか？」

そう言って前田さんは手元にある電話機を取り上げた。

「ああ、前田だ。マネージャー担当の野崎君は今いるか？ ウン。すぐ応接室に来るように言ってくれ。」

それから5分ほどしてこの前の野崎さんが部屋の中に入って来た。

「野崎君、こちらは佐倉さんの学校の担任の佐藤先生だ。今、先生から事情を聞いたのだが、佐倉さんは最近ほとんど学校に行っていないそうじゃないか。期末テストも最終日に受けなかつたらしい。そして昨日堀本高校への転校願いが出されたそうだが、キミはこのことについて彼女に対しどのようなアドバイスをしているんだ？」

この前はアタシたちに相当横柄な態度で接していた野崎さんが前田さんの前で返事に困って冷や汗を流して立っていた。

「いや、あの、その…。あくまで彼女の意向でして…。その…。」

「私はキミを彼女の担当マネージャーにするにあたって最初に話したはずだ。彼女はまだ高校生であつて、しかも大学の付属校に通っているから芸能活動はあくまで学業の支障とならないように大学進学を準備を最優先にして考えてあげるようにと。それが一体どうなってるんだ！？」

「い、いや、しかし、彼女を高校生として売り出せるのはわずかな期間です。今スタートダッシュをかけないと他の新人に比べて後れを取ってしまいます。」

「彼女は売り物ではない。一人の人間だ。我々は彼女たちの夢を応援するためにマネージメントをしている。高校にも行かせず仕事漬けにして、拳句の果てにせつかく望んで入学した学校を辞めて他校に転校しろなんて我々大人が言うことでは絶対はないっつ！！」

前田さんの迫力のある話し方に野崎さんはたじろいでいた。

「も、申し訳ございません。」

そして前田さんは優実先生の方を振り返ってこう言った。

「佐藤先生、今回のことは深くお詫びします。それで可能であるなら、このまま佐倉さんを青葉学院で育ててあげていってはいただけませんかでしょうか？ 担当マネージャーを交代させ、また私が直接彼女に話をして責任持つて毎日学校に通わせます。また遅れた勉強については、高校卒業までの期間、当事務所で彼女に専属の家庭教師をつけてしっかり勉強させるようにします。」

優実先生は安心した表情で

「前田さんにお会いできて、本当によかったですわ。出席日数については2学期からきちんとしてくれるなら問題はないと思います。ただ心配なのはこの間の期末テストで受けなかった3教科です。これについては次回の2学期の中間テストに佐倉さんが取った点数の8割が受けなかった1学期の期末テストの点数として評価されることになります。その他の受けた科目についても佐倉さんの点数はハッキリ言ってかなり低いものが多かったようです。したがって次回以降のテストで相当高い点数を取らないと佐倉さんが希望する総合文化政策学部への推薦は難しいと思います。」

「わかりました。まずは学業第一で彼女にアドバイスをいき、その責任を大人として必ず実行します。」

前田さんは事務所のビルを出るまでアタシたちを送ってくれた。

「それでは、ここで失礼をさせていただきます。小谷さんと藤本さんもぜひ夢に向かって頑張ってくださいね。蔭ながら皆さんを応援をしております。」

「ありがとうございます。どうぞよろしくお願いします。」

「ハア、よかったです。」

アタシはホッと安心して肩からが抜けた。

「さっすが優実先生。アタシ先生が担任でよかったなあ。」

ミコモ笑顔の表情でそう言う。

「そんなことないわヨ。これはきつとどの先生でも黙ってられることじゃないって思う。アナタたちは卒業するまではアタシの生徒なんだからね。心配なことはちゃんとアタシに話して欲しいって思ってるわ。」

そして次の日からみーちゃんはっきりと毎日学校に来るようになった。

「心配させてゴメンね。高校生の間は土日祭日と長期休みを利用し

てお仕事させてくれるようにしてもらったの。アタシ、ホントは青葉辞めて他の高校なんか行きたくなかったんだ。アンタたちとも離れたくなかったの。」

そう言ったみーちゃんの様子はとても明るかった。

第八十話 セカンドキス1

その後みーちゃんがどうなったかということ

最近では男の子の雑誌などで取り上げられ始めるなど、次第に注目され始めていたようだった。

グラビア写真の中の彼女は、あのキラキラした眼差しを武器に清楚なイメージを漂わせ、ファンの男の子の間では『お嫁さんにしたいタイプ』として人気をあげているらしい。

一方で学校の方はといえば、土日が芸能活動、そして平日の部活がない放課後は事務所から派遣された家庭教師にみっちりしごかれるタイトな生活ではあったけど、毎日学校に登校してきては元の元気なみーちゃんの姿に戻っていた。

午前中の授業が終わる前から彼女はすでにソワソワとし始めている。そしてチャイムがなると同時に

「凜！ミコ！早くしないと売り切れちゃうヨッ！急げー！ーっ
っ！ー！」

そう言っつてすごい勢いで教室から駆け出していく。

アタシとミコがその後を追いかけていくわけだけど、彼女が何をこんなに急いでいるかということ

彼女の目指す目的の場所は学校の中にある売店。

髪を振り乱し、スカートをたなびかせて猛ダツシユで売店に着くなり、息をハアハアと切らせながら

「オバサンツ！プチパフェある！？」と叫ぶ。

「おや、またみーちゃんが一番乗りかい？ アンタ、いつもチャイムが鳴るなりここに来て、ちゃんと授業聞いているのかい？」

売店のおばさんは呆れたように言う。

そう、最近アタシたち女子の間ではこの売店で売っているプチパフェが大人気なのだ。

もともとは大学の学食用で作られたものを、高等部の女の子がぜひこつちでも売って欲しいと学校にお願いして毎日限定20個で分けてもらっているプレミア商品。

だから、これを手に入れるために女の子たちは午前中の授業が終わると売店に殺到する。

712

「オバサン、食欲は人間の本能のひとつヨツ！ あ、イチゴパフェだあ！それチヨードイツ！」

「アンタの場合、本能のひとつじゃなくって本能そのものって感じだけどねえ…。」

そして今日も今日とて一番乗りのみーちゃんは、その中でも特に人氣が高いイチゴパフェをゲットする。

「やったー！ーっ！イチゴパフェ、ゲットだぜー！ー！ーッ！」

やっと追いついたアタシとミコは、イチゴパフェのカップを持って、まるで戦いに勝利したマウンテンゴリラのように雄たけびを上げているみーちゃんの姿を見てため息をつくわけだ。

「ハア…。これでアイドルだっていうんだから…。」
「こんな姿をみーのファンの男の子たちが見たらどんなに悲しむことか…。」

さて、一方でアタシのほうはといえば

最近では、同じキャンパスの中にある併設の青葉学院大学に通うトオル君とは、お互い部活のない放課後に大学チャペルの前で待合わせをしてデートをしたり、会える日が変わりと多くなってきたのがとても嬉しかった。

そして今日からいよいよ高校生活最後の夏休み。

昨日の晩、トオル君といつものように電話で話していると

「凜、明日なんか予定ある？」

「ウウン。どっか行く？」

「あ、それでさ、もし嫌じゃなかったらだけど…。」

いつもは臆しないで物を言うトオル君が、珍しく言いにくそうに口籠っている。

「ウン。なに？ アタシ、トオル君と一緒にいたら別にどこでもいいヨ？」

「あ、ウン。もしよかったらさ、オレンち…来ないかなって思ってたさ。」

「トオル君のおうち？」

「ウン。いや、じつはさ、うちの親が凜を食事に誘いたいって言ってるんだ。もちろん凜が気が進まなかったらまた今度にしてもいいし。」

「ウウン。アタシ、トオル君ちに行ってみたいな。」

「エ、いいのか?」

「ウン。そんなことで気にしないで? アタシ、トオル君のお父さんやお母さんともお話してみたいし。ね、いいでしょ?」

男の人からそう言われてちょっと考えてしまう女の子はけっこういると思う。

なんか婚約しちゃうみたいで堅苦しいとか。

マザコンなんじゃない?なんて思ってしまう娘だっているだろう。

でも、中2まで自分がそういう立場にいて、もしそのとき付き合っている女の子がいるとしたら、その娘にそう言われたとしたらきつととても悲しいだろうと思う。

それにそういう親の気持を大切にできる男の人って本当に優しい人だっと思う。

別にアタシは気どるつもりも装うつもりもない。

いつもアタシに一生懸命優しくしてくれているトオル君のお父さんとお母さんと一緒に話をしてみたいなって正直思った。

「あ、ウン。ありがとう。」

「アハハ。別にお礼なんかいらさないヨオ。」

アタシはウチの母親にもトオル君とお付き合いをしていることはけっこう前に話をしていた。

女の子の親だから、きつと内心ではウチの親もトオル君に会ってみたいっていう気持ちもあるんだろうけど、母親はトオル君から電話がかかってきたときには、「いつも凜がお世話になってます。」と

丁寧は挨拶してくれているみたいだった。

トオル君もそういう母親の挨拶に「こちらこそ、いつも凜さんに良くしていただいています。」と丁寧に返すので、ウチの母親はトオル君に対してかなり好印象を持っているみたいだった。

「今度、トオル君もうちに遊びに来てネ？」

「ああ、もちろん。」

そして今日

アタシは少し落ち着いた感じの薄いブルーのワンピースを着て、頭にブルーに白のラインの入ったカチューシャを付けた。

昨日の晩電話が終わった後、トオル君のご両親に食事に誘われていると話すと、ウチの母親は逆にアタシの方を心配し、そして「これで何かクッキーでも買って行って。」と言って1万円を渡された。

「でも、あんまり高いのを持っていくと逆に気にしちゃうんじゃないかなあ？」

「まあ、あまり気にしすぎることはないけど、それでも初めてお伺いするわけだしね。アナタが美味しそうなものを探して持ってけば、きっと喜んでくれるわヨ。」

アタシはトオル君と待ち合わせた30分前に待ち合わせの新宿駅に着き、駅前のデパートに行ってクッキーの詰め合わせを1つ買った。

そして待ち合わせの場所に行くと、トオル君は約束の時間前にはもうその場所に来ていた。

「おはよあー。」

「ヨオ。オハヨ。あれ、何か買ったの？」

カレはアタシが左手に下げている紙袋を見て尋ねた。

「あ、ウン。ちょっとおみやげに思って、クッキー買ってきたの。」

「なんだ。そんなに気を使わなくていいのに。」

「気なんか使っていないヨ。このクッキーすごく美味しいの。だからトオル君のお母さんに食べて欲しいって思って買ってきんだヨ。」

「そっか、サンキユ。じゃあ、行こうか。」

そう言つてトオル君は歩き始める。

トオル君の家は西武新宿線に15分ほど乗った駅にあった。

駅の周りのはのかな風景の中に活気のある商店街が広がっていて、しばらく歩くと次第に静かな住宅街へと変わっていく。

「さあ、着いたヨ。」

そう言つてトオル君が立ち止まったのは、茶色の屋根の庭のある家。門から玄関まで続く歩道には赤レンガが敷かれていて、庭は芝生で覆われ、ところどころにキレイな花壇が設けられている。

「わあー！ ステキな花壇。」

「あ、お袋が世話してんだ。趣味みたいだヨ。」

「そうなんだあ。こんなにキレイにしておくのって大変だよネー。」

「ウン。毎日けっこう一生懸命やってるみたいだぜ。」

そしてトオル君は玄関のドアが開けて

「ただいまーっ！ 着いたぞーっ！」

すると奥の方からとても優しくそんな感じのトオル君のお母さんが出てきた。

「まあ、まあ。いらっしやい。はじめまして、トオルの母です。」

アタシは少し緊張しながらぴよこんと頭を下げ挨拶する。

「あ、あの、はじめまして。小谷 凜と申します。よろしくお願
いします。」

そして手に持った紙袋からクッキーの包みを出した。

「あの、これ、私の母がいつも美味しいって買ってくるクッキーな
んですけど、よろしかったら皆さんで召し上がってください。」

「あら、まあ！『Sunday Brunch』のクッキーだわ！
これ、アタシも大好きなのヨ。ありがとう。」

そう言っただけでトオル君のお母さんは、嬉しそうにアタシの買ってきた
クッキーを受け取ってくれた。

「まあ、とにかくお入りになってくださいな。」

「ハイ。じゃあ、失礼します。」

アタシは玄関を上がり、振り返って脱いだ靴をそろえ端の方に置く。
そして、お母さんに案内されてリビングルームに入っていた。

リビングには大きなソファとテーブル。

そのソファに座っていた男の人が立ち上がる。

「はじめまして。トオルの父です。」
トオル君のお父さんはガツシリした体格の、見た感じとても真面目
そうな人で、アタシの方を見て一言だけそう挨拶した。

「あの、はじめまして。小谷 凜と申します。」
アタシはさっきお母さんにした挨拶をまた繰り返す。

（ああ、アタシ、もしかして気に入られなかったのかなあ…。）
なんかちよつと不安になってきた。

その隣には肌が白くて目がパッチリとしたとても可愛い女の子がひ
とり座っている。

「こつちがオレの妹。若葉って言って今高1なんだ。」

「こんにちわ。」

彼女はニコツと笑ってそう言った。

わぁー、びっくり！

すっごい可愛い娘だよネエ！

肌なんかすっごい白くって

アタシなんかカンカン日照りの中チアで飛び回ってるから少し焼け
ちやってるし。

「まあ、どうぞ。座って楽にして。」

「あ、ハイ。失礼します。」

お父さんに勧められてアタシはトオル君の座ったソファの隣に腰を
下ろす。

(ああ、なんか緊張するなあー！)

話す話題もみつからず、シーリーンとした沈黙が部屋の中に漂う。キッチン奥ではお母さんがお茶を用意してくれている音が聞こえてくる。

(こういうときって何を話せばいいんだろうー！)

(こんなときアタシの父親だったら釣の話でもすればニコニコしてすぐに飛びついてくるんだけど、なんかそんな雰囲気じゃなさそうだし。)

(貿易会社の社長さんだから、やっぱりゴルフの話とか?)

(でも、アタシってゴルフなんかやったこともないし。)

そんなことをアレコレ考えていると

「プッ！」

お父さんが急に嘔き出して

「アハハハ！」と笑い出す。

「アハハハハハハ！ こんなふうには困まれちゃ誰だって緊張しちゃうよネ。 いやー、昔から友達にもによく言われるんだ。オマエは見た目ゴツツくって固そうだから初対面だとすごく緊張するって。」

豹変したお父さんの姿にアタシは戸惑った。

「エッ、あ、あの…。」

「じつはね、ボクも青葉学院高等部の出身、言ってみればキミヤトオルの先輩なんだヨ。」

「エ、あ、そうなんですか？」

「ウン。高等部を卒業して大学も青葉大だし。」

「しかも応援団！」

横からトオル君が笑いながらそう言った。

「応援団…だったんですか？」

「そうさ！これでも第五十代青葉学院大学応援団長だヨツ！あのオシャレな青葉大の中で黒の学ランにドカンのズボンしかも頭はリーゼント。肩で風切って歩いてると女の子なんて寄り付きやしない（笑）」

「アハハハ！」

そしてお父さんはソファからすつくと立ち上がり

「我らが母校……っ！ あおば……が……い……ん……だ……い……
……が……く…………！……カレ…………ン……ッ……」

と大きく手を振り始める。

「わぁ……！ カッコいい！」

「オオオツ！ わかってくれるかい？ うれしいなあ……！」

「ハイ。高等部の応援部のエールは見たことあるけど、大学の応援団はもつと迫力ありそうですね。」

「高等部応援部かあ。懐かしいなあ！ じつはボクは高等部時代も応援部だったんだヨ。」

「エ……！ そうだったんですか？」

「ウン。あの頃とはかく必死で、先輩の命令には絶対服従だったなあ。なんとたつて、OB王様、3年貴族、2年平民、そして……。」

「1年奴隷！」

「アハハハ！その通り！！ 良く知ってるなあ。」

「じつは私チアリーディング部なんです。だから応援部と一緒に練習することがけっこうあって。」

「へエー！ッ！ そうなんだ？」

「あ~~~~あ、お父さんを乗せちゃった（笑） 凜さん、ウチのお父さん、この話したすともう止まらなくなっちゃうのヨ（笑）」
そう言って妹の若葉ちゃんがコロコロと笑い出す。

こうしてアタシたちの間の空気が一気に暖かくなっていった。

第八十一話 セカンドキス2

「さあ、そろそろお食事にしましょうか。」
キッチンで用意をしていたトオル君のお母さんができて、みんなに声をかける。

「あ、アタシもあのお手伝いさせてください。」
アタシはそう言って立ち上がった。

「あら、アナタはお客さんなんだから、気楽に話しててちょうだいな。」

「いえ、でも何かできることがあったらしたいなって思ってますから。」

確かに今日はアタシはこの家にお客さんとして呼ばれた。
でも、トオル君のお付き合いしている相手として来ているからには、いい格好をしたいとかいう気持ちじゃなくて、カレに恥をかかせたくはなかった。

トオル君のお母さんはやっぱり女同士だからなのか、アタシのそういう気持ちを察してくれたみたいで

「じゃあ、お願いしちゃおうかな。エット、こっちの作ったお料理をテーブルに運んで、小皿を出してもらえるかしら？」

「ハイ。これでいいですか？」

そして妹の若葉ちゃんも混ぜあって女性陣3人は食事の準備をしている。

「ハイ。凜さん、アリガト。じゃあ、食事にしましょうか？」

そしてソファに座っていたお父さんやトル君もテーブルに着いた。

お料理は、巻き寿司、サラダ、茶碗蒸し、焼きアナゴ、天ぷら、野菜と昆布巻きのお煮しめ、ダシ巻き卵、カモのお吸い物、割り子蕎麦など、どれもお母さんの手作りでも美味しくそうだった。

「今回は和食にしちゃったけど、もしよかったら言っただけ。次は洋食にするから。」

「いえ、アタシ、和食大好きです。」

「あら、よかった。じゃあ、たくさん食べてネ。」

「ハイ。いただきます。」

お吸い物を一口啜る。

「お、美味しい！」

ホントに美味しかった。

「お口に合ったみたいでよかった。」

お母さんは嬉しそうに微笑んでいる。

「凜さんのおうちでは和食の方が多いの？」

「ハイ。ウチの母も和食の方が好きでときどき凝ったお料理も作ってアタシも手伝ったりするんですけど、アタシはこういう微妙な味付けがまだできなくて…。」

「フフフ。こういうのってアタシもアナタのお母さんも少しずつ身

に付けてきたことだから、これからアナタもきつとできるようになるわヨ。」

食事はとても美味しく、そしてトオル君のお父さんやお母さんともたくさん話げできた。

食後のお茶を飲みながらお母さんはトオル君のこんな話を聞かせてくれた。

「トオルがまだ小さい頃ね、みんな留守中のときに公園で知り合つた迷子の男の子を家に連れてきたことがあつたのヨ。」

「へエー、その子つてこちらへんの子だつたんですか？」

「ウウン。かなり離れたところに住んでる子だつたらしいけどね。」

ウーン…どこに住んでるんだつたつけなあ。もう思い出せないけど(笑)それでね…」

「ウウン。」

「アタシが夕方帰つてきたら、トオルとその子が部屋でゲーゲー寝てて。』どこの子?』つて聞いたらトオルは『知らない』つて言うし、よく聞いたら迷子の子でね。もう大慌てヨ。最初は警察に連絡したほうがいいかなつて思つたけど、いくら知らない子でもなんかそついうとこで迎えに来るまで過させるのも可哀想で。でもその子はトオルのひとつ下の学年だつたんだけど、まだ小さかつたから電話番号聞いてもわからないし。」

「エー!それでどうしたんですか?」

「その子の通つてる小学校の名前はわかつたからね。学校に電話して、名前を言つて調べてもらつて。それでその子のお母さん、携帯電話がずつとつながらなくなつて。その子のお母さんも一生懸命探してたみたいなんだけど、やつと連絡が取れて迎えに来られたのが夜かなり遅い時間になつちやつてね。」

「じゃあ、その間ずっとこの家に居て？」

「そう。みんなで晩御飯を食べて、トオルと一緒に風呂も入って、遊んでたのよ。」

「そうなんだあ。何か不思議な出会いですネー！」

「でしょー？ その後、少してその子とお母さんがお礼方々来られたんだけどね、その後はお互いの家も遠かったし、特にお付き合いはなかったのよネ。」

なんかその頃のトオル君を思わず想像してしまう（笑）

そして夕方の5時

「それでは、失礼します。今日は本当にご馳走様でした。」

トオル君のお父さんとお母さんは一緒に玄関までアタシを見送ってくれた。

「今日は本当に楽しかったワ。ね、凜さん。良かったらこれからもぜひウチに遊びに来てネ。トオルがいない日でも構わないからネ。」

それを聞いたトオル君は茶化すように

「エッ、オレがいない日は女同士でつるむの？」

「そうヨ（笑） 女同士で楽しみたい時だってあるんだから。そう

いときはアンタは邪魔！（笑）」

「フフフ。ハイ、ぜひ、またお邪魔させていただきます。」

「じゃあ、オレ送ってくるから。」

「まだチョット時間だいじょうぶかな？」

駅に向かう道を歩いている途中、トオル君は通りかかった小さな公園のところでアタシにそう言った。

「ウン。」

「じゃあ、公園で少しだけ話していかないか？」

「ウン。いいヨ。」

そこはアタシとワタルの思い出の中にある『あの公園』にどこか似ている小さな公園だった。

滑り台とブランコと鉄棒が1つがあるだけ。

トオル君は公園の入口にある自動販売機で缶コーヒーを2本買って、そのうち1本をアタシに渡してくれた。

「ありがとう。」

そしてアタシたちはその小さな公園にある赤いベンチに座った。

「オレ、小さい頃よくここで遊んでたんだ。」

「そうなんだあ。その頃のトオル君ってどんな子だったんだろっネ？」

「ウン…。あんまり友達がなくなっってさ、わりと大人しいガキだ

「つたみたいだぜ。」

「そうなの？」

「ウン。オレ、そこ頃は大人しくって一人遊びが好きでさ。クラ
スのガキ大将に苛められたこともあったな。」

「なんか今のトオル君からは想像つかないなあ。空手はいつから始
めたの？」

「小学校3年生の終りから。近所の道場に通ったんだ。」

「へえ。じゃあ、空手を始めたきっかけは体を鍛えるためだったの
？」

するとトオル君は昔を思い出すように少し遠い目をした。

「それもあつたけど、…あるきっかけがあつたんだ。」

「きっかけ？」

「ウン。さっきウチのお袋がちょっと言ってた話だけどね。」

「なんだっけ？」

「オレが小さい頃の迷子の男の子との出会い。」

「あー、ウンウン。ね、聞かせて？」

「いいヨ。」

.....

それはトオル君が小学校3年生になったばかりの頃

トオル君はいつものようにこの公園の小さな砂場で一人で遊んでい
たそうだ。

すると、公園に一人の男の子が泣きながら入って来た。

カレは髪の毛の色が少し茶色っぽくてサラサラとしていた。そして痩せていたけど、トオル君より身長が少し高かった。

トオル君はその男の子に近寄って

「どうしたの？ 何で泣いてるの？」と声をかけた。

聞くと、その男の子はお母さんと隣の町にある親戚の家に遊びにきたらしいが、駅に向かう途中ではぐれてしまい迷子になってしまったそうだった。

「そっかあ。困ったなあ……。」

少し年齢がいつていれば、交番に行ったりとかもしただろうけど、その頃のトオル君はそれを思いつかなかった。

「じゃあ、ウチに來いヨ。」

「いいの？」

「もちろん!」

そして2人はトオル君の家に行った。

ちょうどその日はトオル君のお母さんは妹の若葉ちゃんを連れて幼稚園の行事に行っていて家にはいなかったらしい。

2人は一緒に家の中でゲームをして遊んだ。

「ちょっと腹減ったなあ……。」

「ウン……。」

「ヨシッ！チヨット待つてるヨ？」

そう言ってトオル君はキッチンに

「あつた！」

トオル君は食パンと冷蔵庫からハムとレタスを取り出す。

そしていつもお母さんが作るのを思い出しながら、食パンにマヨネーズを塗り、そこに胡椒をパツパツと振り、ハムとレタスを挟んだ。

「ヨシツ！できたぞー。さあ、食おうぜ！」

「やったー！うまそー！」

そのサンドイッチをパクツとくわえると

「アハハ！ウメー！」

「ウン。ウメーな。でもちよつと胡椒かけすぎたかな？」

「アハハ。たしかにな（笑）でもスゲーウメーよ！サンキューな！」

そのとき、トオル君と『その彼』は彼のお母さんが迎えにくるまで部屋で色々なことを話したそうだ。

彼は生まれつき体が弱かったそうで、小学校に入学してからしばしば病院に入退院を繰り返していたらしい。

「オレはこんなふうだからな。トオル君にはいつか強くなって欲しいな。」

「オウ、任せとけ。」

トオル君とその彼のそのときこんな約束をしたそうだ。

.....

「それで、その彼はその後どうしてるの？」

「ウン…わかんないな。 さっきウチのお袋も言つてたようにお互い家が遠かったしな。 あの後一回遊びに来て、それで少し手紙のやり取りもしてたけど、ソイツ、入院してたみたいだったし。 そのうち音信不通になっちゃったからな。」

「そっかあ。 でもホントに不思議な出会いだよネ。」

「ウン。 ソイツとの約束がその後もなんか頭に残つてさ、それで3年生の終りくらいに空手道場の前を偶然通りかかったんだ。 それでもうホント衝動的にさ（笑） その道場の中に入っちゃって。」

「それがトオル君が空手と出会ったきっかけなんだ？」

「ウン。 アイツ、何してるんだろうなあ…。 あのときオレの一学年下つて言つてたから、今は凜と同じ高3つてことだな。」

「へー。 なんか不思議。」

トオル君は手にもった缶コーヒーの残りを一気にグイッと飲んで立ち上がった。

「さ、そろそろ行くうか。 今日はアリガトな。」

「ウン。 そんなお礼とか言わないで？」

「まあ、でも気持を言いたかったんだ。」

「アタシね、ホントは最初はチョットだけ不安だったんだあ。」

「不安つて？」

「トオル君のお父さんとお母さんに気に入ってもらえるのかな…つて。 でも…。」

「でも？」

「途中からすごく楽しくなった。 なんでかわかる？」

「ウン。 思いつかないなあ。」

「エへ…。 アタシの知らなかったトオル君のことをたくさん教えてもらったから。」

「そっか。 じゃあ、これからもオレのこともつと知っていつてほしいな。 オレも凜のことをもつと知りたいから。」

「ウン。」

「なあ、凜、目…瞑って？」

「エ？」

（あ…。）

アタシはトオル君のほうを向いて目を閉じる。

トオル君の顔があたしの顔に近づいてくるのを感じる。

それは実際はとも短い間隔だったんだらうけど、とても長い時間のようにも思えた。

トオル君の温かい息がアタシの顔を撫でる。

そしてアタシは唇にカレの唇が重なる感触を感じる。

トク…トク…トク…。

アタシは心の中で心臓が鳴っている音を数えていた。

（1、2、3、4、5…。）

カレの唇がゆっくり離れていくのがわかってアタシは静かに目を開く。

今、アタシの目にはカレの姿だけが映っている。

そしてアタシはカレの胸に自分の顔を埋めた。

それはアタシにとってセカンドキスだった。

でも、きつとワタルはこう言っただらうな…。

「いや、これは凜ちゃんのファーストキスやで。」って。

第八十二話 湘南ガールズトーク1

いよいよ今日から夏休み

あー、何時まで寝ててもいいだつ！

朝、起きたときの恋しいお布団のぬくもり。

しかし現実はそんなに甘くなかった。

「りー、りー、りーんっ！ アナタ、いつまで寝てれば気が済むのっ！
？」

朝8時、アタシの部屋に押し入ってきた母親は、ベッドに寝ているアタシから強制的恋しい布団を取り上げる。

「うー、うーん…、今日から夏休みじゃん。 もうちヨットゆっくり
させてえ…。」

「まったくもうっ！ 夏休みはグダグダと過すためにあるんじゃないのヨッ！ とにかく片付かないからさっさと朝ごはん食べて！」

もう逃げられないと判断したアタシは、仕方がなくのそのそと起き上がってパジャマ姿で洗面所に向かった。

そして歯を磨いて顔を洗っていたとき

「りー、りーん、佐倉さんから電話ヨ。」

母親が奥のリビングのほうから声をかける。

「エー、みーちゃんから？ こんな朝早くになんだろ？」

アタシは洗顔を済ますとそのまま電話機のあるリビングに行った。

「モーツ！アナタ、女の子がパジャマのまままで！ まだ悟だって家に居るんだからネツ！」

母親のお小言をかわしながら受話器を取る。

「もしもし？」

「あ、凜？ オハヨー！」

「オハヨ。早いネ。どうしたの？」

「ウン。じつはさ、凜って明日と明後日の2日間って何か用事ある？」

「あさってから？ ウーン、別に何もないと思ったけど。」

「じゃあさ、アンタ、アタシと一緒に湘南行かない？ ミコも誘って。」

「エ、湘南？ 唐突にどーしたの？ だって、みーちゃん、夏休みはずっと芸能界のお仕事で忙しいって言ってたじゃん？」

「ウン。だからお仕事ヨ。お仕事で湘南海岸でTV撮影するの。」

それで逗子マリーナに事務所の持つてる部屋があつてね、そこに1泊2日で泊まってやる予定なのヨ。」

「へエー、でもそこにアタシらがいたら迷惑じゃない？」

「それがさあ、そうじゃないのヨ。じつはさあ……。」

彼女の話を聞くとこういう事情があるらしい。

あさってから、みーちゃんを含めた最近売り出し始めた新人アイドルの女の子3人と今人気のお笑い芸人3人が湘南海岸でTV撮影のお仕事の予定だった。

ところが、その撮影に同行するはずだったエキストラの女の子のうち2人が急にこれなくなったらしい。

人数が揃っていないといけない撮影で、代役の急な手配もつかず困っていたところに、みーちゃんがプロダクションの重役のあの前田さんにアタシたちに声をかけてみてはと言ったんだそうだ。

「で、アタシとミコはそこで何をすればいいの？」

「エツトね、そんな難しいことじゃないんだけどさ…。ビーチバレー…かな。」

「ビーチバレー？」

「そう。アタシたち新人アイドルとお笑いさんたちがビーチバレーの試合するのヨ。それでバレーは6人ずつ人数がいるでしょ？ それでアンタとミコにアタシたち女子チームに入ってもらってこと。」

「なるほどネー。でもさあ、TVに映るんでしょ？ アタシそんなバレー上手じゃないヨ。」

「どっちもバレーやってたような上手な人はいないから、そんな気にしないでいいヨ。それに一応お仕事だから、ちゃんと出演料出るし。」

「エ、そうなの？」

「ウン。前田さんが2日間のギャラでアンタたちに一人2万円出さって。それと交通費とご飯はちゃんと用意してくれるし。宿泊はアタシたち女性タレント3人は逗子マリーナの部屋に泊まることになってるから、アンタたちも一緒に泊まるようにお願いするヨ。」

「エ、そんなにお金もらっちゃっていいの？」

「それくらいが普通らしいヨ。気にしないでいいんじゃない？」

「そっかあ。じゃあ、いいヨ。」

「ヤッター！じゃあ、決まりネ。ミコにも今からアタシが電話するから。楽しくなるなー！」

そしてそれから30分ほどしてみーちゃんからアタシのケータイにメールがあった。

「ミコもオツケーだって。明日9時に赤坂のスターダスト事務所前に集合ネ。水着は事務所で用意するから着替えだけ持ってきて。」

次の日の朝

アタシはミコと最寄の駅で待合わせをして赤坂にあるみーちゃんの所属事務所に向かった。

「ねー、ミコ。アタシたちもTVに映るのかなあ？」

「やっぱりチヨットは映るんじゃない。まあ、メインはみーたちタレントさんだろうけど、アタシたちも付録でチヨットくらいは映ると思うヨ。」

「アタシ、昨日トオル君に電話して話しちゃったヨ。トオル君DVに撮っておいてくれるって。」

「アー、アタシも芦田さんに電話で話しちゃった。楽しみにしてるって言われちゃったヨ(笑)」

そして程なく赤坂のスターダストプロの事務所ビルに着く。

建物の前にはカメラとかの機材を持ったスタッフさんたちがすでに集まっていて、道路には20人くらいが乗れる小型のバスが1台止まっている。

ちょうどそこにビルの中から前田さんとみーちゃんたちが出てきた。

「おはようございます。ご無沙汰してます。」

アタシとミコが前田さんに挨拶する。

「やあ、お久しぶりです。元気でしたか？」

「ハイ。今回はよろしくお願いします。」

「いや、こちらこそ。急をお願いして申し訳なかったですね。」

そして前田さんは一緒にいる人たちをアタシとミコに紹介してくれた。

「こちらのお二人は佐倉さんの学校の友達で小谷さんと藤本さん。

前にこの2人に佐倉さんを加えてデイズニールランドの女子高生起用のCMで選ばれて出たことがつてね。それで特に魅力的なグループだったんでスカウトしたんだけど、この2人には断られちゃいましてね（笑）」

「へえー！そうなんですか。」

そこにいた人たちは少し驚いたようにアタシとミコを見た。

「イエ、あの折はすみません…。」

「アハハ、もういいですよ。エット、それで彼が今回のプロデューサーの清水さん。」

清水さんは一般に想像するTVのプロデューサーと違って、とても真面目な感じの好感の持てる人だった。

「やあ、今回はよろしくお願いしますよ。」

「こちらこそよろしくお願いします。」

アタシとミコは2人揃って挨拶した。

「それで、こちらが今回の撮影に佐倉さんと出演する小川ミクさん

と瀬尾真奈さん。」

(あ、アタシこの人たち知ってる！)

2人とも最近TVCMとかドラマの中でよく見る。

でも画面の中ではなく、実際こうして目の前にいるとホントに違和感というか…。

「あ、あの…。『すくーるでいず』ってドラマに出ている方ですよネ？石田奈々役で。」

アタシは小川ミクさんにそう尋ねてみた。

「あ、ハイ。 見てくださってるんですか？」

「ハ、ハイ！もう毎週欠かさずっ！ あのドラマ大好きなんです！」

「わあー！嬉しいな。 よろしくお願いします。」

「こちらこそ。 お会いできてすごい感激です！」

びっくりしたあー！

でも、実際話してみるとホントに感じのいい人だった。

「凜とミコはアタシの親友なんだヨ。 いつも2人に助けてもらってるの。」

みーちゃんが横から小川さんと瀬尾さんにそう言った。

「へえー。 羨ましいなあ。 みーちゃんにはそういう友達がいて。」

そして周りは次第にスタッフの人が忙しそうにバスに機材を載せ始

めた。

「さあ、それじゃそろそろ出発します。皆さん、バスに乗り込んでください。」

都心の赤坂から今晚宿泊する予定の逗子マリーナまではおよそ1時間半。

アタシたちはそれから時間がかからずにつきり打ち解けていた。

バスの中は女の子5人でほとんど修学旅行気分。

「ネ、チョコ食べない？」

「わあー。ありがとあー。」

「でも、凜ちゃんとミコちゃん2人とも可愛いのに、スカウトされて断っちゃうなんてもったいないなあ。」

小川さんがあたしとミコを見てそういう。

「アハハ。アイドルの人にそんなこと言われると、なんか照れるヨー。」

そう照れ笑いするミコも満更悪い気がしていない様子（笑）

「凜ちゃんとミコちゃんは、みーちゃんと同じ青葉学院の高校なんでしょ？」

ミクちゃんがアタシにそう尋ねてきた。

「ウン。そうだヨ。」

「いいなあ。じゃあ、来年から青葉大生なんだネー。」

「ミクちゃんも今アタシたちと同じ高3なんだよネ？」

「ウン。でもアタシは高校卒業したらお仕事に専念しようって思っ

てるから、大学は行かないつもりなんだ。」

「そうなんだ？」

「ウン。でもじつはけっこー迷ったの。アタシは中学1年生のときからグラビアのお仕事やってただけだね、だから高校もそういうお仕事のやりやすい学校に行つて。でも、中学時代はわりと悪くない成績だったのヨ。だから、大学つて憧れでもあつたし。」

青葉大はね、よく雑誌とかにキャンパス写つてるの見て、こういう大学行けたらいいなあ……って思つてたんだあ。」

「そっかあ。こういうお仕事つて両立するのつて難しいもんね……。」
「そうだねえ。そういうことする人もいるけど、アタシはそんなに器用じゃないし。二兎追うもの一兎も得ずつていうじゃない？ 凜ちゃんもそう思ったからせつかくのスカウトを断つちゃつたんでしょ？」

「ウン。アタシもミクちゃんと同じ。そういうのできるタイプじゃないしネ。」

「なんか話せるなあー！ 今日初めて会つたなんてウソみたいだヨ。(笑)」

「アハハ。アタシもそう思つてた(笑)」

「ね、凜ちゃん。チョットお願いがあるんだけどな？」

「ウン。なにかな？」

「あのね、凜ちゃんの時間のあるときでいいんだけどね、青葉大のキャンパス案内してくれないかなあ……つて。」

「なんだあ。もちろんいいヨ。」

「ホントに？ やつたあー！」

「じゃあさ、学食でご飯食べようヨ。あと、購買に行くと青葉大のグッズ売つてるんだヨ。」

「あ、行きたーい！」

みーちゃんのときの一件があつたから実感したけど、こういうお仕

事をしてるとふつうの人には体験できないことも多いけど、反対にふつうの人が体験できることもできなかったりするんだなあ…って思う。

でも、こうして一緒に話をしている彼女はアタシたちと何も変わらない高校生の女の子なんだってわかった。

こうして楽しい話をしながらバスは進み、いよいよ目的地に到着する。

第八十三話 湘南ガールズトーク2

今日の宿泊場所の葉山マリーナに到着後、事務所所有の部屋に荷物を入れるとアタシたち一行はさっそく撮影準備にかかる。

今日の撮影地は、まず葉山マリーナ近くにある有名な『日影茶屋』。ここでみーちゃんたちアイドル3人組がランチを食べておしゃべりをするところから、この撮影の台本は始まるんだそうだ。だから当然エキストラメンバーのアタシとミコにはここでの出番は一切ないので、アタシたちは撮影の邪魔にならない場所で待機している。

同行するメイクさんにお化粧を整えてもらう3人の女の子たち。

「ハイ。それじゃ撮影に入ります。 3人は準備良いですか？」

「ハローー！」

「それでは、スタートです！」

うつそうとした木々の映える小道を歩くみーちゃん、ミクちゃん、真奈ちゃんの3人。

みーちゃん「わあー！ すごくステキな道ですネー。」
ミクちゃん「ホント。なんか木立の隙間から日の光が零れてくるのが、まるで宝石みたい。」

そして3人の歩く先に日影茶屋の玄関が見えてくる。

真奈ちゃん「さあ、ここが今日のランチの場所、あの有名な『日影茶屋』です！」

みーちゃん「アタシ、ココ初めて来ましたヨ！」

ミクちゃん「アタシも初めて。真奈ちゃんは来たことあったの？」

真奈ちゃん「エツトね、アタシは今日で3回目です。」

ミクちゃん「エー、それってまさか一人じゃないよネ？ 誰と来たのかなー？」

真奈ちゃん「エ？ それは内緒です（笑）」

みーちゃん「もしかして彼氏とか？（笑）」

真奈ちゃん「ちがいますヨー！（笑） っていうか、そーじゃないでしょー！」

アハハハ…。

真奈ちゃん「エー、この日影茶屋はとにかくすごく有名なんですヨ。

ナント！350年も昔からこの場所にあるそうです。」

ミクちゃん「エー！すごいネー！ じゃあ江戸時代から？」

真奈ちゃん「そーなのです。あと、サザンの鎌倉物語っていう歌の中にもこの日影茶屋の名前がでてくるんですヨ。」

みーちゃん「あ、アタシ、それって知ってる。聞いたことあります！」

真奈ちゃん「それじゃあ、早速中に入ってみましょう。」

そして3人は玄関をくぐって中に

「いらっしやいませ。」

そこに20代くらいの背の高いとても清潔そうなウエイターさんが

出てきて挨拶をする。

みーちゃんたち3人はそのウェイターさんに案内されて、窓よりの席に腰を降ろした。

和洋折衷の室内に床は木でぴかぴかに磨かれていて、4人がけのシツクな木製のテーブルが広い間隔で並べられている。

大きなガラス窓の向こうには深い木立が見える。

みーちゃん「わあ！ステキー！」

真奈ちゃん「ここは雰囲気だけじゃなくて、お料理もとっても美味しいんですヨ。エット、それじゃひかげ弁当を3つお願いします。」

「かしこまりました。」

さっきのカッコいいウェイターさんがスマートに注文を受ける。

しばらくして3人の前には豪華な会席料理が並んだ。

ミクちゃん「すごくキレイですネー！ 美味しそう！」

真奈ちゃん「さあ、さっそくいただきますよ。」

みーちゃん&ミクちゃん「美味しいー！」

そしてしばらく料理に舌鼓を打ちながら楽しく話をする3人の光景が続く

「ハイ、オツケー！」

そこで撮影が終わる。

「じゃあ、みんなもお昼をここで済ましてしましましょう。小谷さんと藤本さんも一緒にテーブルに座ってネ。」
プロデューサーさんがみんなに昼食の指示を出す。

アタシとミコも空いた席に腰を降ろし、みーちゃんたちと同じひかげ弁当をご馳走になった。

「ね、凜もココって初めて？」

「ウン。名前は知ってたけど、来たことはなかったなあ。でも、トオル君が今度連れてきてくれるって言ってたから今日は下見になっちゃった（笑）」

「いいなあ。アタシも芦田さんと一緒に来れたらなあ。」

ミコと芦田さんは年齢差が5歳。

芦田さんは青葉大を卒業した後、今は青葉大大学院に通っている。

最近はお休みの日なんかミコとときどきデートしてるみたいで、ミコも『妹』から『妹以上恋人未満』くらいになれたのかなあ…なんて言ってるにしている。

「アタシは、今の芦田さんの心の中にはミコがちゃんといってるって思うけどネ。」

するとミコは頬を薄く染めて照れ笑い。

「エへへ、だったらいいなあ。でも最近だね、前よりもずっと色々なことを話してくれるのヨ。大学のこととかも。前だったらアタシの話を聞いてくれてばっかりだったのに、最近自分のこともけっこう話してくれるの。」

「そうなんだあ。そういうのって嬉しいよネー。」
「ウン。だからもつといっぱい芦田さんのことを知りたいなあって思ってるの。」
「あ、わかるー。それってすっごくわかるヨ。カレの色んなこと知ってくるのすっごく楽しいの。」
「そうそう！ そうなんだよネー！」
「アハハハ。」

「凜は笹村さんとホント仲がいいよネ。凜って笹村さんが初めて付き合った男の人でしょ？」

そう、ワタルの存在はもうミコの記憶の中じゃない。
アタシがミコと初めて同じクラスになったのは中2のときで、友達関係もそのときから始まった。
中2より前のアタシはミコの記憶の中では「違うクラスの女の子」ということになってる。

「そう…だネ。」
「何かチヨット歯切れ悪いね。もしかして誰か前に好きだった人はいたとか？」

少し考えてアタシはこう答えた。

「ウン…。そうだネ。」
「それってアタシの知ってる人？」
「ウン。ミコは…知らない人だよ。アタシが小学校のときにね、アタシと久美ちゃんとその人でときどき遊んだ人なの。」
「あ、そうなんだ？ じゃあ、凜と久美子の幼馴染ってこと？」
「ウン。そういう感じかな。」

「どういう人だったのって聞いちゃってもいい？」

「エイトね、優しくって温かくって、いつもヒョウヒョウとしてて、そっつかしいところがあって。でもアタシのこといつも心配してくれて。」

「へえ、なんか楽しそうな人だねえ。それでその人は別の中学に行っちゃったの？」

「その人、身体が弱かったから。それで小4のとき亡くなったの。」

「そ、そうなんだ…。ゴメンね。なんか思い出させちゃった。」
「ウン。でも、そういう色々な出会いがあって、アタシは今トオル君と一緒にいられるんだなあって思うから。」

「ウン。そうだよネ。アタシ、凜のそういうところ、すごく好きだな。思い出を引きずらないけど大切にできるのってすごくいいと思う。」

そんな話をしながら美味しいお料理も食べ終り、そして次ぎはいよいよ湘南海岸に移動。

アタシとミコも『出演』するビーチバレーとなるわけデス。

第八十四話 湘南ガールズトーク3

さて、アタシたちは日影茶屋から車で湘南海岸に移動。
そしてココでいよいよアタシとミコも混ざってビーチバレーのシー
ンが始まる。

アイドルチームはみーちゃんたち3人にアタシとミコ、そしてココ
から参加する20代の女性エキストラさん1名の6人。

「じゃあ、それぞれこれに着替えてビーチに集合してください。」
ADさんにそう言われて受け取った水着はビニール袋の新品のもの
だった。

アタシたちは、撮影のために貸しきった海の家更衣室に用意され
た水着を持って入る。

「あれ、ビキニ？」
ビニール袋を開けて出てきたのは、薄いブルーのストライプ柄のビ
キニタイプ。

そうかあ……。だから、事務所で出発の前に身体のサイズを確認した
んだ。

「ねえ、ミコ。アタシビキニの水着着けるの初めてなんだけど……。」「
けっこう慣れた手つきでビキニを着けているミコにアタシがそう言
うと

「あ、そうなんだ？ じゃあ、後ろ向いて。これは三角タイプだ
から、だいたいブラみたく脇の下から肉を寄せる感じでまどめてい

けばいいんだけどネ。ココのひもを首にかけて…。」
そう言っただけでミコはアタシの背中に回って要領を教えてください。

「ハイ、こんな感じかな。動いているときにムネがはみ出ないよ
うに注意しないとダメヨ。」

「ウン。ありがとお。」

みーちゃんたちアイドル3人はさすがにグラビア撮影の経験から上
手な着こなしをしている。

ビーチに出ると、現地ではすでに湘南海岸の一角に撮影許可を取っ
てビーチバレーの準備がされていた。現場では撮影機材がセットさ
れ、ADさんや係の人たちが忙しく動き回っている。

そしてみーちゃんたちは脇の方に立てたビーチパラソルのところで
改めてメイクさんにお化粧と髪の毛を直してもらっている。
そしてアタシたちもみーちゃんたちが終わった後で簡単にお化粧を
してもらおう。

するとそこに

「やあー、こんにちわー。」

声の方を振り返ると近づいてくるのは、3人の海水パンツにTシャツ
を着た若い感じの男の人たちだった。

遠くから見ると、その3人はプロデューサーのところで挨拶をして

いる。

「あれってアンバランスじゃない？」

ミコがアタシに囁いた。

「あ、ホントだー。」

アタシも最近、TVのトーク番組の中のひな壇シーンでときどき出ているのを見たことがある。

彼らはまだメインで扱われることはなく「賑やかし」と言われるひな壇の上段に座ってるクラスの若手芸人さんだけど、イロモノっぽいタイプのグループではなくて、さっぱりした笑いでけっこうカッコいい感じなので女の子の間でじわじわ人気が出てきているらしい。

「あとでサインもらっちゃおうヨ。」

「うん、そうだね。」

するとプロデューサーの清水さんがアタシたちの方に

「女の子たち、チヨット集まってくださーい！」と声をかける。

「エツト、こちらが今日の対戦相手のアンバランスさんです。そして後から男性のエキストラさん3人が混ざります。それでこちらが佐倉美由紀さん、小川ミクさん、瀬尾真奈さんネ。それと今日のバレーに混ざってくれるのがこちらの3人で小谷凜さんと藤本美子さん、そして西野由子さん。小谷さんと藤本さんは佐倉さんの学校の友達なんですヨ。」

「そうなんですか。アンバランスの中本です。皆さん、よろしゅう。」

3人のうちリーダーらしい痩せて一番背が高い感じの人がニコツと笑ってそう挨拶をした。

ああ、なんか大阪弁の人と面と向かって話すのってすごいひさしぶりの気がする。

そういえばこの人ってどことなくワタルに似た感じがするよネ（笑）大人なんだけど、少し少年っぽさが残ってるっていうか…。

そのときフツと思った。

あ、アタシってこういうこと思い出しても微笑めるようになったんだな…って。

そう考えたら、なんか自分で自分のことが可笑しく思えてきて、周りのことを忘れてついクスクスと小さく笑ってしまった。

そんなアタシをチョットキョトンとした顔で見るアンバランスの中本さん。

「あ、ゴメンなさい。あの、昔知ってた人に雰囲気似た感じがしたから。」

ハッと気付いてあたしは中本さんに頭を下げた。

「あ、そうなんやー？ 謝らんでもエエで。ボクのことをその人や思ってたってや。」

中本さんは優しくそんな顔でそう言った。

するとその横にいたアンバランスのうちの1人、野口さんが

「オーオー、中本お得意の爽やか笑顔かいな（笑） 気をつけなアカンでー！ こいつ、これでいっつも女の子の心わしづかみにしようとするからなー。」

「オマエ、オレの作戦ばらすなやー！ こっちの男こそ注意したほうがエエで！ こいつ人を貶めて反対に自分のことさりげなくよく見せようとするさかいになー。」

「オマエこそ、オレの作戦ばらすなやー！」

「オマエじゃ！」

「オマエの方こそ！」
と軽くどつき合う。

そしてそこにもう1人の高村さんが

「オマエら、いっつもこんなケンカばかりやな！ こいつら2人も口くでもないで。 ホントはオレが一番頼りがいあるからな。」
と突っ込みを入れた。

「アハハハ！」

女の子たちはみんな大笑い。

こういうプロのお笑いをこんな間近で見れるだなんてっ！

第八十五話 湘南ガールズトーク4

こうして始まった女性アイドルVSお笑いグループのビーチバレー戦。

始まる前は、TV番組だし男性チームが手を抜いて女性チームを勝たせるように最初から打ち合わせてあるんじゃないかと思っただけで、試合の前にぜんぜんそういう話はなかったし、そして試合が始まってみるとどっちもすごく真剣になっていた。

結局セットカウント2VS1で男性お笑いチームの勝利となった。そして最後に歌手デビューもしていた小川ミクちゃんがビーチで歌を披露して番組は無事終了した。

「ハイ、お疲れ様ー！」

ADさんが気を利かせてみんなに缶ジュースを配ってくれる。

汗だくの体をタオルで拭ってキンキンに冷えた缶ジュースのプルトップを開けると、プシューっと音を立てて冷気が少し漏れている。

あー、もう我慢できないっ！

そんなことを叫びたいくらいに渴いていたアタシの喉。

そこに冷たいジュースがさっと流れ込んでくると、それはまるで蒸発するようにあたしの身体に吸収されていく。

「あー！美味しいー！」

「ホント、最高！」

「なんか楽しかったネー。」

「ウン。ビーチバレーって始めてやったけど、砂に足を取られち

やって思ったよりずっと難しかったヨ。」

アタシたちがこんな話で盛り上がっていると、そこにアンバランスの3人が近寄ってきた。

「やあ、お疲れさまー!」

「お疲れ様でしたー。」

アタシたちもそういつて彼らに挨拶する。

その中でさっきのアンバランスの中本さんがアタシに話しかけてきた。

「エツト、凜ちゃんやったっけ?」

「あ、ハイ。そうです。」

「今日はすごい頑張ってたなー! びっくりしたワ。凜ちゃんは学校で部活なにやっとな?」

「チアリーディング部です。みーちゃん、あ、佐倉さんと一緒になんです。」

「へえー! そうなんか? だからやなあ、すごく身体が柔らかいみたいやったし。」

「そんな感じでした?」

「ウン。一生懸命やったし、頑張り屋やなあって思った。」

「エへへ...。」

「さあ、それじゃ宿泊場所に移動しますから、皆さん着替えてバスに乗ってください。」

ADさんが皆に指示をする。

今日はみーちゃんたちアイドル3人とアタシとミコは葉山マリーナ

にある事務所の部屋に泊まる予定。
そしてスタッフの人たちとアンバランスの3人もそのすぐそばの旅館に宿を取っていた。

アタシたちは旅館のお風呂に入った後浴衣に着替えて大広間に集合。そして今回の撮影関係者の約30人全員が集まってその旅館の大広間で打ち上げ会となった。

50畳くらいはありそうな日本間の座敷には長いテーブルと座布団がたくさん置かれている。

部屋に入ると、今朝赤坂の事務所前で分かれたスターダストプロの前田さんが来ていたのは少し驚いた。

「わぁ、前田さん。どうしたんですか？」

アタシとミコが前田さんに近寄って話しかけると

「やぁ、今回はお疲れ様でした。スゴク頑張ってくれたんだってネ。ありがとう。」

「エヘヘ、でもとっても楽しかったデス。」

「それは良かった。こういうこともキミたちのいい思い出になりますヨ。」

「ハイ。今回はホントにいい経験をさせていただいてありがとうございます。」

「ハハハ。イエイエ。それじゃ、キミたちも席について。」

こういうときにどこに座ったらいいのかはよくわからなかったが、前田さんがさりげなく案内してくれてアタシとミコは女性スタッフさんの席の近くに座った。

メイクの永田さんと岸さん、音声の小原さん、そしてみーちゃんのマネージャーの若本さん。

今回参加した女性スタッフは4人。

みんなとても一生懸命に仕事をしていて、話をしても尊敬できる人たちだった。

「そっかあ。ミコちゃんは将来は先生を目指してるんだネ。凛ちやんは？」

「ウーン。まだはつきりしたことは考えてないんだけど、英語を生かせる仕事がいいなあっていうのは思ってるんです。」

「そうなんだ。でも今の時代はただ英語が話せるとかだけじゃ中々難しいわヨ。アタシも就職を考えて英語学校に通ったりしてたしだから英語だけじゃなくって文化とか経済とか色んな教養を身に付けていったほうがいいと思う。」

「ウンウン。」

学校にいるだけじゃきつと会えないような、社会で働いている人たちの色々な話はアタシたちにはとても刺激的だった。

前田さんも言うように、こういう経験を大切にしたいなってホントに思う。

そして宴会はドンドン盛り上がっていき、次第に周りの人たちも席を移動したりと混ざりだしていった。

ミコはプロデューサーの清水さんとさつきから熱心に話している。

ミコが聞いた話では、清水さんは国立大学の教育学部の出身で教師を目指していたらしい。

それが学生時代にテレビ局でアルバイトをしたら、その魅力にはま

ってそのままそのテレビ局に就職してしまったそうだ。

こういう業界では本当に色々な人たちが働いているのがわかった。前田さんは早稲川大学の法学部出身で、学生時代は弁護士を目指して勉強していたらしい。

みーちゃんのマネージャーの若本さんはスターダストプロの元アイドルタレントだったそうだ。

何かを目指していても人生って必ずそういう方向に向かうとは限らないんだよネエ。

そう考えると運命ってホントにわからないって思う。

アタシだって今自分がこうやって女性として暮らしているなんて、男の子として生活していた頃には想像すらしていなかった。

あの頃は漠然と自分もいつかは誰か女性と結婚して父親になってなんて想像くらいはしたことあったけど、それが今のアタシは将来は多分男性と結婚して母親になっていくなんて…。

何かここ数年間の自分の人生を考えると、思わずクスクスと笑ってしまう。

そんなとき

「アレ、また思い出し笑いしとんな？（笑）」

そう言われてフツと横を見ると、アタシの隣の席にはアンバランスの中本さんが座っていた。

「あ、イエ、あの、こういう雰囲気って何か楽しいなって思ったんです。」

アタシは顔を赤くして思わずそう言い訳をした。

「アハハ。たしかになあ。　ボクもこの世界に入ってそれまでの自分の居た世界とすぐ違ったのにびっくりしたもんや。」

「中本さんは何歳のときにこのお仕事を始めたんですか？」

「ボクは高校卒業して最初は自動車販売の仕事しとったんや。それでその後いくつか仕事変えてな。　吉本に入ったのが21歳のときや。それでデビューして3年目で今24歳。」

「そうなんだあ。よくTVに出てるところ見ますヨ。」

「お、そっか。最近やっとTV番組に出れるようになってん。　凜ちゃんは今高3やったよな？」

「ハイ。誕生日は3月だからまだ17歳ですけど。」

「わっかいなー！　さっき言うってたけど、佐倉みーちゃんと同じ学校の友達やったんよな？　凜ちゃんもみーちゃんに負けず可愛いと思うけど、こういう仕事憧れたりせーへんの？」

「いやー、そんな可愛くはないけど（笑）　前にそういうお誘いを受けたことはあつたんですけど…。」

そう言うと中本さんはアタシの顔を見て少し考えるように言った。

「やっぱりそうなんか？　でも、ウーン…凜ちゃんってどっかで見ただよな気がしたんやがなあ。」

「あ、多分ディズニースタジオのCMじゃないかな？　じつはアタシと藤本さんと佐倉さんの3人でそのCMに出たことあつたんです。それでその後スターダストプロの前田さんにこの業界でお仕事してみないかってお話をいただいたんですけど、学校とかと両立していき自信なかったし、アタシとミコはお断りしちゃって。みーちゃんはデビューしたんです。」

「あ！そっかあ！そうや！　思い出したでー！　可愛い娘やなあって思っと思った。」

「イエイエ、恥ずかしいですヨ（笑）」

いつもＴＶの中でしか見ないタレントさんたちだけど、こうやって話してみるとふつ々の年上の男の人と話をしているのと変わらない気がするの不思議。

彼はデビューしだしてからの色々な苦労話をアタシに聞かせてくれた。

「最初はな、小さな営業から始めるんやけど、一日3回くらいステーションにあがっても一ヶ月の給料が3万円とかだな。」

「エー、じゃあどうやって生活してたんですか？」

「まあ、ほとんどアルバイトやな。コンビニ、ビル掃除、パチンコの店員、なんでもやったで。でもそういうことをしながら人間を観察するんや。たとえば他愛もないこと話している2人がいたとして、そういう他愛もないことの中にハツとするような面白いネタがあったりするんや。それで気がついたら何でもメモしておいて、その話を後でドンドン膨らませていく。そうするとネタに仕上がっていくわけや。」

「へえー！ 漫才してる人って何であんな面白いこと思いつくんだろって思ってたけど、いつもそういう観察してるんですねー。」

「そうや、だからお笑い芸人っていうのは人間観察がすごく得意なんや。」

「じゃあ、もしかして今アタシも観察されてたりして？」

「もちろんや！ しっかり観察しとんでー！ あとでどういうネタに仕上げようかな（笑）」

「アハハ。じゃあ、アタシは観察してるとどういふふうに見えるんですか？」

「そつやなあー…。まず凜ちゃんはルックスもかなり可愛い、こ

うやうやして話す内容も受け答えもすぐくしっかりしとるし頭がいい感じするな。キミくらい年齢の女の子は自分の話ばかりしたがる娘が多いけど、キミはちゃんと男の方の話も聞く姿勢をもっとる。だから凜ちゃんと話すと惹かれる男はかなり多いと思うヨ。やのにキミはどっか自分を控え目にしてしまうところがある気がするなあ。

「あ。

驚いた…。
会ってまだ少ししか時間が経ってないのに、こういう人ってそのままで他人を観察しちゃうんだ。

アタシはもう少しこの人と色々な話をしてみたくなった。

第八十六話 湘南ガールズトーク5

「ボク、もう少し凜ちゃんと話してみたいなあ。」
中本さんはアタシの耳に手を当ててこんなことを囁いた。

けっしてトオル君のことを忘れてたわけじゃない。
でも、そのときのアタシはきつと少し芸能界というその場の雰囲気
に舞い上がってしまったんだと思う。

「でも、もう遅い時間だし…。」

時計を見ると時間は8時に近くなっている。

「あまり遅い時間まで付き合わせるつもりはないヨ。このすぐ近く
に海の見えるカフェレストランあるんや。そこやったら葉山マリ
ーナまですぐ戻れるしな。」

「ウーン…。」

「ボクもそれなりの年齢やし、色んな経験もしてきたからな。凜
ちゃんの話もきいてやれるし、アドバイスもしえあげられるかもし
れへん思っただけや。」

「じゃあ…1時間くらいなら。」
こうやって相手に言い訳を作ってもらっちゃうところは、アタシも
女の嫌なところを身に付けてしまったのかもしれない。

こうしてアタシは8時半に宴会がおひらきになると、浴衣から着てきた服に着替えた。

「あれ、凜、マリーナの部屋に戻らないの？」

旅館を出るときミコがそう声をかけてきたときはドキンとした。

「ウ、ウン。ちょっと家にお土産買って来るから。1時間半くらいで戻るから。」

「エ、あ、チヨット、凜？」

アタシは小走りに外に出た。

やましいことしているはずじゃないのに、親友のミコにさえウソを ついてしまうのか。

なんかズルイ女になっちゃったのかな、アタシって……。心がモヤモヤしてしまう。

ああ、やっぱり中本さんに断って宿泊場所に戻ろうか……。でも話をするだけなんだし……。

こういう人と話をする機会なんかそんなにないだろうし……。

そんなことを考えながら

旅館から歩いて5分くらいのところにあるコンビニの前 約束した場所に行くと中本さんはすでに待っていた。

「やあ、来てくれたんや。良かった。」

「あ、あの……。アタシ……。」

やっぱり戻ります、その後になんかそうつなげるつもりだった。

「もしかしたら来てくれへんかなあ……ってちヨット思ったんや。嬉しいなあ。」
「そう言つて照れ笑いする少年っぽい中本さんの表情は、『あのとぎのワタルそっくりに思えた。』」

「……………」

「じゃあ、行こうか。　ここから歩いてすぐやさかい。」
「あ、ハイ。」

1時間だけだから
1時間経ったら、ゼツタイアタシの方から「帰る時間だから」って
言おう。

そして10分ほど歩いたところに中本さんが話したカフェレストランが見えてきた。
そのレストランは海岸線沿いの小高い丘の上に建っていて、真っ白なペンキの小さな一軒家だった。

「わあー、こんなところにこんなレストランがあるなんて知らなかった!」

「ハハハ、凜ちゃんは葉山は何度か来たことあったんか?」

「エイト、小学生の頃両親に連れてきてもらったこととかあったから。」

「そっか。凜ちゃんはいいご両親をもってるんやな。」

「でも、中本さんも小さい頃はお父さんとかお母さんに色んなこと連れてってもらったでしょ?」

「あー、ボクは小2のときにお父ちゃんが死んでしもたからな。お母ちゃんだけやったから、そんなに一緒に遊びに行つたことなかったんや。」

「エ、あ…ゴメンなさい。　へんなこと聞いちゃって…」

そうだったんだ…。

なんか話の流れでいけないこと言っちゃったな…。

「いや、ぜんぜん気にせーへんといてや。　その分お兄ちゃんがおつてな、これがボクと7歳も離れててお父ちゃんみたいは何でも教えてくれたんや。」

「あ、お兄さんがいるんですか？　アタシは3歳下の弟がいるんです。」

「ホウ、弟さんおるんかい？　じゃあお姉ちゃんやな。　弟、可愛いやる？」

「可愛いときもあるけど、けっこー生意気なんですヨ。　アタシのことお姉ちゃんと呼ばないで『凜ちゃん』って呼んでるんです。」

「アハハハ！　照れくさいんかな？　弟といたって男やからな。」

さすが会話のプロ

中本さんはアタシに上手に話題を振ってくれていた。

「あ、ココな、チヨコスフレがすごく美味いんやて。　ボクもわりと甘党やし、一緒に頼まへん？」

「わあー！じゃあ、お願いします。」

しばらくしてウエイターさんが運んできてくれたチヨコスフレは、さくつとした表面としゅわくつとした中の生地が絶妙！

そしてこれと一緒に出されたアップルティーがすごくいい香りなのっ！

「あ、美味しいー！」

「そうやる？　ボク、ケーキとか小さいときからけっこう好きでな、一回相方連れてケーキ食い放題行ったことあったんや。」

「エー！男同士ですか？」

「ウン、そうや。でも周りはやっぱり女の子ばかりでな（笑）でも、負けへんかったでー！ボク一人でプチケーキ20個も食べたんヨ。」

「エー！すごいですねネ。　アタシも甘いのが好きだけど、20個は無理な気がする。」

「やっぱ、そうやる？　そしたら相方が、10個目くらいで「もうカンベンしてくれやー！」って言って逃げてしもた。（笑）」

「アハハハハ！！　オカシー！（笑）」

「凜ちゃんは、ケーキとか自分で作ったりするん？」

「あ、ときどき作ったりしますヨ。　あんまり難しいのはできないけど、シフォンケーキとかシユークリームとか。」

「ホオオオーッ！　そりゃ、美味そうやなあ！」

「でも、失敗するときも多いんです。　そういうのは弟に食べさせたり（笑）」

「ワハハハハ！！　そりゃ、弟さん可哀想やあーっ！」

「やっぱり？　アハハハ！」

「それで、成功したんは彼氏にあげるんやろ？」

「エ、あ…、そう…ですネ。」

「そっかあ。　何歳？」

「エ？　何歳って？」

「いや、凜ちゃんの彼氏って何歳かなって。」

「あ、アタシの1学年上です。」

「ホウ。　じゃあ同じ学校の先輩とか？」

「ハイ。　でも、もう大学生ですけど。」

「あ、そっか。　凜ちゃんたちはたしか青葉大の附属高校に行ってた

んやな。ほなら、その彼氏も青葉大生？」

「ハイ、そうです。」

「どんな彼氏かなあ？」

「ウーン…。身長は180?くらいかな。アタシ158cmです
から見上げちゃって(笑)」

「アハハ。それで？」

「あとは…小学校のときから空手やってるんです。高等部のときも
空手部で、大学も空手部に入ってるらしいですヨ。」

「ホエエ……。スゴいなあ！じゃあ、凜ちゃんに手出
そうとする男なんかボロクソにされてしまうなあ(笑)」

「あ、いえ、いつもはぜんぜん優しそうな感じですから。」

「でも羨ましいなあ。」

「エ、なにが？」

「いや、凜ちゃんみたいな彼女がおってな。その彼氏が羨ましい
わ。」

「そんなこと…。アタシなんか…。」

「オット、それって凜ちゃんの悪い癖やで？」

「エ？」

「アタシなんか…。って。根拠のない自信はいやらしいけど、キミ
は自分をどっか卑下してしまうところがあるなあ？」

「あ…。」

そういえば、中本さんさっきもそう言ってたな…。

そういうのもやっぱり人間観察なのかなあ。

アタシはまだどこかでコンプレックスを持ってしまってるんだろう
か…。

第八十七話 湘南ガールズトーク6

そのときフツと自分の腕時計に目をやると、なんと11時近く

「やだっ！ もうすごい時間だ！」

アタシは話に夢中になって時間が経つのをすっかり忘れてしまっていた。

「おおっと！ ホンマやな。スマン！スマン！ボクの責任や。」

「あ、イイエ。アタシが気をつけてなかったから。」

「とにかく戻ろうか。」

「ハイ。」

アタシたちは席を立ってお会計のところに向かった。

アタシが自分のお財布からお金を取り出そうとすると

「いや、ココはええヨ。誘ったのはボクなんやし。」

「エ、でも…。」

彼氏でもない人に奢ってもらう理由もないので、アタシは本当に自分の分は払うつもりでいたんだけど、年上の男の人と来て割り勘にするのはもしかしたら相手に失礼なのかも知れないと思い

「じゃあ、スミマセン。ごちそうさまでした。」と素直にお礼を言った。

「ウン。大した額やないんやしホンマに気にせんでええヨ。」

トオル君と一緒にいるときは、3回に1回はアタシが払うようにしている。

トオル君の家は貿易会社を経営しているくらいだからきつとお金持ちなんだろうけど、トオル君はお小遣いについては親から一切貰わず高等部のときから自分でアルバイトしているそうだ。

それはトオル君の親がそういう教育方針だからというのではなく、カレ自身で決めたことらしい。

「凜と一緒にいるときに使う金が親から貰ったもんじゃ自分が情けないからな。」

アルバイトもしたことがない、全部親に頼ってしまっているアタシ。トオル君と付き合うようになってそういうカレがすごく眩しく見えたりする。

アタシたちはカフェレストランを出るでもと来た道を歩き始める。時折通り過ぎる車のサーチライト以外はもう辺りは照明もまばらだった。

フツと空を見上げると、東京の空とは違う星々の瞬き。

「わあー！キレイー！」

「ホウ！ ホンマやなあ。凜ちゃんは頭工工からきつと知ってるんやろうけど、今ボクらが見てる星の輝きってずっと前に光ったときのものらしいな。」

「ウン。だからアタシたちは今その星の過去の輝きを見てるんですよネ。」

「そやな。ということとは、もしかしたら、今はもうあの星もなくな

ってしまったてるかもしれんってことや。」

「あ、そうですねー。だから、逆にアタシたちがもしすごく遠くの星に行つて、そこから望遠鏡で地球を見たら過去の地球が見えるらしいですヨ。」

「ホエエエエー！ オモロイなあ！ じゃあ、ハイ！凜ちゃんに質問！」

「ハイ！ 中田さん。」

「もし、凜ちゃんが過去に戻れるとしたら、いつの『とき』に戻りたいと思う？」

「ウーン…。高校1年の夏休み…かな。」

「アレ、意外やなあ。もっと子供の頃かなって思ったんだけど。」

それに『夏休み』って限定していることが気になる。その頃になんか忘れられない思い出があるとか？」

「エへ…。内緒です。」

戻れないから思い出なんだけど、もし戻れるとしたら…。

あの公園で最後にワタルと別れたとき、「明日もまた会えるよね？」って約束してやりたかった。そしてカレがいなくなったとき「嘘つき！」って…言つてやりたかったの。

そんなことを心の中で考えていたとき

「あんな…。今は彼氏のこと忘れへんか？」

と中田さんが小さな声で呟いた。

「エ？」

すると中田さんがいきなりアタシの身体を引き寄せてきた。

「エ、チョット、ダメですヨ。」

タシから離れられて、その勢いで彼は後ろに尻餅をついた。

アタシは腰の力が抜けたように、ヘナヘナとその場に座り込んでしまった。

「キミは一体なにをしてるんだっつー！」

真っ暗な中で転がって倒れる中田さんにそう叱り付ける男の人の姿
フツと見上げると、そこにはスターダストプロの前田さんがすごい
形相で立っていた。

「ま、前田さん！」

アタシは思わず叫んだ。

「うちの事務所はこういうことは絶対にご法度だと以前から言っ
てるはずだぞー！」

「い、いや、あの、その…。」

「それに彼女は高校生だぞっ！ それをいい大人のはずのキミがっ
！ 帰れっ！ 私の前から早く消えろーっ！っ！っ！っ！」

「あわわわ…。す、すんません！…！」

中田さんはそう言って脱兎の如くに下去って行ってしまった。

「あ、あの…。」

すみません、アタシはそう言おうとした。

そのとき

パシンッ！

前田さんは無言でアタシの左頬をひっぱたいた。

「あ…。」

「私は佐倉さんをキミたちの担任の佐藤先生からお預かりした。

しかし今回はキミも藤本さんも私の仕事に関わって連れてきた以上キミたち2人にも責任を持ったつもりだ。よく反省しなさいっ！」

その言葉を言われたとき、アタシは心の中の糸がぷつんと切れたように涙があふれ出てきた。

「ウ、ウウ…。」
「ご、ごめんなさい。 前田さん、ごめんなさい…。」

前田さんはそれ以上は言わなかった。

アタシの肩にポンと手を置き一言だけ

「さあ、じゃあ、戻ろう。」と言った。

宿泊場所の葉山マリーナの前まで着くと、そこにはミコが一人で立っていた。

「ミ、ミコ…。」

「藤本さんがキミの様子がおかしいみたいだから心配してボクに相談してきたんだ。あの店は彼がこちら辺に来たときよく女性タレ

ントを連れて行くところらしいからね。 キミを誘うとしたらそこだ
ろって思ってる。」

前田さんはそう言ってミコのほうを見ると

「じゃあ、ボクは旅館のほうに戻るからね。 なんかあったら携帯
に電話をしてください。」

そう言ってその場を去っていった。

「あの…ミコ…アタシ…。」

「まったく…アンタって娘は…。」

ミコは目につつすらと涙を浮かべている。

「ゴメンね、ミコ。心配させてホントにゴメンね…。」

ミコは目に浮かべた涙を指で拭って、そしてこう言った。

「そんなんじゃない…アンタを愛したワタル君だって悲しんじゃないよ。」

「エ…………。」

ミコ…。

「ワタル君」って…。

なんで…？

「ふう。。。」

ミコは小さなため息をひとつつく。

そして

「みーたちはもう寝ちゃったから。　チヨット座って話そう?。」

アタシとミコはマリーナのヨットハーバーの袂にあるベンチに腰を下ろした。

「アタシがアンタのワタル君のこと思い出したのかって思ったでしょ?。」

「ウ、ウン。。。」

「アタシはね、最初からワタル君のことを忘れてなんかいないし、それに男の子として生活していた頃のアンタのことも忘れていないヨ。」

それじゃあ…なんで?

あのと、ワタルがいなくなったとき、ミコは「ワタル君なんか知らない」って言ったのに。

「カレがアンタと最後にあの公園で別れた日の夜ね、アタシ、カレに呼ばれたんだわ。夜寝ていたら、カレの声がハッキリ聞こえて。

それであの公園に行ったの。」

「ワタル君がミコを?　なんで?。」

「アタシとアンタが心から対等な友達になれるようになって。　ワタ

ル君は凜が昔の男として生活していたときのことを引きずるとこれから先ずつと心のどつかで負い目みたいなものを持つちやうんじやないかって心配してたのね。それで自分の存在が消えたのに合わせてアンタの過去をすべて女の子としてのものに摩り替えたの。でも、久美子は3人で遊んだ頃の思い出をなくしたくなかったから記憶を変えなかった。そしてカレは、アタシのことはアンタの過去をわかった上で対等な友達でいてほしかったのね。作られた記憶でアタシにアンタの友達でいてほしくなかったの。カレはアタシたちに本当の友達でいてほしかったのヨ。」

「対等な友達……。」

「そうヨ。ワタル君にそのことを聞いたとき、ハッキリ言ってアタシはとても信じられなかったワ。そしたらカレは言ったの。「どうしても信じられなければそれでもいいけど、明日はこの公園の近くは絶対に歩くな」って。アンタも知ってるでしょ？ その日、あの公園の前で通り魔事件があったの。」

アタシ、次の日に図書館に本を返しにいくつもりだったから。もしカレにそれを言われなかったら……。」

「もしかしたら……ミコが。」

「そうネ。アタシが家を出るつもりだった時間帯とあの事件の起こった時間、十分ありえたわネ。それでアタシは騙されたつもりで信じることにした。だから、夏休みが終わって学校でアンタに「ワタル君見なかった？」って言われたときは、ホントにドキドキしたわヨ。顔に出なかったかって。」

「このことはアタシ、ずっと黙ってるつもりだったけど、でも考え

たら、黙っていること自体がアンタとアタシの対等さを傷つけてるもんネ。だから正直に全部言うことにしたの。」

「ミコ、アリガトウ。ホントにアリガトウ。話してくれてよかったってアタシ思ってる。」

「だったら、アタシも良かったワ。それともうひとつ話しておきたいこと。」

「ウン。」

「ずっと前にアンタ、アタシに聞いたことあったよネ？ アンタがホントは女の子だってわかって退院して学校に登校してきたとき、久美子に頼まれてアタシがアンタの友達になっただんじじゃないかって。」

「あ、ウン。」

「アレね、あのときは「久美子には何も頼まれてなんかいないヨ。」って言ったけど、ホントはアンタが病院にいるとき久美子がアタシんちに来たんだ。」

「そう…なの？」

「ウン。それで、あの娘、アンタのことすごく心配しててね、「中2の同じクラスの間だけでもいいからアタシにアンタの友達になつてやってくれないかって頼まれたの。」

「そう…なんだ。」

「正直いうとね、アタシけっこう戸惑ったのヨ。だって、アタシってアンタと同じクラスだったけど、ほとんど話したことなかったじゃん？ アタシ、アンタのことほとんど知らなかったし。中2で初めてアンタと同じクラスになったとき、ホント女の子みたいにキレイな顔してるなあ…って思ったけど、こつ言ったらチヨットシヨックなのもしれないけど、アタシ不思議とアンタのこと異性としてカッコいいとこつて思えなかったんだよね。あ、やっぱりシヨック？」

「ウン、チヨットシヨックかも（笑）」

「アハハ。でもね、他の女の子たちもみんなアタシと同じ感覚だったみたいヨ。それってやっぱり本能みたいな部分でアンタが自分たちと同じ女の子の匂いみたいなのを出してたのを感じてたんだろつネ。」

「そつかあ…。」

「それで、とにかく久美子はアタシが1年のときクラスで一番仲が良かった娘だったしね、アタシにできることだったら協力してあげたいつて思つて、アンタに話しかけたのヨ。最初はアタシたちがアンタの友達になれば、そこからドンドン女の子同士の間みたいで他にも友達ができるんだろつなくらいに思つてただけだ…。」

「だけど？」

「アンタつてアタシにいつも優しくてさ、アタシがアンタに優しくしてあげなきゃいけないのに、アンタつていつもアタシの心配してくれてて…。フツと気がついたら、それまで仲良かった久保ちゃんとか奈央よりもアンタと一緒にいるほつがずつと居心地が良く

なって。アタシのほうがアンタとずっとずっと友達でいたらいいなあって思うようになったんだ。だから同じ高校に受かったときすごく嬉しかったし、アンタが「アタシたちおばあちゃんになってもずっとこんなふうだよネ。」って言ったときはホントにそうだといいなあって思ったわけヨ。」

「ミコ…。」

「だから、アンタはアタシにとってかけがえのない友達なんだヨ！アタシはアンタに出会えたことにすごく感謝してるんだヨ！」

「ミコ、ミコ、アタシもだよ！アタシもずっとずっとミコと友達でいたいって思ってる。」

「凜ー！」

「ミコー！」

アタシたちはその場でお互いを抱きしめ合って泣いた。嬉しいのに、すごく嬉しいのに、涙が止まらない。

ワタルはアタシにこんな素晴らしい宝石を残していつてくれたんだネ。

第八十八話 男と女（前書き）

しばらくチョットエツチなところがでてきますので、注意して読んでいただければと思います。

第八十八話 男と女

季節は秋

高等部に隣接する大学キャンパスのメインストリートは黄色に色づいた銀杏の葉でまるで夢の世界のようになる。そして銀杏の葉は下に落ちて積み重なり黄金色の絨毯を編んでいく。

「わあー！今年もすごいねー！」

大学推薦のための学力テストも終わって束の間の落ち着いた時期。アタシとトオル君は久しぶりに土曜日の午後の放課後デートをすることができた。

キャンパスの中にある古いチャペルの前で待合わせをして、ゆっくり黄金色の並木道を手をつなぎながら歩く。

道の途中にあるベンチでは、青葉大の学生らしい女の子が座って何かの文庫本を読んでいる。

道の反対側のベンチでは、きっと青葉大を見学に来たと思われるセーラー服を着た女子高生の3人が座っていて、少し寒い中で青葉大名物のソフトクリームを舐めながらおしゃべり。

「あ、セーラー服だ。」

アタシが彼女たちの方を見てそう言つと

「凛はセーラー服って着てみたかった？」

とトオル君が尋ねる。

「いいなあって思ったりもするかな。」

カワイイもん。

でも、青

葉の制服も好きだヨ。」

「ウン。凜は青葉の制服が似合うヨ。オレたちが初めて会ったのも、凜がミコちゃんと高等部に入学する前に制服作りにきたときだったよな?」

「ウン、そう。あのとき初めて青葉の制服をデパートで試着して、なんかスゴク感動しちゃったんだヨ。そのときミコとお互い写真撮ったから今度見せてあげるね。」

「ウン。でもその後入学して廊下でぶつかりそうになっただろ?」

それがあのとときの娘だったのはホント驚いたなあ（笑）」

「あ、そうだよネエ！（笑）それが今こうしてお付き合してるんだもんネ。」

「そうだなあ。運命…なのかなあ（笑）」

「フフフ…。だったらいいなあ。」

そしてアタシたちは正門を出て青葉通りを神宮のほうに歩き始める。

「どこ行こうか?」

アタシは背の高いトオル君の腕に自分の腕を絡めて尋ねる。

「ウン。じつはこの前さ、空手部の先輩にすごいウマイラーメン屋に連れてってもらったんだ。今度、絶対凜を連れてってやるって思ってたさ。これから行ってみないか?」

「わあー！行きたい！行こう！」

「ヨシッ！じゃあ、ちヨットあるけど。」

「いいヨ。トオル君とおしゃべりしながら歩いてれば楽しいもん。」

そのラーメン屋は明治公園の近くにあって、ラーメン好きの間ではすごく有名なお店らしい。

それほど大きくないお店の前にはすでに50人くらいの行列ができ

ていて、その中には女性同士やアタシたちみたいなカップルもけっこう混ざっていた。

30分ほど待ってようやくカウンターにつける。

アタシは普通のラーメンを、トオル君は大盛り&チャーシュー追加のラーメンを頼んだ。

「わぁー！大きいネエー！アタシ食べきれるかなあ…。」

「食べられるだけでいいヨ。残ったらオレがもらうから。」

「ウン。ありがとお。」

一口スープをすすると、こってりした見た目と反対にスウーっと吸い込まれるような感じがする。

「生姜入れてるのかな。美味しい。」

「そうか、良かった。」

食べ終わってみると、あれほどの量の湯ラーメンがあっさりアタシのお腹に収まった。

「美味しかったー！」

「あー、満腹！」

食べ終わると順番を待つ人たちに席を空けるため慌しくお店を出る。食後の腹ごなし

明治公園の中を散歩するアタシたち。

「美味しかったねー！」

「ウン。この店な、高等部のときから行きたいって思ってたんだけど、機会がなかったんだ。それで、この前先輩と飲みに行った

帰りにこの店で奢ってもらってさ。」

「へえー。 トオル君仲のいい先輩できてよかったネ。」

「ああ、今度凜にも紹介するヨ。 大学から青葉に入った人なんだけどさ、九州出身ですっげー面白いんだ。」

「ウン、楽しみにしてる。」

都心にあつてとても広いこの公園には人もまばらだ。

鬱蒼とした木々がよけい他の人の存在を遮ってもある。

「あのさ……。」

「ウン、なに？」

トオル君は少し照れたように口ごもって言う。

「キスしても……いいかな？」

トオル君の家に行った帰りに近くの公園で交したアタシたちの初めてのキス。

あれからときどきアタシたちはデートの途中でキスをするようになった。

自然に唇を寄せることもあったし、こうしてカレから言うこともあった。

1回は、アタシから「キスして？」って言っちゃったこともあった。

トオル君のキスはとても好き。

お互いまだぎこちないけど、温かくって、包まれているみたいで、カレとキスしているときアタシはとても幸せな気持になれるんだ。

「ウン。 じゃあ、こっち。」

辺りはまばらな人影とはいっても視界の向こうには他のカップルも

歩いている。

アタシはそう言って木立に囲まれた古い木造の建物の影にカレを引いていく。

茶色のジャケットに白の薄手のセーター、そしてジーンズ姿のトオル君。

高等部の制服を着ているアタシ。

カレの腕がアタシの身体を優しく抱きしめる。

そして近づいてくるカレの顔にアタシはそっと目を瞑り、カレの熱い唇を受け止める。

こうしているとき、最近ではキスの途中でカレはアタシの胸やお尻の辺りも摩るようになっていた。

キスしているとき、初めて胸を触られたときはけっこう驚いた。

自分で自分の胸を触ったりするのはぜんぜん違う感覚。

男の人の大きくて厚い手のひらで胸を掴まれて、アタシはまるで電気が走ったような感じがして思わず

「あっ！」と声をあげてしまった。

でもそれは不思議と嫌な感じではなかった。

アタシはカレに求められているというのがすぐくわかる感じがした。

「凜……。愛してる。」

「トオル君…トオル君…。アタシも…大好き…。」

お互いの唇を吸いあって、お互いの名前を囁くように呼び合っている。

カレはアタシの身体をぎゅっと抱きしめながら、そして手のひらをアタシの胸に這わせる。

ただ今日は今までと少し違っていた。

カレはアタシの制服のブラウスのボタンをひとつ開け、そしてその隙間から手を入れてきた。

「あ…、トオル…君…。」

カレの手のひらの体温がアタシのブラごしに伝わってきた。

ブラの上からカレの大きな手がアタシの胸をぎゅっと揉んだとき
咳くようにアタシ囁いた。

「トオル…君…。チョット…痛い…。」

「エ、あ、ゴ、ゴメン！」

カレはそのときハツとなって、アタシのブラウスに差し入れた手を出した。

「ゴメン、なんか夢中になっちゃって。痛かったな。」

「あ、ウウン。もう大丈夫。」

トオル君は少し自己嫌悪のような顔をしている。

そのときアタシは、自分からカレの唇に小さなキスをして囁いた。

「エへへ、トオル君、大好きだよ。」

照れたような顔をするカレを見てアタシは少し安心する。

その日の夜

アタシは家でお風呂を出た後、自分の部屋でフツと今日のことを思い出した。

トオル君と付き合いだして9ヶ月目。

お付き合いの長さはあまり気にしないけど、そういうことって今から考えておいたほうがいいのかなあって。

当たり前のことだけど、アタシは女でトオル君は男であるわけで。男の人がセックスに関心を持つのは当たり前のことだってわかってる。

それに女だってぜんぜん関心がないわけじゃない。

多分関心の持ち方が少し違ふところがあるんだろうけど、好きな人に抱かれないっていうのは女のほうが気持は強いかもしれない。

こんなことミコにだって言えないけど、じつはエッチなマンガを読んでいるとヘンな気分になっちゃったことも何度かあった。

今日だって、カレにブラの上から胸を触られたとき、すごく切なくなつて、カレのことをギュって抱きしめてしまいそんな自分がわかつた。

でも、実際にセックスをするということを考えると、どこか怖いよ

うな気持が心の中に湧き上がってくる。

ひとつはカレとそういう関係になった後での自分とカレの気持の変化。

アタシはきつとカレをもつと身近に感じるようになる気がする。

カレはどうなんだろう？

男の人はそういう関係になった後、その女性に対してどう気持が変化するんだろう…。

そしてもうひとつは、やっぱり妊娠のことだった。

初めて生理がきた中2のときから数ヶ月間は不安定な期間が続いたけど、中3になった頃からは毎月の生理は比較的安定的だと思う。今ではほとんど予定していた日の辺りにちゃんと生理がきている。

それでもセックスすることと妊娠とは必ず関係している。

男女別の何回かの授業でそういうことの基本的なことは習ったけど、それでもそうなる可能性が少しでもある以上気持は揺れてしまう。

最近では、自分が男の子として生活していたときの感覚もほとんど思い出せなくなっていた。

でも、今日みたいにキスだけじゃなくアタシの身体を求めてくるトオル君を考えると、きつと男の子の気持って理性だけじゃ抑えられないんだろうなって思う。

アタシは思い立ってパソコンを開いた。

「避妊」の言葉で検索をかけて、いくつかのサイトを見てみる。

コンドーム、オギノ式、子宮内避妊用具、ピルなど、

色々な方法があるみたいだけど、子宮内避妊用具とかピルはお医者さんにかからないとできないものだから、未成年でまして高校生のアタシにはとても考えられない。オギノ式なんていうのも聞いたりするけど、これはけっこう曖昧なものだつて話も聞く。

やっぱり…コンドームなのかな。

それは男の人側の意思に頼る方法で、女性はお願いをするしかない。ただそれも絶対妊娠しないということではなく、危険日はやっぱり避けておくべきらしい。

アタシはカレにそういうのをちゃんとお願いできるんだろうか…。

あー、女ってなんかメンドクサイ！

第八十九話 アナタと過すクリスマス

12月の中旬

この時期にアタシたちはいよいよ大学内部推薦の結果が出る。

アタシはなんとか国際政治経済学部の中の国際コミュニケーション学科に滑り込み、そしてミコは余裕で教育学部の教育学科に推薦権を獲得。

みーちゃんは何のかんのと職員会議で揉めたらしいが、大学進学後は必ず学業を最優先にして4年間で卒業するということをしっかりと言い聞かせられて総合文化政策学部へ推薦が決まった。

そのときのみーちゃんの喜びようといったら…。

彼女はさっそくスターダスト・プロの前田さんに報告に行ったらしい。

前田さんはみーちゃんの学部推薦をまるで自分の娘のこのように大喜びしてくれたそうだ。

「でもさあ!」

そしてみーちゃんはその後にごう続ける。

「前田さんだったら、ごう言っつ。」「キミがこれから先も我が事務所で芸能活動が続けるに当たって3つ条件を出す。ひとつ目は大学の授業には必ず出席する。2つ目は4年間で卒業するために精一杯努力する。3つ目は大学時代に多くの友人を作る。それで、毎年の履修登録と成績表を必ず自分に提出すること」だって。これを怠ったら芸能活動はさせないって言われちゃったヨ。」

「やっぱり前田さんだネエ。」

「みー、アンタ、ホントにいい事務所に入ったヨ。」
アタシもミコもそう言ってみーちゃんを励ます。

でも前田さんに厳しいことを言われながらも、みーちゃんは前田さんの気持がしつかりわかつているようで嬉しそうな顔だった。

みーちゃんはそのときに前田さんにアタシとミコのことも話をしたらしく、それから少ししてアタシたちそれぞれの家に前田さんからお祝いの商品券が届けられた。その包みの中にはカードが添えられていて、そこには

「大学進学決定おめでとうございます。君がこれから的大学生活の中で、あの面接のときに話してくれた『愛すること』の意味を探せるよう応援しております。 前田」
と書いてあった。

アタシはこのメモを読んで、人生の中で学校以外の場所で前田さんという尊敬できる人に出会えたことに心から感謝した。

3年生は肩の荷が降りてホッとす。

そしてあと少しすればクリスマスという時期でもある。

クリスマスをあと少しに控えた日の日曜日の夜。

この日、アタシはトオル君へのクリスマスプレゼントにと秋口からずっと編んできたマフラーがようやく完成した。

マフラーといえば以前ワタルのために編んでいたことがあったので、要領はだいたいの身についていた。そしてそのワタルのためのマフラーは編みかけのまま久美ちゃんの彼氏のワタルAにもらったワタルの小4の頃の写真と一緒にアタシの机の引き出しの中にしまわれている。

ときどきそれを取り出しては、せめて完成だけでもさせようかという度にも思ったけれど、編み棒を少し走らせるたびに止めて、結局はそれを再び机の中にしまっていた。

トオル君へのマフラーはカレが好んでよく着ている茶系の色に合わせてクリーム色の毛糸をベースにした。そして最後に左端のあたりに「From R・K To T・S」とピンクの糸で刺繍を施す。

「できたああー！ー！ー！ー！」

フフフ…。我ながら自信作だわっ！
編み目もけっこうしっかりしている気がする。

ああ、これを首に巻いたトオル君はどんなふうなんだろう…。

アタシの脳内ではすでにこのマフラーを着けて2人で並んで歩いている姿を妄想してニヤニヤ…（笑）

そのとき部屋のドアを「トントン！」とノックする音が聞こえて、思わず椅子から滑り落ちそうになった。

「凜ちゃー！ー！んっ！ 電話だヨー！ー！」

中3になった弟の悟がドアの向こうから大声でアタシを呼ぶ。

彼は最近は変声期なのか、あの可愛かった小学生時代のソプラノ声
がかなり野太くなって、また胸板なんかも厚くなってきて段々男ら
しくなっている。

アタシはドアをガチャと開けて

「サンキユ。 誰から？」と尋ねた。

「ミコちゃんからだヨ。 ホイ。」

そう言つて悟はコードレスの受話器をアタシに渡した。

ミコとは、アタシが女性として生活するようになった中2の2学期
に友達になつてからは、何度もお互いの家を行き来していたので、
ウチの親はもちろん弟の悟もミコのことは良く知っている。

昔多少人見知りだった悟は、最初の頃は「凜ちゃんの友達の藤本さ
ん」なんて言い方してたけど、それから1年もしないうちに呼び方
は「ミコちゃん」へと変わっていった。

ミコも、自分にお兄さんはいるけど弟も妹もないので弟を「悟」
と呼び捨てにして、まるで自分の弟のように可愛がつてくれたりす
る。

そのため悟もミコには頭が上がらず、ときには自分のように扱われ
ても黙つて言うことを聞いたりする。それでも悟は「ミコちゃんっ
てカッコいいから！」と彼女の言うことにはよく従っている（笑）

アタシは受話器の通話ボタンを押して

「もしもし、ミコ？」と話しかける。

すると

「あ、凜。夜遅くにゴメンね。今話しててだいじょうぶ？」
「といつも冷静なミコには珍しく上気した声が聞こえた。」

「ウン。ぜんぜんだいじょうぶヨ。今自分の部屋で話してるから周りに誰もいないし。」

「あ、よかった！ あのね…凜に聞いて欲しいことがあって。」

「ウン。どうしたの？」

「アタシね、アタシね…。」

するとミコは少し涙の混ざったような声になった。

「ど、どうしたの？ ミコ。」

「あ、ゴメン。アタシね、今日芦田さんに『大学に入学したらちやんとお付き合いしない？』って言われたの。」

「エエエーーーーッ！ ホント？」

「ウン！ホント！」

そっか、

涙声は悲しい涙じゃなくなって嬉しい涙だったんだネ。

「わあーーーー！おめでとー！ ミコ、よかったネエ！」

「ウン。ありがとうー。」

「詳しく話を聞かせて？」

アタシがそう言つと、ミコは少し照れたような声で話し始めた。

「エへへ、あのネ。じつは今日、アタシの大学推薦決定のお祝いをしてくれるって言われて、芦田さんと渋谷で会つたのネ。」

「ウンウン。それで？」

「それで、レストランでお祝いの食事してね、その後一緒に大学のキャンパスでベンチに座つて話をして。そのときネ……。」

「ウン。なんて言われたの？」

「エツトね……ミコちゃんのことずっと大切な妹みたいに思つてきたつもりだったけど、2人で色んなことを話して、同じ時間を過しているうちに一人の女性として意識するようになった。もしキミがよかつたらちゃんとお付き合いをしてみらえないか？」って。「わあー！ やっぱり芦田さんらしくてしつかりしてるよネ。言い方がすごく頼もしい感じる。それでミコは何て言つたの？」

「アタシは……ずっとアナタだけを好きだったから。ハイ」って

……。

「ミコ、アンタ、今すっごい幸せでしょ？」

「ウン！」

「ホントによかつたネー！ あ、なんかアタシも嬉しくつて涙出てきちゃつたヨ（笑）」

「やっぱり凜に一番最初に話したかつたんだあ。」

「フフフ、アリガト。ずっと大切にするんだヨ？」

「ウン！ エへへ……。」

「ん？ どうしたの？」

「なんか、今日は凜の方がお姉さんみたいだネ？」

最後まで照れまくってミコは電話を切った。

よかったネ。ミコ。

そしてこのことを最初に話す相手をアタシにしてくれてアリガト。

じつはミコから電話が来たとき、アタシは「じつは相談があるんだけど…」と避妊のこととかを聞こうと思った。でも、結局最後までこのことを聞くのはやめた。

今のミコにこういうリアルなことはやっぱり相談できない。

「また凜はアタシに気を使って！」なんて言われちゃいそうだけど。

イブの5日前

トオル君から電話がかかって来た。

イブの予約が一杯だった表参道のレストランでひとつ空きが出て押えられたということだった。

「エ、ホント？」

「ウン。ホントもホント！　びつくりしたヨ。　前に予約一杯で断られたときにオレの携帯電話の番号を言っておいたんだ。　そうしたら、その店のひとがそのことを覚えてくれてオレに「どうしますか？」って連絡くれてさ。　嬉しくってそのまま予約を入れちゃったけど、良かったかな？」

「ウン！　トオル君、ありがとお。　あんなステキなお店でイブに食事できるなんて思ってもみなかったから、なんかすごくビックリ！」

イブのめばしいお店の予約は数ヶ月も前から受け付けているらしい。
った。

そんなことを知らないアタシたちがお店に問い合わせたときは、
すでに全席予約済み。

それでも2人でその日が過せれば十分とアタシたちはどこかのフア
ミレスで食事をするつもりだった。

この電話でトオル君に言っておかなくっちゃ…。

でもトオル君との話の流れで中々タイミングが掴めない。

イブの予定の話は終り、カレが大学の友達の話をしているとき、ア
タシは少し無理にカレの話を遮った。

「ト、トオル君。あ、あのネ…。」

「エ、ウン？ どうした？」

「イブの日なだけどネ…。」

「ウン。もしかして…都合悪くなったとか？」

カレの少し気落ちするような声が伝わった。

「ウウン！ちがう！ちがうの！アタシがトオル君と約束してて他
の約束優先するなんてこと絶対ありえないからっっ！！」

「そうか？ なら良かった（笑） それで？」

「ウ、ウン…。その日ね、アタシ…、家に帰るの遅くなるからっ
て…親には言うつもりだから。」

「エ……………」

トオル君はそう短い単語を発して硬直してしまっただみだ。

「あ…あの…トオル君？」

「あ、ゴメン。固まっちゃってた（笑） いいのか？」
「…ウ、ウン。それでネ…。」
「ウン。」

「アタシ…そういうことぜんぜんわからなくて…。」
「あー、直接言葉に出せないっ！
この言葉で察してほしいーっ！

するとトオル君は

「あ、体位…とかか？ じつはオレも予想してなかったから。こんなことなら今から本買って来るとか、ネットとかで調べておくべきかな…。」

あーっ！もうっ！バカッ！
こういうところは意外と抜けてるんだからっ！

「あの…そうじゃなくて、その…ほら…やっぱり、赤ちゃん…で
きないようにしないと…。」

そしてこういうところは鈍感なオレもやっとな気付く。

「あ、ああ。ウン。そうだよ。ウン。」

「ウン。やっぱり…でしょ？」
アタシはか細い声でそう言うのがやっとなだった。

「オレが『アレ』買っておくヨ。」
「あ、ウン。お願いします。」

電話を切った後、アタシは頭の中で今自分が言った言葉とトオル君の言葉をひとつずつ思い出した。

でも思い出すと段々恥かしくなってくる。

ああ、言っちゃった。

とうとう言っちゃった。

そしてイブはいよいよ来週。

第九十話 ときの流れの中で

イブ当日のその日、

アタシは午前中のうちに美容院に行つて、カットをしてもらい毛先に軽くカールをかけてもらった。

家に帰つて数日前から選んだドレスを身に付けていつもより時間をかけてお化粧をした。

「今日は高校の友達とクリスマスパーティーだから、かなり遅くなっちゃうと思う。」

去年のイブの日にチア部と空手部、応援部の合同でクリスマスパーティーをやったことがあったので、母親はとくに疑う様子はない。

「いいけど、あんまり遅くならないようにね。遅いようなら駅からタクシーで帰つてらっしゃい。」

でもやっぱり、心が少しチクチクとする。

それにしても女の子ってすごい。

こんなにも表情に出さないでウソをついてしまう。

男の人はやっぱりどこかでそれが表情に出してしまうんじゃないだろうか。

トオル君とは2時半に新宿駅で待ち合わせ。

アタシは少し早めに家を出た。

駅に行く途中で『あの小さな公園』の前を通った。
ワタルと最後にココで別れたときから2年を過ぎていた。

ワタル君、アタシは今自分の足でちゃんと歩いているヨ。
もうアナタのことを「嘘つき！」なんて言わない。
アナタがくれた幸せのきっかけはアタシが自分自身で育てていくも
のだから…。

待ち合わせの場所に着いたのは2時20分。

あれ…。

遠くから見るとそこにはすでにトオル君が立っている。
でもカレはなんかチョット落ち着かない様子だった。
アッチを見たり、ソッチを見たり（笑）

そのときアタシはフツと悪戯心を思いついて、カレの視線の方向を
避けながら歩いて近寄っていった。そしてカレの立っている柱の反
対側に隠れる。
そしてそそつとカレの背中に近づいてチョンチョンと背中を指でつ
つく。

「おおおっつっ!!」
トオル君はビクツとしたように後ろを振り返った。

「アハハハ！」
「びっくりしたぁーっ!」（笑）
「エへへ、ゴメンね。お待たせ。」

するとトオル君はじつとアタシの姿を見る。

「どうしたの？」

「いや、可愛いなって…思ってた…。」

トオル君のこの言葉にアタシは耳まで真っ赤になってしまった。

「じゃあ、行こうか。」

「ウン！」

アタシはカレの逞しい腕に自分の腕を絡める。

新宿から山手線に乗って渋谷まで出る。

そこから宮益坂を登って表参道の方に歩いて行った。

宮益坂の櫛の並木道の沿道にあるお店は色鮮やかなデコレーションが施されている。

青葉学院高等部を受験して、合格発表の日、そして入学してからずっと通ってきたこの道。

合格発表の日にはアタシとミコとワタルの3人でもうすぐ訪れる高校生活を夢見て、途中のバーガーショップでハンバーガーとコーラの合格祝いをしたっけ。

そして入学してみーちゃんとチア部に入って、練習が終わるとこの道を歩いて渋谷駅に向かい、宝石みたいにキラキラと輝くお店のシヨウインドウを見ておしゃべりしたり。

宮益坂を登りきったところには青葉学院大学の正門がある。

そこから奥の方に向かってまっすぐ伸びている銀杏の並木道。そしてそのつきあたりにある間澤記念館前の植え込みには、大きなクリスマスツリーが立っている。まだ昼間なので照明はついていない。

「食事が終わったら、またこの道を歩いていこう。そのときにはきつとすごくキレイに輝いているヨ。」

「ウン。」

アタシはトオル君の言葉にそう返事をしてカレの肩に頭を摺り寄せた。

レストランの予約は夕方5時。

まだ2時間近くある。

「まだ随分時間があるから、喫茶店に行ってお茶でもしかないか？」トオル君はそう言ってアタシたちが去年の3月にお付き合いをする約束をしたLIMEという喫茶店に連れて行ってくれた。

「あ！トオル君。アソコの席空いてる！」

イブの日の今日はこういう喫茶店もわりとお客さんが多い。それなのに、すごくラッキー！

あるときアタシたちの座っていた席がちょうど空いていたのだ。

アタシはあるとき自分の座った席に同じように腰を降ろした。そしてトオル君も同じようにアタシの向かいの席に座る。

「ね、トオル君。覚えている？この席。」

「ああ、去年の卒業式の後、オレたちここで待合わせしたんだよな。」
「ウン、そう。あれからもう10ヶ月経ったんだよネ。早いなあ…。今度はアタシが卒業する番かあ。」

10ヶ月前の3月

その日はトオル君の高等部卒業式

カランとドアを開けて中に入ると、笹村先輩が一番奥の方の席にすでに座って待っていてくれた。

「あ、ごめんなさい。待ちました?」

「いやー、オレもチョット前に来たばかりなんだ。チア部のほう

の送別会どうだった?」

「フッフ。佐藤先生がサザンのYAYA歌ってね。そしたらみんなで涙の大合唱になっちゃって。」

「アハハ。あの人好きだもんなー。」

「空手部のほうはどうでした?」

「いやー、ウチはヤローばかりだから。最後は裸で踊りだすやつもいたし(笑)」

「アハハハ! 見たかったなあ。」

「そんな女の子の鑑賞に堪えられるもんじゃないって!(笑)」

「あ、エツト…。笹村先輩、ご卒業おめでとつございます。」
そしてアタシは手元の紙袋から小さな花束と手のひらくらいの包み

を出して渡した。

「エ…オレに？」

「ハイ。卒業のお祝い、もらっていただけると嬉しいですよ。」

「あ、ありがとう。なんかびっくりした。開けてもいいかな？」

「あ、ハイ。」

笹村先輩は包みを丁寧に開けると

「オー！オルゴールだ。聞いてみてもいいかな？」

「ウン。」

箱の横にある小さなネジを巻くと流れてきたメロディーは岡村孝子の『夢をあきらめないで』

アタシは笹村先輩の目をまっすぐ見てそして言った。

「アタシも、これから先輩と一緒に歩いていっていいですか？」

笹村先輩はニコツと笑った。

「ウン。ずっと一緒に歩いていこうな。」

「ハイ。」

そして、今アタシはこうしてトオル君と同じときを分け合っている。
.....

「あ、そういえばね」

トオル君が思い出したように言った。

「ウン。なに？」

「前に凧がウチに遊びにきたときに話しただろ？ オレが小3のときウチの近くの公園で偶然知り合った一こ下の男の子のこと。」

「あー、ウンウン。覚えてるヨ。その人がどうしたの？」

「アイツがさ、昔オレにくれた手紙が見つかったんだ。」

「へー！ どこにあったの？」

「それがさ、オレの小学校のときのノートの間（笑） 昨日、たまたま昔の頃の教科書とか整理しててさ、それで小3のときの算数のノートの間に挟まっているのを偶然発見したんだ。」

「エー、スゴイね。なんか運命的な感じがしちゃう。」

「そうだろ？ それがもつとびっくりしたのはさ。」

「ウン。なにになに？」

「ソイツの住所って凧の住んでいるとことかなり近いみたいなんだ。」

「エッ！ ホント？」

「ウン。地図を見ると多分歩いていける距離じゃないかな。今日、その手紙持ってきたんだ。 エット…。」

そう言ってトオル君は自分のセカンドバッグを開けると一通の古ぼけた手紙を取り出した。

アタシはトオル君に渡されたその手紙の裏の差出人を見て、心臓が止まるかと思うくらい驚いた。

そこには小学生のたどたどしい文字で

『あゆかわ わたる』

と書かれていた。

ワ、ワタル…。

ウソ…。

「あ、あのさ、この手紙の中…、アタシ、読んでもいいかな？」
アタシは手紙を持つ手が小刻みに震えながら、トオル君にそう聞いた。

「ああ、いいヨ。」

その手紙は薄いブルーの用紙で男の子向けアニメのイラストが入った便箋2枚に鉛筆で書かれていた。

「とおるくん、あのときはぼくのことをたすけてくれてほんとうにありがとう。とおるくんとあっていつしよにあそんだことはとってまたのしかったです。またとおるくんとあえたらこんどはもつといっぱいあそびたいです。とおるくんはいまげんきですか？ ぼくはからだがよわいからときどきびょういんににゆういんしています。でもさいきんときどきいつしよにあそぶなががいいともだちができました。それは2りのおんなのこで2りともぼくにとてもやさしくしてくれます。だからぼくは2りともだいです。こんどとおるくんもぼくたち3にんといつしよにあそびましよう。あゆかわ わたる」

そうか…。
ワタルはトオル君ともときの流れの中でつながってたんだ…。
もしかしてワタルはアタシのことをトオル君に任せた？
わからないけど…。

「アタシ…。」

「ん？ どうした？」

「この子のこと…知ってる。」

「エツ？ なんで？」

「この子の手紙の中に書いてある2人の女の子のうちの一人って多分アタシのことだと思うから。それでもう一人の女の子は多分久美ちゃんのことだと思う。」

「そうなのか？ 久美ちゃんって、前にCM撮影の選考会するとき応援にきてた安藤久美子ちゃんのことだろ？」

「ウン、そう。アタシと久美ちゃんは幼稚園のときからずっと一緒でずっと仲が良かったんだけど、あの頃、小2の一時期なんだけどね、同じクラスの鮎川 渡君って男の子がいて、よく3人で近所の公園で遊んだの。この住所もカレのものに間違いない。」

「そうなのか。なんか、びっくりしたな。それでアイツは今どうしてるのか、凜は知ってる？ もしまだ近くに住んでいるなら久しぶりに会ってみたい。」

「カレは…カレは…小4のときに…亡くなったの。」

「エエエエツッ！！！」

「小4のときね。カレ元々身体が弱かったから。ほら、同じ名前で字がちがうんだけど、久美ちゃんの彼氏の石川 渉君いるでしょ？ 彼がそのとき同じクラスで、アタシも少し前に彼に教えても

らったの。」

「そうだったのか…。」

「でも、カレがトオル君のことを知ってたなんて、アタシはなんか嬉しい気がする。」

「そうなの？」

「ウン。アタシとトオル君が偶然の積み重ねでこうして出会って、そしてお付き合いするようになって。でもどこかに、ときの流れの中のどこかにきつと接点があったんだなあ…って思うと、すごく不思議。」

「そっか。」

「ウン！」

こんな偶然って…。

それとも偶然は必然だったりするんだろうか。アタシとワタル。そしてワタルとトオル君。

運命の糸はどこかで絡み合っているんだろうか。

でももしそうだとしたら、アタシはその運命に感謝する。

アタシとトオル君を結び付けてくれた赤い糸。

「あ、そういえばね、この前ミコから電話があったの。」

「ミコちゃんから？　なんだって？」

「あのね、ミコ、芦田さんから大学に入学したらちゃんとお付き合いしてもらえないかって言われたんだって。」

「へエー！　ミコちゃん、ずっと彼のこと好きだったんだろ？」

「ウン。中3のときアタシとミコで青葉の見学に行ったんだけど、そのとき偶然前にアタシが入院してたとき一緒だった芦田さんに会って。それから3年間ずっと彼のこと想い続けてきたんだよね。」

「そっかあ。 ミコちゃん、嬉しかっただろうなあ。」
「ウン。あの娘、泣きながらアタシに話してくれてね。少し泣いちゃった（笑）」

アタシも

なんか考えてみると人の人生って毛糸を編むよう。

お互いが意外なところで繋がりが合っていて。

第九十一話 分け合う時間1

話に夢中になってフツと時計を見るともう4時30分を指していた。

「さて、そろそろ予約したレストランに向かおうか？」

「ウン。楽しみだネー。」

アタシは自分から自分の手を厚くて温かいトオル君の手につないだ。横を見るとそこにはカレがいてくれる。

こういうのって何気ないけど、すごく幸せなことだって思う。目が合うとカレがそっと微笑んでくれる。

アタシはその微笑に心が温かくなっていくのがわかるんだ。

トオル君が予約してくれたお店は原宿に向かう表参道の並木道の途中を左に曲がって少し奥まったところにあった。

お店の前は派手な飾り付けをせず、入口の脇に赤レンガが突き上げられてその上に小さなツリーが置かれていた。

木製のドアを開けて中に入ると、トオル君が受付の人に

「予約している笹村です。」と告げる。

「ハイ。笹村様ですね。本日はようこそいらっしゃいました。」

それではこちらにお席をご用意させていただいております。」

ネクタイにスーツ姿で、とても紳士的な身なりの感じのよい中年の男の人がアタシたちに丁寧な挨拶をして奥の方に案内してくれた。

そのお店は、予約のお客用に奥の部屋を別に設けていた。

お店のこじんまりした入口から想像できない、わりと大きな空間は

天井が木製の張が通っていて、壁面の下の方は赤レンガ貼り、上のほうは白の漆喰の壁のようだ。そして隣同士の席とはかなり贅沢に間隔を開けて、各席ごとにシツクな照明がついている。

その案内係の人はアタシのコートを預かってクローゼットのハンガーにかけてくれた。

「わ…あ…。すごいステキ…」

アタシはその案内係の人の引いてくれた椅子に腰を降ろして辺りを見回す。

そしてメニューを簡単に説明されるとトオル君は

「エツト、シャンパンはアルコール抜きのものにしてください。

そして食事はボクはBコースを。凜はどうする？」

「あ、アタシも同じもので。」

「それと食後をお願いしていたプチデコレーションを。飲み物はコーヒーでお願いします。」

「畏まりました。それでは…」

アタシはトオル君にそつと囁く。

「トオル君、慣れてるネ。」

するとトオル君は反対にアタシの耳に囁き返す。

「いや、ぜんぜん慣れてないヨ。じつは今日のために研究したんだ。」

そう言ってお互いクスクスと笑いあう。

食事は本当に美味しかった。
デリケートな味付けっていう感じで、ひとつひとつのお料理が本当に優しい味がする。

食事が終わってプチデコケーキが運ばれてくると、ボーイさんはアタシたちの席の照明を消して、そしてそのケーキの上の細いキャンドルに火を付けた。

「わあ…。」

ボンヤリと揺れる小さな炎の向こうにトオル君の優しい笑顔が見える。

「メリークリスマス！ 凜。」

「メリークリスマス！ トオル君。」

「じゃあ、2人で一緒に火を消そう。」

「ウン。」

そして向かい合ってそつと息を吹きかける。
火が消えた瞬間、またボーイさんが照明をつけてくれる。

そしてそのボーイさんは

「それでは今宵がお二人にとって素晴らしい夜になりますように。」
そう言っただけでまた奥の方へと戻っていった。

「あ、エット…、アタシからトオル君にクリスマスプレゼント…です。」

そう言っただけでアタシは自分でラッピングした包みをカレに渡す。

「開けていいかな？」

「ウン。」

カレは包装を丁寧に剥がしていく。

「オオオオオー……ッ！！ マフラーだあ！ アレ、イニシャルが刺繍してる。もしかして、コレ……。」

「あ、ウン。一応アタシの編んだ……。」

「すっげえー、メチャクチャ嬉しいヨ。」

そう言つてトオル君はそのマフラーに顔をつける。

「温かいな。ホントにありがとう。ずっと大切に使うから。」

「ウン。エへへ、喜んでもらえてよかった。」

するとカレは自分のジャケットのポケットから小さな包みをつ取り出した。

「今度はオレのほうから。開けてみて？」

「ウン。」

「あ、指輪。」

それはプラチナのリングにドルフィンがついていて、その尾のところに小さなダイヤが2つはめられているものだった。

「わあ、ステキ……。」

「そんなに高いものじゃないけど、凛に似合うんじゃないかって思

って。」

「あ、前にアタシの指に糸を結んだことあったけど…。」
「ウン、内緒でサイズを知るため（笑）」

アタシはその指輪を左手の上にそつと乗せた。

「ステキ…すごくステキ…。トオル君、ホントにありがとう。すっごく嬉しい。」

「オレもよかった。気に入ってもらえて。」

「ね、指輪。トオル君に着けてもらいたい。」
アタシはそう言って右手を彼の前に出す。

左手はもしかしたらいつかもうひとつカレがくれるために取っておく。

トオル君はその指輪を取り上げて、アタシの右手の薬指にスツと通してくれた。

「わあ、ぴったり！」

「ああ、よかったあ。女の子の指のサイズってわかんないからさ、ホントは不安だったんだ。」

「ホントぴったりだよ。アタシもこの指輪ずっと大切に करनाからネ。」

そして2人でケーキを食べて、食後のコーヒ-を飲む。
楽しい会話で過ぎていく時間のなんと早いこと！

「じゃあ、そろそろ出ようか。」
「あ、ウ、ウン。」

これだけのお店で食事をして、きつとかなりお金がかかっているはずだと思っ。

でも、トオル君から前もって今日は全部自分に出させて欲しいと言われていた。

そのために普段一生懸命アルバイトもしてるから、今日だけは自分に甘えて欲しいと言っ。

だからアタシはトオル君に感謝して今日は黙って奢ってもらっことにした。

時間は夜の7時。

お店を出ると辺りはすっかり夜も暮れて、代わりにクリスマスイルミネーションで街中が宝石のようにキラキラと輝いている。

814

アタシたちは再び表参道から青葉通りに出て渋谷の方に向かって歩きだした。

途中青葉大のキャンパスの中に見える大きなクリスマスツリーをバックにして正門のところで2人で写真を撮る。

写真を撮ってくれたのは、今日このクリスマスツリーを見に来たお二人とも青葉大の卒業生という50代くらいのご夫婦だった。

その人たちはアタシたちが一人ずつ写真を撮ろうとしていたとき、「良かったらお二人の写真を撮りましょうか?」と言ってくれた。

写真を撮っていた後少しお話をすると、アタシが青葉の高等部生でカレが青葉大生ということに目を細めていた。

とても優しくそうなその奥様は分かれ際、最後にこう言ってくれた。

「アナタたちを見てると、2人がお互いをとても思い遣って大切にしているのがよくわかるわ。クリスマス夜の夜に母校の前で偶然知り合った先輩たちからの小さな贈り物ヨ。愛することってきつとお互いを思い遣る気持ちだって思うから。これから先もずっと2人でお幸せにネ。」

なんか今日はすごく不思議な夜みたい(笑)

そしてアタシたちは渋谷駅を通り越して109のほうに出る。

アタシはトオル君の腕にしがみ付いたまま。

もうすぐそういうホテルの固まっているエリアがある。

ドキドキ…ドキドキ…

フツと気がつくと、アタシがしがみ付いているトオル君の腕はアタシの胸に接しちゃっている。

ドキドキの音、気付かれたかな…。

そのとき

「あ、ここ、空いてるみたい。」

と言ってトオル君が一軒のホテルの前に立ち止まった。

ドキーーーーンッ！

と、とじとじ……。

「凜、ここでいいか？」

トオル君がアタシに小さな声で尋ねた。

「い、い、いいヨ……。」

ドレスのスカートから出た足が小刻みにガクガクと震えているのがわかる。

中に入ると薄暗い照明の中に大きなパネルがあつて、そこに2つだけ空いている部屋のところに照明がついている。

「ど、どっちが……いいかな？」

「ど、ど、どっちでも……いいヨ。」

トオル君はそのうちのひとつを選ぶとガタンと音がしてその部屋のキーが出てきた。

「あ、こうなってるんだ。」

カレはそのキーを取り出して、そしてアタシたちは案内の表示に従つて3階の部屋へと向かつていく。

途中でエレベーターが3階に着いたとき

ドアが開くと目の前に1組のカップルが立っていた。

アタシはもう心臓が破裂しちゃうんじゃないかと思つくらいビク
リ！

向かい合ったカップルの女の子も同じように驚いた様子だった。

アタシとその女の子はお互いのカレの腕をギュッと掴んで、そしてカレの身体の影に隠れた。

キーに表示された部屋の前によく辿り着く。

ガチャンと重い扉が開いて中に入ると、トオル君は薄暗闇の中を部屋の照明スイッチを探した。

「こ、これかな？」

スライド式の照明スイッチをあげると部屋の中がパッと明るくなつてアタシは少し安心する。

10畳ほどの部屋の中にはセミダブルくらいのベッドが端にひとつ。そして、小さなガラステーブルとソファがひとつずつあって、あとは小さな冷蔵庫が端のほうに置いてある。ベッドの横のあたりにおトイレがあつて、奥の方には洗面所とバスがあるようだ。

そして可笑しかったのは、窓がないこと。

「やっぱり、こういうホテルだからかな？」

アタシとトオル君はお互い目を合わせて笑ってしまった。

「あ、あの、ジャケット…架けようか？」

アタシはまだ落ち着かない声でトオル君にそう言つと

「あ、ああ、そうだな。じゃあ…。」

そう言つてトオル君もアタシと同じように少し不自然な声でジャケット

ツトを脱いでアタシに渡した。

「す、座ろうか？」

「ウ、ウン、ウン…。」

アタシたちは部屋の隅にある小さなソファに腰を降ろした。

お互いに沈黙したままで、何を話したらいいかわからない。

そのとき

ガタンッ！

トオル君が身体の向きを変えたときに、小さなソファは音を立てて揺れた。

その音にアタシは

ビクンッ！

「アハハハ…ハハ。」

トオル君が苦笑いをする。

「あ、オレ、先にシャワー浴びてこようかな？」

いよいよなんだぁーっ！

「あ、あ、あ、ウ、ウ、ウン。わ、わかった。じゃあ、アタシ、

その後…。」

そしてトオル君は立ち上がって奥のバスへと向かう。

第九十二話 分け合う時間2（構成しなおし）

トオル君がシャワーを浴びている間アタシは一人でソファに座って天井を見上げる。

ああ、

なんか今自分がここにいることがすこし信じられない気持だったりする。

中2のとき、男の子だったはずの自分に初めての生理が来て、シクシクと痛むお腹、そして股の間からは足を伝って鮮血が流れてきて、

びっくりした両親は救急車を呼んで、アタシは大学病院へ運ばれる。

そして病院での精密検査でわかったことは、「息子さんには膣と子宮があつて、男性器らしきものは実は女性のクリトリス。性染色体もXの完全な女性です。」という事実。

あときはマジにショックだったなあ…。だいたい『男性器らしきもの』って言い方、『らしきもの』ってなにヨッ!? もうチヨット言い方考えて欲しいよネッ!

それにこの前はミコに「凛は男の子として生活してたとき、キレイな顔してたけどぜんぜんカッコいいって思えなかった」って…。

はあ…。 まあ、そりゃそうだよネ。

そしてアタシは人生究極の選択の末に女性として生きている道を選

んだわけで。

それまでの男子のズボンは女子のスカートへと代わり、そして男友達中心の関係から女の子の友達ができていく。

初めてスカートめくりされたときは、本当にショックだった。そして恥かしかった。

アタシは自分が男の子として生活してた頃、スカートめくりなんて一回もしたことなかったけど、実際自分がされる立場になって初めてわかったヨ。下着を異性に見られることがどれだけ恥ずかしいか。そんな中で出会ったのはワタル。カレはアタシの心をその身体に合った女性へと向かう切っ掛けを与えてくれた。

そしてアタシは次第に女性として男性を愛するようになっていった。そうした今までの記憶が走馬灯のように思い浮かんでくる。

・
・
・
パタン

奥の方でバスルームのドアが開く音がした。

ああ…、タオル君が出てきたんだ。

カレはバスローブを羽織って部屋に戻ってきた。

「あのさ…。」

「ハ、ハイイッ！」

「洗面所のところタオルとバスローブがあったから。」

「あ、ウ、ウン。じゃあ、アタシ…シャワー浴びてこようかな。」

ハンガーをひとつ持って洗面所に行く。
着ていたドレスをそのハンガーに掛けて洗面所の部屋の隅に引っ掛け、そして下着を脱いでいく。

フツと目の前の大きな鏡を覗くと、そこには少しウエーブのかかった長い髪、そして緩やかな曲線のある身体、細い肩、大きく膨らんだ胸の女の子の姿が映っている。
これがアタシの現実の姿だ。

そう、アタシは女で、カレは男で…。
アタシはこれからカレに抱かれるわけで。

ハア…。

カチャッ

バスルームのドアを開いて中に入っていく。

サアアーーーー……………。

カチカチに緊張した身体に温かいシャワーが当たるととても気持ちいい。

ああ、気持ちいいな。

なんだか、とろんとして眠気が起こってきそう（笑）

でもそんなリラックスもバスルームを出るとまた緊張で身体はこわばり始めてしまう。

アタシはブラをつけずショーツとバスローブを羽織ってカレの待つ部屋へと戻っていくと、カレはちょうど冷蔵庫から取り出したコーラを飲んでいた。

「なんか喉が渴いちゃってさ、凜も一杯どう？」

「あ、ウ、ウン。ア、アタシももらおうかな。」

トオル君は新しいコップを出してそこにコーラを注いでアタシに手渡してくれた。

弾ける炭酸の刺激が緊張でからからに乾いた喉を打つ。

コク…コク…コク。

「おいし…。」

コップを口から離して、

フウ…と小さなため息をつくとしは落ち着いてきた感じがする。

するとトオル君は少し考えたようにこう言った。

「今日さ、ホントに…いいのかな？」

「なんで？」

「いや、なんとなく…。凜がまだ少し決心ついてないんじゃないかな…って感じしたからさ。」

「それは…違うんだヨ。」
「違うって？」

「女の子ってこういうとき決心しようと思ったって中々できないの。でもそのままずっと決心するまでトオル君が待っていてくれたらア

トオル君は自分のバスローブを脱いでトランクスだけになる。
そしてキスをしながらアタシのそれもゆっくりと脱がしていった。

恥ずかしい…。

女性として初めて男の人に見せるアタシの裸。

そしてアタシの目の前には同じように裸のままのカレがいる。

大きな肩、厚い胸、そして太い腕。

それはまるで中3のときにワタルと2人で行ったあのプールのように
のように

男と女の違いをいやでもわからせるような。

カレはアタシの身体をぎゅっと抱きしめる。

素肌で触れ合ったカレの身体は想像していたよりもずっとずっと熱
かった。

いつもキスをするときに服越しにカレの体温を感じることはあった
けど、そんなのとは比較にならないくらい、熱くって燃えるような
…。

そしてカレはアタシの乳房に自分の顔を埋める。

カレの温かい舌先が小さなリズムでアタシの乳首の先を刺激すると
アタシはなんだかとても切ない気持ちになってきて

「あ、あんっ！」

と声をあげてしまった。

カレの舌先はそこからさらにお腹のほうへと下がっていく。

お腹から腰の辺りまで円を描くようにカレの舌先は這い回って

ときどき上にあがってきては首筋へといき、そして唇へとキスをしてくる。

や…あ…。

恥ずかしい…。

男の人に身体中を舐められている。

もう頭の中はなににも考えられない…。

アタシはぼんやりしていく意識の中で自分の息が次第に荒くなっていくのを感じていた。

「あ、はあ、はあ…はあ…あああ…。」

「トオル…君…トオル…君…。」

何度も何度もカレの名前を呟く。

そしてカレはいよいよアタシのショーツに手を伸ばす。

「あっ！」

アタシは驚いて一瞬身体をこわばらせたが、カレは再びアタシの唇を熱いキスでふさいだ。

カレのキスにまた意識がぼんやりとしてくる。

そしてカレがショーツを取ろうとすると、アタシはほとんど無意識に少し腰を浮かせていた。

カレが自分のトランクスを脱ぐ。

ぼんやりした薄暗闇の中で次第にそれがはっきり見えてきた。

エッ!!

ウ、ウソオオオーーーーー！！

アタシが昔自分にもあったそれは女性のクリトリスが肥大化したものであることは病院でも説明された。

だから、男の人の『ホンモノのそれ』とはまったく別のものであることはわかっている。

でも、今自分の目の前にあるトオル君のそれは、アタシの想像の範囲を完全に超えていた。

それは想像よりもずっと太くて長くて

そして、びっくりしたのは

それは、上の方に向かってまっすぐ反り返っている。

ものすごい…鋭角。

何度くらい？

それに長さが…。

さ、三角関数で…えっと…何センチくらい？

ああ！頭が回らない！

こんなのが根元までぜんぶアタシの中に入っちゃうの？

それに…

あああああ…

な、なんかピクピクって動いてるうーーーーー！

まるでそれ自体がひとつの生き物みたいに。

「エ、あ、あの…。」

こ、怖い…。

そしてカレのそれがアタシの中に入ったままで、カレはアタシの身体を優しく抱きしめてくれた。

「あ、ああ、なんか…。」

「どうした？」

「抱きしめられていると、温かくて気持ちいい…。」

カレに抱かれていて下半身のズキズキとした痛みは多少和らいでいった。

「少し動いてもだいじょうぶ？」

「ウン、いいヨ。でも、ゆっくり…。」

「ウン。」

そしてカレは静かに自分の腰を動かし始めた。

最初はけっこう痛みもあつたけど、少し腰を浮かせるとその痛みも多少和らぐことがわかった。

もしかしたら角度が関係しているのかもしれない。

「あつ、あつ、ああつ…。」

それを引き抜かれて、そして押し入れられる動きに連れて声が漏れてしまう。

アタシの身体の奥でそれが動いているのがわかる。

フツとアタシの上にいるカレの顔を見上げると汗を滲ませてすごく真剣な顔をしている。

「トオル君…。」

アタシは、切なくて、カレの身体を抱きしめてキスをした。

カレの腰の動きが少しずつ早くなってきた。

それに連れてアタシの吐く息も激しくなってくる。

「あっ、はぁ、はぁ、トオル君、ああっ、アナタ、アナタ…。」

無意識でカレをアナタと呼んでいる自分

それから少ししてトオル君は

「凜、いい？」とアタシの耳元で小さく囁いた。

「ウ、ウン、…いいヨ。」

さらに腰の動きが早くなり

カレは「んっ！」と小さな声を発し

そしてアタシの中で果てた。

すべてが終わってカレがアタシの上に静かに横たわっている。

カレの体重は重いはずだけど、その重みがなぜか心地よかった。

カレがアタシからそれを抜いてコンドームに漏れがないかを確認してくれる。

「ウン、特に問題はないみたいだ。」

「ウン。」

ウンの後に「良かった」って言うのはなぜか躊躇った。

なぜだろう？一番怖かったことだったのにな。

そのときアタシはいつか「良かった」って言わなくていい日を心のどこかに期待したのかもしれない。

「凜、アリガト。オレはこれからずっとオマエのこと大切にしていきたい。」

トオル君はそう言ってアタシの身体を抱きしめた。

アタシはそんなカレの胸に自分の頭を埋めながら

「トオル君、大好き…。これからもずっとずっと大好きだよ…。」
と小さく呟いた。

終わった後にシーツを見ると

やっぱり血がにじんで染みてしまっている。

「あ…、これどうしよう？やっぱりちゃんとホテルの人に言ったほうがいいのかな？」

「いや、こういうとこのベッドは、そういうのを見越して下が防水加工にしてあるらしいから、そのままでもいいんじゃないか。」

「そうなんだ？ でもトオル君、良く知ってるネ？」

「あ、これもネットで…調べたんだ。」

「エ、…アハハハ。」

また顔を見合わせて笑ってしまおうアタシたち。

こうしてアタシとカレの初体験は終わった。

「あのね…トオル君。」

「ウン。なんだ？」

「アタシ、まだ慣れてないけど、これから少しずつ慣れていくようになると思うから…。」

「そっか、ウン。」

そう言ってカレはアタシに優しくキスをしてくれる。

痛かったけど、でもなんか嫌ではなかった。

今までどこかで他人だったカレが本当にひとつになれたような気がして。

最後に2人でシャワーと一緒に浴びて、そして服を着て部屋を出る。家に帰ったとき母親に石鹸の匂いを気付かれないようにホテルの石鹸は使わずにお湯でサツと流して持ってきた香水を少しつけた。

でも廊下を歩くとき、なぜかがにまたに足をピョコピョコとなってしまう。

まだ自分の中にカレのそれが入っているみたいな感じ。

女の子のそういう話はどこかで聞いたことあつたけど、まさか自分自身がそうなるとは思わなかった。

だからなんか可笑しくってアタシは自分でクスクスと笑ってしまった。

そんなアタシをトオル君は不思議そうな顔で見ている。

ホテルを出たのは10時。

そしてトオル君は、今日はアタシを家の近くの駅まで送っていくと言ったが、これ以上遅くなったらカレが家に着くのは真夜中になってしまう。

新宿駅で分かれて、それからアタシが家に着いたのは11時近かった。

「あら、お帰りなさい。パーティどうだった？」

「ウ、ウン。楽しかったヨ。踊りすぎてなんか疲れちゃった。今

日はお風呂入らないですぐ寝よつかな。」

そう言っアタシはそそくさと部屋に入って行った。

ば、ばれなかったかな…。

ドレスを脱いでハンガーに架けると、そのままパジャマを着てベッドに横たわる。

そして今日一日のことを思い出しながら、アタシはいつのまにか深い眠りへと落ちていった。

第九十三話 卒業

キャンパスの中を鮮やかな青葉が覆う頃
アタシたちもいよいよ高等部の卒業式を迎えた。

この学校に入学してから3年間。
アタシは忘れられない思い出がたくさんできた。
そのひとつひとつがアタシの心の宝石箱の中でキラキラと輝いている。

中3の初めに、学年で1、2を争う秀才のミコに誘われて、最初は
とても受かるはずがないと思って始めた受験勉強だった。

そしてワタルが転校して来て、カレと過した切ない思い出。
3人でこの青葉学院高等部に合格できたときは本当に夢のようで、
これからアタシたちの通学路になる宮益坂を3人とも大はしゃぎし
ながら歩いて渋谷駅に下りていったっけ。

入学してから、みーちゃんと友達になって、チア部に入って、そして
そして…。

ワタルがいなくなった…。

高2の終り

アタシはトオル君と付き合い始めた。

それは決してワタルを忘れるためじゃなくて

むしろ、ワタルとの思い出をいつまでもずっと大切にしていきたい
って思ったから
ワタルがアタシにくれた大切なものを。

「あ、凜。こんなとこにいたんだ？ そろそろ卒業式が始まっちゃ
うヨ。」

ミコとみーちゃんが大学側に面した北校舎の入口に立っているアタ
シを見つけて声をかけてくれた。

「あ、ウン。今行くネ。」

アタシたちは卒業式の行われるPM講堂の方に小走り歩いていく。

「ね、3人で手をつなごうヨ。」

みーちゃんがアタシたちにそう提案した。

「ウン。いいネ！」

アタシたちは、アタシを真ん中にして右手にミコ、左手はみーちゃ
んと手をつないで歩く。

そして今、卒業のとき

「ねえ、みーちゃんは今日はパーティまで出れるの？」

卒業式が終わった後の教室でチャコがみーちゃんにそう尋ねた。

そのチャコにみーちゃんは嬉々として答える。

「もつちろんさあ！ 今日にはアタシ最後までみんなと一緒にいるんだー！ ゼーんぶスケジュール空けて貰ったんだモンツ！」

最近のみーちゃんはかなり忙しそうだ。

あれから、前田さんとの約束で卒業まで学校を休むことは1日もなかったけど、土日や休みの日はかなりハードなスケジュールが入っていて、そのためかアタシたちは最近彼女をTVでよく見る。

最初はグラビアやCM、バラエティ番組を中心に活動してきた彼女は、最近ではTVドラマなどにも出るようになって、大学生になったら映画出演の予定もあるらしい。そんな感じにメディアへの露出が多くなるにしたがって彼女の知名度も上がってファンも多くなった。アタシたちみたいな前からの友達ほとんど意識しないけど、新しく入学してきた下級生なんかは、学校の中でみーちゃんの姿を見ると「きゃあ！きゃあ！」などと騒いだりもした。

そんなみーちゃんだけど、じつは面白いというか不思議なことがひとつあって、それはみーちゃんとアタシの弟の悟の関係だった。

高等部の入学式の初日に彼女と友達になってから、彼女はミコモも交えてけっこう頻繁にアタシの家に遊びにきた。そして悟とも自然と仲が良くなっていったわけだけど、彼はみーちゃんのことをなぜか『みー姉ちゃん』と呼ぶ。

「ミコモがミコモちゃん、アンタの本当の姉のアタシが凜ちゃんなのに、なんでみーちゃんだけみー姉ちゃんなのヨ？」

アタシが悟に尋ねると悟は「うーーん…。」とすこし考えた後「わかんない。なんかみー姉ちゃんってオレにいつもスゲー優し

くしてくれるんだもん。」
としか言わない。

実際みーちゃんは悟をすごく溺愛する。

それは彼女が一人っ子で兄妹がいなかったことがあるのかもしれない。
以前みーちゃんが話してくれたことがあったけど、みーちゃんには
3歳年下の弟がいたらしいが、その子はみーちゃんが小学3年生の
ときに病気で亡くなってしまったらしい。
もし生きていたらちようど悟と同じ学年。

もしかしたら彼女にとって悟はその亡くなった弟さんとダブるのか
もしれない。

彼女がアタシの家に来るときはよくケーキやお菓子を買ってきてく
れるが、その中には必ず悟の分も忘れず、それも悟の分は彼の好物
のチョコがたっぷりかかった一番値段の高そうなものだった。

「わぁーい！みー姉ちゃん、サンキュー！」

「フッフ、悟が喜んでくれてみー姉ちゃんも嬉しいヨー。」

2人の会話を聞いているとどっちがホントの姉弟かわからなくなっ
てくる（笑）

そんなふうなので、みーちゃんが芸能人になった後でも彼女と悟の
関係はほとんど変わらなかった。

忙しい彼女は以前ほどアタシの家に遊びに来ることはなくなっただけ
ど、彼女は今年高校受験だった悟にと自分が受験時代に使っていた
参考書や問題集を宅急便で送ってくれて、その中にはポイントなど
を書いた便箋も添えてあった。

そして悟はみーちゃんのごうした応援の甲斐もあって、今年都立の一番手の戸川高校に合格できた。

合格発表の後、家に帰ってきた悟が”いの一番”にそのことを報告したのはやっぱりみーちゃんだった。

合格の知らせを聞いたみーちゃんは大喜びしたらしい。

そして彼女はさっそく悟のために合格祝いを用意する。

電話でみーちゃんが悟に「何でも欲しいものを言っごらん？」と聞いたところ、彼はエレキギターが欲しいと言ったそうだ。

みーちゃんは「もちろんいいヨ。でも、それだけでいいの？」と聞いた。

すると悟は少し躊躇ったようにこう言ったそうだ。

「あかさ、もしできたらでいいんだけど。」

「なに？ 言っごらん？ 悟のためならアタシなんでもするヨ？」

ホントに悟に大甘なみーちゃん（笑）

「そのギターにRAIN^{レイナ}Aがサインしてくれたらなあ…って。」

RAIN^{レイナ}Aっていうのは、最近中高生の間で人気がでてきた男4人組のインディーズのロック系バンドだった。彼らは、ビジュアル系で女の子たちの人気が高かったが、実際音楽の実力も相当高いらしく男の子たちも彼らのコピーをするバンドがいるという話を聞く。

「RAIN^{レイナ}Aかあ…。わかったっ！ みー姉ちゃんに任せなさいっ！」

「エッ！ マジ？」

「マジヨッ！ 少し時間をちょうだいネ？ 絶対に悟の中学卒業式

までに送ってあげるから。」

「やったーっ！ みー姉ちゃん、大好きだーっ！」

「アタシも悟だーっ！ いすきっ！」 オイオイ…（^^）；

そしてこれは後でみーちゃんのマネージャーの若本さん（女性）が笑いながら話してくれただけだ。

みーちゃんは基本的に女優であるわけで、歌の世界、特にロック系バンドの人たちとはそれほど共演する機会はないらしい。

それでも『可愛い悟』のために彼女は知り合いの知り合いを辿っていもズル式にRAINNAまで辿り着いていった。

そしてそのRAINNAがある日都内にある小さなライブホールでライブを終わった後の楽屋にみーちゃんはマネージャーの若本さんと乗り込んで行く。

楽屋でワイワイと話していたところに、いきなり今大人気の若手女優である佐倉美由紀が現れてRAINNAのメンバーはビックリ仰天！ RAINNAは売り出し中のバンドではあったけど、まだTVやメディアで注目されるほどの存在ではない。

それに対してみーちゃんは今ではTVでも頻繁に出演し、知らない人はほとんどいないアイドル女優。

「エ、あの…佐倉美由紀さんですよネ？」

「ウ、ウソ？ オレ、初めて生で見ちゃった。」

「どうしたんですか？ こんなところまで。」

みーちゃんは彼らに友人の弟への合格祝いのお話を話し、そして彼のために用意したギターにサインをお願いした。

「お忙しいのにこんなお願いしちゃって本当にすみません。でも、何とかお願いできないでしょうか？」

みーちゃんはそう言っただけに頭を下げた。

ポカーンとするRAINAのメンバーたち。

大人気のアイドルタレントがまだインディーズバンドの自分たちに頭を下げてサインをお願いするなんてありえないことなのだから。

するとリーダー格のKENTAさんが笑って答えた。

「なんだ。そんなことくらいモチロンいっすヨ。」

他のメンバーたちも

「いやー、逆に光栄ですヨ。佐倉美由紀さんにサインあげたなんてすごい自慢じゃないすか。」

するとKENTAさんは

「あ、ちよつと待っててください。」

と言ってスタジオの関係者を呼んで何かをお願いした。

少ししてその人はスタジオ用のハンディーカメラを持ってきた。

そして

「ビデオメッセージもつけましようヨ。きっとその彼もつと喜んでくれますよ。」

みーちゃんはそんな彼らの優しさに平身低頭

「ス、すみません！ わあー！ ホントよかつたー！」

そして即席のビデオレターの撮影が行われる。

ビデオを撮影するのはみーちゃんのマネージャーの若本さん。まずはじめにみーちゃんが映る。

「悟ー、戸川高校の合格おめでとうー！ みー姉ちゃんは今RAIN Aの皆さんがいる楽屋にきています。これからメンバーの皆さんが悟にあげるギターに順番にサインして、そしてアナタのために一言ずつメッセージをくれるそうです。それではお願いします。」

そこでリーダーのKENTAさんが登場

「悟君、合格おめでとう！今日は佐倉美由紀さんが突然来てくれてオレたちかなりビックリしてます（笑） それじゃ、これからサインするからなー！」

そしてKENTAさんからスタートして、SHINYAさん、NAOKIさん、RYUUさんが順番にギターにサインをしてくれる。

最後に一人ずつが悟に向けてお祝いのメッセージ

「KENTAです。オレは今23歳です。悟君はこれからの高校生活できっと色々なことを経験するはずだよネ。その一つ一つをいい思い出にできるようにたくさん努力してください。」

「SHINYAです。悟ー！いい友達をいっぱい作れヨー！友達達は人生の宝だからなー！」

「NAOKIだよ！いつか機会があったらキミと会える日を楽しみにしています。みー姉ちゃんのこと大切にしていってやれヨー！」

「RYUUです。オレからも悟君にひとつプレゼントを。今日のライブで使ったピックをみー姉ちゃんに持っていつてもらいます

ので、受け取ってくれ！ 高校生活楽しめヨー！」

この送られてきたギターとビデオレターを見て、悟の喜びようはすごかった（笑）

それから彼にとってこのギターは大切な宝物になって、アタシにも絶対に触らせてはくれなかったのであった。

第九十四話 入学式！

4月

今日はいよいよアタシたちの青葉学院大学入学式の日。
会場となる青葉学院記念館には4千5百人近い新入生たちが着席している。

そして今、アタシとミコそしてみーちゃんは3人で本会場の後ろのほうの席に横一列に座って式が始まるのを待っている。

まだそれぞれに顔見知りも少ないだろう新入生の中でもそこかしこで即席の友達が出来上がって話しに華が咲いているようだ。

「ねえ、さつき1個ずつもらった校章のバッジって失くしたらもうくれないんだって。」

「エ、ホント？　じゃあ、もしかして失くしたら退学とかかなあ？
（笑）」

「エー！アタシもう退学とか転校はゴメンだよ。　ちゃんとこの学校卒業しなくちゃ、前田さんに怒られちゃう。」

「アハハハ！　みーちゃん、転校恐怖症になっちゃった？　（笑）」

アタシたちがそんな話をしていると、開会のブザーが鳴る。

「それでは第××回　青葉学院大学入学式を執り行います。　新入生全員起立！」

賛美歌の斉唱

そして牧師の先生によって開催のお祈りが捧げられる。

偉い方たちの挨拶が終り、最後に青葉学院大のカレッジソングの斉唱。

「青葉学院大学 カレッジソング斉唱です。在校生そして本日お招きした卒業生の先輩方が声高らかに歌ってくださいます。今日から新入生の皆さんにとって母校となる本学の歌です。皆さんも早く覚えるようにしてください。」

上段の客席にいる卒業生らしい年配の人たちの集団がサツと席を立ち上がった。

前面ステージの中央には応援団の人たちが数人が立って、その後ろにユニフォームを着てポンポンをてに持ったチアリーディング部の女性たちが並ぶ。

「青葉——！学院——！大学——！カレソーン！」
応援団長らしい人が掛け声をかけて、前奏が流れてきた。

紫匂う 西郊の森
夢覚めやらぬ 緑が岡の
霞にそびゆ 我が白亜城

するとアタシたちの後ろの方の、上段席にいる卒業生たちの集団の中でとりわけ大きな声で歌っている人がいるのを感じた。

あれ…。
この声…どこかで…。
ま、まさか…。

アタシがクルツとその声のするほうに振り向くと

ああっ！ やっぱりー！

そこにはトオル君のお父さんが。
手をブンブンと振り上げながら、声をあげて歌っていた。

さすが元青葉学院大学応援団長！（笑）

斉唱が終わった後、アタシはトオル君のお父さんに向かってニコツと笑って小さく手を振った。
するとお父さんもアタシに気付いたようで、ブンブンと大きく手を振り上げていた。

「凜、知ってる人？」

ミコがアタシに尋ねる。

「ウン、トオル君のお父さん。青葉大の卒業生なんだって。」

「ヘエー、そうなんだあ。なんかクールな笹村さんと正反対っぽいネ（笑）」

「フフフ、大学時代は応援団長だったらいいから。でも、貿易会社の社長さんでいつもはすごくクールらしいヨ。」

「そうなんだあ。」

卒業式が終了して会場から出ると、キャンパスの中はサークルの新生勧誘が行われる。

キャンパスのあちこちらで色々な部やサークルの人たちが演技をしたり勧誘をしたり。

そして新入生たちは校舎の間をウロウロしながら先輩たちの配る勧誘のチラシを受け取っていく。
アタシたちもその波に混ざって歩いていると数百メートルの間に勧誘ピラで手がふさがっていくほど。

そして中央広場の前に来たとき

「新入生諸君！ せっかく大学に入ったからには勉強や遊びだけじゃつまらん！ 身体を鍛えよう！ 我が青葉学院大空手部はかの有名俳優渡瀬哲也先輩も輩出した由緒ある部です。ぜひ空手部を！」と叫ぶ声が聞こえる。

空手部…もしかして…。

アタシたち3人はその声をするほうに歩いて行った。
人だかりの後ろの方から背伸びして前の方を見ると…。

あ、やっぱりいたああー！ーっ！

地面に大きなビニールシートを敷いて数人の空手部員たちが実演をしている。

上級生らしき人が前に立って

「我が空手部は、よく言われるガチガチの運動部とは違って、先輩後輩の関係は和気藹々！ その一端をこれからお見せしましょう！」

そしてその後ろに並ぶ空手着を着た数人の下級生らしき部員たちの中にトオル君が立っていた。

と驚いたように振り向く。

「エ、あ、あわわ、り、凜。 あああ…、ミコちゃんとみーちゃんまで…。」

「お疲れ様ー！ー！」

「あの…もしかして、今のずっと…見てた？」

「ウン！」

「アチャアアアー！ー！ー！ ああ、オレのイメージが…。」

「アハハハ！ いいじゃん。 トオル君の意外な一面、楽しかったヨ
ー！」

「ハハ…ハハハ…わ、笑えネエ…。」

「あ、そういえばさっき入学式の会場にトオル君のお父さん来てたヨ。」

「オー！なんか卒業生で呼ばれたっていったな。」

「さすが応援団、すつごく元気にカレッジソング歌ってた。」

「そうかあ、まったくいい年してあのオヤジは…（笑）」

「ウン、かつこ良かったヨー！」

「アハハ。じゃあ、凜が褒めてたってオヤジに言つとくヨ。」

するとそこに空手着を来たトオル君の友達らしい2人が寄ってきた。

「トオル、お疲れ。」

「オツスツ！先輩方もお疲れ様ツス！」

「ん、新人生？ でも、女の子？」

「あ、オレの知り合いなんス。」

「おおー、そうなんや？もしかしてこの3人の誰かがトオルの彼女とか？」

先輩にそう言われたトオル君は少し照れたようにアタシの方を指差して言った。

「エツト、こっちがオレの彼女ツス。」

「はじめまして。小谷 凜といいます。カレがいつもお世話になってます。」

トオル君は2人の先輩を順番に紹介してくれた。

「エツト、こちらが3年の真藤さんと神田さん。ほら、この前凜を連れてった神宮のラーメン屋あつたる？あそこを教えてくれた人たちなんだ。」

「オオー！可愛いやないかあー！　そうですか。トオルの彼女さんですか。よろしく。コイツホントいいやつですヨ。」

そしてその2人はミコとみーちゃんの方を見て言った。

「じゃあ、こちらの2人は小谷さんのお友達ツスか？」

そのとき真藤さんが

「アレ…。エ？　でも…よく似てるなあ…。」

とみーちゃんを見ながら呟く。

すると神田さんも

「なにがだヨ？　エ、あ、ホントだ。でも、そんな…。まさか…。」

みーちゃんは観念したようにニコツと笑って

「こんにちわ。　佐倉美由紀っていいいます。」
と挨拶した。

「オオオオオー！ やっぱり！ エ、なんでここに？」

「アタシも青葉大の新入生なんです。 笹村さんの彼女さんとは高等部からの親友でして。」

「エー！ そうなんすかあ！ びっくりしたあ。 あ、こっちの彼女もスゴイ美人だけど。」

「彼女も凜と佐倉さんの高等部からの親友で、藤本美子さんツストオル君がミコを紹介する。」

「はじめまして。藤本です。」

トオル君の先輩たちは芸能人であるみーちゃんをあまり騒ぐと人がたくさん寄ってきてしまうと思ったようで、

「じゃあ、3人ともこれから空手部をドウゾヨロシク！」
といい離れていった。

「それじゃ、オレも後片付けがあるから。」

「ウン。じゃあ、また電話するネ。」

「ウン。オツケー！」

アタシたち3人は再び歩き出す。

「みーちゃんはサークルとかどうするの？」

「あー、アタシはサークルは無理かなあ。 でも、その代わりにクラスでいっぱい友達作るヨ。」

「そっかあ、残念だね…。 3人で一緒にサークルは入れたらいいな
って思ってたから。」

「凜は大学でもチア部は入らないの？」

「うーん…。じつはチアの先輩にも誘われたんだけど、色々忙しくなっちゃうし、大学では軽めのサークルにしようかなって思ってるんだあ。」

「ウン、アタシも。水泳部だとかかなりハードだしね。凜と色々探してみようと思って。」

「そっかあ。あ、ゴメン。アタシ、そろそろ行かなくちゃ。マネージャーさんが正門のところで待ってるんだ。2人と一緒に入学式出れてホント嬉しかったあ。じゃあ、授業始まつたらまた会おうネ。」

そう言ってみーちゃんは小走りに正門の方に歩いて行った。

自分で選んだ道だけど、何か少し寂しそうなみーちゃんの後姿だった。

第九十五話 新しい仲間たち

大学生活がスタートして3日目。

アタシとミコは学部が違うが、1年生の教養科目ではけっこう重なっているものもあって一緒に授業に出たりする。そのためにこの時期お昼ごはんもよく一緒に食べられていた。

そして今日もお互いに重なった2時限目の授業を終えて2人で混雑する学食に何とか席を確保する。

「でもさあ、1時限が90分ってけっこう長いよネエ。」

「そうだよネ。でも可笑しいのがさあ、教授って10分くらい遅れてきて、それで10分くらい早く終わる人っているじゃん？ あれってやっぱり本人もそう思ってるんじゃない？」

「アハハ、そうかもしれないネ！（笑）」

「そういえばさあ、凜。サークル考えようヨ？」

「あ、そうだよネ。ミコ、もらった勧誘ビラでなんかいいところ見つけた？」

「ウン…。なんかいっぱいありすぎてよくわかんないんだけど、やっぱり運動ができるのがいいかなあっておもうんだよネ。」

「そうだねエ。オールラウンド系のスポーツサークルとかは？」

「ウン、そういうのもあったんだけどさ、あっちもこっちもって結局何してるかわかんなくなっちゃわない？」

「そっかあ、それはいえてるかも…。」

食事をしながら2人でそんな話をしていたとき

「ねえ、アナタたち、新入生？」

ちょうどアタシたちの真向かいの席に座っている2人組の女の人が話しかけてきた。

「あ、ハイ。そうですね。」

するとそのうちの向かって右側に座るショートカットでクリっとした目をした可愛い感じの人が自分の横に置いた大きなバッグの中から青い表紙の紙を取り出してアタシたちに見せた。

「あのね、じつはアタシたち2年生で『シユガー』っていうテニスサークルなんですけど、よかったら話だけでも聞いてくれないかなって思ってます。」

「テニスサークルですか？」

ミコがそのビラを受け取ってアタシにも見せてくれる。

「ウン。テニスって興味ない？」

「あ、イエ。そうじゃないんですけど、アタシたち、テニスって今までぜんぜんやったことなかったから。」

「あー、それだったらぜんぜん心配しないでいいヨ。」

そのショートカットの女の人がニコツと笑って言う。

「入ってる人の半分以上が初心者だったし、ウチはテニス漬けっというんじゃないくて、気のいい仲間が集まって和気藹々みたいな感じだから。」

「そうそう。テニス以外にもみんな考えて楽しい企画とかいろいろやるし。活動全部に強制参加っていうんじゃないくて、授業はモチロン最優先でできるだけ参加すればいいって感じだから。」

「そうなんですか？」

「ウン。どう？話だけでも聞いてみて、もしよかったら練習に見

学に来てみれば?」

「どうする? 凜は。」

「アタシ、チョット興味あるかも。」

「じゃあ、とりあえず話だけでも聞かせてもらっちゃっ?」

「そっだね。」

そう言っつてミコはショートカットの女性のほうを振り返って

「あ、じゃあ、お話を聞かせていただいていますか?」

「わあー、よかつたあ。じゃあ、まず自己紹介から…。アタシは
経営学部2年生の中村なかむら 千穂ちほ」

「エイト、アタシは教育学科2年の石崎 佐奈です。」

「教育学科の方なんですか? アタシも教育なんです。藤本 美よ
子しです。」

「アタシは国際コミュニケーション学科で小谷 凜といます。」

「あ、美子ちゃん、そうなんだあ! じゃあ、アタシいい授業とか
教えてあげるヨ。」

「ワァー、ラッキー! よろしくお願いします。」

「エイト、美子ちゃんと凜ちゃんネ。2人は仲良さそうだけど授
業で知り合ったの?」

「あ、2人とも高等部ですと友達だったんです。」

「そうなんだあ! じゃあ、ウチのサークルにも知ってる人いるか
もネ。高等部出身の人何人かいるから。」

するとそこに向こうから歩いてきた男の人が立ち止まって中村さん
と石崎さんに声をかけた。

「お、チホちゃんと佐奈じゃん。こっちでメシ食ってたんだ？」

中村さんはその男の人の方を振り返り

「ああ、春野君。今日は席が混んでてみんなが見つからなかったからネ。」

「あれ、こっちの女の子2人は？」

「たった今、友達になったの。ね？（笑）」

「あ、ハイ。（笑）」

「エ、たった今友達って？」

その男の人は不思議そうな顔をした。

「アハハ。じつはさ、2人とも新入生なのヨ。それでアタシらの向かいで話してて、2人ともすごく可愛いから声かけちゃったの。」

「可愛いからって…。女同士でナンパかよ？ アブねーナ（笑）」

「アハハ、まあいいじゃん。それでね、ウチのサークルの話したら関心持ってくれてさ。」

「オー！そうなんだ？ じゃあ、あっちにメンバーがみんな座ってるから行こうぜ？」

「美子ちゃんと凜ちゃん、どう？ もし良かったらサークルのメンバーに会わせたいんだけど。」

「あ、ハイ。アタシたちは今日は2時限目で終了だからだいじょうぶですけど、でもいきなりお邪魔しちゃっていいんですか？」

「ああ、ウチは大歓迎だよ。みんな気さくな人たちばかりだから、すぐ友達になれるヨ。」

「ね、行こう？」

こうしてアタシたちはそこから少し離れたところにあるコーナーの席に移動した。

その一角には、そのサークルのメンバーらしき20人くらいの人たちが座っている。

その中には女の人も5人くらい混ざっていた。

そしてショートカットの中村さんがアタシたち2人をみんなに紹介してくれる。

「あのお、新入生の藤本 美子ちゃんと小谷 凜ちゃん。今ナンパ、じゃなくって勧誘してきちゃったの。」

「はじめまして、藤本です。」

「小谷です。」

アタシたちがそう挨拶したとき、そこに座る男の人のうちの一人が読んでいた雑誌を下ろしてアタシたちの方を向いて言った。

「あれ、小谷さん!」

「あーっ!」

びっくりした。

それはアタシが1年のチア部の夏合宿のとき一緒だった応援部の遠藤さんだったのだ。

「遠藤、知り合い?」

「あ、ハイ。高等部のときの1学年下だった娘なんです。オレ、そのとき応援部に入ってて彼女がいたチア部と夏合宿で一緒で。」

「エー、凜ちゃんって高等部のときチア部だったんだ? わあ、なんか大人しそうな感じだったからチョット意外!」

「あ、でも、高校からはじめたから、そんなに上手いほうじゃなかったんです。でも、まさか遠藤さんがいるって思わなかった…。あのとき応援部だったし。」

「まあ、あのときは男の世界にドップリ浸ってたからな（笑）。

大学でも応援団に誘われたけど、逃げてきちゃった（笑）」

「アハハ！」

「ねえ、2人とも知り合いもいるんだし、このサークル入ったら？

絶対楽しいヨ。」

シヨートカットの中村さんはアタシの背中を小突いて言った。

「ウン、歓迎するヨ。」

周りのみんなもそう言ってくれる。

「どう？凜。」

ミコが小さな声で尋ねた。

「あ、アタシはいいヨ。」

「じゃあ、入れてもらおうか？」

「わあ、よかった。きつといい友達たくさんできるヨ。よろしくネ。」

「こちらこそ。これからよろしくお願いします。」

こうして、学食で偶然知り合った不思議な切っ掛けでアタシとミコはテニスサークル『シユガー』に入れてもらうことになったのだ。

シュガーは創立30周年のかなり歴史があるサークルだった。現在のメンバーは2年生から4年生で男子が42人で女子が25人でも4年生は就職活動で忙しいので、実際活動しているのは男子30人と女子16人の合計46人らしい。そして新入生は今のところアタシたち2人を加えて、男子が11人、女子が6人でまだもう少しこれから入ってくるかもしれないということだ。活動は毎週水曜日の午後と土曜日で、水曜日は授業がほとんどないそうだけど、授業がある人は土曜日だけでもいいということらしい。

「あの、アタシたちテニスって初めてなんですけど。」

「ああ、だいじょうぶ。高校時代に応援部だった遠藤がやってるくらいだから(笑)」

そうやって遠藤さんの先輩らしい人が笑いながら言った。

「あ、オレ、一応このサークルのキャプテンやってる野本です。ヨロシクね。」

わあ、すごい背が高い人だな。180センチくらいはありそう…。

そしてそのとき

ピロロン…ピロロン…。

とアタシの携帯の呼び出しの音楽が鳴った。

「あ、すみません。」

そう断って、アタシは急いで自分のバッグの中の携帯を取り出して発信者表示も確認しないで、席から少し離れて着信ボタンを押す。

「もしもし?」

アタシがマイクにそう話しかけると聞こえてきたのは

「やつほうー! 凜?」

みーちゃんの声だった。

「あ、みーちゃん。 どうしたの?」

「アタシ今、授業終わってキャンパスの中にいるんだわ。 ミコも一緒?」

「ウン。 そうだよ。」

「もし良かったら夕方まで時間あるから、会えない?」

「ウン。 いいけど...。」

「あ、何か用事してた?」

「ウン、そうじゃないけど。 今ね、ミコとテニスサークルに入ってもらったところなの。」

「あ、そうなんだ? そっか、いいなあ...。」

みーちゃんの呟いた「いいなあ...。」という言葉は、彼女が話の流れで言ったものではなく、サークルに入ってこれからたくさん新しい友達を作っていくアタシたちにとっても羨ましい気持であることがはつきりはわかった。

事務所からは授業優先でちゃんと大学に通わせてもらえることになってても、大学は高校みたいなどころじゃないから、固定のクラスがあっても同じ仲間がいるわけじゃない。

1、2年生の週何回かの語学のクラスでは顔を合わせる機会があっても、芸能人の彼女がぼつとその中においてお互いに気を使ってしまうのかもしれない。

たしかに彼女が自分で選んだ道だから、制約が多いのはしょうがな

いけど、でもアタシはみーちゃんに大学時代のたくさんの友達を作らせて上げたかった。

「みーちゃん、あのさ！」

「ウン、どうしたの？」

「みーちゃんも、アタシたちと一緒にそのサークルに入らない？」

すると彼女は寂しそうに

「でも、アタシなんかいたら周りの人きつと気を使っちゃうヨ？」

それにアタシ仕事でほとんど参加できないだろうから、幽霊部員になっちゃうし。そしたらみんなに迷惑になっちゃうし、なによリアンタとミコに迷惑かけちゃうの辛いもん…。」

「そんなことないヨツ！ アタシたちは3人一緒の方がいいし。」

それにけっこう自由な活動みたいだから、アタシが頼んであげるヨ。」

「ウン…。でも…。」

「みーちゃんだって大学の友達たくさん作りたいでしょ？」

「まあ、…ウン。」

するとアタシの横で話を聞いていたミコが、

「チヨット、アタシにも電話代わって？」と。

「みー？ アタシだよ。今、凜が言ったこと、アタシも同じ気持ちだから。これからも一緒にたくさん大学時代の思い出作っていいヨ。」

電話から少し涙の混じったみーちゃんの声が聞こえてくる。

そこでアタシは15分後に学食の入口のところでみーちゃんと待ち合わせる約束をした。

電話を切って、アタシはキャプテンの野本さんに

「あの、お願いがあるんですけど。」

「ウン、なに？」

「もう一人このサークルに入れていただきたい女の子がいるんですけど。」

「なんだ。べつにいいけど。ウチは来る者拒まず大歓迎だからな（笑）」

「あの、ただ…。」

「なに？」

「その娘、チョット事情があつてお仕事で忙しくて、多分活動にあんまり参加できないんじゃないかと思うんです…。」

「仕事？ 仕事しながら大学に通うの？ ウチの大学は授業も出席とか試験とか厳しいし、けっこうキツイんじゃないの？ それでその上サークルとか入ってもやっていけないんじゃないかなあ？ あんまり参加できないんじゃないやサークルにいても友達とかも作りづらいだろうし。」

「あ、ハイ。あの、多分仰るとおりだと思うんですけど…。でも、アタシたち彼女とずっと親友で、彼女に大学時代の友達もたくさん作らせてあげたいんです。たまにしか来れないだろうけど、来たときはアタシたちがちゃんと他の友達を紹介とかして仲良くなれるようにします。」

するとアタシたちの話を聞いてピンと来た高等部応援部出身の遠藤さんが野本さんにこう言った。

「あの、野本さん。オレからもお願いします。その娘つて多分オレも知ってる娘だと思うんす。気持が優しくってすごく気さくないいい娘ですから、きつとみんなとも仲良くなれるはずだって思う

んス。」

え、遠藤さん…。

遠藤さんの優しさがとても嬉しかった。

「そうですヨ。野本さん、アタシたちもその娘と早く仲良くなれるようにするから。」

さっきアタシたちを勧誘してくれたショートカットの中村さんと石崎さんも助けてくれた。

「そっか。ウン、わかった。じゃあ、オレもフォローするように気をつけるから。とりあえずその娘会わせてヨ？」

「あ、ありがとうございます！」

遠藤さんはニコツと笑ってアタシにVサインを出した。

アタシも遠藤さんにお返しのVサインをする。

「あの、それと…。」

「なに？」

「連れてきて…あんまり驚かないでくれたらいいな…って。」

「驚く？ ウーン…わかんないけど、まあとにかく、もうこっちに来るんでしょ？」

「ハイ！じゃあ、連れてきます。」

そう言っアタシとミコは学食の入り口の方に小走りに向かった。

アタシたちが待ち合わせの場所に行くついでにみーちゃんはそこにいて立っている。

彼女はいつものセミロングのつやつやした髪の毛を黒のゴムで後ろで束ねて、顔には度の入っていない伊達メガネをかけ、上下は少し

ダボつとしたシャツとにジーンズ姿。

「わあ、上手く化けてるね(笑)」

「エヘヘ、でもせつかくキャンパスに来てオシャレできないのは辛いなあー(笑)」

「ぜーたく言わないのっ!」

「アハハ、ゴメン。」

「今、サークルのキャプテンにちゃんとお話して、了解してもらったから。」

アタシがみーちゃんにそう言つと

「でも…ホントにいいのかなあ…。アタシなんか入ってアンタらの迷惑にならない?」

高等部のときはいつも図々しいままでだった彼女がアタシたちにこんなに気を使って…。

きつとお仕事してていろいろ辛いことがあるんだろうな…って思った。

「ぜんぜん!なるわけないじゃん! みー、アンタアタシたちに気を使いすぎだヨッ!」

とミコがみーちゃんの頭をコツンと小突いた。

「ゴメン。」

「さあ、じゃあ、サークルのみんながいるから、行こう。」

そしてアタシたちはみーちゃんを連れてさっきのサークルのみんながいるコーナーに戻った。

「エット、さっきお話したもうひとりが彼女です。」

野本さんはさっきまでの少し難しい顔ではなく、みーちゃんにニコツと笑って言うてくれた。

「はじめまして。テニスサークル『シュガー』にようこそ。キミを大歓迎しますヨ。」

するとみーちゃんは満身の笑みを浮かべて

「あ、ありがとうございます！ あの、アタシみんなとお友達になれるように頑張ります！よろしくお願いします！」と挨拶した。

そこにいるほかのサークルの人たちも

パチパチと拍手してくれて

「ヨロシクネー！」

「仲良くなるうネー！」

と声をかけてくれた。

「あ、ところでキミの名前まだ聞いてなかったよネ？」

そう言うて野本さんがみーちゃんの方を振り向く。

「あ、すみません（笑） エット、佐倉 美由紀っていいいます。

よろしくお願いしまーす！」

「エッ！」

普段TVや雑誌の中でよく聞くその名前にサークルのみんなは一瞬目が？マーク。

そしてみーちゃんは黒ゴムで結んだひつつめ髪をほどき、顔にかけた伊達メガネを取って一回ウインク

「みなさん、これからヨロシクー……ッ！」

と元気に挨拶した。

「エエエエエエー………ツツツツ……！」

第九十六話 なんてなれなれしいヤツ！

さて、その後みーちゃんとはといえば、アタシたちがそれほど心配する必要もなかったみたいで。

彼女は毎月1回の土曜日のオフにあわせてサークル活動に参加することになった。

彼女は事務所において基本的には大学の授業優先にしてもらっているのですが、毎日の授業にはきちんと出席する。そして午前中から午後まで授業がある日にはお昼ご飯の時間をほとんどこのサークルのたまり場で過している。だから実際の活動に参加していなくても彼女の元々の人懐っこさですぐにサークルのメンバーにも打ち解けていってしまった。

アタシたちがサークルに入って1週間ほど経ったある日

アタシとミコがお昼休みにサークルの学食にあるたまり場に行くときにみーちゃんはすでに来てて、周りのメンバーたちとすっかり同化して楽しく話している。

メンバーでもみーちゃんがこのサークルに入ったことを知らない人は、このたまり場に来て変装ファッションのみーちゃんとは何気なく話を聞いて、そのうち彼女がアイドル女優の佐倉 美由紀であることを知らされるとびっくりするけど、すぐに打ち解けて仲良くなる。

そして彼女は

「あ、凜、ミコ。 紹介するワ。 4年生の新美さんと山崎さん。

アタシもさっきここで初めて知り合ってたさ、大学のいろんなことを教えてもらっちゃってるんだあ。」

と紹介してくれたりする。

4年生つていつたら就職活動で忙しくてたまにしかこういうところに来ないらしい。

そのたまに来た4年生ともみーちゃんは積極的に自分から知り合っ
て楽しくやつてるのを見てアタシたちは彼女の逞しさを実感した。

サークルのみんなは、すでに彼女のことをアタシたちが呼ぶように
『みーちゃん』って呼んだり、男の人たちは『みーこ』なんて呼ん
でいる。

「やっぱり、アタシらじゃなくってみーが芸能界入って正解かもネ
(笑)」

「アハハ、ホントダネエ(笑)」

この時期になると新入部員の数もそろそろ確定してきて、結局今年
の新入部員は男子が13人、女子はアタシたち3人を加えて8人
になった。

「あ、凜ちゃんとミコちゃん。じつはさ、今週の金曜日の夕方5
時から新歓コンパをやるんだけど、アナタたちだいじょうぶ？」
アタシたちがたまり場の席に座るとショートカットの似合うチホさ
んが聞いてきた。

「あ、ハイ。だいじょうぶです。みーちゃんは参加できそう？」

「あー、すごく参加したいんだけど、アタシ次の日の土曜日に朝4時からドラマロケ撮影入ってるのヨ。」

「そっかぁ…。残念だネエ。」

「ゴメンネ。アタシの分も楽しんできて、それで新しい友達が出てきたら後で紹介してヨ？」

「ウン。もちろん。」

最近みーちゃんは3月から始まった『すくーるでいず』という高校の学園ドラマにも出演している。

彼女の役は主役ではないけど、主人公夏樹の重要な友達の美沙という役で出番もけっこう多い。

このドラマは先週からTV放映が始まって、その第1話はアタシも家でしっかり見させてもらった。

ある高校に入学した夏樹はそこでちょっと大人びた佐和子とお嬢様タイプの美沙と友達になる。

そして3人は恋やいろんな経験をしながら成長していくっていうお決まりの展開らしいんだけど、その夏樹の恋の相手はじつは学校の先生だそうで、美沙を演じるみーちゃんは、そうした禁じられた恋に落ちてく夏樹を非難する同級生や父兄から彼女を庇っていくらしい。

「なんかさ、その佐和子と美沙っていう友達がアンタたちにダブっちゃってさぁ。」

「まあね、アタシたち、みーには高校時代ずいぶん振り回されたもんネー。」

「アハハ、それを言われると返す言葉がないヨ（笑）」

「でも、みーちゃん、高校の制服着てもぜんぜん違和感ないよネー。」

「まあ、1ヶ月前まではアタシたちも女子高生だったしネ。でも、
まだもうチョットあの制服着てたかったなあ……。」

「じゃあ、アンタ留年すればよかったじゃん。」

「あ、それはヤダー！（笑）」

そしてその週の金曜日

アタシとミコは4時限目にそれぞれ別の授業に出た後にチャペルで
待合わせをして、一緒に渋谷にある会場のお店に移動した。

そのお店は道玄坂の途中に建っているビルの地下にあつて、その中
はかなり広い空間だった。

中央にある細長いテーブルの上にはお料理が用意されていて、基本
的に立食形式だけど、部屋の端の方には椅子も並べられている。

会場にはすでになりの人数の人たちが集まっていて、その中には
アタシたちがたまり場で知り合った新入生の人たちも何人かいた。

「あ、凜ちゃん、ミコちゃん！」

そのうちの一人で英米文学科新入生の永田絵梨ちゃんがアタシを見
て声をかけてくれた。

「やつほおー！ 絵梨ちゃん。」

アタシとミコはすでに練習も1回参加しているため、このサークル
に入部した新入生のうちほとんどの人と顔見知りにはなっていたけ
ど、何人かは初めて会う人だった。

そしてそのうちの一人が野崎^{のまき} 愛衣^{あい}ちゃんだった。彼女は、新歓コンパがはじまる少し前に新入生がひとつのテーブルに集まったとき、たまたまアタシの横に立っていた。

「あの、新しく入った人ですか？」

偶然アタシと彼女の目が合ったとき、彼女はそう聞いてきた。

「あ、ハイ。アナタも？」

「ウン。そうです。あ、アタシ 史学科の野崎 愛衣^{あい}っていいいます。

「国際コミュニケーション学科の小谷 凜^凛です。これからよろしくネ。」

「こちらこそ。ネエ、知ってる？このサークルに女優の佐倉 美由紀^{みゆき}が入ったって。」

「あ、その娘ってアタシの高校のときの友達なんだ。今度紹介するからアイちゃんもぜひ友達になってあげて？」

「エ、ホントに？ わあ、なる！なる！」

「あ、それとこっちがやっぱりアタシの高校のときの友達でミコ。そう言っアタシは横にいたミコを彼女に紹介した。」

「ヨロシク！ ミコこと藤本美子^{みこ}です。教育学科だよ。」

「こちらこそヨロシク。ミコちゃんはなんでよしこちゃん^{よしこ}でミコちゃんて呼ばれてるの？」

「あ、ウン。美をミって呼んでミコ^{みこ}って。」

「あー、なるほどー！ じゃあ、アタシもミコちゃん^{みこ}って呼ぶよ。」
「ウン。アイちゃん^{あい}だよネ。」

「でも、凜ちゃん^凛って同じ高校のときの友達たくさんいるんだネエ？」

「アタシたち高等部出身だから。」

「あ、そっかあ。アタシは中学から女子校なんだ。だから男の子が周りにいなかったから大学に入ってけっこう戸惑ってるの（笑）」

そう言う彼女は私立の女子校の出身のわりに活発そうでけっこうハキハキした感じの娘だった。

少し長めのボブカットにくりっとした目の感じがとても可愛い。

アタシたちは3人でワイワイと話を続ける。

アイちゃんは兵庫出身で大学に入って一人暮らしをはじめたそうだ。そういえば、最初に話しかけられたときイントネーションが西の方の人かなという感じがした。

彼女は、お母さんに食器や調理セットを用意してもらって自炊もしているそうだけど、初めて炊くご飯、初めて作るおかずは中々上手くいかず、結局諦めて外に食べに行ったりしちゃうのと笑いながら話した。

872

それでもアタシもミコモアイちゃんに感心した。

そう言われてみると、アタシなんか家に帰れば黙ってても母親がご飯を作ってくれるし洗濯もしてくれて。ちゃんとアイロンもかけてくれる。ホントはアタシなんか笑えないんだよね。

するとそのとき

「ヨオ、凜。」

とアタシを呼ぶ男の人の声があった。

「エ？」

その声の主の方を見ると、そこには髪の毛をかなり明るい感じの茶に染めた男の人が立っていた。

男の人にしては長くそして、トップのあたりをピョンと立てている。なんかＴＶでよく見るホストみたいな感じだった。

「凜やる？」

誰？アタシが呼び捨てにされてるってことは、アタシの知ってる人ってことだろうけど…。

でも…アタシ、こんな人知らない気がするけど…。

「そうだけど…誰…だっけ？」

アタシは訝しげな目でその男の人を見る。

「1年の会津 敏や。」

「あいづ…さとし…さん？ エ、ゴメン。あの…いつ会ったんだっけ？」

たしかにアタシは今年の新入生の男の人は何人かサークルのたまり場や初練習のときに会った。

その中で話した人も何人かいた。

でも、いくら同じ新入生でもお互い知り合ってまだ間もないこの時期に下の名前を呼び捨てにされるほど親しくなった新入生の男子はいないはずだ。

するとその人はニヤツと笑って

「いや、オレも今日が初めてや。」と言った。

「ハア？」

「だって、小谷 凜って名前やる？ 自分でそう言ってたやん。」

それはそうだけど、別にアンタに自己紹介したわけでもないし。

それになんて初めて会ったばかりで男の人に呼び捨てにされなきやなんないのヨッ！

「あ、オレのことは『さとし』って呼んでくれればエーから。」

「イエ、あの、会津君…。」

「さとしや。」

「じゃあ…さとし君。」

「さとし！」

彼は少し意地になつてるように繰り返す。

「さとし・君っ！」

アタシも意地になつたように言い返した。

「あのさあ、アタシとキミは今日初めて知り合つたんだし、これから同じサークルの仲間になるのはそうだけど、でも最初はお互いのこと色々わかるまで呼び捨てじゃなく呼んだほうがいいんじゃないかなあ？」

「いやあー。最初からそう呼び合つたほうが親近感が湧くやろ？」

なんかぜんぜん言い訳になつてないよ。

「じゃあ、ミコとアイちゃんはなんて呼ぶの？ ミコとアイってやつぱり呼び捨てにするの？」

「ミコちゃんとアイちゃんやろ。」

「なんでやネンツ！」

「凜、アンタ、関西弁になつてる。」

第九十七話 気に入られてしまった…。

なんなの？ この男は。

「あのネ、アタシはたった今、それもほんの3分前に初めてキミに会ったんだヨ？ それがなんでキミの彼女にならなくちゃいけないのヨ？」

「愛は時間の長さやないやろ。 出会った瞬間に恋に落ちるというのもあるで。」

「じゃあ、アタシとキミはそのパターンじゃないネ。 だって、アタシ、キミのこと見ても何にも感じないもん。」

「ボクは感じた。」

「アタシは感じなかったのっ！」

ミコやアイちゃんも呆れた目でこの男を見ている。

コイツめっ！

アタシが関西弁聞いたら摩くと思っただらお間違いだゾツ！

ワタルでもこんなはずうずうしくなかつたし、メチャクチャなこと言わなかつた。

どうせテニスサークル入って女の子の気を引きたいからこんなこと言ってるんだらうけど。

このヘンな男を相手にしても疲れるだけ。

そんなとき

「ハイ、それじゃ、そろそろ今年の新入生歓迎のコンパを始めます！」

ステージでマイクを持った司会役の男の先輩がみんなに声をかけた。

「エツト、新入生のみんなは全員ステージの上へ上がってください。」

アタシたちは前にある一段高いステージにぞろぞろと上がっていく。

「エー、それじゃ、順番に一言ずつ自己紹介をしてもらいましょう。まず男子から。」

男子新入生は13人。

向かって左端にいる背の高い人から順番に自己紹介をしていった。

「エー、経済学部の志賀 達也です。出身高校は都立戸川高校で高校時代はバスケやってました。ヨロシクお願いします。」

彼は今まで会ったことがない。

だから最近入って来た人だと思う。

あ、あの人、戸川高校なんだ。

じゃあ、もしかしたら井川さんのこと知ってるかも…。

そして5番目に挨拶したのはあの『ヘンなヤツ』。

「会津 敏いいます。 国際政経学部です。 好きな女の子のタイ
プは、一見大人しそうだけど、けっこう気が強い娘です。 今日
そんなボクにぴったりの娘をさっきここで見つけてしまいました。
」

またへんなこと言い始めた…。

「誰をみつけたんだー？」

会場の先輩たちから声上がる。

「ワハハハ！ そら内緒ですわ。 他の人に目を付けられたら大変
やから。」

「アハハハ！ へんなやつー！」
会場から笑いが漏れる。

ホントへんなヤツだよネ！

「そういうことでよろしゅうたのんます。 あ、高校は私立城南高
校です。」

アレ？ 城南高校？

そのときアタシは意外に思った。
だって、関西弁話してるのに高校は都内にある私立校の城南だつて。
もしかして、ワタルみたいな転校生だったのかも。

そうしている間にも自己紹介はどんどん進み、今度は女子の順番。

「史学科の野崎 愛衣です。 高校は兵庫の純星女子学院です。」

一浪して入りましたので、現役の人より1歳年上になります。高校のときは軟式テニスをやってますが、硬式は初めてです。ヨロシクお願いします。」

あ、アイちゃんって1つ年上だったんだ。

でも、同じ新入生で入ったんだから友達口調でいいんだよね。

こっちが丁寧に言葉で話したら返って気を使っちゃうし。

そしてあたしの順番がやってくる。

「国際政経学部の小谷 凜です。高校は青葉学院高等部です。

高校のときはチアリーディング部にいました。じつはテニスは初めてで、ラケット持つのも初めてです。だから色々教えていただくことが多いと思いますがどうぞヨロシクお願いします。」

「へえー！ チア部なんだ？」

アタシが高校時代チア部にいたことは、たまり場でよく話す人たちには話していた。

それでもアタシはどうも外見から見てわりと大人しめな感じに見えるらしく、こういうことを言うとよく意外そうに見られた。

新入生の自己紹介が終わり、それからキャプテンの挨拶や幹部の人たちの紹介などが続いたあとみんなでカンパイ。

お互い近くにいる人のグラスにビールが注いでいく。

「エー、それじゃカンパイしますけど、新入生は未成年の人も多いでしょうから呑み過ぎないように。」

それじゃ… カンパー…イ!!」

アチラコチラでグラスを軽くぶつける音がする。

じつはアタシにとって今日はビール初体験。

今まで口にしたのはせいぜいワインくらいだった。

父親がたまに早めに帰ってきたとき家で晩酌しているのを何回か見たことがあったけど、目を閉じてギューッとコップの中の琥珀色の液体を喉に流し込む姿を見て、そんなに美味しいものなんだろうかとともに思ったことがあった。

ときどきそれを興味深く見ているアタシに、父親は「オマエも少し飲んでみるかい?」なんて言ったりするけど、匂いを嗅いでみるととても美味しそうな感じはしない。

少しペロツと舐めてみたけど、何か苦い味しかなかった。

こんなものがそんなに美味しそうに飲めるなんて不思議…。

そしてアタシはコップの中のビールを一口含んでみる。

「どう? 凜。」

隣でミコが聞いてくる。

「ウエエエエー。苦い…。」

「アハハハ。ホント不味そうな顔だネ(笑)」

「だって、なんかただ苦いだけでぜんぜん美味しくないヨー。」

フツと横を見ると

クーーーーー…。

「ふうーーーーー…。」

アイちゃんがすごく美味しそうな顔で『それ』を飲み干してしまっ
た。

「ア、アイちゃん、すごいネー。」

「あー、アタシんち、父親がお酒好きだったからさ、高校くらい
のときからときどき付き合って飲んでたのヨ。それでビールの味も覚
えちゃったの（笑）」

アイちゃんは笑って答える。

「エ、お父さんに付き合って一緒に飲んだの？」

「ウン。」

「なんか意外だったヨー。アイちゃんってお嬢様っぽい感じしたん
だもん。」

「アハハー。アタシ、ぜんぜんお嬢様なんかじゃないヨ。ウチ、魚
屋やってるしー。アタシなんかより凧ちゃんの方がずっとお嬢様
っぽい感じするヨ。ウチ何やってるの？」

「あ、アタシのウチはスーパーなの。」

「へエー、なんていうお店？」

「ウエルマートっていう名前なの。でもそんなにいっぱいお店が
あるわけじゃないから。」

「あ、それ知ってる！アタシのアパートの近くにもあるヨ。」

たしかに、アタシが中学2年のときウチのスーパーチェーンは5店
舗でアタシの住んでいる区とその近郊に数店舗あつたくらいだった
けど、ここ数年間で店舗の数は3倍の15店舗に中堅クラスのチエ
ーンになっていた。

そのためウチのスーパーは業界でかなり成長株といわれているらし
い。

アイちゃんの言っているお店は多分一昨年新しく開店したところだと思っ。

「そのこのスーパーは品揃えがいいし、それと野菜が新鮮だから良く買い物に行くんだあ。」

「そうなんだあ。それじゃ、いつもお世話になってますって言わなくっちゃ（笑）」

「フッフ、でもお父さんがスーパーチェーンの社長の娘じゃ、やっぱりお嬢様だヨー。」

「ウーン、実感ないなあ。」

そのとき

「なあ、凜。」

さっきの会津 敏がまたアタシに声をかけてきた。

「ネエ、さとし君。さっきも言ったけど、会ったばかりでいきなり呼び捨てにされてもいい気しないヨ。」

すると彼は手にもったビールのグラスをテーブルに置いて

「じゃあ何て呼べばいいんや？」と聞いてきた。

「ウーン…、キミがミコやアイちゃんを呼ぶのと同じふうに呼んでもらえれば。」

「なーんや、おもしろくない。」

彼は子供のようにプイツと顔を膨らませた。

アタシのほづがずっと面白くないヨッ！

「それで何ヨ？ さっき何か言おうとしてたんでしょ？」

「ああ、凜、オット凜ちゃんちはスーパーやってるんやて？」

「あ、ウン。そうだけど。」

「じゃあ、欲しいものなんでももらえるやんか。」

「あのね！ スーパーはちゃんと売って儲けてるのヨ。 アタシが欲しいものあつたつて買わなくちゃいけないの。」

「だつて、凜ちゃん、社長令嬢やろ？ 欲しいものはもらつてきてしまえばエエやんか？」

「エ、それじゃ泥棒と一緒にだヨ！ 社長令嬢だろうと、社長だろうと、ただで物がもらえるわけないでしょ。 欲しいものはちゃんとお金を出して買わなくちゃいけないの。」

「ふうん……。」

「ふうんつてなにヨ？ そんなこと当たり前でしょ。」

「いや、ますます気に入ったわ。」

「ハア？」

なんかアタシのこと試すような言い方をして。

この人つて一体何考えてるんだらう？

第九十八話 意外な会津君！

テニスサークル『シユガー』に入って2回目の練習日。

アタシとミコは今までテニスというものをやったことがなかったの
で、すべて初めから教えてもらうことばかり。だからテニス用具と
かも何がどう必要なかもぜんぜんわかっていない。

ラケットも自分の練習の番になったときは、とりあえず女性の先輩
にラケットを借りたりしていたけど、人の物だからやっぱり気を使
う。ウエアもよくわからず1回目の練習には家にあった適当なジャ
ージにTシャツ姿でやった。

2回目の練習日

世田谷区にあるコートの子更衣室でアタシとミコは1回目の通り
ジャージに着替えていると、フツと見るとアイちゃんはカッコいい
テニスウエアを取り出して着替えている。

その他にも1年生の女の子たちですでにウエアを買ってきた娘も多
いらしく、色とりどりの可愛いウエアがあちらこちらで見られる。

「テニスはもちろんスポーツだけど、女の子の場合ファッション性
もけっこう楽しめるものだから、よかったら凜ちゃんとミコちゃん
も専用のウエアにしてみたら？」

着替え終わったチホさんがアタシたちにそう教えてくれた。

「ね、凜。アタシたちもそろそろウエアとかラケット買いに行か
ない？」

ミコもやっぱり同じことを思ってたみたい。

「そうだね。でも、どこに買いに行く？ アタシ、ラケットとかどついうのがいいかわからなraiヨ。」
すると

「あ、だったらアタシ教えてあげるヨ。ウエアも一緒に見てあげる。」
「アイちゃんがそう言ってくれた。」

それからしばらくした、ある日の授業終了後、アタシとミコ、そしてアイちゃんは3人で渋谷にあるスポーツ専門店に行った。

「ラケットは、女の子は握力が弱いから、なるべく軽いほうがいいヨ。それとガットは…」

さすが元テニス部のアイちゃんは軟式と硬式の違いはあってもすごく詳しい。

アタシとミコは1本ずつ自分のラケットを選ぶ。

「あとはシューズ。これも軽くて、それと通気性がいいものほうがいいヨ。」

そして最後はウエア。

「わあー、すごい種類が一杯あるんだネー！」
「あ、コレ可愛いー！」

「ウエアはとりあえず一着買ってみて、それで試してみるといいヨ。別のを買うときは前のデザインと違ったタイプを選んだりしてバリエーション揃えたりできるから。」

女の子のテニスウエアは一般的にスカートタイプ。

セパレートの場合は、上のシャツと下のスカートそして中に穿くアンダースカート。

ワンピースの場合は上下がくっついていてるので、あとはアンダースカートだけ必要になる。

「ワンピースはシルエットが可愛いけど、セパレートにすればシャツとスカートで組み合わせがけっこう楽しめるんだヨ。あと自分たちでサークルのTシャツ作ってスカートと組み合わせるとか。」

なるほどー！

勉強になるなあ。

でも試着で着てみるとスカートは思ったより短い。これで動き回れば当然見えてしまうことはわかる。

「うわっ、なんかすごい短いんだねー。これでだいじょうぶなのかな？」

ミコはけっこう恥かしそうにスカートを手で押えている。

「まあ、アンスコ（アンダースカート）は見えてもいいと思って穿くものだから。どうしても気になるならキュロットタイプのもあるけど、でもこのタイプって運動してるうちにけっこう窮屈な感じがしてきちゃうかも。」

アタシは高校時代チア部だったから、そういうのへの慣れはあったけど、水泳部のミコはこれだけ短いスカートへの慣れがないからすこし気後れしてしまうみたいだ。

そしていろいろ悩んだ結果アタシとミコはそれぞれ一着ずつセパレートタイプのウエアを選んだ。

こうしてアタシとミコ、そして新歓コンパ以来良く一緒に行動するようになったアイちゃんの3人。

次の日のお昼休みの時間

アタシたち3人が学食にあるサークルのたまり場に行くと、そこには数日ぶりにみーちゃんがいた。

「あ、凜、ミコ。やつほおー！」

「わあ、みーちゃん。ひさしぶりいー。最近忙しかったの？」

「ウン。課題が出ててね、授業が終わった後お昼休みに図書館で調べたりしてて、ココに来れなかったんだあ。あれ、友達？」

みーちゃんはそう言ってアイちゃんのほうを向いた。

「ウン。同じサークルの新生で野崎 愛衣ちゃんだよ。高校のとき軟式やってたんだって。だから色々教えてもらったりしてるの。」

「あ、そうなんだあ。はじめまして、この2人の高校からの悪友で総合文化政策学部の佐倉 美由紀です。これから仲良くしてね。」

みーちゃんに挨拶されたアイちゃんは少し興奮したような声で言った。

「わ…あ、佐倉 美由紀ちゃんがいるって聞いたけど、ホントだったんですね。 史学科の野崎 愛衣です。 こちらこそヨロシクー。」

アタシたち3人は空いているみーちゃんの周りの席に腰を降ろした。

「でも、ホントびっくりしちゃったあ（笑） サークルの中に佐倉さんがいるってチョット信じられなかつたんだもん。」

「あ、でも大学の中ではふつーの学生だから。 アイちゃん、友達になるうヨ？」

「ウン！ アタシも『みーちゃん』って呼んでいいの？」

「モチロンッ！」

「みーちゃんはいつから芸能界のお仕事始めたの？」

「高校3年のはじめのほうかなあ。」

「きっかけて、やっぱりオーディションとか？」

「エイトね、はじめはデイズニールランドの素人女子高生CM出演の募集があつたの。 そのときこの2人と応募して、それで運よく受かってね。」

「エ、じゃあ、凜ちゃんとミコちゃんもそのCMに出演したの!？」

「ウン。 そうだよネー？」

みーちゃんはアタシとミコの方を向いてそう言った。

「まあね。 まさか受かると思ってなかったから。 あのときはみに煽動されてね（笑）」

「ああ！煽動ってひどいなあ！（笑） まあ、それでね、その後今のアタシのいる事務所からそういってお話があつたのヨ。 ホントは

そのときアタシだけにそういう話があったんじゃないかって、凜とニコにもあったの。だけど、この娘たちあっさりそれを断っちゃったのよネ。」

「エー、もったいない！ 凜ちゃんたち、なんで断っちゃったの？」

「ウン、やっぱり色々やりたいことがあったし、アタシってそんなに器用じゃないから（笑）」

「まあアタシも器用じゃなかったけどね。でもそれでそれからこの2人には色々迷惑もかけちゃって、ホントに助けてもらってばかりなの。」

「そうなんだあー。でも、確かに学生と芸能人の掛け持ちって大変だよネ。」

「ウン。だからこのサークルに入れてもらって色んな友達できて、アタシすごく嬉しいんだあ。」

「ねえ、みーちゃんも今週の土曜日の練習はでれるんでしょ？」
アタシがみーちゃんにそう尋ねると

「ウン。毎月第4週の土曜日はオフにしてもらったから。ああ、初テニスだあー！」

「アタシとミコさ、昨日アイちゃんに付いてきてもらってラケットとかウエア買ったんだヨ。」

「エ、ホント？ わあ、いいな、いいなあー！ アタシも道具揃えなくちゃね。ホントはアンタらみたいに自分で買いに行つて色々選びたいけど、難しいからなあ…。マネージャーさんに頼んで買つておいてもらおうかな。」

「じゃあ、今度の土曜日はみんなで新しいウエア着て練習出れるネ。」

「ウン、楽しみー。」
みーちゃんは本当に嬉しそうな顔をしてそう言った。

アレ、そういえば…。

フツとアタシが思ったのはあの会津 敏がいないことだった。
彼はあのコンパの少し前にサークルに入ったらしかったけど、それ以降もたまり場に顔を出すことはほとんどなかった。

この前の2回目の練習には来ていたようだったが、向こうから話しかけてこなかったし、アタシの方から話しかけることもしなかったからそれ以来一度も会っていない。

たしか同じ国際政経学部みたいだけど、大学の授業は履修科目によって出席はバラバラだし、それに授業の人数も多いから気にしなければぜんぜん気付かない。

あれだけ派手なサークルデビューだったわりに大人しいな。

そして3回目の練習日

「わぁ、凜。そのスコート可愛いネー！」

「みーちゃんのもすごくいい感じだよ。」

「エへへ、一昨日マネージャーの若本さんに買ってきてもらっちゃった。ホラ、ラケットも。」

そう言ってラケットを持ってクルッと一回転する彼女はとても楽しそう。

「ハイ、じゃあ、みんな集合ー！」

キャプテンの野本さんがみんなに指示をかけてみんながコート中央に集まってくる。

柔軟体操のあとコートのを軽いランニング

そして約10人ずつ5つのコートに分かれて練習が開始された。

アタシのグループのコートにはアイちゃん、そしてあの会津 敏もいる。

打ち出されるボールを次ぎ次ぎと鮮やかに打ち返していくアイちゃん。

スパーンッ！

パーンッ！

と小気味のよい音が響き渡る。

「アイちゃん、スゴイ！ さすが軟式経験者だねー。」

「エへへ、勘は似てるんだけど、でもやっぱり硬式はタイミングが難しいみたい。」

「ハイ、じゃあ次ぎは凜ちゃん。 前に出てー！」

「ハイッ！」

アタシはコートの中に入って3年生の男の先輩が打ち出してくれるボールを打ち返していく。

でも、これが中々上手くはいかない。

先輩はそれほど強く打っているみたいには見えないけど、ラケットにボールが当たった瞬間けっこう思い衝撃で手が跳ね返されたり、また上手くラケットに当たっても思ってもいない方向にボールがいっちゃったり、予想していたよりもずつと難しかった。

TVとかで見るとそんなに難しいようには見えないんだけどなあ…。

するとそこに各コートの状況を廻って見ていた野本キャプテンがアタシに近寄ってきて

「いいかい。まずラケットの持ち方がこう…。それと女の子はもう少し短めに持ったほうがいいな。飛んできたボールを良く見て、足のスタンスはこんな感じに。」

そう言っつて、キャプテンはアタシの手を取ってラケットに当てグリップの握るコツを教えてくれた。

「ウン、そう。じゃあ、それでもう一回打ってみて？」

そう言われてコートに立ち、飛んできたボールを注意しながら打ち返す。

「スパーーーンッ！」

アタシの打ち返したボールは小気味いい音で相手側コートの中に入っつていった。

「わぁー！やったぁー！」

アタシは嬉しさでピョンと飛び上がって喜ぶ。

「よし、オツケー！ さすがチアやってただけあって勘がするどいな。今のフォームとタイミングを忘れないようにネ。」

「ハイ！ありがとうございます。」

アタシの右手2つ先のコートを見ると、みーちゃんがボールを打っている。

彼女にとってもテニスは初めてだったらしく、アタシと同じように

をかけて相手コート内の右サイドへボールを入れる。

「すげえ…。」

「アイツのフォーム完璧だな…。」

5球分が終わると彼は汗も見せずに後ろに下がっていった。

1回目の練習のときにも彼はいたけど、けっこう離れたコートにいたので、アタシは彼がこんなにテニスが上手とはぜんぜん気付かなかった。

「どや、凜ちゃん。教えたるか？」

彼がアタシに寄ってきて声をかけた。

「フリーンだ。いいヨー、遠慮しときます。」

アタシはチョットツンとしたポーズを取って彼にそう言った。

「ワハハ、憎まれ口やなー。でも、そんなところが可愛いわあー。」

カチン！

なんかシャクに触るヤツ！

でも、こんな上手ならサークルよりちゃんと体育会のテニス部に入ったほうがよかったのに。

第九十九話 トオル君と会津君

日曜日

アタシは久しぶりにトオル君とゆっくりした時間を過ごすことができ、渋谷に買い物に来ていた。

「それでね、同じサークルにいるその会津 敏って人がすごく変わってて、アタシにヘンなことばかり言うの。」

「ヘエー、でも会津って変わった名前だよな。ウーン、どっかで聞いたような…。」
トオル君は顎に手を当てて考えていたが、中々思いつかないようだった。

「まあ、とにかく、ミコちゃんやみーちゃんとまた一緒になれたのはよかったよな。」

「ウン。みーちゃんもすごく楽しそうだね、ほとんど毎日サークルのたまり場にきてるんだヨ。」

「そっかあ。芸能人やってるといろいろ気を使ったり大変だろうし、だから今まで通りの友達でいてやるのが彼女にとって一番楽しみなんだしな。」

「そうだね。」

すると前の方から歩いてくる男の人が、なんかアタシのことをじつと見ているような気が…。

「どっしした？ 凜。」

トオル君が前の方を向いて不思議そうな顔をしているアタシに尋ねた。

「あ、ウン。　なんかあの男の人…。　あーっ！」

「なーんや、やっぱり凜ちゃんやないか。」

そこにはあの会津　敏が手に大きなカバンを抱えて歩いていた。

「今日は日曜日なんに大学来たんか？」

「ちがうヨツ！　買い物に来たの！」

「凜、彼は？」

アタシの隣にいるトオル君がそう尋ねてきた。

「あ、ウン。　ホラ、さっき話してた…。」

「ああ、会津君かあ。」

「アレ、こっちの人は凜ちゃんのこと呼び捨てにしてるけどいいんか？」

「アタシの彼氏だからいいのっ！」

「ホー、凜ちゃんの彼氏なんか。　ホー！」

「なにヨツ!？」

「イヤ、なんでもなくて。　はじめまして、凜ちゃんと同じサークルの会津　敏います。　よろしゅ。」

彼はそう言っつてトオル君に挨拶した。

「あ、どうも。　笹村　透です。　凜がいつもお世話になってます。」
トオル君も丁寧な挨拶を返した。

「お世話になんかなってないもんっ！」
アタシはブイツと横を向く。

「ワハハ、凜ちゃんは厳しいなあー。」

「今日はどこかい行った帰りですか？」
そのときトオル君が会津 敏にそう尋ねた。

「ああ、アルバイトの帰りですね。この先のミュージズいうカフェ
レストランで皿洗いとウエイターのバイトしてますね。給料は安
いんやけど、そこで賄いの昼メシ食わせてくれるから助かってます
ねん。」

「へー、ボクも同じようなアルバイトしてますヨ。」

「ホー、どこでっか？」

「ボクは宮益坂のほうのシオンっていうレストランなんですけどね。」

「オー、ボクその店の前通ったことあるわー！ でも高そうな店や
からボクは入れるわけないけどな（笑）」
「アハハ、ボクも同じですヨ。」

「エ？ チョット…。」

この2人、やけに気が合っていない？

「もう今日はあがりですか？」

「ハイ。家に帰って晩メシ食って寝ようか思ってますねん。」

「あの、よかつたら一緒にメシ食いませんか？ オレたちもこれか
らどこかで食おうと思ってたし。」

チヨ、チヨット、トオル君！

せつかく久しぶりに2人でデートしてるのに…。

「もし迷惑でなかったら、どうですか？」

「イヤ、ボクはエエですけど、そちらはエエんですか？」

「モチロン。なあ、凜もいいだろ？」

トオル君の楽しそうな顔…。

「エ、あ…ウン。」

こうしてアタシたち3人は近くにある中華料理屋に入って一緒に晩御飯を食べることになった。

アタシたちのテーブルの前にはトオル君が大盛りラーメンと会津君が超大盛りチャーハン、アタシが普通サイズの中華丼、そして大盛りギョーザが所狭しと並んでいる。

「ここはオレが奢るヨ。ドウゾ、腹いっぱい食ってください。」

トオル君が向かいの席に座っている会津 敏にそう言うと

「ホンマでつか。 スミマセンなあ。 じゃあ、遠慮のういただきますわ。」

そう言って彼は超大盛りチャーハンを食べ始めた。

「いやー、やっぱり労働の後のメシは格別やわー！ 一人暮らしやさかい、毎日メシ代大変ですわ。」

「さつき凜からも少し聞いたんだけど、会津君は私立の城南高校出身だよな？ 親と一緒に暮らしてるんじゃないの？」

城南高校というのは千代田区にあるかなり有名な男子進学校で、東大などにも何人も受かっている学校だ。そしてわりとお坊ちゃんタイプの人が通っているらしいということを聞く。そのわりには、会津君のこのがつつき方は城南高校というイメージではない気がする。

「あ、ボクは元々大阪出身なんですわ。東京の学校行きたくて、親に無理やり頼んで城南高校受けましたんです。それからずっと一人暮らしですわ。」

「エ、じゃあ、キミって高校生からずっと一人暮らししてたの？」
アタシが驚いたようにそう尋ねると

「そうや。まあ仕送りは送ってもらつとるがな、ウチのおとーちゃんしみつたれとるさかいにな、学費は全部出してくれるけど、アパート代と交通費、教科書代は別にしても毎月3万円しかくれへんねん。」

「さ、3万円!? それでキミは3食ご飯食べてるの？」
「さすがにそら無理や。ボクかて育ち盛りやさかいにな(笑)
1日千円じゃとても無理や言うたんや。そしたら、足りん分はアルバイトして自分で稼げ言われてな。ウチのおとーちゃんわりと金稼いでるみたいやけど、ホンマけちやねん。男なら自分で稼げ言うてな。」

そりゃ一日千円じゃいくらなんでも…。
アタシなんかアルバイトすらしたことなくって、昼ごはん代とお小遣いだけで毎月7万円もらってるし。それ以外に欲しい服とかあったらお金くれるし。

「それでしょうがないさかいに、高校生のときからアルバイトしてなんとか生活しとるわー（笑）バイト代入ったらインスタントラーメンをケースで買ったたりして。」

「いやー、スゴイな。ホントに尊敬するヨ。オレも小遣いはもらってないけど、家から通ってるから、衣食住は親がかりだからな。」
トオル君はホントに尊敬の眼差しで彼を見ている。

「あのさ、じゃあ、お昼ごはんのときキミって学食で見ないけど、どっか外に食べに行ってるの?」
アタシがそう尋ねると

「学食? あんな高いところ行くかいな。」

学食が高い!?

「エ、でも外で食べるよりもずっと安い気がするけど…。」
「そやかて、最低でも300円以上はするやる? そんなんしたらボク2日に1回しか昼メシ食べられへんわ。」

な…、300円で?

「昼メシはだいたい食パン持ってきてバイト先でもらったジャムつけて食べてるかな。」

「じゃ、じゃあ、飲み物は?」

「水があるやんか。あと学食の端にお茶があるからな、アレは助かるわー! 水筒にそれ詰めて飲んでるし。」

なんか…すごいネ…。

「あとな、今月はおかーちゃんが米と梅干送ってくれたからな。それで最低2ヶ月は飢え死にはせんと生きていけるわー。」

「でもおかずは買わなくちゃいけないでしょ?」

「おー、おかずか。まあ生卵とかのりとか、あと塩か醤油やな。それで2杯はいけるで。」

おかずが塩!醤油!

う、わ…。

なんか想像もつかないヨ。

初めて新歓コンパでキミに会ったとき、キミってホストみたいに髪逆立てて、それで何かすごく派手なスーツっぽい服着てたからきつと家がお金持ちなんだろうって思ってた。

なんかすごく意外だった。

今でも、しかもウチの大学みたいなのにこういう人っているんだって思ったヨ。

お店を出たアタシたちはその後渋谷駅まで行って分かれた。

アタシとトオル君は山手線で新宿駅まで、会津君は千葉方面らしい。

「じゃあ、会津君。今日は色々話せて楽しかったヨ。」

「いやー、こちらこそ楽しかったですわ。奢ってもらっちゃってすみません。」

「もし良かったら今度一緒に酒でも飲みに行こう。金は出すから。」

「ワハハ、すみませんな。ビンボーなもんで。楽しみにしてます」

わ。凜ちゃんもまたな。」

「ウン。またネ。」

そう言っただけはホームの方へと去っていった。

第百話 また会っちゃった！

4月末

季節はGWに入ったある日

「ネエ、凜。アナタ、今日何か用事ある？」
朝、ご飯を食べていると母親がこんなことを聞いてきた。

「ウウン。別に何も無いけど。」

「じゃあさ、チョットお願いがあるんだけどなあ。」
「いいけど、なに？」

「お母さんの従姉妹で松戸の千春さんいるでしょ？ ちーちゃんにお母さんが仕立てた着物を届けてほしいのヨ。宅急便だと早くても明日になっちゃうから。今日夜に使うらしいの。」

千春叔母さんはアタシが小さい頃良く可愛がってもらった人で、ウチの母親より12歳年下。

年が離れているせいもあって、アタシにとっては叔母さんというよりお姉さんというイメージだった。そのためアタシも千春叔母さんのことを『ちーちゃん』と呼んでいた。

その頃はまだアタシは男の子として生活していたが、当時から女の子っぽい顔立ちをしていた小学校低学年の頃のアタシはちーちゃんに自分の小さい頃の服を着せられて写真を撮られたこともあった。

「わあ、哲ちゃん。ホントに女の子みたい！ スッゴイかわいいーっ！」

ピンクのフリルの付いたワンピース。

そして髪は少しアップにして花の付いたカチューシャを乗せられた。

「ちーちゃん、ボク、スゴク嫌なんだけど…。」

「エー、何で嫌なの？ スッゴイ似合ってるじゃん。」

ちーちゃんは完全にアタシで遊んでいた。

「だって、これ女の子の服じゃん。ボク、男の子だよ？」

「ウーン…残念だよネエ。哲ちゃんは絶対に女の子に生まれてたほうが似合ってるって思うんだけどなあ。」

そして中2の夏休み

生理が来て、アタシの身体がホントは女性であることがわかって…。

これからのためにと両親が親戚にそのことを報告したとき、ちーちゃんも勝ち誇ったようにアタシにこう言った。

「ほらね！だからアタシが言ったでしょ。哲ちゃん、絶対女の子の匂いしてるもん。同性の匂い！これでアンタとは女同士ネ。」

「アハハハハハハ！」

そしてそれからアタシとちーちゃんが並んで撮った写真は女同士のものばかり。

ただしあれからワタルの最後のアタシへのプレゼント『過去の記憶操作』でちーちゃんもアタシは生まれたときから女の子として生活しているということになってしまった。

新宿から小田急線で代々木上原まで出て、そこから千代田線に乗り換え、松戸まで1本。

1本とはいっても東京を端から端まで横切っていくから1時間くらいずっと電車に乗りっぱなしだ。

アタシは読みかけの本を1冊持っていった。

代々木上原から隣の駅ですぐに地下鉄に入り、そこから40分はなに变化もない単調な暗闇の中を走る。そして途中北千住を出た辺りから電車は地上へと出て、周りの景色は目まぐるしく変わっていった。

綾瀬駅を出ると次ぎは亀有。

小学校の頃からずっと集めてきた『こちら亀有公園前派出所』の舞台になっている場所だ。

アタシはこうやって電車の窓から流れていく景色を見るのがわりと好き。

高架線から見える駅前の景色は、それほど高くないけど込み入ったビルや家の間を人や車が賑やかに行きかいそして都会にはない温かい雰囲気がある。

電車は走り出してさらに景色は変わっていく。

少し走ると中川が見えてきた。

川の堤防沿いには小さな家が所狭しと並んでいてフツと見るとどこかから『両さん』が自転車に乗って走っていきそうなの…。

まるで『こち亀』のアニメを見ているような気持ちになってくる。

さらに金町を出て大きな江戸川が見えてくるとここからは千葉県松戸市。

こつちの方には小高い丘が並んでいる。

10時ごろ

「松戸〜〜。松戸〜〜。」

はあ、やっと着いた。

駅前の賑やかな通りをしばらく歩いていくと住宅街に変わっていく。ちーちゃんの旦那さんは千葉県にある国立大学の先生をしている。

わりと広い庭のある緑色の屋根の大きな一軒の家。

その前に来ると、アタシはそのインターホンを鳴らした。

「はぁーい。」

「こんにちわー。凜ですけど。」

「あ、チョット待っててネ。今開けるワ。」

そう言っつてインターホンが切れると数秒ほどしてガチャッと玄関の扉が開いた。

「わあ、凜。ひさしぶりー！」

「ちーちゃん、元気そうだねー。」

「マア、とにかく入って。今日はアリガトネー。」

「ウウン、いいヨ。暇だったし。」

ちーちゃんはアタシを応接間に案内してくれと、お茶とケーキを

出してくれた。

「でも凜ももう大学生かあ。 アタシも年を取るわけだわ（笑）。
どう？彼氏でもできた？」

「エヘヘー。」

「あ、その顔はできたなー！？ ね、どんな人ヨ？ ちーちゃんに
教えてみなさい。」

「エツトね、高校のときの1年先輩の人。だから今同じ大学なの。」
「青葉学院だったよネ？ そっかあ、アンタももう女の子じゃなく
て女だネー。」

なんかちーちゃんが『女』っていうと艶かしいっていうか…意味深
（笑）

それからアタシとちーちゃんはしばらくの間楽しくお話をしていた。
フツと気がつくと時間はもう11時をすぎている。

「凜。アンタ、お昼食べていくでしょ？」
ちーちゃんはそう言って立ち上がった。

「あ、ゴメン。 アタシ、今日午後から用事あって。」
じつは以前雑誌で松戸にすごく美味しかったらこスパゲティーのお店
があつて、アタシはちーちゃんに届けた帰りにぜひそこに寄ってみ
たいと思っていた。

「そっかあ。 残念だネー。」
「ウン。ゴメンネ。また今度ご馳走になりにくる。」
「ウン。いつでもおいで。」

「じゃあ、今日はアリガトね。 裕美ちゃん（アタシの母親）にもヨロシクねー。」

「ウン。じゃあ、またネ。」

そう言っアタシはちーちゃんの家を出た。

もと来た道を駅まで歩いていく。

こちら辺は本当に緑が多くて、それぞれの家の庭先にはいろいろな木が植えられている。

お昼の時間にはまだ少し早い。

アタシは少しゆっくりしたペースで歩いて行つた。

すると、同じ道の向こう側から男の人が一人歩いてくるのが見える。その人もアタシと同じようなゆっくりした足取りで、しかしどうも見ると立ち止まっては家の庭先にある木を眺めている。それもかなり凝視して…。

何してるんだろ…。

その人はその木の前から動かないまま、アタシとその人の間の距離は縮まっていった。

「あーーーーーっ!!」

「オオオオーーーーッ!!」

お互いほとんど同時に声をあげて指を指す。そこにいたのはあの会津 敏君だったのだ。

「ど、どうしたの？　こんなところで。」

「びっくりしたわああー！　凜ちゃんこそどうしたん？　ボクんちここらへんやで。」

「エ、そうなんだあ？　アタシは親戚の家に届け物頼まれて、その帰り道なの。」

「ホー、そうなんやあ。　しかしこんなところで会うとは奇遇やなあ。」

「ところで、さっきからこの家の木を眺めてたけど、どうしたの？」

「いやあ、美味そうなピワがなつとるなあ…思ってな。」

「……………」

「やっぱり…。　緑を見てたんじゃなくってそこになつてる果実を見てたのか…。」

「キミの頭の中はいつつも食べ物のことばかりだネエ。」

「そらそうや。　人間食わんと生きていけんからな（笑）　ところで凜ちゃんもう帰っちゃうんか？」　「あ、駅前で美味しいスパゲティのお店があるっていうから、そこでお昼ご飯食べてから帰るつもりなの。」

「そうなんやあ。　ボクも腹ぺこぺこやし。　じゃあ一緒に…と言いたいところやけど、ボクお金あまり持ってないしなあ…。」

「ううう…。」

「ホントはこのまま一人で行きたいけど、ここで見捨てていくって、なんかアタシだけ美味しいもの食べるみたいで立場ないなあ。」

「じゃあ、今日は特別にアタシが奢ってあげようか？」

「それはダメや！」
「なんでヨ。キミこの前トオル君に奢ってもらったじゃない。」
「笹村さんは男やないか。男に奢られるんはいいけど、女の子に奢ってもらうわけにはいかん。」

へんな意地張って…。

「おおっ、どうや？　ウチに来て一緒にご飯食べるっていうんは。」

「キミンち？」

「ウン。そうや。」

「エー、だってキミのご飯ってお米と塩かお醤油でしょ？　そんなんじゃ栄養失調になっちゃう。」

「ワハハ、心配すんなや。じつは昨日お母ちゃんから肉とか野菜送ってきてな。これでちゃんと食べるって言われたんやけど、料理をほとんどしらんからな。野菜炒めにしかできひん（笑）」

はああ…。この人は。

「しょうがないネエ、まったくキミは（笑）。　じゃあ、今日は特別。　それで材料は何があるの？」

「おおっ！　やったああーっ！　エツトな、牛肉と玉ねぎ、ニンジン、ジャガイモ、それとセロリもあつたかな。」

「じゃあ、そこのお店でカレーのルーだけ買っていいこう？　それでアタシがカレーライス作ってあげるから。　それくらいならお金ある？」

「ある、あるー！　やったー、凜ちゃんのカレー食えるどー！」

会津君は飛び上がってガッツポーズを取った。

ああ、なんでこんなことか…。

第一百一話 カレーライス

アタシと会津君はそばにあった小さなスーパーでカレーのルー18
8円を購入。

お金は彼が出した。

「ウチ、すぐそこなんや。」

彼が指差す方向に歩いていくと、そこには築何十年？というような、
まるで昭和時代の映画を見るようなオンボロアパート。

長年の風雪ですでに何色だかわからない抽象的な色になっている壁
には『東海第四荘』と書いてある。

「うわ…、『倒壊しそう』って読みたくなる…。」

「ワハハ、凜ちゃん、おもしろいこと言うなー。ボク、高校のとき
からココに住んでるや。」

「キミンちのご実家ってけっこうお金持ちじゃなかったの？」

「まあまあ稼いでるみたいやけど、男は自分の力で生きるがウチの
おとーちゃんの信条やさかいにな。学費とか最低限のものはいくれる
けど、小遣いは一切くれへん。」

ギシギシとヘンな音がする階段を登っていくと2階に彼の部屋があ
った。

ギィー。

ドアを開けると、そこには小さなコンロ1つと流しのある3畳ほど
のキッチンというか台所、そして小さなお風呂場とトイレ、奥の方

に6畳ほどの部屋がある。

「材料を見せて?」

アタシが尋ねる彼は台所の隅にある小さな冷蔵庫の中から牛肉、そしてダンボールの中から野菜類を取り出した。

「あとは調味料と、…それとインスタントコーヒーなんかある?」

「あるで。でも、何するん? できるまでコーヒー飲んでるんか?」

「ウウン。それも使うの。」

彼は胡椒と塩、お醤油とソースの場所をアタシに示して、フリーズドライタイプのインスタントコーヒーを出してきた。

「エツト、じゃあ、30分くらいTVでも見ててちょうだい。ご飯は早炊きでいいよネ?」

お米を研いでジャーにいれスイッチを押す。

そして以前ミコやワタルと一緒に芦田さんたちに連れて行ってもらったキャンプのときに教えてもらったカレーの作り方を思い出して調理していった。

最後にコクを出すためお醤油とウスターソースを入れて、そして苦味のポイントをつけるお湯に溶いたインスタントコーヒーを流し入れてお鍋の中をゆっくりかき回す。

「さあ、できた!」

その頃ちょうどジャーのご飯も炊きあがった。

「あと、カレーのときにはご飯は少し固めに炊いたほうがいいのか。ルーで水分があるから。」

「ホエエエー！　いろいろ知ってるんやなあ。やっぱり女の子の作る料理は違うなあ。ヤローが作るのとどっか違うわ。」

そう言いながら、彼はカレーライスをほおばる。

そしていつの間にか彼のどんぶりの中はすっかり空。

「お代わりは？」

「いいんか？」

「当たり前じゃない（笑）　遠慮なんかしないでいっぱい食べなヨ？」

「じゃあ、おかわりいいー！ー！ー！」

勢い良く差し出された空のどんぶりを受け取ってアタシは台所に行つて山盛りのお代わりを盛り付ける。

「ハイ、ドーズ。」

「ワーーーイ！」

それにしても彼は良く食べる。

トオル君も一緒にご飯を食べるときはいつも大盛りを注文するけど、この人はさらにその上をいつているような気がする。

そして彼は大盛り3杯目を食べつくした後

「フワアアーーーーー！ モー食えん！腹いっぱいやあー。」

まさかと思つて4合炊いたご飯が全部なくなつちやつた…。

アタシは軽く盛つて一杯食べただけだから、この人一人で3合半！
なんか戦国時代の兵隊みたい（笑）

アタシは台所へ行つてお湯を沸かし、コーヒーを入れて彼に出した。

「おお、アリガトー。なんか涙がでてくるわあー。」

「どうしたの？」

「そやかて、こんな美味しいの食つたの久々やしな。食後のコーヒーまで…。凜ちゃんを嫁さんにする男は幸せやなー。どや？ ボクんところに嫁に来んか？」

「あのネー、キミ、この前会つたでしょ？ アタシは彼氏がいるの
！」

「そつか。でも、そやからつて将来絶対結婚するとは限らんやろ
？」

「まあ…それはそうだけど。」

「ワハハ、わかれてるわい。 笹村さんエエなー。 ボクももつと早くに凜ちゃんと会つたらよかつたのに。」

ウーン、まあ、そう言われても困るけど…。

「ところでキミってテニスがすごく上手なんだネ？」
アタシは話題を変えて彼に尋ねた。

「まあ、高校のとき一応国体に出たさかいにな。」

「エー！ 国体！？ ウソ！ すごいじゃない？ でも、なんでサ
ークルなんか入ったの？ ちゃんとした部活に入ればもっと活躍で
きるのに。」

「体育会はええわー。 練習キツツイし、それに上下関係もウルサ
イやる？」

そう言いながら彼は部屋の隅にある古ぼけたカラーボックスから1
冊のアルバムを取り出してきた。

「ホラ、これ高校時代のボクや。」
そこにはどこかの大きな大会に出場したときの彼の姿が映っている。
何枚かのページをめくっていくと、何人かの女の子と映った写真も
あった。

「城南高校って男子校じゃなかったっけ？」

「そうや。 この娘らは近くにある別の女子校の娘や。」

「へえ、キミ、やっぱり女子校にも手を出してたの？（笑）」

「ちがうがなー（笑） むこうから付き合ってくれて来よったん
や。 ウチの学校の門の前とかで待っててな。」

「ふうん、それはモテますこと（笑）」

「ホンマに好きな娘にはさっぱり振り向いてもらえんけどな（笑）」

「アハハハ！」

時計を見るともう3時を回っていた。

「あ、アタシそろそろ帰るネ。カレールーの残りはタツパー3つに分けて冷凍庫に入れておいたから。あとでお腹がすいたとき温めなおして食べてネ。それからちゃんと栄養のあるものを食べないと、ホントに健康に良くないヨ。いくらお金がないからってお塩とお醤油だけご飯にかけても毒！野菜も合わせて食べること。あとお肉も安いときに買いだめしてビニール袋とかに少量ずつ分けて冷凍しておけばけっこう持つんだから。未成年なのに冷蔵庫にビールばかり入れてちゃダメだよ。」

「ウン。わかったわ。これからちゃんと凛ちゃんの言ったこと気をつける。今日はホンマにアリガトな。」

あの憎まれ口ばかり言って生意気な会津君はやけに神妙に答えたのがアタシには意外だった。

第二百二話 ヘンな誤解

GWが明けた頃から、会津君はときどき学食に顔を出すようになった。

聞くと、あれから彼は嗜好品の出費を押えて日常の食費に少しお金を回すようにしたらしい。

もちろん学食でもそんなに高いものは食べないけど、野菜がバランスよく入っている安いランチを中心にちゃんと食事をとることにしたそうだ。

「フフフ、エライねー。」

アタシが彼にそう褒めると

「まあ好きな女の子の言うことはちゃんと聞いとかんと（笑）」
と相変わらず口だけは達者だ。

アタシは彼の言ったことにあえて言い返そうとはしなかった。

それは彼の言ったことを認めたのではない。

これ以上アタシがムキになって言い返してもよけい誤解を深めてしまっただけだからだ。

アタシは以前男の子として生活していたときから、友達に対して言い聞かせるように注意してしまうことがあった。さすがに男同士として意識されていたときには恋愛感情をもたれることはなかったけど、女の子として生活し始めて、とくに青葉学院高等部に入ってからそういうところで誤解されてしまうことが何回もあった。

「あの娘はじつはオレのことを好きだからああやって心配してくれ

たんじやないか。」

男の子というのはどうもこういうところにストライクゾーンがあるらしい。

そして高等部するとき、トオル君と付き合い始める以前の1、2年生に3人の男の子から告白を受けたことがあった。

そういうことは、アタシのそういう態度にも問題があったのかも知れない。

でも、つい言ってしまう。心配というならたしかにそうかもしれないけど、アタシは特定の相手への心配というつもりはなかったんだけど、でもそういう思わせぶりなことを態度に出してしまうのはきつとアタシの責任でもあるんだと思う。

こういうことを考えると、女の子の男の子に対する態度の取り方って難しいと思う。

ミコはこういうところはけっこうドライで、そういう感情のない男の子に対して心配するようなことは一切言わない。

逆にみーちゃんは誰に対してもけっこう感情を表に出して付き合っている。

だから男の子の方も、この娘は自分だけに感情を出しているんじゃないということがわかるようだ。

そういうところでアタシはけっこう不器用な方だっって自分で思う。

とにかく、アタシは会津君に対してそういう気持ちはぜんぜんないっって思ってる。

あくまでサークルの仲間の一人であって、そういう意味で彼は初対面のときの悪印象からずいぶん変わっていい友達になれたらいいなっって思えるようになった。

そんなある日

アタシと会津君は学科は違っけど同じ国際政経学部だった。そして、たまたま同じ授業に出席していたときの終了後、彼は教室から出ようとするアタシにこう声をかけた。

「なあ、凜ちゃん。じつはチョット頼みがあるんやけどな…。」

「エ、なに？」

アタシと会津君は一緒に歩きながら話す。

「ウ…ん…。スゴク頼みずらいことなんやけどな…。」

「だからなにヨ？」

「まあ、歩きながら話すんもチョット落ち着かないさかい、ラウンジでも行っつて話さんか？」

いつもポンポンと軽口を言う彼にしては珍しく物怖じしている。

アタシも自分の癖はわかっていても、こうなるとやっぱり少し心配になってきた。

「いいけど…。」

アタシと会津君は学生ラウンジの空いている席に荷物を置くと、彼はスッと立ち上がってカップ自販機のほうに歩き出した。

「凜ちゃんはアイスコーヒーでエエか？」

「エ、奢ってくれるの?」

カップの自販機は一杯60円。

高いものではないけど、いつも食費に四苦八苦している彼がコーヒーを奢ってくれるなんてスゴク意外だった。

彼はアイスコーヒーの入ったカップを2つ持って席に戻ってくると、そのうちひとつをアタシに渡した。

「ア、アリガト...」

そして彼は自分の手にもったアイスコーヒーを一口飲むと

「いや、じつはな、おとーちゃんがチョット仕事の用事でこっちに出てくるねん。」

「エ、そうなんだ? でもお父さんと会うの久しぶりでしょ? けっこう嬉しいんじゃない?」

すると彼は両手を組むようにしてため息をつく。

「まあ、久しぶりではないけど、別に嫌ではない。それでな、じつは...ス、スマンッ!」

彼は急にアタシに深々と頭を下げた。

ビックリしたのはアタシだ。

「ど、どうしたの? 急に謝って。アタシ、キミに何も悪いことされた覚えはないけど。」

「いや、じつを言うと、この前のGWのときに凜ちゃんがカレー作ってくれたやろ?」

「あ、ウン。それがどうかしたの?」

「そのGWの終りにおとーちゃんとお母ちゃんがボクんここに様子を見に来たわけや。」

「フンフン。それで？」

「そのときにな…凜ちゃんが冷凍していつてくれたカレーな。アレを温め直して食わせたわけや。」

「そうなんだ？ でも別にいいじゃない？ そういつときのために便利でしょ？」

「それがよくないねん…。」

「エ、不味かつたつて？」

「逆やあ。美味すぎるつてな。お母ちゃんは、「こんな味に深みのあるカレーを男のアンタが作れるはずない。それにタッパーでこんなキチンと冷凍保存するなんて男にはそう思いつかん。これは女の子が作った味や」つて…。」

「ウン。」
「それで、「誰か付き合ってる女の子がいるんと違うか？」つてな…。」

「もしかして、キミ、アタシのこと自分の彼女なんて言ったりしたの？」

「いいや、それはちゃんと説明したんや。サークルの女友達やつてな。そんなすぐばれるような嘘ついたらあとでおとーちゃんにばれたとき殺されるさかいにな。うちのおとーちゃん、大学のとき応援団長で、高校のときは柔道やつて三段やねん。さらにおとーちゃんの友達のその大学時代の応援団の仲間いうんがとんでもないオツチャンたちでな、中学生のときボクがチョットぐれかかったら、ボクと友達、ウチのおとーちゃんとその仲間たちに集団でボコボコに×られたんや。」

「エ…、ス、スゴイね…。もしかして…キミのお父さんつてやくざさん…とか？」

「いや、チョットした会社を経営してるんけどな。真っ当なもんで

悪いことは一切してへんで。」

「それでな、お母ちゃんがあんまりそのカレーのこと美味いって褒めるもんやさかい…。」

「なにヨ?」

「ついな、凜ちゃんのことスゴイいい娘やって自慢してもつて…。」

「それだけ?」

「自分の片思いやけど、好きなんやって…。」

「それだけじゃないでしょ?」

「もしかしたら…そのうち付き合うかも…って…。」

「言ったの?」

「…ハイ。ゴメンなさい。」

「ふう…。それでキミのお父さんとお母さんは何て?」

「そうしたらな、一回でいいから…会いたいって…。」

「誰に?」

「今ボクの目の前にいるステキな女の子にや。」

「まったくキミは…。」

「でも、アタシ、ちゃんと彼氏いるんだし、逆に会ったりしたらキミのご両親に逆に誤解を深めちゃうでしょ。」

「それはちゃんと言っさかい。お願いやあ、会うだけでも会ってくれんかなあ?」

「エー、なんでキミがちゃんと断ってくれないの?」

「いやー、凜ちゃんのことな、あんまりにもいい娘やって自慢しすぎて。引っ込みつかなくなって市もうたんやー(笑)」

「笑ってる場合じゃないでしょ!」

「まったく、モー!」

「それでな、今週の日曜日におとーちゃんが仕事の用で東京に来る

ときにお母ちゃんも一緒に付いて来る言つてな。」

「そのときにアタシに会いたいってこと?」

「ウン。そういふこと。」

「エー、困るヨー。アタシ…」

へんに誤解されたくないし

その言葉を後に続けようとしたけど、それは男の子が言われてやっぱり傷つくことだと思つと言えなかった。

「なあ? 頼む! 彼女やなく女友達やってちゃんと言つさかいに。」

「ウーーン…」

いつもヒョウヒョウとする彼はとても困つた顔。

そんな彼の姿を見ているとどうしてもワタルを思い出してしまう。

「ウーーン…。わかつたヨ。でも、ちゃんと説明してヨ?」

「ホンマか!? やつた!。よかつたあ。」

手を上に上げて喜ぶ彼。

あーあ…。へんなことになっちゃったなあ…。

第百三話 アタシって流されやすいの？

それから日曜日まで、アタシは何度も考えた。

このことをトオル君にちゃんと話したほうがいいんじゃないか。でも、いくらただ会っただけとはいっても、男の人の親に会うということにはやっぱり意味がある。

アタシがトオル君のご両親に会ったときのように、相手に自分を見てもらおうのだから。

だから頼まれ事だと言ってても、そんなことを言えばいくらトオル君だって不愉快に感じるのは当たり前だろう。

そんなことを考えればこのまま黙ってれば、会津君のご両親が帰った後は何も無いわけだからいいんじゃないか。でも、それって何も話さないままで隠し事みたいにずっと心の中に伏せておくの？

そしたらアタシの心の中は隠し事でいっぱいになってしまう。

ワタルからの最後の贈り物で、ミコと久美ちゃん、そしてワタルAを除く周りの人たちはアタシの過去について記憶操作があったから、アタシは中2までの男として生活していたことをトオル君にあえて話してもいない。ただそれは実際にあったことだけでもなかったのと同じになってしまったからだ。

でも、このことは違う…。

何度もトオル君に話そうと電話を持ちかけては離すことを繰り返した。

また、会津君に「やっぱりゴメン」と断ろうともした。

しかし、そのたびに彼の顔がどこかワタルとダブって見えてしまっ
て…。

前にミコに言われたことがあった。

「凜は誰か一人でも自分の敵を作りたくないんだよ。」

そのとき心の真ん中をまつすぐ射抜かれたようにドキンとした。

本当は誰かを敵に回してでも自分の守りたい大切なものをハッキリ
させるべきなんだろう。

アタシにはきつと勇気がないからだって思う。

ああ、なんか困ったなあ…。

そして

そんなことを考えているうちにとうとう日曜日になった。

トオル君は先週から空手部の人たちと旅行に出かけていた。

日曜日

アタシは薄いブルーのシャツにカーディガン、そしてデニムのスカ
ートを身に付け

ごく極普通の格好で松戸にある会津君のアパートに向かった。

アパートの近くまで来て、少し周りをうろつろつとする。

約束の午前11時にはまだ20分ほどあった。

彼のご両親は用事を済ませた後お昼頃来ると言っていた。

そくだ、早めに行つて「やっぱり意味もないのに彼氏でもない男の人の親に会うなんてできないヨ。」って言おう。
決めた！

アタシはそう決心した。

これで会津君との友達関係が崩れたとしてもそれはしょうがないことだつて思った。

アタシにとって大切なのはトオル君との関係であつて、そつちの方が会津君との友達関係よりずっと大切なんだ。

するとそのとき

「あの、間違いやつたらすみませんけど、小谷 凜さん…でつか？」
振り返ると、そこには中年風のきちんとした身なりをした男の人と女の人が立っている。

「エ、あ、ハイ。そうですけど…。」

「ああ、よかつたわあー。はじめまして。 私ら、会津 敏の父と母です。」

エッ！

会津君のお父さんとお母さん！？

アタシは慌てて正面を向くとぺこりと頭を下げ

「あの、はじめまして。 会津君の大学のサークルの友人で小谷と申します。」

と挨拶した。

お父さんは細身の会津君とは正反対のタイプでガッチリした感じ。さすが元大学応援団という雰囲気だ。

「いやー、予定していた用事が思ったより早う終わってしまいました。敏のここに来てみたんやけど、アパートの近くにえろう可愛いお嬢さんがいたさかいに声をかけてみたんです。よかったわあー！」

「いつも敏が本当にお世話になってます。」
お母さんは細身で優しそうな感じでどちらかという则会津君は母親似という気がする。

「あ、イエ、アタシこそ。　大学でいいお友達ができたなって感謝してますから。」
フツと見るとお父さんもお母さんも途中で買ったお土産らしきものをたくさん手に持っている。
両手がふさがってとても重たそうだった。

「あの、アタシ、少し持たせていただけませんか？」
とお母さんに声をかけた。

するとお母さんは
「イエ、そんなあ。こないなか細い腕のお嬢さんに重い荷物なんか持たせたら……」

「あ、アタシ高校時代チア部だったんで、こっぴつ重いのって慣れてるんです。ですから？」

「へえ、意外な感じやわ。見た目はすごくか弱そうやけどしつかりしてるんやねー。じゃあ、申し訳ないけど、少しだけお願いできますか？」

「ハイ。ぜんぜん気になさらないで。だいじょうぶですから。」

そう言ってアタシはお母さんの抱えていた荷物の半分を自分の手に持った。

そしてアタシと会津君のご両親の3人は彼のアパートへと向かった。

「オーイ、さとしー！ 着いたでー！」

お父さんが彼の部屋の前でドアを叩く。

数秒後ドアはガチャッと開いた。

「あれ、お父ちゃんたち。凜ちゃんも？」

「ウン、今ここで会いましたの。」

「用事が早う済んでしまったんでな、そのままこっち来たわ。」

そしてみんなで彼の部屋へ入る。

お父さんは部屋にあるテーブルの前に腰を下ろすと、彼の部屋をぐるっと見回し

「まあー、相変わらず何にもないしみったれた部屋やなー

！」と笑いながら言った。

「ほつとけや！（笑）おとーちゃんがぜんぜん金くれんからなんにも買えへんのやろがー。」

「男は小さいうちから自分の金は自分で稼ぐのが当たり前や。将来は男は女子供を養わなあかんのやさかいにな。」

「ボク、まだ未成年やのに、おとーちゃんに養われてる気せーへんわ。」

「ライオンは自分の子を谷に突き落とす言つやる?。」

「アンタ、自分がライオンのつもりかー!?。」

「当然や!。」

アハハハ!

なんか漫才聞いているみたい（笑）

親子でこんな会話ができるなんてスゴイよネー。

傍で2人の会話を黙って聞いていたお母さんも

「この2人、昔からいっつもこうなんや。凜ちゃんもびっくりしはったでしょ?。」

と笑いながら言う。

「あ、イエ。こついう雰囲気ってなんか楽しいですよネ。」

「そうでつか? アタシはもうすっかり慣れてしもつたけど（笑）」

そのときお母さんが

「さあ、お茶でも入れまひよか。」

と腰を上げようとした。

アタシは

「あ、アタシ入れます。お二人とも遠いところからいらっしやって疲れているんですからお座りになっててください。」
と言つと

「エ、でもそんなことさせちゃ…。」

「イエ、ホント気になさらないください。」

「そうでつか。じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます。」

この前カレーを作ったとき台所の中の様子は大体わかっている。
食器棚を見ると湯飲みは2つしかない。

アタシはその2つの湯飲みとアタシと会津君はコーヒーカップをを
2つ出して

沸かしたお湯の半分をその湯飲みに注ぎ、そして半分を茶葉の入っ
た急須に注いだ。

そしてしばらくして、湯飲みとカップに入れたお湯を捨て、そこに
急須のお茶を注いでいく。

その様子を見ていたお母さんは

「へえ、今時の娘さんやのに、よく知ってはりますなあー。」

「あ、多少は母から教えてもらったり…。」

「それじゃあ、凜ちゃんのお母さんはしっかりした人ですわあ。」

女の子はその娘を見てるとお母さんの教育がわかるいいいますから。」

アタシはお茶の入った湯飲みを、お父さん、そしてお母さん、次に会津君、最後にアタシの席に置くと腰を下ろした。

「あー、美味しい。凜ちゃん、アナタ、お茶入れるの上手やなあ。」

「あ、イエ、そんな…。」
お母さんのそんな褒め言葉についてテレてしまう。

「凜ちゃん。アンタの親御さんは何をしてはるんですか？」
お父さんがお茶を飲みながらアタシに尋ねた。

「あ、スーパーマーケットを経営してるんです。」

「ホー、スーパーでつか。なんていうお店ですかな？」

「ウエルマートっていうんですけど、都内に15店舗しかないチェーンだから、きっとご存知ないと思います。」

するとお父さんは驚いたように言った。

「ウエルマートっていうと…、そうかあ！小谷さんの娘さんでつか！？」

「エ、父をご存知なんですか？」

「いや、直接は知りまへんけどな。最近あの業界ではかなりやり手らしいという評判は聞いてますわ。そうですかあー。」

「なあ、それでどうでっしゃろ？」

「エ？」

「いや、敏からはアンタは大学の友達と聞いておりますけど、なんていうか…やっぱり、男と女やさかいに、そのなんていうか…。」

もうちゃんと言おう。

これ以上ヘンな誤解をされたままだとアタシも辛いし、会津君のお父さんやお母さんだって困っちゃうだろう。

そう思つてアタシが言葉を出そうとしたとき

「お父ちゃん。違うねん。」

会津君が横からお父さんにこう言った。

「凜ちゃんはホンマに大学の友達でしかないんや。」

「でも、オマエはこの娘のこと好いておるんやろ？」

「だから、それはボクの片想いやねん。それにな…。」

「それに、なんや？」

「凜ちゃんには…ちゃんと付き合ってる彼氏がおるねん。」

「そ、そうなんか？」

「ウン。そうや。」

「でも、いくら友達でも女の子が男の家で料理を作つてあげるいうんは、やつぱり気持がないとできんとちゃうか？」

「いや、それは…」

「あの、会津君のお父さん。」

「ハイ。なんでっしやる？」

「アタシ、この前ここで彼にカレーを作つてあげたことなんですけど。じつはアタシの親戚がこちら辺に住んでいて、それでその親戚の家に行った帰りに偶然彼と道でばつたり会つたんです。そのときちょうどお昼時で、たまたま実家から送つてきた野菜とかお肉があるからつて言われて、「じゃあ、アタシがカレー作つてあげようか？」つて言っちゃったんです。」

「そうなんですかあ。でも偶然としてもや、アンタが自分から敏にカレーを作ってあげようかって言ってくれたんは、やっぱり多少は気持があったんやないかなあって思いますが…。」

「あの…。じつはアタシ、初めて会津君と会ったときはお互いあまり印象よくなかったんです。でも、その後色々な切っ掛けがあって、今はお互いがいい友達になれそうって思ってるんです。それにアタシはお付き合いしている人がいるんです。」

「まあ、お付き合いがそのまま結婚につながるとも限らんしなあ。」

ハア…、親子で同じこと言ってる。

「どうやるか？ 凜ちゃんが付き合っているその彼氏はそれはそれで。そんで敏とどっちがいいかはそれぞれ付き合っていく中で考えて行くというのは。」

「アタシ、そんな失礼なこと絶対にできませんっ！！」
アタシはつい声を荒げて言ってしまった。

第四百話

そのとき

「そうやヨ！お父ちゃん、今の言葉は女の子をあまりにバカにしたもんやでっ！」

今まで黙って横で聞いていた彼のお母さんは、そう言ってキッとお父さんを睨んだ。

お父さんは首をすくめるようにして

「あ、こら、スマンこと言うてしもた。カンニンしてや。」
とアタシに言う。

「イエ、アタシこそ…大きな声でごめんなさい。」

そしてお母さんはアタシの方を向いてこう言った。

「なあ、凜ちゃん。アタシは同じ女やさかいアナタの気持はよくわかります。2人と同時に付き合っくいよいよ選ぶなんて、そんな女をバカにするにもほどがあるわ。お父ちゃんの非礼は私からもお詫びするさかいどうか許してや？」

「あ、イエ。もう…。」

「それでな、アタシ、アナタとさっき初めて会ってからアナタのこと少ししか知らんけど、でも敏がアナタのことを好きになったのは間違いやないって思うわ。」

「そうや！ワシもそのことを言いたかったんや。さっきはアンタ、

自分から敏にカレーを作ってあげるって言ったって言うたってけど、それは違うやろ？ アンタは敏を庇ってくれたって思ったけど、違うか？」

「それは……。」

「ワシもアンタのお父さんと同じようにいくつかの会社を経営してる。だから人を見る目はそれなりにあるつもりや。だから、惜しくて、惜しくて……。」

「惜しいって？」

「まあ、敏も今は自分の力で生きるなんてほっておいてるが、そのうち時期が来ればワシの会社を継いで欲しいとは思ってる。そのときにコイツと一緒に生きていってもらえる相手がアンタだったらなあって思ったんや。」

「それは……ごめんなさい。 アタシにはできません。この先今お付き合いしている人とアタシが結婚するかどうかはわかりません。でも、アタシは今彼のことを愛している自分自身を信じたいんです。」

「そっちな。 アンタは優しくしてそして強い女性や。 そやからよけい惜しく感じてしまったな（笑） 願わくば、これからも敏といい友達でいてやってください。」

「ハイ。 すみません……。」

そして、こうした話が終わった後、アタシとお母さんは2人で台所

に立ち一緒にお昼ご飯を作った。

「わぁ、すごく美味しそうですねー。」

「チョット味見してみはいますか？」

「ハイ、じゃあ一口だけ。……わっ、美味しい。すごく美味しいです！」

「関東とはチョット味が違うけどなぁ（笑）」

「でも、すごく上品な味ですよ。ダシがしっかりしてるっていうか……。」

「さすが女の子やな。関西の味はダシが基本やさかいにな。関東みたいダシの上に濃い味付けはせーへんから。」

「参考になるー！」

「せやるー！（笑）」

「フフフ。」

「さあ、できましたヨー！」

アタシとお母さんはお料理の皿をテーブルの上に並べていく。

「ハイ、じゃあいただきますよか。」

お母さんの言葉でみんな揃って

「いただきますーす！」

アタシはそれでこのことについてのすべてが終わったと思っていた。

それから少し経ったある日。

トオル君は一昨日には旅行から戻っているはずだった。

一昨日の夜も、昨日の夜もアタシはカレからの電話を待っていた。
でもカレから帰宅の電話もメールも来なかった。

「どうしたんだろう…。まさか事故とか…。」
不安ばかりがアタシの心の中に募っていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6608v/>

ときの流れの中で・・・

2011年11月27日00時03分発行